令和7年度　学習者用デジタル教科書の効果・影響等に関する実証研究事業

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoukasho/digital/mext_03528.html

記事ページ本文

現在位置
トップ
>
教育
>
小学校、中学校、高等学校
>
教科書
>
デジタル教科書
>
デジタル教科書に関する各種調査研究
> 令和7年度 学習者用デジタル教科書の効果・影響等に関する実証研究事業
令和7年度 学習者用デジタル教科書の効果・影響等に関する実証研究事業
新学習指導要領を踏まえた「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善や、特別な配慮を必要とする児童生徒等の学習上の困難低減のため、平成31年4月から、一定の基準の下、必要に応じ、学習者用デジタル教科書を紙の教科書を併用した上で、以下のとおり段階的に導入を進めています。
・令和6年度から全ての小中学校等を対象に、小学校5年生から中学校3年生に対して英語のデジタル教科書を提供
・次に導入する算数・数学やその他の教科については、学校現場での環境整備や活用状況等を踏まえながら段階的に提供
このような状況を踏まえ、令和7年度は、児童生徒の学びの充実や障害等による学習上の困難の低減に資するよう、全ての小中学校等を対象に、英語等一部教科の学習者用デジタル教科書を広く提供し、普及促進に向けた実証事業を実施しました。
報告書等
〇成果報告書
令和7年度「学習者用デジタル教科書の効果・影響等に関する実証研究事業」成果報告書（デジタル教科書の効果・影響の把握に資する大規模アンケート調査等）(PDF:4.2MB)
令和7年度「学習者用デジタル教科書の効果・影響等に関する実証研究事業」成果報告書（市町村教育委員会及び実証研究校における授業改善に関する調査研究）(PDF:8.2MB)
令和7年度「学習者用デジタル教科書の効果・影響等に関する実証研究事業」成果報告書（都道府県教育委員会における研修に関する調査研究）(PDF:7.7MB)
〇事例集・事例動画
令和7年度「学習者用デジタル教科書の効果・影響等に関する実証研究事業」授業改善事例集 (PDF:1.7MB)
令和7年度「学習者用デジタル教科書の効果・影響等に関する実証研究事業」研修事例集 (PDF:4.2MB)
令和7年度「学習者用デジタル教科書の効果・影響等に関する実証研究事業」事例動画（※YouTubeへリンク）
お問合せ先
初等中等教育局教科書課
ページの先頭に戻る
文部科学省ホームページトップへ

令和７年度
学習者用デジタル教科書の効果・影響等に関する実証研究事業

成果報告書

（デジタル教科書の効果・影響の把握に資する大規模アンケート調査等）

2026年3月31日

ABeam Consulting®

Build Beyond As One.

目次

1. 事業概要 p.2

1.1. 本事業の背景・目的 3
1.2. 本事業の全体像 4
1.3. 有識者会議の開催 5

2. 大規模アンケート調査の実施概要 p.6

2.1. 標本設計 7
2.2. 調査方針 8
2.3. 分析テーマ一覧 9
2.4. 調査概要 12
2.5. 調査対象数 16
2.6. 調査回答数 17

3. 主な分析結果のまとめ p.18

4. 大規模アンケート調査等の分析結果 p.27

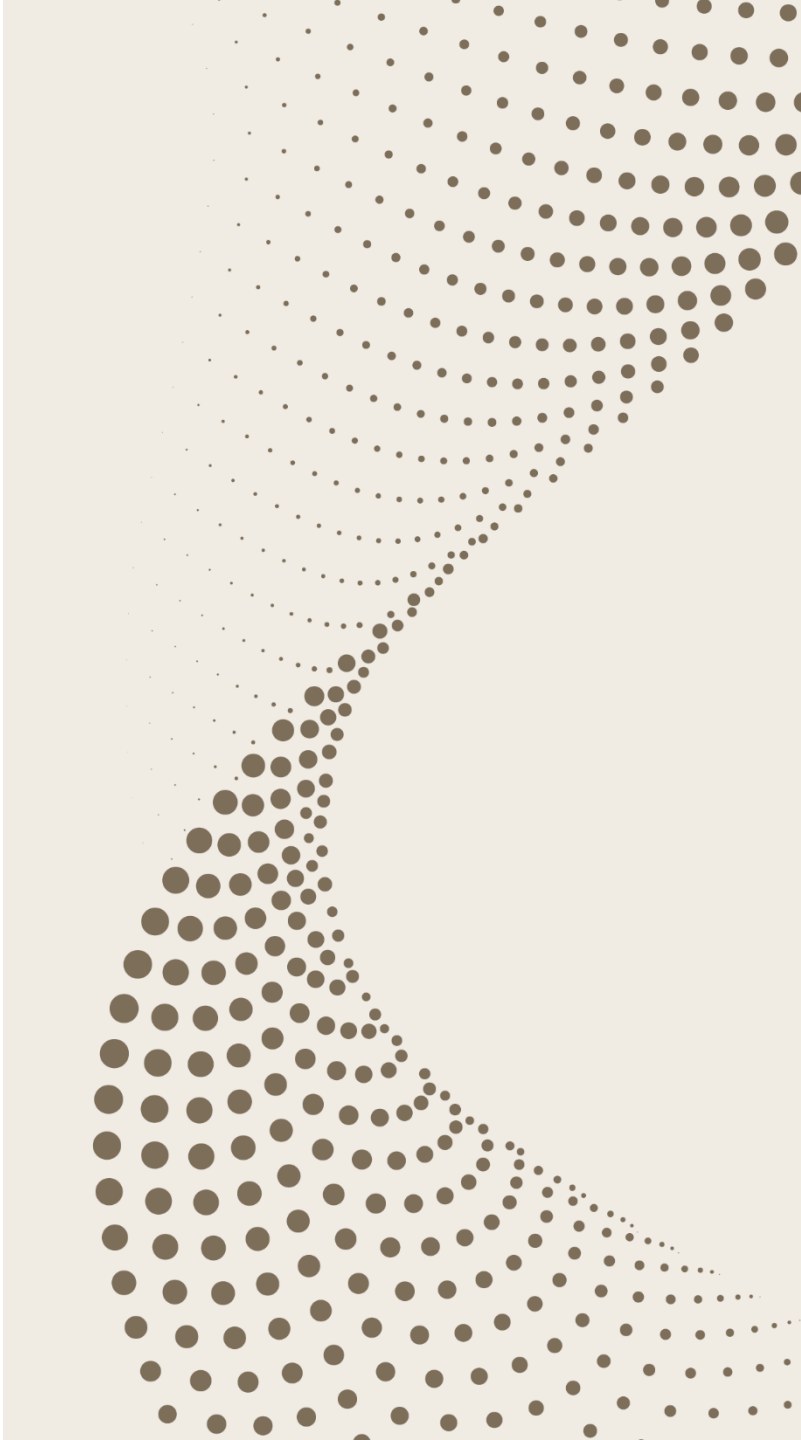
4.1. 分析結果の見方 28
4.2. テーマ別分析結果 29
4.3. 追加ヒアリング調査結果 106
参考 主なデータの教科別サンプル数 109
経年変化分析の留意点 111

別添資料

1. アンケート調査票（教師向け調査）
2. アンケート調査票（低学年児童向け調査）
3. アンケート調査票（中高学年児童・中学生向け調査）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

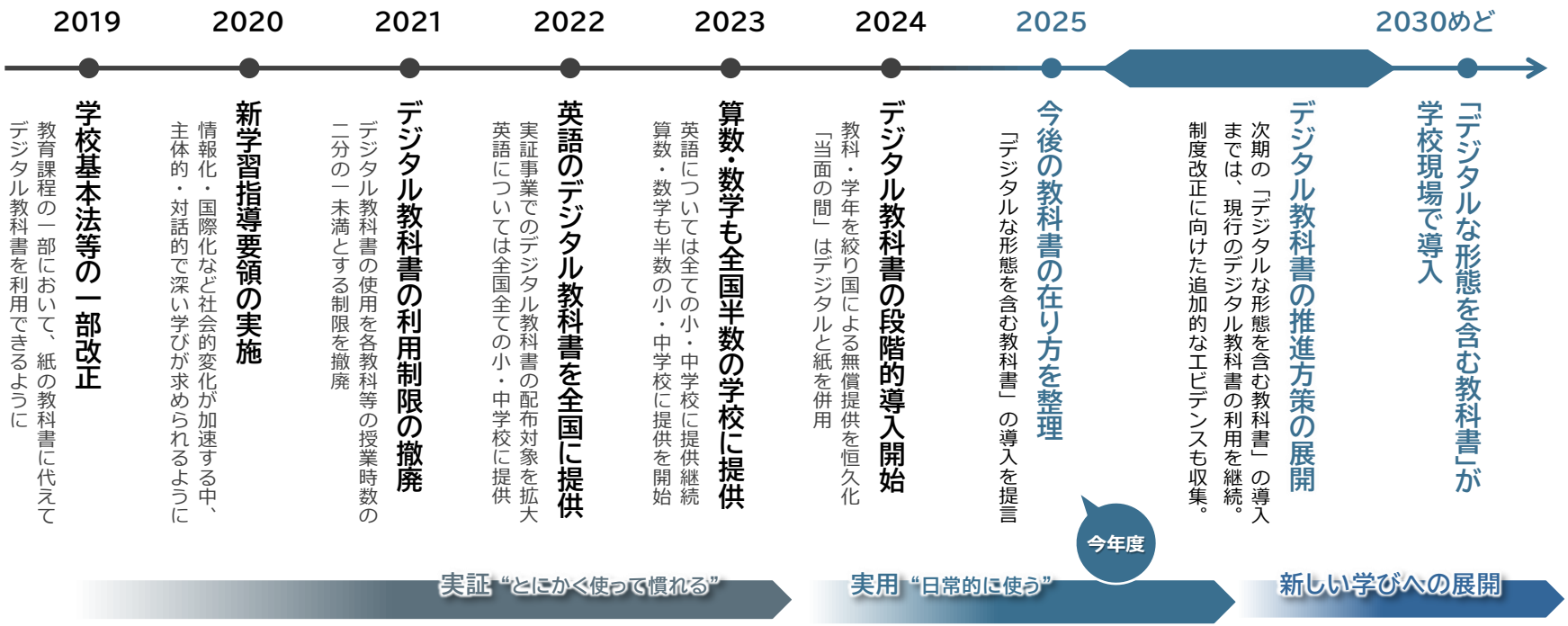
1. 事業概要



1. 事業概要
1.1. 本事業の背景・目的

- 学習者用デジタル教科書（以下「デジタル教科書」という。）は、2019年の法改正により、紙の教科書に代えて使用できる教材として位置付けられ、英語を皮切りにデジタル教科書の段階的な導入が進められてきました。また、中央教育審議会の下に設置された「デジタル教科書推進WG」の審議まとめ（2025年）においては、今後は、**教科書の形態として紙だけでなくデジタルも認め、検定・採択・義務教育段階の無償給与などの対象とする**ことが適当とされました。
- これを受けて、所要の制度改正を前提に、**デジタルも取り入れて作成される新たな教科書**（デジタルな形態を含む教科書）**が導入され、現行のデジタル教科書の活用の成果を踏まえつつ、学校現場で広く活用されることになります。**本事業では、これら議論のエビデンスとなる情報を収集・整理することを目的に実施しました。

デジタル教科書の導入に係るこれまでの経緯と今後の動き



©2026 ABeam Consulting Ltd.

1. 事業概要
1.2. 本事業の全体像

- 前述の背景・目的から、本事業では次の3つの調査研究を実施しました。
- ①**「研修に関する調査研究」**では、全国5の都道府県教育委員会と連携し、有識者（次頁参照）の指導助言の下で、デジタル教科書の活用促進に関する研修の改善に取り組みました。②**「授業改善に関する調査研究」**では、全国から小学校を2校、中学校を3校選定し、同校と連携してデジタル教科書等を活用した授業改善に取り組みました。さらに、全国の小・中学校の教員及び児童生徒に対する③**「大規模アンケート調査等」**の実施を通じて、デジタル教科書が学習に及ぼす効果・影響を定量的・定性的に把握・分析しました。このうち、**本書は、③「大規模アンケート調査等」の結果をまとめたもの**です。

本事業を構成する3つの調査研究

	都道府県教育委員会における **研修に関する調査研究**	市町村教委及び実証研究校における **授業改善に関する調査研究**	デジタル教科書の効果・影響の把握に資する **大規模アンケート調査等**
対象	• 全国5の都道府県教育委員会 (埼玉県、福井県、奈良県、熊本県、鹿児島県)	• 左記の参加県教育委員会管下の小学校2校、中学校３校 ※低学年（小学校1~4年）1校含む	• 全国の小・中学校に所属する教員及び児童生徒（標本抽出）
実施内容	• 都道府県教育委員会が実施するデジタル教科書の活用に係る研修（年内2回）を対象に、有識者の指導助言の下、その改善に取り組んだ。 • 研修の成果を定性的・定量的に評価し、どのように研修を実施すれば、効果的なデジタル教科書の活用促進に繋がるのかを検証した。	• 各校において、主要５教科（外国語、算数・数学、国語、理科、社会）の授業（年内２回）を対象に、有識者の指導助言の下、その改善と実践に取り組んだ。 • また、一部では各校の取組を校内・地域内に展開。市町村教育委員会等とも連携し、デジタル教科書の活用促進を図った。	• 全国の小・中学校のうち、外国語、算数・数学のほか複数教科のデジタル教科書を使用している学校を対象に、教員及び児童生徒を抽出し、アンケート調査を実施した。 • 過年度との比較から経年変化を分析するほか、新規の調査観点を追加し分析を行った。 • 特別な配慮を必要とする児童生徒への影響については追加ヒアリング調査も実施。
成果物	• 研修計画、研修に使用した資料等一式 • 研修効果の検証結果　など	• 実践事例集 • 実践事例動画　など	• アンケート調査結果 • 追加ヒアリング調査結果　など **本書の対象**

©2026 ABeam Consulting Ltd.

1. 事業概要
1.3. 有識者会議の開催

■ 本事業では、各調査研究の実施に当たっての指導・助言を得るため、デジタル教科書等の活用や各教科の指導に精通する有識者にご協力いただきました。また、各有識者には、「研修に関する調査研究」及び「授業改善に関する調査研究」について討議するWG、「大規模アンケート調査等」について討議するWGに参画いただき、本事業の実施内容及び成果に助言を頂きました。

有識者（WG委員）一覧

氏名	所属・職名	研修	授業改善	アンケート	担当県・教科
主査 中川 一史	放送大学 教授	○	○	○	―
副査※1 中橋 雄	日本大学 教授	○	○	○	―
齋藤 嘉則	東京学芸大学 教授	○	○	―	―※3
太田 洋	東京家政大学 教授	○※2	○※2	―	鹿児島県 （外国語）
岡部 恭幸	神戸大学 教授	○※2	○※2	―	福井県 （算数）
佐藤 幸江	放送大学 客員教授	○※2	○※2	―	奈良県 （国語）
岩﨑 有朋	札幌国際大学 教授	○※2	○※2	―	熊本県 （理科）
副査※1 小林 祐紀	放送大学 准教授	○※2	○※2	―	埼玉県 （社会）
副査※1 稲垣 忠	東北学院大学 教授	―	―	○	―
齊藤 萌木	聖心女子大学 講師	―	―	○	―

※１研修に関する調査研究の副査を小林委員、授業改善に関する調査研究の副査を中橋委員、
　アンケートWGの副査を稲垣委員にそれぞれ依頼した。
※２各委員には本事業に参加した全国５の県教育委員会が行う研修の内容等に直接の指導・助言を依頼し、
　各県の実証研究校における授業改善に関する指導・助言も依頼した。
※３埼玉県研修における外国語科の視点からの指導・助言を担当いただいた。

開催要領

第1回 研修・授業改善WG
- 日時： 2025年７月18日
- 議事： 実証研究状況の報告及び以降の取組に向けた意見交換

第2回 研修・授業改善WG
- 日時： 2025年11月12日
- 議事： 実証研究状況の報告及び以降の取組に向けた意見交換

第3回 研修・授業改善WG
- 日時： 2026年３月５日
- 議事： 実証研究結果の報告
  研修・授業改善における成果と課題及び今後の取組方針に関する意見聴取

第1回 アンケート調査WG
- 日時： 2025年８月（書面開催）
- 議事： 調査方針及び設問設計に対する意見聴取
  標本設計に対する意見聴取

第2回 アンケート調査WG
- 日時： 2026年２月27日
- 議事： アンケート集計・分析結果の報告
  分析結果に対する意見聴取

©2026 ABeam Consulting Ltd.

2. 大規模アンケート調査の実施概要

2. 大規模アンケート調査の実施概要
2.1. 標本設計

■ 調査の実施にあたり、標本から母集団を正しく推定する上で統計的に十分な調査対象数を確保しつつ、学校現場の回答負担を抑制する観点から、必要以上に調査規模を大きくせずに精度を担保できるよう、標本設計を行いました。

■ 以下のとおり、調査対象校の地域、学校規模、教科書発行者の割合が、全国と同程度の割合になるように考慮しています。

調査対象数

基本方針

- 児童生徒については教科別※1・発達段階別※2に、
  教員については教科別・校種別に、
  「標本誤差±2.5%（信頼基準95%）」を達成する上で必要な回答数（約1,500人）を確保する。
- **回収率は、**昨年度調査を踏まえて、**60%を仮定**し、上記で算定した必要な回答数（約1,500人）よりも余裕のある**調査対象数（約2,600人）を確保**する。
- 上記の方針の下、**必要以上に調査規模を大きくせずに**調査を行い、**学校現場の負担を抑制**する。

留意事項

- 英語、算数・数学以外の教科は、ごく一部の学校にしかデジタル教科書を配布していないため、教科別に上記標本誤差を達成するために必要な回答数を確保できない。
- そこで、英語、算数・数学以外の教科については、可能な限り多くの回答数を確保した上で、その回答数から計算される標本誤差とあわせて、調査結果の妥当性を評価する。

抽出方法

基本方針

- 母集団を正しく推定できるよう、**地域、学校規模、教科書発行者の偏りに留意して**調査対象校を抽出する。
- 具体的には、地域別※3、学校規模別※4に**層別した上で、全国と同様の割合となるように調査対象校を抽出**する。
- その上で、抽出された調査対象校における**教科書発行者の割合が、全国の導入割合と乖離していないことを確認**し、乖離している場合には必要な調整を行う。
  （全国で100校以上の調査対象校を確保していることから、
  全国的な割合と乖離することは考えにくいが、念のため確認する。）

留意事項

- 英語、算数・数学以外の教科は、ごく一部の学校にしかデジタル教科書を配布していないため、必ずしも上記のとおり、抽出を行うことができない。
- そこで、英語、算数・数学以外の教科については、特定の学校に調査負担が偏らないよう（例えば、同一校に複数教科について問うなど）に配慮した上で、可能な限り多くの回答数を確保できるよう抽出する。

※1 「英語」、「算数・数学」及び「その他の教科」を言う。　※2 「小学校低学年児童」、「小学校中学年児童」、「小学校高学年児童」及び「中学校生徒」を言う。
※3 「北海道」、「東北」、「関東」、「中部」、「近畿」、「中国・四国」及び「九州」を言う。
※4 「公立小・中学校の国庫負担事業認定申請の手引き」の基準により、小学校は2クラス以下を小規模校、3～6クラスを中規模校、7クラス以上を大規模校とする。
中学校は11クラス以下を小規模校、12～18クラスを中規模校、19クラス以上を大規模校とする。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

2. 大規模アンケート調査の実施概要
2.2. 調査方針

- 今年度の調査では、デジタル教科書の使用状況や課題などは過年度に引き続き調査しつつ、新たに**デジタル教科書と紙の教科書の特性が活きる具体的な活用場面**を把握し、教科書の形態としてデジタルも認めることとした、中央教育審議会の審議まとめを踏まえた施策の検討に繋げることを目的としました。
- この検討に当たっては、デジタル教科書の活用による効果・影響等に関する知見を有し、過年度の大規模アンケート調査の設計にもご協力をいただいた有識者（p.5参照）から、ご意見を伺いました。

調査の目的：デジタル教科書の効果・影響を把握し、今後の在り方を検討するための政策的な材料を得る

分析テーマ（番号は報告書内の掲載順）

- **デジタル教科書活用の程度に関する調査**
  - **授業内でどのくらい使用されているか。**
    - ① 授業中のデジタル教科書の使用状況
    - ⑦ 特別な配慮が必要な児童生徒の教科指導におけるデジタル教科書の活用
  - **授業外でデジタル教科書に関する情報にどのくらい触れているか。**
    - ⑥ デジタル教科書に関する情報に触れた経験
- **デジタル教科書活用の内容に関する調査**
  - **活用の効果は何か。**
    - **教師が感じる効果は何か。**
      - **デジタルだからこそ感じる効果は何か。**
        - ② デジタル教科書による授業改善の効果 新
        - ③ 紙の教科書との比較における効果 新
      - **紙の教科書と比較したときの効果は何か。**
        - ④ デジタル教科書の使用が児童生徒の学びにもたらす影響
    - **児童生徒が感じる効果は何か。**
  - **活用の課題は何か。**
    - ⑤ デジタル教科書を使用するにあたっての課題感や情報モラル・健康面への影響

©2026 ABeam Consulting Ltd.

2. 大規模アンケート調査の実施概要
2.3. 分析テーマ一覧（1/3）

■ 前ページの「調査方針」に基づき、学習者用デジタル教科書の効果・影響等を把握するための40の分析テーマを設定しました。

分析テーマ（1/3）※赤字は今年度新たに分析したテーマ

分析テーマ一覧	掲載ページ
① 授業中のデジタル教科書の使用状況	
①-1 教師のデジタル教科書の使用歴及び今年度の使用開始時期	p.29
①-2 教師による授業でのデジタル教科書の使用頻度	p.30
①-3 教師による授業でのデジタル教科書の使用頻度の経年変化	p.31
①-4 教師のデジタル教科書の使用歴と、授業での使用頻度の関係	p.32
①-5 教師のデジタル教科書と学習支援ソフトを組み合わせた使用頻度	p.34
①-6 教師のデジタル教科書の使用歴と、デジタル教科書と学習支援ソフトを組み合わせた使用頻度の関係	p.35
①-7 児童生徒の学習場面別の授業でのデジタル教科書の使用頻度	p.36
② デジタル教科書による授業改善の効果	
②-1 デジタル教科書の導入による授業改善への意識の変化	p.37
②-2 教師のデジタル教科書の使用頻度と、デジタル教科書の導入による授業改善への意識の変化の関係	p.38
②-3 デジタル教科書の導入で可能になった授業展開（教科共通の観点）	p.39
②-4 教師のデジタル教科書の使用頻度と、デジタル教科書の導入で可能になった授業展開（教科共通の観点）の関係	p.40
②-5 教師のデジタル教科書と学習支援ソフトを組み合わせた使用頻度と、デジタル教科書の導入で可能になった授業展開（教科共通の観点）の関係	p.43
②-6 デジタル教科書の導入で可能になった授業展開（教科固有の観点）	p.45

©2026 ABeam Consulting Ltd.

2. 大規模アンケート調査の実施概要
2.3. 分析テーマ一覧（2/3）

■ 前ページの続きです。

分析テーマ（2/3）※赤字は今年度新たに分析したテーマ

分析テーマ一覧	掲載ページ
③ 紙の教科書との比較における効果	
③-1 紙の教科書を引き続き使用している場面	p.49
③-2 児童生徒のデジタル教科書の使用頻度と、デジタル教科書と紙の教科書の使用感の関係	p.50
④ デジタル教科書の使用が児童生徒の学びにもたらす影響	
④-1 児童生徒のデジタル教科書の使用頻度と「内容理解」の関連	p.57
④-2 児童生徒のデジタル教科書の使用頻度と「主体的な学び」の関連	p.60
④-3 児童生徒の個別学習の場面におけるデジタル教科書の使用頻度と「主体的な学び」の関連	p.63
④-4 児童生徒のデジタル教科書の使用頻度と「協働的な学び」の関連	p.66
④-5 児童生徒の協働学習の場面におけるデジタル教科書の使用頻度と「協働的な学び」の関連	p.69
④-6 児童生徒のデジタル教科書の使用頻度と「探究的な学び」の関連	p.72
④-7 児童生徒の振返りの場面におけるデジタル教科書の使用頻度と「探究的な学び」の関連	p.75
④-8 児童生徒のデジタル教科書の使用頻度と「教科が好きか」の関連	p.78
④-9 児童生徒のデジタル教科書の使用頻度と「教科が好きになった時期」の関連	p.81
④-10 児童生徒のデジタル教科書の使用頻度と「自己効力感」の関連	p.84
④-11 児童生徒のデジタル教科書の使用頻度と「情報活用能力」の関連	p.87
④-12 児童生徒のデジタル教科書の使用頻度と授業外の学習時間の関連	p.90

©2026 ABeam Consulting Ltd.

2. 大規模アンケート調査の実施概要
2.3. 分析テーマ一覧（3/3）

■ 前ページの続きです。

分析テーマ（3/3）※赤字は今年度新たに分析したテーマ

分析テーマ一覧	掲載ページ
⑤ デジタル教科書を使用するにあたっての課題感や情報モラル・健康面への影響	
⑤-1 デジタル教科書を使用するにあたっての教師の課題感	p.93
⑤-2 デジタル教科書を使用するにあたっての教師の課題感の経年変化	p.94
⑤-3 デジタル教科書の授業内での使用歴とデジタル教科書の課題感の関連	p.95
⑤-4 デジタル教科書の授業内での使用頻度とデジタル教科書の課題感の関連	p.96
⑤-5 デジタル教科書の活用と情報モラルとの関係	p.97
⑤-6 デジタル教科書の授業内での使用頻度と情報モラルの関連	p.98
⑤-7 児童生徒の健康面への影響の経年変化	p.99
⑥ デジタル教科書に関する情報に触れた経験	
⑥-1 デジタル教科書に関する情報に触れた経験の経年変化	p.100
⑥-2 デジタル教科書に関する研修を受けた経験の経年変化	p.101
⑥-3 デジタル教科書の使用頻度と、デジタル教科書に関する研修を受けた経験の関連	p.102
⑥-4 デジタル教科書の使用頻度と、受けたことのある研修の内容の関連	p.103
⑥-5 デジタル教科書に関する研修を受けた経験と、デジタル教科書の導入で可能になった授業展開の関連	p.104
⑦ 特別な配慮が必要な児童生徒の教科指導におけるデジタル教科書の活用	
⑦-1 特別な配慮が必要な児童生徒の教科指導において、デジタル教科書を活用している観点	p.105

©2026 ABeam Consulting Ltd.

2. 大規模アンケート調査の実施概要
2.4. 調査概要（1/4：教師向け調査）

- 教師向け調査の概要は以下のとおりです。
- 設問と選択肢の詳細については、別添資料①「アンケート調査票（教師向け調査）」を参照ください。

調査概要（教師向け調査）※赤字は今年度新たに追加した設問

調査対象教科※	国語、算数、数学、英語、理科、社会（地理、歴史、公民）、技術・家庭、家庭、音楽、図画工作、美術、道徳
調査対象者	令和７年度「学習者用デジタル教科書の効果・影響等に関する実証研究事業」等において、国からデジタル教科書が配布された小学校、中学校又は特別支援学校に属する教師
回答期間	令和７年11月12日 ～ 12月24日（未回答者への督促期間を含む。）
調査項目	Q.1 回答する教科 Q.2 学習者用デジタル教科書を使用している学年・担当クラス Q.3 学習者用デジタル教科書の使用開始時期 Q.4 学習者用デジタル教科書の本年度における使用開始時期 Q.5 学習者用デジタル教科書の授業での使用頻度 Q.6 学習支援ソフトの授業での使用頻度 Q.7 特別な配慮が必要な児童生徒の教科指導有無 Q.8 教師が指導している学級 Q.9 必要な配慮の内容 Q.10 学習者用デジタル教科書の使用による授業改善意識の効果 Q.11 学習者用デジタル教科書の使用による授業改善の効果 Q.12 学習媒体の指定状況 Q.13 学習者用デジタル教科書で可能になった授業展開（教科共通の観点） Q.14 学習者用デジタル教科書で可能になった授業展開（教科固有の観点） Q.15 紙の教科書を使用している授業場面 Q.16 情報活用能力（特に情報モラル）との関係 Q.17 学習者用デジタル教科書の導入に当たっての課題 Q.18 デジタル教科書の活用方法に関する情報に触れる機会の有無 Q.19 デジタル教科書の活用方法に関する情報にどのように触れたか Q.20 学習者用デジタル教科書に関する研修を受けたことがあるか Q.21 どのような研修を受けたことがあるか

※ 保健、保健体育については、今年度事業でデジタル教科書を配布していないため、調査対象教科から外れている。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

2. 大規模アンケート調査の実施概要
2.4. 調査概要（2/4：小学校低学年児童向け調査）

- 小学校低学年児童向け調査の概要は以下のとおりです。
- 設問と選択肢の詳細については、別添資料②「アンケート調査票（低学年児童向け調査）」を参照ください。

調査概要（低学年児童向け調査）※赤字は今年度新たに追加した設問

調査対象教科※	算数、図画工作、音楽
調査対象者	令和７年度「学習者用デジタル教科書の効果・影響等に関する実証研究事業」等において、国からデジタル教科書が配布された小学校又は特別支援学校小学部に属する低学年児童（1、2年生）
回答期間	令和７年11月12日 ～ 12月24日（未回答者への督促期間を含む。）
調査項目	Q.1 回答者の学年 Q.2 回答者のクラス Q.3 学習者用デジタル教科書の選択状況 Q.4 学習者用デジタル教科書と紙の教科書を比べた使用感 Q.5 学習者用デジタル教科書の授業での使用頻度 Q.6 回答対象の教科の勉強が好きか Q.7 回答対象の教科の勉強が好きになった時期 Q.8 回答対象の教科の理解度 Q.9 学習者用デジタル教科書で便利だと感じたこと（自由記述） Q.10 学習者用デジタル教科書で不便だと感じたこと（自由記述）

※ 国語、生活、道徳については、今年度事業でデジタル教科書を配布していないため、調査対象教科から外れている。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

2. 大規模アンケート調査の実施概要
2.4. 調査概要（3/4：小学校中高学年児童向け調査）

■ 小学校中高学年児童向け調査の概要は以下のとおりです。

■ 設問と選択肢の詳細については、別添資料③「アンケート調査票（中高学年児童・中学生向け調査）」を参照ください。

調査概要（中高学年児童向け調査）※赤字は今年度新たに追加した設問

調査対象教科※	国語、算数、英語（高学年のみ）、理科、社会、道徳、図画工作、音楽
調査対象者	令和７年度「学習者用デジタル教科書の効果・影響等に関する実証研究事業」等において、国からデジタル教科書が配布された小学校又は特別支援学校小学部に属する中高学年児童（3～6年生）
回答期間	令和７年11月12日 ～ 12月24日（未回答者への督促期間を含む。）
調査項目	Q.1 回答者の学年 Q.2 回答者のクラス Q.3 学習者用デジタル教科書の選択状況 Q.4 学習者用デジタル教科書と紙の教科書を比べた使用感 Q.5 学習者用デジタル教科書の健康面への影響 Q.6 回答対象の教科の理解度 Q.7 学習者用デジタル教科書の影響（主体的な学び） Q.8 学習者用デジタル教科書の影響（協働的な学び） Q.9 学習者用デジタル教科書の影響（探究的な学び） Q.10 回答対象の教科の勉強が好きか Q.11 回答対象の教科の勉強が好きになった時期 Q.12 学習者用デジタル教科書の影響（自己効力感） Q.13 学習者用デジタル教科書の影響（情報活用能力） Q.14 学習者用デジタル教科書の授業での使用頻度 Q.15 学習場面別の学習者用デジタル教科書の使用頻度 Q.16 学校の授業時間以外の勉強時間

※ 保健、家庭については、今年度事業でデジタル教科書を配布していないため、調査対象教科から外れている。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

2. 大規模アンケート調査の実施概要
2.4. 調査概要（4/4：中学生向け調査）

- 中学生向け調査の概要は以下のとおりです。
- 設問と選択肢の詳細については、別添資料③「アンケート調査票（中高学年児童・中学生向け調査）」を参照ください。

調査概要（中学生向け調査）※赤字は今年度新たに追加した設問

調査対象教科※	国語、数学、英語、理科、社会（地理、歴史、公民）、道徳、美術、技術、家庭、音楽
調査対象者	令和７年度「学習者用デジタル教科書の効果・影響等に関する実証研究事業」等において、国からデジタル教科書が配布された中学校又は特別支援学校中学部に属する生徒
回答期間	令和７年11月12日 ～ 12月24日（未回答者への督促期間を含む。）
調査項目	Q.1 回答者の学年 Q.2 回答者のクラス Q.3 学習者用デジタル教科書の選択状況 Q.4 学習者用デジタル教科書と紙の教科書を比べた使用感 Q.5 学習者用デジタル教科書の健康面への影響 Q.6 回答対象の教科の理解度 Q.7 学習者用デジタル教科書の影響（主体的な学び） Q.8 学習者用デジタル教科書の影響（協働的な学び） Q.9 学習者用デジタル教科書の影響（探究的な学び） Q.10 回答対象の教科の勉強が好きか Q.11 回答対象の教科の勉強が好きになった時期 Q.12 学習者用デジタル教科書の影響（自己効力感） Q.13 学習者用デジタル教科書の影響（情報活用能力） Q.14 学習者用デジタル教科書の授業での使用頻度 Q.15 学習場面別の学習者用デジタル教科書の使用頻度 Q.16 学校の授業時間以外の勉強時間

※ 保健体育については、今年度事業でデジタル教科書を配布していないため、調査対象教科から外れている。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

2. 大規模アンケート調査の実施概要
2.5. 調査対象数

- p.7「標本設計」の方針に基づき、以下のとおり、調査対象を抽出の上、アンケート調査への回答を求めました。
- デジタル教科書を配布した児童生徒・教員が十分にある教科（主に英語、算数・数学、国語、理科、社会など主要5教科）については、発達段階別に統計的に必要な精度を確保できるよう、調査対象数を設定しています。

調査対象数（全体）

	小学校				中学校	
	児童			教師	生徒（全学年）	教師
	低学年	中学年	高学年			
対象者数（人）	306	346	20,784	6,970	44,480	5,732

【補足】

- 各学校の教師数は児童生徒数よりも少ないため、教師の必要回答数を満たすために「教師のみを対象として調査を行う学校」が存在する。
- 教師数は、デジタル教科書の必要冊数に係る事前調査結果から、以下のとおり、推計している。
  - 小学校：各学年のクラス数の合計を教師数と見なす。
  - 中学校：教科別の担当教員数の合計を総教師数と見なす。ただし、掛け持ちが予想される教科（地図、書写、器楽、道徳）は、重複を排除した値を計上。なお、本事業以外でデジタル教科書を配布した教科（英語、算数・数学）については、教科別の担当教員数を把握していないため、本事業の参加校における担当教員数とクラス数の比率から、教員数を総クラス数の3分の1と仮定して推計。

調査対象数（教科別）

	小学校			
	児童			教師
	低学年	中学年	高学年	
国語	0	0	6,856	283
算数	106	104	2,794	2,600
英語	-	-	2,850	3,738
理科	-	69	2,480	95
社会	-	0	5,086	212
道徳	0	0	201	6
図画工作	40	36	12	2
音楽	160	137	515	22

	中学校	
	生徒（全学年）	教師
国語	8,424	111
数学	2,630	2,616
英語	2,659	2,638
理科	15,939	219
社会	7,406	88
道徳	512	28
美術	1,290	7
技術	521	4
家庭	1,152	7
音楽	3,946	14

©2026 ABeam Consulting Ltd.

2. 大規模アンケート調査の実施概要
2.6. 調査回答数

- 教師調査の英語、算数・数学及び児童生徒調査の英語、算数・数学、国語、理科、社会、音楽（中学生のみ）については、発達段階別に1,000以上の回答を収集でき、信頼水準95%での標本誤差が2.5%未満となっています。
- 一部の発達段階・教科については、デジタル教科書を配布した学校がごく少数であることから、十分な調査回答数を確保できず、標本誤差が大きく、アンケート調査による「集計値」と「真の値」との間に誤差を含む可能性があることに留意が必要です。

調査回答数（全体）

	小学校				中学校	
	児童			教師	生徒（全学年）	教師
	低学年	中学年	高学年			
対象者数（人）	162	571	15,194	5,754	26,439	3,283

【補足】

- （ア）「小学校中学年児童」及び「小学校高学年児童」、並びに（イ）「小学校教師」及び「中学校教師」は、過年度と同様に（ア）（イ）の単位で2区分を合算して集計・分析を行うため、同一教科における両区分の総回答数を基に、標本誤差を算出している。
- 一部の発達段階・教科については、デジタル教科書を配布した学校がごく少数であることから、十分な調査回答数を確保できず、標本誤差が5%以上となっていることに留意が必要。
- 各校に回答を依頼した教科とは異なる教科を児童生徒や教師が回答しているケースもあり、「調査対象数」より「調査回答数」が多くなっている区分もあることに留意が必要。

調査回答数（教科別）

	小学校			
	児童			教師
	低学年	中学年	高学年	
国語	-	222	4,971	324
算数	36	169	2,524	3,354
英語	-	-	2,038	1,751
理科	-	60	1,746	75
社会	-	66	3,658	142
道徳	-	-	0	46
図画工作	30	28	15	11
家庭	-	-	-	8
音楽	96	26	242	43

	中学校	
	生徒（全学年）	教師
国語	3,796	54
数学	2,277	1,438
英語	2,942	1,566
理科	9,957	117
社会	3,343	62
道徳	307	9
美術	759	7
技術	299	8
家庭	158	9
音楽	2,601	13

発達段階・教科別に見た信頼水準95%での標本誤差

- ：2.5%未満
- ：2.5%以上5%未満
- ：5%以上
- ：調査対象外

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 主な分析結果のまとめ

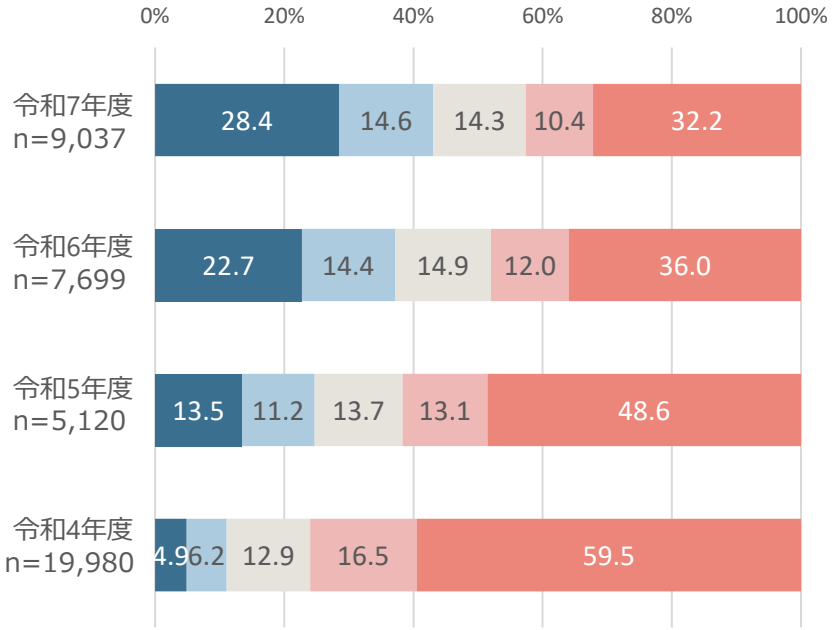
3. 主な分析結果のまとめ（1/8）

■ 各分析テーマにおける、主な分析結果は以下のとおりです。

1 授業中のデジタル教科書の使用状況 p.29

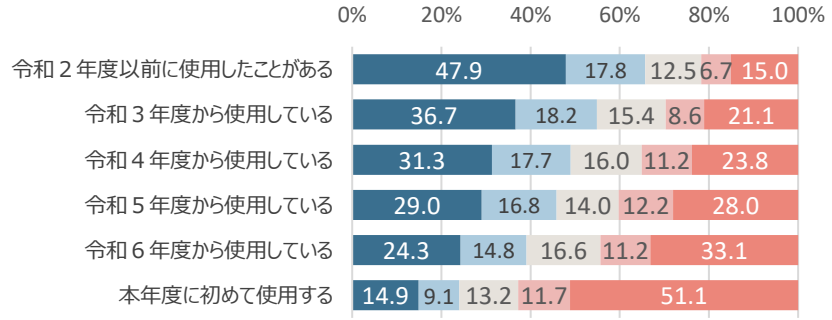
- 令和７年度までの４か年分の調査結果を比較すると、教師の授業中でのデジタル教科書の使用頻度は年々高まっており、４回に１回以上の授業で使用している割合が約７割を占める。
- デジタル教科書の使用歴が長く使用経験が重なるほど、デジタル教科書および、デジタル教科書と学習支援ソフトを組み合わせた使用頻度が高い傾向にある。デジタル教科書の活用に慣れることで、協働的な学びの場面等での使用も試行するようになり、学習支援ソフトを組み合わせる機会も増えるのだと推察される。

学習者用デジタル教科書の使用頻度の経年変化



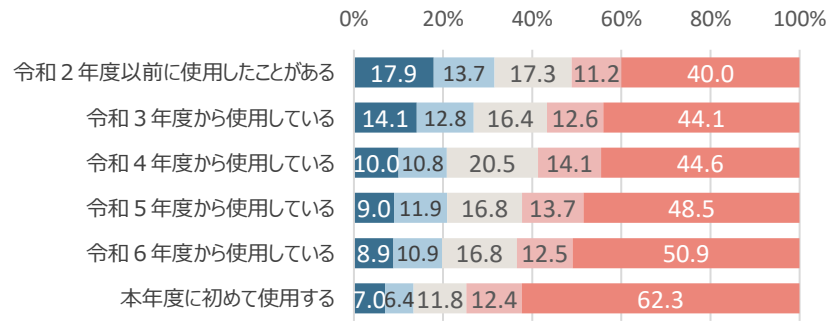
デジタル教科書の使用歴と使用頻度の関係

n=9,037



デジタル教科書の使用歴と学習支援ソフトの使用頻度の関係

n=9,037



毎授業で使用　4回に3回程度は使用　半分程度は使用　4回に1回程度は使用　4回に1回未満

©2026 ABeam Consulting Ltd.

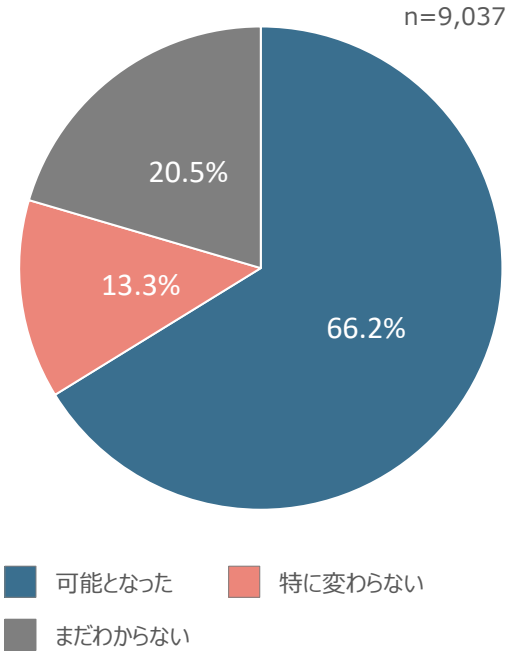
3. 主な分析結果のまとめ（2/8）

■ （前頁の続き）

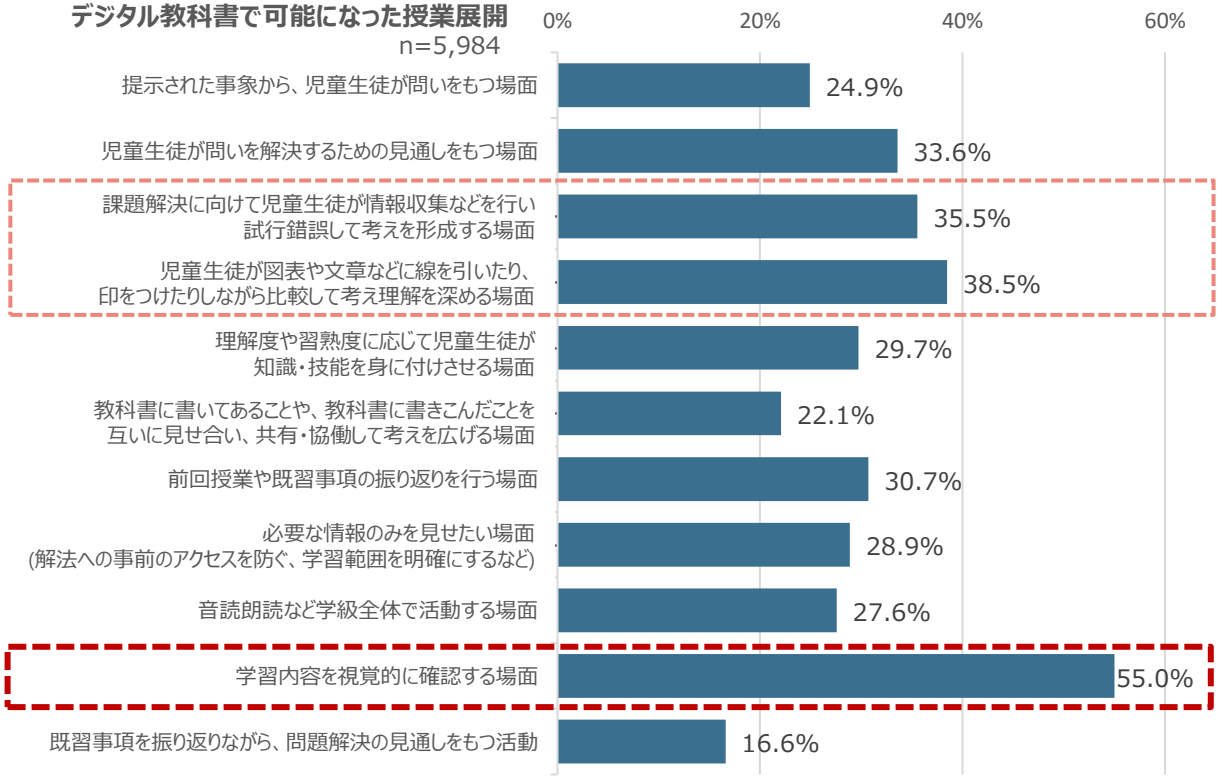
2 デジタル教科書による授業改善の効果 p.37

- デジタル教科書の導入により約66%の教師が授業改善の効果を感じており、そのうちの過半数が「学習内容を視覚的に確認する場面」で、「紙の教科書ではできなかった（しにくかった）ことができるようになった」と感じている。
- 次に、「児童生徒が図表や文章などに線を引いたり、印をつけたりしながら比較して考え理解を深める場面」や「課題解決に向けて児童生徒が情報収集などを行い試行錯誤して考えを形成する場面」を選択した教師も多かった。

デジタル教科書を使用することで、紙の教科書だけではできなかった、又はしにくかった授業展開や授業の工夫が可能となったか



デジタル教科書で可能になった授業展開



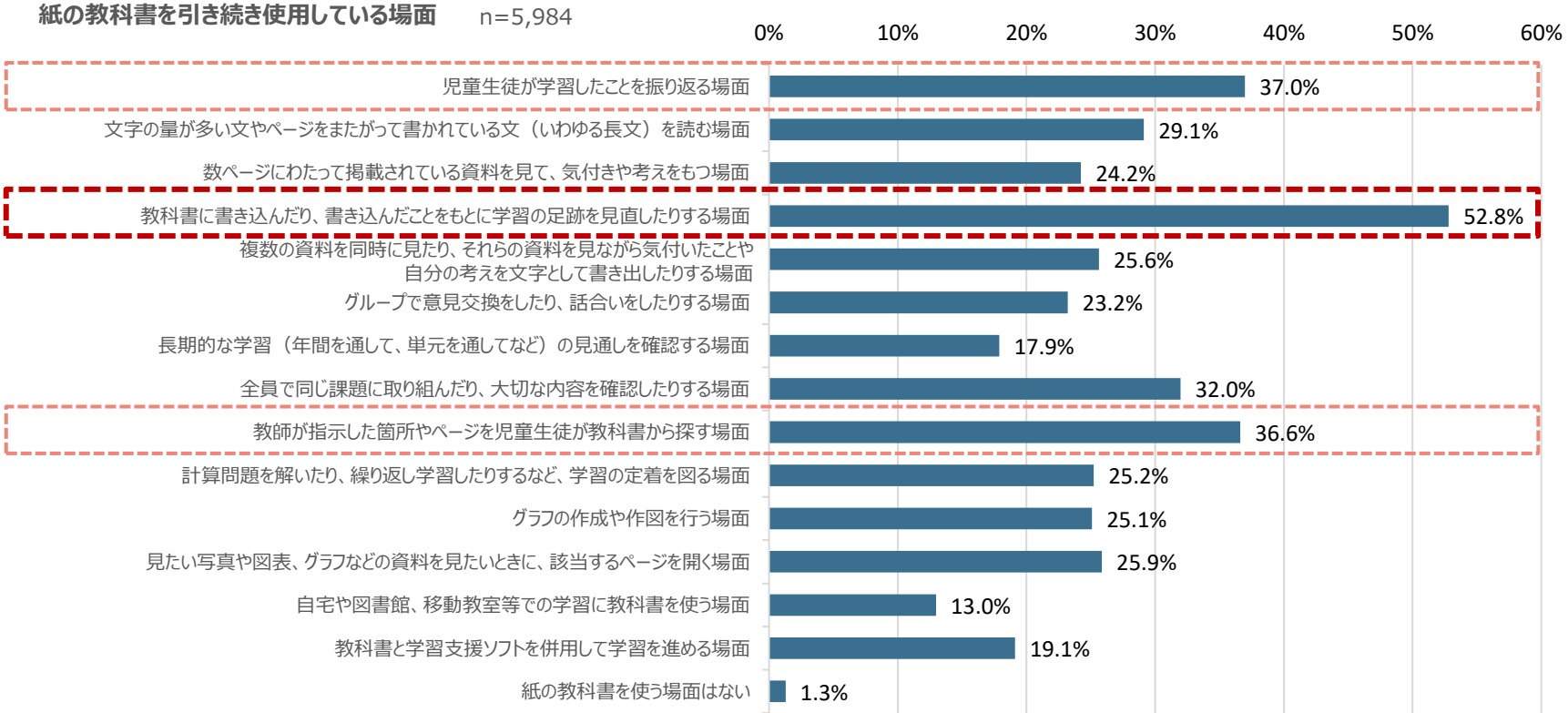
©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 主な分析結果のまとめ（3/8）

■ （前頁の続き）

3 紙の教科書との比較における効果 p.49

- 紙の教科書を引き続き使用している場面として、過半数の教師が「教科書に書き込んだり、書き込んだことをもとに学習の足跡を見直したりする場面」を挙げている。
- 次に、「児童生徒が学習したことを振り返る場面」や「教師が指示した箇所やページを児童生徒が教科書から探す場面」も多く挙げられている。



©2026 ABeam Consulting Ltd.

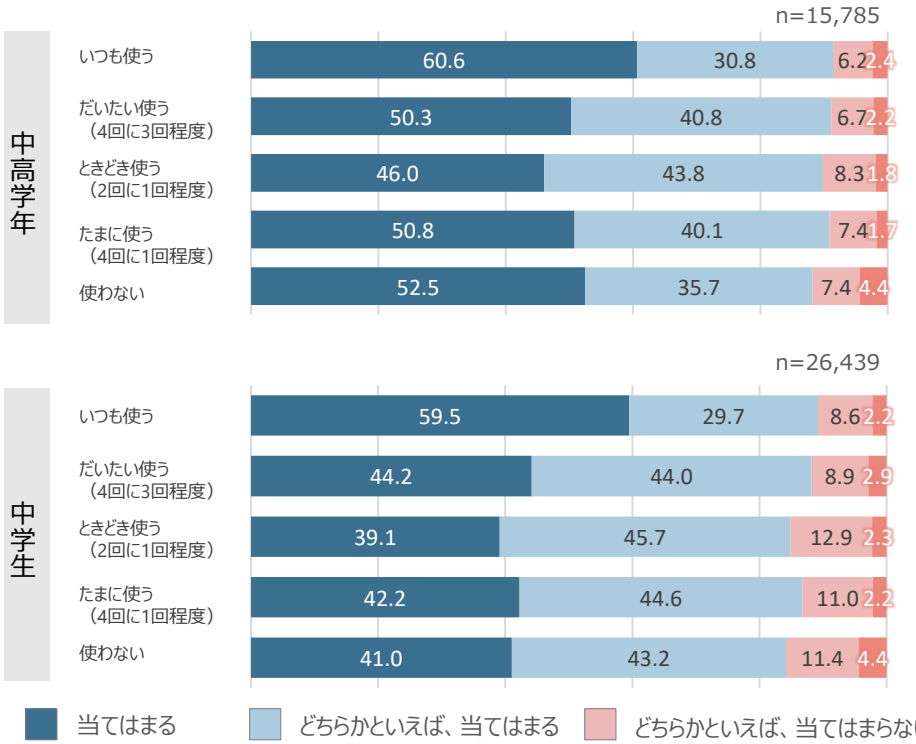
3. 主な分析結果のまとめ（4/8）

■ （前頁の続き）

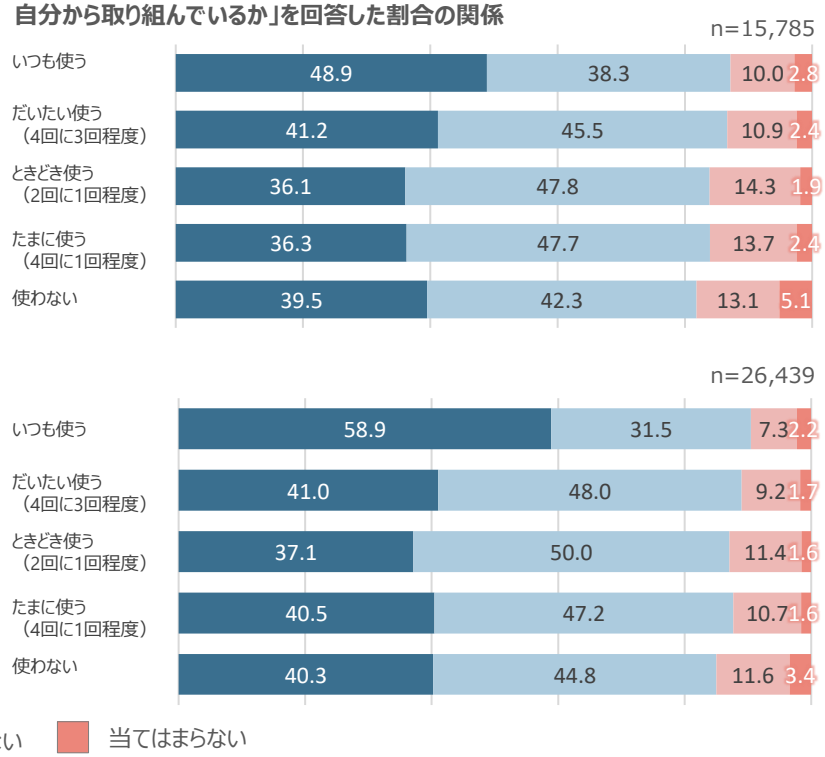
4 デジタル教科書の使用が児童生徒の学びに与える影響 p.57

- 小学校中高学年、中学生いずれについても、デジタル教科書を授業で「いつも使う」グループは、他のグループに比べて「授業の内容がよく分かっているか」「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいるか」のいずれについても、肯定的な回答の割合が高い。
- 分析テーマ②（デジタル教科書による授業改善の効果）全体の分析結果を踏まえると、デジタル教科書の使用は、教師の授業展開の変化や多様化を介して、児童生徒の内容理解や主体的な学びに寄与している側面があると推察される。

デジタル教科書の使用頻度と、「授業の内容がよく分かっているか」を回答した割合の関係



デジタル教科書の使用頻度と、授業において「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいるか」を回答した割合の関係



当てはまる　どちらかといえば、当てはまる　どちらかといえば、当てはまらない　当てはまらない

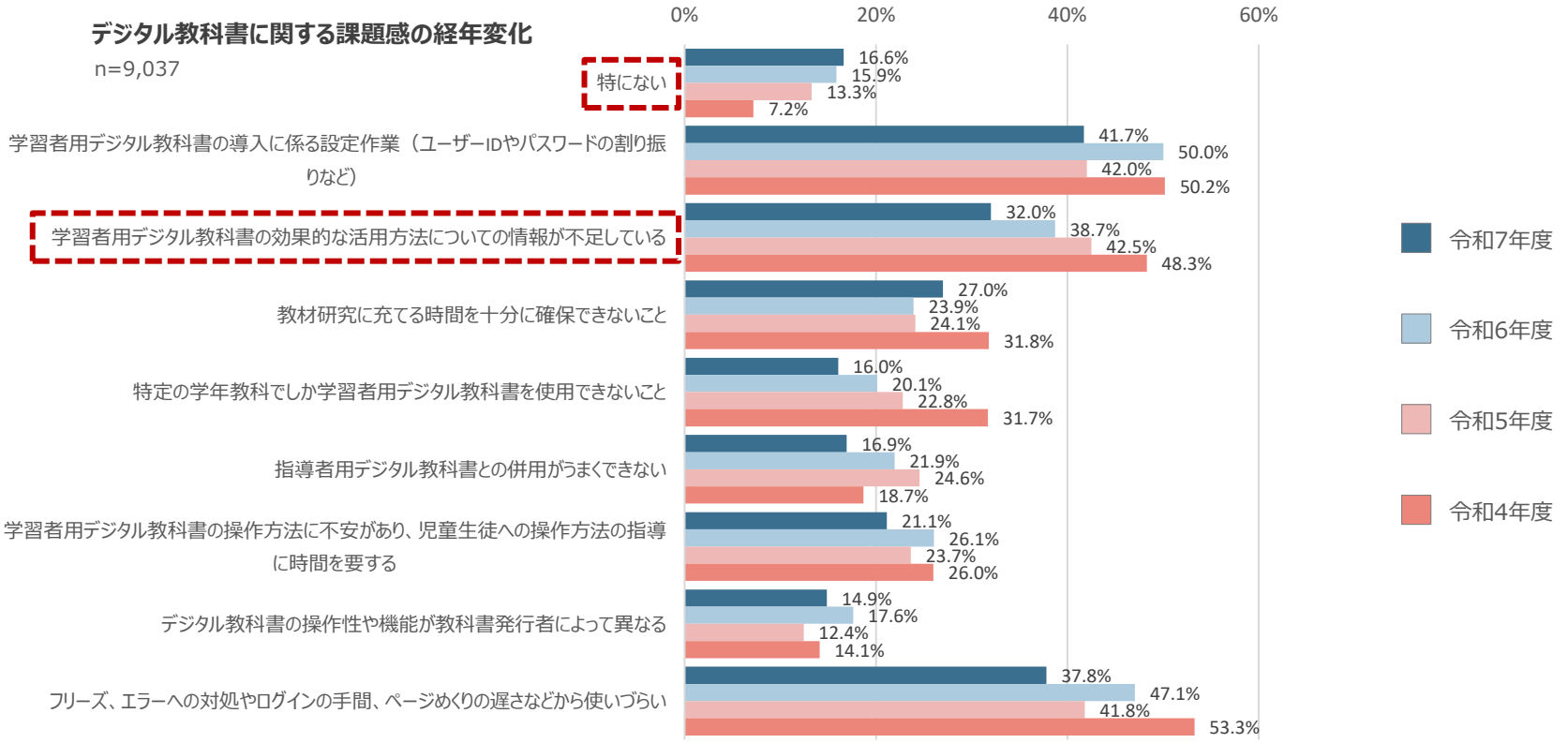
©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 主な分析結果のまとめ（5/8）

■ （前頁の続き）

5 デジタル教科書を使用するにあたっての課題感 p.93

- 過年度調査と比較して、デジタル教科書の課題が「特にない」と回答した教師の割合は微増傾向にある。
- なお、「学習者用デジタル教科書の効果的な活用方法についての情報が不足している」と回答した教師の割合は減少し続けている。



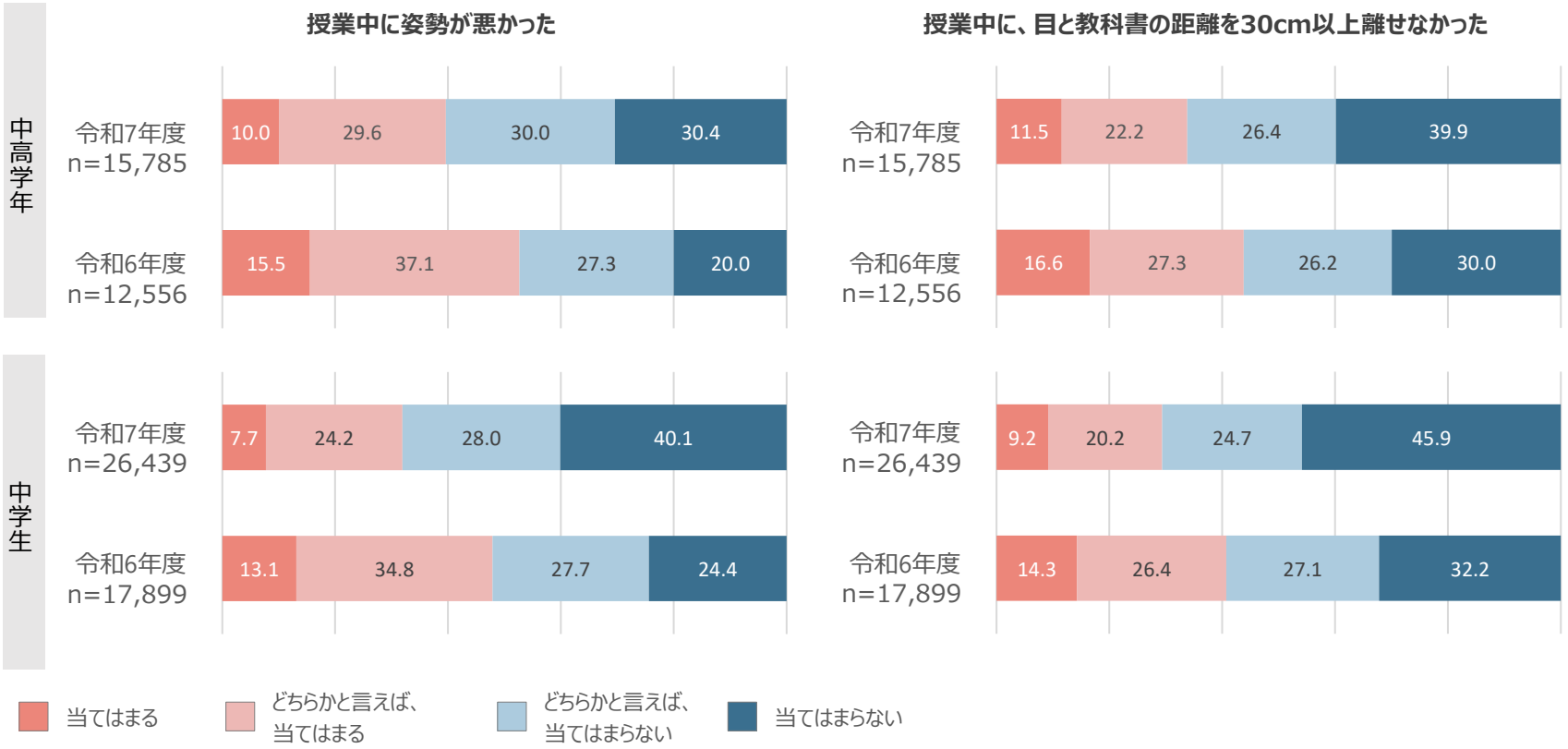
©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 主な分析結果のまとめ（6/8）

■ （前頁の続き）

5 デジタル教科書の健康面への影響 p.99

- 小学校中高学年と中学生ともに、令和６年度と比較して、「授業中の姿勢」と「目と教科書の距離」に注意できていた児童生徒の割合が増えている。



©2026 ABeam Consulting Ltd.

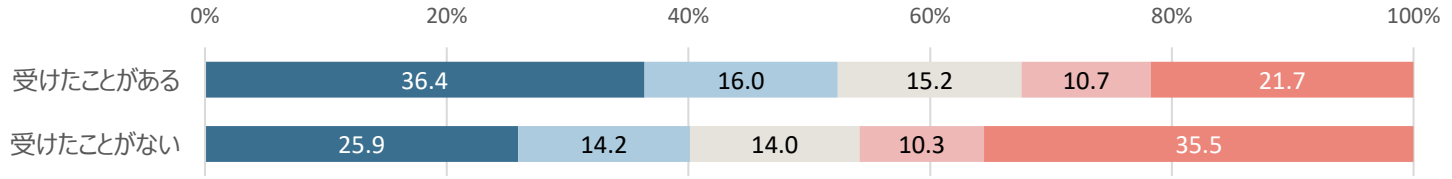
3. 主な分析結果のまとめ（7/8）

■ （前頁の続き）

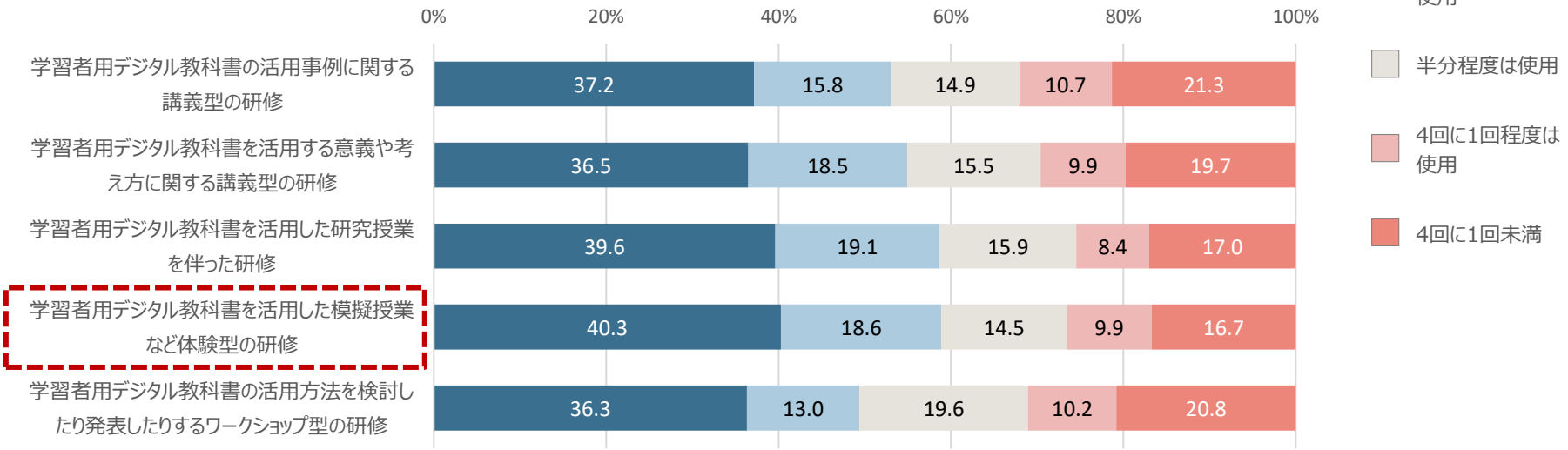
6 デジタル教科書に関する情報に触れた経験 p.100

- デジタル教科書に関する研修を受けた経験があると回答した教師は、研修を受けたことがないと回答した教師に比べ、授業中の使用頻度が高い。
- 「学習者用デジタル教科書を活用した模擬授業など体験型の研修」を受けたことがある教師の約40%が、デジタル教科書を毎授業で使用しており、講義型の研修やワークショップ型の研修を受けたことのある教師よりも、デジタル教科書の活用頻度がやや高い。

デジタル教科書に関する研修を受けた経験と、デジタル教科書の使用頻度の関係 n=9,037



受けたことのある研修の内容と、デジタル教科書の使用頻度の関係 n=2,195



©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 主な分析結果のまとめ（8/8）

■　（前頁の続き）

7 特別な配慮が必要な児童生徒の教科指導におけるデジタル教科書の活用 p.105

■ 書き込み機能の効果

- さまざまな情報を同時に捉えることが苦手な児童生徒も、教科書本文に色分けして線を引くことで、**必要な情報を視覚的に捉えやすくなる**と考えられる。（国語）
- 紙のノートに考えをまとめることが難しい児童生徒も、教科書から資料を探す活動や、学習支援ソフト上のノートにデジタル教科書の資料を切り貼りする活動には取り組みやすい。自分１人でノートをまとめ、複数の資料を比較参照することができ、**授業への参加意欲が向上した**と考えられる。（社会）

■ 拡大機能の効果

- 小さな文字に拒否感のある児童生徒は、デジタル教科書の拡大機能で見たい箇所のみを確認でき、**授業に集中しやすくなる**と考えられる。（国語）

■ 動画・シミュレーション機能の効果

- 落ち着きのない児童生徒でも、手元のデジタル教科書で好きなタイミングで動画を視聴できることで、**集中して課題に取り組めるようになる**と考えられる。（理科）

■指導負担の軽減に関する効果

- 授業準備での資料探しや、児童生徒への説明の時間が短縮され、**児童生徒が考える時間や考えを深掘りする時間が増える**と考えられる。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

4. 大規模アンケート調査等の分析結果

4. 大規模アンケート調査等の分析結果
4.1. 分析結果の見方

■ 次ページ以降の分析結果の見方を示します。

● 分析対象の質問項目を記載。
質問文や選択肢の詳細は、別添資料「アンケート調査票」を参照。

● 当該ページに掲載しているグラフの**対象（教科・回答者）**を記載。

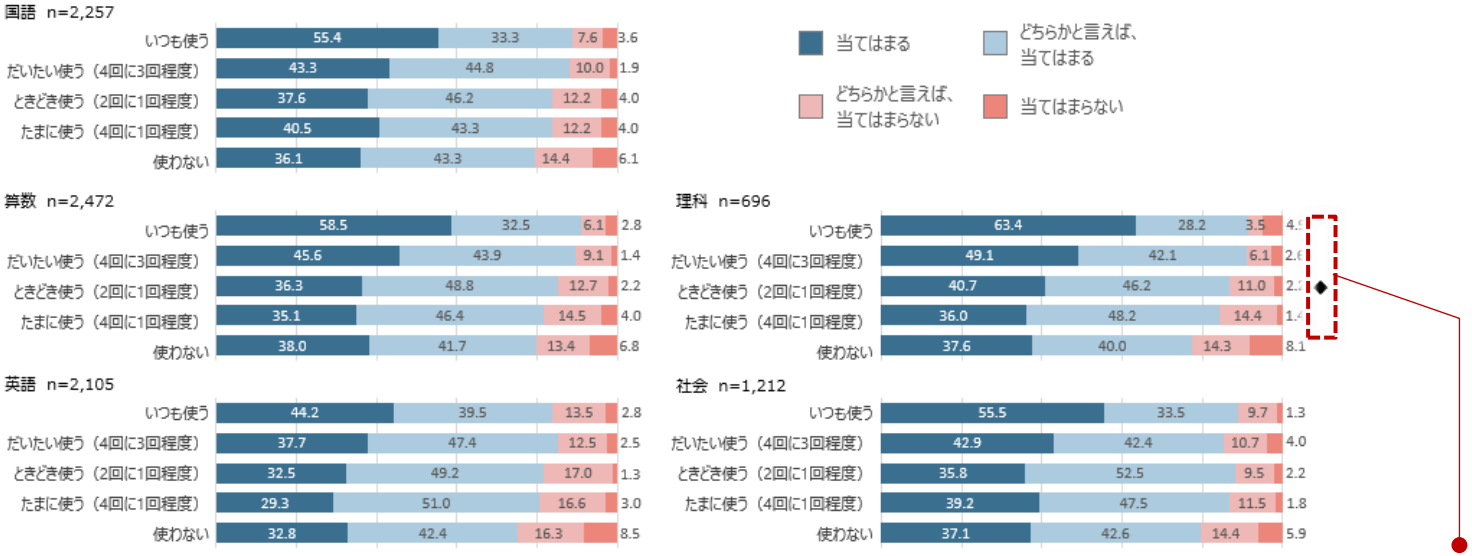
主要5教科別　小学校 中高学年児童

分析④-2　児童生徒のデジタル教科書の使用頻度と「主体的な学び」の関連

中高学年Q.11 授業での使用頻度 × 中高学年Q.7 主体的な学び

傾向/示唆

- 中高学年の教科別では、全教科で、デジタル教科書を「いつも使う」と回答したグループは、主体的な学びについて「当てはまる」と回答した割合が最も高い。
- 特に理科と算数はその傾向が顕著であり、「いつも使う」グループでは、「使わない」グループと比べて、「当てはまる」と回答した割合がそれぞれ約26ポイント、約21ポイント高くなっている。なお、「いつも使う」グループにおける「当てはまる」と回答した割合は、理科（63.4%）、算数（58.5%）、社会（55.5%）の順に高くなっている。



● グラフから読み取れる傾向・示唆や、
数値を解釈する上での留意事項等を記載。

「◆」を付したグラフは、分析対象とする集団のサンプル数が少なく、**標本誤差が大きい（10%超）もの**であり、数値の解釈に留意が必要。
具体的なサンプル数は、p.109,p.110を参照。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

全教科総計 | 小中学校教師

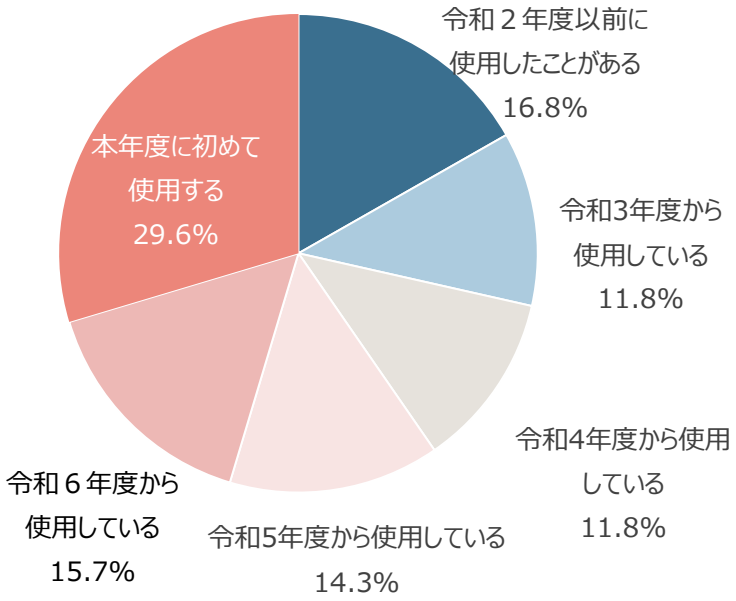
分析①-1 教師のデジタル教科書の使用歴及び今年度の使用開始時期

教師Q.3 使用歴、教師Q.4 使用開始時期 n=9,037

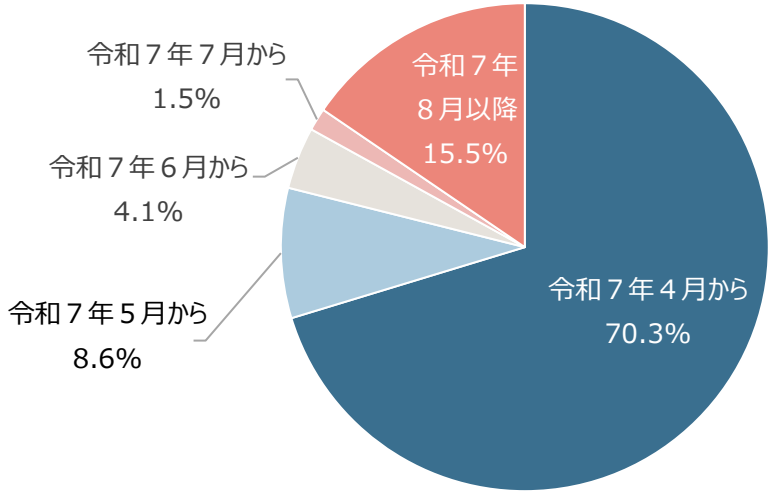
傾向/示唆

- デジタル教科書の使用歴について、70%以上の教師が令和６年度以前から使用しており、1年以上のデジタル教科書の使用経験がある。（昨年度の同設問では、約60%の教師が1年以上のデジタル教科書の使用経験があった。）
- 使用開始時期については、「令和７年4月から」が約70%と最も多く、次いで「令和７年8月以降」が約16%と多い。

学習者用デジタル教科書の使用歴



学習者用デジタル教科書の使用開始時期



©2026 ABeam Consulting Ltd.

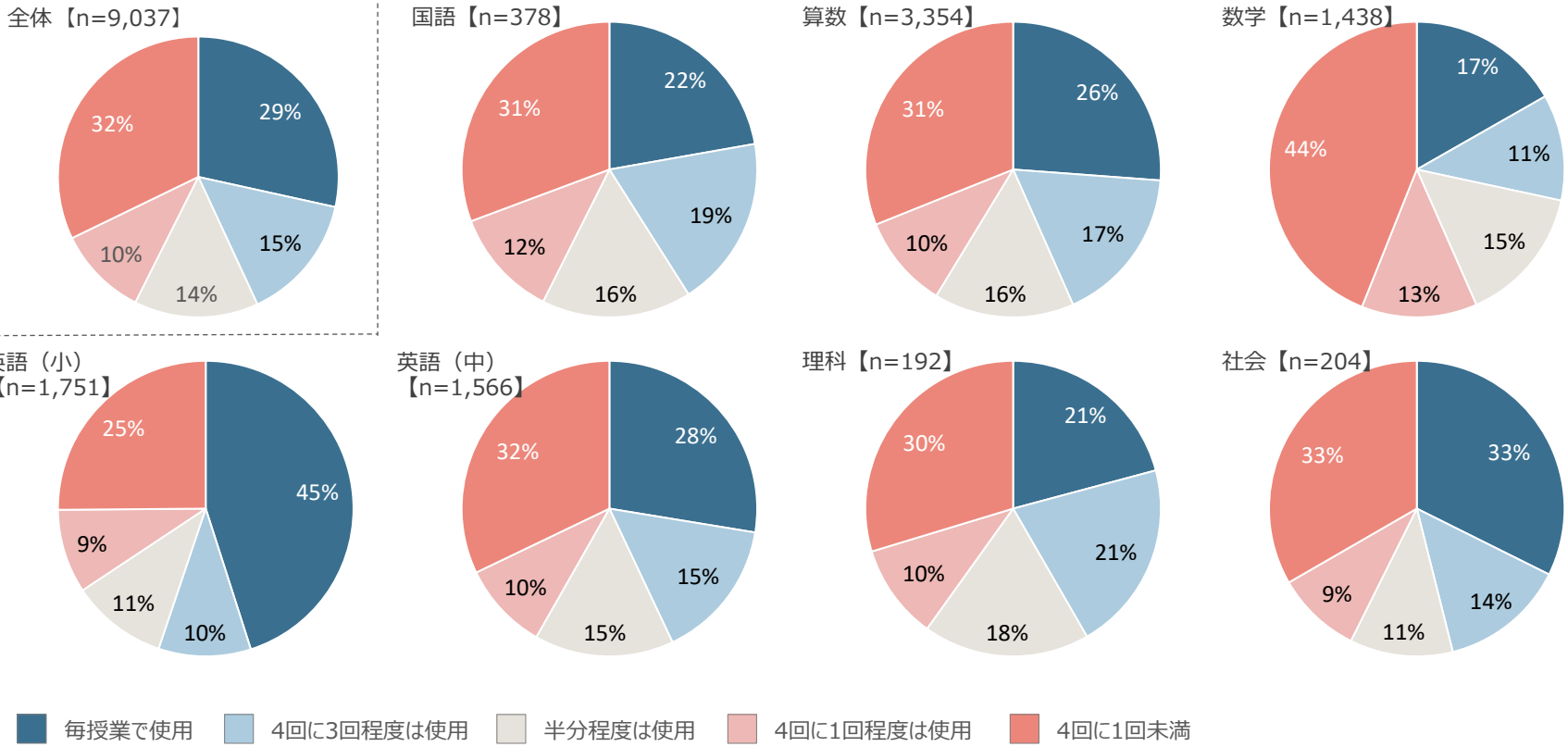
全教科総計／主要5教科別 | 小中学校 教師

分析①-2 教師による授業でのデジタル教科書の使用頻度

教師Q.5 使用頻度

傾向/示唆

- 教科全体で見ると、授業中、**4回に1回程度以上デジタル教科書を使用している教師がおよそ7割**を占めている。
- 教科別では、英語（小学校）においてデジタル教科書の使用頻度が高く、「毎授業で使用」と回答した教師が45%を占めている。



©2026 ABeam Consulting Ltd.

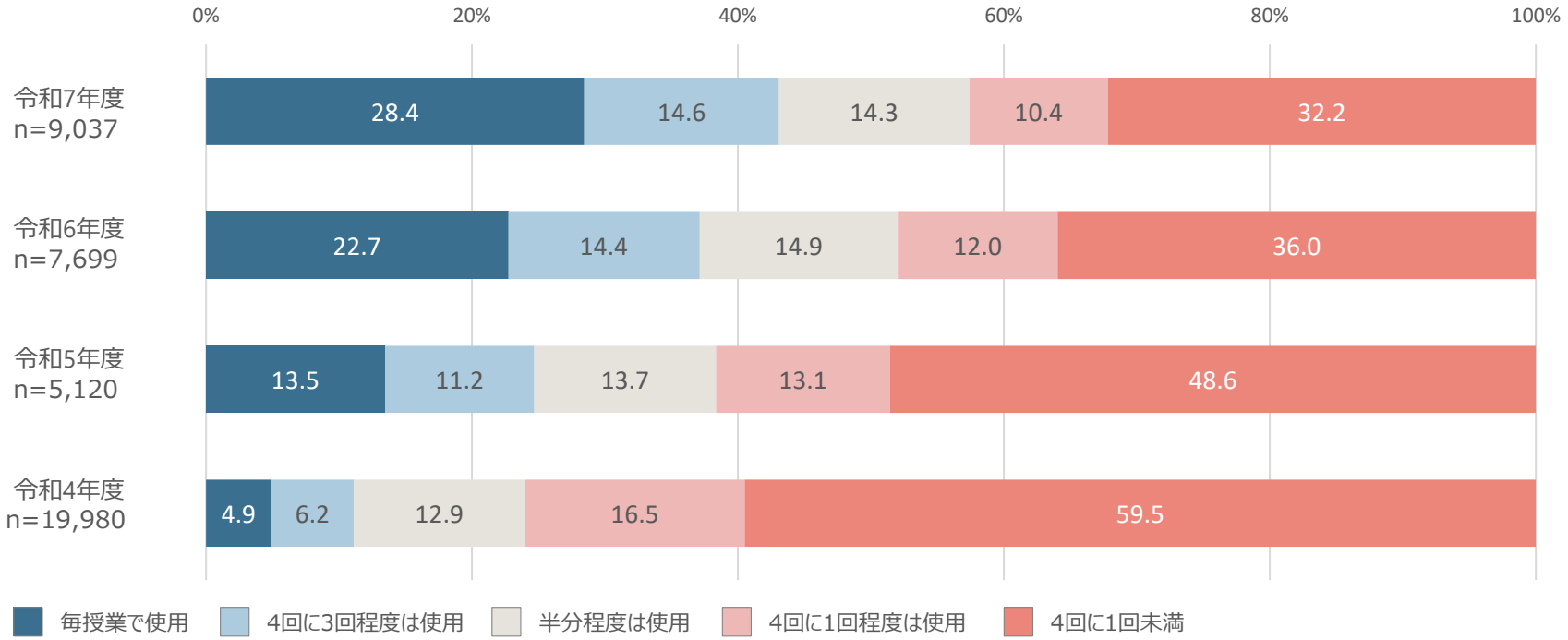
全教科総計 | 小中学校教師

分析①-3 教師による授業でのデジタル教科書の使用頻度の経年変化

教師Q.5 使用頻度

傾向/示唆

- 令和7年度では、令和6年度と比較し、**「毎授業で使用」の回答が約6ポイント高くなっている。**
- **教師の授業中でのデジタル教科書の使用頻度は、年々高まっている。**
- なお、年度間の比較においては、経年による変化だけでなく、**年度ごとに調査対象教科などが異なることによる影響も含まれている**点に留意。（詳細はp.111・112を参照。以下、経年比較に関するすべての分析について、同様。なお、調査対象教科の構成割合の違いによる影響は無視できる程度に小さいと言える。）



©2026 ABeam Consulting Ltd.

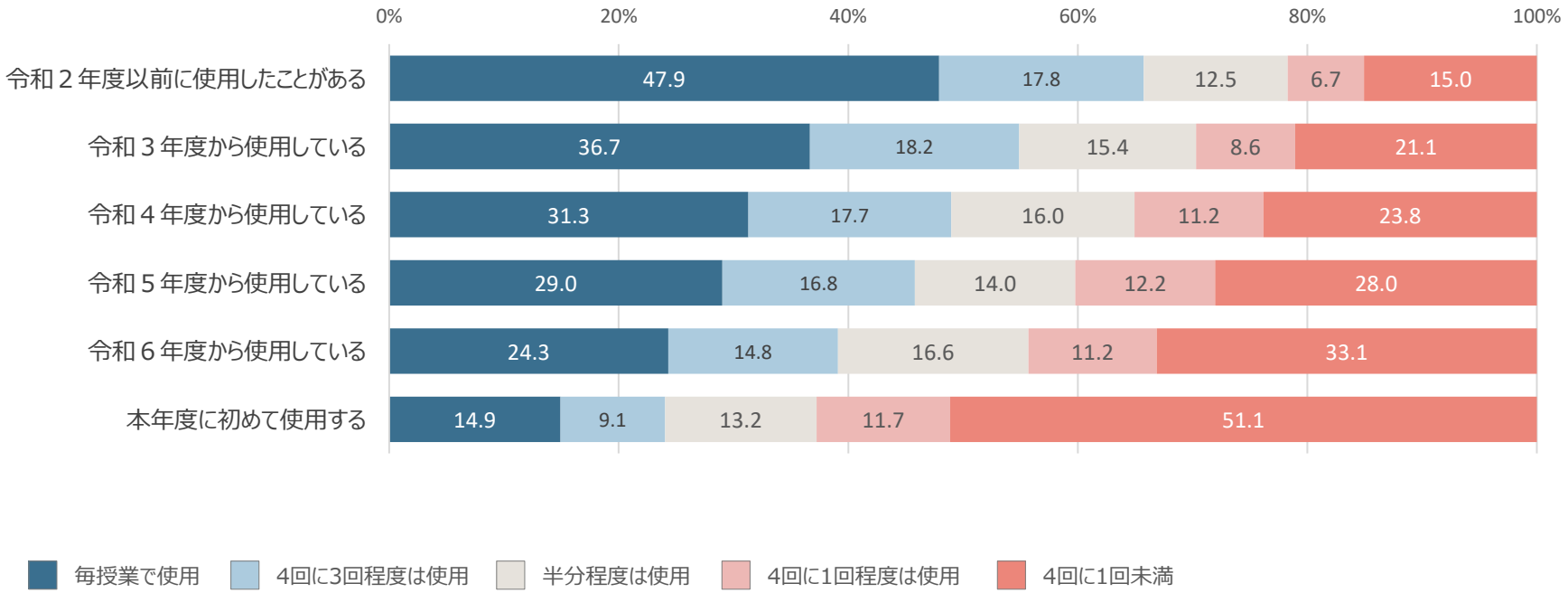
全教科総計 | 小中学校教師

分析①-4 教師のデジタル教科書の使用歴と、授業での使用頻度の関係

教師Q.3 使用歴 × 教師Q.5 使用頻度 n=9,037

傾向/示唆

- 「本年度（令和7年度）に初めて使用する」教師よりも、過年度に使用経験がある教師の方が、**「毎授業で使用」以上の頻度の回答割合が高くなっている。**
- デジタル教科書の使用歴が長く、使用経験が重なるほど、使用頻度が高まっていることが見て取れる。**デジタル教科書の活用に慣れ、メリットを理解し活用頻度が高まっている**ことが一因として考えられる。
- 使用歴ごとに回答教科の構成が大きく異なることには留意が必要（回答者のうち英語と算数・数学が占める割合は、使用歴が令和2年度以前からの者では72%、本年度初めて使用する者では41%）。ただし、英語、算数・数学の回答者に限定した比較でも、使用歴が増えるほど「毎授業で使用」の回答割合が高くなっている。（次ページ参照。）



©2026 ABeam Consulting Ltd.

英語／算数・数学 | 小中学校教師

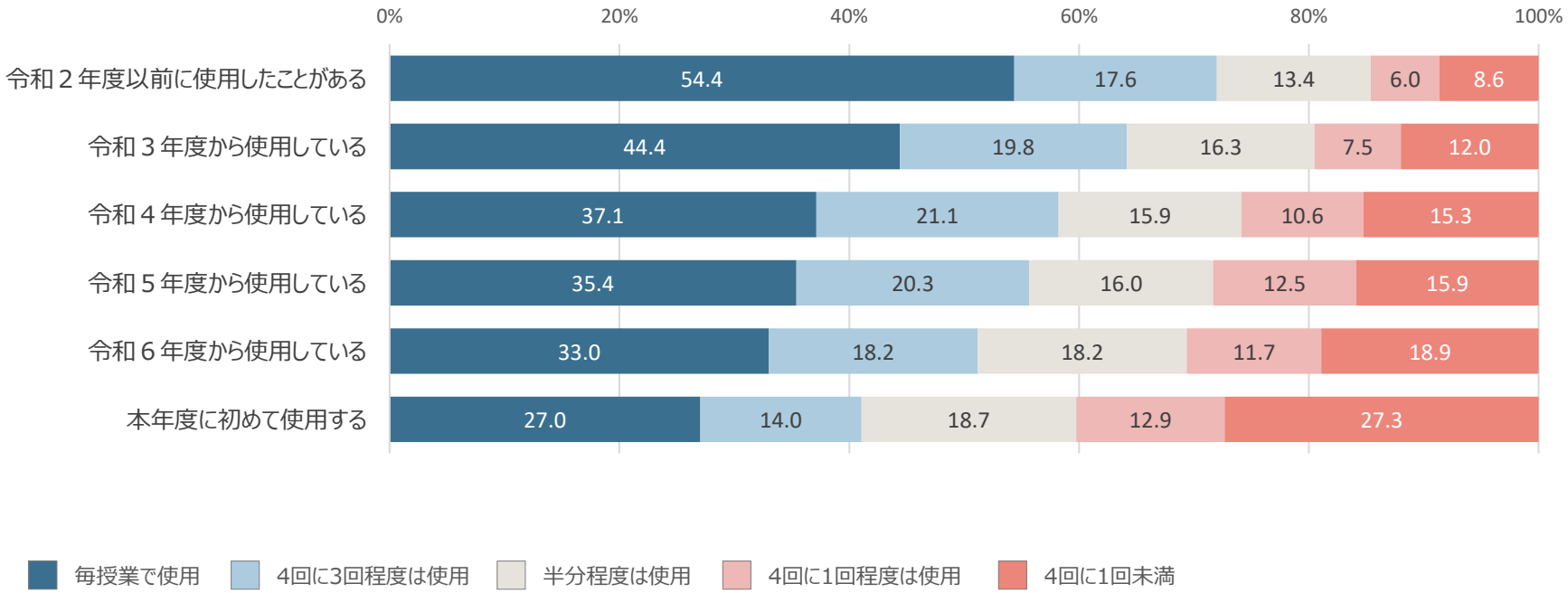
分析①-4 教師のデジタル教科書の使用歴と、授業での使用頻度の関係（参考：英語、算数・数学のみ）

教師Q.3 使用歴 × 教師Q.5 使用頻度 n=9,037

傾向/示唆

- **英語、算数・数学の回答者に限定した比較**でも、使用歴が増えるほど「毎授業で使用」の回答割合が高くなっている。

英語、算数・数学の回答者に限定した、教師のデジタル教科書の使用歴と、授業での使用頻度の関係



©2026 ABeam Consulting Ltd.

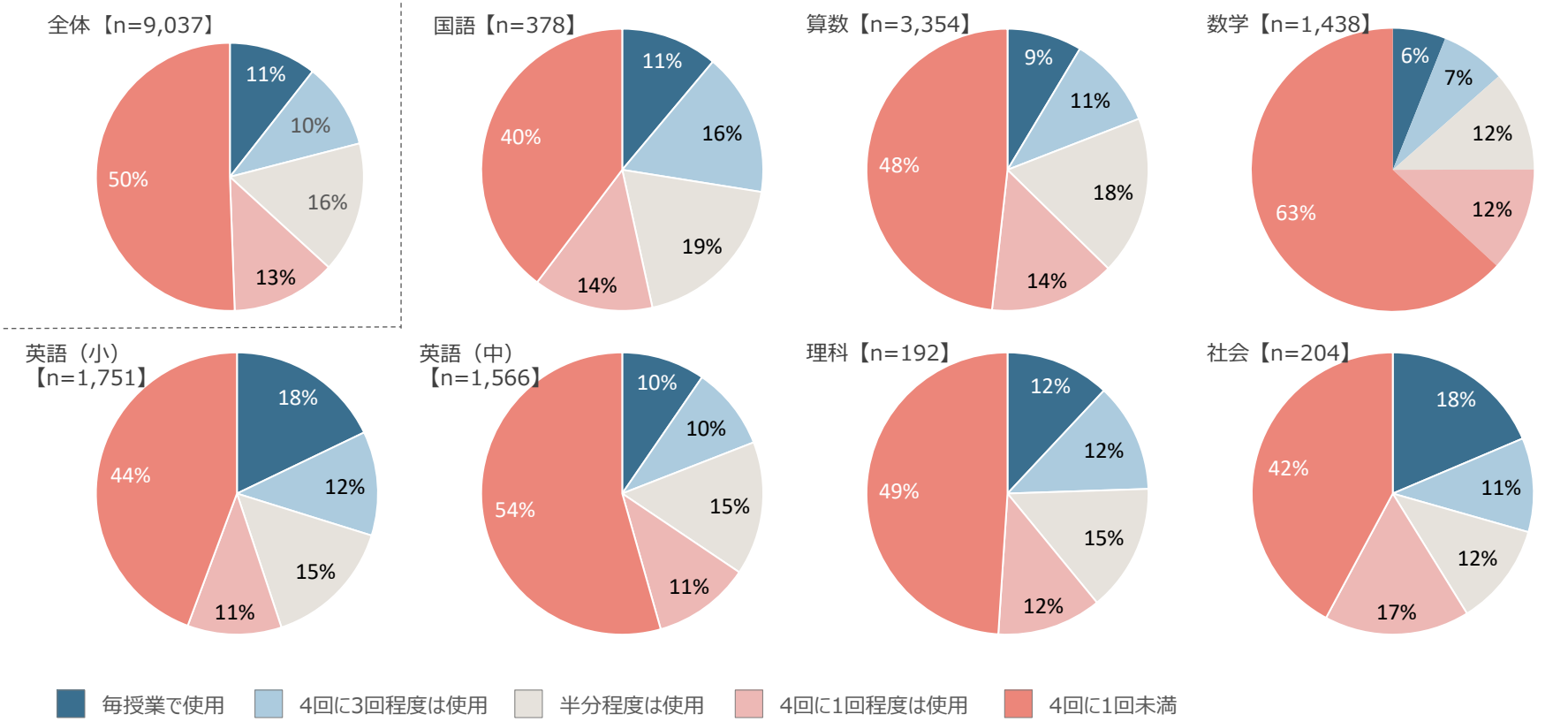
全教科総計／主要5教科別 | 小中学校 教師

分析①-5 教師の、デジタル教科書と学習支援ソフトを組み合わせた使用頻度

教師Q.6 学習支援ソフトの使用頻度

傾向/示唆

- 教科全体で見ると、デジタル教科書と学習支援ソフトを組み合わせて使用している頻度は、「4回に1回以上」がおよそ半数を占めている。
- 教科別では、英語（小学校）・社会において、デジタル教科書を学習支援ソフトウェアと組み合わせて「毎授業で使用」と回答した割合が高く、18%を占めている。



©2026 ABeam Consulting Ltd.

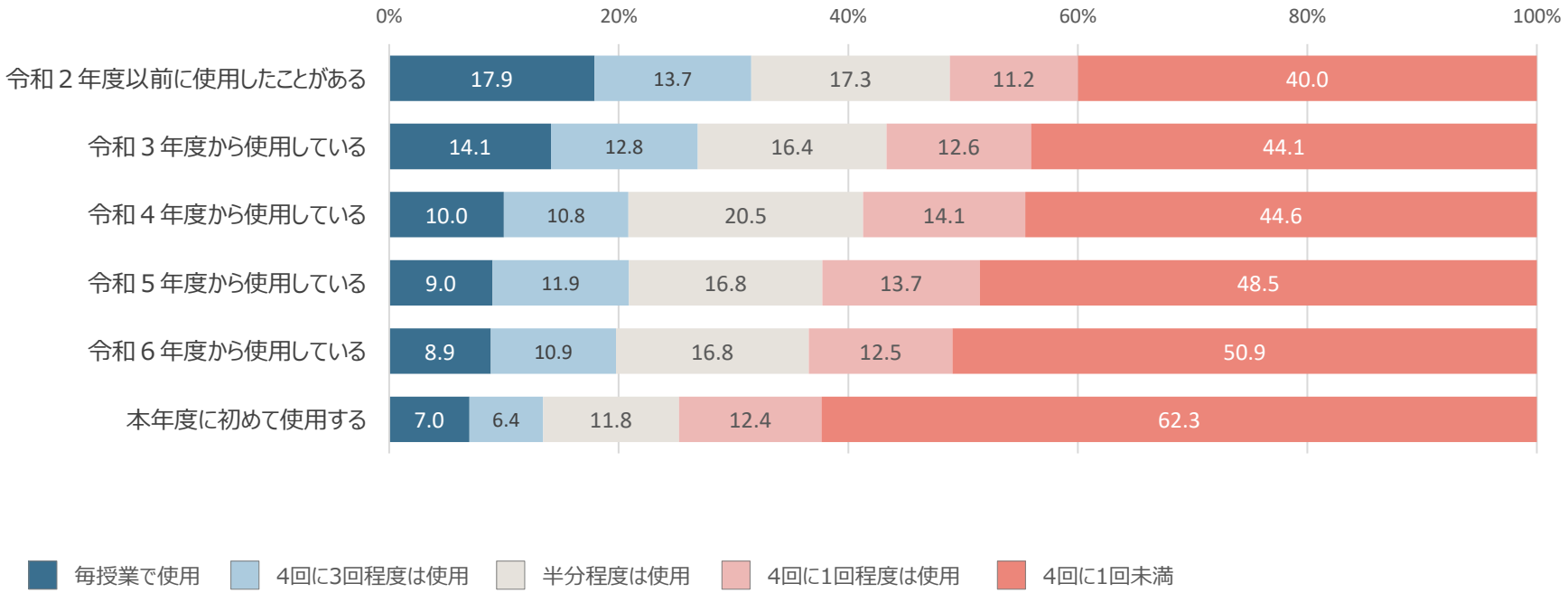
全教科総計 | 小中学校教師

分析①-6 教師のデジタル教科書の使用歴と、デジタル教科書と学習支援ソフトを組み合わせた使用頻度の関係

教師Q.3 使用歴 × 教師Q.6 学習支援ソフトの使用頻度 n=9,037

傾向/示唆

- 「本年度（令和7年度）に初めて使用する」教師よりも、過年度に使用経験がある教師の方が、**「毎授業で使用」の回答割合が高くなっている。**
- デジタル教科書の使用歴が長く、使用経験が重なるほど、使用頻度が高まっていることが見て取れる。**デジタル教科書の活用に慣れ、**デジタル教科書で実現できることに対する理解が深まり、それを補強・拡充するために学習支援ソフトを組み合わせる機会も増えるのだと推察される。



©2026 ABeam Consulting Ltd.

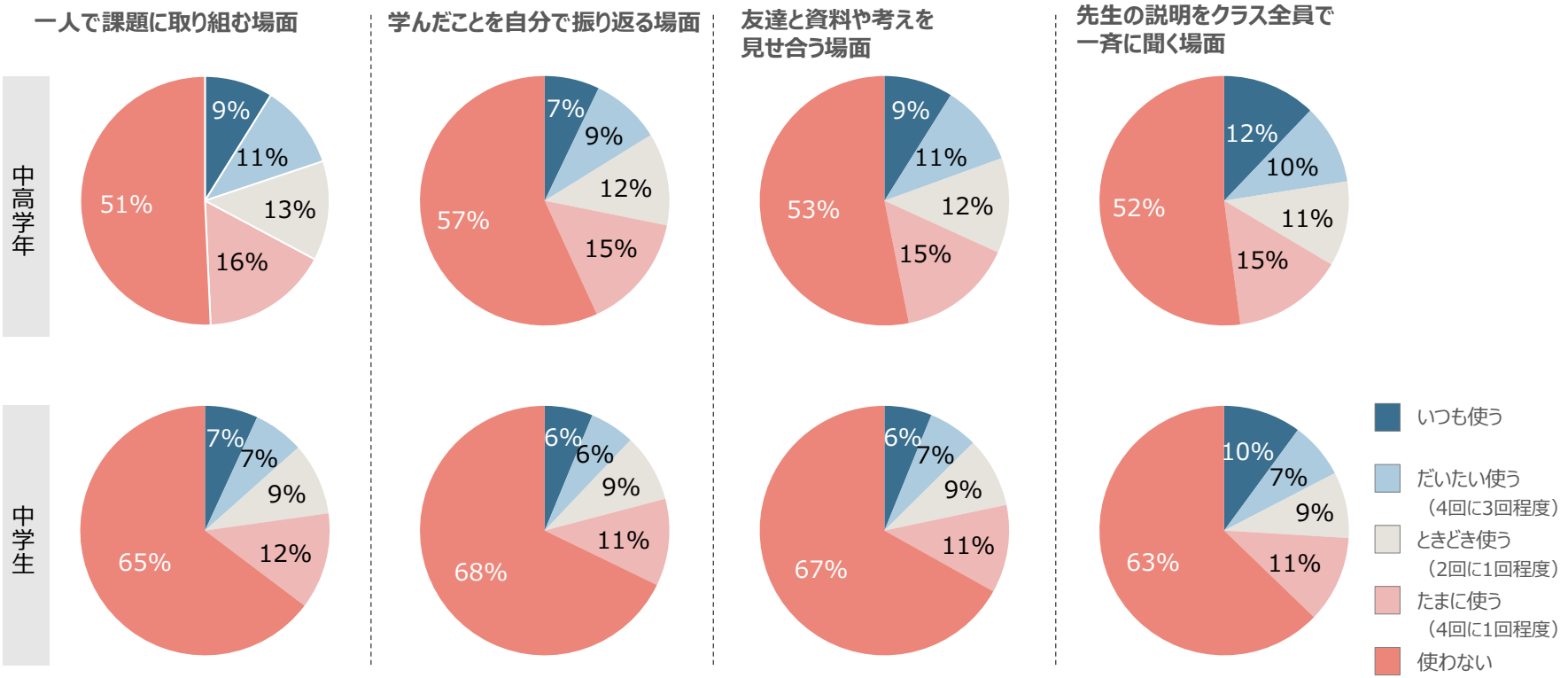
全教科総計／主要5教科別 | **中高学年児童・中学校生徒**

分析①-7 児童生徒の学習場面別の授業でのデジタル教科書の使用頻度

中高学年・中学生Q.15 学習場面別の使用頻度　　中高学年：n=15,785　中学生：n=26,439

傾向/示唆

- **一斉（先生の説明をクラス全員で一斉に聞く場面）、個別（一人で課題に取り組む場面）、協働（友達と資料や考えを見せ合う場面）の順**に使用頻度が高い。その後に「学んだことを自分で振り返る場面」での使用頻度が続く。
- 全体的に中高学年の方が使用頻度が高い。



©2026 ABeam Consulting Ltd.

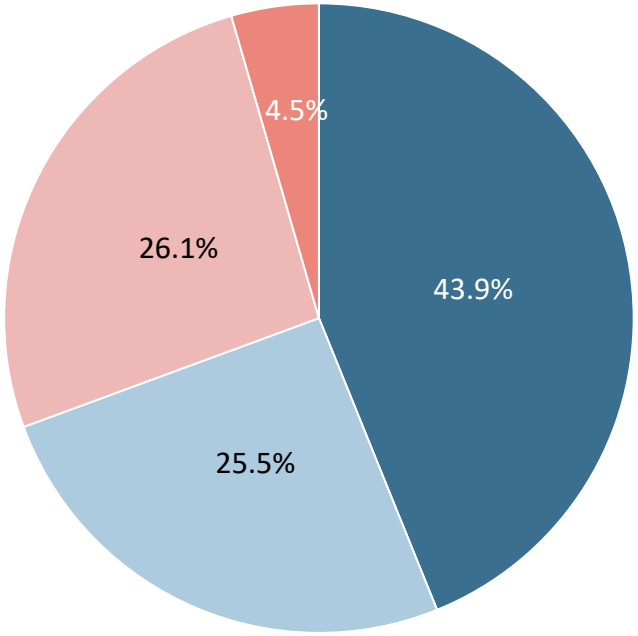
全教科総計 | 小中学校教師

分析②-1 デジタル教科書の導入による授業改善への意識の変化

教師Q.10 授業改善への意識の変化 n=9,037

傾向/示唆

- 約44%の教師が、デジタル教科書の導入によって「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善の実現に向けた意識を持ったと回答しており、割合として一番多い。
- 約26%の教師は、デジタル教科書の導入前から「主体的・対話的で深い学び」を実現した授業を行っていた。



- 学習者用デジタル教科書が導入されたことで「主体的な学び・対話的で深い学び」の実現に向けた授業観の転換への意識を持った。
- 学習者用デジタル教科書の導入前から「主体的な学び・対話的で深い学び」を実現した授業を行っているため、導入による意識の変化はない。
- 「主体的な学び・対話的で深い学び」の実現に向けた授業観の転換の必要性は理解しているが、学習者用デジタル教科書が導入されても、特に意識の変化はなかった。
- 「主体的な学び・対話的で深い学び」の実現に向けた授業観の転換の必要性を理解しておらず、デジタル教科書が導入されても、特に意識の変化はなかった。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

全教科総計 | 小中学校教師

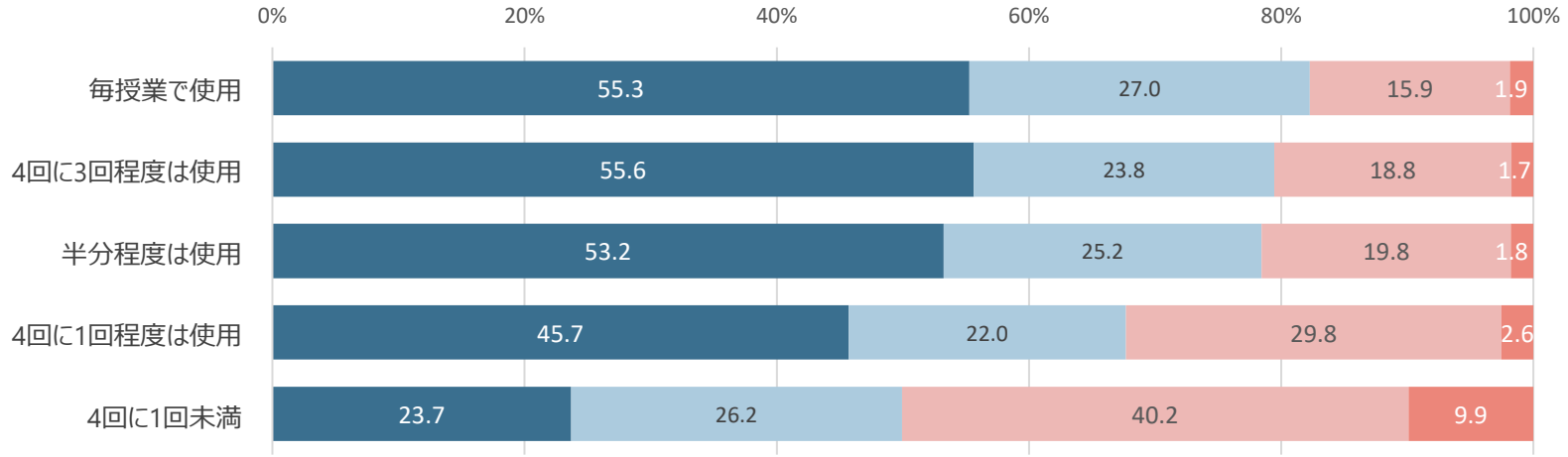
分析②-2 教師のデジタル教科書の使用頻度と、デジタル教科書の導入による授業改善への意識の変化の関係

教師Q.5 使用頻度 × 教師Q.10 授業改善への意識の変化

n=9,037

傾向/示唆

- デジタル教科書の使用が「半分程度は使用」よりも多い教師は、その過半数が**「デジタル教科書が導入されたことで、『主体的な学び・対話的で深い学び』の実現に向けた授業観の転換への意識を持った」**と回答している。
- デジタル教科書の使用頻度が４回に１回未満の教師は、その他の教師に比べて、授業観の転換の必要性を理解していない者や、意識が変化していない者が多い。



- 学習者用デジタル教科書が導入されたことで「主体的な学び・対話的で深い学び」の実現に向けた授業観の転換への意識を持った。
- 学習者用デジタル教科書の導入前から「主体的な学び・対話的で深い学び」を実現した授業を行っているため、導入による意識の変化はない。
- 「主体的な学び・対話的で深い学び」の実現に向けた授業観の転換の必要性は理解しているが、学習者用デジタル教科書が導入されても、特に意識の変化はなかった。
- 「主体的な学び・対話的で深い学び」の実現に向けた授業観の転換の必要性を理解しておらず、デジタル教科書が導入されても、特に意識の変化はなかった。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

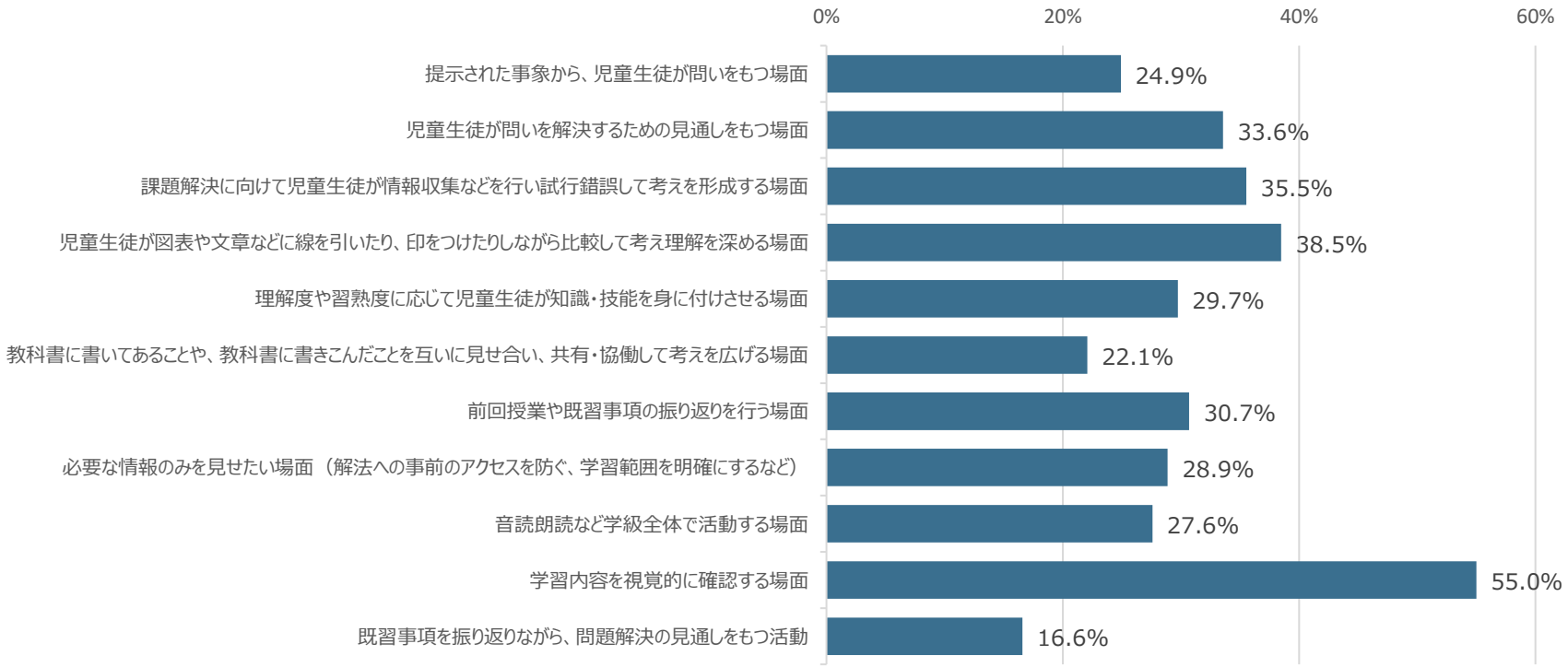
全教科総計 | 小中学校教師

分析②-3 デジタル教科書の導入で可能になった授業展開（教科共通の観点）

教師Q.13 デジタル教科書で可能になった授業展開 n=5,984

傾向/示唆

- デジタル教科書で授業改善の効果を感じている教師のうち、過半数が「**学習内容を視覚的に確認する場面**」で、「紙の教科書ではできなかった（しにくかった）ことができるようになった」と感じている。（ただし、動画やシミュレーション機能のような視覚的な理解を促すコンテンツだけでなく、紙面をに書かれた内容を読み取ることなども想定して回答された可能性があることに留意。）
- 次に、「**児童生徒が図表や文章などに線を引いたり、印をつけたりしながら比較して考え理解を深める場面**」や「**課題解決に向けて児童生徒が情報収集などを行い試行錯誤して考えを形成する場面**」を選択した教師も多かった。



©2026 ABeam Consulting Ltd.

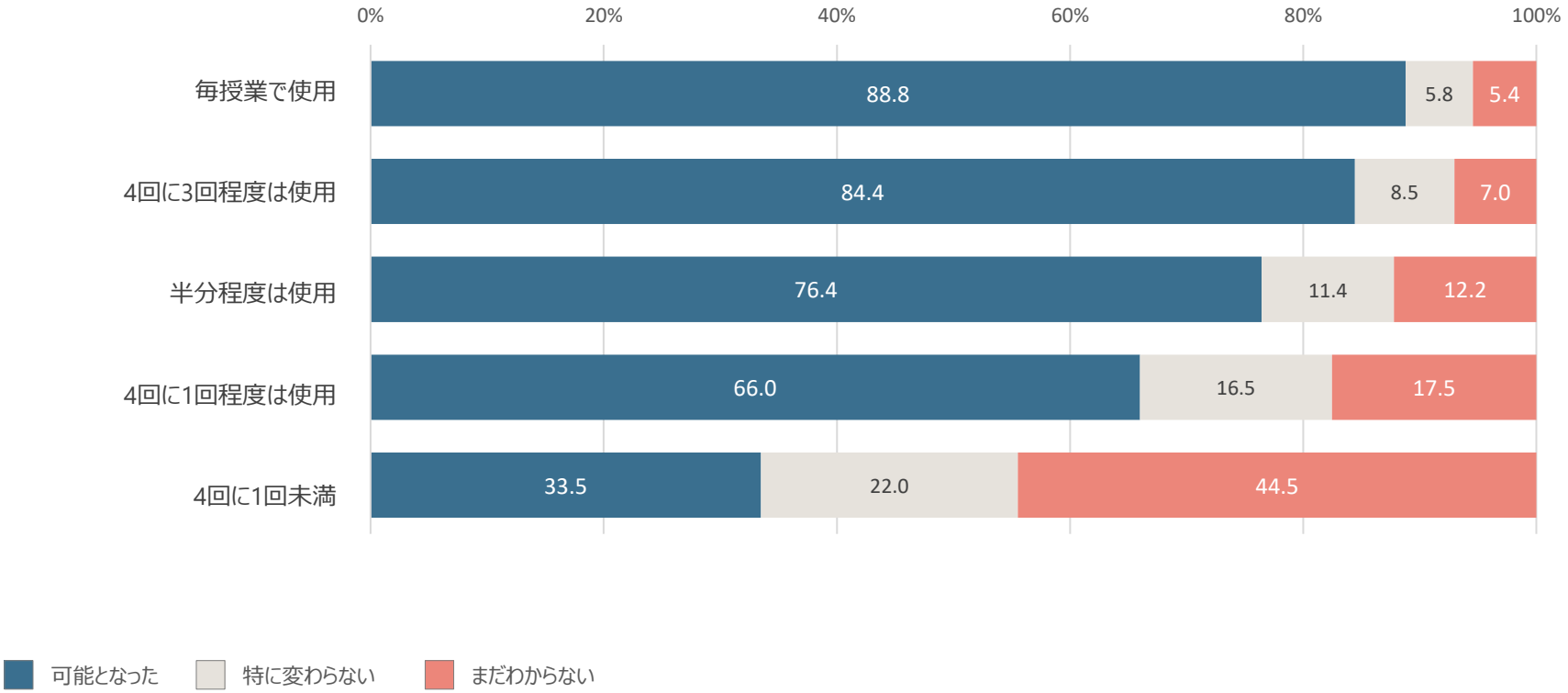
分析②-4 教師のデジタル教科書の使用頻度と、デジタル教科書の導入で可能になった授業展開（教科共通の観点）の関係（1/3）

全教科総計 | 小中学校教師

教師Q.5 使用頻度 × 教師Q.11 デジタル教科書で新たな授業展開が可能になったか n=9,037

傾向/示唆

- デジタル教科書の使用頻度が多いほど、「**デジタル教科書を使用することで、紙の教科書だけではできなかった、又はしにくかった授業展開や授業の工夫が可能となった**」と回答した者が多い。



©2026 ABeam Consulting Ltd.

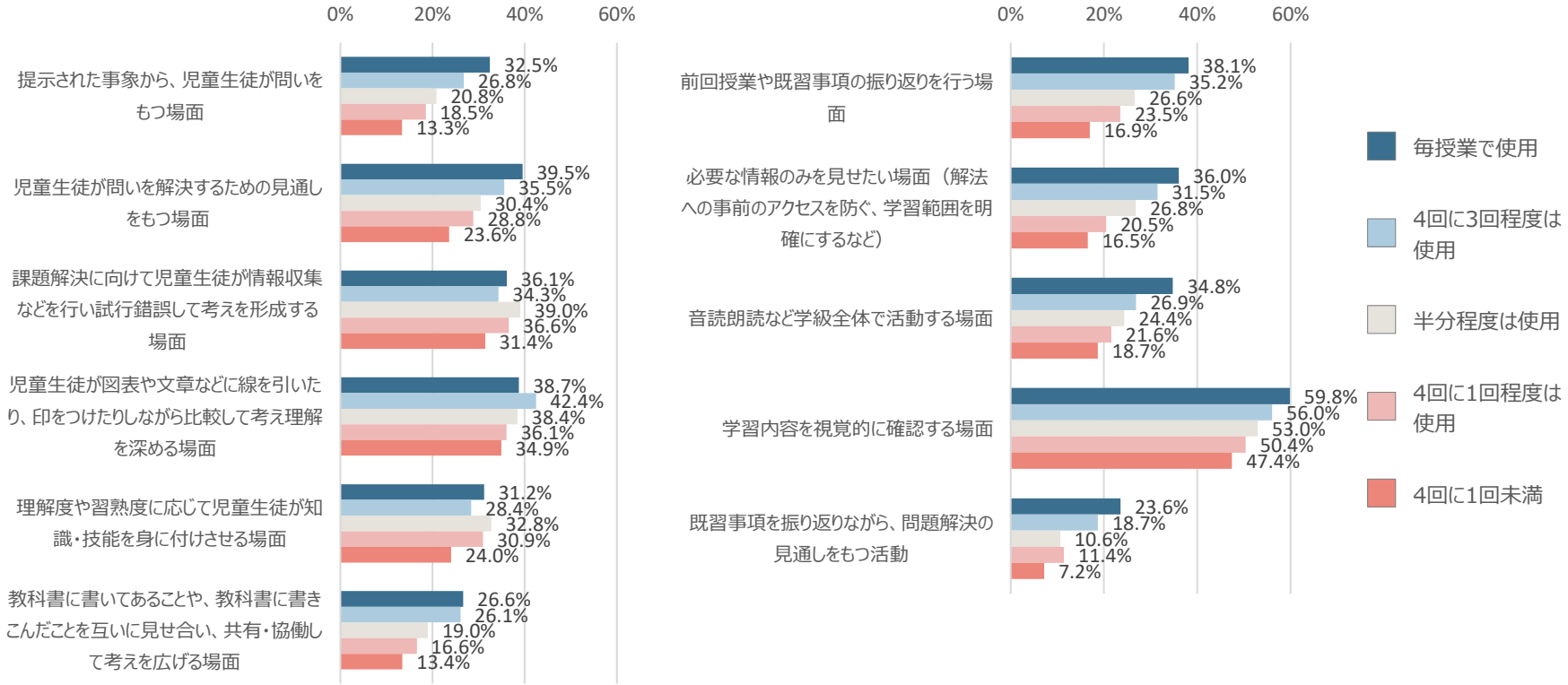
分析②-4 教師のデジタル教科書の使用頻度と、デジタル教科書の導入で可能になった授業展開（教科共通の観点）の関係（2/3）

全教科総計 | 小中学校教師

教師Q.5 使用頻度 × 教師Q.13 デジタル教科書で可能になった授業展開 n=5,984

傾向/示唆

- 「デジタル教科書の導入で可能になった授業展開」の回答割合に関して、**活用頻度による差**（毎授業で使用と4回に1回未満の層で比較）**が大きい**のは、「**前回授業や既習事項の振り返りを行う場面**」（約21ポイント差）、「**必要な情報のみを見せたい場面**」（約20ポイント差）、「**提示された事象から、児童生徒が問いをもつ場面**」（約19ポイント差）である。
- 対して、**活用頻度による差があまり見られない**のは、「**課題解決に向けて児童生徒が情報収集などを行い試行錯誤して考えを形成する場面**」、「**児童生徒が図表や文章などに線を引いたり、印をつけたりしながら比較して考え理解を深める場面**」、「**理解度や習熟度に応じて児童生徒が知識・技能を身に付けさせる場面**」である。



©2026 ABeam Consulting Ltd.

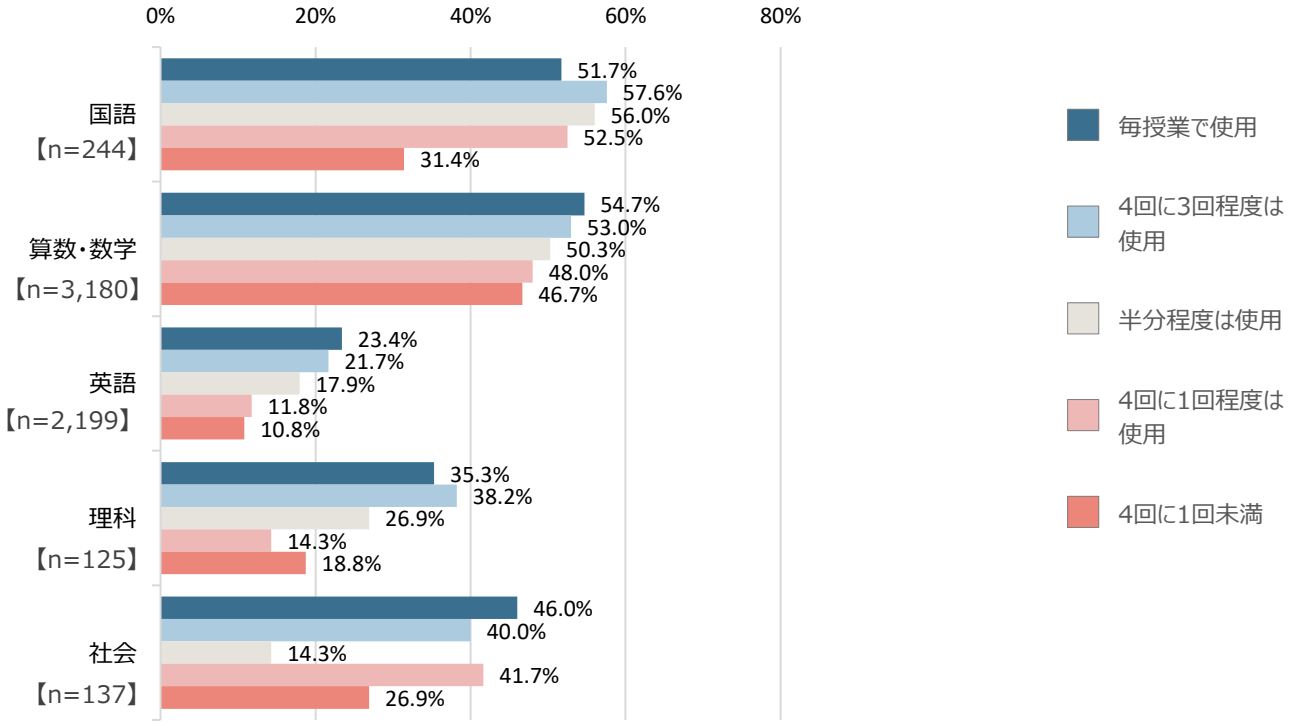
分析②-4 教師のデジタル教科書の使用頻度と、デジタル教科書の導入で可能になった授業展開（教科共通の観点）の関係（3/3）

主要５教科別 | 小中学校 教師

教師Q.5 使用頻度 × 教師Q.13 デジタル教科書で可能になった授業展開 n=5,984

傾向/示唆

- なお、「**児童生徒が図表や文章などに線を引いたり、印をつけたりしながら比較して考え理解を深める場面**」について教科別の傾向を分析すると、算数・数学の教科において、活用頻度による差が見られる。



©2026 ABeam Consulting Ltd.

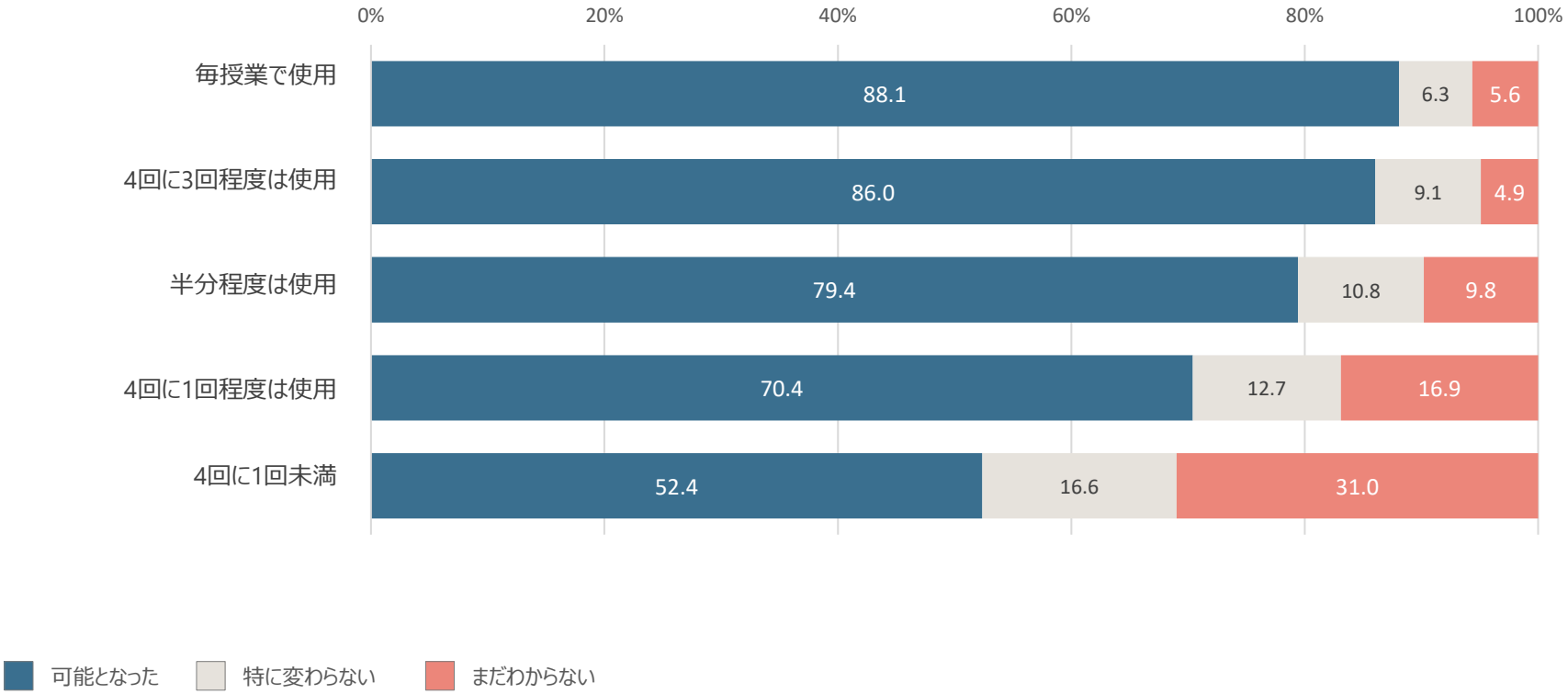
分析②-5 教師のデジタル教科書と学習支援ソフトを組み合わせた使用頻度と、デジタル教科書の導入で可能になった授業展開（教科共通の観点）の関係（1/2）

全教科総計 | 小中学校教師

教師Q.6 学習支援ソフトの使用頻度 × 教師Q.11 デジタル教科書で新たな授業展開が可能になったか n=9,037

傾向/示唆

- 学習支援ソフトの使用頻度が多いほど、「**デジタル教科書を使用することで、紙の教科書だけではできなかった、又はしにくかった授業展開や授業の工夫が可能となった**」と回答した者が多い。



©2026 ABeam Consulting Ltd.

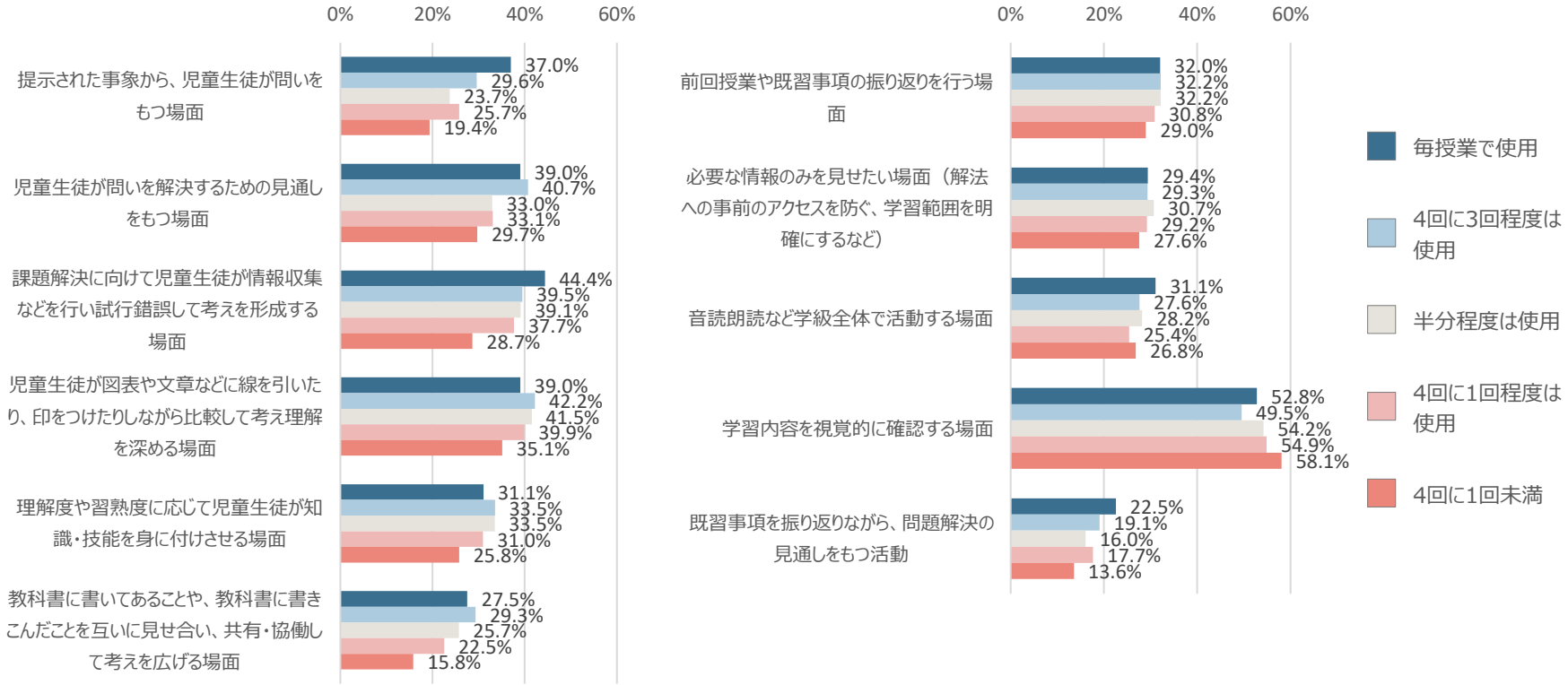
分析②-5 教師のデジタル教科書と学習支援ソフトを組み合わせた使用頻度と、デジタル教科書の導入で可能になった授業展開（教科共通の観点）の関係（2/2）

全教科総計 | 小中学校教師

教師Q.6 学習支援ソフトの使用頻度 × 教師Q.13 デジタル教科書で可能になった授業展開　n=5,984

傾向/示唆

- 「デジタル教科書の導入で可能になった授業展開」の回答割合に関して、**学習支援ソフトの使用頻度による差**（毎授業で使用と4回に1回未満の層で比較）**が大きい**のは、「**提示された事象から、児童生徒が問いをもつ場面**」（約18ポイント差）、「**課題解決に向けて児童生徒が情報収集などを行い試行錯誤して考えを形成する場面**」（約16ポイント差）、「**教科書に書いてあることや、教科書に書きこんだことを互いに見せ合い、共有・協働して考えを広げる場面**」（約12ポイント差）といった、**学習支援ソフトの活用が想定される場面**である。
- 対して、**デジタル教科書の使用頻度では差が見られた「前回授業や既習事項の振り返りを行う場面」**や「**必要な情報のみを見せたい場面**」に関しては、**学習支援ソフトの使用頻度による差があまり見られなかった。**



©2026 ABeam Consulting Ltd.

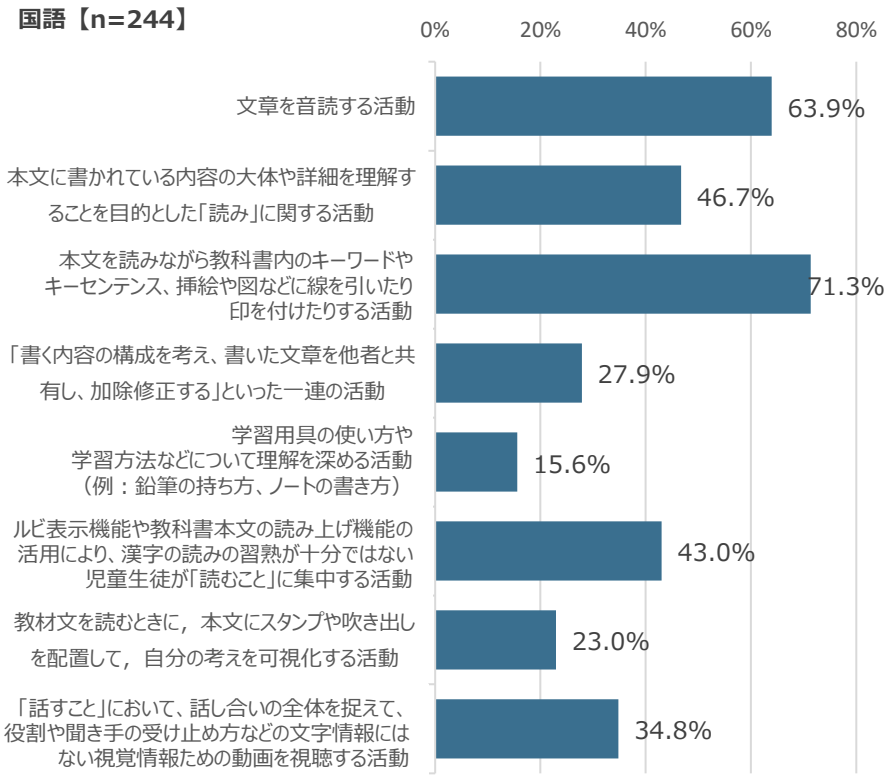
国語／算数・数学 | 小中学校教師

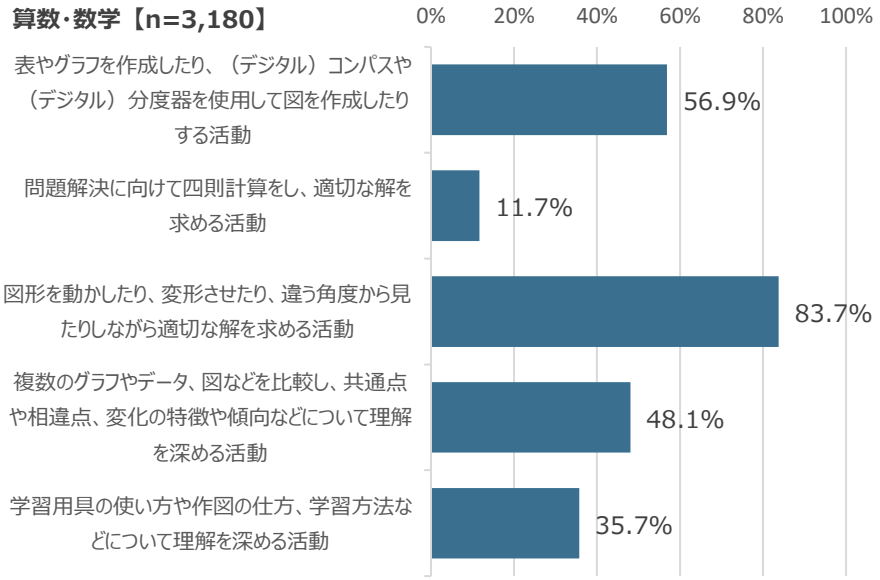
分析②-6 デジタル教科書の導入で可能になった授業展開（教科固有の観点）（1/4）

教師Q.14 デジタル教科書で可能になった授業展開（教科固有の観点）

傾向/示唆

- デジタル教科書で授業改善の効果を感じている教師のうち、最もデジタル教科書で可能になった授業展開と感じているのは、国語では「**本文を読みながら教科書内のキーワードやキーセンテンス、挿絵や図などに線を引いたり印を付けたりする活動**」、算数・数学では「**図形を動かしたり、変形させたり、違う角度から見たりしながら適切な解を求める活動**」である。





©2026 ABeam Consulting Ltd.

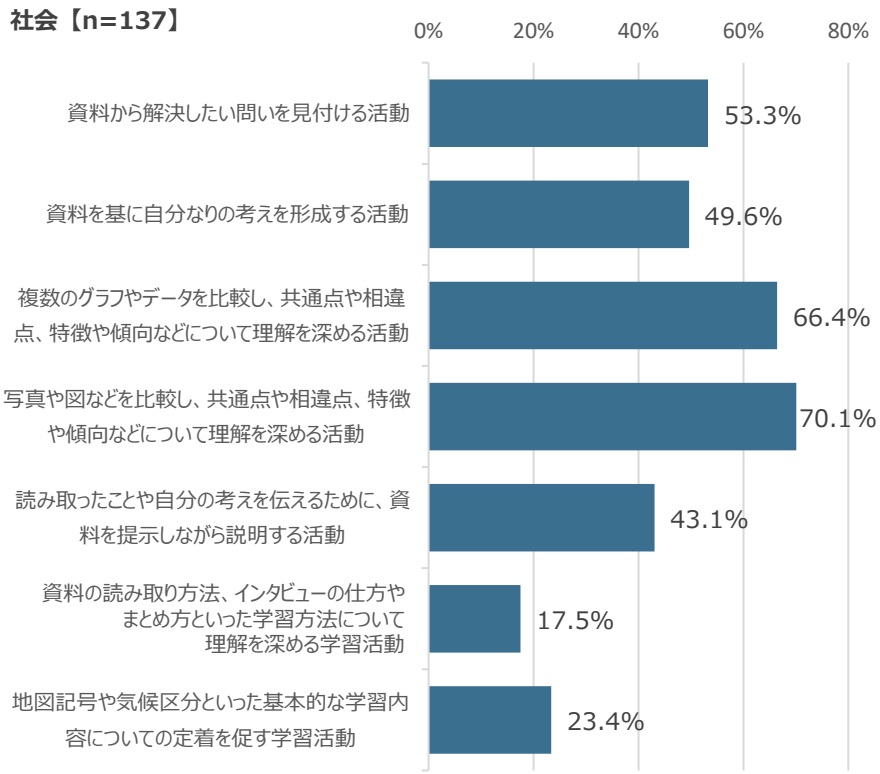
社会／理科 | 小中学校教師

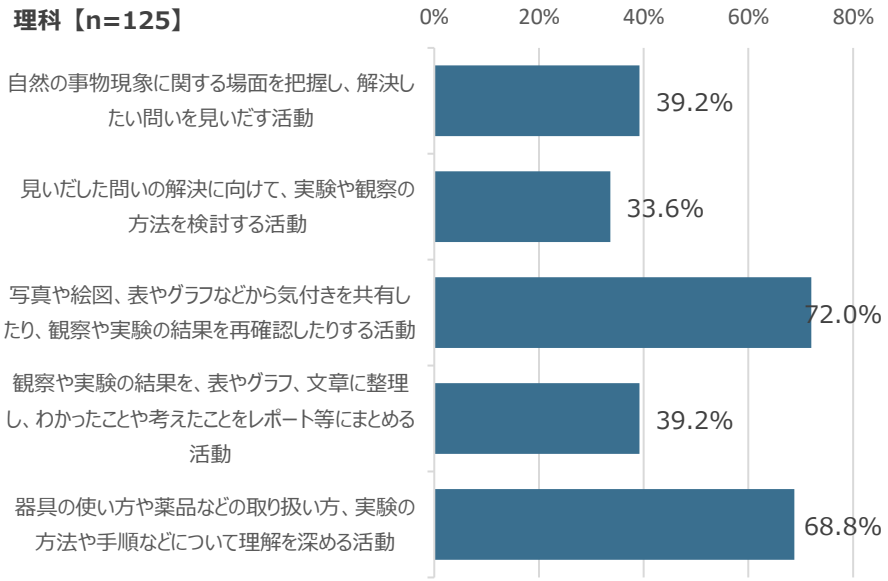
分析②-6 デジタル教科書の導入で可能になった授業展開（教科固有の観点）（2/4）

教師Q.14 デジタル教科書で可能になった授業展開（教科固有の観点）

傾向/示唆

- デジタル教科書で授業改善の効果を感じている教師のうち、最もデジタル教科書で可能になった授業展開と感じているのは、社会では「**写真や図などを比較し、共通点や相違点、特徴や傾向などについて理解を深める活動**」、理科では「**写真や絵図、表やグラフなどから気付きを共有したり、観察や実験の結果を再確認したりする活動**」である。





©2026 ABeam Consulting Ltd.

英語／音楽　小中学校教師

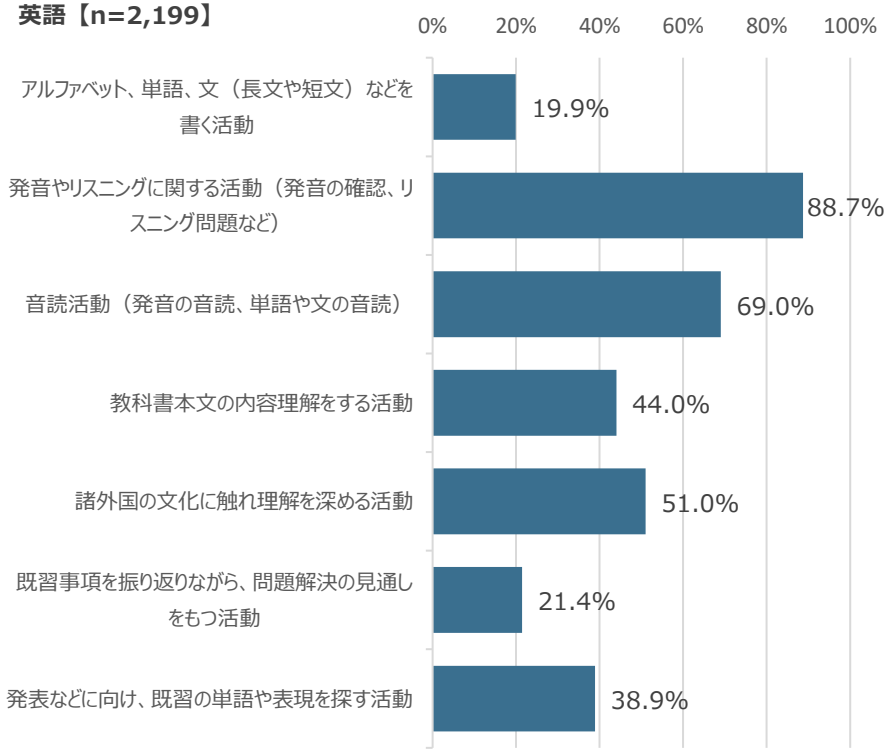
分析②-6 デジタル教科書の導入で可能になった授業展開（教科固有の観点）（3/4）

教師Q.14 デジタル教科書で可能になった授業展開（教科固有の観点）

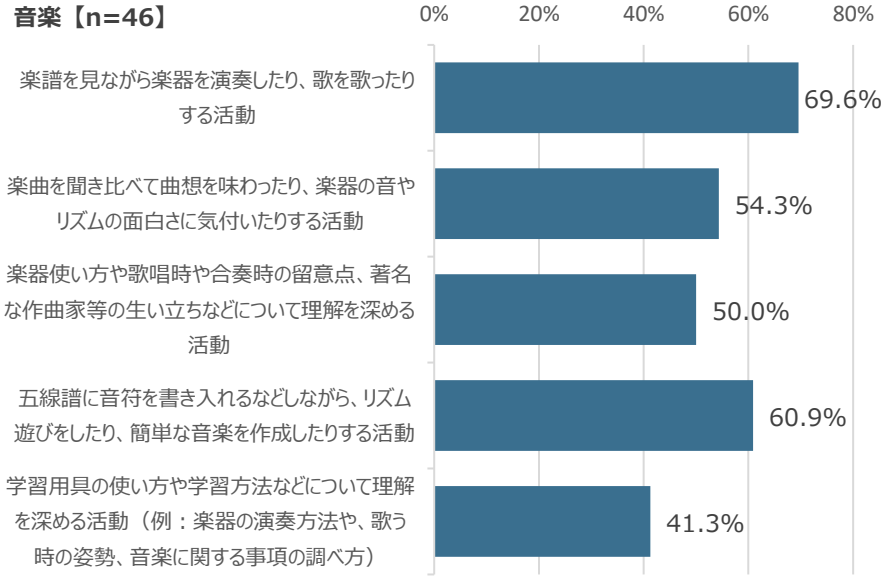
傾向/示唆

- デジタル教科書で授業改善の効果を感じている教師のうち、最もデジタル教科書で可能になった授業展開と感じているのは、英語では「**発音やリスニングに関する活動（発音の確認、リスニング問題など）**」である。
（音楽はサンプル数が少ないため、参考値としてグラフのみ掲載。次ページに掲載の教科も同様。）

英語【n=2,199】



音楽【n=46】



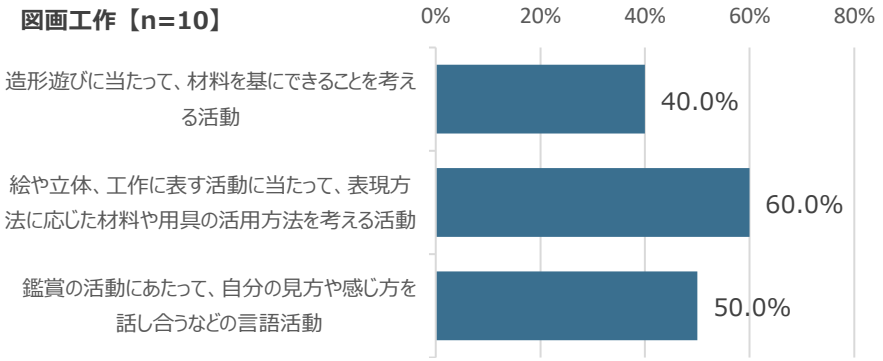
©2026 ABeam Consulting Ltd.

図工・美術／技術・家庭／道徳 | 小中学校教師

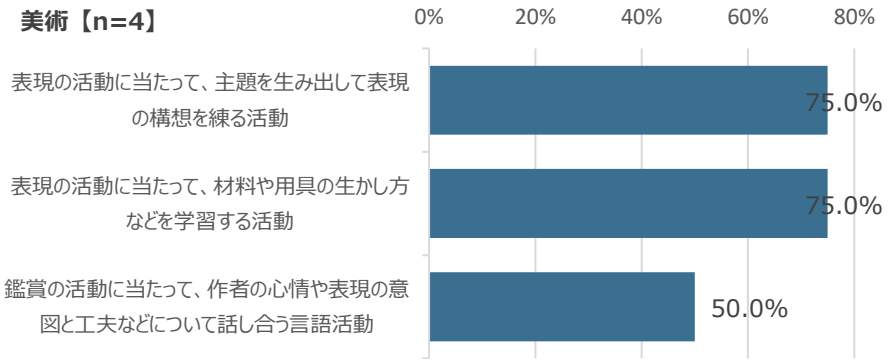
分析②-6 デジタル教科書の導入で可能になった授業展開（教科固有の観点）（4/4）

教師Q.14 デジタル教科書で可能になった授業展開（教科固有の観点）

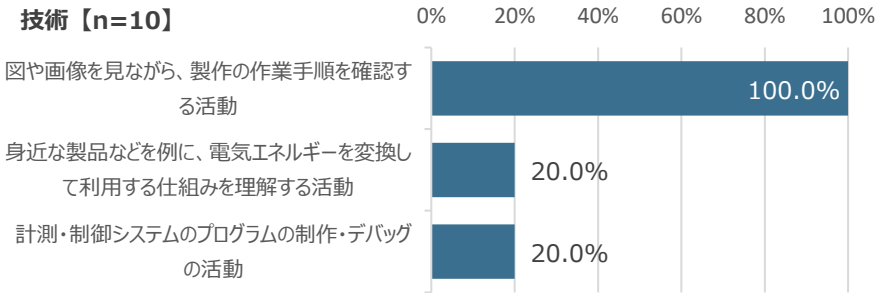
図画工作【n=10】



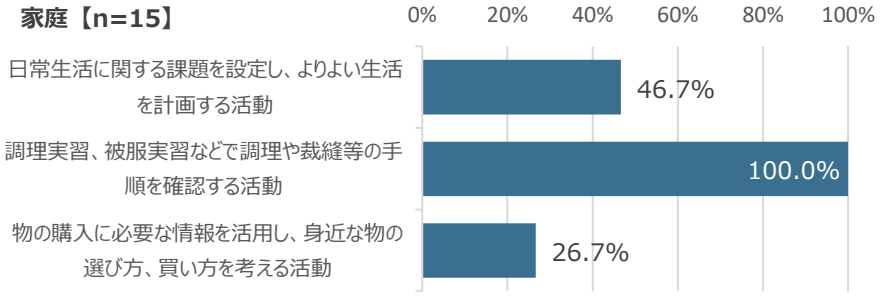
美術【n=4】



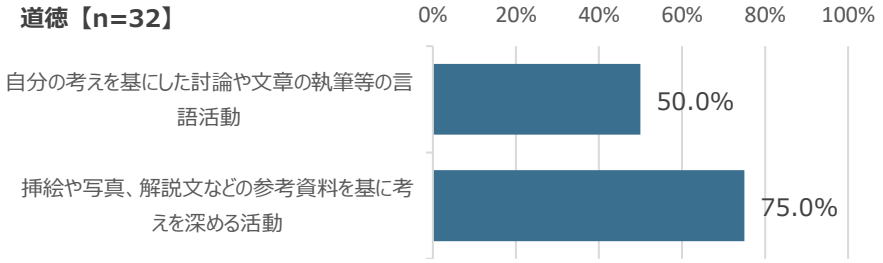
技術【n=10】



家庭【n=15】



道徳【n=32】



©2026 ABeam Consulting Ltd.

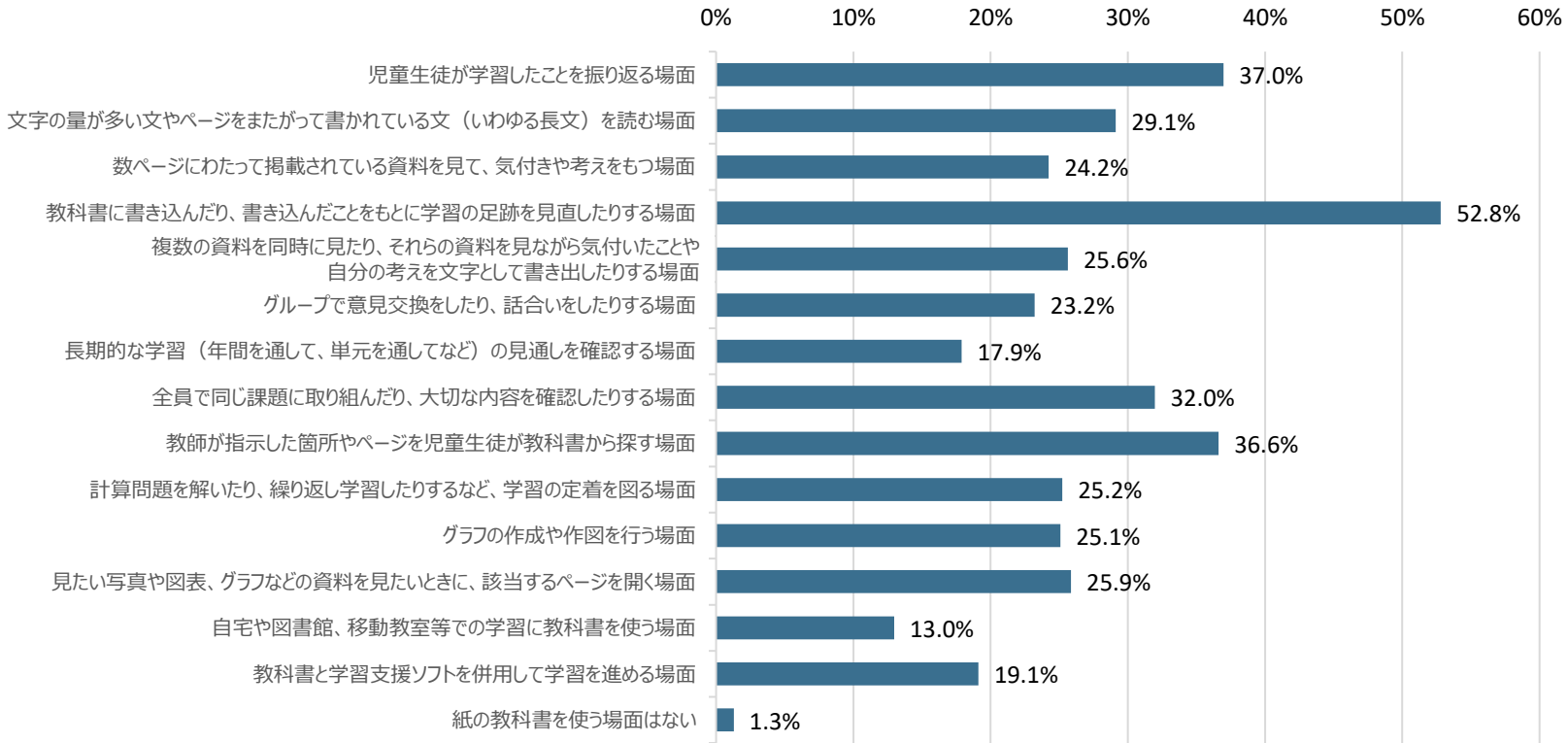
全教科総計 | 小中学校教師

分析③-1 紙の教科書を引き続き使用している場面

教師Q.15 紙の教科書を引き続き使用している場面 n=5,984

傾向/示唆

- 紙の教科書を引き続き使用している場面として、過半数の教師が「**教科書に書き込んだり、書き込んだことをもとに学習の足跡を見直したりする場面**」を挙げている。
  次に、「**児童生徒が学習したことを振り返る場面**」や「**教師が指示した箇所やページを児童生徒が教科書から探す場面**」も多く挙げられている。



©2026 ABeam Consulting Ltd.

全教科総計 | 小学校 中高学年児童

分析③-2 児童生徒のデジタル教科書の使用頻度と、デジタル教科書と紙の教科書の使用感の関係（1/7）

中高学年・中学生Q.14 使用頻度 × 中高学年・中学生Q.4 デジタル教科書と紙の教科書を比べた使用感

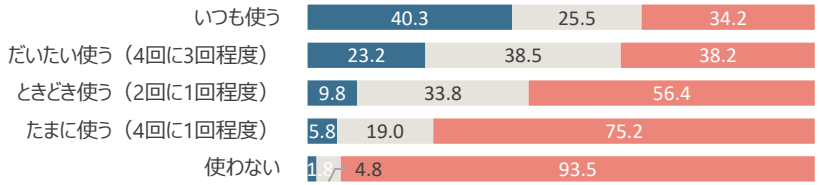
中高学年：n=15,785

傾向/示唆

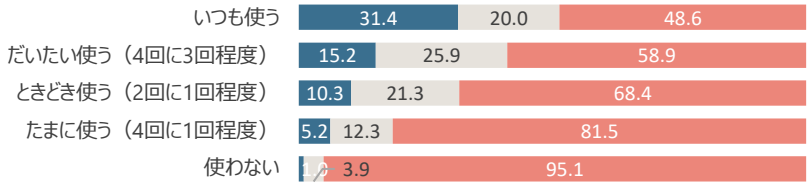
- どの授業場面においても、**デジタル教科書の使用頻度が高いほど、デジタル教科書を選択する児童生徒が多い。**
- 特に使用頻度による差が大きく見られる場面として、「**教科書を見ながら、先生や友達の話を聞くとき**」や、「**図や写真、表やグラフをくわしく見て、自分なりの気づきや考えをもつとき**」、「**友達同士で教え合うとき**」、「**思ったことや自分の考えを、教科書を使って説明するとき**」が挙げられる。
- デジタル教科書の使用頻度が高い児童生徒でも、一部の学習場面では、紙の教科書を選択する児童生徒もおり、**学習場面によって最適な媒体が異なり得ることが分かる。**

中高学年

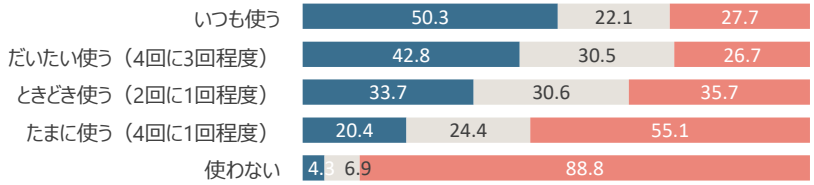
教科書を見ながら、先生や友達の話を聞くとき



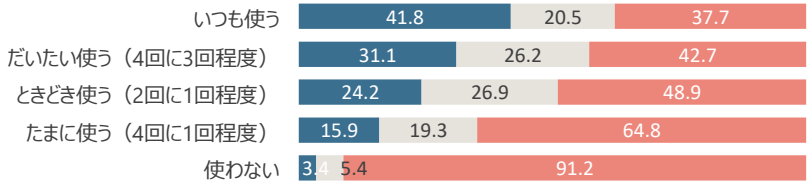
文字や文章を声に出して読んだり、一人でじっくり読んだりするとき



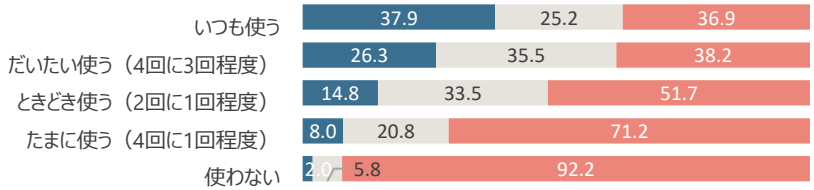
図や写真、表やグラフをくわしく見て、自分なりの気づきや考えをもつとき

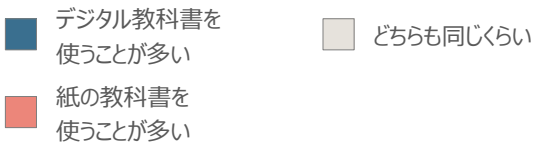


文字や文章に線を引いたり、図や写真、表やグラフの中に印をつけたりするなど、教科書に書き込んだり、書き込んだものを消したりするとき



友達同士で教え合うとき





©2026 ABeam Consulting Ltd.

全教科総計 | 小学校 中高学年児童

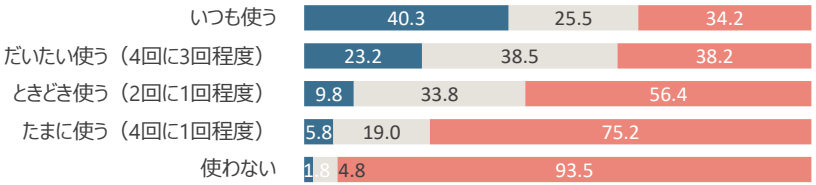
分析③-2 児童生徒のデジタル教科書の使用頻度と、デジタル教科書と紙の教科書の使用感の関係（2/7）

中高学年・中学生Q.14 使用頻度 × 中高学年・中学生Q.4 デジタル教科書と紙の教科書を比べた使用感

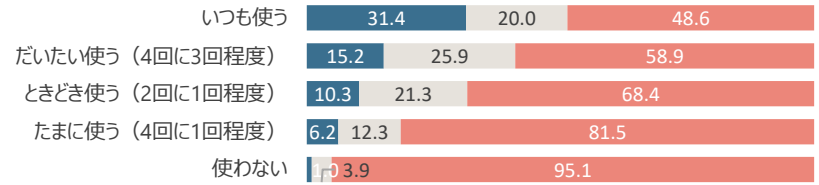
中高学年：n=15,785

中高学年

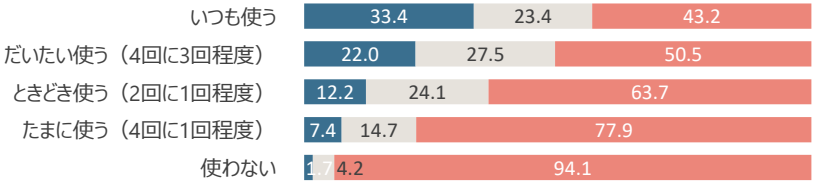
自分の考えを、クラスのみんなに説明するとき



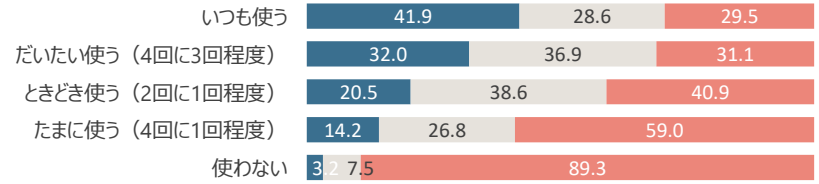
課題の解決に向けて、自分一人で考えたり、情報を集めたりするとき



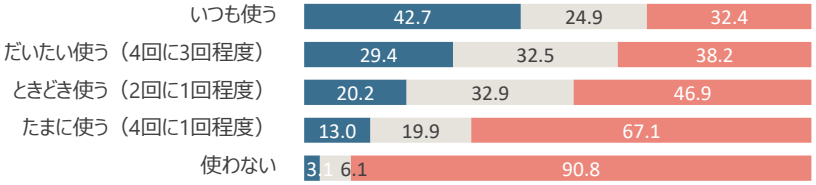
これまでに学習した教科書のページを開いて、学習内容を確かめるとき

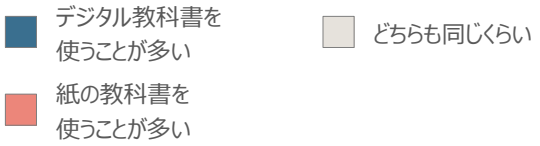


教科書と、教科書以外の資料を同時に使って学習するとき



思ったことや自分の考えを、教科書を使って説明するとき





©2026 ABeam Consulting Ltd.

全教科総計 | 小学校 中高学年児童

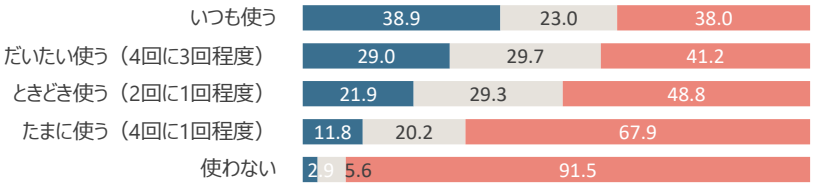
分析③-2 児童生徒のデジタル教科書の使用頻度と、デジタル教科書と紙の教科書の使用感の関係（3/7）

中高学年・中学生Q.14 使用頻度 × 中高学年・中学生Q.4 デジタル教科書と紙の教科書を比べた使用感

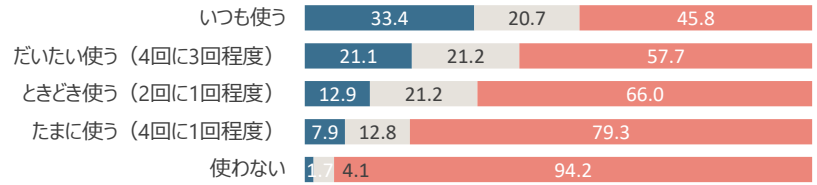
中高学年：n=15,785

中高学年

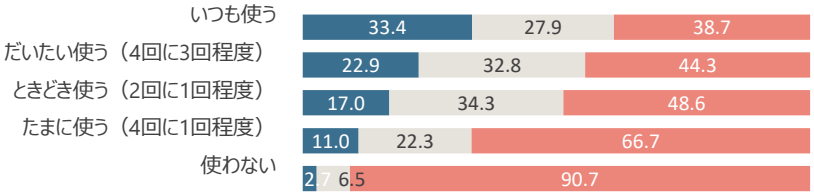
学習したことを残して、別の時間に見たり、思い出したりするとき



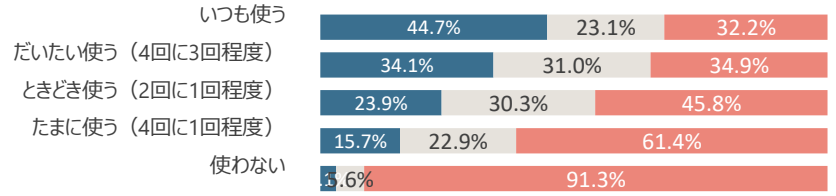
教科書のページをめくって長い文を読むとき

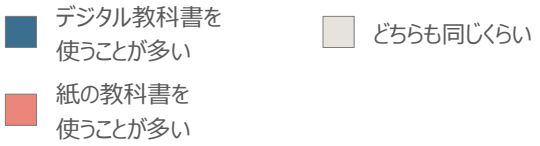


教室以外の、図書館や特別教室などに教科書をもっていき、学習するとき



先生から指示されたページを開いたり、他のページの写真や絵、図や表をさがしたりするとき





©2026 ABeam Consulting Ltd.

全教科総計 | 中学生

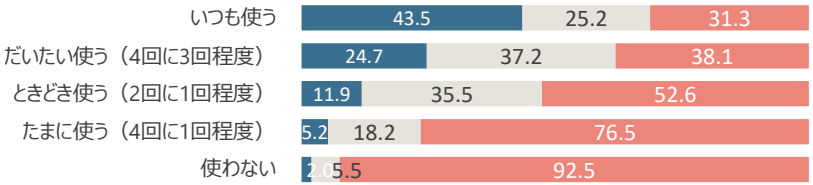
分析③-2 児童生徒のデジタル教科書の使用頻度と、デジタル教科書と紙の教科書の使用感の関係（4/7）

中高学年・中学生Q.14 使用頻度 × 中高学年・中学生Q.4 デジタル教科書と紙の教科書を比べた使用感

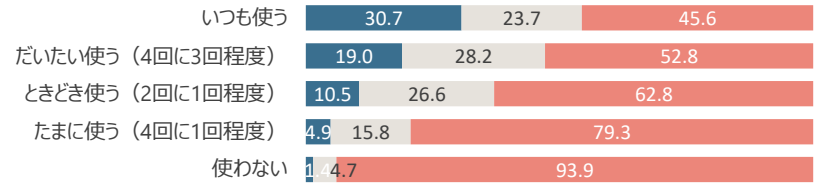
中学生：n= 26,439

中学生

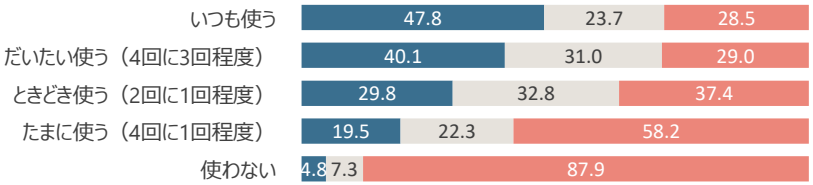
教科書を見ながら、先生や友達の話を聞くとき



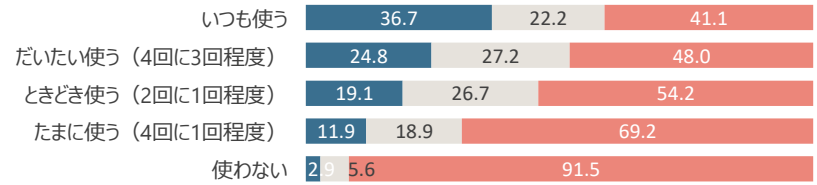
文字や文章を声に出して読んだり、一人でじっくり読んだりするとき



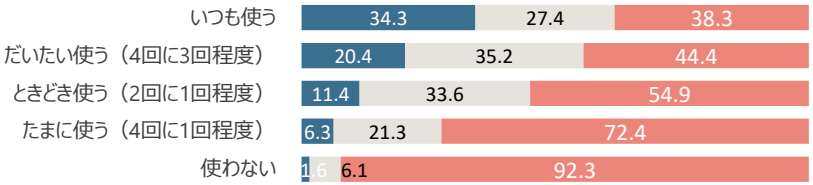
図や写真、表やグラフをくわしく見て、自分なりの気づきや考えをもつとき

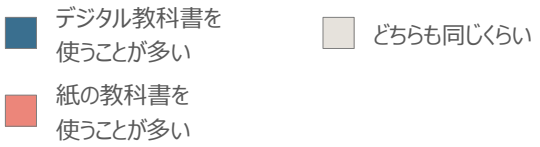


文字や文章に線を引いたり、図や写真、表やグラフの中に印をつけたりするなど、教科書に書き込んだり、書き込んだものを消したりするとき



友達同士で教え合うとき





©2026 ABeam Consulting Ltd.

全教科総計 | 中学生

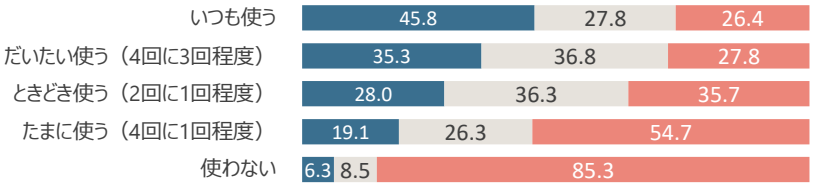
分析③-2 児童生徒のデジタル教科書の使用頻度と、デジタル教科書と紙の教科書の使用感の関係（5/7）

中高学年・中学生Q.14 使用頻度 × 中高学年・中学生Q.4 デジタル教科書と紙の教科書を比べた使用感

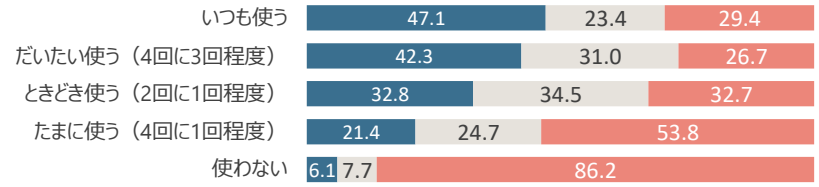
中学生：n= 26,439

中学生

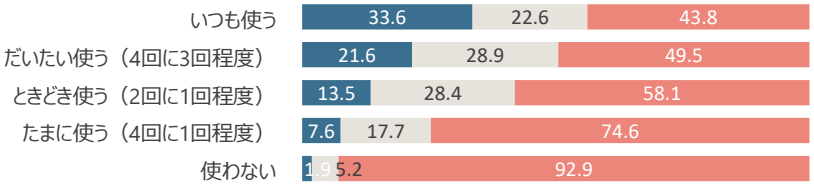
自分の考えを、クラスのみんなに説明するとき



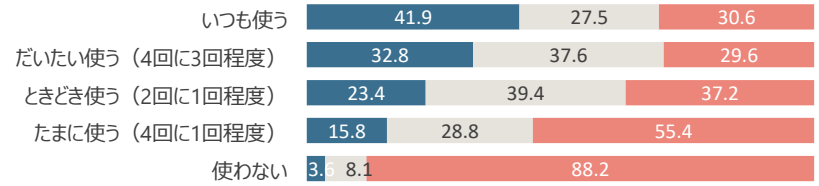
課題の解決に向けて、自分一人で考えたり、情報を集めたりするとき



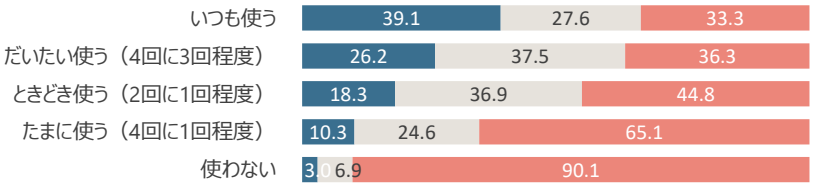
これまでに学習した教科書のページを開いて、学習内容を確かめるとき

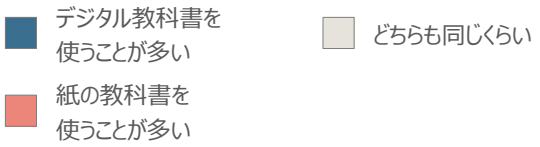


教科書と、教科書以外の資料を同時に使って学習するとき



思ったことや自分の考えを、教科書を使って説明するとき





©2026 ABeam Consulting Ltd.

全教科総計 | 中学生

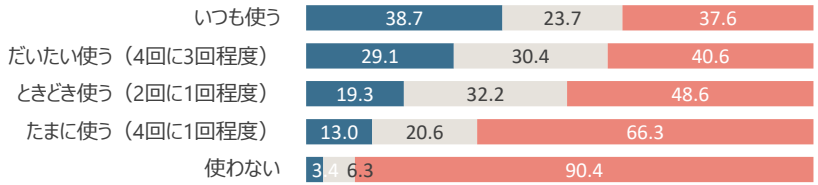
分析③-2 児童生徒のデジタル教科書の使用頻度と、デジタル教科書と紙の教科書の使用感の関係（6/7）

中高学年・中学生Q.14 使用頻度 × 中高学年・中学生Q.4 デジタル教科書と紙の教科書を比べた使用感

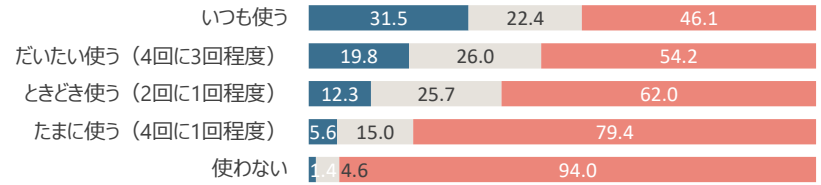
中学生：n= 26,439

中学生

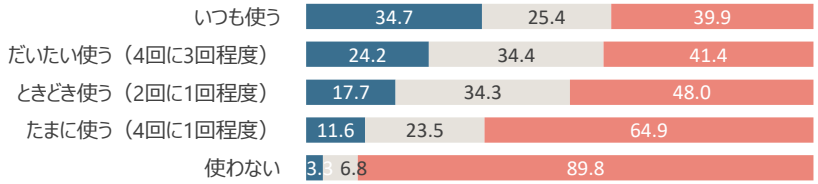
学習したことを残して、別の時間に見たり、思い出したりするとき



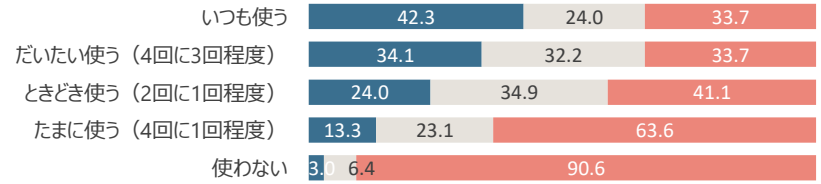
教科書のページをめくって長い文を読むとき



教室以外の、図書館や特別教室などに教科書をもっていき、学習するとき



先生から指示されたページを開いたり、他のページの写真や絵、図や表をさがしたりするとき



©2026 ABeam Consulting Ltd.

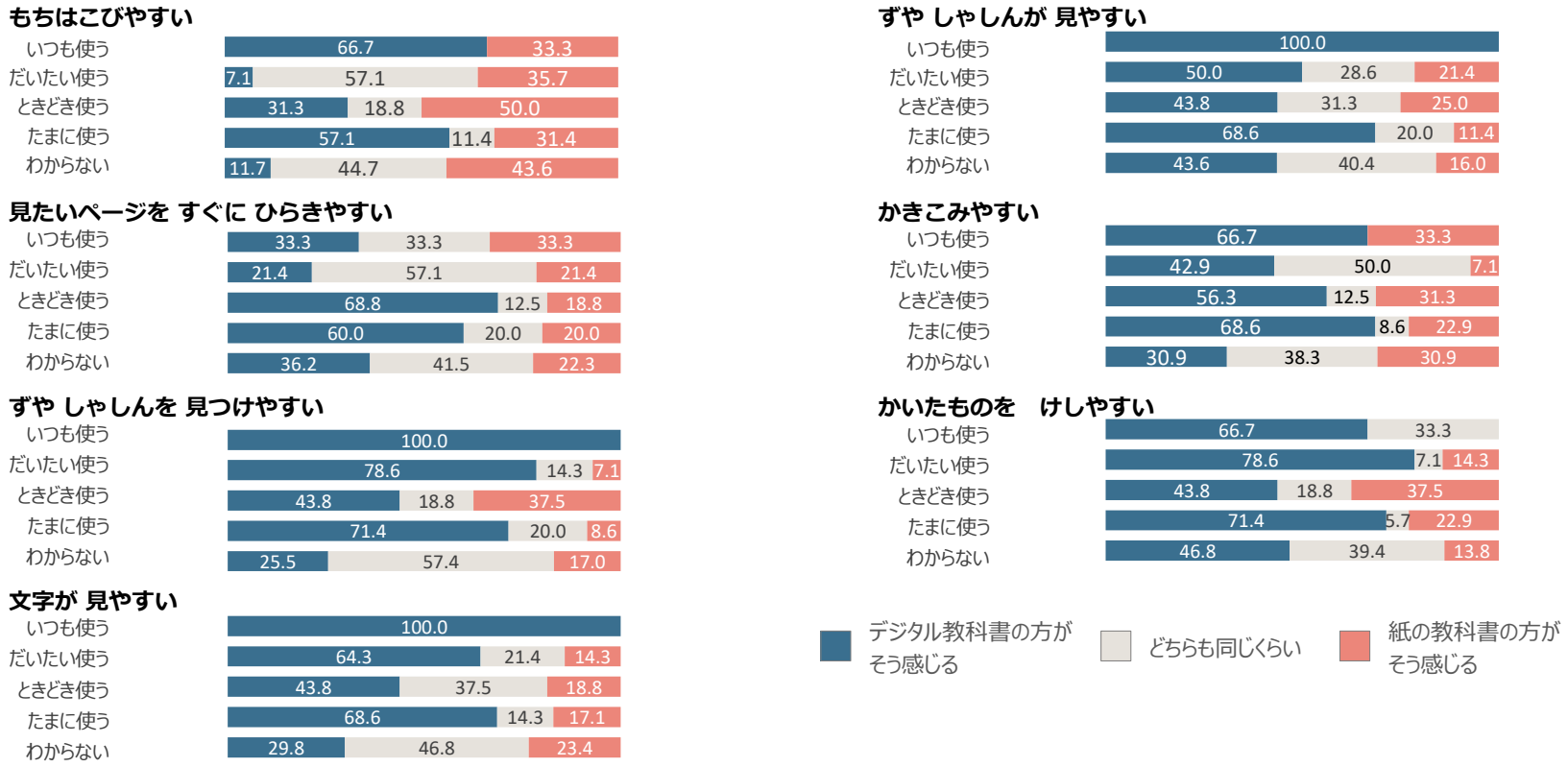
全教科総計 | 小学校 低学年児童

分析③-2 児童生徒のデジタル教科書の使用頻度と、デジタル教科書と紙の教科書の使用感の関係（7/7）

低学年Q.5 使用頻度 × 低学年Q.4 デジタル教科書と紙の教科書を比べた使用感

低学年：n= 162

低学年◆



©2026 ABeam Consulting Ltd.

全教科総計 | 児童生徒全員

分析④-1 児童生徒のデジタル教科書の使用頻度と「内容理解」の関連（1/3）

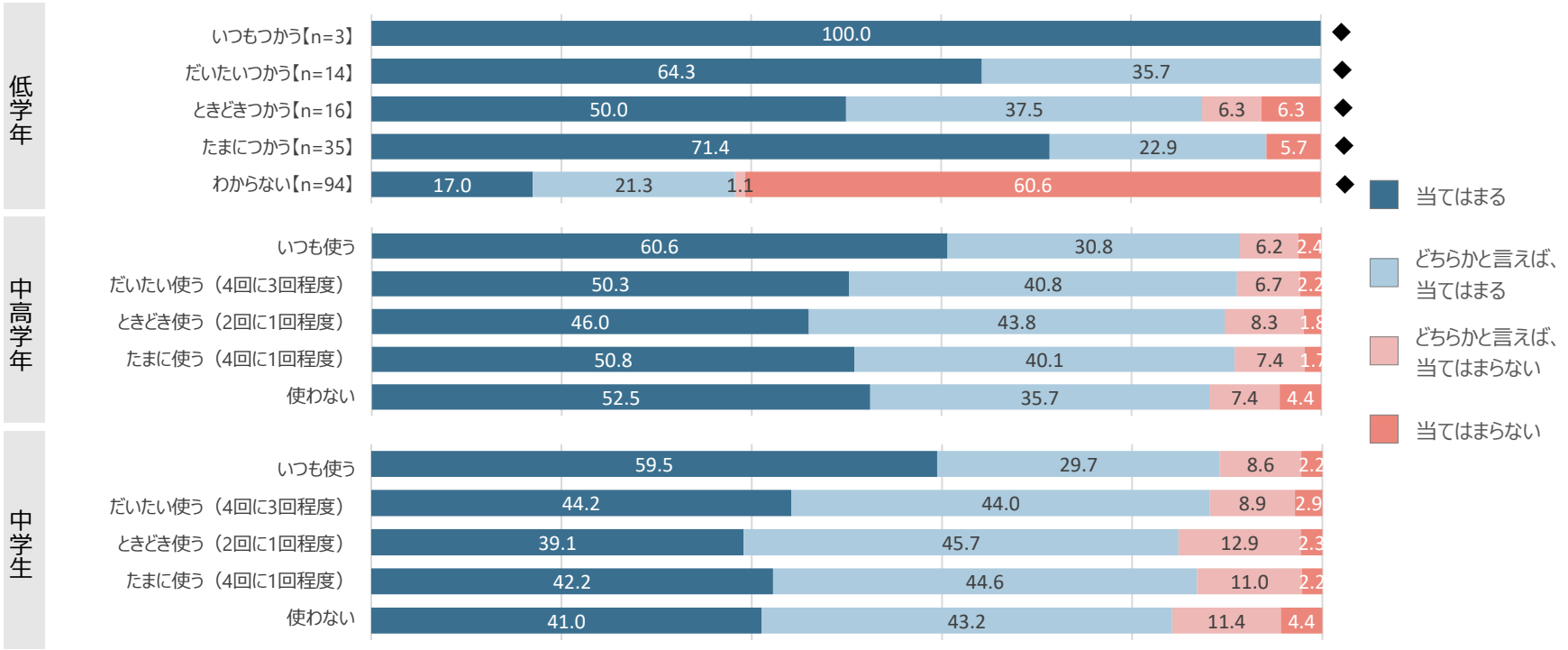
低学年Q.5 授業での使用頻度 × 低学年Q.8 内容理解（※1）
中高学年・中学生Q.14 授業での使用頻度 × 中高学年・中学生Q.6 内容理解（※1）

低学年：n=162　中高学年：n=15,785
中学生：n=26,439

傾向/示唆

- 小学校中高学年、中学生いずれについても、デジタル教科書を「いつも使う」グループは、他のグループに比べて、**授業内容の理解について「当てはまる」と回答した割合が最も高い。**（「どちらかと言えば、当てはまる」まで含めると、グループ間で顕著な差は見られない点に留意。）
- デジタル教科書を「いつも使う」グループは、「使わない」グループと比べて、「当てはまる」と回答した割合が中高学年では約8ポイント、中学生では約18ポイント高くなっている。
※**小学校低学年児童はサンプル数が97未満であり、標本誤差が大きい（10%超）ため、参考値としてのみ掲載。**中高学年・中学生の各選択肢のサンプル数はp.109を参照。（以降、同じ）

デジタル教科書の使用頻度と、「授業の内容がよく分かっているか」を回答した割合の関係



©2026 ABeam Consulting Ltd.

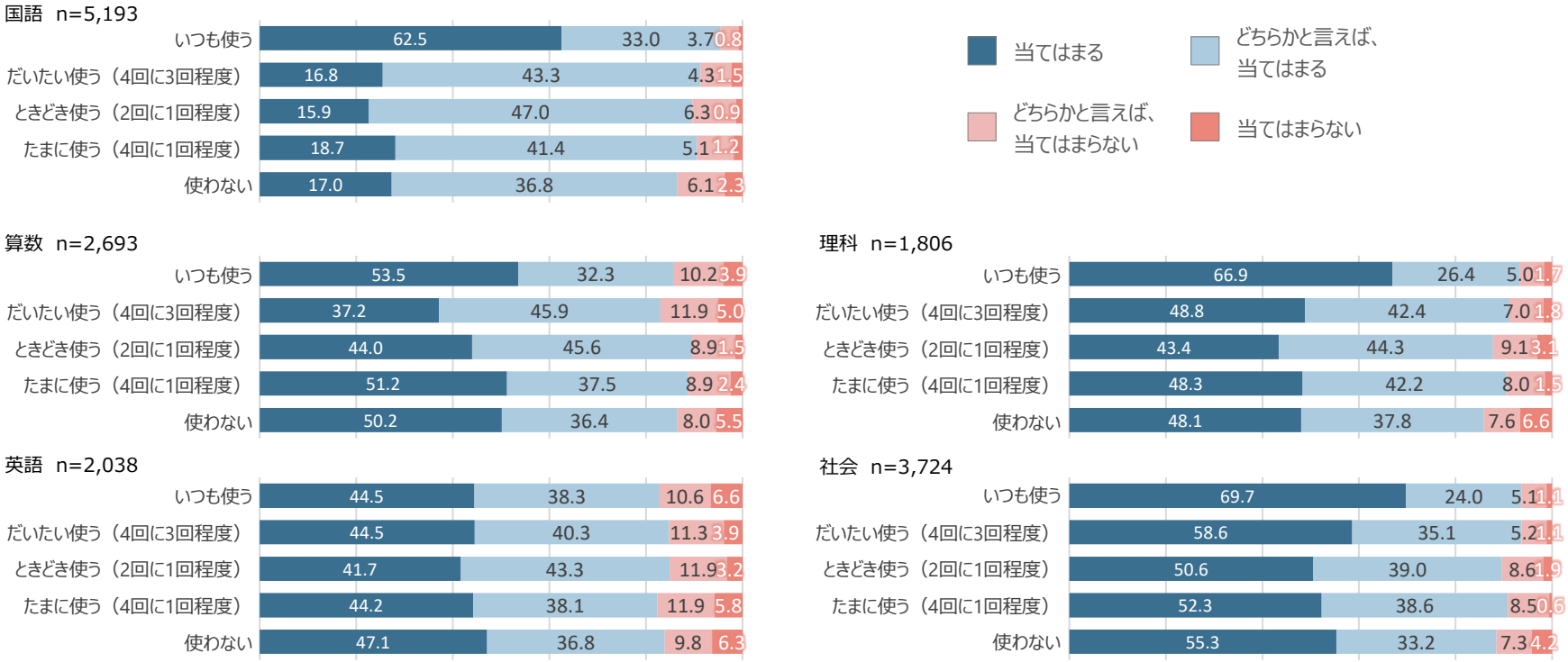
主要5教科別 | 小学校 中高学年児童

分析④-1 児童生徒のデジタル教科書の使用頻度と「内容理解」の関連（2/3）

中高学年Q.14 授業での使用頻度 × 中高学年Q.6 内容理解

傾向/示唆

- 小学校中高学年の教科別では、ほとんどの教科で、デジタル教科書を「いつも使う」グループが、内容理解で「当てはまる」と回答した割合が最も高い。
  特に理科はその傾向が顕著であり、「使わない」グループと比べて「いつも使う」グループでは、「当てはまる」と回答した割合が約19ポイント高くなっている。



©2026 ABeam Consulting Ltd.

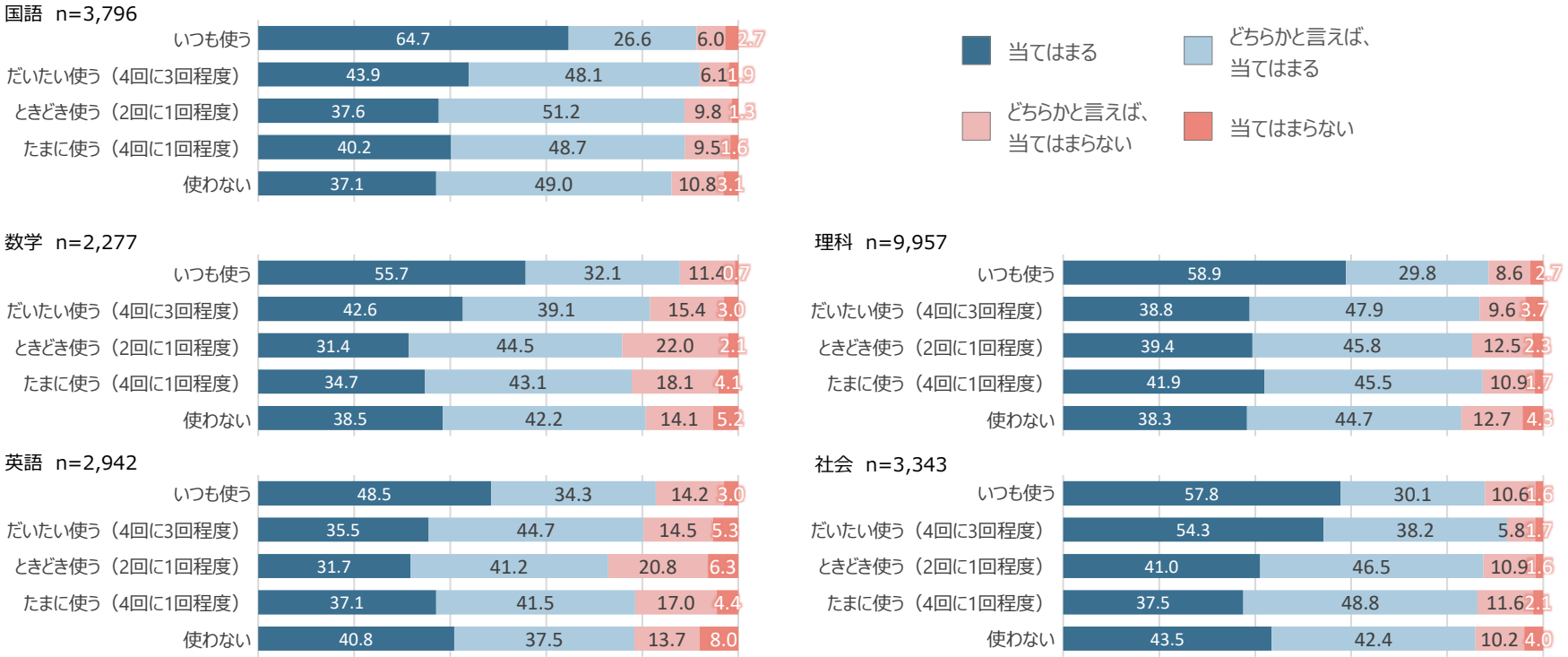
主要5教科別 | 中学生

分析④-1 児童生徒のデジタル教科書の使用頻度と「内容理解」の関連（3/3）

中学生Q.14 授業での使用頻度 × 中学生Q.6 内容理解

傾向/示唆

- 中学生の教科別では、全教科で、デジタル教科書を「いつも使う」グループが、内容理解で「当てはまる」と回答した割合が最も高い。
  特に国語はその傾向が顕著であり、「使わない」グループと比べて「いつも使う」グループでは、「当てはまる」と回答した割合が約28ポイント高くなっている。



©2026 ABeam Consulting Ltd.

全教科総計　児童生徒全員

分析④-2 児童生徒のデジタル教科書の使用頻度と「主体的な学び」の関連（1/3）

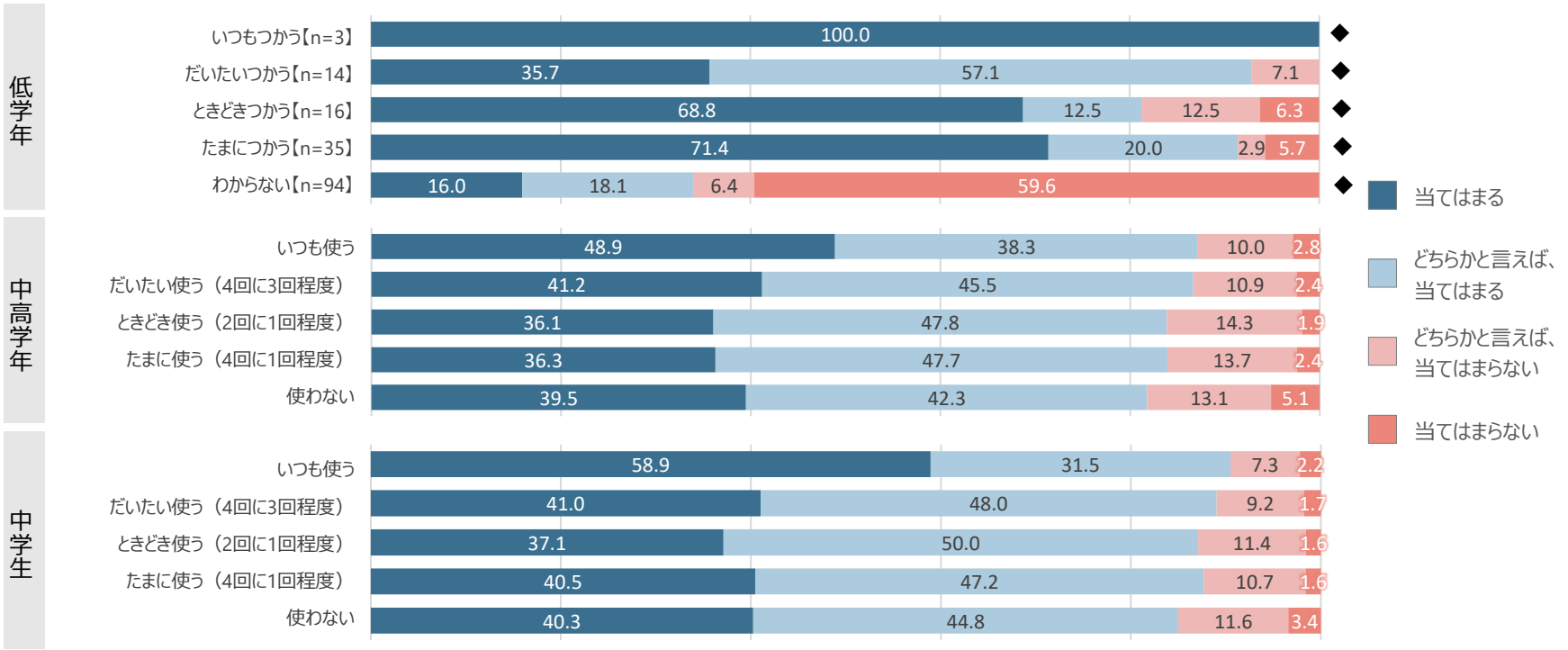
低学年Q.5 授業での使用頻度 × 低学年Q.8 主体的な学び
中高学年・中学生Q.14 授業での使用頻度 × 中高学年・中学生Q.7 主体的な学び

低学年：n=162　中高学年：n=15,785
中学生：n=26,439

傾向/示唆

- 小学校中高学年、中学生いずれについても、デジタル教科書を「いつも使う」グループは、他のグループに比べて、**主体的な学びについて「当てはまる」と回答した割合が最も高い。**（「どちらかと言えば、当てはまる」まで含めると、グループ間で顕著な差は見られない点に留意。）
- デジタル教科書を「いつも使う」グループは、「使わない」グループと比べて、「当てはまる」と回答した割合が中高学年では約9ポイント、中学生では約19ポイント高くなっている。

デジタル教科書の使用頻度と、授業において「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいるか」を回答した割合の関係



©2026 ABeam Consulting Ltd.

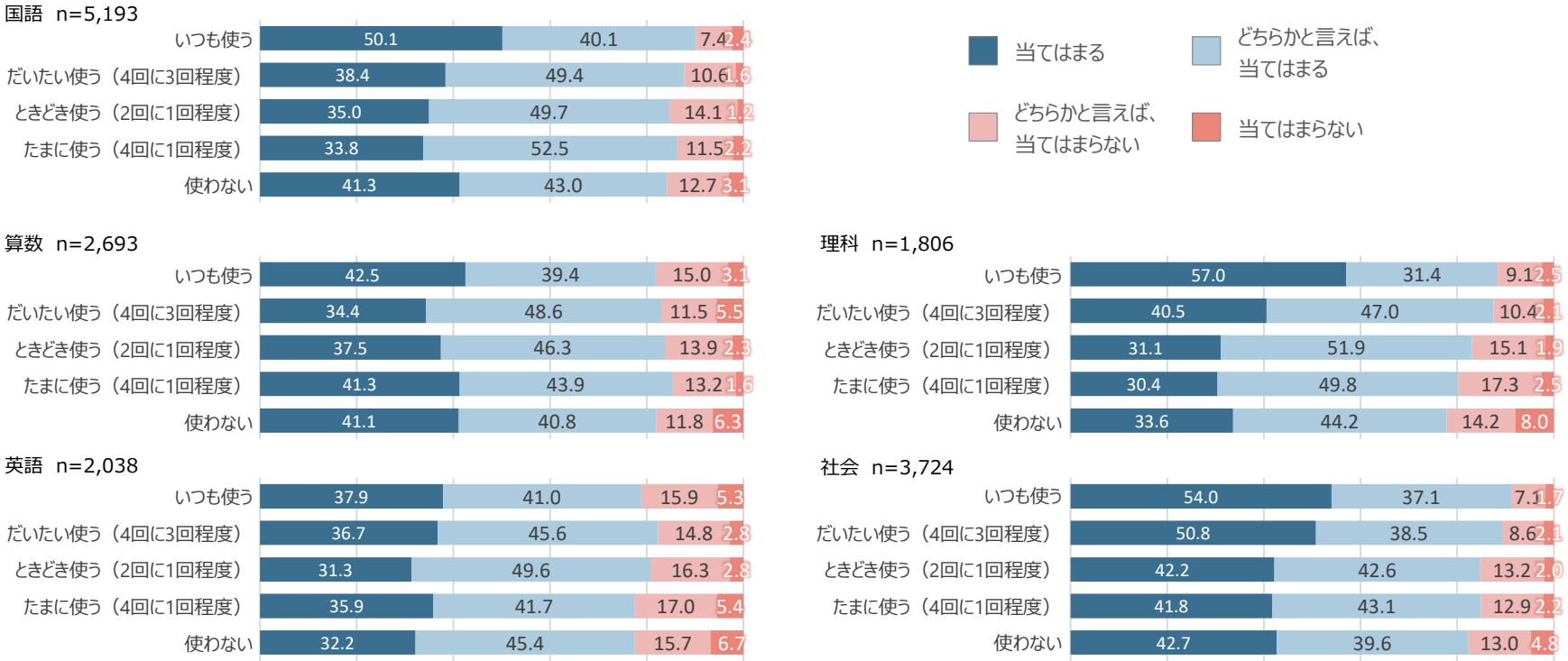
主要5教科別 | 小学校 中高学年児童

分析④-2 児童生徒のデジタル教科書の使用頻度と「主体的な学び」の関連（2/3）

中高学年Q.14 授業での使用頻度 × 中高学年Q.7 主体的な学び

傾向/示唆

- 小学校中高学年の教科別では、全教科で、デジタル教科書を「いつも使う」グループが、主体的な学びで「当てはまる」と回答した割合が最も高い。
  特に理科はその傾向が顕著であり、「使わない」グループと比べて「いつも使う」グループでは、「当てはまる」と回答した割合が約23ポイント高くなっている。



©2026 ABeam Consulting Ltd.

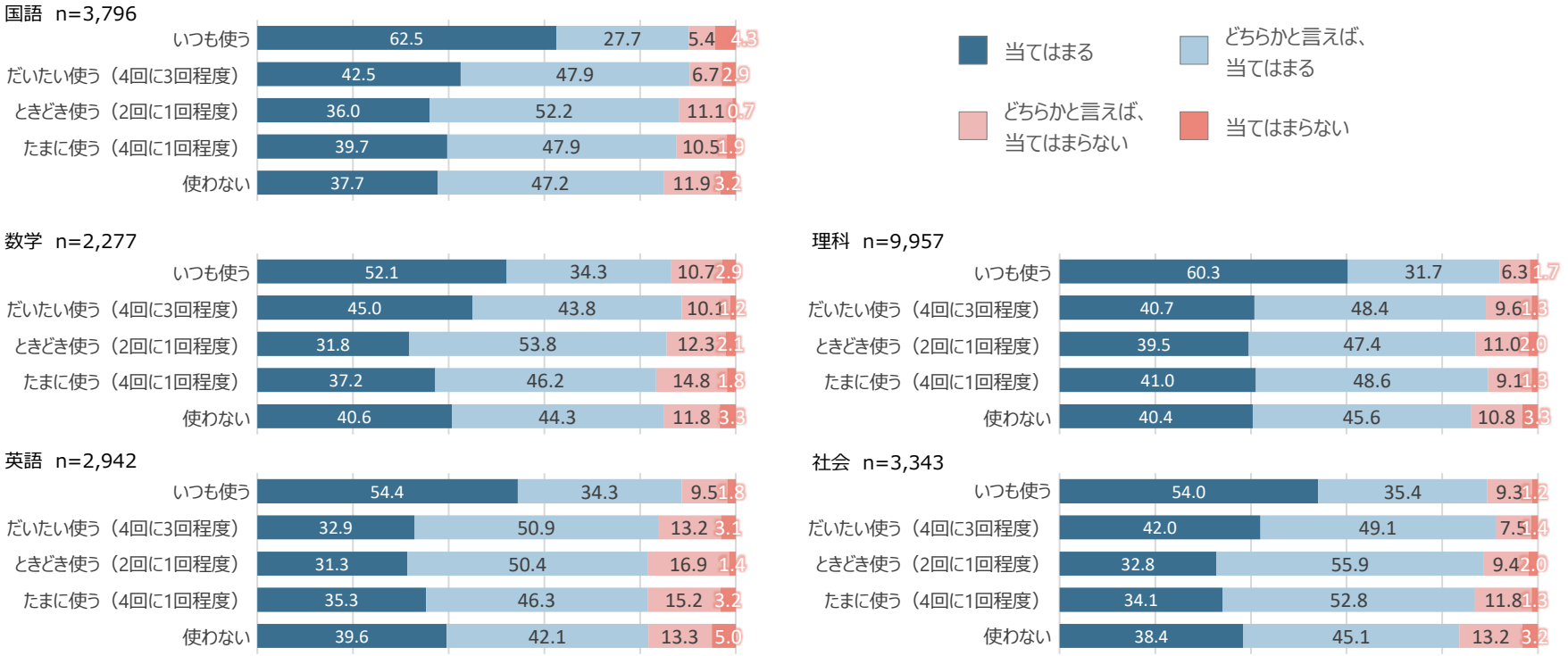
主要5教科別 | 中学生

分析④-2 児童生徒のデジタル教科書の使用頻度と「主体的な学び」の関連（3/3）

中学生Q.14 授業での使用頻度 × 中学生Q.7 主体的な学び

傾向/示唆

- 中学生の教科別では、全教科で、デジタル教科書を「いつも使う」グループが、主体的な学びで「当てはまる」と回答した割合が最も高い。特に国語はその傾向が顕著であり、「使わない」グループと比べて「いつも使う」グループでは、「当てはまる」と回答した割合が約25ポイント高くなっている。



©2026 ABeam Consulting Ltd.

全教科総計 | 中高学年児童・中学校生徒

分析④-3 児童生徒の個別学習の場面におけるデジタル教科書の使用頻度と「主体的な学び」の関連（1/3）

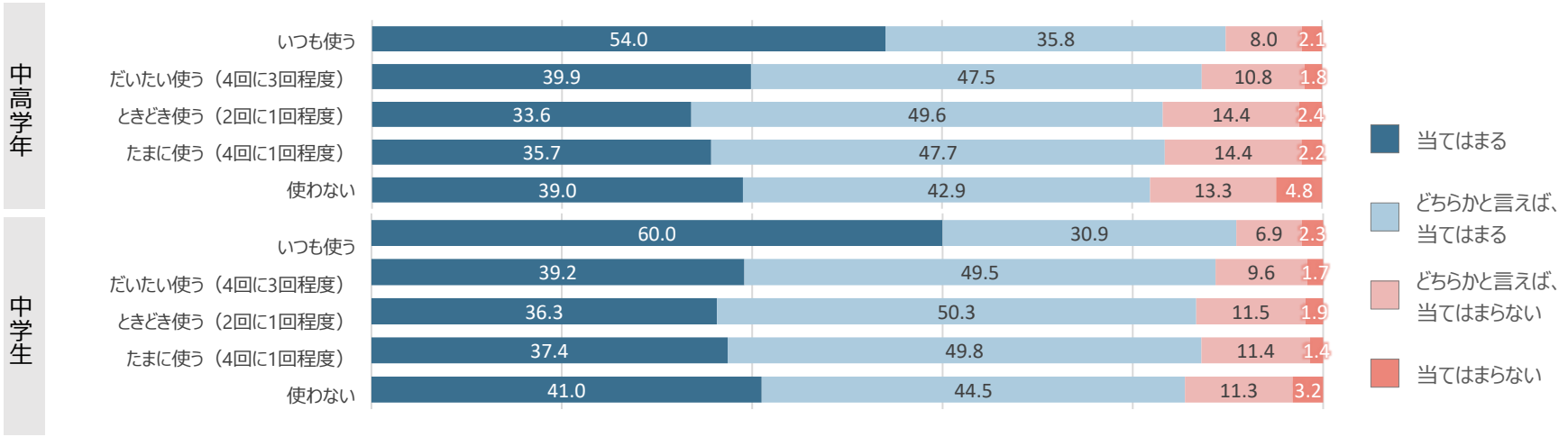
中高学年・中学生Q.15 個別学習の場面での使用頻度 × 中高学年・中学生Q.7 主体的な学び

中高学年：n=15,785　中学生：n=26,439

傾向/示唆

- 小学校中高学年、中学生いずれについても、デジタル教科書を個別学習の場面で「いつも使う」グループは、他のグループに比べて、主体的な学びについて「当てはまる」と回答した割合が最も高い。（「どちらかと言えば、当てはまる」まで含めると、グループ間で顕著な差は見られない点に留意。）
- デジタル教科書を「いつも使う」グループは、「使わない」グループと比べて、「当てはまる」と回答した割合が中高学年では約15ポイント、中学生では約19ポイント高くなっている。

個別学習の場面におけるデジタル教科書の使用頻度と、授業において「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいるか」を回答した割合の関係



©2026 ABeam Consulting Ltd.

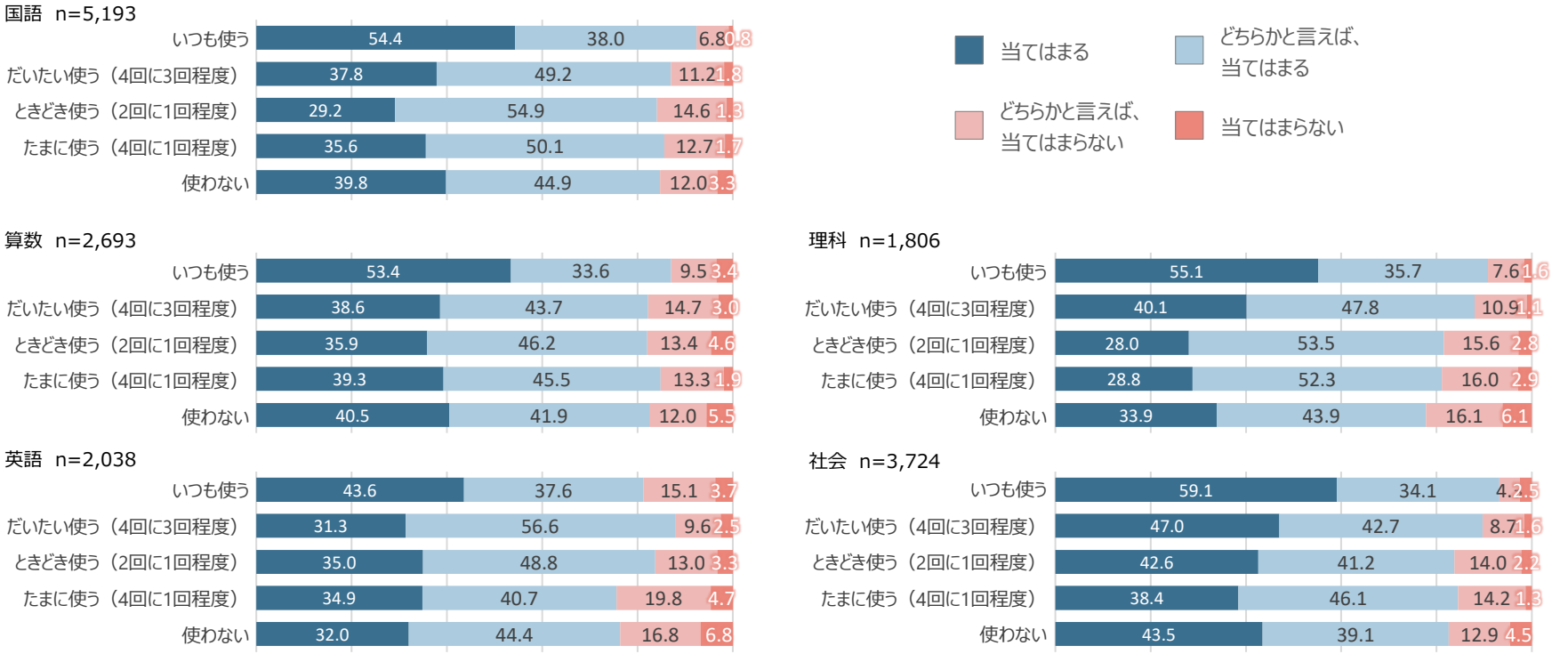
主要5教科別 | 小学校 中高学年児童

分析④-3 児童生徒の個別学習の場面におけるデジタル教科書の使用頻度と「主体的な学び」の関連（2/3）

中高学年Q.15 個別学習の場面での使用頻度 × 中高学年Q.7 主体的な学び

傾向/示唆

- 小学校中高学年の教科別では、全教科で、個別学習の場面でデジタル教科書を「いつも使う」グループが、主体的な学びで「当てはまる」と回答した割合が最も高い。
  特に理科はその傾向が顕著であり、「使わない」グループと比べて「いつも使う」グループでは、「当てはまる」と回答した割合が約22ポイント高くなっている。



©2026 ABeam Consulting Ltd.

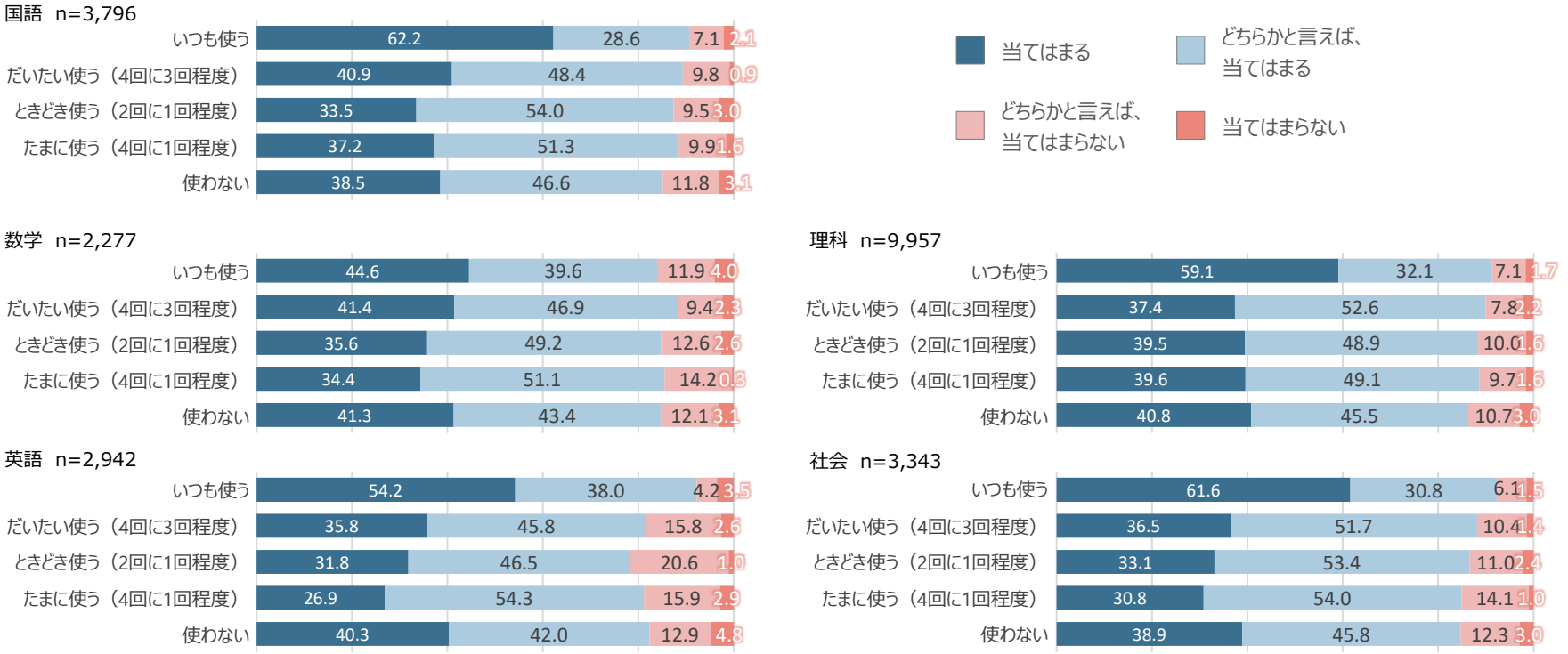
主要5教科別 | 中学生

分析④-3 児童生徒の個別学習の場面におけるデジタル教科書の使用頻度と「主体的な学び」の関連（3/3）

中学生Q.15 個別学習の場面での使用頻度 × 中学生Q.7 主体的な学び

傾向/示唆

- 中学生の教科別では、全教科で、個別学習の場面でデジタル教科書を「いつも使う」グループが、主体的な学びで「当てはまる」と回答した割合が最も高い。
  特に国語はその傾向が顕著であり、「使わない」グループと比べて「いつも使う」グループでは、「当てはまる」と回答した割合が約24ポイント高くなっている。



©2026 ABeam Consulting Ltd.

全教科総計　児童生徒全員

分析④-4 児童生徒のデジタル教科書の使用頻度と「協働的な学び」の関連（1/3）

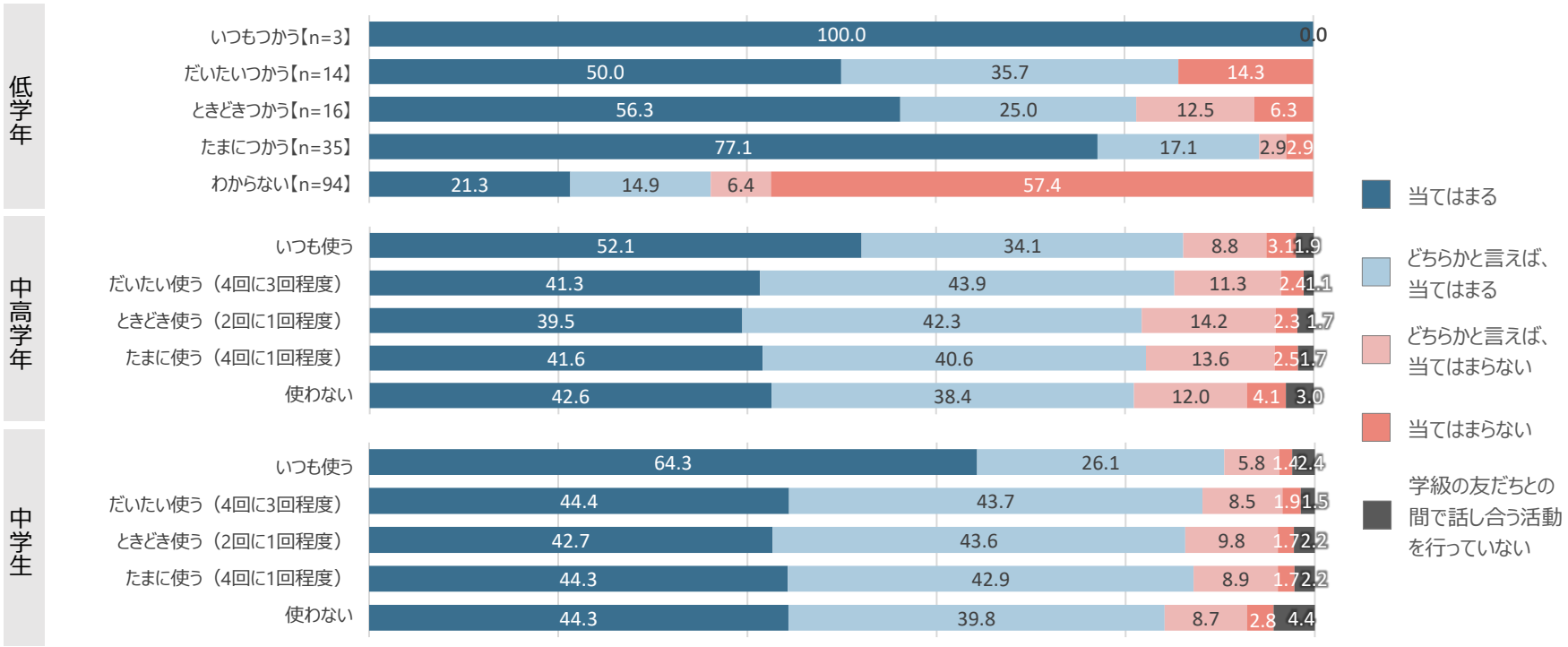
低学年Q.5 授業での使用頻度 × 低学年Q.8 協働的な学び
中高学年・中学生Q.14 授業での使用頻度 × 中高学年・中学生Q.8 協働的な学び

低学年：n=162　中高学年：n=15,785
中学生：n=26,439

傾向/示唆

- 小学校中高学年、中学生いずれについても、デジタル教科書を「いつも使う」グループは、他のグループに比べて、**協働的な学びについて「当てはまる」と回答した割合が最も高い。**（「どちらかと言えば、当てはまる」まで含めると、グループ間で顕著な差は見られない点に留意。）
- デジタル教科書を「いつも使う」グループは、「使わない」グループと比べて、「当てはまる」と回答した割合が中高学年では約9ポイント、中学生では約20ポイント高くなっている。

デジタル教科書の使用頻度と、授業において「学級の友だちとの間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができているか」を回答した割合の関係



©2026 ABeam Consulting Ltd.

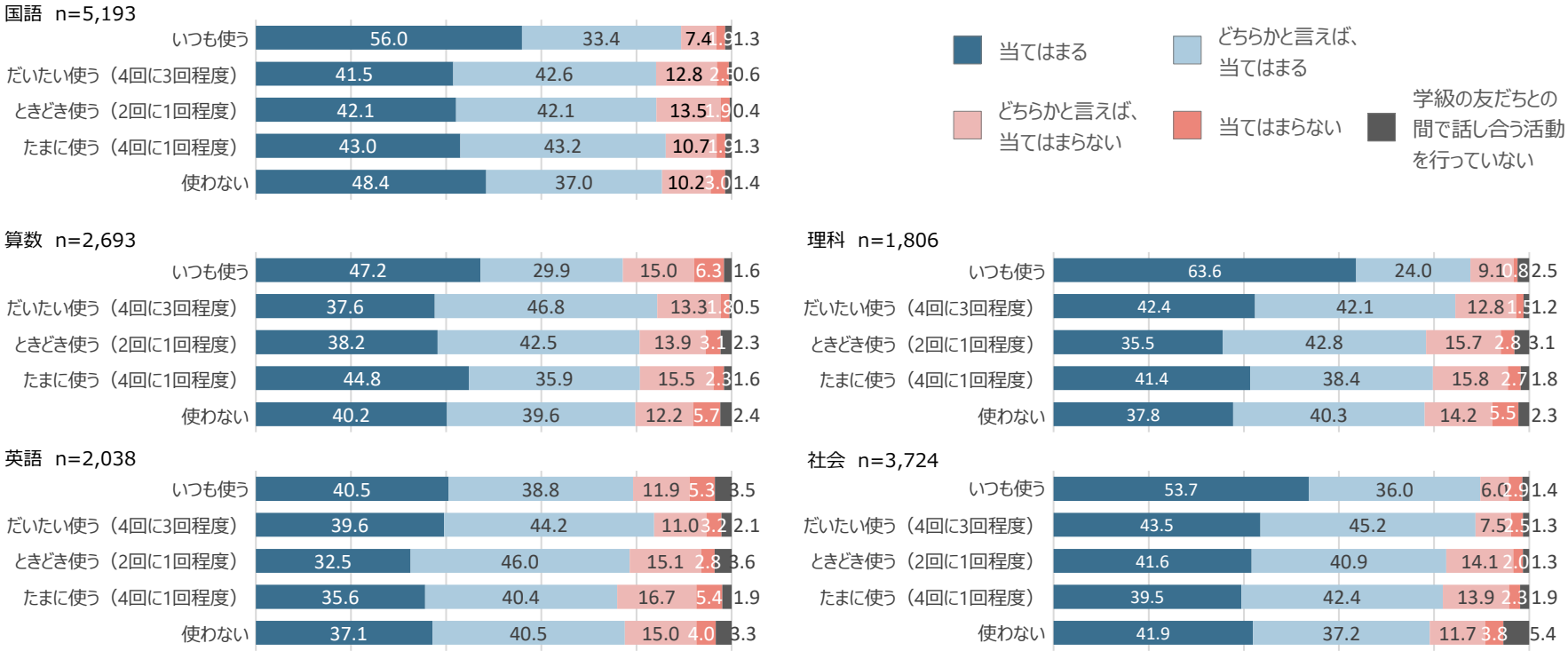
主要5教科別 | 小学校 中高学年児童

分析④-4 児童生徒のデジタル教科書の使用頻度と「協働的な学び」の関連（2/3）

中高学年Q.14 授業での使用頻度 × 中高学年Q.8 協働的な学び

傾向/示唆

- 小学校中高学年の教科別では、全教科で、デジタル教科書を「いつも使う」グループが、協働的な学びで「当てはまる」と回答した割合が最も高い。
  特に理科はその傾向が顕著であり、「使わない」グループと比べて「いつも使う」グループでは、「当てはまる」と回答した割合が約26ポイント高くなっている。



©2026 ABeam Consulting Ltd.

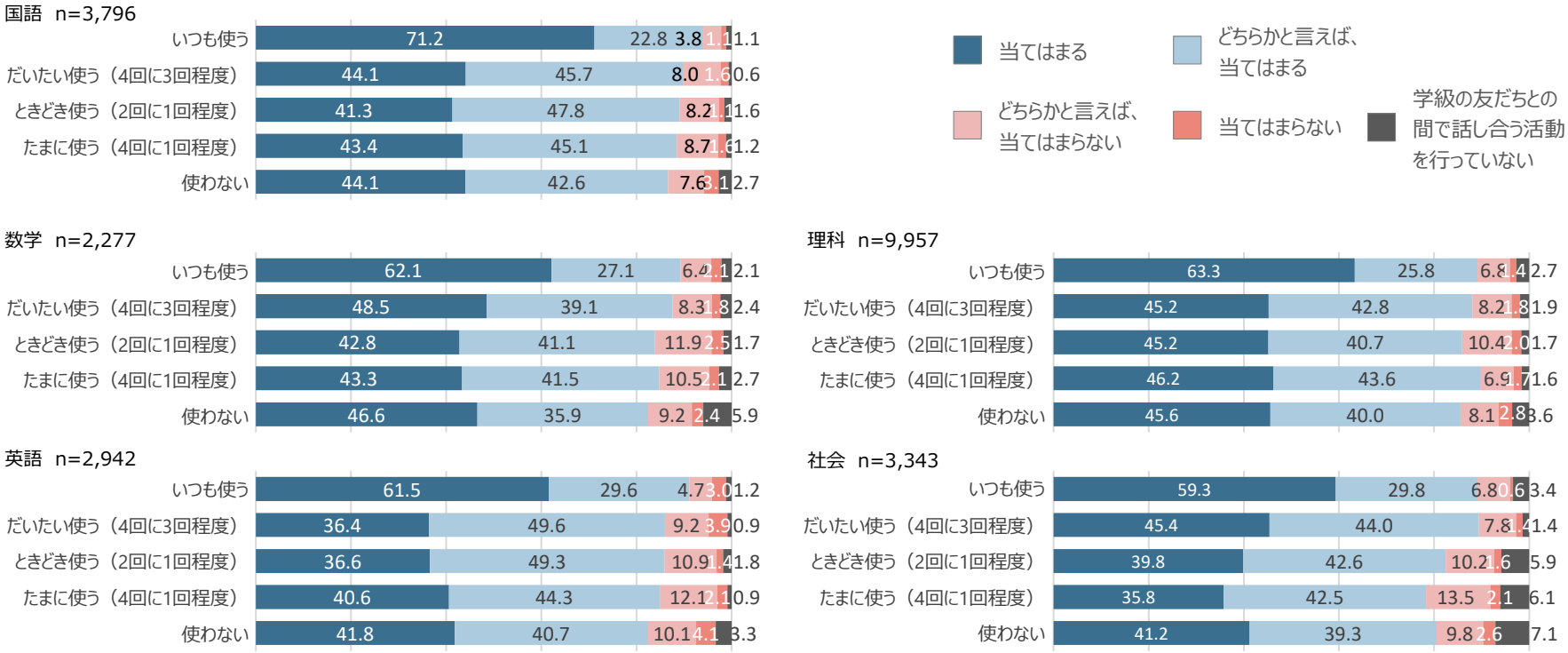
主要5教科別 | 中学生

分析④-4 児童生徒のデジタル教科書の使用頻度と「協働的な学び」の関連（3/3）

中学生Q.14 授業での使用頻度 × 中学生Q.8 協働的な学び

傾向/示唆

- 中学生の教科別では、全教科で、デジタル教科書を「いつも使う」グループが、協働的な学びで「当てはまる」と回答した割合が最も高い。特に国語はその傾向が顕著であり、「使わない」グループと比べて「いつも使う」グループでは、「当てはまる」と回答した割合が約27ポイント高くなっている。



©2026 ABeam Consulting Ltd.

全教科総計 | 中高学年児童・中学校生徒

分析④-5 児童生徒の協働学習の場面におけるデジタル教科書の使用頻度と「協働的な学び」の関連（1/3）

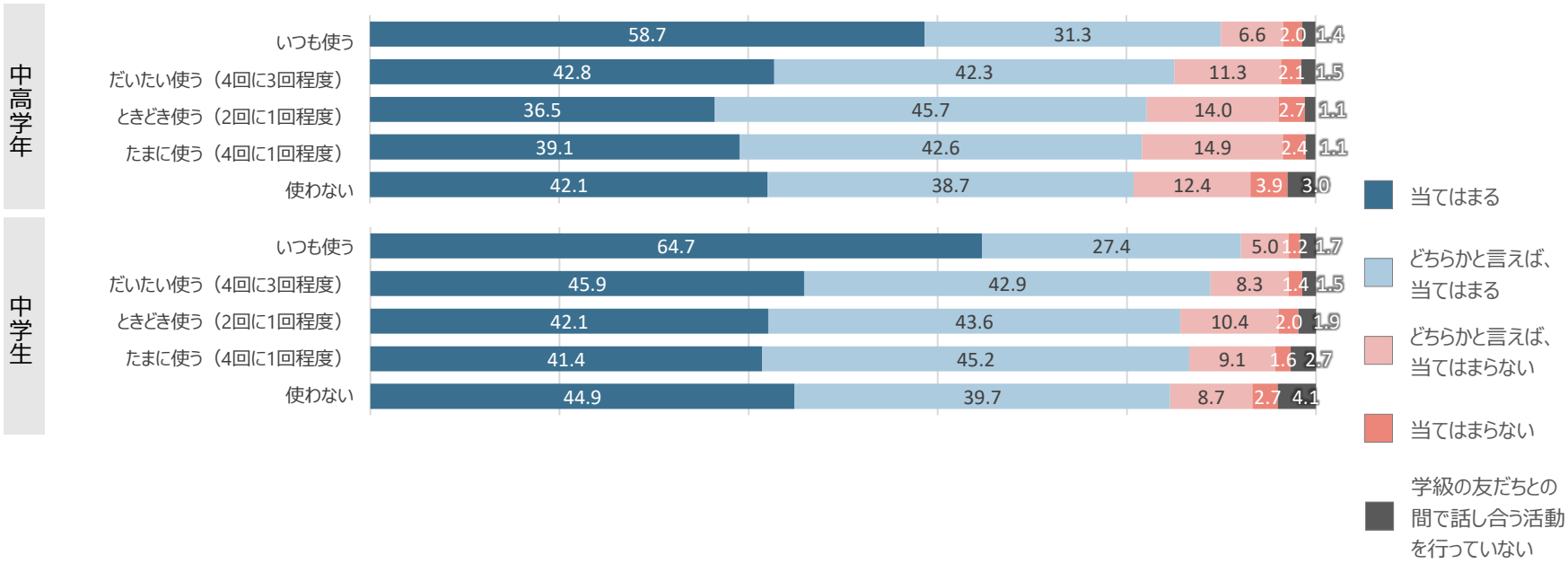
中高学年・中学生Q.15 協働学習の場面での使用頻度 × 中高学年・中学生Q.8 協働的な学び

中高学年：n=15,785　中学生：n=26,439

傾向/示唆

- 小学校中高学年、中学生いずれについても、デジタル教科書を協働学習の場面で「いつも使う」グループは、他のグループに比べて、協働的な学びについて「当てはまる」と回答した割合が最も高い。
- デジタル教科書を「いつも使う」グループは、「使わない」グループと比べて、「当てはまる」と回答した割合が中高学年では約17ポイント、中学生では約20ポイント高くなっている。

協働学習の場面でのデジタル教科書の使用頻度と、授業において「学級の友だちとの間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができているか」を回答した割合の関係



©2026 ABeam Consulting Ltd.

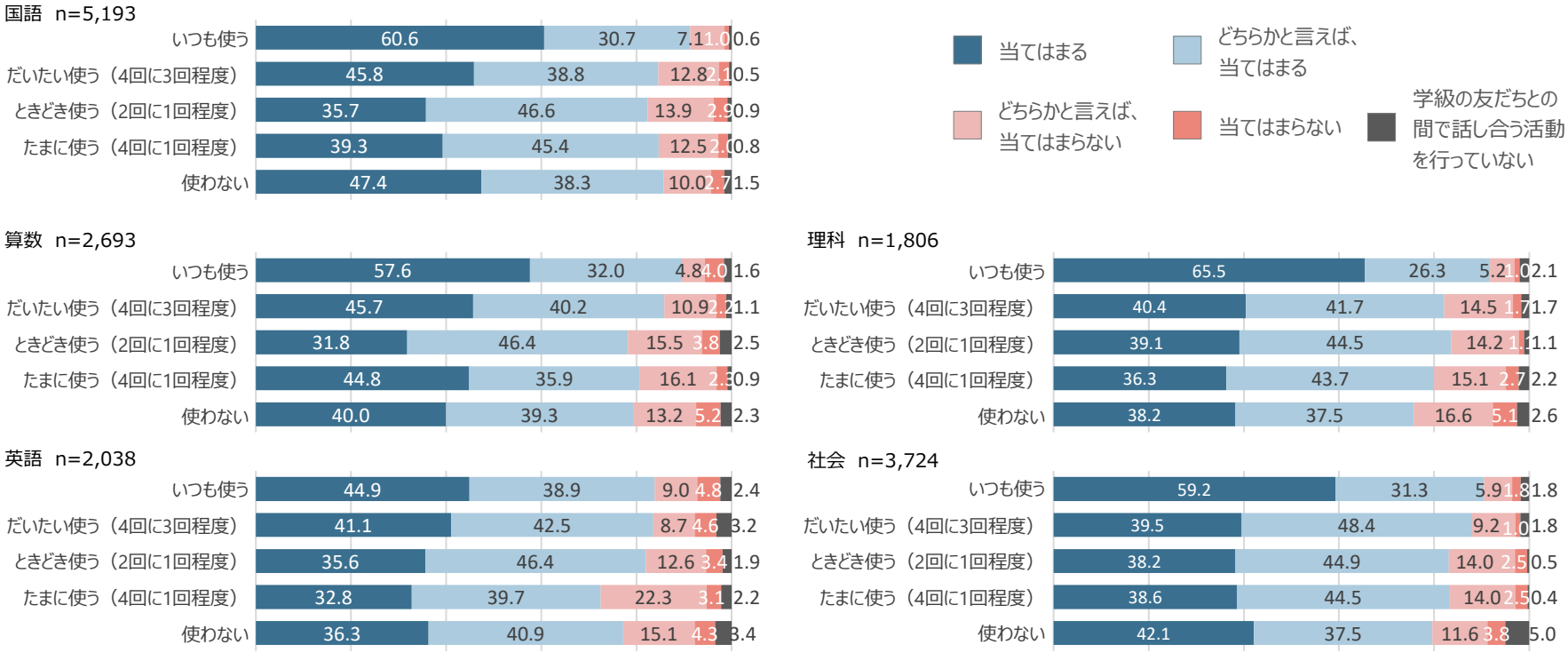
主要5教科別 | 小学校 中高学年児童

分析④-5 児童生徒の協働学習の場面におけるデジタル教科書の使用頻度と「協働的な学び」の関連（2/3）

中高学年Q.15 協働学習の場面での使用頻度 × 中高学年Q.8 協働的な学び

傾向/示唆

- 小学校中高学年の教科別では、全教科で、協働学習の場面でデジタル教科書を「いつも使う」グループが、協働的な学びで「当てはまる」と回答した割合が最も高い。
特に理科はその傾向が顕著であり、「使わない」グループと比べて「いつも使う」グループでは、「当てはまる」と回答した割合が約27ポイント高くなっている。



©2026 ABeam Consulting Ltd.

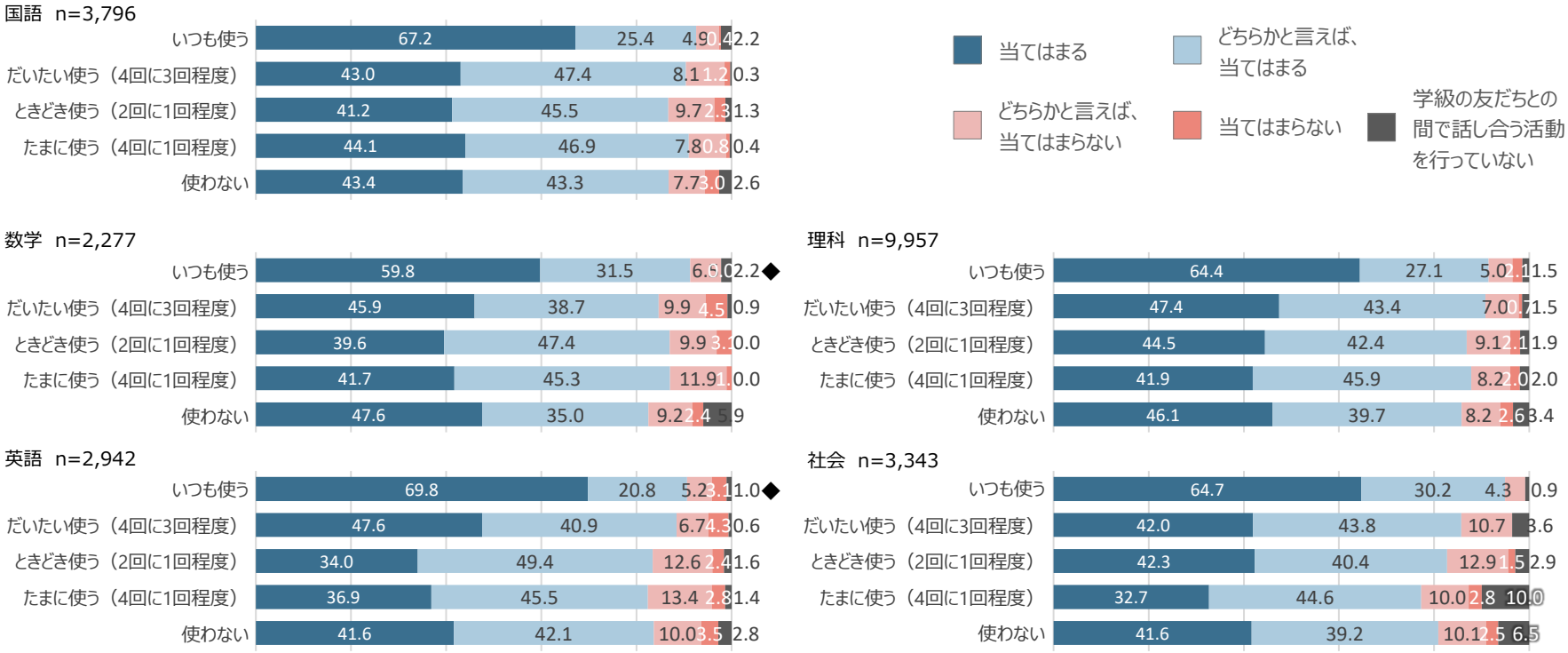
主要5教科別 | 中学生

分析④-5 児童生徒の協働学習の場面におけるデジタル教科書の使用頻度と「協働的な学び」の関連（3/3）

中学生Q.15 協働学習の場面での使用頻度 × 中学生Q.8 協働的な学び

傾向/示唆

- 中学生の教科別では、全教科で、協働学習の場面でデジタル教科書を「いつも使う」グループが、協働的な学びで「当てはまる」と回答した割合が最も高い。



©2026 ABeam Consulting Ltd.

全教科総計　児童生徒全員

分析④-6 児童生徒のデジタル教科書の使用頻度と「探究的な学び」の関連（1/3）

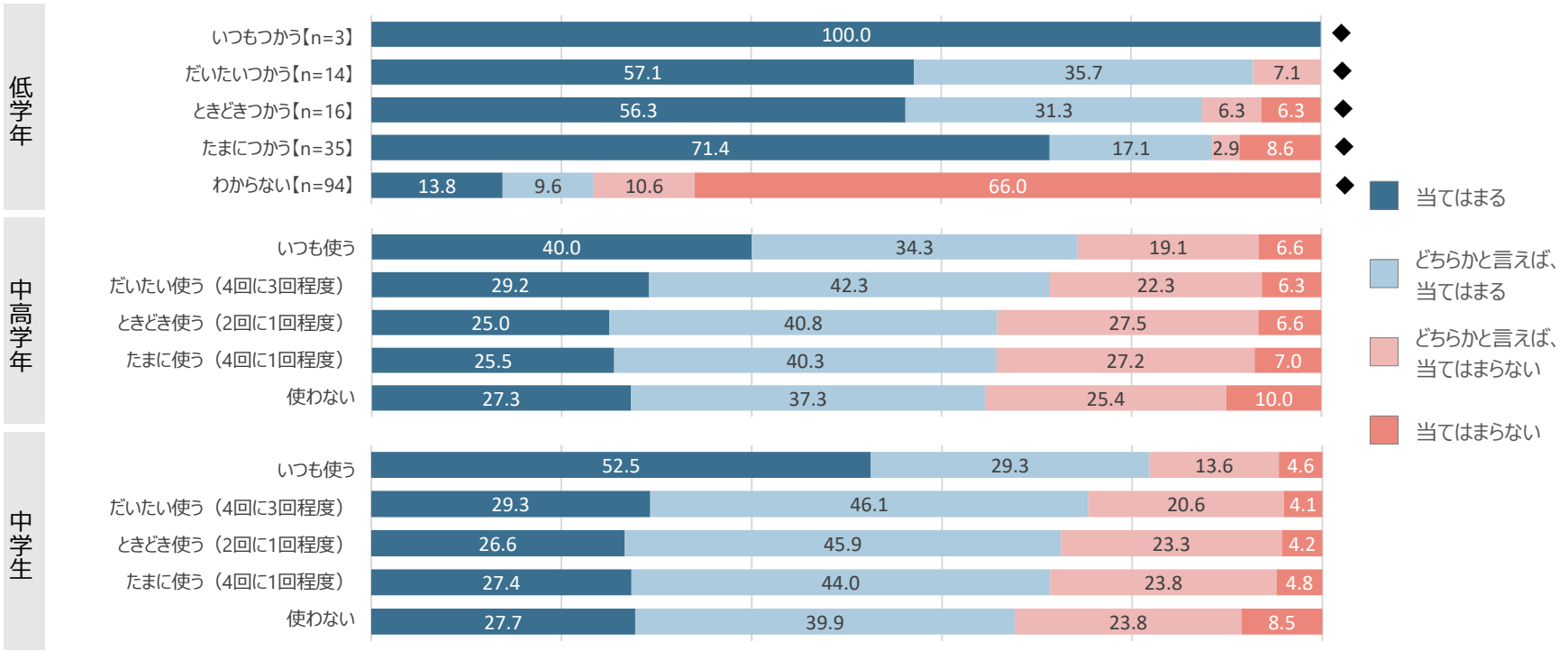
低学年Q.5 授業での使用頻度 × 低学年Q.8 探究的な学び
中高学年・中学生Q.14 授業での使用頻度 × 中高学年・中学生Q.9 探究的な学び

低学年：n=162　中高学年：n=15,785
中学生：n=26,439

傾向/示唆

- 小学校中高学年、中学生いずれについても、デジタル教科書を「いつも使う」グループは、他のグループに比べて、**探究的な学びについて「当てはまる」と回答した割合が最も高い。**
- デジタル教科書を「いつも使う」グループは、「使わない」グループと比べて、「当てはまる」と回答した割合が中高学年では約13ポイント、中学生では約25ポイント高くなっている。

デジタル教科書の使用頻度と、授業において「自分で課題を立てて、考えをまとめる活動を行い、工夫して発表できているか」を回答した割合の関係



©2026 ABeam Consulting Ltd.

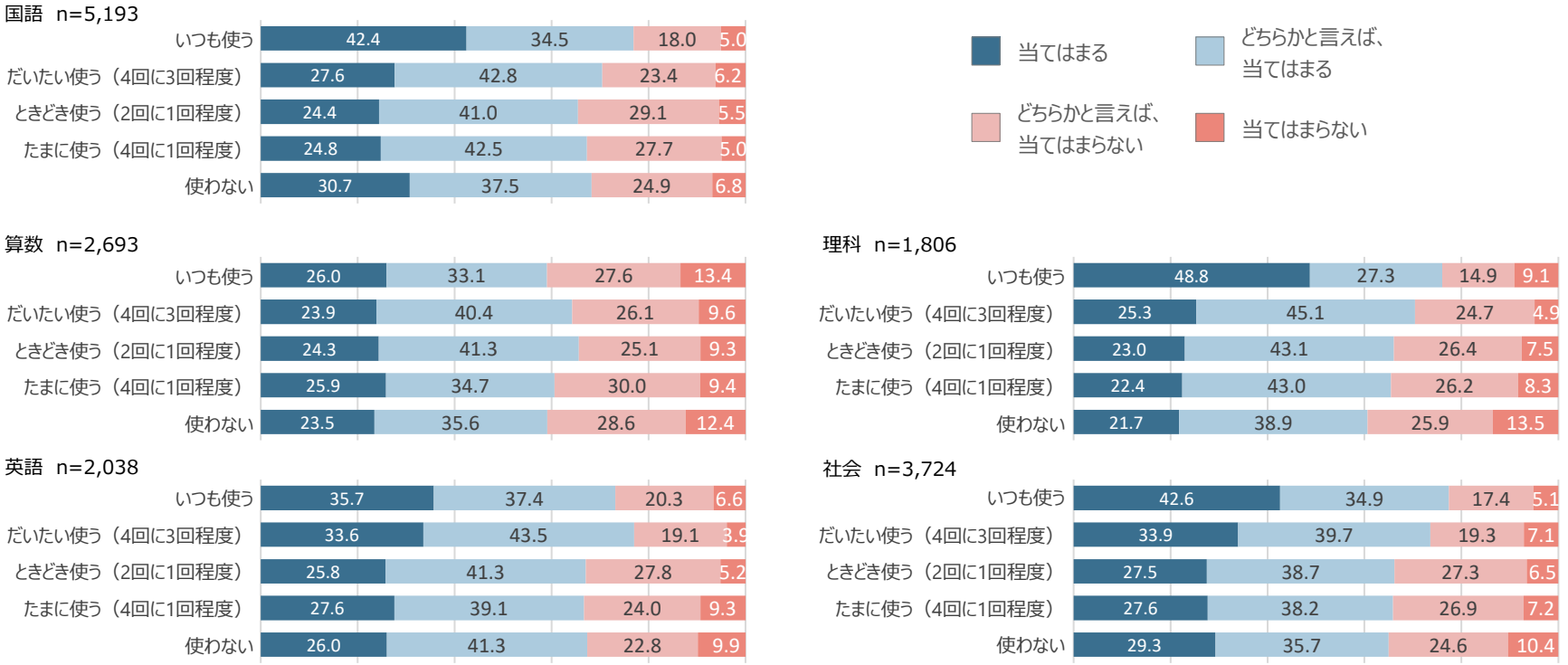
主要5教科別 | 小学校 中高学年児童

分析④-6 児童生徒のデジタル教科書の使用頻度と「探究的な学び」の関連（2/3）

中高学年Q.14 授業での使用頻度 × 中高学年Q.9 探究的な学び

傾向/示唆

- 小学校中高学年の教科別では、算数を除き、デジタル教科書を「いつも使う」グループが、探究的な学びで「当てはまる」と回答した割合が最も高い。
  特に理科はその傾向が顕著であり、「使わない」グループと比べて「いつも使う」グループでは、「当てはまる」と回答した割合が約27ポイント高くなっている。



©2026 ABeam Consulting Ltd.

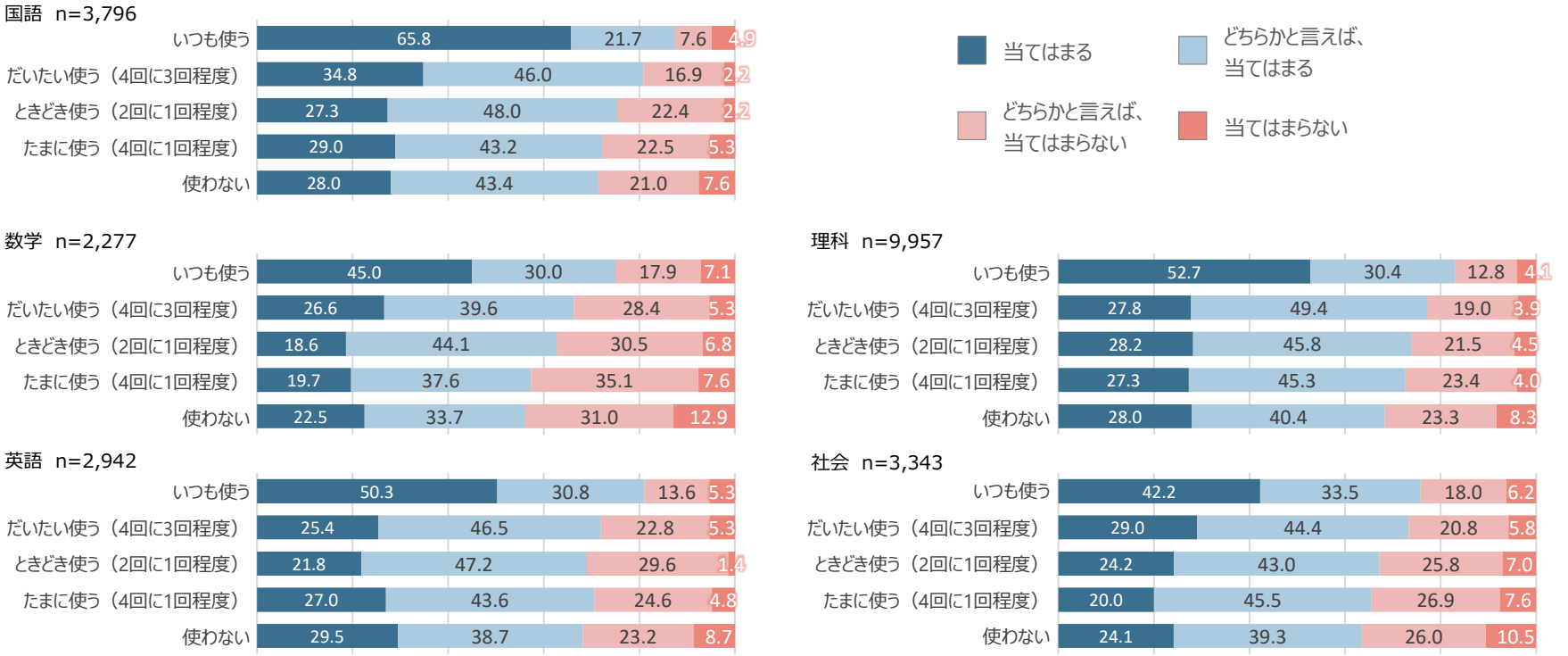
主要5教科別 | 中学生

分析④-6 児童生徒のデジタル教科書の使用頻度と「探究的な学び」の関連（3/3）

中学生Q.14 授業での使用頻度 × 中学生Q.9 探究的な学び

傾向/示唆

- 中学生の教科別では、全教科で、デジタル教科書を「いつも使う」グループが、探究的な学びで「当てはまる」と回答した割合が最も高い。特に国語はその傾向が顕著であり、「使わない」グループと比べて「いつも使う」グループでは、「当てはまる」と回答した割合が約38ポイント高くなっている。
- 小学校中高学年と比較すると、探究的な学びで「当てはまる」と回答した割合が、社会を除いて高くなっている。



©2026 ABeam Consulting Ltd.

全教科総計 | 中高学年児童・中学校生徒

分析④-7 児童生徒の振り返りの場面におけるデジタル教科書の使用頻度と「探究的な学び」の関連（1/3）

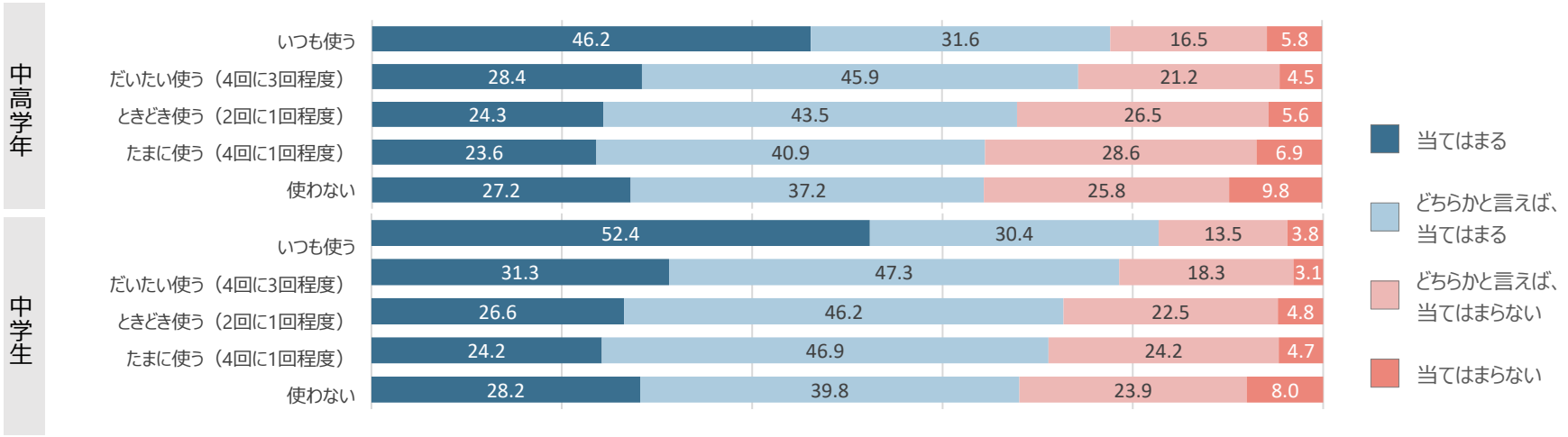
中高学年・中学生Q.15 振り返りの場面での使用頻度 × 中高学年・中学生Q.9 探究的な学び

中高学年：n=15,785　中学生：n=26,439

傾向/示唆

- 小学校中高学年、中学生いずれについても、デジタル教科書を振り返りの場面で「いつも使う」グループは、他のグループに比べて、探究的な学びについて「当てはまる」と回答した割合が最も高い。
- デジタル教科書を「いつも使う」グループは、「使わない」グループと比べて、「当てはまる」と回答した割合が中高学年では約19ポイント、中学生では約24ポイント高くなっている。

振り返りの場面でのデジタル教科書の使用頻度と、授業において「自分で課題を立てて、考えをまとめる活動を行い、工夫して発表できているか」を回答した割合の関係



©2026 ABeam Consulting Ltd.

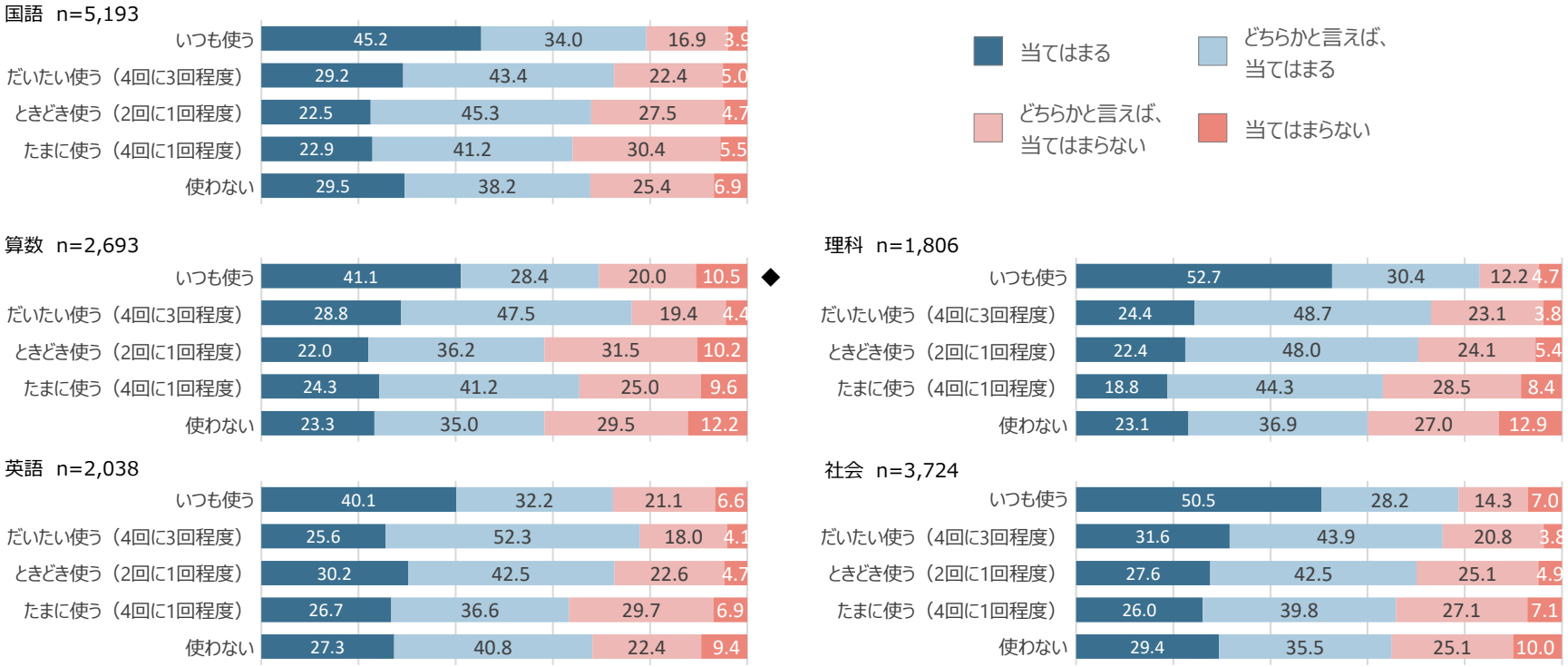
主要5教科別 | 小学校 中高学年児童

分析④-7 児童生徒の振り返りの場面におけるデジタル教科書の使用頻度と「探究的な学び」の関連（2/3）

中高学年Q.15 振り返りの場面での使用頻度 × 中高学年Q.9 探究的な学び

傾向/示唆

- 小学校中高学年の教科別では、全教科で、振り返りの場面でデジタル教科書を「いつも使う」グループが、探究的な学びで「当てはまる」と回答した割合が最も高い。
特に理科はその傾向が顕著であり、「使わない」グループと比べて「いつも使う」グループでは、「当てはまる」と回答した割合が約30ポイント高くなっている。



©2026 ABeam Consulting Ltd.

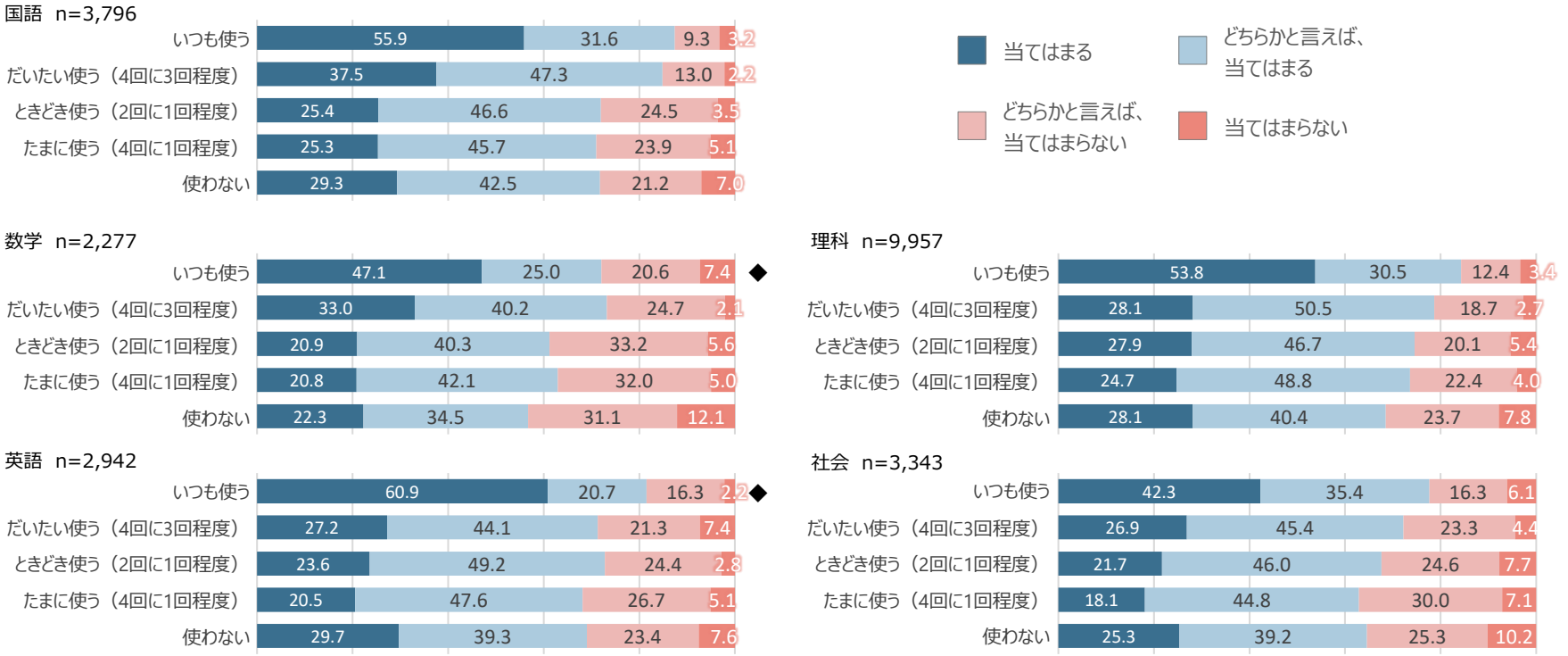
分析④-7 児童生徒の振り返りの場面におけるデジタル教科書の使用頻度と「探究的な学び」の関連（3/3）

主要5教科別 | 中学生

中学生Q.15 振り返りの場面での使用頻度 × 中学生Q.9 探究的な学び

傾向/示唆

- 中学生の教科別では、全教科で、振り返りの場面でデジタル教科書を「いつも使う」グループが、探究的な学びで「当てはまる」と回答した割合が最も高い。



©2026 ABeam Consulting Ltd.

全教科総計　児童生徒全員

分析④-8 児童生徒のデジタル教科書の使用頻度と「教科が好きか」の関連（1/3）

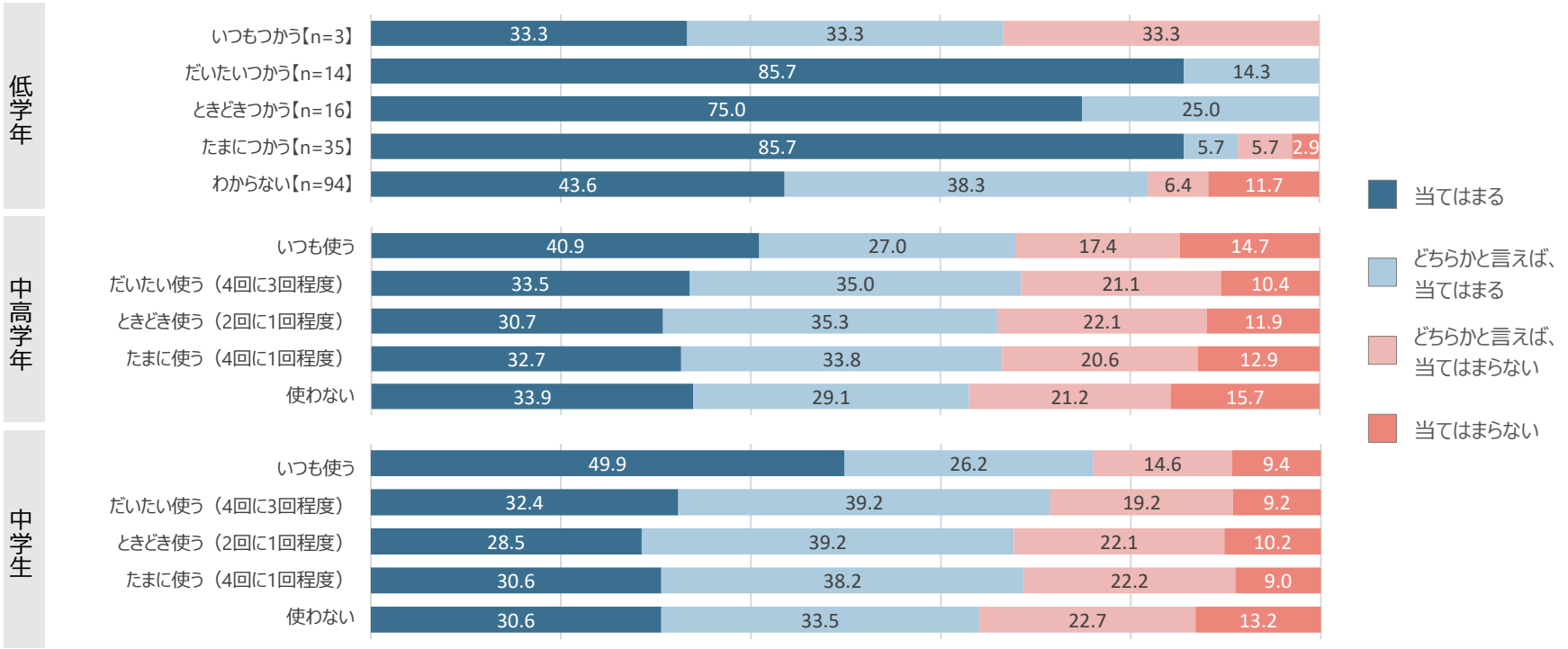
低学年Q.5 授業での使用頻度 × 低学年Q.6 教科が好きか
中高学年・中学生Q.14 授業での使用頻度 × 中高学年・中学生Q.10 教科が好きか

低学年：n=162　中高学年：n=15,785
中学生：n=26,439

傾向/示唆

- 小学校中高学年、中学生いずれについても、デジタル教科書を「いつも使う」グループは、他のグループに比べて、**回答教科が好きかについて「当てはまる」と回答した割合が最も高い。**（中高学年は「どちらかと言えば、当てはまる」まで含めると、グループ間で顕著な差は見られない点に留意。）
- デジタル教科書を「いつも使う」グループは、「使わない」グループと比べて、「当てはまる」と回答した割合が中高学年では約7ポイント、中学生では約19ポイント高くなっている。

デジタル教科書の使用頻度と、「教科が好きか」を回答した割合の関係



©2026 ABeam Consulting Ltd.

主要5教科別 | 小学校 中高学年児童

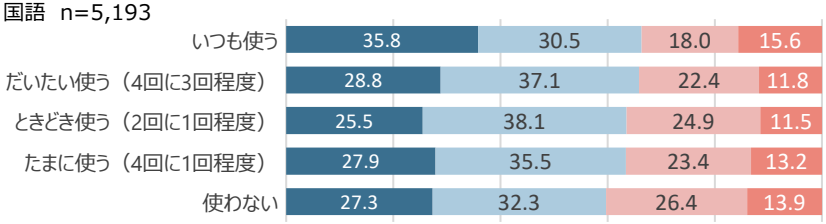
分析④-8 児童生徒のデジタル教科書の使用頻度と「教科が好きか」の関連（2/3）

中高学年Q.14 授業での使用頻度 × 中高学年Q.10 教科が好きか

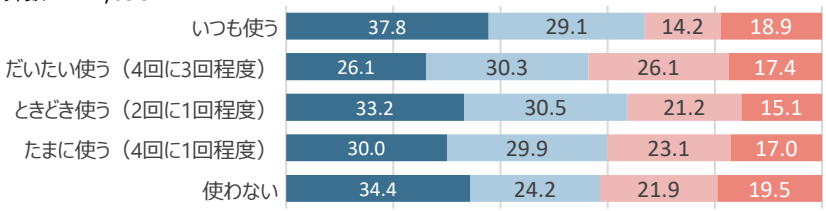
傾向/示唆

- 小学校中高学年の教科別では、全教科で、デジタル教科書を「いつも使う」グループが、回答教科が好きかについて「当てはまる」と回答した割合が最も高い。特に理科はその傾向が顕著であり、「使わない」グループと比べて「いつも使う」グループでは、「当てはまる」と回答した割合が約19ポイント高くなっている。

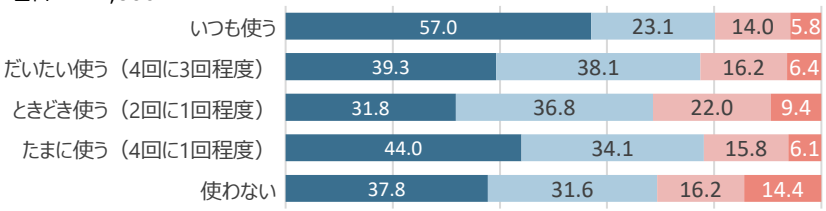
国語 n=5,193



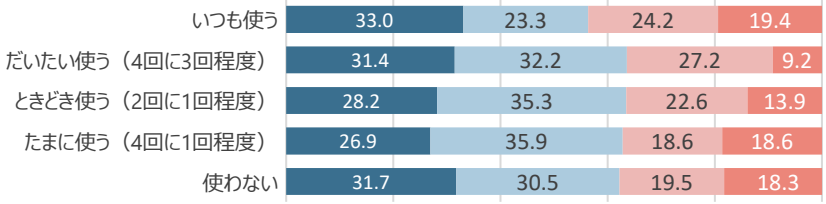
算数 n=2,693



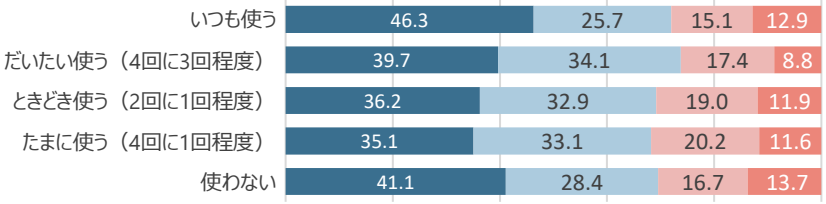
理科 n=1,806



英語 n=2,038



社会 n=3,724



©2026 ABeam Consulting Ltd.

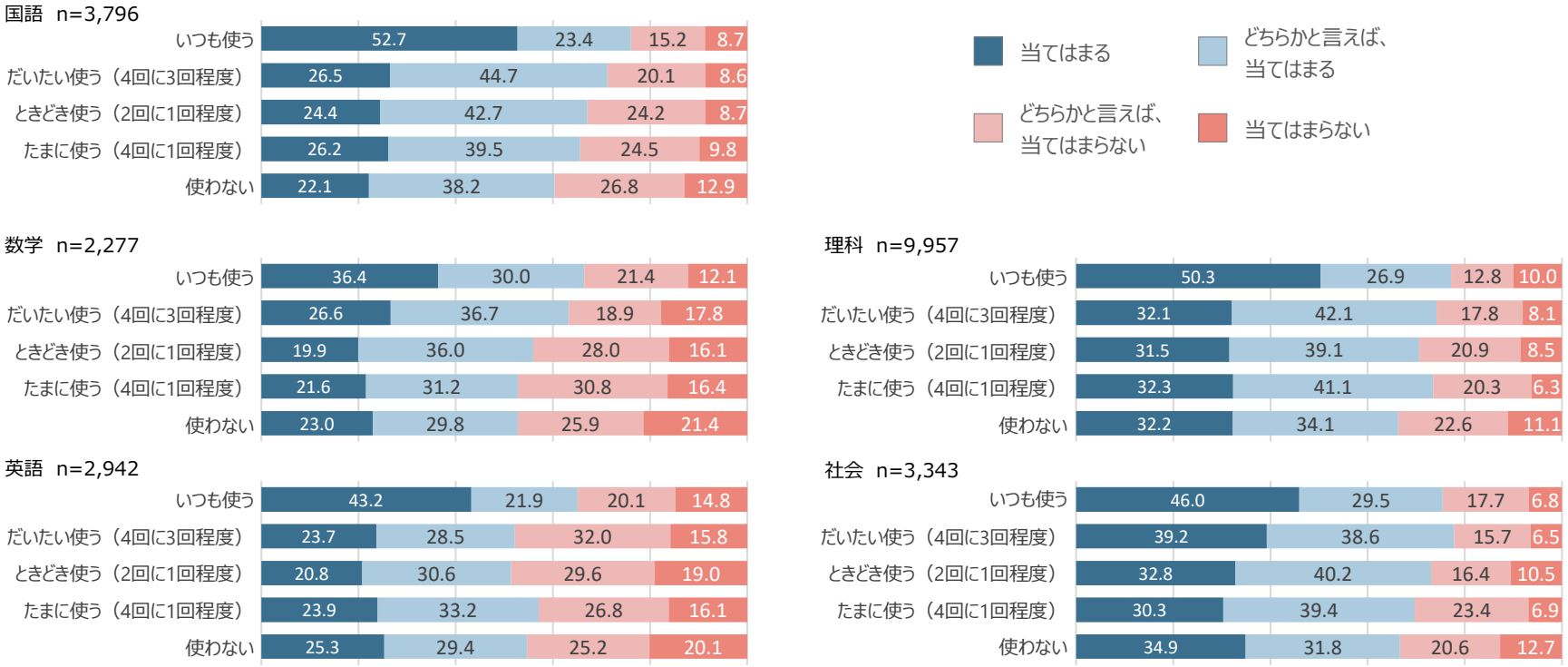
主要5教科別 | 中学生

分析④-8 児童生徒のデジタル教科書の使用頻度と「教科が好きか」の関連（3/3）

中学生Q.14 授業での使用頻度 × 中学生Q.10 教科が好きか

傾向/示唆

- 中学生の教科別では、全教科で、デジタル教科書を「いつも使う」グループが、回答教科が好きかについて「当てはまる」と回答した割合が最も高い。特に国語はその傾向が顕著であり、「使わない」グループと比べて「いつも使う」グループでは、「当てはまる」と回答した割合が約31ポイント高くなっている。



©2026 ABeam Consulting Ltd.

全教科総計　児童生徒全員

分析④-9 児童生徒のデジタル教科書の使用頻度と「教科が好きになった時期」の関連（1/3）

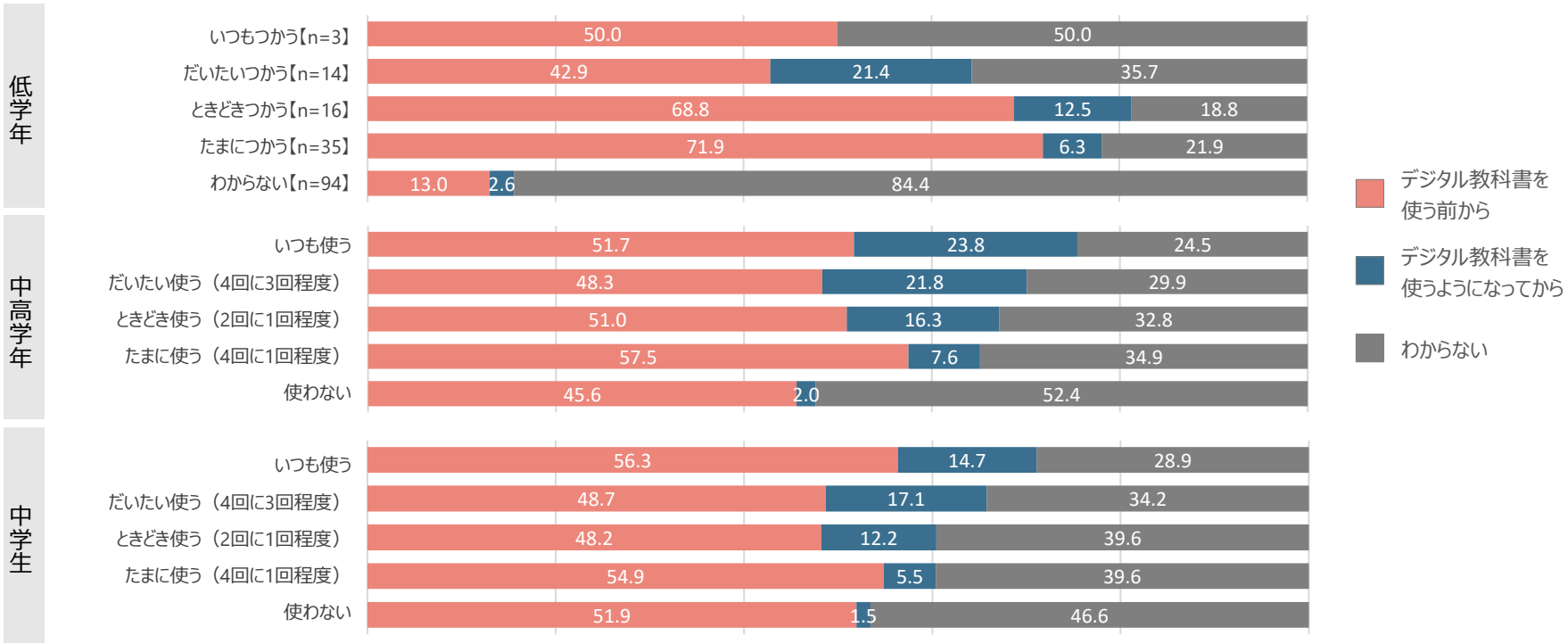
低学年Q.5 授業での使用頻度 × 低学年Q.7 教科が好きになった時期
中高学年・中学生Q.14 授業での使用頻度 × 中高学年・中学生Q.11 教科が好きになった時期

低学年：n=141　中高学年：n=10,275
中学生：n=17,550

傾向/示唆

- 「ときどき使う」以上のグループで見ると、小学校中高学年では20%前後、中学生では15%前後の児童生徒が、**デジタル教科を使うようになってからその教科が好きになった**と回答している。

デジタル教科書の使用頻度と、「教科が好きになった時期」の関係



©2026 ABeam Consulting Ltd.

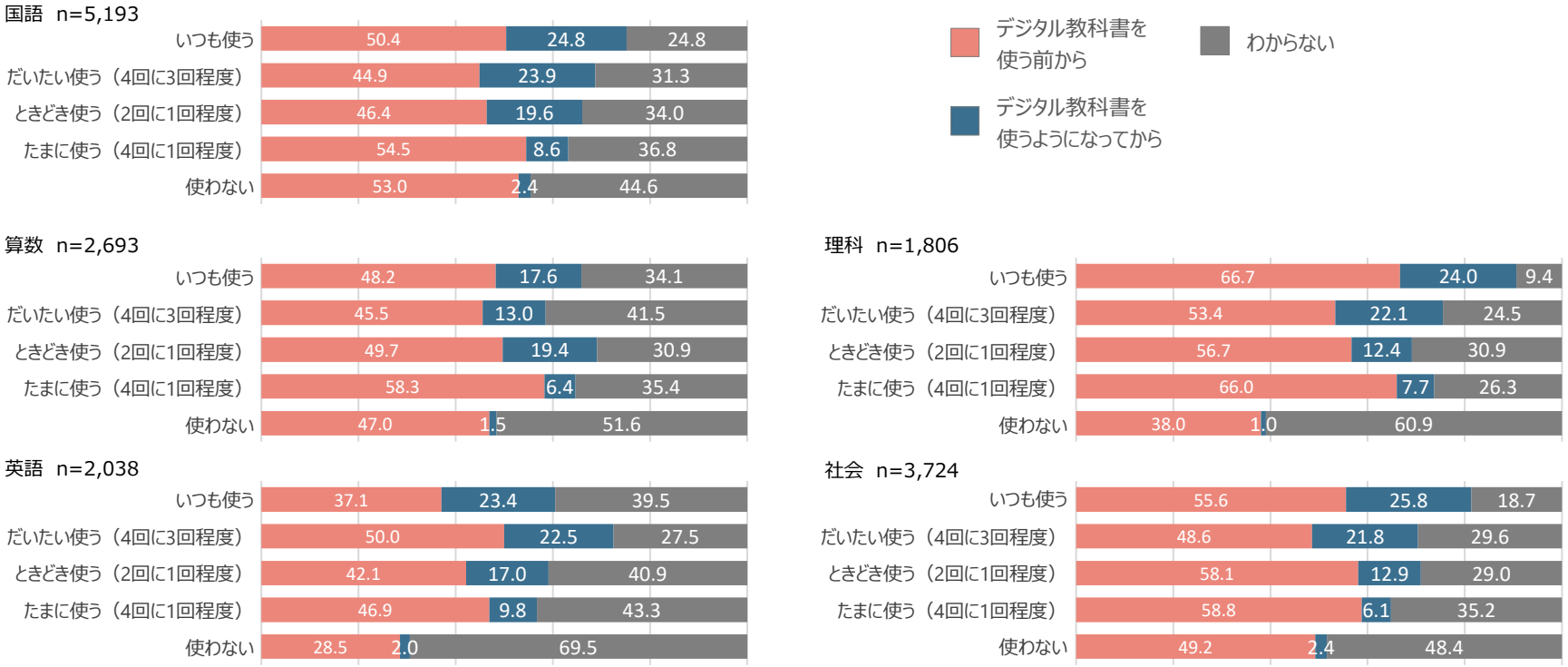
主要5教科別 | 小学校 中高学年児童

分析④-9 児童生徒のデジタル教科書の使用頻度と「教科が好きになった時期」の関連（2/3）

中高学年Q.14 授業での使用頻度 × 中高学年Q.11 教科が好きになった時期

傾向/示唆

- 教科別に見ても、「ときどき使う」以上のグループは、「たまに使う」以下のグループよりも、デジタル教科を使うようになってからその教科が好きになったと回答している割合が高い傾向にある。一部の児童生徒については、デジタル教科書の活用が教科を好きになる一因になっていると推察できる。



©2026 ABeam Consulting Ltd.

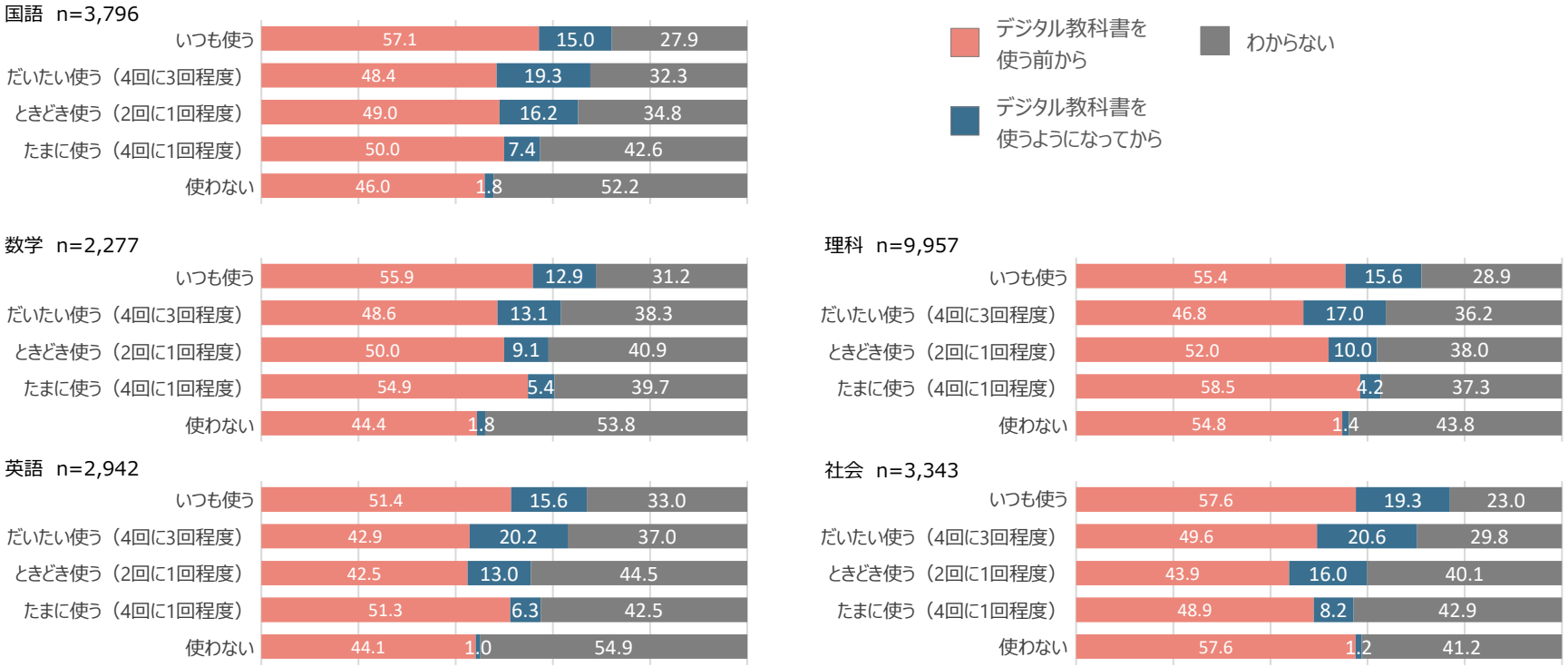
主要5教科別 | 中学生

分析④-9 児童生徒のデジタル教科書の使用頻度と「教科が好きになった時期」の関連（3/3）

中学生Q.14 授業での使用頻度 × 中学生Q.11 教科が好きになった時期

傾向/示唆

- 教科別に見ても、「ときどき使う」以上のグループは、「たまに使う」以下のグループよりも、デジタル教科を使うようになってからその教科が好きになったと回答している割合が高い傾向にある。一部の児童生徒については、デジタル教科書の活用が教科を好きになる一因になっていると推察できる。



©2026 ABeam Consulting Ltd.

全教科総計　児童生徒全員

分析④-10 児童生徒のデジタル教科書の使用頻度と「自己効力感」の関連（1/3）

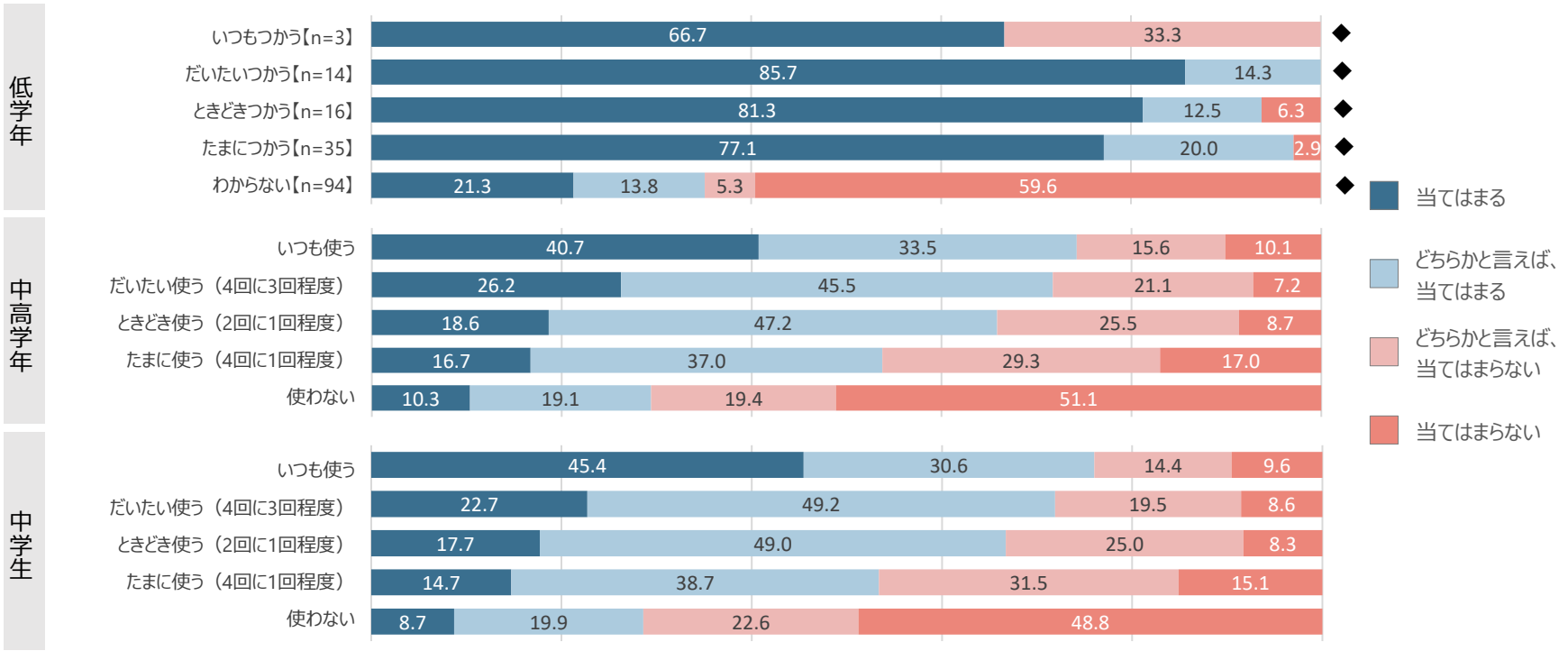
低学年Q.5 授業での使用頻度 × 低学年Q.8 自己効力感
中高学年・中学生Q.14 授業での使用頻度 × 中高学年・中学生Q.12 自己効力感

低学年：n=162　中高学年：n=15,785
中学生：n=26,439

傾向/示唆

- 小学校中高学年、中学生いずれについても、デジタル教科書を「いつも使う」グループは、他のグループに比べて、**自己効力感について「当てはまる」と回答した割合が最も高い。**
- デジタル教科書を「いつも使う」グループは、「使わない」グループと比べて、「当てはまる」と回答した割合が中高学年では約30ポイント、中学生では約37ポイント高くなっている。

デジタル教科書の使用頻度と、授業において「デジタル教科書を使うことで、分からないことが分かるようになって自信を持つことができたか」を回答した割合の関係



©2026 ABeam Consulting Ltd.

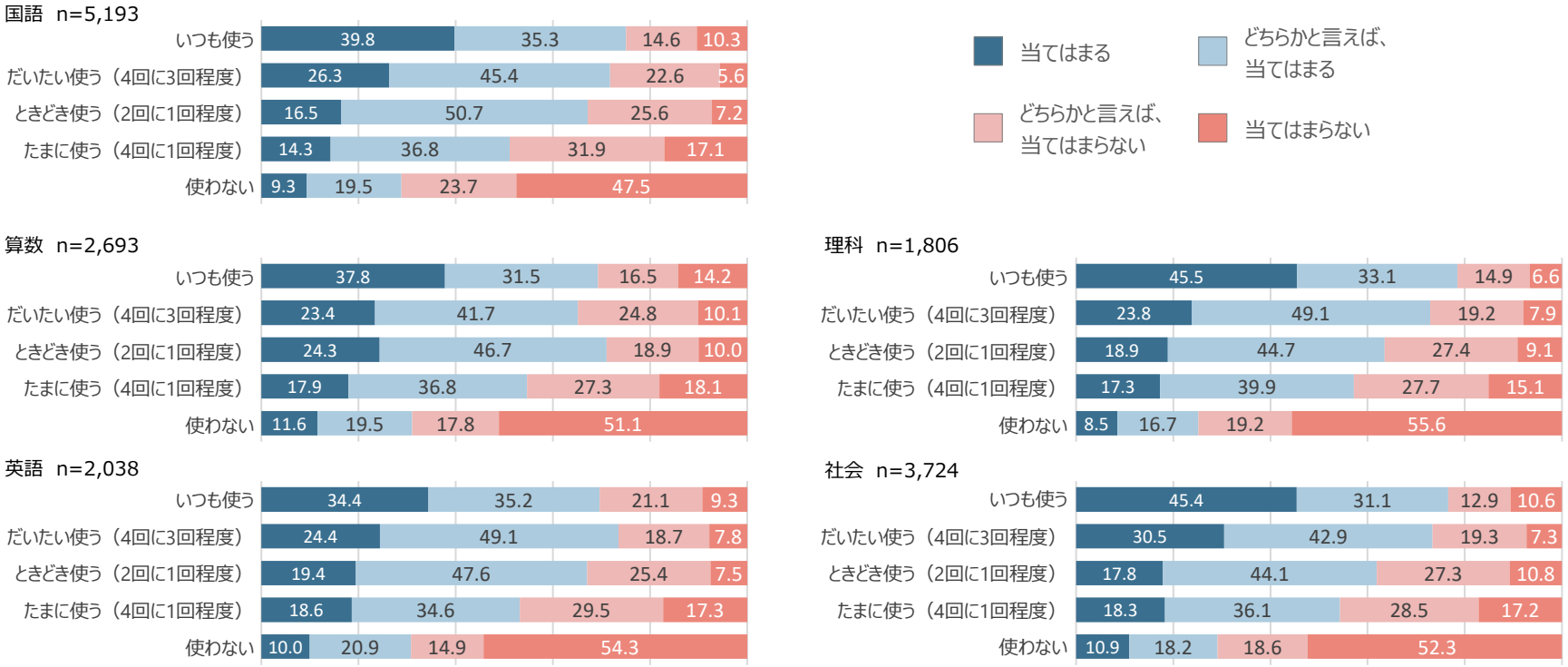
主要5教科別 | 小学校 中高学年児童

分析④-10 児童生徒のデジタル教科書の使用頻度と「自己効力感」の関連（2/3）

中高学年Q.14 授業での使用頻度 × 中高学年Q.12 自己効力感

傾向/示唆

- 小学校中高学年の教科別では、全教科で、デジタル教科書を「いつも使う」グループが、自己効力感について「当てはまる」と回答した割合が最も高い。特に理科はその傾向が顕著であり、「使わない」グループと比べて「いつも使う」グループでは、「当てはまる」と回答した割合が約37ポイント高くなっている。



©2026 ABeam Consulting Ltd.

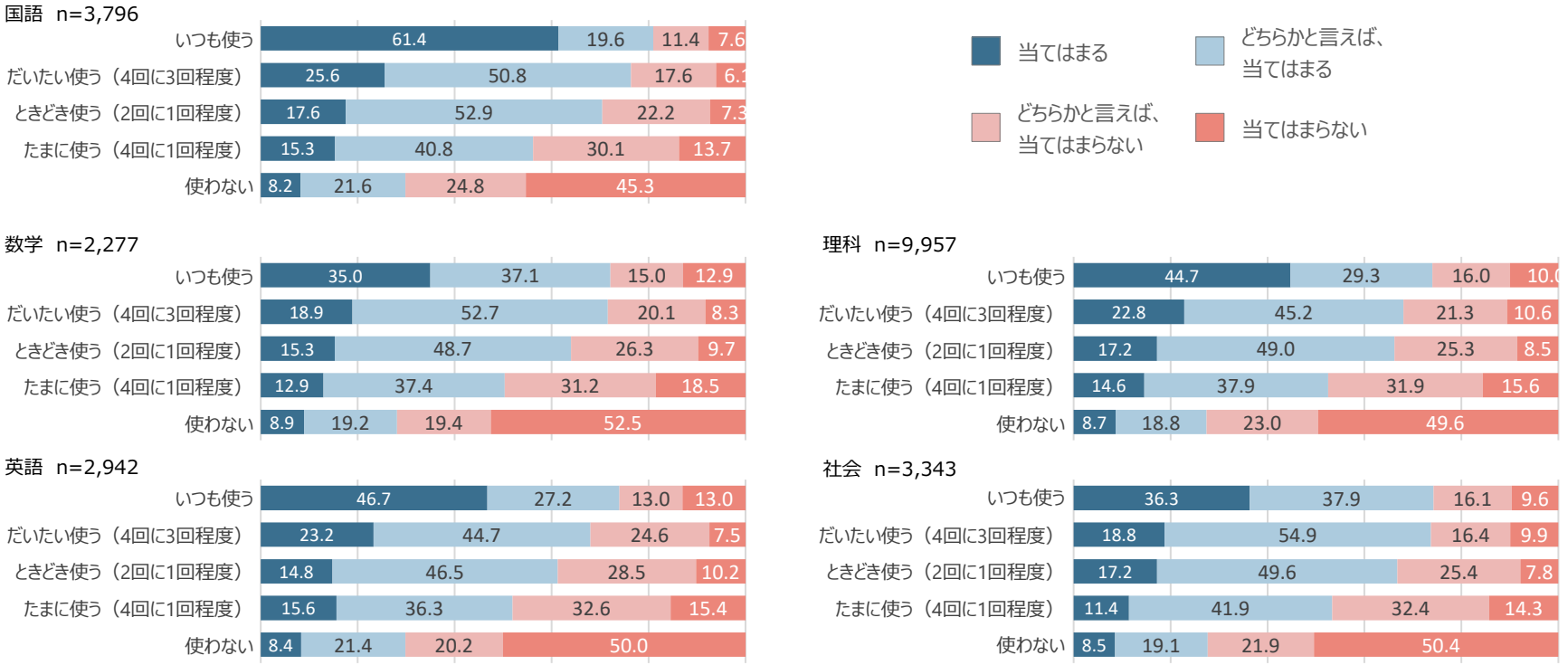
主要5教科別 | 中学生

分析④-10 児童生徒のデジタル教科書の使用頻度と「自己効力感」の関連（3/3）

中学生Q.14 授業での使用頻度 × 中学生Q.12 自己効力感

傾向/示唆

- 中学生の教科別では、全教科で、デジタル教科書を「いつも使う」グループが、自己効力感について「当てはまる」と回答した割合が最も高い。特に国語はその傾向が顕著であり、「使わない」グループと比べて「いつも使う」グループでは、「当てはまる」と回答した割合が約53ポイント高くなっている。



©2026 ABeam Consulting Ltd.

全教科総計　児童生徒全員

分析④-11　児童生徒のデジタル教科書の使用頻度と「情報活用能力」の関連（1/3）

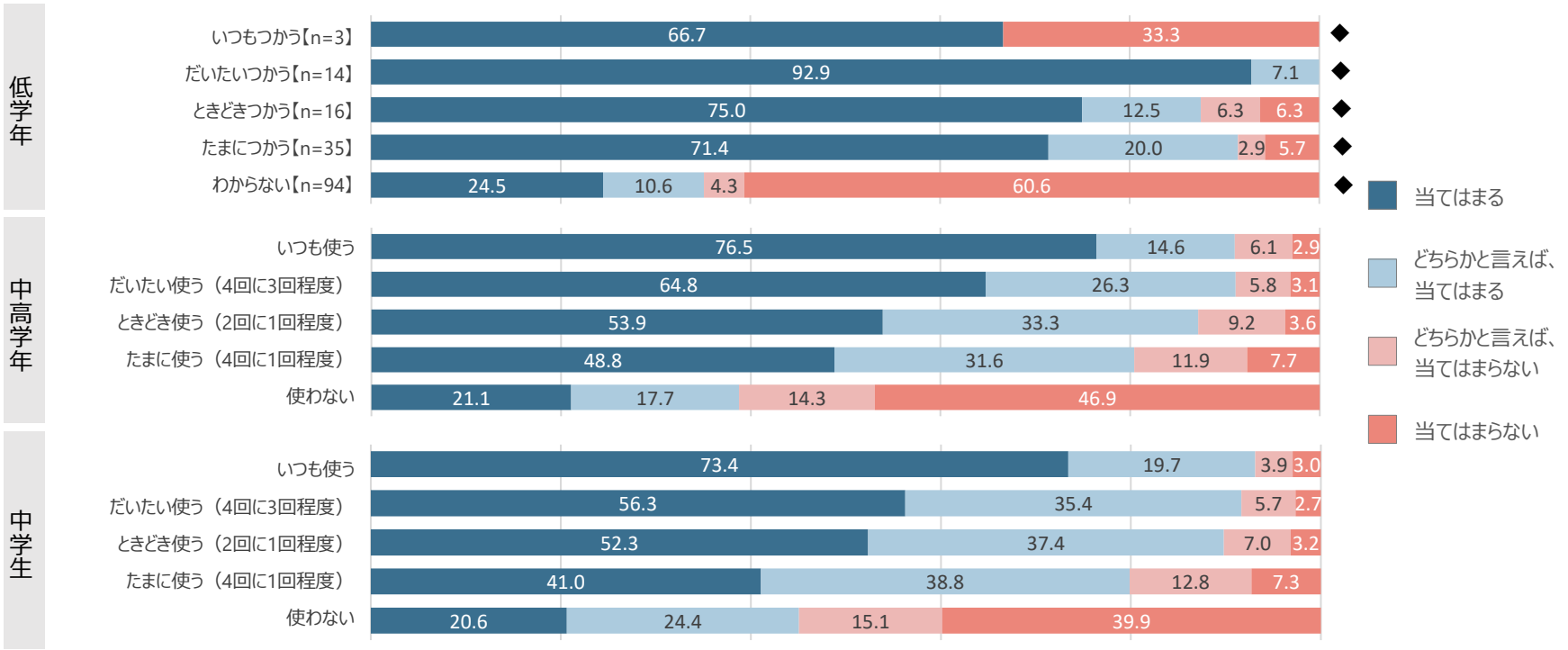
低学年Q.5 授業での使用頻度 × 低学年Q.8 情報活用能力
中高学年・中学生Q.14 授業での使用頻度 × 中高学年・中学生Q.13 情報活用能力

低学年：n=162　中高学年：n=15,785
中学生：n=26,439

傾向/示唆

- 小学校中高学年、中学生いずれについても、デジタル教科書を「いつも使う」グループは、他のグループに比べて、**情報活用能力について「当てはまる」と回答した割合が最も高い。**
- デジタル教科書を「いつも使う」グループは、「使わない」グループと比べて、「当てはまる」と回答した割合が中高学年では約55ポイント、中学生では約53ポイント高くなっている。
- **分析テーマ④の中でも、特に「いつも使う」グループと「使わない」グループの差が大きい。**

デジタル教科書の使用頻度と、授業において「デジタル教科書を使うことで、PC・タブレットなどを授業で使うことにも慣れたか」を回答した割合の関係



©2026 ABeam Consulting Ltd.

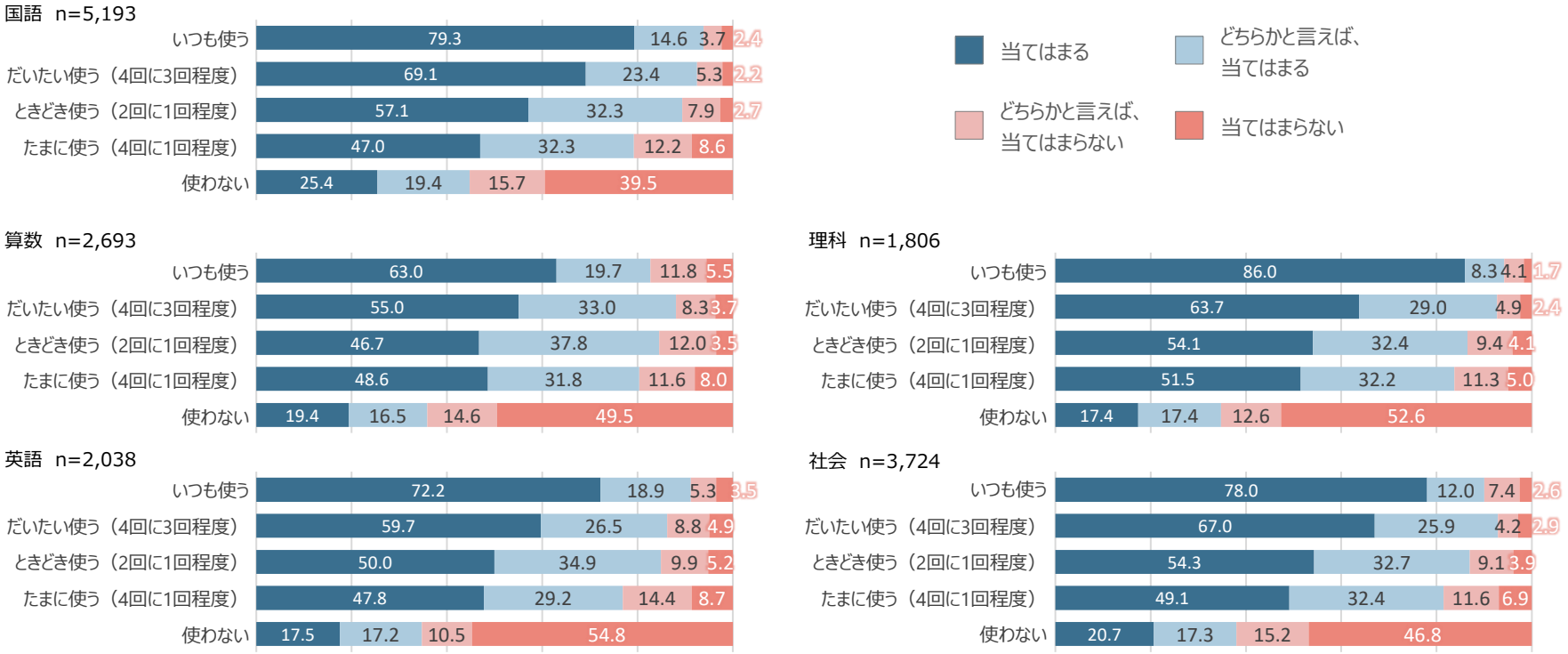
主要5教科別 | 小学校 中高学年児童

分析④-11 児童生徒のデジタル教科書の使用頻度と「情報活用能力」の関連（2/3）

中高学年Q.14 授業での使用頻度 × 中高学年Q.13 情報活用能力

傾向/示唆

- 小学校中高学年の教科別では、全教科で、デジタル教科書を「いつも使う」グループが、情報活用能力について「当てはまる」と回答した割合が最も高い。特に理科はその傾向が顕著であり、「使わない」グループと比べて「いつも使う」グループでは、「当てはまる」と回答した割合が約69ポイント高くなっている。



©2026 ABeam Consulting Ltd.

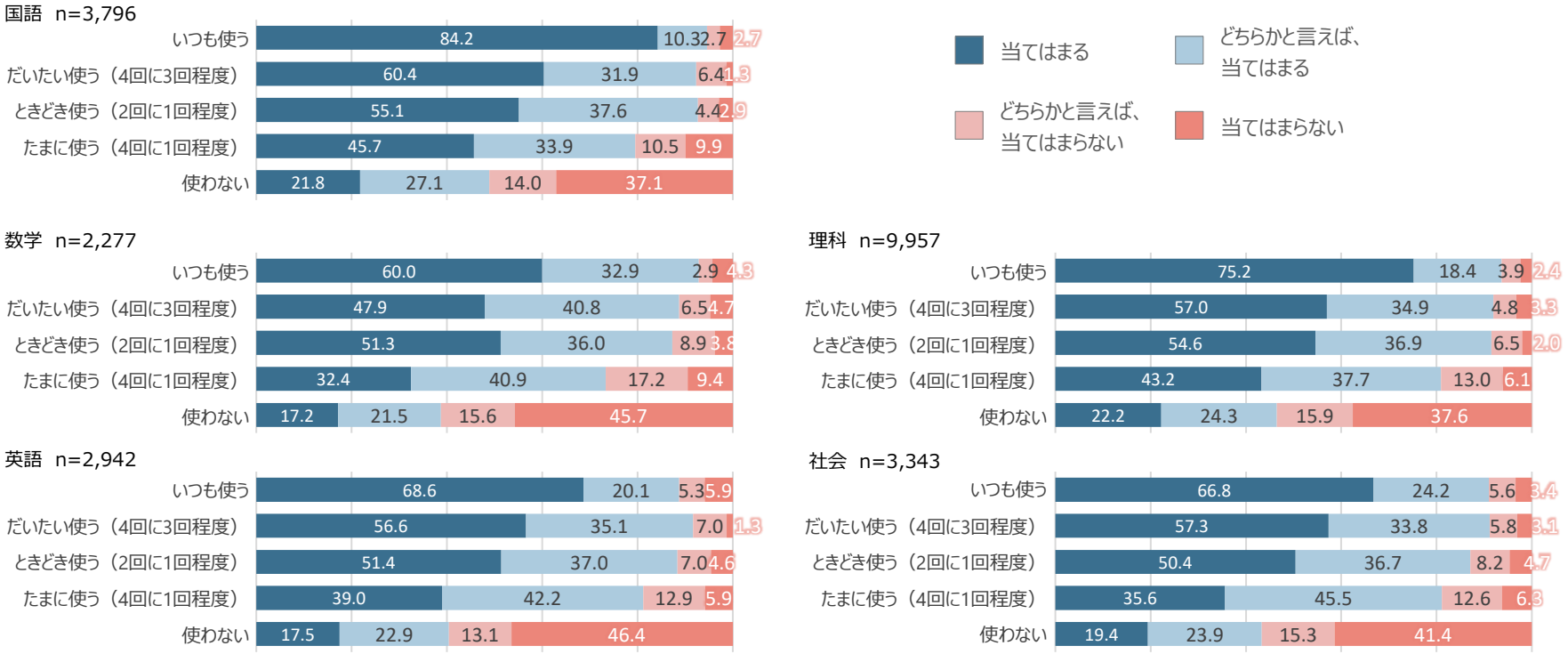
主要5教科別 | 中学生

分析④-11 児童生徒のデジタル教科書の使用頻度と「情報活用能力」の関連（3/3）

中学生Q.14 授業での使用頻度 × 中学生Q.13 情報活用能力

傾向/示唆

- 中学生の教科別では、全教科で、デジタル教科書を「いつも使う」グループが、情報活用能力について「当てはまる」と回答した割合が最も高い。特に国語はその傾向が顕著であり、「使わない」グループと比べて「いつも使う」グループでは、「当てはまる」と回答した割合が約62ポイント高くなっている。



©2026 ABeam Consulting Ltd.

全教科総計 | 児童生徒全員

分析④-12 児童生徒のデジタル教科書の使用頻度と授業外の学習時間の関連（1/3）

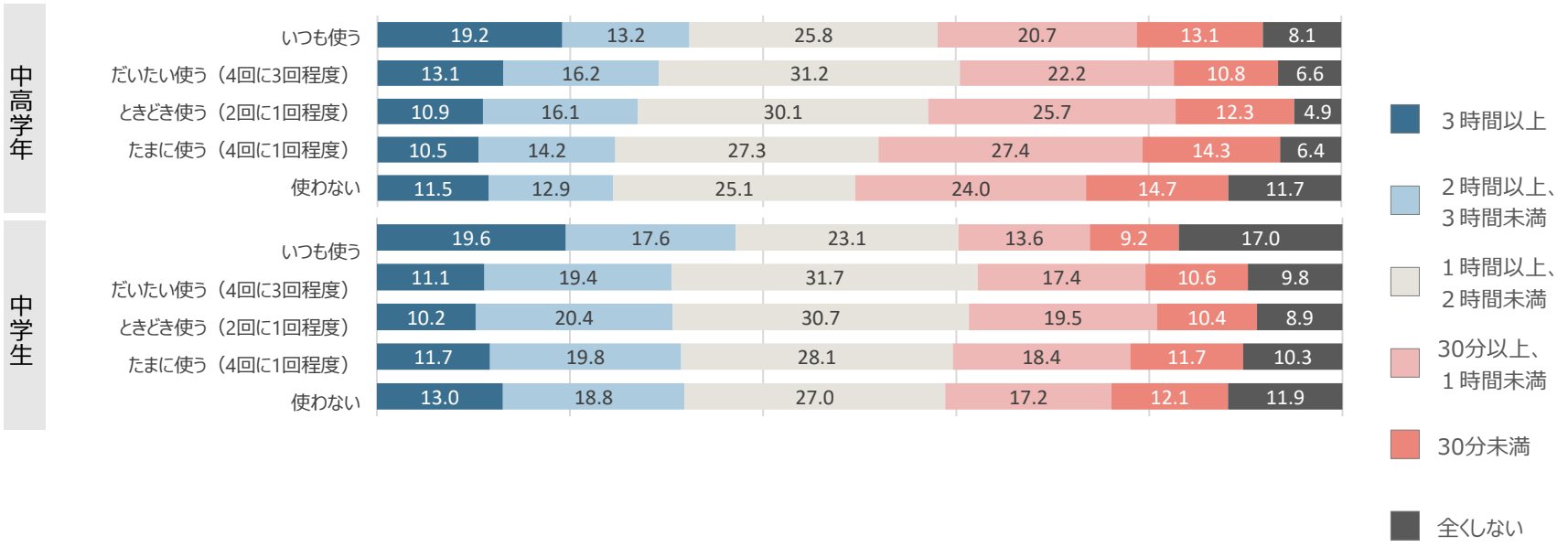
中高学年・中学生Q.14 授業での使用頻度 × 中高学年・中学生Q.16 授業外の学習時間

中高学年：n=15,785　中学生：n=26,439

傾向/示唆

- 小学校中高学年、中学生いずれについても、デジタル教科書を「いつも使う」グループは、他のグループに比べて、**授業外の勉強時間が３時間以上と回答した割合が最も高い。**

デジタル教科書の使用頻度と、授業外の学習時間の関係



©2026 ABeam Consulting Ltd.

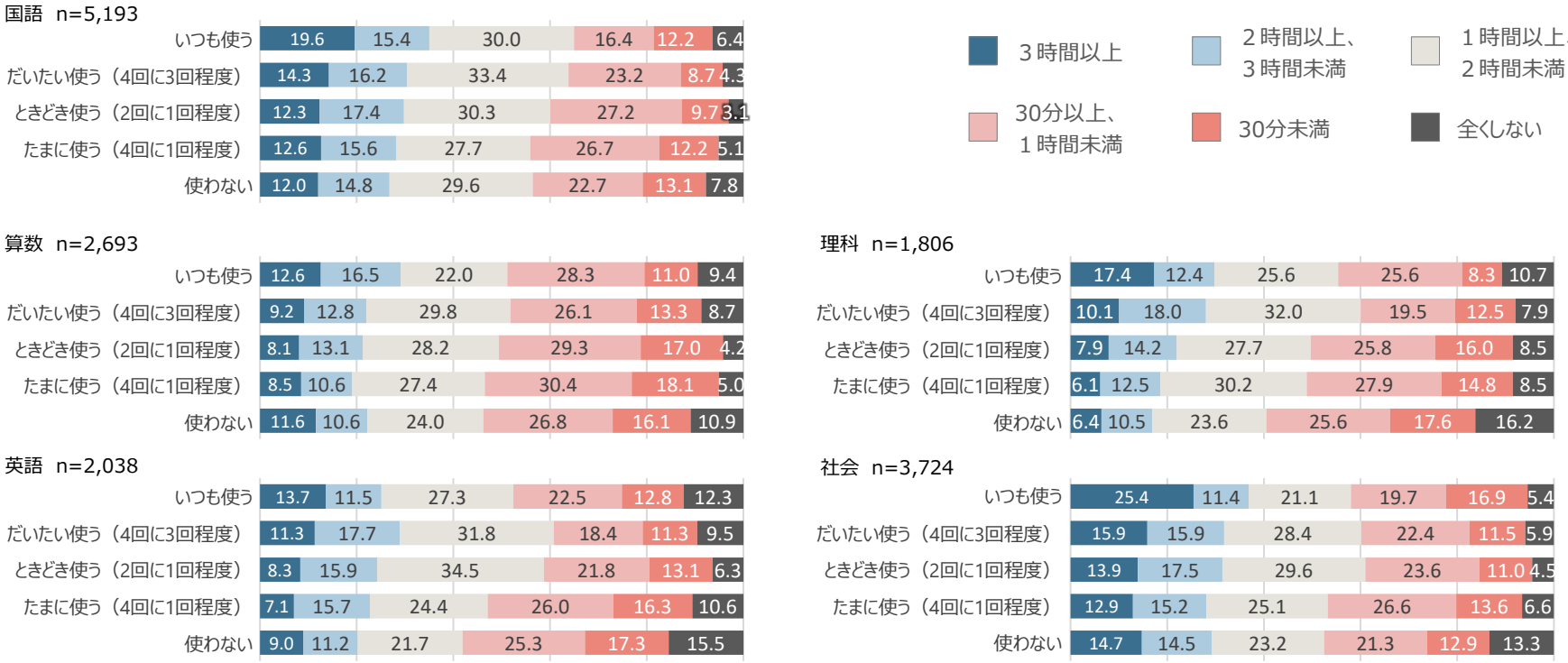
主要5教科別 | 小学校 中高学年児童

分析④-12 児童生徒のデジタル教科書の使用頻度と授業外の学習時間の関連（2/3）

中高学年Q.14 授業での使用頻度 × 中高学年Q.16 授業外の学習時間

傾向/示唆

- 教科別に見ても、全教科で、デジタル教科書を「いつも使う」グループが、授業外の勉強時間が３時間以上と回答した割合が最も高い。



©2026 ABeam Consulting Ltd.

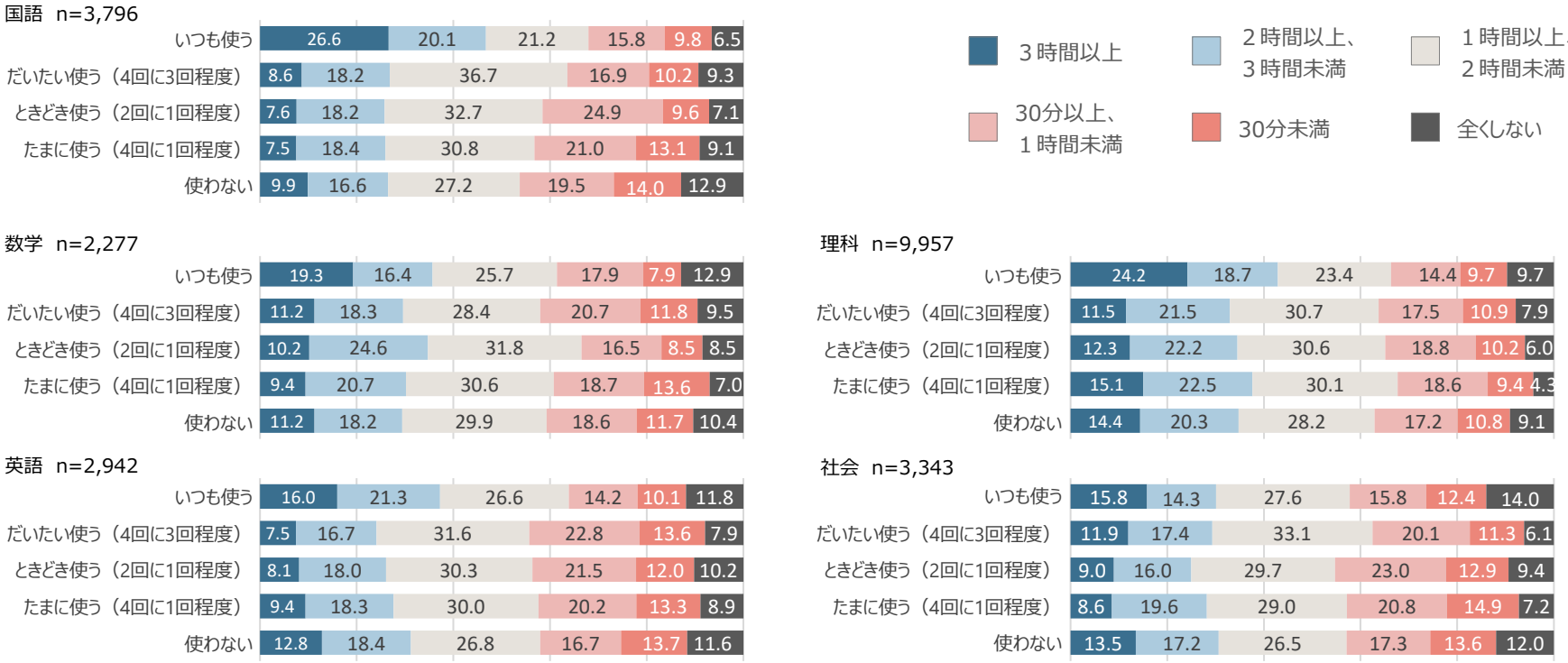
主要5教科別 | 中学生

分析④-12 児童生徒のデジタル教科書の使用頻度と授業外の学習時間の関連（3/3）

中学生Q.14 授業での使用頻度 × 中学生Q.16 授業外の学習時間

傾向/示唆

- 教科別に見ても、全教科で、デジタル教科書を「いつも使う」グループが、授業外の勉強時間が３時間以上と回答した割合が最も高い。



©2026 ABeam Consulting Ltd.

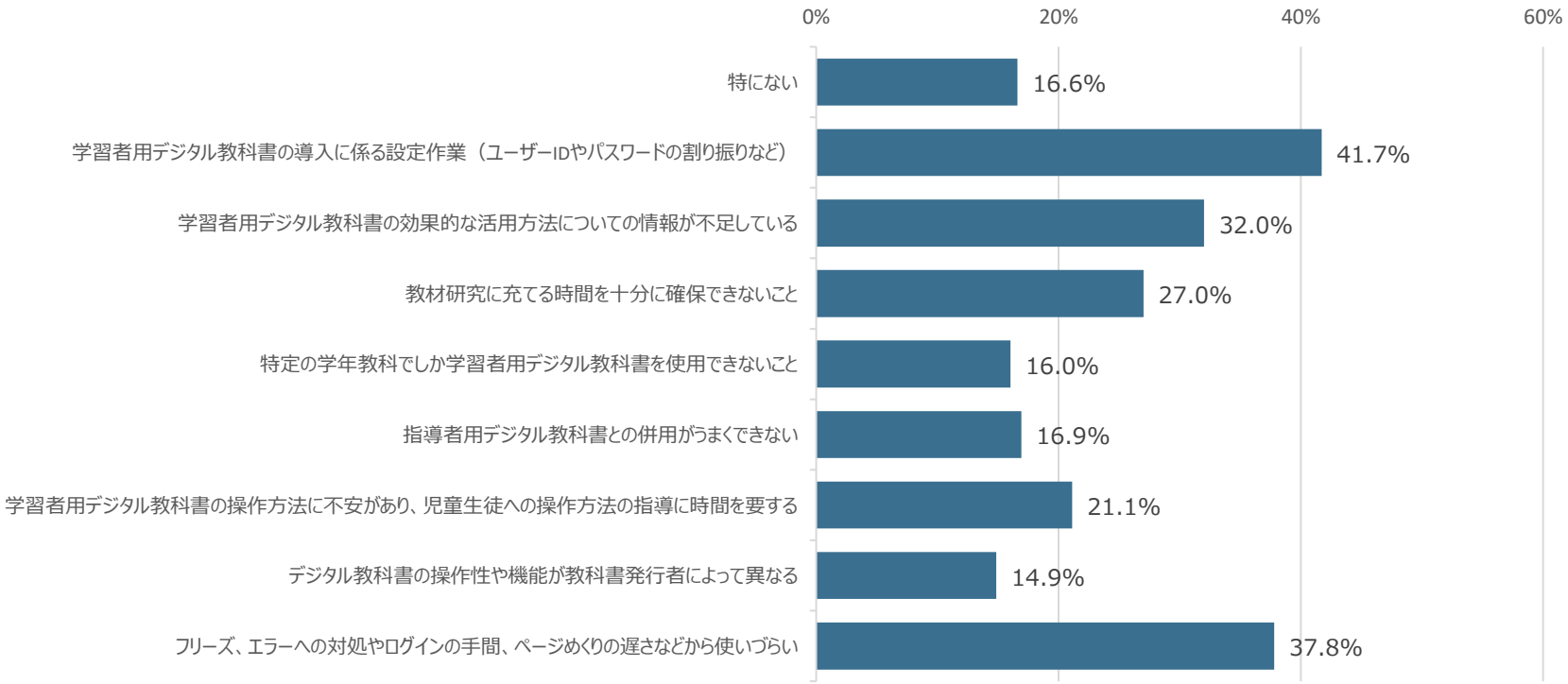
全教科総計 | 小中学校教師

分析⑤-1 デジタル教科書を使用するにあたっての教師の課題感

教師Q.17 使用における課題（複数選択可） n=9,037

傾向/示唆

- 「学習者用デジタル教科書の導入に係る設定作業 （ユーザーID やパスワードの割り振りなど）」、「フリーズ、エラーへの対処やログインの手間、ページめくりの遅さなどから使いづらい」といった、デジタル教科書の**システム面での課題を感じている教師が多く、約4割の教師が課題感を持っている。**



©2026 ABeam Consulting Ltd.

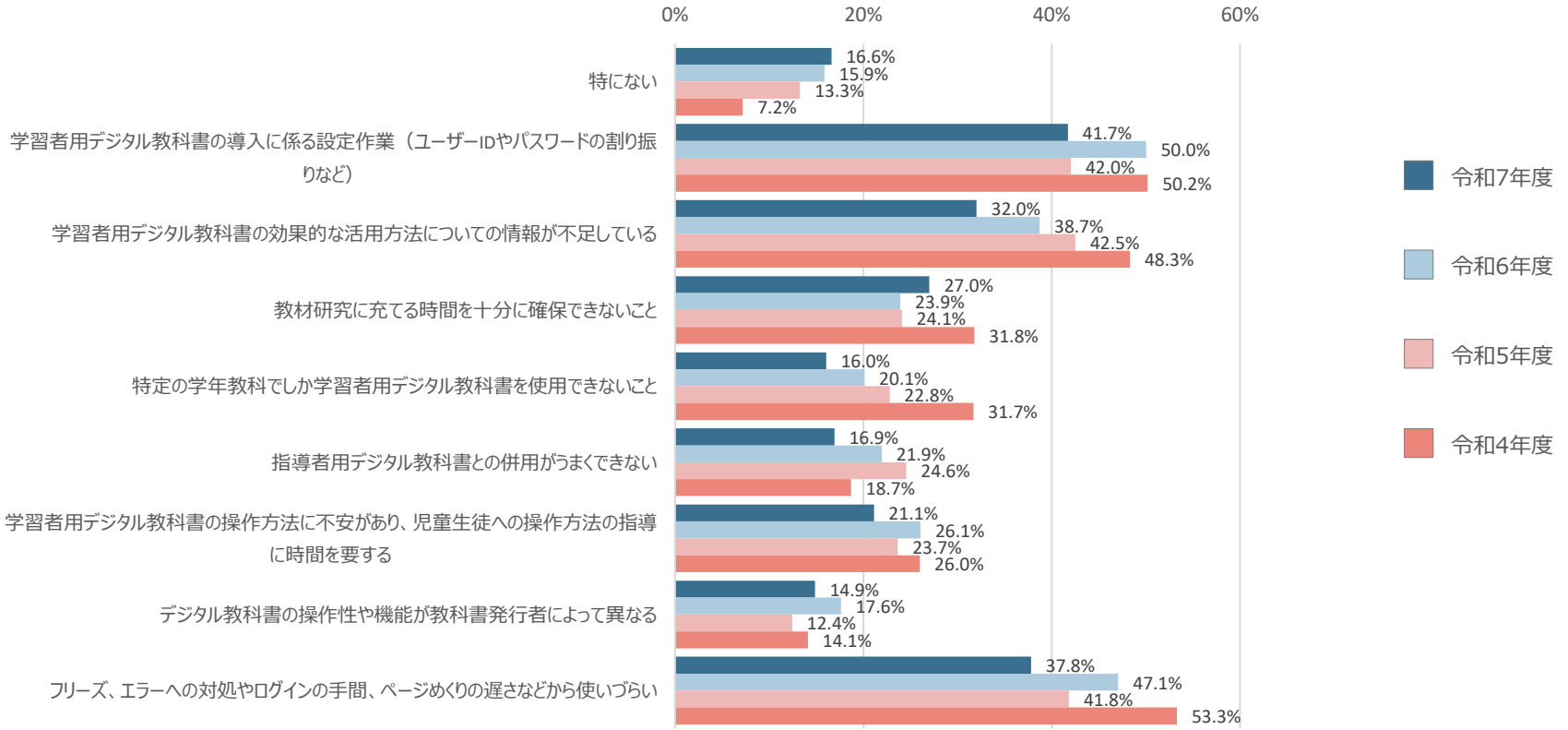
全教科総計 | 小中学校教師

分析⑤-2 デジタル教科書を使用するにあたっての教師の課題感の経年変化

教師Q.17 使用における課題（複数選択可） n=9,037

傾向/示唆

- 過年度調査と比較して、**デジタル教科書の課題が「特にない」と回答した教師の割合は、年々増加**している。
  令和4年度よりもデジタル教科書の定着が進み、全体的に教師の使用歴が伸びてデジタル教科書の習熟度が高まったことが、課題感の減少に寄与していると推察される。
- 特に、「学習者用デジタル教科書の効果的な活用方法についての情報が不足している」と回答した教師の割合は減少し続けている。



©2026 ABeam Consulting Ltd.

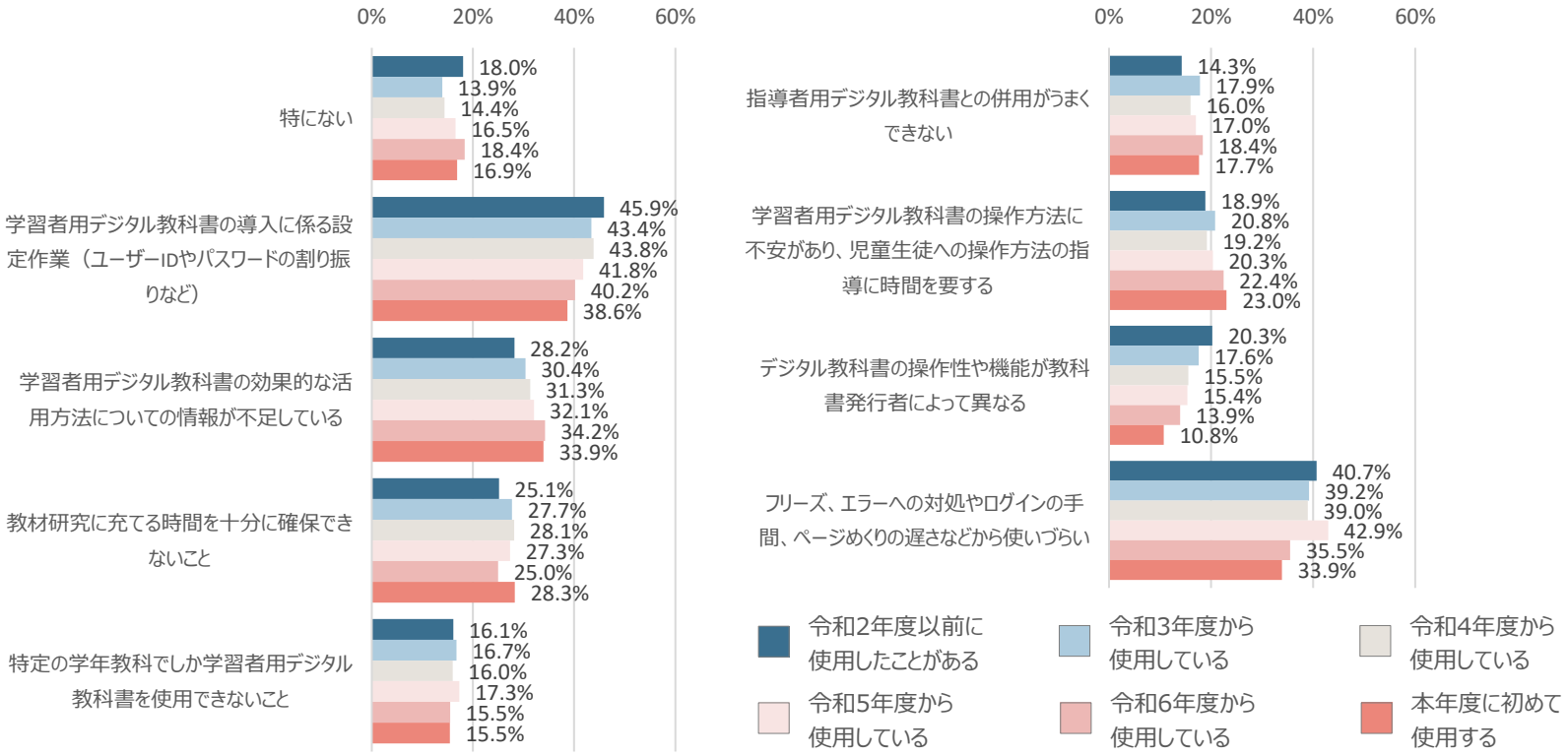
全教科総計 | 小中学校教師

分析⑤-3 デジタル教科書の授業内での使用歴と、デジタル教科書の課題感の関連

教師Q.3 使用感 × 教師Q.17 使用における課題（複数選択可） n=9,037

傾向/示唆

- 「本年度に初めて使用する」教師に比べ、「令和2年度以前に使用したことがある」教師は、「学習者用デジタル教科書の効果的な活用方法についての情報が不足している」ことを課題に感じている割合が約6ポイント低い。**デジタル教科書の習熟度に応じて、効果的な活用方法を習得できている**ことが一因として考えられる。
- デジタル教科書の導入に係る設定作業を課題と感じている割合は、いずれの使用歴でも4割前後を占めており、習熟度に依らない共通的な課題になっていると推察される。



©2026 ABeam Consulting Ltd.

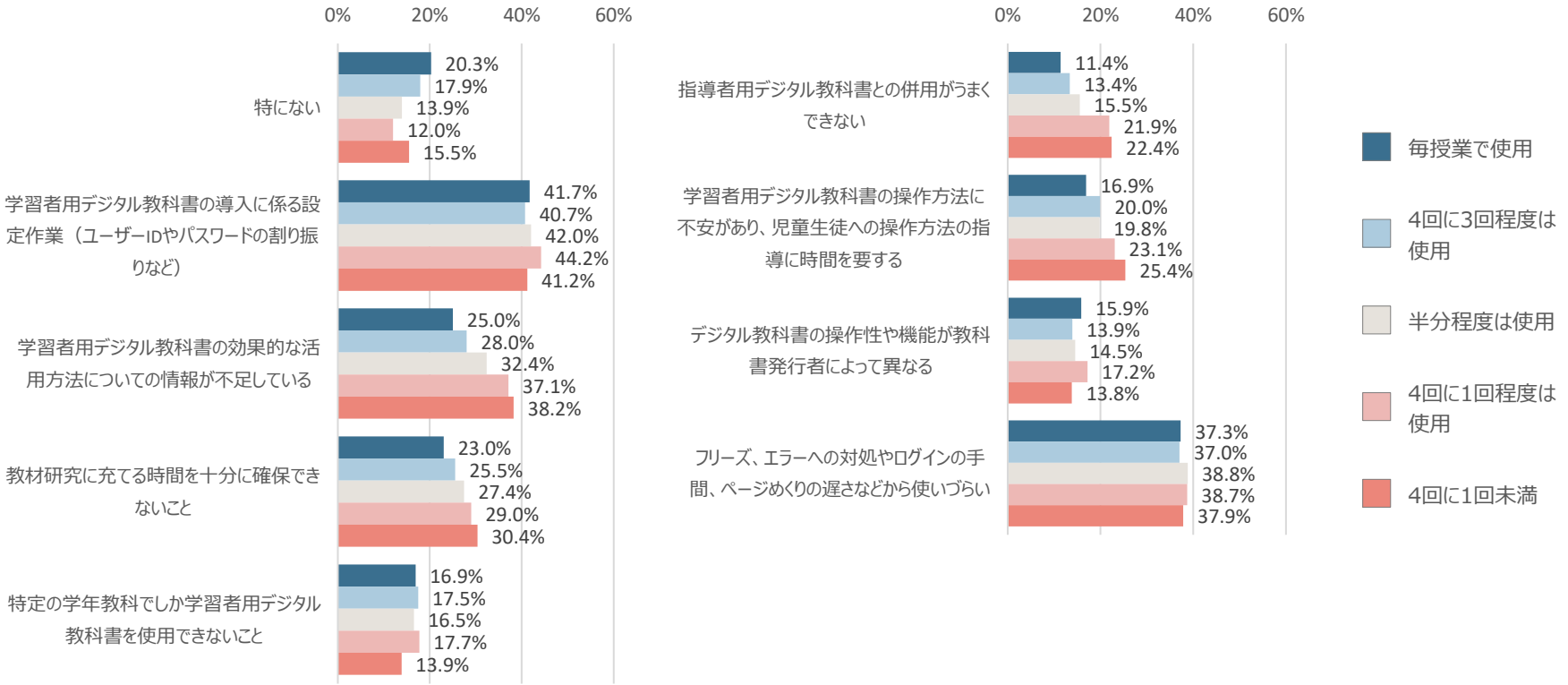
全教科総計 | 小中学校教師

分析⑤-4 デジタル教科書の授業内での使用頻度と、デジタル教科書の課題感の関連

教師Q.4 使用頻度 × 教師Q.17 使用における課題（複数選択可） n=9,037

傾向/示唆

- **デジタル教科書の使用頻度が高い方が、デジタル教科書の課題感を感じている割合が少ない**傾向にある。（4回に1回未満の場合は、そもそもデジタル教科書をほとんど使っていないグループも含まれており、課題も感じない傾向にある。）



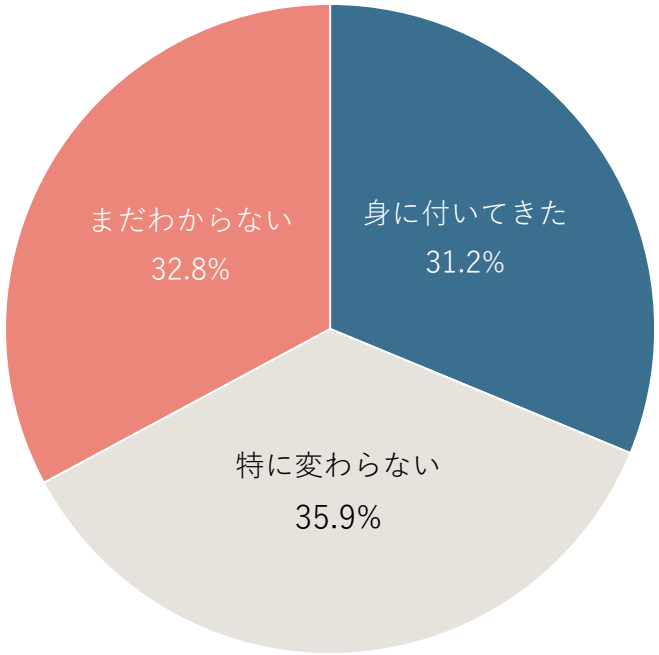
©2026 ABeam Consulting Ltd.

分析⑤-5 デジタル教科書の活用と情報モラルとの関係

教師Q.16 情報モラルとの関係（※1） n=9,037

傾向/示唆

- 一定割合の教師は、デジタル教科書の活用と情報モラル（ID・PW等の自身に関する情報を適切に管理できる、調べもの学習の際にインターネット上のWebページの安全性・信頼性を考慮できる、インターネット上のコンテンツの権利関係を意識しながら利用できるなど）の習得に関連性を見出していることが分かる。



（※1）児童生徒が学習者用デジタル教科書を活用することで、情報モラルを守る態度が身に付いてきたと感じているか回答。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

全教科総計 | 小中学校教師

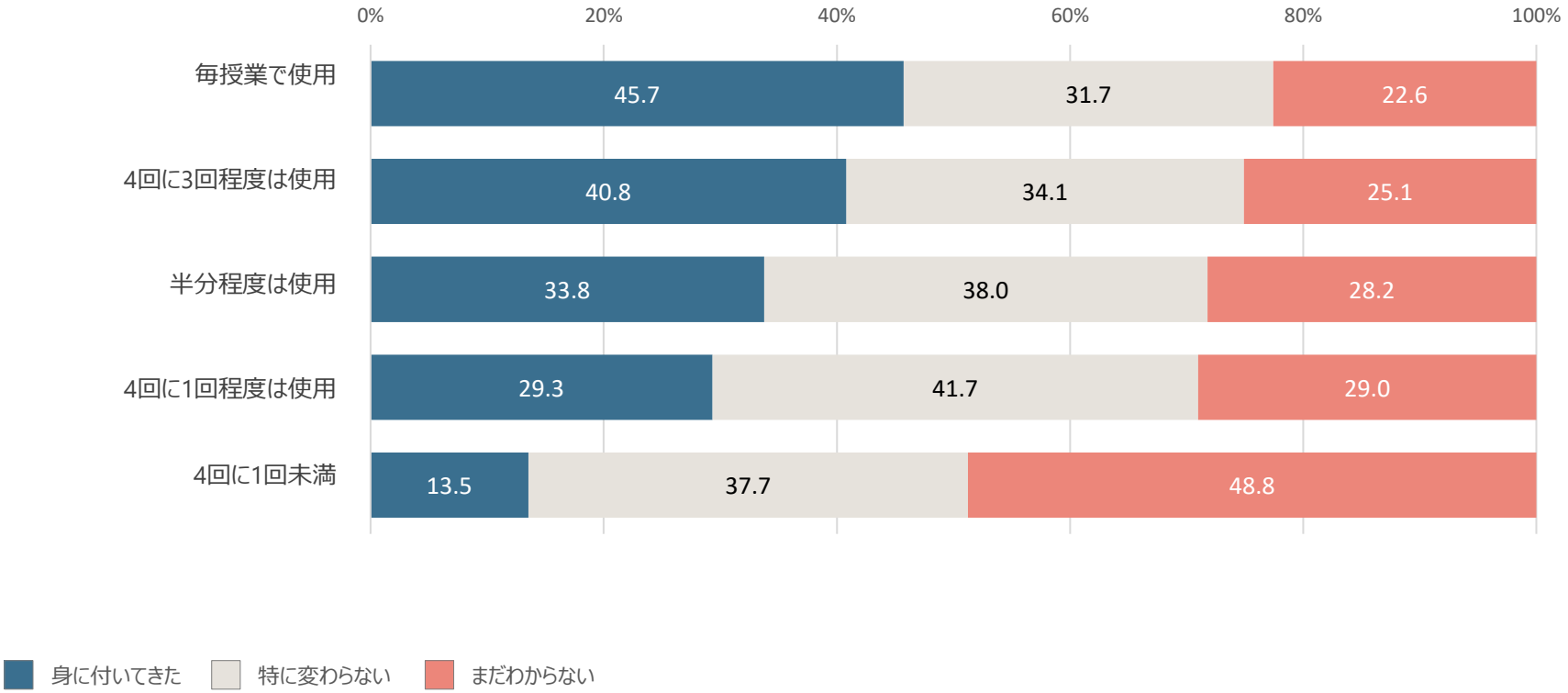
分析⑤-6 デジタル教科書の授業内での使用頻度と情報モラルの関連

教師Q.5 使用頻度 × 教師Q.16 情報モラルとの関係

n=9,037

傾向/示唆

- デジタル教科書を「毎授業で使用」している教師は、児童生徒に情報モラルが身についてきたと回答した割合が大きい傾向にある。



©2026 ABeam Consulting Ltd.

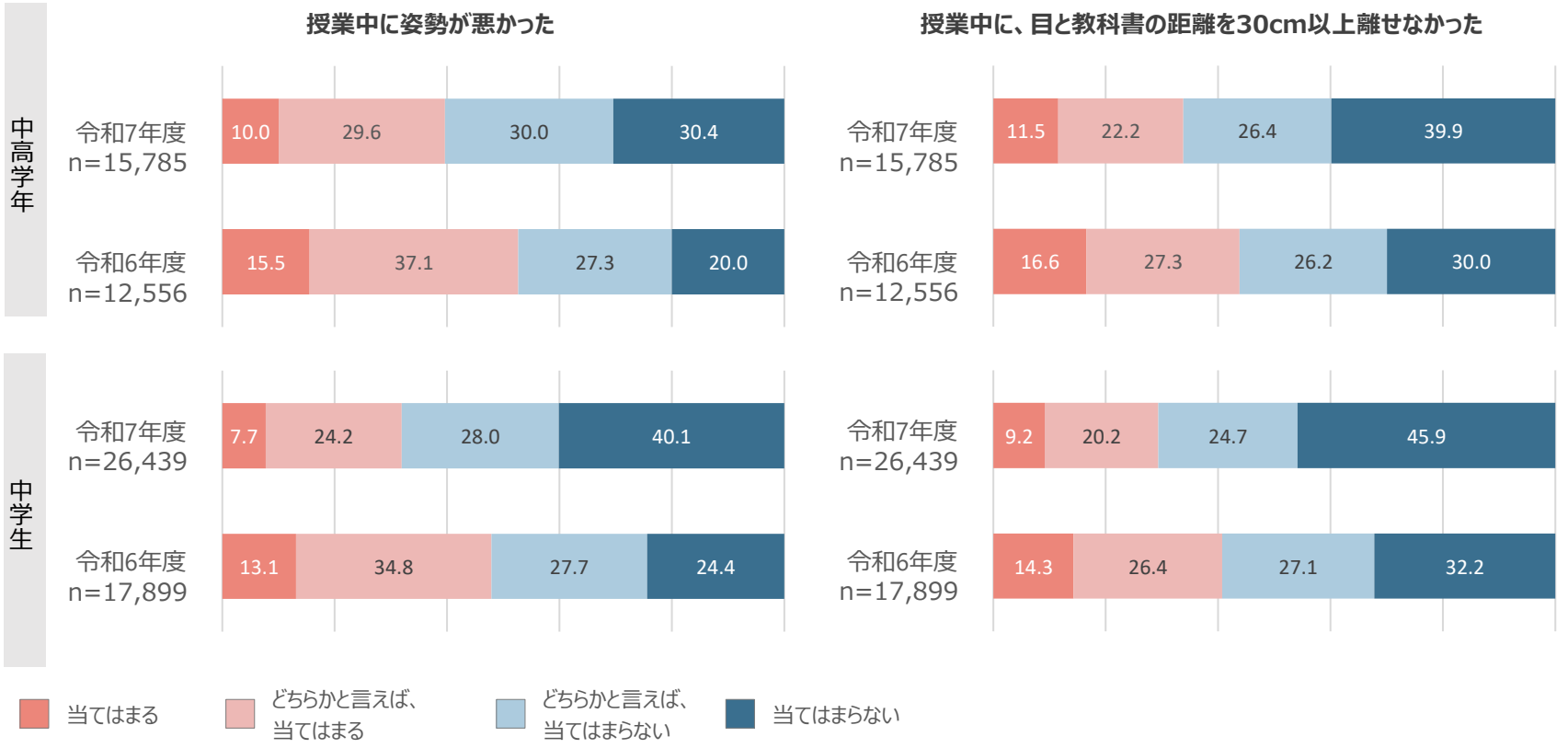
全教科総計 | 中高学年児童・中学校生徒

分析⑤-7 児童生徒の健康面への影響の経年変化

中高学年・中学生Q.5 健康面への影響　　中高学年：n=15,785　中学生：n=26,439

傾向/示唆

- 小学校中高学年と中学生ともに、令和６年度と比較して、「授業中の姿勢」と「目と教科書の距離」に注意できていた児童生徒の割合が増えている。



©2026 ABeam Consulting Ltd.

全教科総計 | 小中学校教師

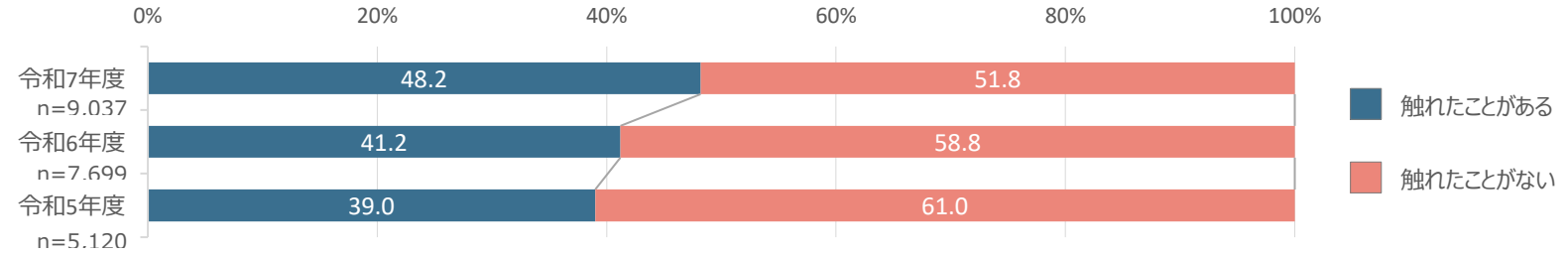
分析⑥-1 デジタル教科書に関する情報に触れた経験の経年変化

教師Q.18 活用方法に関する情報に触れる機会、教師Q.19 活用方法に関する情報にどのように触れたか（複数選択可）

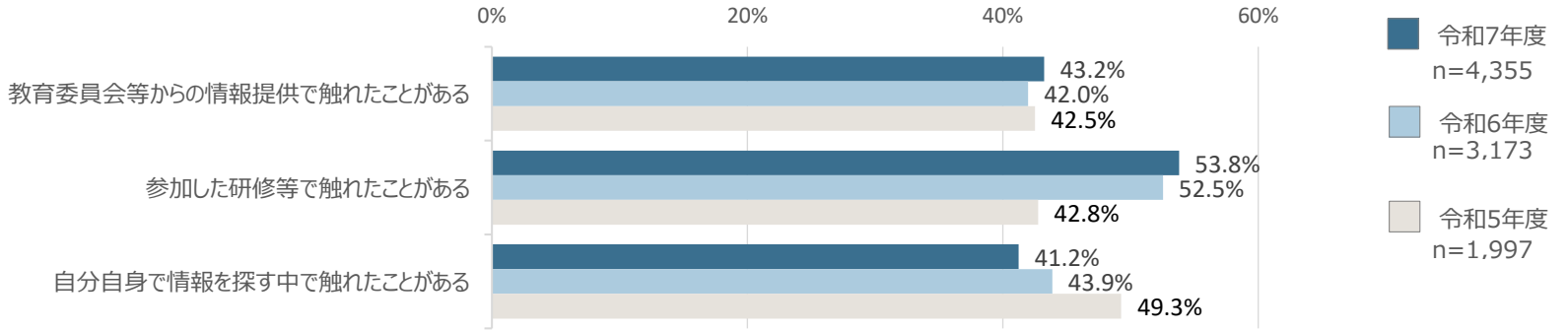
傾向/示唆

- 令和5年度から令和7年度にかけ、デジタル教科書に関する情報に「触れたことがある」人の割合が増加している。
- 情報に触れた経緯は「参加した研修等で触れたことがある」と回答した人が増加傾向にある。

デジタル教科書の活用方法に関する情報に触れる機会



デジタル教科書の活用方法に関する情報にどのように触れたか



©2026 ABeam Consulting Ltd.

全教科総計 | 小中学校教師

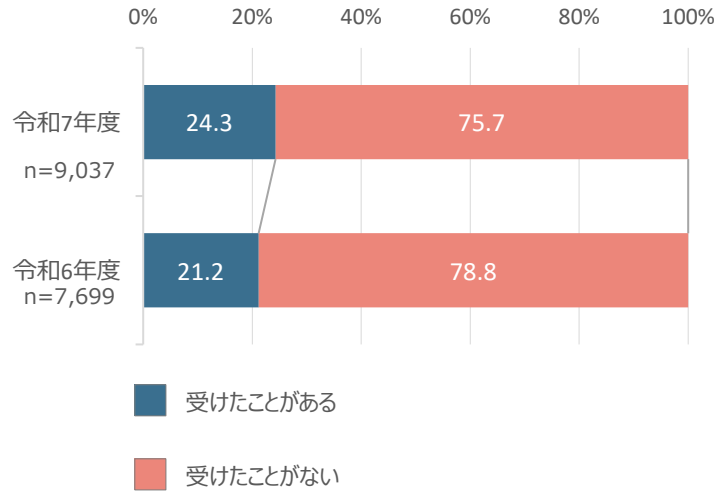
分析⑥-2 デジタル教科書に関する研修を受けた経験の経年変化

教師Q.20 研修を受けた経験、教師Q.21 受けた研修の内容（複数選択可）

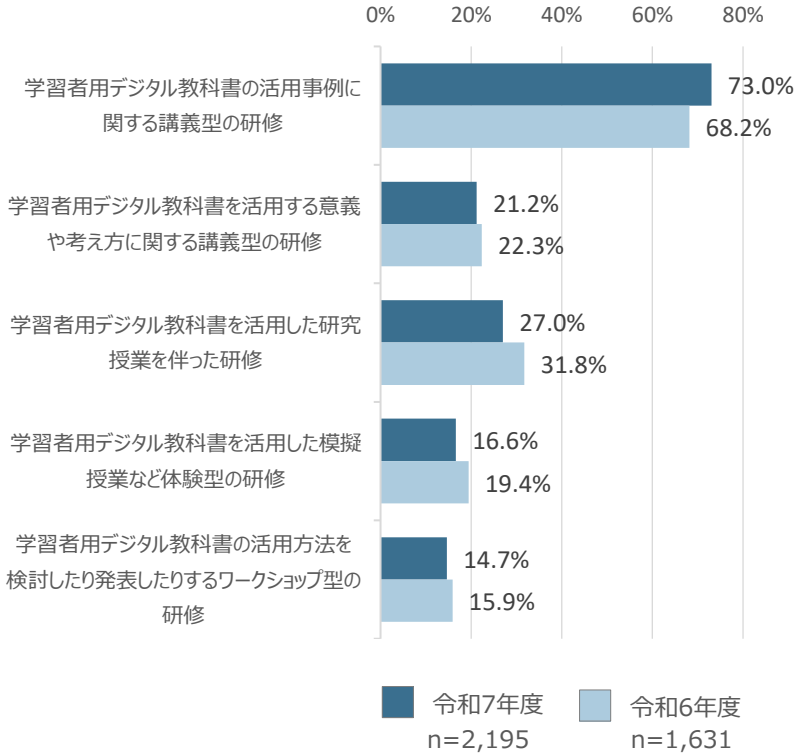
傾向/示唆

- 令和６年度から令和７年度にかけ、デジタル教科書に関する研修を「受けたことがある」人の割合が増えた。
- デジタル教科書に関する研修を「受けたことがある」人のうち、「学習者用デジタル教科書の活用事例に関する講義型の研修」を受けた人の割合が増えた。

学習者用デジタル教科書に関する研修を受けたことがあるか



どのような研修を受けたことがあるか



©2026 ABeam Consulting Ltd.

全教科総計 | 小中学校教師

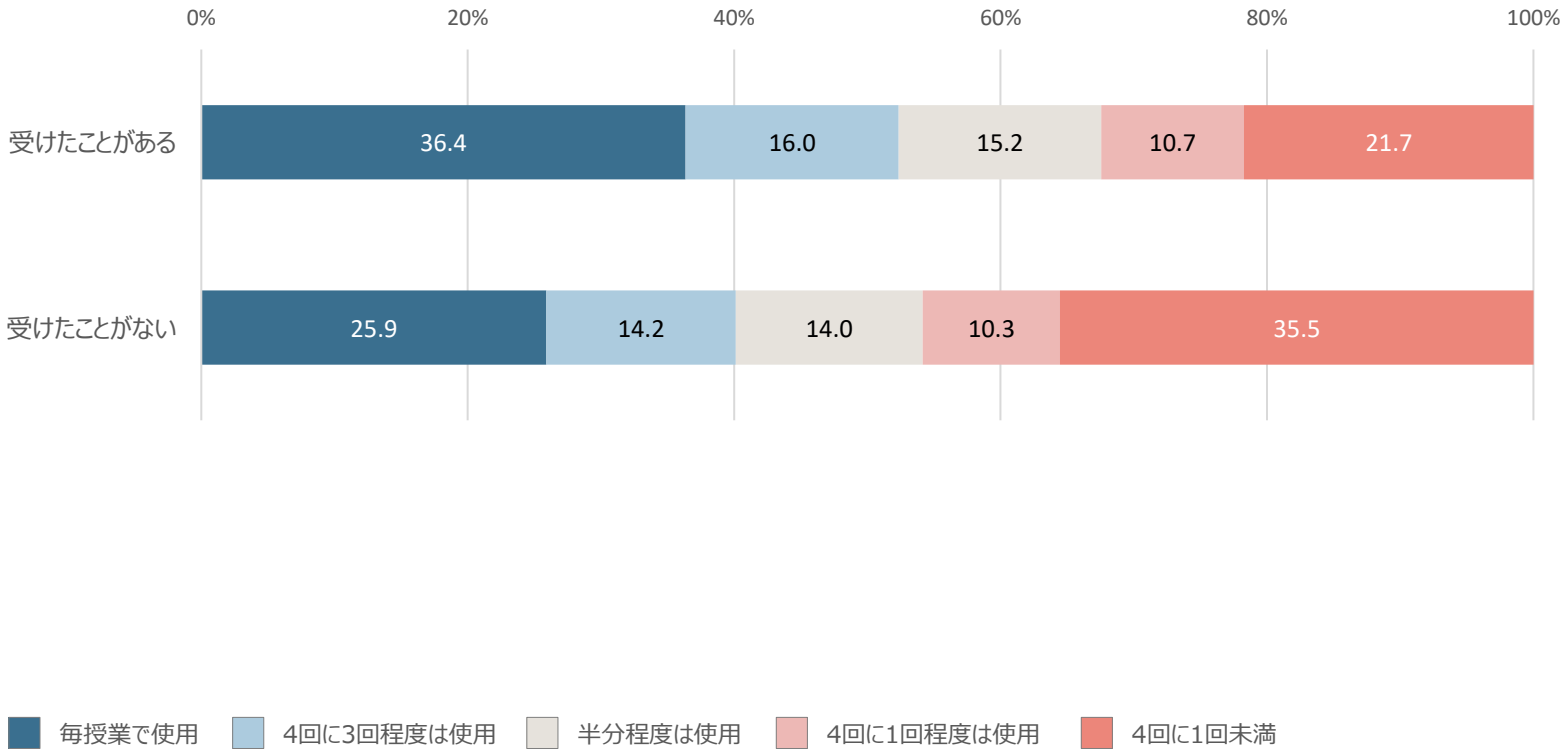
分析⑥-3 デジタル教科書の使用頻度と、デジタル教科書に関する研修を受けた経験の関連

教師Q.5 使用頻度 × 教師Q.20 研修を受けた経験

n=9,037

傾向/示唆

- デジタル教科書に関する研修を受けた経験があると回答した教師は、研修を受けたことがないと回答した教師に比べ、授業中の使用頻度が高い。



©2026 ABeam Consulting Ltd.

全教科総計 | 小中学校教師

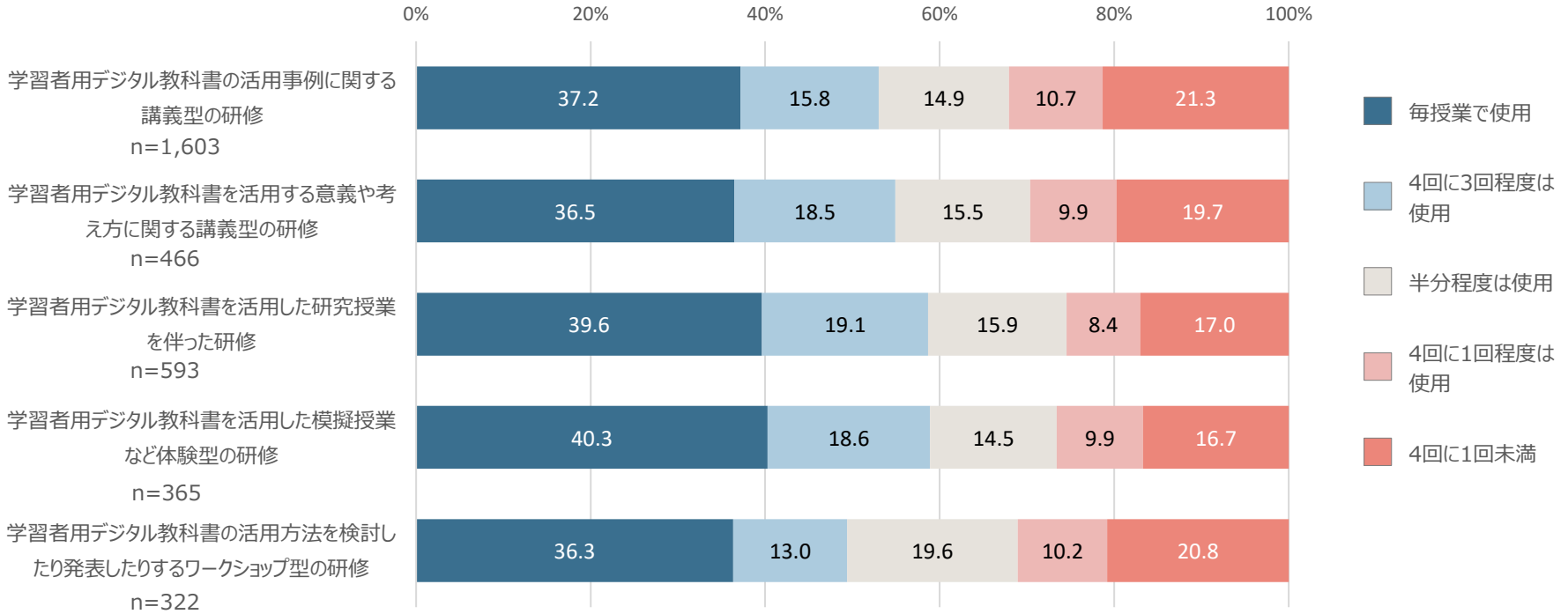
分析⑥-4 デジタル教科書の使用頻度と、受けたことのある研修の内容の関連

教師Q.5 使用頻度 × 教師Q.21 受けた研修の内容（複数選択可）

n=2,195

傾向/示唆

- 「学習者用デジタル教科書を活用した模擬授業など体験型の研修」を受けたことがある教師の約40%が、デジタル教科書を毎授業で使用しており、講義型の研修やワークショップ型の研修を受けたことのある教師よりも、デジタル教科書の活用頻度がやや高い。



©2026 ABeam Consulting Ltd.

全教科総計 | 小中学校教師

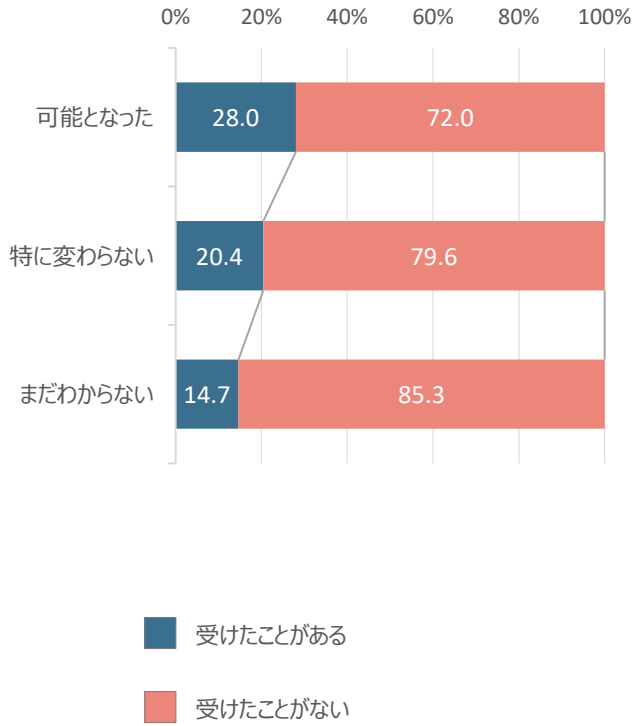
分析⑥-5 デジタル教科書に関する研修を受けた経験と、デジタル教科書の導入で可能になった授業展開の関連

教師Q.20 研修を受けた経験
×教師Q.11 デジタル教科書で新たな授業展開が可能になったか、教師Q.13 デジタル教科書で可能になった授業展開（複数選択可）

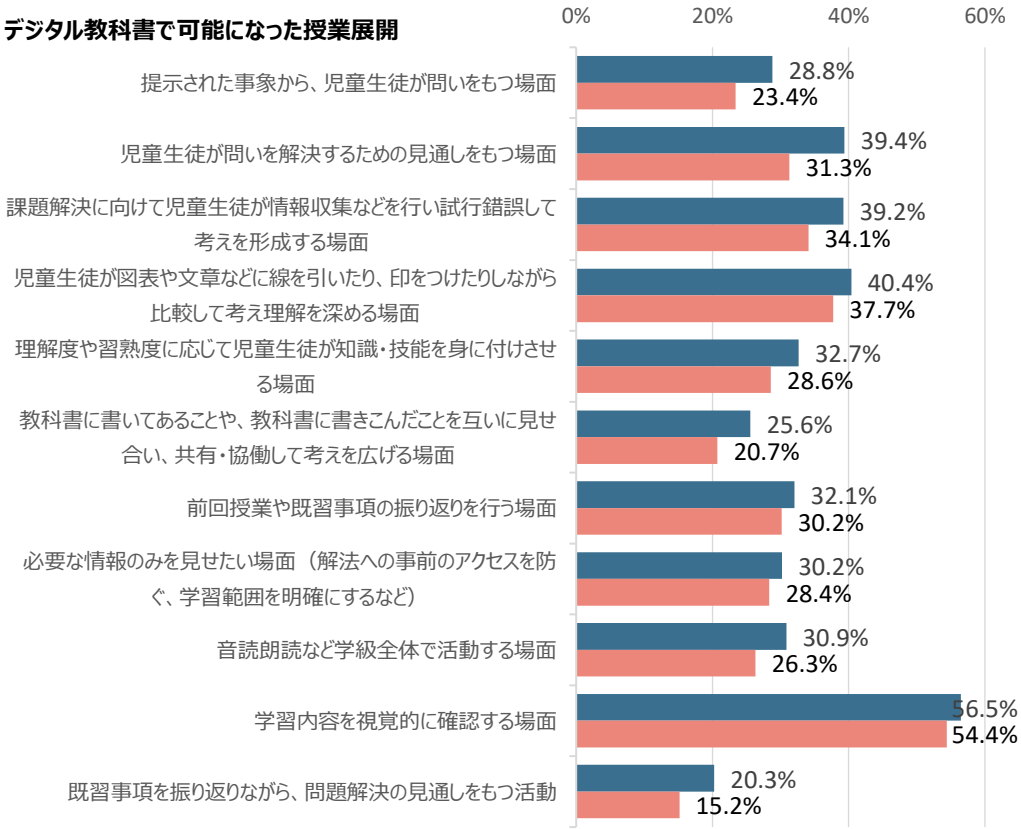
傾向/示唆

- デジタル教科書に関する研修を受けた人のほうが、デジタル教科書の導入によって新たな授業展開が「可能になった」と感じる人の割合が多い。
- いずれの授業場面でも、デジタル教科書の関する研修を受けた人のほうが、デジタル教科書の導入によって可能になったと回答した割合が高い。特に、「児童生徒が問いを解決するための見通しをもつ場面」は、研修を受けたことがない人よりも約8ポイント高い。
- また、「デジタル教科書で可能になった授業展開」として、研修を受けた人は平均で約2.9場面、受けたことがない人は約2.1場面回答しており、研修を受けた人はより授業展開のバリエーションが広がっていることが推察される。

デジタル教科書で新たな授業展開が可能になったか



デジタル教科書で可能になった授業展開



©2026 ABeam Consulting Ltd.

全教科総計 | 小中学校教師

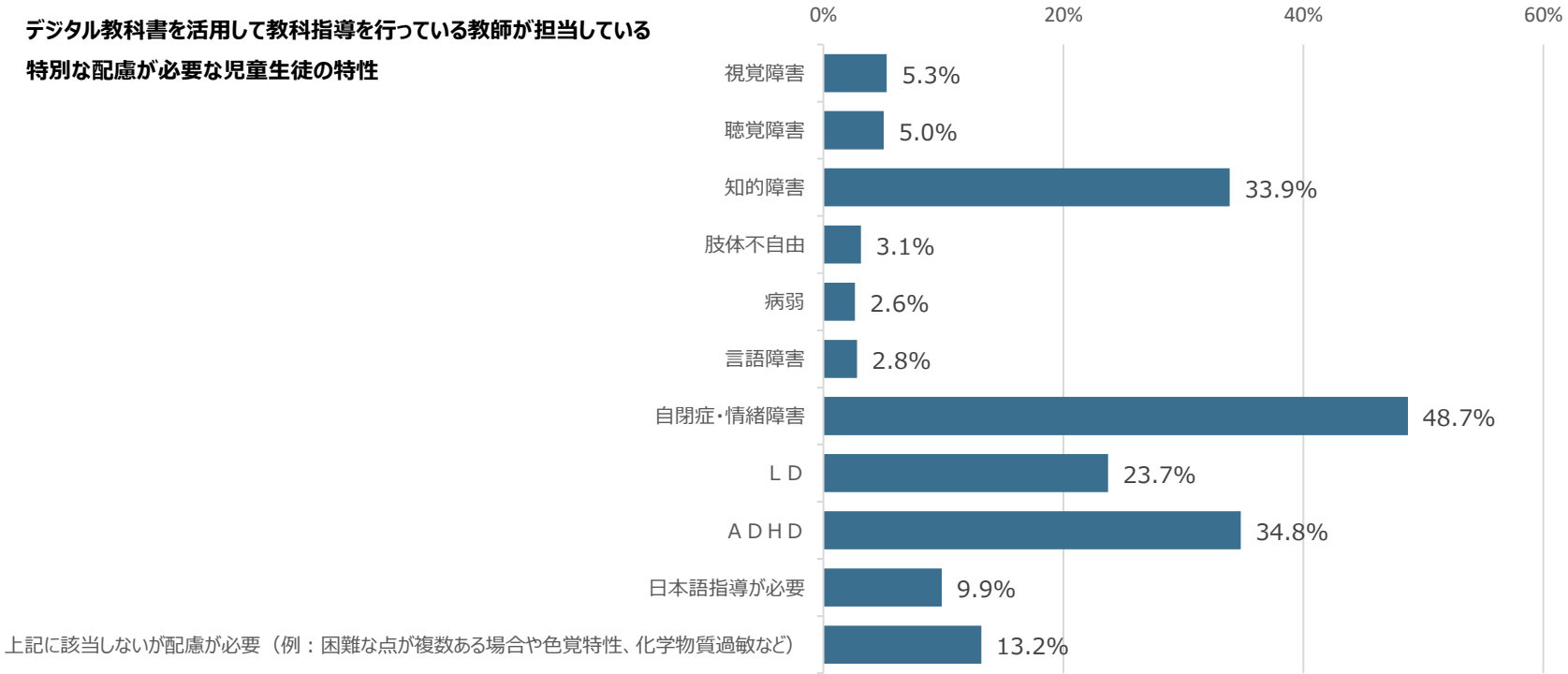
分析⑦-1 特別な配慮が必要な児童生徒の教科指導において、デジタル教科書を活用している観点

教師Q.9 必要な配慮の内容 n=9,037

傾向/示唆

- 特別な配慮が必要な児童生徒のうち、自閉症・情緒障害、ADHD、知的障害、LDの順に、デジタル教科書を活用して指導している教師の割合が多い。ただし、元々の特別な配慮が必要な児童生徒の割合に比例している点に留意する必要がある。
- これらの児童生徒への教科指導の詳細については、次頁以降の「追加ヒアリング調査結果」も参照。

デジタル教科書を活用して教科指導を行っている教師が担当している特別な配慮が必要な児童生徒の特性



©2026 ABeam Consulting Ltd.

4. 大規模アンケート調査等の分析結果
4.3. 追加ヒアリング調査結果

■ アンケート調査では十分な把握が困難な、要配慮児童生徒へのデジタル教科書の効果を分析するため、過年度調査では対象としていなかった国語・理科・社会について、当該教科を担当する教員を対象にヒアリング調査を行いました。

① 鳥取市立若葉台小学校

国語 | LD、ADHD

デジタル教科書等の利用状況

- 教科書発行者：光村図書出版
- デジタル教科書の利用開始時期：令和５年度
- デジタル教科書の使用頻度：毎時間／児童が自由選択
- デジタル教科書の主な利用機能：拡大、シミュレーション
- 教室で利用しているICT機器等：コラボレーションツール

学習上の困難

- 文字を読むことが苦手で、情報を一気に与えられると捉えきれない。
- 漢字を中心に書字が苦手な傾向にある。
- 話の聞き逃しや言葉の捉え違いをすることが多い。

デジタル教科書の活用場面

■ **デジタル教科書等ICT機器を活用した場面・活用方法**

- 授業前に教科書本文の音声を聞かせておき、授業での範読の時間を短縮。
- 教科書本文を読んで、気付きがあった箇所は赤、わからない箇所は青で色を付け、教科書紙面のスクリーンショットを授業前にコラボレーションツールで提出させる。
- 拡大機能やルビ機能を活用して本文を読みやすくする。

■ **活用による児童の変化**

- 紙より端末で文章を読むことに慣れている児童が多く、デジタル教科書の導入で、より集中して本文を読めるようになった。
- 本文を読む際にスクロール機能を使用することで、紙でめくりながら読む場合と比べ、児童が文章間のつながりを捉えやすくなった。

考察／示唆

■ **書き込み機能の効果**

- さまざまな情報を同時に捉えることが苦手な児童も、教科書本文に色分けして線を引くことで、**必要な情報を視覚的に捉えやすくなる**と考えられる。

■ **拡大機能の効果**

- 小さな文字に拒否感のある児童は、デジタル教科書の拡大機能により、見たい箇所のみを確認でき、**授業に集中しやすくなる**と考えられる。

■ **指導負担の軽減に関する効果**

- 家庭学習で教科書本文の音声を聞かせておくことで、文字を読むことが苦手な児童のフォローや児童同士の意見交換に時間を割けるようになる。
- 児童の疑問点がコラボレーションツールに共有され、授業前に把握できるので、児童の問いやわからなさに合わせて授業準備ができる。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

■ （前頁の続き）

② 枚方市立渚西中学校

理科　自閉症・情緒障害、ADHD

デジタル教科書等の利用状況

- 教科書発行者：啓林館
- デジタル教科書の利用開始時期：令和３年度
- デジタル教科書の使用頻度：ほぼ毎時間
- デジタル教科書の主な利用機能：シミュレーション、動画
- 教室で利用しているICT機器等：コラボレーションツール

学習上の困難

- 落ち着きがなく、色々な生徒に話しかけに行く傾向にある。
- 書字に課題のある生徒がみられる。
- 一斉の指示や配布された資料だけでは、１人で課題に取り組めないことが多い。

デジタル教科書の活用場面

■ デジタル教科書等ICT機器を活用した場面・活用方法

- 生徒は手元の端末で、デジタル教科書の動画やシミュレーション機能を自由なタイミングで繰り返し活用している。
- 授業内容をコラボレーションツールにまとめることを単元ごとの課題としている。生徒は、タイピングやかな入力（五十音キーボード）を用いた入力、デジタル教科書中の資料のキャプチャ・貼り付けなどにより、まとめを作成。

■ 活用による生徒の変化

- デジタル教科書を導入し、生徒が自分なりの方法で課題に取り組むことができるようになった。また、コラボレーションツールと組み合わせることで、他の生徒の課題への取組状況を参照できる環境も整った。その結果、生徒は課題であるまとめ作成を丁寧に取り組むようになった。

考察／示唆

■ 動画・シミュレーション機能の効果

- 落ち着きのない生徒でも、手元のデジタル教科書で好きなタイミングで動画を視聴できることで、**集中して課題に取り組めるようになる**と考えられる。

■単元のまとめを作成する課題をデジタル化したことの効果

- 書字に課題のある生徒は、タイピングで課題に取り組め、仕上がりが丁寧になった。**課題に取り組む負担が減少した**と考えられる。
- １人では課題に取り組みづらい生徒も、課題や資料等の情報が端末内に集まることで、**課題を理解し情報を整理しやすくなると**考えられる。

■ 指導負担の軽減に関する効果

- 一斉指導より、生徒への個別のフォローに時間を割けるようになった。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

4. 大規模アンケート調査等の分析結果
4.3. 追加ヒアリング調査結果

■ （前頁の続き）

③ 那珂川市立安徳南小学校

社会　知的障害、自閉症・情緒障害

デジタル教科書等の利用状況

- 教科書発行者：教育出版
- デジタル教科書の利用開始時期：令和６年度
- デジタル教科書の使用頻度：毎時間使用
- デジタル教科書の主な利用機能：動画、書き込み
- 教室で利用しているICT機器等：コラボレーションツール

学習上の困難

- 紙の教科書の文字を読んでも、具体的なイメージを持つことができず、そこから自分の考えを言語化することが難しい。
- 自分の分からないことがあると混乱してしまう傾向にある。

デジタル教科書の活用場面

■ デジタル教科書等ICT機器を活用した場面・活用方法

- デジタル教科書から視聴できる動画を活用している。児童の生活との関連が薄い水産業の単元では、動画により漁業への理解を促進した。
- デジタル教科書中の資料をキャプチャし、学習支援ソフト上のノートに貼り付けさせ、資料を見て気付いたことを、デジタル教科書に直接書き込ませている。
- 児童が考えを説明する際、提示したい資料だけを拡大表示している。

■ 活用による児童の変化

- 動画や資料を用いると、学習内容を視覚的に理解しやすくなり、児童の学習意欲が向上している。

考察／示唆

■ 書き込み機能の効果

- 紙のノートに考えをまとめることが難しい児童も、教科書から資料を探す活動や、学習支援ソフト上のノートにデジタル教科書の資料を切り貼りする活動には取り組みやすい。自分１人でノートをまとめ、複数の資料を比較参照することができ、**授業への参加意欲が向上した**と考えられる。
- 資料からの情報の整理が難しい児童でも、デジタル教科書の資料に丸や矢印を書き込み「ここがこうなっている」と言えば、他の児童が「○○が増えていると思ったんだね」など言葉を補うことができ、児童の考えを解釈してもらいやすい。児童が**自分の考えを伝える機会を増やすことに繋がる**と考えられる。

■指導負担の軽減に関する効果

- 授業準備での資料探しや、児童への説明の時間が短縮され、児童が考える時間や考えを深掘りする時間が増えた。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

4. 大規模アンケート調査等の分析結果
（参考1）授業全体の使用頻度別の教科ごとのサンプル数

- 主なクロス集計の対象となっている、授業でのデジタル教科書の使用頻度について、教科別のサンプル数を参考として示します。
- 赤色セルの区分では、標本誤差が大きく（10%超）、分析結果では該当するグラフに◆を記載しています。

各教科におけるデジタル教科書の使用頻度の回答数

教師の使用頻度	全教科
100%（毎授業で使用）	2,571
75%（4回に3回程度は使用）	1,323
50%（半分程度は使用）	1,294
25%（4回に1回程度は使用）	941
25%未満（4回に1回未満）	2,908

小学生（中高学年）の使用頻度	国語	算数	英語	理科	社会	全教科
いつも使う	377	127	227	121	350	1,215
だいたい使う （4回に3回程度）	680	218	283	328	522	2,061
ときどき使う （2回に1回程度）	746	259	252	318	538	2,147
たまに使う （4回に1回程度）	1,331	576	312	602	821	3,725
使わない	2,059	1,513	964	437	1,493	6,617

小学生（低学年）の使用頻度	全教科
いつも つかう	3
だいたい つかう	14
ときどき つかう	16
たまに つかう	35
わからない	94

中学生の使用頻度	国語	数学	英語	理科	社会	全教科
いつも使う	184	140	169	662	322	1,753
だいたい使う （4回に3回程度）	313	169	228	670	293	1,950
ときどき使う （2回に1回程度）	450	236	284	837	256	2,430
たまに使う （4回に1回程度）	1,036	487	564	1,896	525	5,279
使わない	1,813	1,245	1,697	5,892	1,947	15,027

※「全教科」は主要5教科以外の教科も含む総数。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

4. 大規模アンケート調査等の分析結果
（参考1）個別・協働・振り返りの場面での使用頻度別の教科ごとのサンプル数

■　（前頁の続き）

学習場面別の各教科における使用頻度の回答数

小学生（中高学年）の使用頻度	個別学習の場面での使用頻度						協働学習の場面での使用頻度						振り返りの場面での使用頻度					
	国語	算数	英語	理科	社会	全教科	国語	算数	英語	理科	社会	全教科	国語	算数	英語	理科	社会	全教科
いつも使う	471	116	218	185	396	1,401	518	125	167	194	390	1,408	409	95	152	148	301	1,122
だいだい使う （4回に3回程度）	600	197	198	274	436	1,730	611	184	219	235	382	1,660	500	160	172	234	342	1,429
ときどき使う （2回に1回程度）	710	262	246	282	493	2,041	691	239	261	274	437	1,944	666	254	212	294	431	1,890
たまに使う （4回に1回程度）	899	369	258	413	614	2,596	784	348	229	410	557	2,375	835	272	232	404	576	2,360
使わない	2,513	1,749	1,118	6,52	1,785	7,997	2,589	1,797	1,162	693	1,958	8,378	2,783	1,912	1,270	726	2,074	8,964

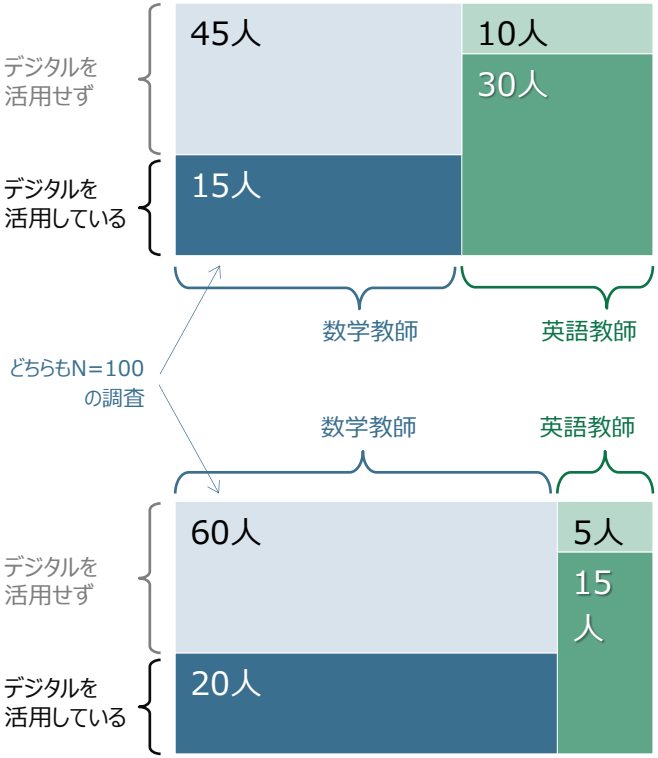
中学生の使用頻度	個別学習の場面での使用頻度						協働学習の場面での使用頻度						振り返りの場面での使用頻度					
	国語	数学	英語	理科	社会	全教科	国語	数学	英語	理科	社会	全教科	国語	数学	英語	理科	社会	全教科
いつも使う	283	101	142	772	263	1,818	268	92	96	680	235	1,627	247	68	92	686	246	1,650
だいだい使う （4回に3回程度）	337	128	190	588	211	1,733	344	111	164	588	224	1,702	277	97	136	562	227	1,545
ときどき使う （2回に1回程度）	493	191	286	826	290	2,473	473	192	247	823	272	2,407	453	196	246	821	272	2,331
たまに使う （4回に1回程度）	557	317	346	1,190	383	3,305	524	278	290	1,105	361	3,017	545	259	292	1,079	337	2,983
使わない	2,126	1,540	1,978	6,581	2,196	17,110	2,187	1,604	2,145	6,761	2,251	17,686	2,274	1,657	2,176	6,809	2,261	17,930

©2026 ABeam Consulting Ltd.

4. 大規模アンケート調査等の分析結果
（参考2）経年変化分析の留意点：回答者構成の変化に伴う影響（1/2）

- 過年度の調査結果と比較する際、年度間で回答者の構成（教科の構成比）が著しく異なる場合には、単純比較が適当でない（時系列的な傾向を正しく捉えられない）可能性があります。（左図）
- 回答者構成の差異による影響の大きさを評価するために、“過年度調査の回答者構成”を“今年度調査の回答者構成”と揃えることによって、調査結果の補正を行い、補正前の値と補正後の値の比較・検証を行います。
- このとき、補正前後で大きく値が変わる場合には、”構成比の変化による影響”が大きく、単純比較では、”経年変化による影響”を正しく捉えられていない恐れがあります。

単純比較が適当でない場合のイメージ



補正の方法

R6年度調査結果

教師によるデジタル活用割合

数学：25%（60人中15人）

英語：75%（40人中30人）

全体：45%（100人中45人）

構成比をR7年度に揃え、（数：英＝80:20 に統一）構成比変化の影響を補正

補正後R6年度調査結果

教師によるデジタル活用割合

数学：25%（80人中20人）

英語：75%（20人中15人）

全体：35%（100人中35人）

実際の活用状況には変化がないものの、構成比（数：英＝60:40→80:20）の変化に伴い、全体傾向が悪化してしまう

R7年度調査結果

教師によるデジタル活用割合

数学：25%（80人中20人）

英語：75%（20人中15人）

全体：35%（100人中35人）

補正後の値と比較すると、全体傾向の変化を正しく捉えられる

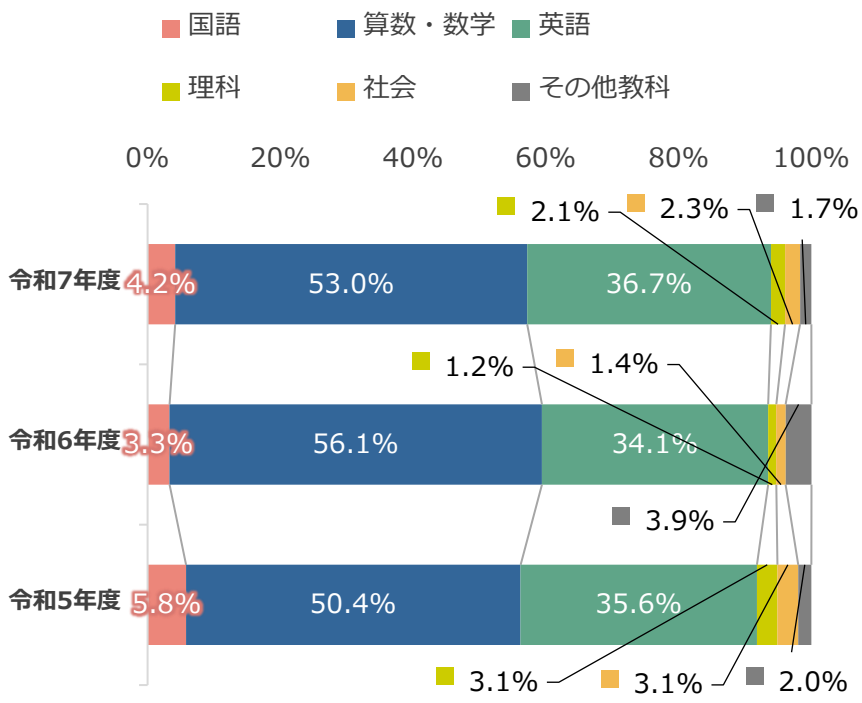
＝補正前後で大きく値が変わる場合には、構成比変化による影響が大きく、経年変化による影響を正しく捉えられていない恐れがある。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

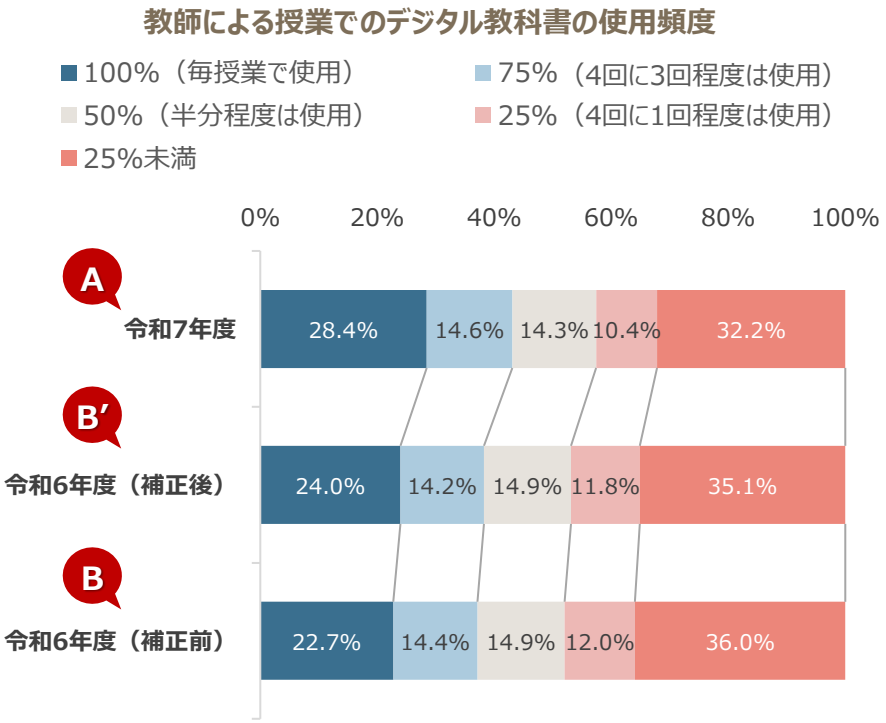
4. 大規模アンケート調査等の分析結果
（参考2）経年変化分析の留意点：回答者構成の変化に伴う影響（2/2）

- 令和6年度調査と令和7年度調査の教科構成比を比較すると、「算数・数学」の割合が3.1ポイント減少しており、それに伴い、「英語」、「国語」など他教科の割合が増加しています。（左図）
- 一方、主要指標である「教師による授業でのデジタル教科書の使用頻度」（令和6年度調査結果）について、補正前（右図B）と補正後（右図B′）を比較すると、その差異は最大1.3%となっています。このように、”構成比の変化による影響”（右図BとB′の差異）は“経年変化による影響”（右図AとB′の差異）に比べると小さく、無視できる程度と考えられます。
- 上記のように、分析の中で“経年変化による影響”が見られる際は、“構成比の変化による影響”にも留意した上で、報告書の記載を行っております。

教科構成比の比較



補正前後の値の比較



©2026 ABeam Consulting Ltd.

アビーム、ABeam及びそのロゴは、アビームコンサルティング株式会社の日本その他の国における登録商標です。
本文に記載されている会社名及び製品名は各社の商号、商標又は登録商標です。　　©2026 ABeam Consulting Ltd.

ABeam Consulting®

Build Beyond As One.

令和７年度
学習者用デジタル教科書の効果・影響等に関する実証研究事業

成果報告書

（市町村教育委員会及び
実証研究校における授業改善に関する調査研究）

2026年3月31日

ABeam Consulting®

Build Beyond As One.

目次

1. 事業概要 **p.2**

1.1. 本事業の背景・目的 3
1.2. 本事業の全体像 5
1.3. 有識者会議の開催 6

2. 実証研究の方法 **p.7**

2.1. 授業改善プロセスの全体像 8
2.2. 授業改善の評価スキーム 9
2.3. 評価スキームを用いた評価・検証の流れ 10

3. 各実証校・地域における取組 **p.11**

3.1. 鹿屋市立鹿屋中学校（外国語） 11
3.2. 越前町立糸生小学校（算数） 27
3.3. 奈良市立ならやま小中学校（国語） 44
3.4. 山都町立矢部中学校（理科） 60
3.5. 深谷市立藤沢中学校（社会） 77
3.6. 地域内展開 94

4. 実証研究結果の総括 **p.97**

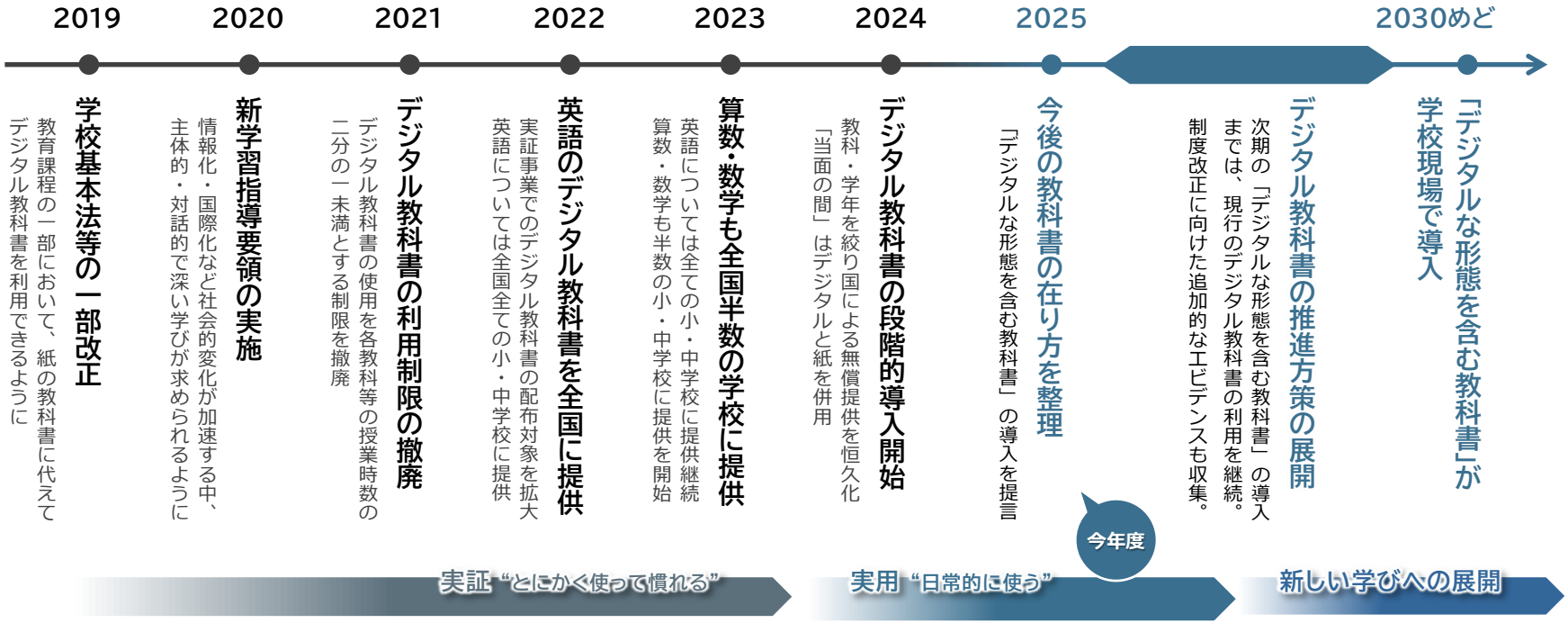
©2026 ABeam Consulting Ltd.

1. 事業概要

1. 事業概要
1.1. 本事業の背景・目的（1/2）

- 学習者用デジタル教科書（以下「デジタル教科書」という。）は、2019年の法改正により、紙の教科書に代えて使用できる教材として位置付けられ、英語を皮切りにデジタル教科書の段階的な導入が進められてきました。また、中央教育審議会の下に設置された「デジタル教科書推進WG」の審議まとめ（2025年）においては、今後は、**教科書の形態として紙だけでなくデジタルも認め、検定・採択・義務教育段階の無償給与などの対象とする**ことが適当とされました。
- これを受けて、所要の制度改正を前提に、**デジタルも取り入れて作成される新たな教科書**（デジタルな形態を含む教科書）**が導入され、現行のデジタル教科書の活用の成果を踏まえつつ、学校現場で広く活用されることになります。**本事業では、これら議論のエビデンスとなる情報を収集・整理することを目的に実施しました。

デジタル教科書の導入に係るこれまでの経緯と今後の動き

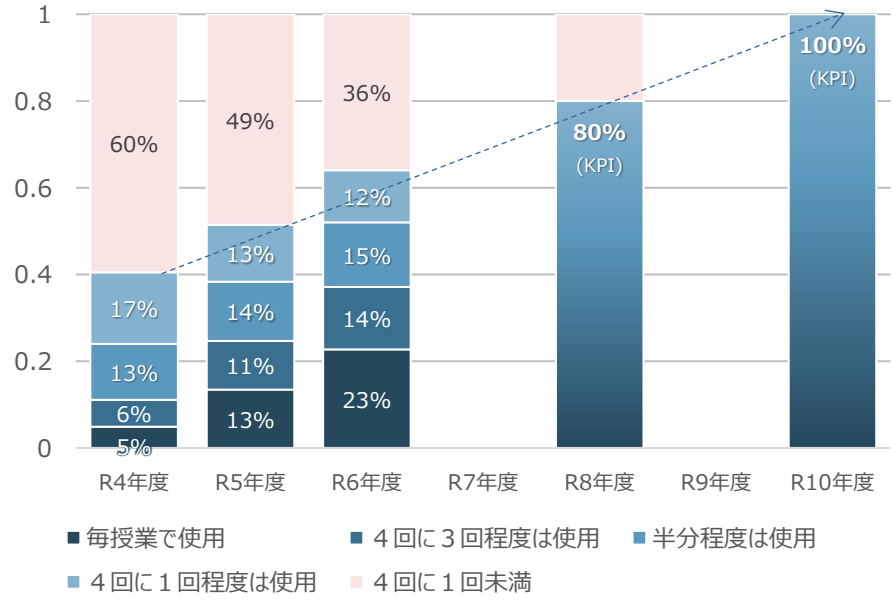


©2026 ABeam Consulting Ltd.

1. 事業概要
1.1. 本事業の背景・目的（2/2）

- **デジタル教科書をはじめとするICT等は、**その活用を通じ、**個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させ、主体的・対話的で深い学びの視点から授業改善の効果を高めることが期待されています。**実際に、「教師の授業でのデジタル教科書の使用頻度」は年々増加傾向にあり、教育現場においても、活用による効果が理解され、浸透しつつあるものと考えられます。（下図参照）
- 一方、過年度の実証事業からは、活用の程度は、自治体・学校・教員によっても相当の差異があり、また、活用事例も英語や算数・数学に偏っている現状が明らかとなっています。**教員研修等の取組を通じて、デジタル教科書が効果を発揮する場面やその活用方法を周知し、**より多くの教員がデジタル教科書を授業に取り入れるようにするとともに、**教科や発達段階別の好事例を更に創出し、デジタル教科書を活用する教員の裾野を広げる**ことが重要です。

教師の授業でのデジタル教科書の使用頻度の推移 ※1



デジタル教科書の活用に関する現状 ※1

デジタル教科書は、一人一人の良さを伸ばし困難の克服を助ける大きな可能性を秘めているが、**効果的な活用は緒に就いたばかり**

デジタル教科書等の導入・活用状況は、**自治体、学校によっても大きく差**があり、**教員の活用スキルも様々**

英語、算数・数学については比較的活用が進んでいるが、**その他の教科についてはまだ事例が少ない**

英語についても活用は４技能の一部に偏っていたり、個別最適な学習の用途が中心になるなど、**活用のバリエーションにはまだ課題がある**

発達段階別に見ると、小学校に比べ、**中学校での活用はまだ途上**

※1 令和6年度「学習者用デジタル教科書の効果・影響等の把握・分析等に関する実証研究事業」の成果物から弊社作成・分析

©2026 ABeam Consulting Ltd.

1. 事業概要
1.2. 本事業の全体像

- 前述の背景・目的から、本事業では次の3つの調査研究を実施しました。
- ①**「研修に関する調査研究」**では、全国5の都道府県教育委員会と連携し、有識者（次頁参照）の指導助言の下で、デジタル教科書の活用促進に関する研修の改善に取り組みました。②**「授業改善に関する調査研究」**では、全国から小学校を2校、中学校を3校選定し、同校と連携してデジタル教科書等を活用した授業改善に取り組みました。さらに、全国の小・中学校の教員及び児童生徒に対する③**「大規模アンケート調査等」**の実施を通じて、デジタル教科書が学習に及ぼす効果・影響を定量的・定性的に把握・分析しました。このうち、**本書は、②「授業改善に関する調査研究」の結果をまとめたもの**です。

本事業を構成する３つの調査研究

	都道府県教育委員会における **研修に関する調査研究**	市区町村教委及び実証研究校における **授業改善に関する調査研究**	デジタル教科書の効果・影響の把握に資する **大規模アンケート調査等**
対象	• 全国５の都道府県教育委員会 （埼玉県、福井県、奈良県、熊本県、鹿児島県）	• **左記の参加県教育委員会管下の小・中学校（合計５校）**	• 全国の小・中学校に所属する教員及び児童生徒（標本抽出）
実施内容	• 都道府県教育委員会が計画するデジタル教科書の活用に係る研修（年内２回）を対象に、有識者の指導助言の下、その改善と実践に取り組んだ。 • 研修の成果を定性的・定量的に評価し、どのように研修を実施すれば、効果的なデジタル教科書の活用促進に繋がるのかを検証した。	• 各校において、**主要５教科（外国語、算数、国語、理科、社会）の授業**（年内２回）を対象に、有識者の指導助言の下、その改善と実践に取り組んだ。 • また、一部では各校の取組を校内・地域内に展開。市町村教育委員会等とも連携し、デジタル教科書の活用促進を図った。	• 全国の小・中学校のうち、外国語、算数・数学のほか複数教科のデジタル教科書を使用している学校を対象に、教員及び児童生徒を抽出し、アンケート調査を実施した。 • 過年度との比較から経年変化を分析するほか、新規の調査観点を追加し分析を行った。 • 特別な配慮を必要とする児童生徒への影響については追加ヒアリング調査も実施。
成果物	• 研修計画、研修に使用した資料等一式 • 研修効果の検証結果　など	• 実践事例集 • 実践事例動画　など	• アンケート調査結果 • 追加ヒアリング調査結果　など
		本書の対象	

©2026 ABeam Consulting Ltd.

1. 事業概要
1.3. 有識者会議の開催

■ 本事業では、各調査研究の実施に当たっての指導・助言を得るため、デジタル教科書等の活用や各教科の指導に精通する有識者にご協力いただきました。また、各有識者には、「研修に関する調査研究」及び「授業改善に関する調査研究」について討議するWG、「大規模アンケート調査等」について討議するWGに参画いただき、本事業の実施内容及び成果に助言を頂きました。

有識者（WG委員）一覧

氏名	所属・職名	研修	授業改善	アンケート	担当県・教科
主査 中川 一史	放送大学 教授	○	○	○	―
副査※1 中橋 雄	日本大学 教授	○	○	○	―
齋藤 嘉則	東京学芸大学 教授	○	○	―	―※3
太田 洋	東京家政大学 教授	○※2	○※2	―	鹿児島県 （外国語）
岡部 恭幸	神戸大学 教授	○※2	○※2	―	福井県 （算数）
佐藤 幸江	放送大学 客員教授	○※2	○※2	―	奈良県 （国語）
岩﨑 有朋	札幌国際大学 教授	○※2	○※2	―	熊本県 （理科）
副査※1 小林 祐紀	放送大学 准教授	○※2	○※2	―	埼玉県 （社会）
副査※1 稲垣 忠	東北学院大学 教授	―	―	○	―
齊藤 萌木	聖心女子大学 講師	―	―	○	―

※1 研修に関する調査研究の副査を小林委員、授業改善に関する調査研究の副査を中橋委員、アンケートWGの副査を稲垣委員にそれぞれ依頼した。
※2 各委員には本事業に参加した全国５の県教育委員会が行う研修の内容等に直接の指導・助言を依頼し、各県の実証研究校における授業改善に関する指導・助言も依頼した。
※3 埼玉県研修における外国語科の視点からの指導・助言を担当いただいた。

開催要領

第1回 研修・授業改善WG
日時： 2025年７月18日
議事： 今年度の実証方針に関する意見交換

第2回 研修・授業改善WG
日時： 2025年11月12日
議事： 実証研究状況の報告及び以降の取組に向けた意見交換

第3回 研修・授業改善WG
日時： 2026年３月５日
議事： 実証研究結果の報告
研修・授業改善における成果と課題及び今後の取組方針に関する意見交換

第1回 アンケート調査WG
日時： 2025年８月（書面開催）
議事： 調査方針及び設問設計に対する意見聴取
標本設計に対する意見聴取

第2回 アンケート調査WG
日時： 2026年２月27日
議事： アンケート集計・分析結果の報告
分析結果に対する意見聴取

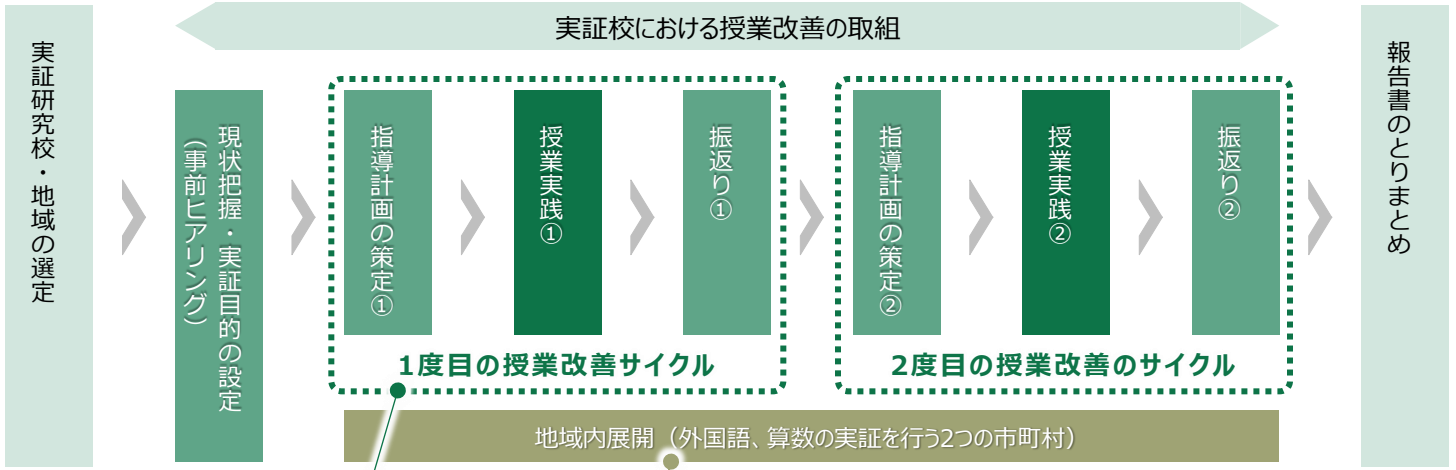
©2026 ABeam Consulting Ltd.

2. 実証研究の方法

2. 実証研究の方法
2.1. 授業改善プロセスの全体像

- 本事業では、小学校２校・中学校３校を実証研究校として選定し、５教科にてデジタル教科書等を活用した授業改善に取り組みました。実践では、以下に示す授業改善のサイクル（指導計画の策定、授業実践及び振返り）を２回行いました。
- これにより、１回目の授業実践で抽出された成果・課題を2回目の授業実践に繋げ、更なる改善を図るとともに、各実践の効果検証を通じて得られた示唆を整理することで、デジタル教科書を活用した効果的な授業改善モデルの創出に取り組みました。

実証研究の全体像



2度のサイクルを通じた授業改善

- 有識者の指導助言のもと、デジタル教科書の活用促進に向けた授業改善モデルを創出。
- 2度の授業改善のサイクルを通して、学習者の視点での学びに即した授業改善及び効果的な指導方法の整理を行う。

効果を波及させる地域内展開
（外国語、算数の実証を行う2つの市町村）

- 外国語、算数の授業改善で得られた成果を市町村内に展開し普及促進を加速。
- 身近な活用事例を横展開することで、教員の「まず使ってみよう」という一歩を促し、デジタル教科書活用の裾野を広げる。

デジタル教科書を活用した授業改善モデルの創出

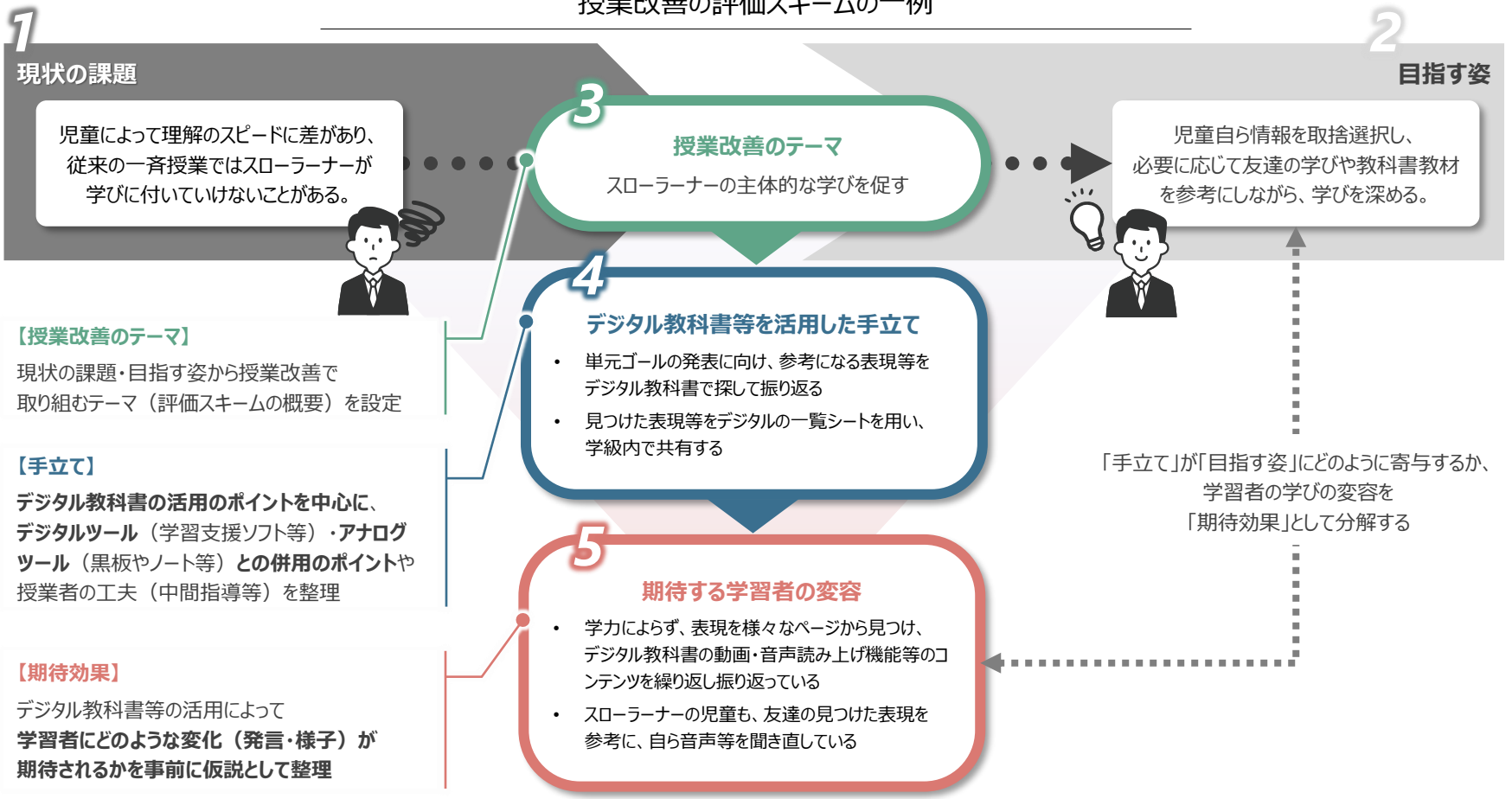
地域全体でのデジタル教科書の活用推進

©2026 ABeam Consulting Ltd.

2. 実証研究の方法
2.2. 授業改善の評価スキーム

- 前頁で示した授業改善のサイクルでは、以下の評価スキームを用い、各要素について関係者間で検証を行いました。
- 授業改善に向けて、**学級の「現状の課題」と「目指す姿」を出発点として取り組む「授業改善のテーマ」を設定し、デジタル教科書等を用いた「手立て」により学習者にどのような変化をもたらしたか（「期待する学習者の変容」）**を仮説的に整理しました。
- その上で、これら5つの要素の評価スキームを軸に、授業観察や児童生徒へのアンケート調査、関係者間の振返りを行い、定性・定量の両面から授業改善の効果を評価しました。

授業改善の評価スキームの一例



©2026 ABeam Consulting Ltd.

2. 実証研究の方法
2.3. 評価スキームを用いた評価・検証の流れ

- 前頁で示した「評価スキーム」を中心とした、実証研究の評価・検証の流れを以下に示します。
- 本事業の授業改善では、授業者の策定した指導計画を基に、有識者との協議を踏まえ「評価スキーム」を設定しました。
  授業実践及び振返りにおいては、「評価スキーム」を基に授業観察や児童生徒へのアンケートを行い、評価・検証を行いました。

指導計画の策定

i. 「**1 現状の課題**」と「**2 目指す姿**」に基づき、授業者にて指導計画の素案を策定いただく。

ii. 同案に基づき、有識者と協議の上、「**3 授業改善のテーマ**」を設定する。

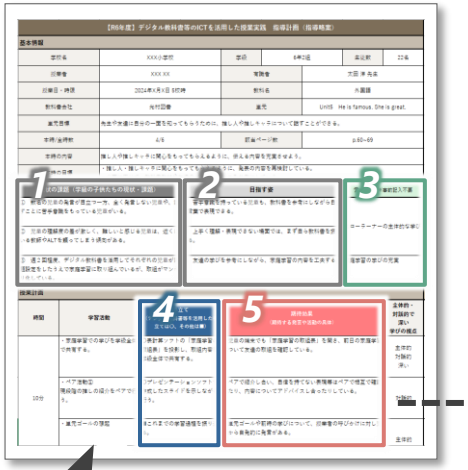
iii. 「**4 手立て**」とそれにより「**5 期待する学習者の変容**」を有識者と協議し、具体化・精査する。

iv. 協議の場で関係者間で精査した１～５の各要素について、授業実践で特に焦点化する内容を抽出し、弊社にて評価スキームの枠組みに整理する。

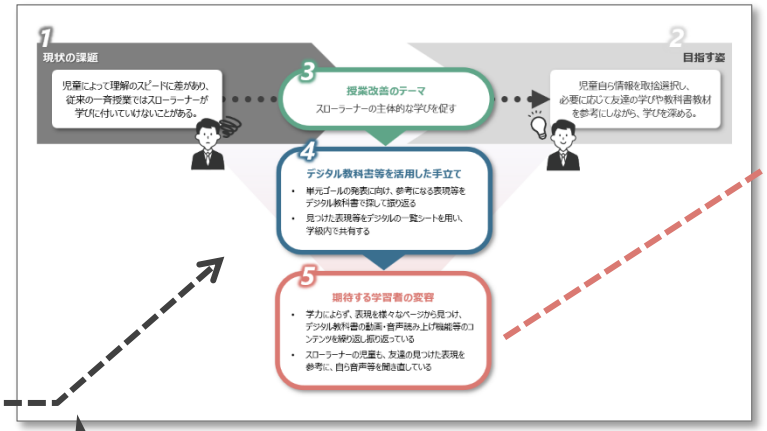
授業実践／振返り

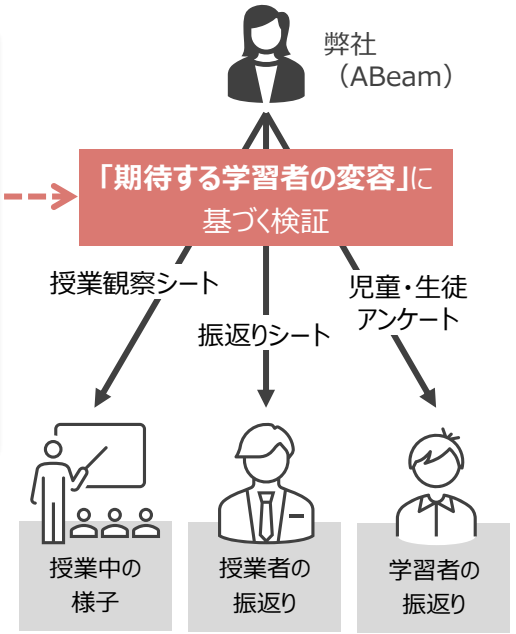
- 「**5 期待する学習者の変容**」を基に、当日の観察と事後調査から検証する。
- 実践後は、授業者と有識者の振り返り協議を行い、検証結果によって明らかになった課題を**２回目の授業実践や今後の授業改善に反映**。

指導計画



評価スキーム





i. 計画計画の作成（授業者）

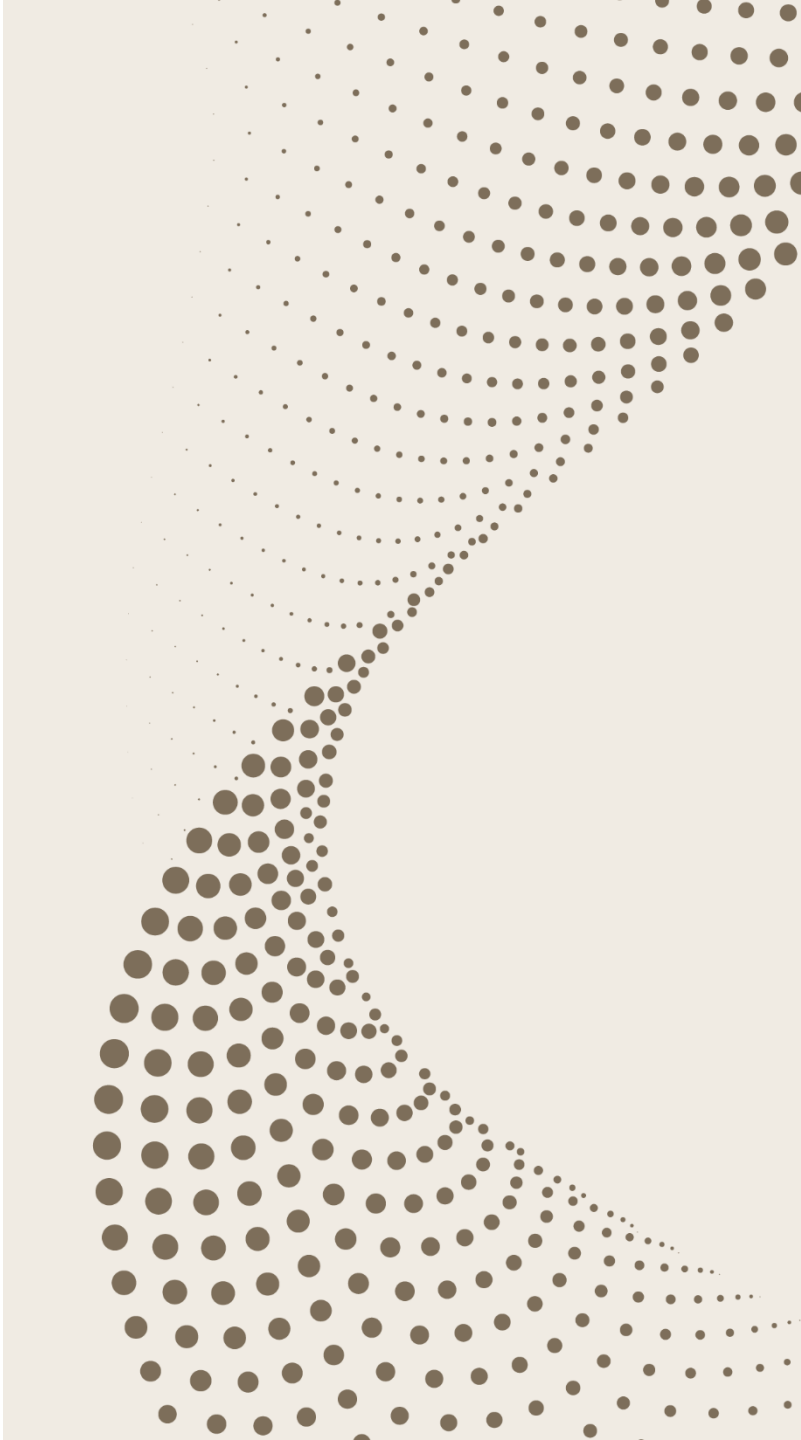
ii. iii. 協議による精査（授業者・有識者）

iv. **指導計画**に基づき、評価スキームに再整理（弊社）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組

3.1. 鹿屋市立鹿屋中学校（外国語）
3.2. 越前町立糸生小学校（算数）
3.3. 奈良市立ならやま小中学校（国語）
3.4. 山都町立矢部中学校（理科）
3.5. 深谷市立藤沢中学校（社会）
3.6. 地域内展開



3. 各実証校・地域における取組
3.1. 鹿屋市立鹿屋中学校（外国語）
3.1.1. 基本情報

■ 鹿屋市立鹿屋中学校における外国語の実証研究にご協力いただいた関係者、デジタル教科書等の活用状況は以下のとおりです。

実証研究校名	鹿屋市立鹿屋中学校	対象学年（生徒数）	中学校１年（43名）
対象教科	外国語	使用教科書	開隆堂『SUNSHINE ENGLISH COURSE 1』
担当教諭	池田 大恭 教諭	担当有識者	東京家政大学　太田 洋 教授

デジタル教科書等の活用状況	１人１台端末	• 学校に導入されて６年目。 • 外国語の授業では、毎回の授業で使用している。 • 端末以外の配布物としてマイク付きイヤホンを使用。 • 学習支援ソフトを利用して振返りを記入したり、端末でプレゼンテーションの様子を撮影・記録したりしており、**生徒たちは基本的な端末操作に慣れている。**
	デジタル教科書	• 学校に導入されて４年目。 • 指導者用デジタル教科書は使っているが、学習者用デジタル教科書は**紙の教科書代わりに使う生徒が数名いる程度**である。
		• 学習に取り組む姿勢として、集中力に欠ける生徒が見られる。 • 学習内容の理解に個人差があり、全体として学力の定着にばらつきがある状況である。 • **生徒は教師に指示されたことのみに取り組む傾向が強い。生徒が自分で学びの手段を考える機会が少なく、学びの選択肢が一辺倒になっている。** • **多様な学習リソースがあるものの、「その学び方にどのような効果があるか」を生徒が理解しきれておらず、結果として学び方が固定化している。**

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.1. 鹿屋市立鹿屋中学校（外国語）
3.1.2. 授業改善（１回目）単元情報

■ １回目の授業改善で扱った単元は以下のとおりです。うち、７時間目の授業を実証対象としました。

単元	**Program5 Pajama Day**
単元を通して目指す姿	・ALTに日本や鹿屋市のことをもっと知ってもらうために、自分の“推し”を英語で紹介することができる。

時数	各授業のねらい	主な学習活動
1	単元の見通しをもつ	・ALTからのメッセージを確認し、単元を通した目標を設定する。 ・授業者によるモデルプレゼンと自身のプレゼンを比較し、自己課題を設定する。
2,3	プレゼンの導入部分を英語で伝える	・三人称単数現在形の特徴やきまり、意味、機能の理解と表現練習をする。 ・伝えたい内容をメモに整理し、プレゼンの練習をする。発表内容をビデオに録画する。 ・本時の学習について振り返り、相互評価や自己評価を行う。
4	“推し”に関する情報と自身の経験を英語で伝える	・教科書本文の内容理解・音読練習を生徒が各自の方法で進める。 ・伝えたい内容をメモに整理し、プレゼンの練習をする。発表内容をビデオに録画する。 ・本時の学習について振り返り、相互評価や自己評価を行う。
5	“推し”に関する具体例を英語で伝える	・同上
6	“推し”のすごさとその理由を英語で伝える	・同上
7	**“推し”に対する自分の考えを英語で伝える**	**・同上** 対象
8	プレゼンの結論を英語で伝える	・同上
9	“推し”の紹介を英語で伝える	・ALTにプレゼンを行う。 ・本時の学習について振り返り、相互評価や自己評価を行う。
10	単元の学びを振り返り、既存の言語材料を整理する	・単元を振り返り、学習した文法や表現を復習する。 ・単元の学習について振り返り、相互評価や自己評価を行う。 ・単元テストと単元の振り返り作文に取り組む。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.1. 鹿屋市立鹿屋中学校（外国語）
3.1.2. 授業改善（１回目）評価スキーム

1回目：計画 → 実践 → アンケート → 振返り → 2回目

■ １回目の授業改善では、授業改善のテーマに基づく「評価スキーム」を設定し、デジタル教科書等の活用による効果を検証します。テーマは「**ICTを中心とした学習リソースから、生徒が自身で学び方を選ぶ**」です。

現状の課題

生徒は教師に指示されたことのみに取り組む傾向が強い。生徒が自分で学び方を考える機会が少なく、学びの選択肢が一辺倒になっている。

授業改善のテーマ ①

ICTを中心とした多様な学習リソースの中から、生徒が自身で学び方を選ぶ

目指す姿

生徒が多様な学びの選択肢に気付き、自分の課題や目標に応じて主体的に選択・活用できる。

デジタル教科書等を活用した手立て

- ALTからのアドバイス動画や学習支援ソフト上の学習ポートフォリオを活用し、生徒が自身のプレゼンテーションの課題を発見しやすい環境を整備する。
- **デジタル教科書や友人・授業者・ALTとの議論など、多様な学習方法を活用**し、プレゼンを改善するよう促す。

期待する学習者の変容

- ALTからのメッセージや前時の振返りを踏まえて、個々の学び方を考えることができる。
- 他者の学び方も参考にしつつ、自分なりの表現をプレゼンに加えている。

指導計画策定における授業者のねらい

ALTからのアドバイスや中間指導においては、改善してほしい内容や使ってほしい表現を直接的に伝えるのではなく、ALTのメッセージや生徒のプレゼンテーション例の紹介でヒントを与え、生徒自身に気付いてもらいたいと考えています。

生徒の学習活動の幅を広げ、学びが深まるように、学習リソースやコンテンツの提供、外国語が苦手な層への手立てについて入念に事前準備を行います。

授業者（池田 教諭）

指導計画策定における有識者からの助言

生徒自身が学び方を選択するには、「選択する場面」を意図的に授業内に設けて、生徒が自らの課題や目標に応じた選択を行う経験を積み重ねられるようにすると良いです。

本時では、プレゼンの内容を改善するための学び方を、まずは生徒が個別で試行錯誤し、その成果や悩みを生徒や池田先生と意見交換する協働的な学びの時間を設けることが効果的だと考えます。

有識者（東京家政大学 太田 教授）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校･地域における取組
3.1. 鹿屋市立鹿屋中学校（外国語）
3.1.2. 授業改善（１回目）授業内容

1回目：計画 / 実践 / アンケート / 振返り → 2回目

■ 授業の流れ及び実際の授業の様子は以下のとおりです。

授業場面（青字は"デジタル教科書を使用した手立て"）	授業の様子（赤字は"期待する学習者の変容"に関する内容、番号は「授業場面」の番号と対応）
1 前時のプレゼンを確認し、ペアで発表 ① 前時で生徒が録画したプレゼンを端末で確認させ、プレゼンに必要なポイントを学級全体で確認する。 ② 聞き手を意識した表現を促しつつ、ペアでプレゼンを発表させ合う 。	① 生徒は録画をスムーズに確認していた。 ② 多くの生徒が、文法に多少の誤りがありつつも自信を持った様子で発表していた。 生徒が言葉に詰まったとき、ペア相手が推測される単語を発言し、サポートしている様子が見られた。
	 ▲プレゼンに必要なポイントを確認する様子
2 ALTからのアドバイスを理解し、本時の目標を検討 ① 単元目標を確認した後に、ALTからのビデオメッセージを視聴させる。生徒が個人の端末で何度でも視聴できるようにし、まずは生徒自身に改善すべきところに気付かせ、それを基に本時の目標を作成させる。 ② アドバイスの内容が掴めていない生徒には必要な支援を行い、全員がプレゼンの改善に取り組めるようにする。 **【ALTからのビデオメッセージの内容】** 「"推し"の話だけでなく、"推し"とあなた（生徒）とのつながりが聞きたい」という趣旨のアドバイスを英語で話している。	① ALTが"When"や"How"という単語を話していることから、「"推し"にいつどのように出会ったか」という情報を付け加えると良いということを掴んでいる生徒が多かった。 ② 内容を理解した生徒が、理解できていない生徒と一緒に端末で映像を視聴し、"Where"などの単語の意味や発音を確認している様子が見られた。
	 ▲ALTからのビデオメッセージを端末で視聴
3 本時で取り組む内容や学習方法を選択（授業改善のテーマ 1） ① "What to do" "How to do"のリスト（右図参照）を学習支援ソフト上で配布し、自分の課題に合った学び方を選択するよう促す。	① "What to do"では、多くの生徒が「表現を加える」「実際にプレゼンの練習をする」を選択していた。 （**"How to do"は生徒向けアンケートの結果を参照。**）
	 ▲学習方法にチェックを入れて選択
期待する学習者の変容： • ALTからのメッセージや前時の振返りを踏まえて、個々の学び方を考えることができる。	**What to do?** ☐ 新しい表現を加える ☐ これまでの表現を見直す（文を整える） ☐ 読み方の確認をする ☐ 実際にプレゼンの練習をする **How to do?** ☐ 教科書（Program5）の表現を参考にする ☐ これまでの学習内容（Program4以前や過去の自分の作品等）を参考にする ☐ ワークシートを参考にする ☐ タブレットで調べる ☐ 友だちに相談する ☐ 先生に相談する

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.1. 鹿屋市立鹿屋中学校（外国語）
3.1.2. 授業改善（１回目）授業内容

1回目：計画 / 実践 / アンケート / 振返り → 2回目

■ （前頁の続き）

授業場面（青字は"デジタル教科書を使用した手立て"）

4 教科書本文の内容理解

① 教科書本文を生徒が各自で読み、本文からプレゼンに新しい表現を取り入れることができるようにする。
また、**デジタル教科書を用いて音読も行う**ことで、生徒が誤って認識していた読み方に気付くことができるようにする。

授業改善のテーマ 1

5 伝えたい内容を明確化し、プレゼンの内容を改善

① 本時の目標や「授業場面３」で整理した学習内容・方法を再確認させ、明確な方針をもって主体的にプレゼンを改善できるよう促す。
プレゼンの改善が進まない生徒には、学習方法を再確認したり、他の生徒の考えを共有したりして、改善の視点を得られるようにする。

② 必要に応じて中間指導で"When do you～?" "Where do you～?"と問いかけることで、生徒が"推し"との関係性を表現できるようにし、プレゼンの改善につなげる。

期待する学習者の変容	・他者の学び方も参考にしつつ、自分なりの表現をプレゼンテーションに加えている。

6 プレゼンを録画し、振返り

① ペアでプレゼンを行い、ペア相手のプレゼンの様子を録画させる。

② 学習支援ソフト上に、４つの視点（学習内容・学習方法・成果・課題）から振返りを記入させる。

授業の様子（赤字は"期待する学習者の変容"に関する記述、番号は「授業場面」の番号と対応）

① 多くの生徒は文章を見て、音声を聞きながら発音するシャドウイングを行っていた。端末で音声を聞きつつ紙の教科書で本文全体を見ながら音読練習をしている生徒も見られた。
また、発音で詰まるペア相手に対して、発音をサポートする生徒がいた。

▲デジタル教科書のアニメーションを見ながら音読練習をしている様子

① インターネットで検索している生徒が最も多かった。単語単位で検索した生徒は違和感が少なかったが、文単位で検索している生徒は、不自然な表現になっている様子も見られた。
また、自身のプレゼンで使う単語の発音を検索して改善を図る生徒が見られた。
その他に、**小学校の教科書（ピクチャー・ディクショナリー）の参照や友達同士で話し合いながら、表現を加えている生徒**も多く見られた。
外国語が得意な生徒は周囲の生徒に、**ALTのアドバイスの趣旨を踏まえ、**「小さいころテレビで○○（推しのキャラクター）を見た」という表現を付け加えると良いという**アドバイスをしていた。**

② 中間指導でピックアップされた "I enjoy~on TV."などの表現は多くの生徒がメモをしており、**自身のプレゼンに取り入れていた。**
また、ある生徒がプレゼンの表現で悩んでいるところを中間指導で取り上げ、**周囲がサポートしながら文章を作り上げていく場面**もあった。

▲プレゼンではメモ（画像右下）のみ参照して良いこととしているため、重要な単語などをこのメモに書き留めていた。

① プレゼンでは、多くの生徒が端末に表示した"推し"の画像を相手に見せながら紹介できており、基本的に端末やメモを見ることなくプレゼンができていた。

② 記入した振返りと録画データをまとめて格納しているため、生徒が次回以降に本時の振返りをしやすい環境が整っていた。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.1. 鹿屋市立鹿屋中学校（外国語）
3.1.2. 授業改善（１回目）生徒アンケート結果

1回目：計画 → 実践 → アンケート → 振返り → 2回目

- 生徒への授業後アンケートから、評価スキームの「期待する学習者の変容」の達成度を分析しました。
- プレゼンの改善に向けて、先生の指示だけではなく、**自身で学び方を考えることができたと９割弱の生徒が感じていました。**
- 授業中に使った学び方として、デジタル教科書やインターネット検索、友達との相談が特に多く挙げられており、分からない単語や表現を調べたり、自身のプレゼンの改善できるところを友達や先生と追究したりしていた様子が伺えます。

評価スキーム（再掲）

授業改善のテーマ ①

ICTを中心とした多様な学習リソースの中から、生徒が自身で学び方を選ぶ

デジタル教科書等を活用した手立て

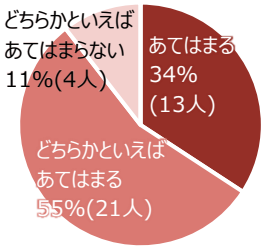
期待する学習者の変容

- ALTからのメッセージや前時の振返りを踏まえて、個々の学び方を考えることができる。
- 他者の学び方も参考にしつつ、自分なりの表現をプレゼンに加えている。

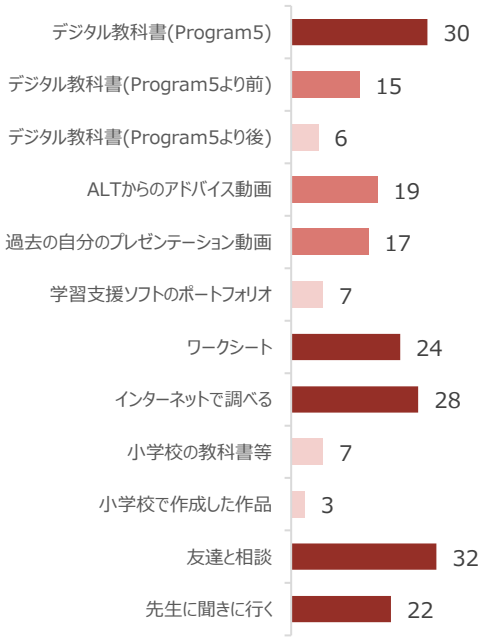
※自由記述の回答は文意を損ねない形で修文したものがある。

授業後アンケート結果（一部抜粋）

Q1. 先生の指示だけでなく、自分で最適な学び方を考えながら進めることができましたか。[N=38]



Q2. プレゼンテーションの内容を改善するために、授業中にはどのような方法を使いましたか。（複数回答可） [N=38]



Q3. Q2で選択した方法を使って、プレゼンの内容の改善に向けて特に参考になった内容を教えてください。（自由記述※）

- デジタル教科書の動画の英語を参考にした。
- 教科書から「これは～です」の表現を参考にした。
- インターネットでまだ習っていない単語を調べた。
- 友達が使っていた”So, I like～”という表現を取り入れた。
- 友達と工夫できるところを話し合った。
- 先生に、相手により分かりやすく伝える文章にするにはどうすればいいかアドバイスをもらった。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.1. 鹿屋市立鹿屋中学校（外国語）
3.1.2. 授業改善（１回目）振返り協議結果

■ 授業後に行った授業者と有識者の振返りでは、以下の「成果」と「課題」、それらを踏まえた「改善策」が挙げられました。

授業改善のテーマ：ICTを中心とした多様な学習リソースの中から、生徒が自身で学び方を選ぶ

成果

選択肢を示したことによる学び方の個性化

- 「学び方」のリストを示し、選択肢を生徒に与えました。
- その結果、**教科書やワークシート、ALTからのアドバイス動画等の様々なツール**を用いたり、友達や先生に相談したり、学び方の個性化が見られました。

授業者（池田 教諭）

学級全体で学びながら取組内容を改善

- 他の生徒や先生と積極的に意見交換できる環境でした。その結果、授業冒頭では”It is~.”の文のみだった生徒が、**他の生徒の取組内容の共有や、中間指導を踏まえて、**”I enjoy~.”などの文を付け加えており、量・質ともに改善が見られました。

有識者（東京家政大学 太田 教授）

課題

根拠をもった学び方の選択

- 生徒がそれぞれの学び方のメリットを理解した上で上手く選択できるようになると良いでしょう。
- まずは先生から**各ツールを活用するメリットを伝え、生徒に実際に体験**してもらい、その感想を聴取し、**良い使い方をしている生徒の例を価値づけしながら気付きを与える**ことが有効です。

有識者（東京家政大学 太田 教授）

教科書の内容と本時での取組内容とのリンク

- **デジタル教科書の表現よりも、インターネットで検索した不正確な表現を使用する生徒**が多く見られました。
- 要因として、**プレゼンテーションで主に使用する表現（一人称）と教科書で取り上げている表現（三人称）の種類が異なっており、教科書を参照する必要性が薄かった**ことが考えられます。

授業者（池田 教諭）

改善策

デジタル教科書を使った学び方のメリットを理解させ、参照する必要性を作る

- 様々な学び方のメリットを掴む一環として、第２回授業実践では、デジタル教科書での学びを経験できるように授業設計する。
- その際に、授業内での活動に必要な表現とデジタル教科書で取り上げられている表現がリンクするように工夫する。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.1. 鹿屋市立鹿屋中学校（外国語）
3.1.3. 授業改善（２回目）単元情報

■　２回目の授業改善で扱った単元は以下のとおりです。うち、３時間目の授業を実証対象としました。

単元	**Program8 Happy New Year!**
単元を通して目指す姿	・ALTのことをより知って交流を深めるために、ALTによる冬の思い出に関するビデオレターの内容について、必要な情報を聞き取り、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いてまとまりのある文章を書くことができる。

時数	各授業のねらい	主な学習活動
1	単元の見通しをもつ	・ALTからのメッセージを確認し、単元を通した目標を設定する。 ・自己課題を設定し、CAN DOリストを活用して身につける資質・能力の共有を図る。
2	相手の返答を聞きながらやりとりを続け、簡単な反応を返す	・現在進行形を使って自分の状況をペアで伝え合う活動に取り組む。 ・デジタル教科書等を用いて、生徒が自分に必要な単語や表現を練習し、再度上記の活動に取り組む。 ・生徒が自分の学び方を振り返り、成果や課題を整理する。
3	**相手が今していることを尋ねながら会話を続け、簡単な感想を伝える**	**・同上** **対象**
4,6	必要な情報を会話から聞き取って感想を書く	・世界の年末年始についての会話から必要な情報を聞き取り、日本との違い等に気付く。 ・聞き取った内容への感想や質問を簡単な英語で書き、友達と共有する。 ・生徒が自分の学び方を振り返り、成果や課題を整理する。
5,7	必要な情報をALTの動画から聞き取って感想を書く	・同上
8	ALTのビデオレターを見て感想を英語で書く	・これまでに学んだ内容（聞き取りや感想の書き方）を振り返る。 ・ALTからのビデオレターを視聴し、ALTがどこで何をしているかを聞き取り、生徒が自分の経験と比べながら感想を簡単な英語で書く。 ・生徒が自分の学び方を振り返り、成果や課題を整理する。
9	単元の学習内容を振り返り、自分の学習状況を整理する	・単元テストに向けて、学習した文法・語句・表現を振り返り、必要に応じて確認する。 ・単元テストに取り組み、これまでの学習成果を確かめる。 ・これまでの学習の取り組みを振り返り、成果・課題・次につなげたい学習方法を整理する。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.1. 鹿屋市立鹿屋中学校（外国語）
3.1.3. 授業改善（２回目）評価スキーム

■ ２回目の授業改善では、授業改善のテーマに基づく「評価スキーム」を設定し、デジタル教科書等の活用による効果を検証します。テーマは「**１つ１つの学習方法の意義を理解し、学び方の選択肢を増やす**」です。

現状の課題

多様な学習リソースがあるものの、「その学び方にどのような効果があるか」を生徒が理解しきれておらず、結果として学び方が固定化している。

授業改善のテーマ ②

１つ１つの学習方法の意義を理解し、学び方の選択肢を増やす

目指す姿

デジタル教科書の活用方法を理解し、学習の目的に沿って効果的な学び方を選択できるようになる。

デジタル教科書等を活用した手立て

- 教科書の対話文を聞き取る際に、**デジタル教科書の速度変更機能**が使えることを示す。
- デジタル教科書の機能を紹介し、生徒がやり取りの改善に向けて**必要な単語や表現を、デジタル教科書で練習することを促す。**

期待する学習者の変容

- 生徒が**デジタル教科書を使った学び方の意義を理解し、**学び方の１つとして選択できるようになる。

指導計画策定における授業者のねらい

生徒は、教師が提示した学習方法には取り組めるものの、自分に合った方法を選んだり、目的に応じて使い分けたりする段階には至っていないと感じています。

3年間を通して様々な学び方を体験してほしいと考えており、授業内ではデジタル教科書を中心とした１つ１つの学習リソースの使い方を経験できるように計画しています。

授業者（池田 教諭）

指導計画策定における有識者からの助言

「生徒に学び方を自分で選択させる」と言っても、生徒自身がそれぞれの学び方の意義を理解し、活動の目的に応じて使い分けられるようになることは容易なことではありません。

生徒が実際に学び方を選択し、デジタル教科書の機能等を体験する時間を設けることで、生徒自身がその学び方の意義を理解することに繋がるでしょう。

有識者（東京家政大学 太田 教授）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.1. 鹿屋市立鹿屋中学校（外国語）
3.1.3. 授業改善（２回目）授業内容

■ 授業の流れ及び実際の授業の様子は以下のとおりです。

授業場面（青字は"デジタル教科書を使用した手立て"）

1 単元ゴールと現在進行形の表現を再確認

① 単元ゴール（ALTからのビデオレターを聞き取り、感想をALTに伝える）を再確認。ビデオレターに出てくる現在進行形に関する表現を習得する必要性に気付かせる。

② 友達を初詣に誘う電話の場面を設定し、相手の状況を尋ねたりそれに答えたりするやり取りに取り組み、現在進行形の表現を復習する。

③ 本時の目標を全体で確認。授業者と英語でやり取りしながら、生徒が「言いたいけど言えなかった表現」に気付けるようにする。

2 教科書の対話文を聞き取り、必要な表現を習得

授業改善のテーマ 2

① デジタル教科書内のイラストを提示しながら、その対話の場面について学級全体で確認する。

② 対話文の音声をデジタル教科書で聞き、内容理解を進める。その際に、聞き取りには**デジタル教科書の速度変更機能**、聞き取った新出単語の練習には**単語練習機能が活用**できることを示す。

聞き取りには学習支援ソフトのワークシートを補助的に使用。デジタル教科書の紙面を切り貼りし、語句の並び替えができるようにすることで、語順や文構造を音声と関連付けながら理解することを促す。

期待する学習者の変容

- 生徒がデジタル教科書を使った学び方の意義を理解し、学び方の１つとして選択できるようになる。

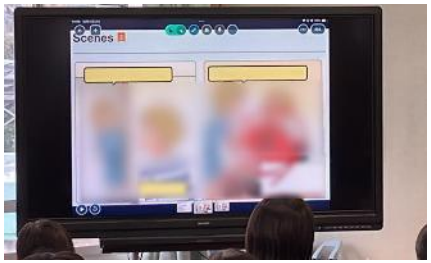
授業の様子（赤字は"期待する学習者の変容"に関する内容、番号は「授業場面」の番号と対応）

① 授業者と生徒が英語でやり取りしながら、単元末にALTのビデオレターを聞き取るために、現在進行形の表現を習得する必要性が共有された。

② "I'm~ing."という表現を用いて、「他の用事があるので初詣に行けない」と断るやり取りを、多くのペアで行っていた。

③ 生徒のやり取りが自然な会話になるように、授業者が指導を行った。
（例）誘いを断るときは、ただ「今～している」と断って会話を終わるのではなく、誘ってくれたことに対するお礼や別日を提案する言葉が必要である。

① 対話文の場面確認の際には、登場人物のセリフを隠したイラスト（右図）を提示することで、生徒が聞き取りに取り組めるようにしつつ、どのような場面かを全体で確認することができていた。



▲対話文の場面を全体で確認

② 生徒が対話文を聞き取る際に、以下のように**多様なデジタル教科書の使い方**が見られた。

- ✓ デジタル教科書のアニメーションを再生し、改めて対話文の場面を確認。
- ✓ 音声の再生速度を遅くしてじっくりと理解。
- ✓ 聞き取れない箇所を何度も繰り返し聞く。
- ✓ 文章の聞き取り後、デジタル教科書の単語練習機能で単語を確認。

また、中間指導では新出表現である"still" "What are you doing?"などの解説や、速度変更機能などの学び方の紹介を行った。その後、生徒が**紹介された表現や学び方を取り入れている様子**が見られた。

▲デジタル教科書の音声再生の画面と、語句の並び替えができるワークシートの２画面で学習する生徒が多く見られた。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.1. 鹿屋市立鹿屋中学校（外国語）
3.1.3. 授業改善（２回目）授業内容

■ （前頁の続き）

授業場面（青字は”デジタル教科書を使用した手立て”）

3 現在進行形を使ったやり取りの表現・内容の改善　授業改善のテーマ 2

① 「授業場面２」で身につけた表現を活かし、「授業場面１」で行った電話のやり取りに再挑戦させる。

② 適時、**生徒が自分に必要な表現をデジタル教科書で調べる**よう促し、良い表現を学級全体で共有する中間指導の時間を設ける。必要に応じて、プリントに「今後使えそうな表現」を記録させる。

期待する学習者の変容	• 生徒がデジタル教科書を使った学び方の意義を理解し、学び方の１つとして選択できるようになる。

4 振返りの記入

① 学習支援ソフト上に、４つの視点（学習内容・学習方法・成果・課題）から振返りを記入させる。

授業の様子（赤字は”期待する学習者の変容”に関する記述、番号は「授業場面」の番号と対応）

① 「授業場面２」で紹介された”still”や”What are you doing?”などの表現を付け加えている生徒が多く見られた。授業者による板書を参考にしながら話している様子だった。
また、初詣への誘いを断られた後に、「〇時なら初詣に行くことができるか」という文を付け加え、自然な会話になるように修正した生徒も見られた。

② 授業者が良いやり取りをしている生徒のペアを指名し、”I’m not doing anything now.”という表現を取り入れていることに着目させた。
その生徒は「前の時間で習った表現が使えること」に気付いて取り入れたと発言しており、学びの連続性が見られた。
また、「今後使えそうな表現」をプリントに書き留める際に、**デジタル教科書の絵辞典で単語のつづりを確認する生徒**がいた。

▲新出単語を投影し全体で確認（左側）したり、重要な表現を板書（右側）したりすることで、生徒がやり取りに新たな表現を付け加えやすい環境が整っていた。

① 「学習内容」や「成果」の欄には、「今～している」の表現や、「何時に行く？」の表現を習得できたことを書いている生徒が見られた。
また、「デジタル教科書で発音を練習することで、会話を続けることができた」と、自身の学び方を振り返っている生徒がいた。

生徒が振返りを記入するワークシート▶

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.1. 鹿屋市立鹿屋中学校（外国語）
3.1.3. 授業改善（２回目）生徒アンケート結果

- 生徒への授業後アンケートから、評価スキームの「期待する学習者の変容」の達成度を分析しました。
- 授業の学習の中で、先生の指示だけではなく、**自身で学び方を考えることができたと約９割の生徒が感じていました。**
- 学び方について、デジタル教科書の音声やアニメーション動画を繰り返し視聴したり、音声速度を変更してゆっくり聞いたりすることで、文章の理解を深めることができるというメリットを、多くの生徒が感じていました。

評価スキーム（再掲）

授業改善のテーマ ①

１つ１つの学習方法の意義を理解し、学び方の選択肢を増やす

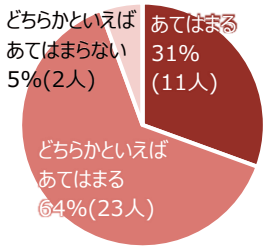
デジタル教科書等を活用した手立て

期待する学習者の変容

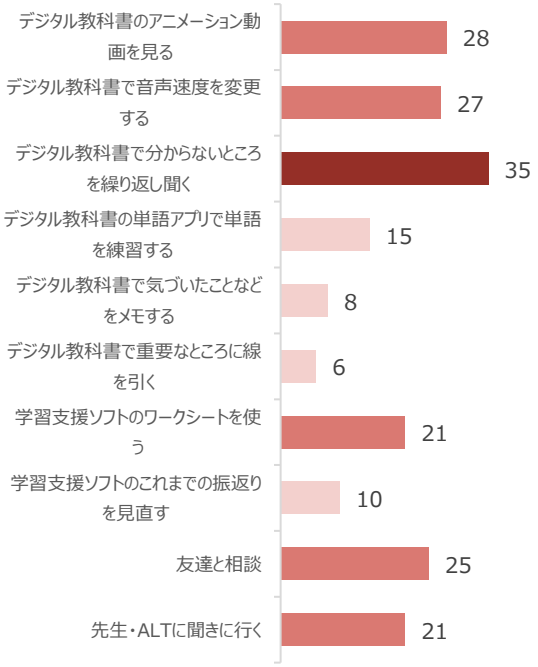
- 生徒がデジタル教科書を使った学び方の意義を理解し、学び方の１つとして選択できるようになる。

授業後アンケート結果（一部抜粋）

Q1. 先生の指示だけでなく、自分で最適な学び方を考えながら進めることができましたか。[N=36]



Q2. 授業の中で活用した学習方法のうち、役立ったと感じるものを全て選んでください。（複数回答可） [N=36]



Q3. Q2の学習方法が役立ったと感じたのはなぜですか。（自由記述※）

- デジタル教科書で音声速度を変更することで、聞き取りにくかったところをゆっくり流したり、分かったところを早くしたりして、内容を深めることができたから。
- 音声の速度を変えたら何の単語を言っているか聞き取りやすくなったから。
- 記憶があやふやになった時に学習支援ソフトの記録を確認できるから。
- 先生の話で理解を深めるだけではなく、自ら教材を使い理解する事も可能になっているから。

※自由記述の回答は文意を損ねない形で修文したものがある。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.1. 鹿屋市立鹿屋中学校（外国語）
3.1.3. 授業改善（２回目）振返り協議結果

■ 授業後に行った授業者と有識者の振返りでは、以下の「成果」と「課題」、それらを踏まえた「改善策」が挙げられました。

授業改善のテーマ：１つ１つの学習方法の意義を理解し、学び方の選択肢を増やす

成果

聞き取りの繰り返しを通じた定着（デジタル教科書の効果）

- **デジタル教科書の音声読み上げ機能を活用し、**対話文の概要把握や文構造の理解を繰り返す授業構成を続けたことで、**生徒は正確な発音や表現を習得**し、本時や前時で学習した内容を活用する様子が見られました。

授業者（池田 教諭）

目的を意識したデジタル教科書の活用（デジタル教科書の効果）

- 授業者からの指示が無くても、**自発的に生徒が単語練習機能の活用やリピート練習を行っていました。**デジタル教科書を使った学習の目的が生徒に意識され、生徒自らが学び方を選択することができました。

有識者（東京家政大学 太田 教授）

課題

学び方の工夫点の共有

- デジタル教科書を使った学び方に関して、例えば、「音声を正確に理解できるように、適宜意味の塊ごとに音を止めて確認する」「デジタル教科書の既習事項に戻り、今回のやり取りに使えそうな表現を探す」などの学び方の工夫は、生徒全員ができているわけではなかったです。
- まずは学級全体で授業内にて学び方を試し、そこから**生徒の工夫を引き出したり、授業者が学び方のデモンストレーションを行ったり**することも一案です。

有識者（東京家政大学 太田 教授）

改善策

学び方を改善するための価値づけの実施

- デジタル教科書を使った学び方は多くの生徒が慣れているため、生徒の中で工夫点や良い学び方が見られることが多い。
- これらを中間指導で価値づけし、授業の目的に沿った学び方を生徒が主体的に選べるように方向付ける。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.1. 鹿屋市立鹿屋中学校（外国語）
3.1.4. 授業改善のプロセス

■ 2回の授業改善を通して、デジタル教科書を含めた生徒の学びの選択肢が広がるよう、授業を検討してきました。

START

実証前

学びの選択肢が一辺倒で、デジタル教科書が選択肢になっていなかった

- 端末は毎時間使用しており、生徒も操作に慣れているが、デジタル教科書を使用する生徒は少なかった。
  生徒は授業者が示したことのみに取り組む傾向が強く、学びの選択肢が一辺倒になっていた。

指導計画策定

実現したい学びの選択肢にデジタル教科書を自然に組み込むことを意識

- 授業者が生徒と主にデジタル教科書について理解を深めつつ、指導案の検討においては、デジタル教科書の活用自体を目的化しないことを意識。授業者が実現したい「生徒の学習意欲を高める授業」をデザインした上で、どのような機能が使えるかを検討。

授業者（池田 教諭）

デジタル教科書を授業中に使用し、生徒からデジタル教科書の使い方や学習への活用方法に関して発言してもらったときに自分の知らなかった機能が取り上げられることもありました。

授業実践（1回目）

デジタル教科書を含む学びの選択肢を生徒に提示し、多様な学びを展開
各「選択肢」の意義やメリットの理解に課題が残るため、まずはデジタル教科書を使った学び方にフォーカス

指導計画策定

デジタル教科書を使った学び方の良さを”体験”できるような授業設計を検討

- 授業者側でデジタル教科書の活用方法をさらに検討し、生徒と操作方法の確認・共有を行った。
- 外国語の４技能のうち「聞くこと」にフォーカスした授業で、デジタル教科書を活用する場面を多く設けた授業を設計。

授業者（池田 教諭）

生徒には、「学び方を自分で選択すること」の価値を授業で伝えてきました。生徒にデジタル教科書の使用を無理強いするのではなく、操作方法などの基本的な知識を習得させた上で、デジタル教科書を自然と使いたくなるような授業設計を心掛けました。

授業実践（2回目）

デジタル教科書の音声再生機能を中心に、授業の目的に沿った学び方が見られた
さらに生徒の学びの選択肢を広げ深めるために、継続的に学び方の価値づけを実施

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.1. 鹿屋市立鹿屋中学校（外国語）
3.1.5. 総括

■ 2回の授業改善を通して得られた、授業改善のポイントは以下のとおりです。

鹿屋市立鹿屋中学校における授業改善の取組の総括

授業改善のポイント

授業改善のテーマ 1

ICTを中心とした多様な学習リソースの中から、生徒が自身で学び方を選ぶ

選択肢を示したことによる学び方の個性化 ➡ 参考：p.15

- 個別での学習活動に入る前に、デジタル教科書やワークシート、先生に相談する等の「学びの選択肢」をリスト形式で配布し、生徒に選択させることで、生徒は様々な学習リソースの中から、自分に合った方法を選択するよう意識づけられる。

学級全体で学びながら取組内容を改善 ➡ 参考：p.16

- 各自で選択した学び方で学習を進めた後に、他の生徒や先生と意見交換する時間を設ける。他の生徒の取組内容の共有や、中間指導を参考に、再度デジタル教科書等で学びを深めていくことで、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実が図られる。

授業改善のテーマ 2

1つ1つの学習方法の意義を理解し、学び方の選択肢を増やす

聞き取りの繰り返しを通じた定着 ➡ 参考：p.21、p.22

- デジタル教科書の音声読み上げ機能を活用し、対話文の概要把握や文構造の理解を繰り返すことで、正確な発音や表現を習得することに繋がる。
- 聞き取りの練習を繰り返すことで、単元末活動に向けて学習内容の定着が図られる。

目的を意識したデジタル教科書の活用 ➡ 参考：p.21

- 上記の聞き取り練習のように、デジタル教科書を活用した学び方のメリットを伝えることで、生徒は授業の目的に沿った学び方を自発的に選択できるようになる。

実践を振返って

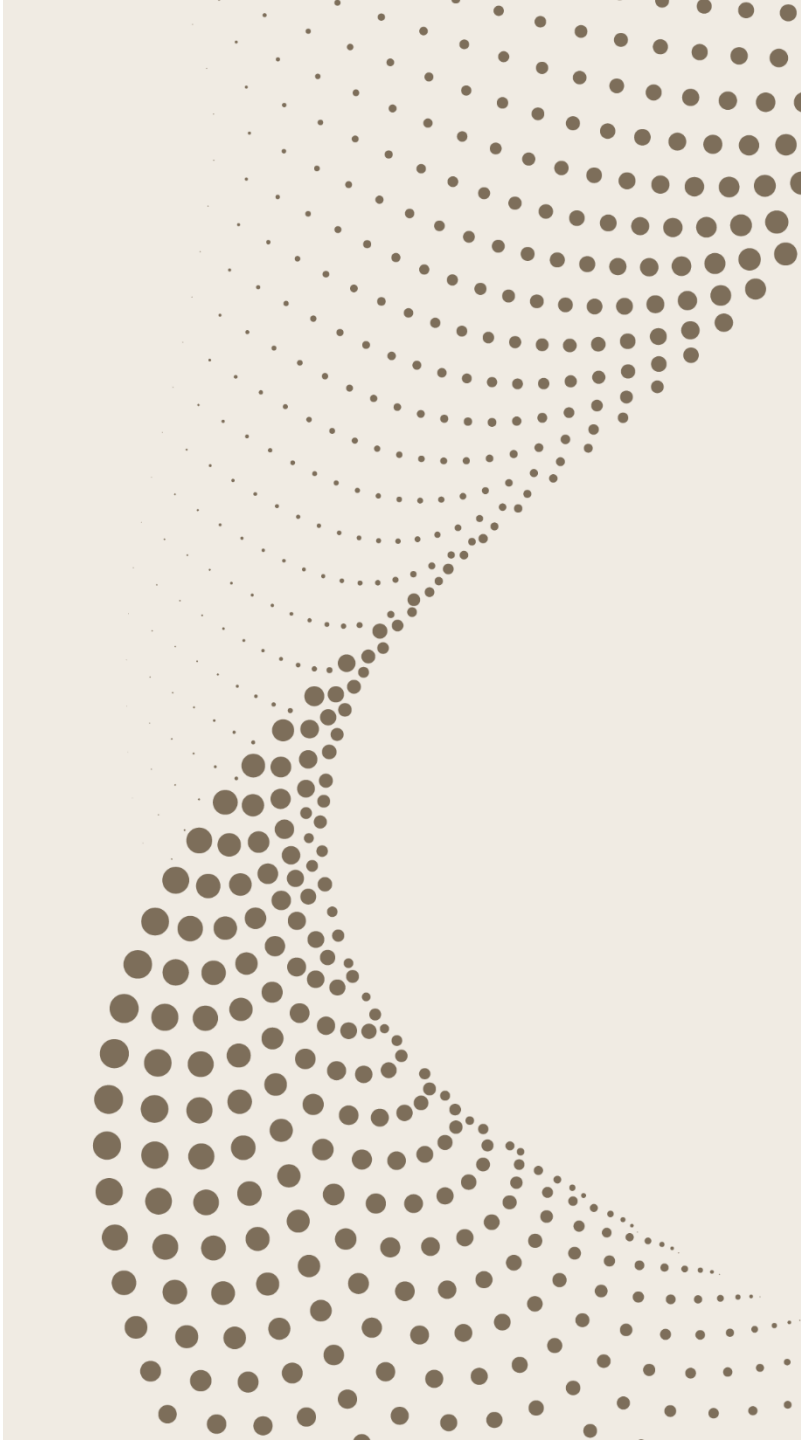
- 生徒は授業中にデジタル教科書を自然に手に取っており、生徒の中の学び方としてデジタル教科書が定着しつつありますが、さらなる定着のためには、教師・生徒双方が継続的に活用していく必要があると考えます。
- 私は日々の授業で、あえて授業の進度にゆとりをもたせ、生徒が主体的に自分に必要な学び方を考える「余白」の時間を意図的に設けています。デジタル教科書が学びの選択肢に加わったことで、生徒が「余白」をコントロールする力を身につけることに繋がると感じます。

授業者（池田 教諭）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組

3.1. 鹿屋市立鹿屋中学校（外国語）
3.2. 越前町立糸生小学校（算数）
3.3. 奈良市立ならやま小中学校（国語）
3.4. 山都町立矢部中学校（理科）
3.5. 深谷市立藤沢中学校（社会）
3.6. 地域内展開



3. 各実証校・地域における取組
3.2. 越前町立糸生小学校（算数）
3.2.1. 基本情報

■ 越前町立糸生小学校における算数の実証研究にご協力いただいた関係者、デジタル教科書等の活用状況は以下のとおりです。

実証研究校名	越前町立糸生小学校	対象学年（児童数）	小学校４年（11名）
対象教科	算数	使用教科書	啓林館『わくわく算数４年下』
担当教諭	野口 真由 教諭	担当有識者	神戸大学　岡部 恭幸 教授

デジタル教科書等の活用状況	１人１台端末	• 学校に導入されて５年目。 • 算数の授業では、４回に１回程度の授業で使用している。 • 端末以外の配布物（イヤホン等）は特になし。 • 学習支援ソフトを利用して考えを交流したり、プレゼンテーションソフトでポスターチラシを作る等の活動を行っており、**児童たちは基本的な端末操作に慣れている。**
	デジタル教科書	• 学校に導入されて３年目。 • 算数の授業では、現学級が３年生の時に「棒グラフ」の単元で活用したことがあったが、**４年生になってからは活用したことはない。**
現状の課題		• 学習意欲が高く、真面目に取り組める児童が多い。 • 子供たちの間に学力差があり、自分の考えを整理することが苦手な児童もいる。 • **情報を整理しながら、順序立てて問題を解くことが苦手な児童が多い。** • **算数が苦手な児童は、個人思考の場面において、見通しをもって問題解決に臨むことができない。**

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.2. 越前町立糸生小学校（算数）
3.2.2. 授業改善（１回目）単元情報

■ １回目の授業改善で扱った単元は以下のとおりです。

単元	**だれでしょう**※
単元を通して目指す姿	• 示された条件を表に整理し、順序よく推論して問題を解くことができる。 • どのような順序で答えを導き出したのかを説明することができる。

時数	各授業のねらい	主な学習活動	
1	**示された条件から順序よく推論して問題を解く。**	**• デジタル教科書のコンテンツ（表）を使い、試行錯誤しながら条件を整理する。 • 学習支援ソフトを使って、児童同士で考えを共有しながら残りの推論を進める。**	対象

※ 本単元は一時間で構成。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校･地域における取組
3.2. 越前町立糸生小学校（算数）
3.2.2. 授業改善（１回目）評価スキーム

■ １回目の授業改善では、授業改善のテーマに基づく以下の評価スキームを設定し、デジタル教科書等の活用による効果を検証します。授業改善のテーマは「**ICTを使って情報を整理し、学級全体で問題を解く**」です。

現状の課題

情報を整理しながら、
順序立てて問題を解くことが
苦手な児童が多い。

授業改善のテーマ ①

ICTを使って情報を整理し、
学級全体で問題を解く

目指す姿

他者の考えも参考にしながら、
表に的確に情報を整理し
論理的に考えを進めることができる。

デジタル教科書等を活用した手立て

- **デジタル教科書の表を使って、本時の問題の条件を整理**させる。
- デジタル教科書の表をキャプチャしたワークシートを使って、残りの推論を進める。
- 学習支援ソフトを使い、つまずく児童の「分からない点」を共有して学級全体で推論の見通しを考える。

期待する学習者の変容

- **デジタル教科書のコンテンツ（表）を使って試行錯誤しながら条件を整理**している。
- 分からないときは、自分と同じ考えの友達を見つけて相談する等、**他者の考えを参考にしながら推論を進めている。**

指導計画策定における授業者のねらい

本時で扱う問題は難易度が高く、特に推論に苦手意識がある子供にとっては一人で進めていくことが難しいものとなっています。

ICTを使いながら、子供たちの考えやつまずきや疑問点を共有し、学級全体で推論の見通しを持ちながら授業を進めました。

授業者（野口 教諭）

指導計画策定における有識者からの助言

本時のように、示された条件から推論を進めていくことは、子供にとって難易度が高いです。そのため、苦手な子供も推論の感覚が掴めるよう、最初のうちは全体で確認したり、考えを交流させながら進めたりする等、”個”ではなく”全体”で問題に取り組むことが重要です。

デジタル教科書や学習支援ソフトを駆使し、個々の試行錯誤を促しつつ、全員で考えを共有しながら進めていけると良いでしょう。

有識者（神戸大学 岡部 教授）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.2. 越前町立糸生小学校（算数）
3.2.2. 授業改善（１回目）授業内容

■ 授業の流れ及び実際の授業の様子は以下のとおりです。

授業場面（青字は"デジタル教科書を使用した手立て"）

1 本時の課題１を提示し、見通しを確認

① 本時の課題を大型提示装置に投影して確認した後、どのように考えていくと良いかを全体で話し合う。

【課題１】 あきらさん、かつやさん、さとしさん、たいきさんに、好きなスポーツを１つ聞くと、答えはみんなちがっていて、野球、サッカー、テニス、水泳でした。それぞれの好きなスポーツをみつけましょう。

【条件】 あきらは野球ではない。かつやはテニスではない。
あきらとさとしは、サッカーでもテニスでもない。

2 条件を表に整理

授業改善のテーマ 1

① １つ目の条件である「あきらは野球ではない」について、全体で確認しながら表に記入する。

② 全体で確認したことを踏まえ、**各自で、残りの条件をデジタル教科書のコンテンツ（表）に整理**させる。

③ 表に整理した結果を、ペア及び学級全体で確認する。

期待する学習者の変容

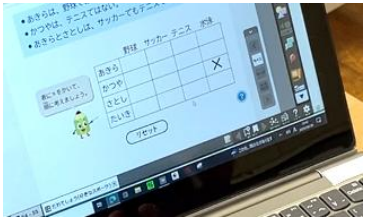
- デジタル教科書のコンテンツ（表）を使って、試行錯誤しながら条件を整理している。
- 分からないときは、自分と同じ考えの友達を見つけて相談する等、他者の考えを参考にしながら推論を進めている。

授業の様子（赤字は"期待する学習者の変容"に関する内容、番号は「授業場面」の番号と対応）

① 「どのように考えていくと良いか」について全体で議論し、まずは、条件を整理していく必要があることを確認した後、授業者から「表を使うと条件が整理しやすい。デジタル教科書に表があり、〇×を簡単に記入できるから使ってみよう。」と提案。
各自がデジタル教科書で操作方法を確認していた。

◀大型提示装置に課題を投影し、全体で確認

デジタル教科書の表を操作する様子▶



① 代表の児童が全体に向け、黒板に投影された表の中の「あきら×野球」の箇所に×を書き入れながら、条件の整理の仕方を発表した。
各児童も、代表児童の発表を聞き、以降の条件の整理の仕方を押さえることができていた。

▲代表児童が発表する様子

② 各児童が、**デジタル教科書の表に〇・×を書き込みながら条件を整理**することができていた。
算数が苦手な児童も、**隣の児童や授業者のサポートを受け、試行錯誤しながら条件を整理**していた。

▲他者のサポートを受けながら試行錯誤

③ ある児童は、**ペアでの教え合いを通じて間違いに気付き、正しい回答に直すことができていた。**
ペア・全体での確認を通じで、全ての児童が、条件を表に正しく整理することができていた。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.2. 越前町立糸生小学校（算数）
3.2.2. 授業改善（１回目）授業内容

■ （前頁の続き）

授業場面（青字は"デジタル教科書を使用した手立て"）

3 整理した条件をもとに、答えを推論　授業改善のテーマ 1

① **条件が整理されたデジタル教科書の表を貼付した学習支援ソフト上のワークシート**を各自に配布。
その後、全体で、残りの推論の進め方を確認する。

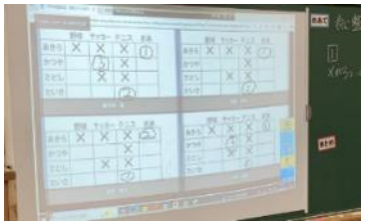
② 各自で残りの推論を進める。その際、どのような順で答えを絞り込んだかが分かるよう、番号を振りながら整理させる。
また、つまずく児童がいた場合、その児童の「分からない点」を全体に共有し、解決の見通しを議論する。

③ 推論の結果について、自分と異なる順番で答えを導いた児童を探し、説明し合う。

期待する学習者の変容	・分からないときは、自分と同じ考えの友達を見つけて相談する等、他者の考えを参考にしながら推論を進めている。

授業の様子（赤字は"期待する学習者の変容"に関する記述、番号は「授業場面」の番号と対応）

① 代表の児童が、整理した条件から答えを絞り込む際の考え方を発表。授業者が、発表された考え方を「めあて」として板書し、全体に推論の進め方を明示した。


▲つまずく児童の考えを並べて表示し、共通する「分からない点」を可視化

② 途中、つまずく児童の考えを黒板に投影し、その児童に「分からない点」を発表させた後、全体でどう考えればよいか話し合った。
つまずいていた児童は、「好きなスポーツは１人１つなので、○が１つ決まると他は×になる」という、**他の児童の発言を聞き「分かった」とつぶやき、残りの推論を進めることができていた。**

▲自分の考えを説明する様子

③ 友達と教え合う場面では、「あきらさんが"水泳"に決まると他の人は"水泳"ではなくなり"×"になる。そうすると、次にさとしさんのスポーツが決まる」等と、答えだけでなく考え方もあわせて説明する様子が見られた。

デジタルツールとアナログツールの併用

▲黒板・大型提示装置・プロジェクタを併用
課題解決に必要となる「めあて」は板書として残し、授業にあわせて表示を切り替える
「本時の課題」や「児童の考え」は、大型提示装置やプロジェクタで投影している

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.2. 越前町立糸生小学校（算数）
3.2.2. 授業改善（１回目）授業内容

■ （前頁の続き）

授業場面（青字は"デジタル教科書を使用した手立て"）

4 本時の課題２を提示

① 課題２を大型提示装置に投影して確認した後、課題１との違いや進め方について全体で話し合う。

【課題２】 ５人の女の子がいます。それぞれの特徴をみて、どの子が誰なのかをみつけましょう。（※特徴が記載されているイラストは割愛）

【条件】 さくらは、髪にリボンをつけている。しおりは、ズボンをはいている。
すみれは、帽子をかぶっている。せりなは、白い靴をはいている。
そのかは、眼鏡をかけている。

5 条件を表に整理し、答えを推論

授業改善のテーマ 1

① **各自で、デジタル教科書のコンテンツ（表）に条件を整理**させる。

② **条件が整理されたデジタル教科書のコンテンツ（表）が貼付された学習支援ソフト上のワークシート**を各自に配布。
ペアで話し合いながら、残りの推論を進める。

期待する学習者の変容
- デジタル教科書のコンテンツ（表）を使って、試行錯誤しながら条件を整理している。
- 分からないときは、自分と同じ考えの友達を見つけて相談する等、他者の考えを参考にしながら推論を進めている。

6 本時の振返り

① 本時の振返りを、学習支援ソフトに記入させる。

授業の様子（赤字は"期待する学習者の変容"に関する記述、番号は「授業場面」の番号と対応）

① 課題１との違いについて、代表の児童が「課題１は、条件が"あきらは野球ではない"だったので"×"で整理したが、課題２は"さくらはリボンをつけている"だから"○"で整理する。」と発言。
全体で課題２の進め方を確認した。

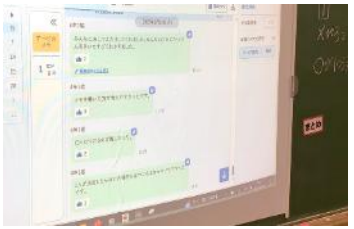
▲デジタル教科書の表で再度試行錯誤

① 算数が苦手な児童は、課題１との違いに戸惑い、最初のうちは手が止まっていたが、**近くの児童と一緒に、１つずつ条件を確認しながら進める**ことで正しく整理できていた。
デジタル教科書は、書き込みを直すのが容易なため、話し合いを通じて、考えを修正しながら整理するのに向いていると考えられる。
一部の児童は条件の整理につまずき推論に至らなかった。

▲ペアで話し合いながら推論を進める様子

② ペアで教え合いながら進めることで、算数が苦手な児童も、**諦めずに取り組むことができていた**。

① 学習支援ソフトに記入された各自の振返りは、チャット形式で集約され、全員が参照することができていた。
そのうちのいくつかを、授業者がピックアップして全体に共有し、本時のポイントを振り返った。


▲振返りも黒板に投影し、全体で共有

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.2. 越前町立糸生小学校（算数）
3.2.2. 授業改善（１回目）児童アンケート結果

- 児童への授業後アンケートから、事前に設定した評価スキームに基づき、「期待する学習者の変容」を評価しました。
- **デジタル教科書や学習支援ソフトの有用性については、それぞれ「〇×を書き消ししやすく試行錯誤に役立った」「他者参照がしやすく考えを整理する際に参考になった」等の理由から、全ての児童が肯定的に捉えています。**
- また、「友達との交流を通じて解き方を理解することができた」という回答も多く寄せられていることから、子供たちの疑問を起点にしながら学級全体で問題に取り組んだことで、苦手な児童も、本時の要点である「推論の感覚」を掴むことができたと考えられます。

評価スキーム（再掲）

授業改善のテーマ ①

ICTを使って情報を整理し、
学級全体で問題を解く

デジタル教科書等を活用した手立て

期待する学習者の変容

- **デジタル教科書のコンテンツ（表）を使って試行錯誤しながら条件を整理している。**
- 分からないときは、自分と同じ考えの友達を見つけて相談する等、**他者の考えを参考にしながら推論を進めている。**

※自由記述の回答は文意を損ねない形で修文したものがある。

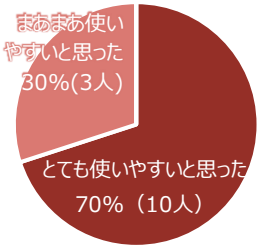
授業後アンケート結果（一部抜粋）

Q1. デジタル教科書は、どのくらい使いやすいと感じましたか。[N=10]

Q2. Q1で答えた理由を教えてください。（自由記述※）

- 表をタップしたら〇×が出るので、わざわざ書かなくてもよく便利だと思った。
- 消しゴムが無くてもリセットボタンですぐ消えるのが良い。

Q3. 学習支援ソフトは、どのくらい使いやすいと感じましたか。[N=10]



Q4. Q3で答えた理由を教えてください。（自由記述※）

- 他の人の考えがみれるので、参考にできた。
- 皆の考えを一気に見ながら、比べることができる。

Q5. 友達の説明を聞いたときや学習支援ソフト等で友達の考えを見たときに、参考になったことがあれば教えてください。（自由記述※）

- 最初はやり方が分からなかったが、自分の考えを皆に見せたら、皆が考え方を教えてくれて解き方が分かった。
- 友達の考えを見て「こんなやり方もあるのだな」と思った。また、友達にやり方を教えてもらって解き方が分かった。
- 友達の意見を聞いて、自分の分からないところを直すことができた。
- 横の人と一緒に分からないところを考えて、解き方が分かった。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.2. 越前町立糸生小学校（算数）
3.2.2. 授業改善（１回目）振返り協議結果

■ 授業後に行った授業者と有識者の振返りでは、以下の「成果」と「課題」、それらを踏まえた「改善策」が挙げられました。

授業改善のテーマ：ICTを使って情報を整理し、学級全体で問題を解く

成果

試行錯誤・他者参照による考えの形成（デジタル教科書の効果）

- **デジタル教科書は、書き消しが容易**なため、本時のように子供が**試行錯誤しながら自分の考えを整理する場面で有効**です。
- また、学習支援ソフトで各自の考えを全体共有し、他者参照させることで、自分の考えを補強したり更に深めることが可能です。

有識者（神戸大学 岡部 教授）

つまずきを起点にした協働的な学びの実現

- つまずく児童を取り残さないよう、その**児童の疑問をICTで共有し学級全体で解決すること**に継続して取り組んできました。
- その結果、子供たちは**「自分のつまずき」を発言することへの抵抗が減り、子供同士で教え合う姿勢を引き出すこと**ができました。

授業者（野口 教諭）

課題

「学習者の主体性」と「教師の介入」のバランス

- 2問目の条件整理は、全て児童主体で進めたため、整理できなかった児童もいました。「筋道を立てて推論すること」がねらいであったため、前段の条件整理までは教師が主導するのも一案です。
- **学習活動の目的や子供の実態に照らしながら、教師がどの程度介入すべきかを考えていけると良い**でしょう。

有識者（神戸大学 岡部 教授）

考えを説明する際の“共同注視”

- 子供たちが前に出て発表する場面や、子供たち同士の教え合いの場面で、**言葉だけで説明する様子が見られました。**
- 説明だけだと、どこの何について話しているかを理解できない子供も多いため、発表者には、**自分の考えのどこを説明しているのか指で示しながら説明させ、”共同注視”すると良い**でしょう。

有識者（神戸大学 岡部 教授）

改善策

児童の理解度に応じ、ペア・全体（教師主導）等の時間を柔軟に組み込む

- 授業前半の個別学習の際に、学習支援ソフトもうまく活用しながら各自がどの程度内容を理解できているかを把握し、その状況に応じて、ペアで教え合う場面や、教師主導で全体でポイントを押さえる場面を設定する。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.2. 越前町立糸生小学校（算数）
3.2.3. 授業改善（２回目）単元情報

■　２回目の授業改善で扱った単元は以下のとおりです。うち、３時間目の授業を実証対象としました。

単元	**変わり方**
単元を通して目指す姿	• 伴って変わる２つの数量の変化の様子や関係について、表やグラフ、式を用いながら調べたり考えたりすることができる。 • 関数的な見方・考え方を深め、生活や学習に活用しようとすることができる。

時数	各授業のねらい	主な学習活動
1	様々な長方形の縦と横の長さの関係を表で整理する。	• 同じ長さのストロー18本を使って様々な長方形を作る。 • 作った長方形の縦と横のストローの本数を、デジタル教科書の表を使って整理する。
2	様々な長方形を作るストローの縦と横の本数の関係を式で表す。	• 前時で整理した「縦と横のストローの本数の表」をもとに、伴って変わる２つの数量の関係を、〇や△を使った式で表す。
3	段の数とまわりの長さの関係を表に整理し、変化の様子を式に表す。	• デジタル教科書のコンテンツを使い、段の数を１段増やしたときに、まわりの長さがどれだけ増えるかを調べ整理する。 • 変化の様子のきまりを見つけ、式で表した後、20段目のまわりの長さを求める。 対象
4	テーブルの数と座れる人数の関係を表に整理し、変化の様子を式に表す。	• デジタル教科書のコンテンツを使い、テーブルの数を１つ増やしたときに、座れる人数がどれだけ増えるかを調べ整理する。 • 変化の様子のきまりを見つけ、式で表す。
5	水のかさと水槽の重さの関係を折れ線グラフに書いて変化の様子を調べる。	• 水のかさを１Lずつ増やしたときの水槽の重さの関係を、デジタル教科書の折れ線グラフに記入する。 • 折れ線グラフから変化の様子のきまりを見つける。
6	単元末のたしかめ問題を解く。	• 単元末の２つのたしかめ問題について、伴って変わる２つの量の変化の様子を、表に整理したり、〇や△を使った式に表しながら取り組む。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校･地域における取組
3.2. 越前町立糸生小学校（算数）
3.2.3. 授業改善（２回目）評価スキーム

■ ２回目の授業改善では、授業改善のテーマに基づく以下の評価スキームを設定し、デジタル教科書等の活用による効果を検証します。授業改善のテーマは「**ICTを使って様々な考え方に触れ、問題解決の見通しをもつ**」です。

現状の課題

算数が苦手な児童は
個人思考の場面において
見通しをもって問題解決に臨むことが
できない。

授業改善のテーマ ②

ICTを使って様々な考え方に触れ、
問題解決の見通しをもつ

目指す姿

デジタル教科書のコンテンツや
友達の考え･説明を参考にしながら
苦手な問題に挑戦することができる。

デジタル教科書等を活用した手立て

- 個人思考の場面で、学習支援ソフトに自分の考えを整理させる。
  その際、**デジタル教科書のコンテンツを使うと整理しやすいことも伝え、各自の理解度に応じた活用を促す。**
- 各自の考えを学習支援ソフト上で共有し、他者参照を促す。

期待する学習者の変容

- 課題解決の見通しがもてない児童は、**デジタル教科書のコンテンツを使い、どのように進めるとよいかを確認**している。
- 学習支援ソフト上の**友達の考えを参照したり友達の話を聞いたりしながら、自分の考えを修正**している。

指導計画策定における授業者のねらい

子供たちの中で「誰かのつまずきをクラス全体で解決する」という考え方が定着し、学習支援ソフトで共有された考えを見ながら、積極的に教え合う姿勢が身についてきました。

本時も難易度が高いですが、デジタル教科書や学習支援ソフト上の他の児童の考えをヒントに、全員が本時の課題解決の見通しをもてるよう取り組みました。

授業者（野口 教諭）

指導計画策定における有識者からの助言

異種の数量（段の数とまわりの長さ）の変化の関係性を捉える本時は、中学で学習する「関数」に繋がる内容であり難易度が高いです。

デジタル教科書により見通しをもって試行錯誤できるようにしながら、子供たちの考えをもとに学級全体で推論 （段数とまわりの長さの変化の規則）に迫れると良いでしょう。

有識者（神戸大学 岡部 教授）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.2. 越前町立糸生小学校（算数）
3.2.3. 授業改善（２回目）授業内容

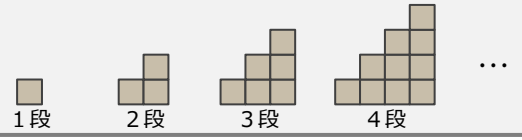
■ 授業の流れ及び実際の授業の様子は以下のとおりです。

授業場面（青字は"デジタル教科書を使用した手立て"）

1 本時の課題を提示し、見通しを確認

① **デジタル教科書の課題を大型提示装置に投影**し、「まわりの長さはどこを表しているか」「１～３段のまわりの長さは何か」を全体で話し合い、課題解決の見通しを確認する。

【課題】 １辺が１cmの正方形を並べて、下のような階段の形を作ります。10段目のまわりの長さを求める簡単な方法を見つけよう。



2 10段目のまわりの長さの求め方を個人で考える

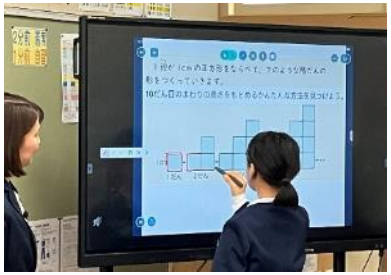
授業改善のテーマ 2

① 個人で10段目のまわりの長さの求め方について考え、学習支援ソフトの共有ノートに整理させる。
その際、**デジタル教科書のコンテンツ（10段まで階段の段数を増やすことができるシミュレーション機能や表）を使うと、まわりの長さを整理しやすいことを伝え、自分の理解度に応じ使用することを促す。**

期待する学習者の変容	
	• 課題解決の見通しがもてない児童は、デジタル教科書のコンテンツを使い、どのように進めたらよいかを確認している。 • 学習支援ソフト上の友達の考えを参照したり友達の話を聞きながら、自分の考えを修正している。

授業の様子（赤字は"期待する学習者の変容"に関する内容、番号は「授業場面」の番号と対応）

① １～３段目のまわりの長さを確認する場面では、授業者や指名された児童が、大型提示装置に投影された図形に直接書き込みながら説明した（共同注視）。
本時で取り組む課題について、言葉だけでなく視覚的にも示したことで、全ての児童が、共通の見通しをもつことができていた。



◀大型提示装置に直接書き込む様子

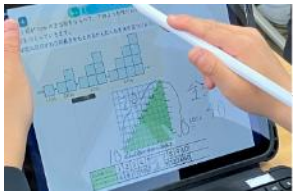
自身のデジタル教科書でも確認する様子▶

① 一部の児童は、はじめに**デジタル教科書のコンテンツで10段まで段数を増やし、１辺ずつ直接書き込みながら粘り強くまわりの長さを確認していた。**
その児童は、10段目のまわりの長さを確認した後、他の段数は求めていなかった。

数名の児童は、１段増やすとまわりの長さが４cmずつ増えることに気付き、「４×段の数」という計算式を使ってまわりの長さを求めていた。その後、**計算で求めたまわりの長さが本当に正しいか、デジタル教科書のコンテンツを使って確認**していた。

多くの児童は、答えを求めた計算式だけでなく、デジタル教科書の図表や言葉（考え方）等を書き加え、**他の児童が見ても分かるよう考えを整理していた。**

▲デジタル教科書に直接書き込みまわりの長さを確認



▲デジタル教科書をキャプチャし学習支援ソフト上で考えを整理

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.2. 越前町立糸生小学校（算数）
3.2.3. 授業改善（２回目）授業内容

■ （前頁の続き）

授業場面（青字は"デジタル教科書を使用した手立て"）

3 個人で考えた結果を、ペア・全体に共有

① 学習支援ソフトに整理した個々の考えを、ペアで発表し合う。

② 数名の児童を指名し、自分の考えを全体に発表させた後、発表内容をもとにしながら、段の数とまわりの長さの関係性を全体で確認する。
その際、「"段の数"×４cm＝"まわりの長さ"」のように、式の意味を意識させ、伴って変わる２つの量の関係性を捉えさせる。

4 20段目のまわりの長さをペア・全体で考える

授業改善のテーマ 2

① 全体で確認したことを踏まえ20段目のまわりの長さをペアで考え、**学習支援ソフトの共有ノートに整理**させる。

② 数名の児童を指名し、自分の考えを全体に発表させる。
その後、20段目も10段目と同様の関係性であることを確認する。

期待する学習者の変容	・学習支援ソフト上の友達の考えを参照したり友達の話を聞ながら、自分の考えを修正している。

5 本時の振返り

① 本時の振返りを、学習支援ソフトに記入させる。

授業の様子（赤字は"期待する学習者の変容"に関する記述、番号は「授業場面」の番号と対応）

① ペアで発表し合う場面では、端末に表示された自分の考えを相手に見せながら説明。その際、説明箇所を指で示しながら発表する様子（共同注視）が見られた。

② 指名された複数の児童は「１段増えると、４cmずつまわりの長さが増えていることに気付いた。」と発言。
その後、授業者が、児童たちの発言をもとに、表を使いながら「４cm×"段の数"＝"まわりの長さ"」になっていることを示し、全体で、伴って変わる２つの量の関係性を確認していた。

▲代表児童が発表する様子

▲児童の発表をもとに、授業者が段の数とまわりの長さの関係性を"言葉の式"で整理

① 10段目のまわりの長さを求める際に１辺ずつ数えていた児童は、20段の図形を手書きで作り始めたが、途中でやめ、
前段で全体に向けて発表された児童の考えを学習支援ソフト上で参照しながら、解き方を考えていた。

② 指名された児童が、「10段目の時と同じで、１段増えると４cmずつ増えるから、20段の時は20×４で80cm」と発表。
授業者が、児童に対して「４cm」の意味も問い返したが、答えることはできず、「４cm」が、図中のどの部分であるかまでは追求できなかった。

▲端末を並べてペアで考える様子

① 児童たちは、学習支援ソフト上の共有ノートに、
「分かったこと」「難しかったこと」「クラス全員で考えたり、友達の考えを聞いて思ったこと」の３つを色分けしながら振返りを記入していた。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.2. 越前町立糸生小学校（算数）
3.2.3. 授業改善（２回目）児童アンケート結果

- 児童への授業後アンケートから、事前に設定した評価スキームに基づき、「期待する学習者の変容」を評価しました。
- デジタル教科書の有用性を問う質問では、ほぼ全ての児童が「とても役立った」と回答しています。また、自由記述の回答からは、コンテンツにより問題解決の見通しをもつ場面や、試行錯誤して考えを整理する場面で効果を発揮したことが分かります。
- 他者との交流に関する質問では、「共有された友達の考えを参考にした」という回答が多く寄せられており、他者参照を通じた自身の考えの改善も行われていたと推察されます。

評価スキーム（再掲）

授業改善のテーマ ②

ICTを使って様々な考え方に触れ、
問題解決の見通しをもつ

デジタル教科書等を活用した手立て

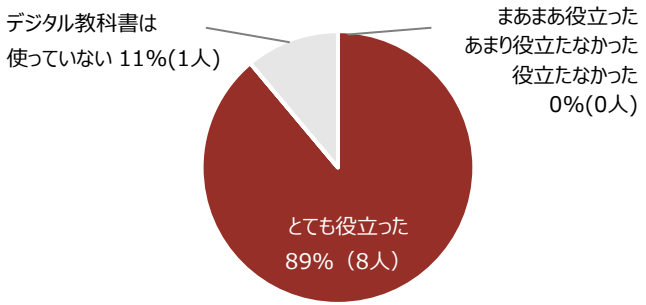
期待する学習者の変容

- 課題解決の見通しがもてない児童は、**デジタル教科書のコンテンツを使い、どのように進めたらよいかを確認**している。
- 学習支援ソフト上の**友達の考えを参照したり友達の話を聞いたりしながら、自分の考えを修正**している。

※自由記述の回答は文意を損ねない形で修文したものがある。

授業後アンケート結果（一部抜粋）

Q1. デジタル教科書は、どのくらい役立ちましたか。[N=9]



Q2. デジタル教科書を使った場面や役立ったと感じた理由を教えてください。（自由記述※）

- 階段を数える時に、簡単に段数を増やせるので分かりやすかった。
- まわりの長さを表にまとめるのに使った。
- 実際に10段まで増やしてまわりの長さを数えた。
- デジタル教科書を使うと、友達に説明しやすい。

Q3. 友達の説明を聞いたときや学習支援ソフト等で友達の考えを見たときに、参考になったことがあれば教えてください。（自由記述※）

- 困ったときに友達の考えを見ると、どうすると良いかが何となく分かった。
- 他の友達の、表を使った考えや式を使った考えが参考になった。
- 他の友達の「表を縦で見るといい」という考えが参考になった。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校･地域における取組
3.2. 越前町立糸生小学校（算数）
3.2.3. 授業改善（２回目）振返り協議結果

■ 授業後に行った振返りでは、以下の「成果」と「課題」、それらを踏まえた「改善策」が挙げられました。

授業改善のテーマ：ICTを使って様々な考え方に触れ、問題解決の見通しをもつ

成果

視覚的なコンテンツにより見通しをもつ（デジタル教科書の効果）

- 本時の**「段数を増やせるコンテンツ」**のように、**デジタル教科書は、視覚的な理解を促したり、見通しをもたせたりする際に有効です。**
- また、**デジタル教科書に書き消しを繰り返して答えを求める様子**も見られ、前回同様、**粘り強い試行錯誤**を引き出せました。

授業者（野口 教諭）

他者参照を意識した考えの表現（デジタル教科書の効果）

- 個人思考の場面では、式だけでなく図や言葉で補足する等、**他者が見ても分かるよう考えを整理する様子が見られました。**
- デジタル教科書により見通しをもち、他者が見て分かるよう考えを整理し、**それを参照しながら学ぶという好循環ができています。**

有識者（神戸大学 岡部 教授）

課題

“ねらい”に迫る推論を引き出す課題設定

- 一部の児童は、10段目のまわりの長さのみを求めて終了し、２つの数量の変化の様子や規則性には着目できていませんでした。
- ２つの数量の変化の仕方から規則性を推論できるよう、**各段のまわりの長さを「表」で整理するよう課題設定し、表中の数字の縦や横の関係に目を向けさせる**のも一案です。

有識者（神戸大学 岡部 教授）

式⇔表⇔図を往還しながらポイントを再確認

- 本時では、「４cm×”段の数”＝”まわりの長さ”」というきまりを見出しましたが、「４cm」の意味の追求まではできませんでした。
- 例えば、**デジタル教科書の図で、増えた「４cm」がどの部分かを確認する等、見出したきまり（式）を、表や図など別の視点からも再確認**することで、意味の理解を更に深めることができます。

有識者（神戸大学 岡部 教授）

改善策

教科のねらいに迫るICT活用を検討する

- 本実証を通じて、子供たちは、デジタル教科書や学習支援ソフトを活用した学習活動に慣れ、情報活用能力が高まっている。今後は、教科のねらいを意識し、その達成に向けたICTの活用となるよう授業を構成する。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.2. 越前町立糸生小学校（算数）
3.2.4. 授業改善のプロセス

■ 2回の授業改善を通して、デジタル教科書等を活用して子供たちの対話を引き出す授業スタイルを検討しました。

START

実証前

考えを整理するのが苦手な児童も巻き込む、対話的な学びを模索

- 本学級は、意欲をもって真面目に取り組む児童が多い一方で、考えを整理するのが苦手な児童も多かった。そのため、授業は、算数が得意な児童を中心に進めつつ、苦手な児童に個別指導を行う形が多く、児童同士の対話をどのように生むか模索していた。

指導計画策定

児童のつまずきを軸とした授業展開に取り組む

- 「１人のつまずきは学級のつまずき」とし、困っている児童を学習支援ソフトで見取り、学級全体で解決策を考える授業に取り組む。

授業者（野口 教諭）

子供の「つまずき」を起点にした授業展開を繰り返すうちに、子供たちは「ここが分からない」と声を上げるようになり、まわりの子供もそれを助けようと、教えに行ったりするようにもなりました。

また、以前は何も考えを書けず手が止まっていた児童も、全体での考えの共有に向け、デジタル教科書や学習支援ソフト上の他の児童の考えを見ながら、頑張って何とか自分の考えを表現するようになってきました。

授業実践（1回目）

つまずきをもとに、学級全体で対話的に授業を進めていくスタイルが定着

次なる課題は、共同注視など、対話の”質”を更に上げていく工夫

指導計画策定

説明時の共同注視を習慣化し、”より分かりやすく”考えを伝えることを意識させる

- 対話の質の向上を目指し、説明時の共同注視を習慣化。このことを通じて、他の児童に考えを”分かりやすく”伝える意識を醸成。

有識者（岡部 教授）

共同注視という考え方は、従前から説明時のポイントとして存在しています。デジタルを使うと容易に考えを共有できるが故に、「共有して終わり」となってしまうことも多いですが、相手意識をもって分かりやすく説明することの重要性は変わりません。

また、「他者に分かりやすく説明すること」を意識づけると、子供たちは”説明”を意識して考えを整理するようになります。例えば、デジタル教科書から補強材料を探したり、ポイントを言葉で書き加える等アウトプットの質の向上にも繋がります。

授業実践（2回目）

デジタル教科書や学習支援ソフトを活用しながら、子供たちが学び合う授業スタイルを実現

今後は、教師が引っ張っていく”教師の指導性”と、子供に託す“学習者の主体性”のバランスを意識

©2026 ABeam Consulting Ltd.

■ 2回の授業改善を通して得られた、授業改善のポイントは以下のとおりです。

越前町立糸生小学校における授業改善の取組の総括

授業改善のポイント

授業改善のテーマ1：ICTを使って情報を整理し、学級全体で問題を解く

試行錯誤・他者参照による考えの形成 ➡ 参考：p.31、32、33

- デジタル教科書は、書き消しが容易なため、子供が試行錯誤しながら自分の考えを整理する場面で有効となる。
- また、学習支援ソフトで各自の考えを全体共有し、他者参照させることで、自分の考えを補強したり更に深めることが可能となる。

つまずきを起点にした協働的な学びの実現 ➡ 参考：p.32

- つまずく児童を取り残さないよう、その児童の疑問をICTで共有し学級全体で解決することに継続して取り組んだことにより、子供たちは「自分のつまずき」を発言することへの抵抗が減り、子供同士で教え合う姿勢を引き出すことが可能となった。

授業改善のテーマ2：ICTを使って様々な考え方に触れ、問題解決の見通しをもつ

視覚的なコンテンツにより見通しをもつ ➡ 参考：p.38、39

- 本時の「段数を増やせるコンテンツ」のように、デジタル教科書は、視覚的な理解を促したり、見通しをもたせる際に有効となる。

他者参照を意識した考えの表現 ➡ 参考：p.38、39

- ICTを活用した他者参照を通じた学びに継続して取り組むことで、子供たちは、他者が見ても分かるよう、図や言葉で補足しながら考えを整理するようになった。

実践を振返って

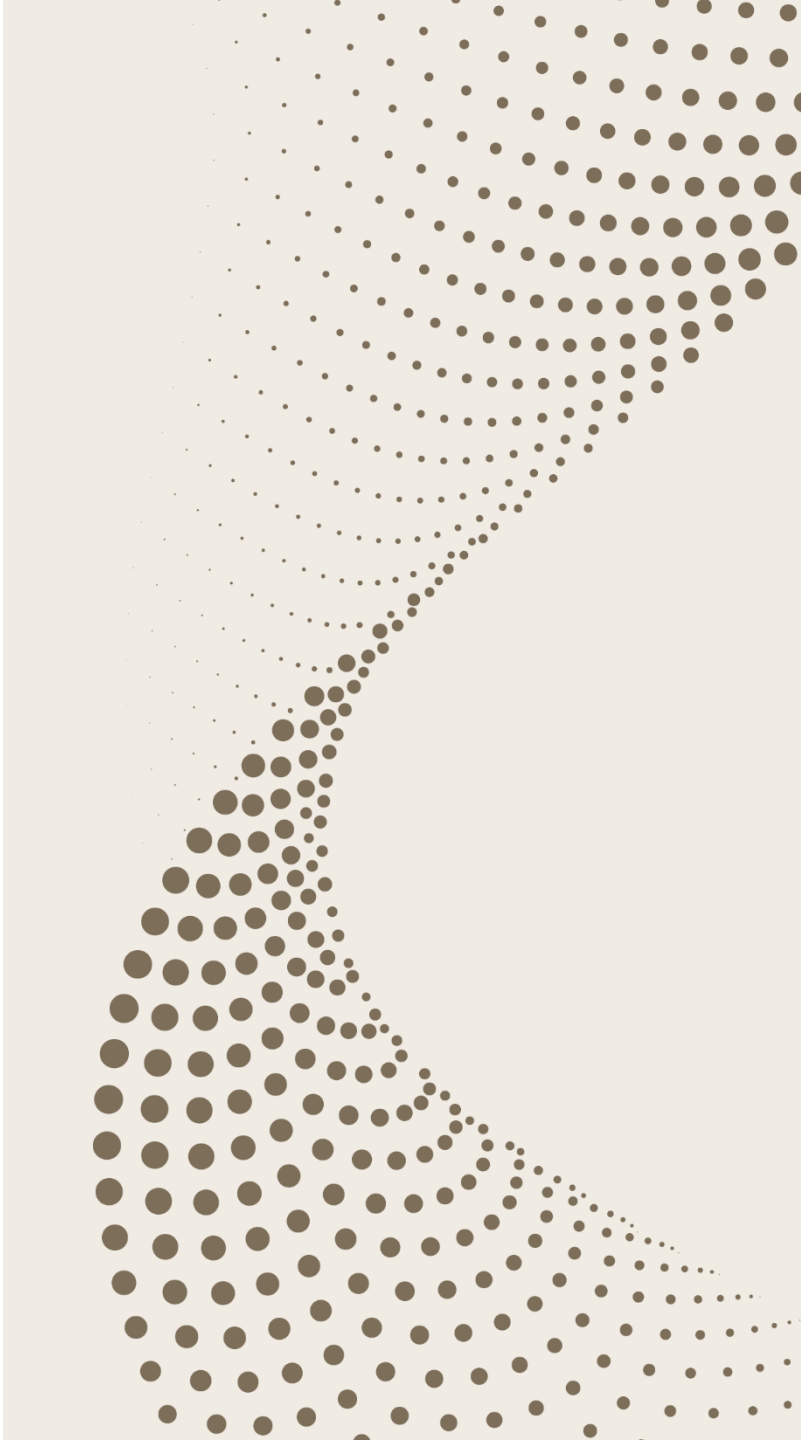
- デジタル教科書を実際に見てみるまでは、どのようにデジタル教科書を活用したら良いのか悩みましたが、実際に触ってみると「こんな機能があるんだ」「こういうときに使えそう」ということに気付くことができました。
- また、困ったときには、校内の先生と、一緒に触りながら使えそうな機能や活用方法を考え、学校全体でもデジタル教科書を活用した授業改善に取り組むことができました。
- 本実証を通じて、自分の授業への向き合い方が変わりました。また、それに伴い子供たちの学びに向き合う姿勢も変わったと感じています。

授業者（野口 教諭）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組

3.1. 鹿屋市立鹿屋中学校（外国語）
3.2. 越前町立糸生小学校（算数）
3.3. 奈良市立ならやま小中学校（国語）
3.4. 山都町立矢部中学校（理科）
3.5. 深谷市立藤沢中学校（社会）
3.6. 地域内展開



3. 各実証校・地域における取組
3.3. 奈良市立ならやま小中学校（国語）
3.3.1. 基本情報

■ 奈良市立ならやま小中学校における国語の実証研究に御協力いただいた関係者、デジタル教科書等の活用状況は以下のとおりです。

実証研究校名	奈良市立ならやま小中学校	対象学年（児童数）	小学校６年（36名）
対象教科	国語	使用教科書	光村図書『国語 6 創造』
担当教諭	前谷 将司 教諭	担当有識者	放送大学　佐藤 幸江 客員教授

デジタル教科書等の活用状況	１人１台端末	• 学校に導入されて５年目。 • 国語の授業では、基本的に毎回の授業で使用している。 • 端末以外の配布物はタッチペンのみ。 • 学習支援ソフトを利用して考えを交流したり、プレゼンテーションソフトでプレゼンテーションや動画作成を行っており、**児童たちは基本的な端末操作に慣れている**。
	デジタル教科書	• 学校に導入されて２年目。 • 国語の授業では、説明文の学習で抜き出し機能を活用した経験があるが、それ以外の場面ではほとんど活用したことがない。

現状の課題

- **自分の考えをどのように整理すべきか分からず、適切に表現することが難しい**児童が多い。
- 多くの児童が、**自分の考えの根拠を深く考えることが難しく、他者に分かるように表現できていない**。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.3. 奈良市立ならやま小中学校（国語）
3.3.2. 授業改善（１回目）単元情報

■ １回目の授業改善で扱った単元は以下のとおりです。うち、２時間目の授業を実証対象としました。

単元	**対比や比喩等の表現の工夫に着目して、作品の理解を深めよう（やまなし）**
単元を通して目指す姿	• 文学的文章の構成要素や表現の工夫について理解し、作品の内容を捉えることができる。 • 文章の叙述や描写、対比、比喩、色彩表現等を根拠に作品の世界やテーマを深く考察し、自分の言葉で表現できる。 • 作者の表現意図や作品の世界観について、他者と意見を共有しながら、自分の考えを論理的に深めることができる。

時数	各授業のねらい	主な学習活動
1	登場人物や印象に残る叙述や表現に注目し、読みの方向性を見出す。	• 音読を行い、登場人物や舞台を確認しながら、気になる叙述や表現に線を引く。 • 作品を読んで感じた、初発の感想や疑問を書く。
2	**「５月」と「12月」の描写から受け取った印象を色で表現し、その色を選んだ理由を示すことで、自分の考えとその根拠を明確にする。**	• **本文を読み、重要と感じた叙述にデジタル教科書上で線を引く。** • **デジタル教科書や学習支援ソフト、紙のノート等からツールを選び、自分の考えを整理し共有する。** **対象**
3～4	児童の疑問を手がかりに、登場人物の心情や文章表現の意味を考える。	• 児童が出した疑問を共有・整理する。 • 疑問に基づき、心情や表現の意味を文章から読み取り、自分の考えをまとめる。
5～6	作者である宮沢賢治の生涯や作品の世界観を理解することで読みを深める。	• 宮沢賢治の生涯や特徴について調べる。 • 「イーハトーブの夢」を読み、作品の世界観や作者の意図を考える。
7～9	題名がなぜ「やまなし」とされているのか、作品内容との関係を読み取る。	• 「イーハトーブの夢」を読み、題名「やまなし」の意味や意図について考える。 • 自分の考えとその理由を整理し、共有する。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.3. 奈良市立ならやま小中学校（国語）
3.3.2. 授業改善（１回目）評価スキーム

１回目 | 計画 | 実践 | アンケート | 振返り | ２回目

■ １回目の授業改善では、授業改善のテーマに基づく「評価スキーム」を設定し、デジタル教科書等の活用による効果を検証します。
テーマは「**デジタル教科書の書き込みや抜き出し機能を活用し、情報を整理する**」です。

現状の課題

自分の考えをどのように整理すべきか分からず、適切に表現することが難しい児童が多い。

授業改善のテーマ ①

デジタル教科書の書き込みや抜き出し機能を活用し、情報を整理する

目指す姿

自分の考えを分かりやすく整理し、根拠をもって表現できる。

デジタル教科書等を活用した手立て

- **本文を読み、重要と感じた箇所にデジタル教科書上で線を引かせる。**
- **自分で選択したツール（デジタル教科書や学習支援ソフト、ノート等）に本文を抜き出して、自分の考えを整理させる。**

期待する学習者の変容

- **叙述や表現を意識して読み、本文のどの部分が重要かを自分の視点で捉えている。**
- **本文を軸に、自分の感じたことやその根拠を分かりやすく整理**している。

指導計画策定における授業者のねらい

明確な正解が存在しない問いに対して、自分の考えを整理することが苦手な児童が多く見られます。
今回の授業では、デジタル教科書に書き込みを行って本文に色を分けて線を引いたり、必要な箇所を抜き出して整理したりする等、児童がツールを選択しながら、自分に適した方法で考えやその根拠をまとめられるように指導します。

授業者（前谷 教諭）

指導計画策定における有識者からの助言

デジタル教科書は、注目した箇所に線を引いたり、抜き出したりして整理できるため、児童が自分の考えをまとめる際に非常に効果的です。
デジタル教科書を活用する際は、「使うこと」が目的化しないよう注意が必要です。
各学習活動を通じて育てたい資質・能力を明確にするとともに、単元全体を通じて、どの場面でデジタル教科書を効果的に活用できるか考えることが重要です。

有識者（放送大学 佐藤 客員教授）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.3. 奈良市立ならやま小中学校（国語）
3.3.2. 授業改善（１回目）授業内容

■ 授業の流れ及び実際の授業の様子は以下のとおりです。

授業場面（青字は"デジタル教科書を使用した手立て"）

1 叙述から感じ取った自分の考えや根拠の整理

授業改善のテーマ 1

① 前時に「５月」と「12月」の叙述から感じ取った色を各自で画用紙上に表現させていた。本時は「なぜその色にしたのか」、**自分の考えとその根拠を明確にするために、各自で選択したワークシート（デジタル教科書や学習支援ソフト、ノート等）に本文を抜き出して、自分の考えを整理**させる。

期待する学習者の変容

- 叙述や表現を意識して読み、本文のどの部分が重要かを自分の視点で捉えている。
- 本文を軸に、自分の感じたことやその根拠を分かりやすく整理している。

2 他の児童の考えや根拠の確認

① 児童に対して、教室を自由に歩き回って、他の児童の考えや根拠をワークシートから確認し、メモをするように指示する。
その際、色の違い等の表面的な観点に注目するのではなく、どのような叙述からその考えを至ったのかといった「根拠の読取り」に焦点を当てるよう助言する。

② 班に戻り、班内で自分の考えとその根拠を発表し、意見交換するよう促す。

授業の様子（赤字は"期待する学習者の変容"に関する内容、番号は「授業場面」の番号と対応）

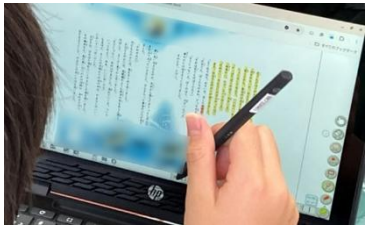
① 活用されていたワークシートは、「デジタル教科書」「学習支援ソフト」「紙のノート」が、それぞれ約1/3程度だった。
デジタル教科書を活用していた児童の多くは、**本文に色線を引いたり、本文をカード形式でまとめたりすることで、視覚的に分かりやすく整理**していた。
学習支援ソフトや紙のノートを活用していた児童も、自分の考えやその根拠を文章でまとめていた一方で、文章を羅列するだけの整理にとどまり、一見しただけでは理解しにくい記述となっていた児童も見られた。

▲デジタル教科書を活用して、色分けしながら、取りまとめられた考え

① 多くの児童が「根拠となる叙述と色」をメモしていた。
ある児童は途中でメモをノートから端末に切り替え、自分に合った方法で他の考えを整理していた。
また、他の児童の考えを読むことで刺激を受け、他の児童の考えから、感じたことをメモしていた。
一方で、自分の考えの根拠として、「文章」ではなく「単語」を挙げる児童が多く見られた。

▲他の児童の考えやその根拠をメモ

② 他の児童の意見を踏まえ、教科書に線を引いたり、ワークシートに考えを書き加えたりする様子も見られた。
また、配慮が必要な児童も、ワークシートのような根拠となる資料を見せながら共有することにより、他の児童の質問に答えたり、話し合ったりしていた。
「私はXXを白にしていたが、○○さんは黄色にしたのはなぜ？」「XXの部分は何色になると思う？」等、色を起点にしながら活発に議論することができていた。



▲他の児童の意見を踏まえて新たに教科書に線を引く様子

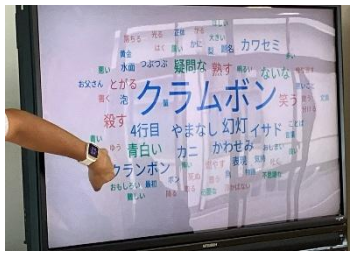
©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校･地域における取組
3.3. 奈良市立ならやま小中学校（国語）
3.3.2. 授業改善（１回目）授業内容

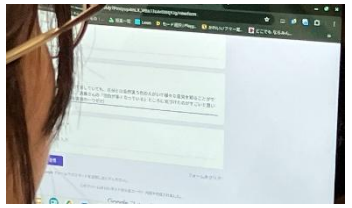
■ （前頁の続き）

授業場面	授業の様子
3 全体で考えやその根拠の共有 ① 代表児童２名に発表させ、話題になった児童の考えやメモを板書し、表現の違いを全体で確認する。 ② 「クランボンが死んだ場面」をどの色で表現し、どのように感じたかを授業者主導で挙手や発言により確認し、「同じ場面だが、選択された色や感じ方が異なる」ということを全体で理解させ、多様な解釈があることを確認する。	① 授業者の問いかけに応じて、どの色を選んだかやその理由を挙手や発言で伝え、互いの感じ方の違いを意識していた。 ② 「私はXXを黄色にしていたけれど、同じ個所でも、○○さんはxxから赤と感じたんだね」といったように、同じ場面でも色の選択や受け取り方が異なることに理解を示し、「なぜその色にしたのか」を互いに質問しながら活発に議論していた。
4 次回授業に向けた確認、本時の振返り ① 前時に児童が書いた作品を読んで感じた初発の感想や疑問を大型提示装置に掲示する。 次回の授業では前時の感想や疑問、本時の学びを手がかりに、登場人物の心情や叙述や表現の意味を考える活動を行うことを確認する。 ② 本時の振返りを、質問フォームに記入させる。	① 児童全員の疑問のうち、特に多く寄せられた疑問をキーワード形式で大型提示装置の中央に掲示し、どの疑問をどの程度の児童が抱いたのか、視覚的に分かりやすく確認していた。 ② 「他の人の考えを見た後、改めて読んでみて、この文章にはどのような心情が表されているのか気になった」と記入する児童が見られた。

▲全体で、各自の考えやその根拠を確認



▲児童が挙げた疑問一覧


▲振返りを行う児童の様子

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.3. 奈良市立ならやま小中学校（国語）
3.3.2. 授業改善（１回目）児童アンケート結果

- 児童への授業後アンケートから、事前に設定した評価スキームに基づき、「期待する学習者の変容」を評価しました。
- **デジタル教科書の有用性については、「自分が注目した本文を簡単に抜き出せる点が便利だった」「本文から抜き出した文章を貼り付け、自分の考えを書き加えられた点が良かった」等の意見が挙げられました。**
- また、**「自分の考えの根拠を教科書の叙述や表現とすることを意識して学習を進めた」**という回答も多く寄せられていることから、デジタル教科書を活用したことで、根拠を明確にしながら自分の考えをまとめられたことが伺えます。

評価スキーム（再掲）

授業改善のテーマ ①

デジタル教科書の書き込みや抜き出し機能を活用し、情報を整理する

デジタル教科書等を活用した手立て

期待する学習者の変容

- 叙述や表現を意識して読み、本文のどの部分が重要かを自分の視点で捉えている。
- 本文を軸に、自分の感じたことやその根拠を分かりやすく整理している。

授業後アンケート結果（一部抜粋）

Q１．自分の考えを整理する上で、デジタル教科書のどのような点が使いやすいと感じましたか。（自由記述※）

- 自分が注目した本文を簡単に抜き出せる点が便利だった。
- 本文から抜き出した文章を貼り付け、自分の考えを書き加えられた点が良かった。
- デジタル教科書にきれいに線を引ける上、色分けもできるため便利だった。
- 紙の教科書と比べ、書き込みスペースが多くメモを残しやすかった。

Q２．自分の考えや整理する上で、自分なりに工夫したことを教えてください。（自由記述※）

- 自分の考えの根拠を教科書の叙述や表現とすることを意識して学習を進めた。
- 根拠を考える際、重要な叙述や表現に線を引いて強調し、不要な情報と明確に区別した。
- 抜き出した本文と自分で書き加えた文を、付箋の色を変えて区別しながらまとめた。
- 重要な場面ごとに自分の考えを整理し、簡潔にまとめた。

※自由記述の回答は文意を損ねない形で修文したものがある。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校･地域における取組
3.3. 奈良市立ならやま小中学校（国語）
3.3.2. 授業改善（１回目）振返り協議結果

■ 授業後に行った授業者と有識者の振返りでは、以下の「成果」と「課題」、それらを踏まえた「改善策」が挙げられました。

授業改善のテーマ

デジタル教科書の書き込みや抜き出し機能を活用し、情報を整理する

成果

デジタル教科書の多様な機能を活かした情報整理

デジタル教科書の効果

- デジタル教科書を活用することで、**本文に色分けして線を引いたり、抜き出した本文や図表を貼り付け、カード形式でまとめたりすることができます。**これらの機能を活用することで、多くの児童が**自分の考えを叙述や表現に基づいて整理**することができました。

有識者（放送大学　佐藤　客員教授）

課題

更なる読みの深まり

- 自分の考えの根拠として、「文章」ではなく「単語」を挙げる児童が多く見られました。
- 読みを深めるには**叙述や表現の繋がりに着目する必要**があります。**デジタル教科書の機能を上手く活用し、本文同士を関連付けて、自分の考えを深められると良い**でしょう。

有識者（放送大学　佐藤　客員教授）

他者に伝わりやすい情報整理

- 自分の考えやその根拠をワークシートに整理する場面において、一部の児童は自分の考えを羅列するだけの整理にとどまり、一見しただけでは理解しにくい記述となっている傾向が見られました。
- 今後は、**「良いまとめ方」を全体に紹介し価値付ける等工夫し、他者への伝わり方を意識して整理できると良い**でしょう。

有識者（放送大学　佐藤　客員教授）

改善策

深い読みと他者に伝わる表現を促す学習指導

- デジタル教科書の機能を上手く活用して、本文同士の関係を可視化しすることで、深い読みを促す。
- 「良いまとめ方」を授業者より価値付けする等工夫し、児童が他者に伝わる表現や整理方法を身に付けられるよう促す。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.3. 奈良市立ならやま小中学校（国語）
3.3.3. 授業改善（２回目）単元情報

■　２回目の授業改善で扱った単元は以下のとおりです。うち、４時間目の授業を実証対象としました。

単元	**叙述や表現を根拠に考察を深め、考えを伝え合おう（海の命）**
単元を通して目指す姿	• 文学的文章の構成要素や表現について理解を深め、作品の内容を捉えることができる。 • 叙述や表現を根拠に作品世界を深く考察し、登場人物の生き方や価値観について、自分の考えを表現することができる。 • 作品の主題である「命」について、多様な価値観に触れながら、自らの考えを深めることができる。

時数	各授業のねらい	主な学習活動
1	物語を読んだ感想や疑問を整理・共有する。	• デジタル教科書の朗読機能により物語を聞き、感想や疑問を整理する。 • その後、各自の感想や疑問を全体で確認し、その内容を踏まえて、本単元の学習の方向性を確認する。
2	太一の性格や心情の変化を読み取り、物語への理解を深める。	• 前時の疑問を基に太一に着目して改めて物語を捉え、性格や心情の変化を読み取る。 • 性格や心情の変化が分かる箇所に線を引き、デジタル教科書の抜き出し機能や思考ツールを活用して整理する。
3	本単元の中心課題※を設定し、自分の考えを整理する。	• 各自で中心課題を設定する。
4～7	**中心課題に沿って物語の表現や描写を読み取り、考えを整理する。**	• **個人で物語を読み進め、中心課題に関する叙述や表現に線を引き、デジタル教科書の抜き出し機能等を活用しながら自分の考えを整理する。** • **他者と交流し、新たな視点を得ながら、読み進める。** **対象**
8～9	中心課題に対する自分の考えを全体に共有する。	• 中心課題に対する自分の考えを全体に向けて発表し、それぞれの学びを交流する。
10	本単元で学んだことや気付きを振り返る。	• 単元を通じて学んだことや気付きを振り返る。

※本資料では、「物語を読み込んでいく中で探求したい課題」を指す。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.3. 奈良市立ならやま小中学校（国語）
3.3.3. 授業改善（２回目）評価スキーム

■ ２回目の授業改善では、授業改善のテーマに基づく「評価スキーム」を設定し、デジタル教科書等の活用による効果を検証します。
テーマは「**叙述や表現に基づいて考えを整理し、自分に合った方法で分かりやすく表現する**」です。

現状の課題

多くの児童が、自分の考えの根拠を深く考えることが難しく、他者に分かるように表現できていない。

目指す姿

文章を深く読み、自分の考えの根拠を明確にした上で、他者に伝わる表現を意識してまとめている。

授業改善のテーマ ②

自分の考えを、叙述や表現を関連付けながら整理し、交流する

デジタル教科書等を活用した手立て

- 個人で設定した**「中心課題」への考えをデジタル教科書上で整理**させる。
その際、**本文に色分けして線を引いたり、抜き出したりしながら、叙述や表現の関連に着目**させる。
- 他の児童と**デジタル教科書上で整理した内容を交流させる。**

期待する学習者の変容

- デジタル教科書の機能を活用し、**複数の叙述や表現を根拠として抜き出しながら整理し、それらを関連づけて自分の解釈を加えている。**
- **新たな視点や整理方法を他者から学ぼう**としている。

指導計画策定における授業者のねらい

１回目の授業実践では、デジタル教科書を活用することで、自分の考えとその根拠を整理する姿が見られました。
今回の授業では、これらの機能を使って、情報同士を関連付けながら読みを深められるよう指導していきます。
また、自力での整理が難しい児童には、対話を通じて着目すべき叙述や表現に気付かせ、学習の進め方を支援します。

授業者（前谷 教諭）

指導計画策定における有識者からの助言

登場人物同士の関わりや出来事の背景に注目して読みを進められる良いでしょう。
デジタル教科書では、本文に色線を引いたり、本文の気になった箇所を抜き出したりすることができます。
デジタル教科書の様々な機能を各自が、上手く活用しながら、物語を深く読み取れると良いでしょう。

有識者（放送大学 佐藤 客員教授）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校･地域における取組
3.3. 奈良市立ならやま小中学校（国語）
3.3.3. 授業改善（２回目）授業内容

■ 授業の流れ及び実際の授業の様子は以下のとおりです。

授業場面（青字は"デジタル教科書を使用した手立て"）

1 前時の内容、本時のめあての確認

① 児童から出された疑問を一覧化した表を大型提示装置に投影する。重要な視点を含む疑問点を取り上げて全体に紹介し、各自が本時に追究したい課題（中心課題）を意識できるようにする。

② 本時のめあてを学級全体で確認する。

【めあて】 叙述や表現を基に、友達の意見も取り入れながら、中心課題を深めよう。

2 中心課題の整理

授業改善のテーマ 2

① **児童が各自で設定した本時に追究したい課題（中心課題）について、根拠となる重要な叙述や表現を注目して整理したり、複数の文章の関連を矢印を用いて表したりする等、デジタル教科書を活用して内容を取りまとめ**させる。

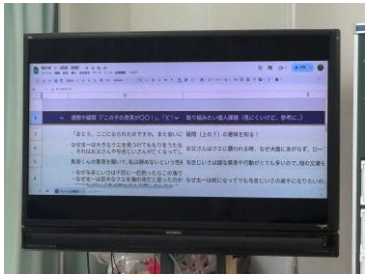
期待する学習者の変容

- デジタル教科書の機能を活用し、複数の叙述や表現を根拠として抜き出しながら整理し、それらを関連づけて自分の解釈を加えている。
- 新たな視点や整理方法を他者から学ぼうとしている。

授業の様子（赤字は"期待する学習者の変容"に関する内容、番号は「授業場面」の番号と対応）

① 掲載された児童からの疑問は多様であり、一部には、本時に追究したい課題（中心課題）として、児童同士の見方や考え方の違いから、対話的な解決が難しいものも見られた。

② 児童がめあてを書き写す方法は多様で、端末に直接手書きしたり、キーボード入力したり、縦書き表示を活用したり等、個々に合った使い方が見られた。



▲児童の疑問点一覧

① 多くの児童が、**デジタル教科書に色分けして線を引いたり、本文を抜き出したりしながら、個々が選択した方法で情報を整理**していた。
また、特定の語句や一文だけを引用して考察するのではなく、抜き出した文章を自由に配置して、**複数の叙述や表現を関連付けながら考察する等、本文を深く読み取る姿が見られた。**

ある児童は、**表（上段：本文／中段：本文から分かったこと／下段：場面）を用いて、分かりやすく考えを整理**していた。
ある児童は、**デジタル教科書から複数の文章を抜き出した上で矢印を用いて関連付け、考察を書き込んでいた。**

一方で、一部の児童は自力で学習を進めることが難しい様子も見られた。

▲３列の表を用いて整理している様子

▲矢印を用いて複数の文章を関連付け、整理している様子

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.3. 奈良市立ならやま小中学校（国語）
3.3.3. 授業改善（２回目）授業内容

■ （前頁の続き）

授業場面（青字は”デジタル教科書を使用した手立て”）

3 他者と意見交流

授業改善のテーマ 2

① 各自が取りまとめた本時に追究したい課題（中心課題）に対する自分の考えとその根拠を班内で意見交換させる。

② 自分の端末を自席に置いたまま自由に教室内を歩き、他の児童の考えを参照させる。
他者から得た視点や気付きを踏まえ、デジタル教科書を活用して再度考えを整理させる。

期待する学習者の変容
- デジタル教科書の機能を活用し、複数の叙述や表現を根拠として抜き出しながら整理し、それらを関連づけて自分の解釈を加えている。
- 新たな視点や整理方法を他者から学ぼうとしている。

4 本時の振返り

① 本時の振返りを、質問フォームに記入させる。

授業の様子（赤字は”期待する学習者の変容”に関する内容、番号は「授業場面」の番号と対応）

① 本時に追究したい課題（中心課題）の内容が異なり、相互の関連も弱いため、交流の中で十分な深まりが生まれにくい場面が見られた。一方で、一部の班では、「私はこの描写からこのように考えた」という児童の発言を契機に、叙述や表現に沿って互いの読みを深めていく場面が見られた。考えとその根拠を結び付けて説明することで、児童は自分の課題とは異なる課題を持った児童とも、自分の考えを交流させることができた。

▲児童同士で意見交流をしている様子

② **他の児童の考えやその根拠をうなずきながら確認し、得られた視点を踏まえて考察の続きを書き始める姿も見られ、新たな気付きが学習に反映されている**と考えられる。
また、他の児童の考えやその根拠だけでなく、**整理の仕方にも着目し、自分の取りまとめに反映させている**様子も見られた。

① 多くの児童は、「友達の考えや整理の仕方を参考にしたことで、自分の考えを一層深めることができた」と記入し、他者の視点を取り入れながら思考を発展させた様子が伺えた。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.3. 奈良市立ならやま小中学校（国語）
3.3.3. 授業改善（２回目）児童アンケート結果

- 児童への授業後アンケートから、事前に設定した評価スキームに基づき、「期待する学習者の変容」を評価しました。
- **デジタル教科書については「抜き出し機能」「教科書本文への線・マーカーの書き込み」に多くの児童が有用性を感じています。**
- その理由として、**「抜き出した本文と自分の考えを自由に配置できる」「本文にきれいな線を繰り返し引けるため、重要な箇所を分かりやすく整理できる」**等の意見が挙げられ、**考えの根拠となる叙述や表現を関連付けて、分かりやすく整理する場面においてデジタル教科書が有効である**ことが示唆されます。

評価スキーム（再掲）

授業改善のテーマ ②

自分の考えを、叙述や表現を
関連付けながら整理し、交流する

デジタル教科書等を活用した手立て

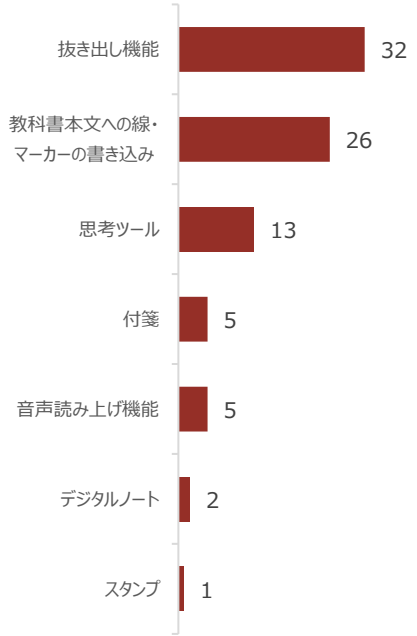
期待する学習者の変容

- デジタル教科書の機能を活用し、複数の叙述や表現を根拠として抜き出しながら整理し、それらを関連づけて自分の解釈を加えている。
- 新たな視点や整理方法を他者から学ぼうとしている。

※自由記述の回答は文意を損ねない形で修文したものがある。

授業後アンケート結果（一部抜粋）

Q１．デジタル教科書のどのような機能に有用性や利便性を感じましたか。（複数回答可） [N=36]



Q２．「抜き出し機能」のどのような点に有用性や利便性を感じましたか。（自由記述※）

- 抜き出した本文と自分の考えを自由に配置できるため、叙述と考えを関連付ける場面で役立った。
- 紙のノートでは、途中でまとめ方を変更することが難しいが、デジタル教科書では友達のまとめ方を参考にしながら簡単に修正できる等、自由にまとめ方を調整できる点が良かった。
- 新しい自分の気付きや友達からの意見を簡単に付け足せる点が、とても使いやすかった。

Q３．「教科書本文への線・マーカーの書き込み」のどのような点に有用性や利便性を感じましたか。（自由記述※）

- 本文にきれいな線を繰り返し引けるため、重要な箇所を分かりやすく整理できた。
- マーカーやペンの色の種類が豊富にあり、場面によって使い分けられる点が役に立った。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校･地域における取組
3.3. 奈良市立ならやま小中学校（国語）
3.3.3. 授業改善（２回目）振返り協議結果

■ 授業後に行った授業者と有識者の振返りでは、以下の「成果」と「課題」、それらを踏まえた「改善策」が挙げられました。

授業改善のテーマ：自分の考えを、叙述や表現を関連付けながら整理し、交流する

成果

デジタル教科書を活用した深い読み（デジタル教科書の効果）

- **デジタル教科書を活用することで、抜き出した文章を自由に並べ替え関連付ける**ことができます。
- **これらの機能や本文への書き込み機能を活用しながら、文章同士の関係を捉え、本文を深く読み取る姿**が見られました。

授業者（前谷　教諭）

他者を意識した意見整理の学び合い（デジタル教科書の効果）

- 自分の考えやその根拠の**示した方についても、児童同士で学び合う**様子が見られました。
- 他の児童の学習方法や工夫を積極的に取り入れようとする姿勢も見られました。

有識者（放送大学　佐藤　客員教授）

課題

交流の質向上に向けた課題設定の工夫

- 各自が設定した**中心課題の内容が多岐に渡っていたため、交流の中で十分な深まりが生まれにくい**場面が見られました。
- **授業者が中心課題をいくつかに整理し、その中から児童が選択**できるようにするといった工夫により、交流の質を高められると考えられます。

有識者（放送大学　佐藤　客員教授）

学習が苦手な児童への個別支援と学習の見通しの確保

- 一部の児童は、中心課題の設定や学習の進め方に迷いが見られ、**自力で考えやその根拠を整理することが難しい様子**でした。
- **学習の見通しをより明確に持たせる等の授業者による適切なフォローが引き続き重要**です。

有識者（放送大学　佐藤　客員教授）

改善策

中心課題の焦点化と見通しの共有による学習の充実

- 授業者が中心課題をいくつかに整理し、学びの見通しとともに児童へ提示することで、児童が迷わず学習を進められるよう支援するとともに、児童同士の交流から新たな気付きや学びが生まれるよう促す。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.3. 奈良市立ならやま小中学校（国語）
3.3.4. 授業改善のプロセス

■ ２回の授業改善を通して、デジタル教科書を中心に生徒自身で学びを広げるための働きかけを検討しました。

START

実証前

児童全員が根拠を基に自分の考えを整理し、表現できる学習の在り方を模索

- 本学級では、自分の考えを持ちながらも、その根拠を叙述や表現に基づいて整理したり、他者に分かる形で表現したりすることが難しい児童が多く見られた。そのため、授業ではどのようにしたら叙述や表現を上手く整理できるようになるか、模索していた。

指導計画策定

デジタル教科書に多く触れさせ、効果的な活用に向けて準備

- 児童がデジタル教科書を効果的に活用できるようにするため、まず多く触れさせて機能を理解させ、使いこなすための準備を整える。

授業者（前谷 教諭）

国語の授業では、今年度からデジタル教科書の活用を始めたため、児童はまだ操作に慣れていませんでした。
そのため、まずは多くの時間を使ってデジタル教科書に触れ、操作に慣れることを優先しました。
活用開始当初、線を引いたり抜き出した文章を整理したりして積極的に操作を進められる児童もいた一方、思ったとおりに操作できる児童ばかりではなかったため、全体で基本的な操作方法を体験しながら確認し、活用の下準備を整えました。

授業実践（1回目）

デジタル教科書等を活用して、自分の考えを根拠に基づいて整理する力を向上

「深い読み」と「他者に伝わる表現を促す学習指導」に課題が残る

指導計画策定

叙述・表現への着目による深い読みを促進

- デジタル教科書を上手く活用し、複数の叙述や表現を根拠に自分の考えを補助できるよう促す。

授業者（前谷 教諭）

更に読みを深め、「叙述や表現」に着目できるよう、児童に積極的に本文に線を引くよう促すとともに、めあてに「叙述に基づいて」を含め、「叙述とは何か」を全体で確認しました。
また、児童がデジタル教科書の活用に慣れてきたことから、考えやその根拠を上手に整理できている児童を価値付け、児童同士で整理方法を学び合える環境を整備しました。

授業実践（2回目）

デジタル教科書を活用した深い読みと他者を意識した意見整理の学び合いを実現

今後は、中心課題の焦点化と見通しの共有による学習の充実を意識

©2026 ABeam Consulting Ltd.

■ ２回の授業改善を通して得られた、授業改善のポイントは以下のとおりです。

奈良市立ならやま小中学校における授業改善の取組の総括

授業改善のポイント

授業改善のテーマ1：デジタル教科書の書き込みや抜き出し機能を活用し、情報を整理する

デジタル教科書の多様な機能を活かした情報整理 ➡ 参考：p.48

- デジタル教科書を活用することで、本文に色分けして線を引いたり、抜き出した本文や図表を貼り付け、カード形式でまとめたりできるため、自分の考えを叙述や表現に基づいて整理する場面で有効である。

授業改善のテーマ2：自分の考えを、叙述や表現を関連付けながら整理し、交流する

デジタル教科書を活用した深い読み ➡ 参考：p.54

- デジタル教科書を活用することで、抜き出した文章を自由に並べ替え、関連付けることができるため、文章同士の関係を捉え、本文を深く読み取る場面で有効である。

他者を意識した意見整理の学び合い ➡ 参考：p.54

- デジタル教科書の活用方法や、自分の考えとその根拠のまとめ方について児童同士で学び合うことで、他の児童の学習方法や工夫を積極的に取り入れようとする協働的な学びの促進に繋がる。

実践を振返って

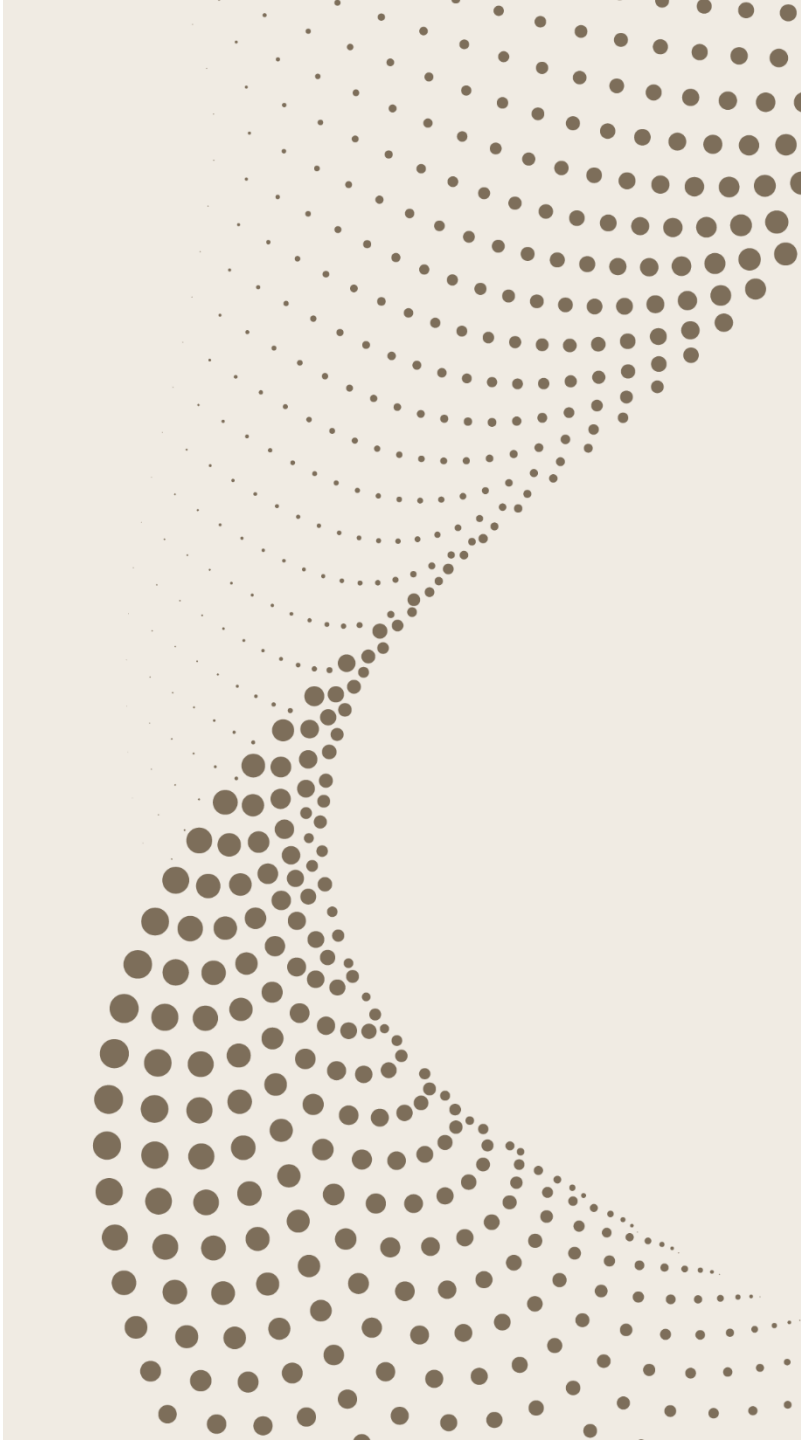
- 本学級の児童は、デジタル教科書の書き込み機能や抜き出し機能等を特に活用している様子でした。
  そのため、各自が自分の考えを整理したり、自分の理解を確認したりするような、個別最適な学習において、最も効果を実感しました。
- また、これまで自分の考えやその根拠を上手く説明できなかった児童も、デジタル教科書を活用して、少しずつ整理できるようになり、班内での意見交換等においてデジタル教科書を見せながら表現できるようになりました。
- 今後も、デジタル教科書を活用して文章の読みを深める活動を支え、児童の思考力や表現力の向上に繋げていきたいと考えます。

授業者（前谷 教諭）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組

3.1. 鹿屋市立鹿屋中学校（外国語）
3.2. 越前町立糸生小学校（算数）
3.3. 奈良市立ならやま小中学校（国語）
3.4. 山都町立矢部中学校（理科）
3.5. 深谷市立藤沢中学校（社会）
3.6. 地域内展開



3. 各実証校・地域における取組
3.4.山都町立矢部中学校（理科）
3.4.1. 基本情報

■ 山都町立矢部中学校における理科の実証研究に御協力いただいた関係者、デジタル教科書等の活用状況は以下のとおりです。

実証研究校名	山都町立矢部中学校	対象学年（生徒数）	中学校２年（39名）
対象教科	理科	使用教科書	東京書籍『新編　新しい科学』
担当教諭	藤本 亮祐 教諭	担当有識者	札幌国際大学　岩﨑 有朋 教授

デジタル教科書等の活用状況	１人１台端末	• 学校に導入されて５年目。 • 理科の授業では、５回に４回程度の授業で使用している。 • 端末以外の配布物（イヤホン等）は特になし。 • 授業内で、**学習支援ソフトにて学習プリントを配布し、実験や観察の映像記録を含め、タブレット端末を用いて学習したことをまとめている。**家庭学習においても、学習支援ソフトにて課題を配布している。
	デジタル教科書	• 学校に導入されて１年目。 • 外国語等の他教科で活用した経験はあったが、理科については令和７年度に配布されたため、活用されておらず、活用に向けた準備段階である。

- **一部の生徒が自分の意見や考えを発言・説明することに消極的**であり、意見交換が特定の生徒に偏っている。
- 多様な情報から**必要な情報を収集・整理し、それらを根拠として、発表することが難しい**生徒が多い。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.4.山都町立矢部中学校（理科）
3.4.2. 授業改善（１回目）単元情報

■ １回目の授業改善で扱った単元は以下のとおりです。うち、４時間目の授業を実証対象としました。

単元	**単元３「生物のからだのつくりとはたらき」第３章「動物のからだのつくりとはたらき」**
単元を通して目指す姿	• 動物のからだのつくりの観察・実験をとおして、各器官のつくりやはたらきを、生命を維持するしくみと関連付けて理解し、動物が生きていくために必要なことを説明できる。

時数	各授業のねらい	主な学習活動
1	章を貫く課題を予想し、学習の見通しをもつ。	• 既習事項を基に、章を貫く課題を考える。
2～3	実験を行い、だ液のはたらきを考える。	• 実験計画を立てた上で実験を行い、だ液によるでんぷんの変化を調べる。 • だ液のはたらきと性質をまとめる。
4～5	**消化液と消化酵素のはたらきを整理し、消化のしくみを理解する。** 栄養素が体内に吸収されるしくみを理解する。	• **栄養成分ごとの消化の過程を調べ、消化のしくみを説明し、図でまとめる。** • 柔毛の構造とつくりの特徴を知り、消化と吸収のしくみを図で整理する。 対象
6	呼吸のはたらきを整理し、呼吸のしくみを理解する。	• 肺の構造とつくりの特徴を知る。 • 呼吸が起こるしくみを知り、呼吸のはたらきと細胞の呼吸を関連付けて整理する。
7～8	血液のはたらきと血液の循環のしくみを理解する。	• 血液の成分とはたらきを知る。 • 心臓の構造と血液の循環のしくみ、はたらきを整理する。
9	排出のしくみを説明する。	• 腎臓のはたらきを知り、尿ができるまでのしくみを図で表現する。
10	植物と動物のからだのつくりの共通点と違いを整理し、自分の学びを振り返る。	• 生命維持の視点から、植物と動物のからだのつくりとはたらきを比較する。 • 調べて分かったことを意見交換し、共通点と違いを考える。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.4.山都町立矢部中学校（理科）
3.4.2. 授業改善（１回目）評価スキーム

■ １回目の授業改善では、授業改善のテーマに基づく「評価スキーム」を設定し、デジタル教科書等の活用による効果を検証します。
テーマは「**ジグソー法※1にて全員の学習活動参加を促し、デジタル教科書で調べ学習を充実させる**」です。

現状の課題

一部の生徒が自分の意見や考えを発言・説明することに消極的であり、意見交換が特定の生徒に偏っている。

授業改善のテーマ ①

ジグソー法にて全員の学習活動参加を促し、デジタル教科書で調べ学習を充実させる

目指す姿

自分の考えや意見に自信をもち全ての生徒が意見交換に参加している。

デジタル教科書等を活用した手立て

- 授業の導入で、「ルーブリック※2」を活用して、本時の「めあて」を立てる。
- 班内で各栄養素を分担し、**シミュレーション動画や図の拡大機能等を活用しながら**、「めあて」に基づいて調べ学習を行う。
- 班内の生徒に、**デジタル教科書等を活用して**調べた内容を説明する。

期待する学習者の変容

- 「めあて」に照らして、自分の学習状況を振り返り、理解度に応じて、デジタル教科書の動画や図を確認している。
- 文章だけでなく、動画や図を活用しながら、自らの言葉で考えや学びを説明できる。

指導計画策定における授業者のねらい

自分の意見や考えを発言・説明することに消極的な原因として、自分の考えに自信が持てていないことが考えられます。

本時では、学習の「めあて」を生徒に明確に理解させた上で、班内での役割分担の元、調べ学習に取り組んでもらいます。調べ学習では、デジタル教科書のシミュレーション動画を繰り返し視聴する等、個人のペースで内容をしっかり理解できるようにしています。

授業者（藤本　教諭）

指導計画策定における有識者からの助言

生徒が主体的に学習を進める活動において「道しるべ」を提示することで、学びの進捗を客観的に評価する力を育てることができます。

また、生徒それぞれに役割を与えることで、一人一人の主体的な調べ学習を促すことができます。

調べ学習では、デジタル教科書のシミュレーション動画等を活用することで、生徒の理解を効果的に支援できるでしょう。

有識者（岩﨑先生）

※1 ジグソー法とは、学習内容を役割分担して調べ、その内容を教え合う協働学習法を指す。
※2 学習の目標や評価基準を段階的に示し、学習者が自らの到達状況を確認できる判断基準表を指す。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.4.山都町立矢部中学校（理科）
3.4.2. 授業改善（１回目）授業内容

■ 授業の流れ及び実際の授業の様子は以下のとおりです。

授業場面（青字は"デジタル教科書を使用した手立て"）

1 本時のめあての確認

① **デジタル教科書の紙面を大型提示装置に投影**して、
前時の内容を学級全体で確認する。

② ルーブリックを掲示して、生徒各自が予習した内容を踏まえ、本時の「めあて」を班別に考えさせる。班ごとに考えた「めあて」を全体に発表させ、それらの内容を踏まえて、学級としての「めあて」を決定し、学習シート（紙媒体）に記載させる。

【めあて】 食物に含まれる成分（でんぷん、たんぱく質、脂質）の消化される過程を、消化液、消化酵素、消化器官の名称を具体的に示しながら消化のしくみを理解できる。

授業の様子（赤字は"期待する学習者の変容"に関する内容、番号は「授業場面」の番号と対応）

① 教科書やルーブリックを確認し、前時の「めあて」や内容を確認しながら、学習内容を振り返る様子が見られた。

② 本時の「めあて」をどのように設定するかについて、班ごとに活発な議論が行われていた。
一部の生徒は、デジタル教科書の本文を拡大表示し、内容を確認した上で、「めあて」を立てる姿も見られた。
学級全体で「めあて」を丁寧に設定していたことで、後続の活動で目的を見失う生徒はほとんど見受けられなかった。
また、学習シートを紙媒体とすることで、デジタル教科書を参照しながら書き込むことができ、効果的にツールを使い分ける様子が見られた。

▼ルーブリックの内容（一部抜粋）

時数	A.十分満足	B.満足	C.もう少し頑張ろう
3．消化・吸収のしくみ □ 消化管、消化液、消化酵素 □ 柔毛の構造とはたらき □ リンパ管と血管	✓ 食物に含まれる物質が消化される過程を比較し、消化器官、消化液、消化酵素について、特定の物質及び複数の物質にはたらくものがあることを見出して説明している。	✓ 食物に含まれる物質が消化される過程を、消化器官、消化液、消化酵素の名称を具体的に示しながら、順序よく説明している。	✓ 食物に含まれる物質が消化される過程を説明しているが、具体的な消化器官や消化液、消化酵素が示されていない。
	✓ 小腸のかべの構造の特徴と、消化によってできた物質が別々に運ばれることを理由も含めて理解している。	✓ 小腸のかべの構造の特徴と、消化によってできた物質が別々に運ばれることを理解している。	✓ 消化によってできた物質が小腸で吸収されることを理解している。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.4.山都町立矢部中学校（理科）
3.4.2. 授業改善（１回目）授業内容

■ （前頁の続き）

授業場面（青字は”デジタル教科書を使用した手立て”）

2 栄養素別にグループで情報整理（ジグソー法） 授業改善のテーマ 1

① 班の中で調べる栄養素について役割分担をさせ、同一の栄養素ごとに編成されたグループで新たに集まり、「学習シート」上に情報を整理するよう指示する。

② 情報を整理する場面では、どのようなツールを用いても良いと説明した上で、**デジタル教科書のシミュレーション動画等を活用できることも知らせる。**

③ グループでの話合いや各自での調べ学習を通して、担当の栄養素の消化のしくみについて取りまとめさせる。

期待する学習者の変容

- 「めあて」に照らして、自分の学習状況を振り返り、理解度に応じて、デジタル教科書の動画や図を確認している。
- 文章だけでなく、動画や図を活用しながら、自らの言葉で考えや学びを説明できる。

授業の様子（赤字は”期待する学習者の変容”に関する内容、番号は「授業場面」の番号と対応）

① 班内では、「筋トレが趣味なのでたんぱく質を調べる」といったように、**自分の興味・関心に応じて栄養素を選択し、責任をもってグループ活動に取り組む**姿が見られた。

② **シミュレーション動画を繰り返し再生**するグループもあり、「←」「→」のボタンで分解の過程を一歩ずつ確認できる点が理解を助けていた。
また、グループ内で分担し、シミュレーション動画、拡大されたデジタル教科書の図表、紙の教科書を並べて確認し、**ツールを使い分ける**姿も見られた。
「消化の過程」のような順序性のある内容については、**順序の確認にシミュレーションを使用し、全体の把握にはデジタル教科書の拡大図や紙の教科書を活用することで、理解が深まる**可能性がある。

③ シミュレーション動画や教科書本文の記載から、図等も用いながら、**調べて理解した内容を各自の表現で取りまとめていた。**

▲シミュレーション動画を繰り返し再生し、分解の過程を確認している様子

▲調べた理解した内容を各自の表現で取りまとめている様子

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.4.山都町立矢部中学校（理科）
3.4.2. 授業改善（１回目）授業内容

■ （前頁の続き）

授業場面（青字は"デジタル教科書を使用した手立て"）

3 調べた内容を班内で発表（授業改善のテーマ 1）

① 同一の栄養素ごとに集まったグループから元の班に戻り、自分の調べた内容を**シミュレーション動画等を活用しながら、**他の生徒に説明するように指示する。
調べ学習と同様に、説明時も使用するツールは限定しないと伝える。

② 他の生徒の説明内容については、メモを促し、聞き手側の生徒に各栄養素の内容を確認させる。

期待する学習者の変容
- 「めあて」に照らして、自分の学習状況を振り返り、理解度に応じて、デジタル教科書の動画や図を確認している。
- 文章だけでなく、動画や図を活用しながら、自らの言葉で考えや学びを説明できる。

4 全体協議

① 各栄養素の消化の過程や酵素のはたらきについて、班内で確認した後、各栄養素について、学級全体から１名ずつ指名し、全体の前で説明させ、その内容を確認する。

授業の様子（赤字は"期待する学習者の変容"に関する内容、番号は「授業場面」の番号と対応）

① 説明を行う前に、一部の生徒はデジタル教科書の図の拡大・縮小やシミュレーション動画の再生を繰り返しながら準備をしていた。
説明の際には、端末を班内の他生徒に向け、シミュレーション動画や図を拡大表示しながら説明することができていた。
デジタル教科書は「理解」だけでなく「説明」のツールとしても活用されていることが分かる。

② 聞き手側の生徒は、自分のデジタル教科書でもシミュレーション動画を確認しながら、説明を受けていた。
一方で、一部の生徒は、カタカナを含む固有名詞の書き取りに苦戦していた。

▲シミュレーション動画を見せながら、他の生徒に説明する様子

① 他の生徒の説明を聞きながら、自分の手元でもシミュレーション動画を確認している生徒が見られた。
説明する内容を間違えてしまった生徒は、授業者のサポートを受けることで、正しい説明へ修正した。

▲全体発表の様子

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.4.山都町立矢部中学校（理科）
3.4.2. 授業改善（１回目）生徒アンケート結果

- 生徒への授業後アンケートから、事前に設定した評価スキームに基づき、「期待する学習者の変容」を評価しました。
- デジタル教科書については、**シミュレーション動画を中心に肯定的に受け止めている生徒**が多く見られました。
- さらに、９割の生徒が「本単元を通じて、自分の意見を積極的に表現することができた」と回答していることから、**デジタル教科書のシミュレーション動画や拡大機能が、生徒の表現活動を支える理解を促す上で、一定の効果をもたらした**ことが示唆されます。

評価スキーム（再掲）

授業改善のテーマ ①

ジグソー法にて全員の学習活動参加を促し、デジタル教科書で調べ学習を充実させる

デジタル教科書等を活用した手立て

期待する学習者の変容

- 「めあて」に照らして、自分の学習状況を振り返り、理解度に応じて、デジタル教科書の動画や図を確認している。
- 文章だけでなく、動画や図を活用しながら、自らの言葉で考えや学びを説明できる。

※自由記述の回答は文意を損ねない形で修文したものがある。

授業後アンケート結果（一部抜粋）

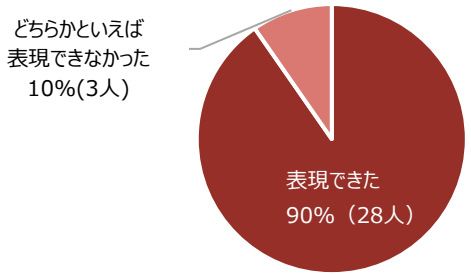
Q１．デジタル教科書のどのような点が、役立ったり、便利だったりしましたか。（自由記述※）

- シミュレーション動画を視聴することで、どこで何がどんな風に分解されているのか分かりやすかった。
- 動画を何回も確認できる点が、便利だった。
- 文字や図表を簡単に拡大して確認できた点が、便利だった。

Q２．調べ学習で工夫できた点を教えてください。（自由記述※）

- 調べ学習では、シミュレーション動画を繰り返し確認し、消化の過程を理解した。その上で、発表でも動画を示しながら、誰にでも分かりやすく説明できていた。
- 友達が理解しやすいよう、デジタル教科書の図表を拡大表示しながら説明できた。

Q３．本単元を通じて、自分の意見を積極的に表現することができましたか。[N=31]



©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.4.山都町立矢部中学校（理科）
3.4.2. 授業改善（１回目）振返り協議結果

■ 授業後に行った授業者と有識者の振返りでは、以下の「成果」と「課題」、それらを踏まえた「改善策」が挙げられました。

授業改善のテーマ：ジグソー法にて全員の学習活動参加を促し、デジタル教科書で調べ学習を充実させる

成果

動画等を活用した調べ学習の充実（デジタル教科書の効果）

- デジタル教科書を活用することで、**シミュレーション動画を簡単に繰り返し確認**したり、**図を拡大表示**したりすることができます。
- 自分の学習状況に応じて、**デジタル教科書を中心に複数の教材を活用しながら、理解を深める**ことができました。

有識者（札幌国際大学　岩﨑 教授）

整理した内容を自分の言葉で表現（デジタル教科書の効果）

- 班に戻り、担当する栄養素を発表する場面において、全ての生徒が、**自らの言葉で考えや学びを説明**できていました。
- その際、デジタル教科書は「理解」のためだけでなく、**「説明」のツールとしても活用**され、**シミュレーション動画や図を拡大表示しながら**、分かりやすく説明する姿が見られました。

授業者（藤本　教諭）

課題

充実した協働学習へ向けた工夫

- 調べた内容を他者に説明する場面において、メモを取りながら教科書を確認している等、**慌ただしい様子**が見られました。
- 今後は、発表をより円滑に進めるため、グループ活動の段階から情報収集や資料作成等の役割を分担し、協働学習へ向けた工夫ができると良いでしょう。

有識者（札幌国際大学　岩﨑 教授）

主体的な学習が促せる授業設計

- 全体で内容を確認する場面において、授業者が回答の正誤を確認したり、正しい回答ができるよう補助したりしていました。
- 間違いを経験すること自体が学びにつながるため、**生徒が自ら説明内容の正誤を確かめたり修正したりできるようにする**ことで、学びの効果が一層高まります。

有識者（札幌国際大学　岩﨑 教授）

改善策

デジタル学習基盤を活用した協働学習の最適化と主体的学習の促進

- デジタル教科書と学習支援ソフトを組み合わせ、各自が取りまとめた内容をスムーズに相互参照できる環境を整える。また、学習者自らに学びの要点や課題を気付いてもらえるように、適切な発問やフィードバックを行う。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.4.山都町立矢部中学校（理科）
3.4.3. 授業改善（２回目）単元情報

■　２回目の授業改善で扱った単元は以下のとおりです。うち、７時間目の授業を実証対象としました。

単元	**単元３「天気とその変化」第３章「大気の動きと日本の天気」**
単元を通して目指す姿	• 日本の気象の特徴を気団と関連付けて理解し、気象現象が生じるしくみを科学的に捉える力を養う。 • 気象の恵みと災害の両面に気付き、資料や観察を基に主体的に探究しようとする力を育成する。

時数	各授業のねらい	主な学習活動
1	章を貫く課題を予想し、学習の見通しをもつ。	• 生徒同士で交流し、章を貫く課題を考える。
2	季節風や海陸風が吹くしくみを理解する。	• 季節風や海陸風が吹くしくみを、陸と海の気温差や空気の動きに着目して考える。
3～4	日本の天気の特徴を、気団の勢力と関連付けて整理する。	• 日本の四季、梅雨や台風の特徴について、偏西風や天気に影響を与える気団等と関連付けて考える。
5～7	多様なデータを活用して、居住地域の天気を予報し、他者に表現する。	• 居住地域における天気の変化を予測し、天気図や雲画像等の科学的な根拠に基づいて自分の考えをまとめ、他の生徒に表現する。 対象
8～9	気象の恵みと災害の両面を確認し、防災意識を高める。	• 気象現象が生活にもたらす恵みと、気象災害が起こるしくみを理解する。 • 防災・減災について考え、自分たちにできる備えについて見通しをもつ。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.4.山都町立矢部中学校（理科）
3.4.3. 授業改善（２回目）評価スキーム

■ ２回目の授業改善では、授業改善のテーマに基づく「評価スキーム」を設定し、デジタル教科書等の活用による効果を検証します。
テーマは「**多様な情報を選択・整理し、根拠に基づいて、自分の考えを表現する**」です。

現状の課題

多様な情報から必要な情報を収集・整理し、それらを根拠として、発表することが難しい生徒が多い。

授業改善のテーマ ②

多様な情報を選択・整理し、
根拠に基づいて、自分の考えを表現する

目指す姿

必要な情報を的確に選択し、整理した上で、自信を持って、根拠に基づく発表ができる。

デジタル教科書等を活用した手立て

- デジタル教科書の図表、気象庁等が提供するデータから、**翌日の天気を予測するために必要な情報を集めさせる。**
- **デジタル教科書と学習支援ソフトを活用して、集めた情報から天気を予測させる。**
- 班内で、各自が予測した内容を比較・参照し、班ごとに全体の前で発表させる。

期待する学習者の変容

- 多様な情報から必要な内容を取捨選択している。
- 収集した情報を適切に関連付けながら自分の考えを整理している。
- 根拠に基づいて自信を持って発表している。

指導計画策定における授業者のねらい

本時は「単元のまとめ」に該当するため、これまで学習してきた知識を総合的に活用してほしいと考えています。

天気を予測するために、デジタル教科書の図表や気象庁等が提供するデータを活用できる旨を説明し、必要な情報を自分で選択できるよう促し、収集した情報同士を適切に関連付けて、「根拠に基づいて説明する力」を身に付けてほしいと考えています。

授業者（藤本　教諭）

指導計画策定における有識者からの助言

本単元は、複数の情報を選択し、それらを組み合わせて予測する過程に学びの面白さがあります。デジタル教科書の特性を上手く活用し、根拠となる情報を選択、整理することが確かな予測を支える手がかりとなります。

また、デジタル教科書と学習支援ソフトを組み合わせて活用することで、それぞれの生徒が考えた内容等を、簡単に他の生徒へ共有することができます。

有識者（岩﨑先生）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.4.山都町立矢部中学校（理科）
3.4.3. 授業改善（２回目）授業内容

■ 授業の流れ及び実際の授業の様子は以下のとおりです。

授業場面（青字は"デジタル教科書を使用した手立て"）

1 本時のめあての確認

① 本時の学習課題、めあて（ルーブリック）、活動等を授業者が黒板に記載し、その内容を学級全体で確認する。

【学習課題】 明日の天気はどのようにして、予測することができるのだろうか。

【めあて】 天気の変化の予測について、天気図や雲画像、教科書の図の説明等、複数の情報を関連付けて自分の考えをまとめ、表現することができる。

2 班で天気を予測し、発表準備

授業改善のテーマ 2

① 前時に学習支援ソフトに取りまとめた「天気の予測」を再確認させる。なお、予測は**デジタル教科書の本文や図表と気象庁等の天気図（過去・予測）、等圧線図等から、生徒が必要な情報を選択し、組み合わせて作成**されたものである。

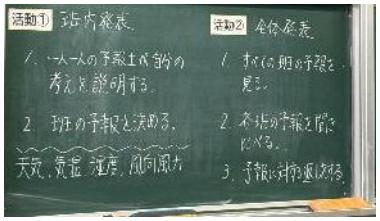
② 班の中で、**各自が取りまとめた予測を順に発表**させる。

③ 学習支援ソフトに示されたそれぞれの予測を互いに比較・参照させながら、**班ごとに意見を整理し、全体発表に向けて準備**を促す。

期待する学習者の変容
- 多様な情報から必要な内容を取捨選択している。
- 収集した情報を適切に関連付けながら自分の考えを整理している。
- 根拠に基づいて自信を持って発表している。

授業の様子（赤字は"期待する学習者の変容"に関する内容、番号は「授業場面」の番号と対応）

① 冒頭に、学習課題やめあて等を確認したことで、生徒が見通しを持ち、その後の活動に主体的に取り組めていた。
黒板にめあて等を残すことで、生徒が活動中に端末を使用していても、簡単に確認できるようにしていた。
授業者が意図的にアナログとデジタルの使い分けている様子が伺えた。

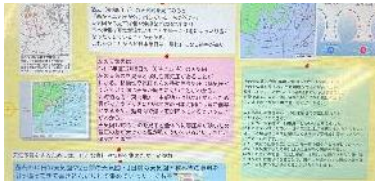


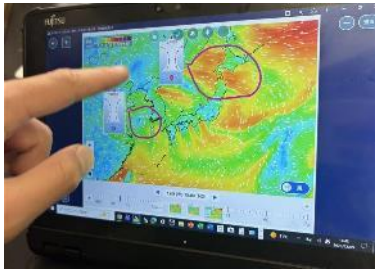
▲本時の活動が示されている様子

① おおむねの生徒が、**天気図（過去・予測）、等圧線図、デジタル教科書の図表等から、予測に必要な情報を選択**し、これまで学んだ知識を身近な事象に当てはめて推論できていた。

② 予測に当たっては、実際に使用される**天気図等（具体的事実）と教科書の図表が示す気圧と風の吹き方等（概念）を組み合わせ、具体的事実を概念で補足**しながらまとめていた。
班内での発表では、**学習支援ソフトに風の流れや気団の移動を書き込みながら、具体的事実と概念の対応**を可視化しながら説明していた。

③ 学習支援ソフトと組み合わせて、他の生徒の予測を簡単に確認できるため、班内での意見の比較や参照がスムーズに行われていた。その結果、**図表の整理や原稿作成等の役割分担も円滑に進み、意見を効率よくまとめることができていた**。


▲予測した天気を取りまとめた様子


▲等圧線図とデジタル教科書の図表「高気圧と低気圧の鉛直断面の模式図」を用いて、説明している様子

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.4.山都町立矢部中学校（理科）
3.4.3. 授業改善（２回目）授業内容

■ （前頁の続き）

授業場面（青字は"デジタル教科書を使用した手立て"）

3 班ごとに全体の前で発表　授業改善のテーマ 2

① **班ごとに全体の前で発表**させる。

«発表のポイント»

- ✓ 発表では必ず全員が話す。
- ✓ 各班が取りまとめた内容は大型提示装置又は手元の端末で確認。

期待する学習者の変容

- 多様な情報から必要な内容を取捨選択している。
- 収集した情報を適切に関連付けながら自分の考えを整理している。
- 根拠に基づいて自信を持って発表している。

4 本時のまとめ

① 天気を予測するために活用した情報や、予測のポイントを全体で確認する。

② 自らの学習の達成状況を振り返る。

授業の様子（赤字は"期待する学習者の変容"に関する内容、番号は「授業場面」の番号と対応）

① **複数の情報を組み合わせ、専門用語を正しく使い、根拠となる資料を示しながら、全員が発表**する姿が見られた。

また、最初の班の発表後、授業者が「今の発表の何が分かりやすかったか」を問いかけると、生徒は「複数の根拠をもって説明していたこと」「気温や湿度等にも触れていたこと」等を言語化した。
生徒自身に意識すべき点を言語化させ、価値付けることで、以降の発表に向けた姿勢を学級全体で共有できたと考えられる。

さらに、他の班の発表を聞く際にも、生徒は手元で当該班の予測を参照しながら、自然と班内で議論する様子が見られた。

▲全体の前で発表している様子

▲他の班の発表を聞きながら、当該班の予測を確認し、議論している様子

① 授業者は、「天気図（過去・予測）」「等圧線図」「風のデータ」「教科書の図表」等多様な根拠を基に説明できていた点について評価していた。

一方、時間が限られていたため、天気予報としての最終的な結論「明日の天気はどうなるか」や、自分の予測や各班の発表からどのような気付きや学びを得たかを確認する時間は確保できなかった。

▲各班で予測された天気の一覧

② 振返りでは、「多様な情報を結び付け、自分の考えを整理できた」という声が多く挙がっていた。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.4.山都町立矢部中学校（理科）
3.4.3. 授業改善（２回目）生徒アンケート結果

- 生徒への授業後アンケートから、事前に設定した評価スキームに基づき、「期待する学習者の変容」を評価しました。
- **デジタル教科書から情報を適切に選択できたか問う質問では、ほぼ全ての生徒が肯定的に回答**しました。
- また、**自信を持って発表できたかを問う設問では、約９割の生徒が肯定的に回答**しました。
  デジタル教科書と学習支援ソフトを組み合わせて簡単に情報を結び付けることで根拠を分かりやすく示したり、シミュレーション動画等で学習内容の理解を深めたりしたことが、生徒の自信に繋がったと推察されます。

評価スキーム（再掲）

授業改善のテーマ ②

多様な情報を選択・整理し、
根拠に基づいて、自分の考えを表現する

デジタル教科書等を活用した手立て

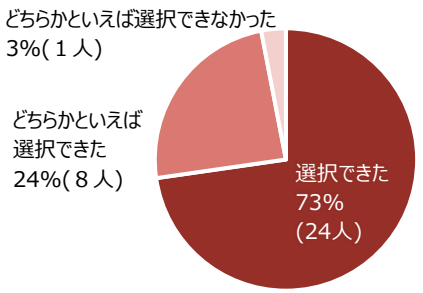
期待する学習者の変容

- 多様な情報から必要な内容を取捨選択している。
- 収集した情報を適切に関連付けながら自分の考えを整理している。
- 根拠に基づいて自信を持って発表している。

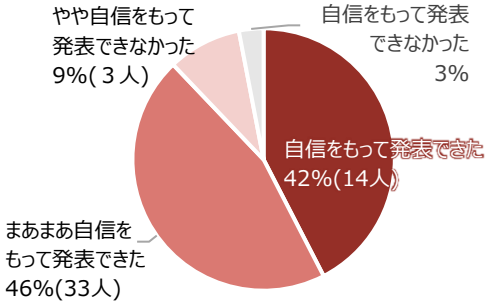
※自由記述の回答は文意を損ねない形で修文したものがある。

授業後アンケート結果（一部抜粋）

Q１．デジタル教科書内の本文や図表、動画等から、必要な情報を適切に選択することはできましたか。[N=33]



Q２．根拠に基づいて天気予報を考えることで、自信を持って発表できましたか。[N=33]



Q３．天気の変化を予想したり、発表準備をするときに、デジタル教科書のどのような点が役立ちましたか。（自由記述※）

- 気圧の動き方や冬特有の天気の変化等、デジタル教科書に示された概念的な内容をスクリーンショット機能で切り取り、実際の天気図と簡単に結び付けられたことが便利だった。
- デジタル教科書の資料を切り取って、学習支援ソフトに簡単に貼り付けられた点が使いやすかった。
- 雲の発生のしくみが理解しにくかったが、シミュレーション動画を見ることで簡単に理解できた。
  発表時にも動画を示しながら、分かりやすく説明することができた。
- 家庭で発表準備をする際、紙の教科書を持ち帰らなくても、タブレットで内容を確認できて便利だった。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.4.山都町立矢部中学校（理科）
3.4.3. 授業改善（２回目）振返り協議結果

■ 授業後に行った授業者と有識者の振返りでは、以下の「成果」と「課題」、それらを踏まえた「改善策」が挙げられました。

授業改善のテーマ

多様な情報を選択・整理し、根拠に基づいて、自分の考えを表現する

成果

適切に情報整理し、自信を持って発表　デジタル教科書の効果

- 多くの生徒が、**デジタル教科書のスクリーンショット機能等を活用しながら、予測に必要な情報を選択し、複数の情報を関連付けて整理**していました。
- **根拠を明確にしながら情報を整理したことで、おおむねの生徒が自信を持って発表**することができました。

授業者（藤本　教諭）

生徒同士のスムーズな情報共有　デジタル教科書の効果

- **デジタル教科書と学習支援ソフトを組み合わせることで、簡単に他生徒の予測を比較・参照**することができました。
- その結果、**図表の整理や原稿作成等の役割分担も円滑に進み、意見を効率よくまとめることができていました。**

有識者（札幌国際大学　岩﨑 教授）

課題

振返り時間の不足

- 班ごとの発表に重点を置いたため、**翌日の天気に関する結論を再確認したり、予想した内容から得られた気付き・学びを整理する時間を十分に確保できませんでした。**
- 予想した内容を踏まえ学びを深めるためにも、以降の授業で補足したいと考えています。

授業者（藤本　教諭）

改善策

学習の振返りの充実

- 学習の結論や学習過程を通じて得た気付き・学びを整理する振返りの時間を十分に確保することで、理解を定着させるとともに、学びを深め、次の学習への繋がりを強化する。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.4.山都町立矢部中学校（理科）
3.4.4. 授業改善のプロセス

■ ２回の授業改善を通して、デジタル教科書を中心に生徒自身で学びを広げるための働きかけを検討しました。

START

実証前

全体の前で発表する生徒が一部に限られ、固定化していた

- 自分の考えに自信が持てなかったり、どのように伝えれば良いか分からなかったりすることから、全体の場で発表できる生徒が固定化されている状況であった。

指導計画策定

デジタル教科書のコンテンツ研究に注力

- 生徒が自分の考えを上手く整理し発表するためには、どのようにコンテンツを活用すると良いかを丁寧に研究。

授業者（藤本 教諭）

理科の授業では、今年度からデジタル教科書の活用を始めたため、授業で積極的に取り入れつつも、まずは私自身が教材研究を丁寧に行い、どのコンテンツをどのように活用することで学習効果を最大限に引き出せるかを検討しました。
デジタル教科書を活用して考えを整理し、資料を用いて発表することで、生徒一人一人が自分にとってやりやすい発表方法を習得し、こうした成功体験の積み重ねが、生徒の学習意欲の向上に繋がることを期待しています。

授業実践（1回目）

デジタル教科書を活用して調べ学習を充実させ、整理した内容を自分の言葉で表現する力を向上
他者参照等の協働的な学習の充実や、学習者主体の学びに課題が残る

指導計画策定

協働学習の充実を図るための工夫や学習者主体の学びを促進する方法を検討

- デジタル教科書と学習支援ソフトを組み合わせ、生徒同士が互いの意見を比較・参照しながら学習を進める方法を検討。

授業者（藤本 教諭）

１回目の授業実践以前は、スライドに記載した説明をそのまま読み上げる形式の発表が多く見られましたが、デジタル教科書を活用することで、資料を積極的に活用する姿や説明の展開を考える姿が見られるようになりました。全員が発表する機会を積極的に設けていたため、徐々にその効果を実感しました。
2回目の授業実践では、学習支援ソフトを上手く組み合わせ、生徒同士で話し合って学習を進めやすい環境を整えます。

授業実践（2回目）

デジタル教科書等を活用して協働学習を充実させながら、自分の意見に自信を持って発表
今後は、必要な環境や手立てを整えながら、更に学習者主体の学びを推進

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.4.山都町立矢部中学校（理科）
3.4.5. 総括

■ ２回の授業改善を通して得られた、授業改善のポイントは以下のとおりです。

山都町立矢部中学校における授業改善の取組の総括

授業改善のポイント

授業改善のテーマ1

ジグソー法にて全員の学習活動参加を促し、デジタル教科書で調べ学習を充実させる

動画等を活用した調べ学習の充実 ➡ 参考：p.65

- デジタル教科書は、シミュレーション動画を簡単に繰り返し確認したり、図を拡大表示したりできる点が有効である。
- 自分の学習状況に応じて、デジタル教科書を中心に複数の教材を活用することで、理解の深化を図ることができる。

整理した内容を自分の言葉で表現 ➡ 参考：p.66

- 説明の場面において、デジタル教科書のシミュレーション動画や図表を補助的に示すことで、生徒が視覚的に理解の手がかりを得られ、自らの言葉で考えや学びを説明することに繋がる。

授業改善のテーマ2

多様な情報を選択・整理し、根拠に基づいて、自分の考えを表現する

適切に情報整理し、自信を持って発表 ➡ 参考：p.71、p.72

- デジタル教科書は、スクリーンショット機能等で簡単に資料を抜き出すことができるため、情報を選択し、それらを整理する場面で有効である。
- また、根拠を明確にしながら情報を整理することで、生徒が考えを構造的に捉えられるようになり、自信を持って発表できることに繋がる。

生徒同士のスムーズな情報共有 ➡ 参考：p.71

- デジタル教科書と学習支援ソフトを組み合わせることで、オンライン上で簡単に他生徒の予測を比較・参照することができ、協働学習の場面において有効である。

実践を振返って

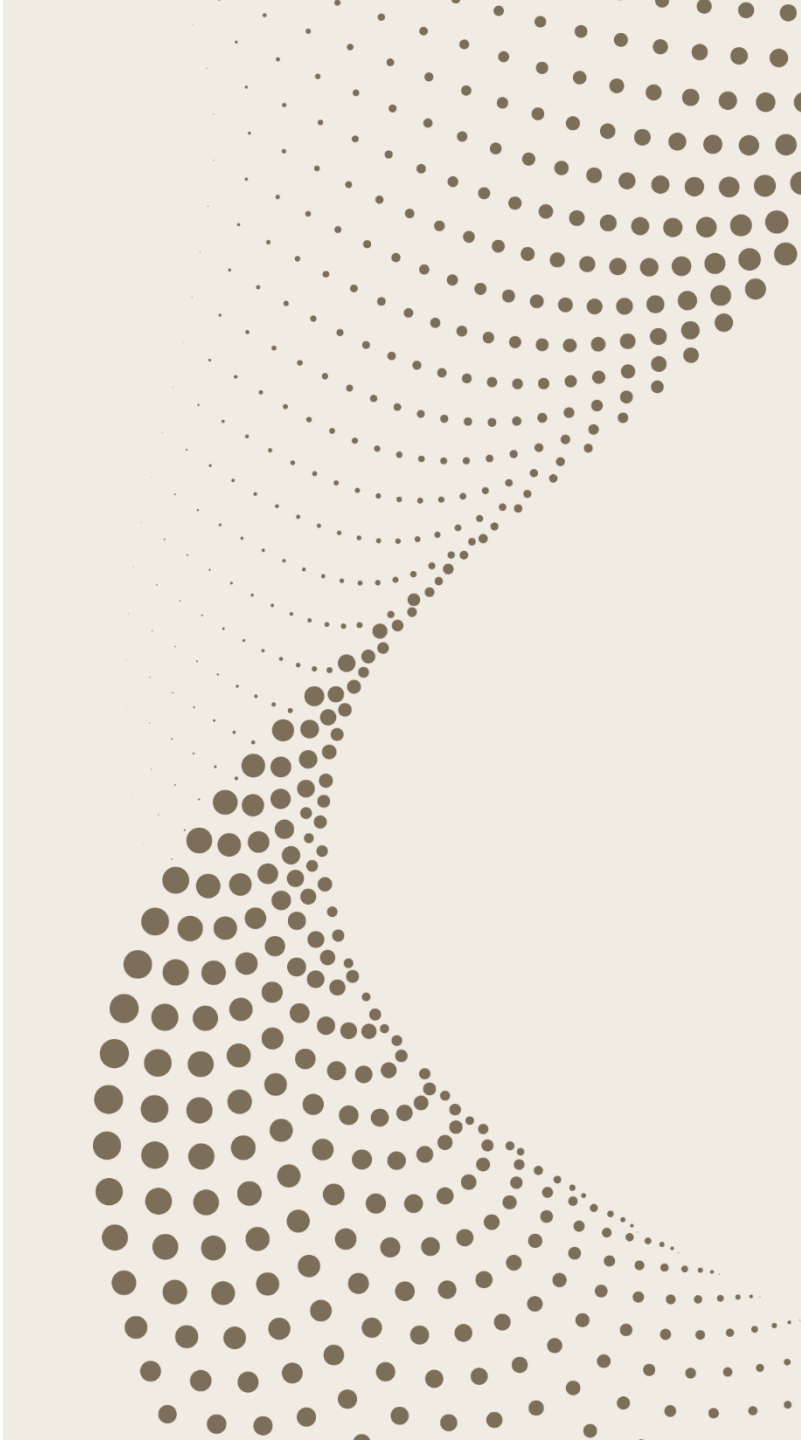
- 授業実践を通じて、授業中に図に書き込んだり引用したりしながら考えを深める姿や、問題演習中に分からない箇所に直面した際、デジタル教科書の中から自らヒントを探そうとする姿が見られました。授業者の指示がなくても、生徒が主体的にデジタル教科書を活用し、自力解決の力が育っていると感じました。
- 授業実践前までは、主体的な学びの実現には、授業者の十分な準備が不可欠だと考えていましたが、学べる環境や手立てを整えておけば、学びを生徒に委ねることができると実感しました。

授業者（藤本 教諭）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組

3.1. 鹿屋市立鹿屋中学校（外国語）
3.2. 越前町立糸生小学校（算数）
3.3. 奈良市立ならやま小中学校（国語）
3.4. 山都町立矢部中学校（理科）
3.5. 深谷市立藤沢中学校（社会）
3.6. 地域内展開



3. 各実証校・地域における取組
3.5. 深谷市立藤沢中学校（社会）
3.5.1. 基本情報

■ 深谷市立藤沢中学校における社会の実証研究にご協力いただいた関係者、デジタル教科書等の活用状況は以下のとおりです。

実証研究校名	深谷市立藤沢中学校	対象学年（生徒数）	中学校２年（30名）
対象教科	社会	使用教科書	東京書籍 『新しい社会　地理』 『新しい社会　歴史』
担当教諭	岩﨑 清志 教諭	担当有識者	放送大学 小林祐紀 准教授

デジタル教科書等の活用状況	１人１台端末	• 学校に導入されて７年目。 • 社会の授業では、４回に１回程度の授業で使用している。 • 端末以外の配布物として、タッチペンを使用している。 • 資料をカラーで閲覧できるよう、毎回の授業で学習プリントを端末上で閲覧できるようにしている。
	デジタル教科書	• 学校に導入されて１年目。 • 社会のデジタル教科書は今年度配布され、**授業において活用できていない。**
現状の課題		• 授業には真面目に取り組み、授業内で与えられた課題に対しても真摯に向き合う生徒が多い。 • **自分の考えを学級全体に対して発表することが苦手な生徒が多く**、手を挙げて発表するのは学力の高い生徒が中心である。 • 生徒間での活発な学び合いを目指しているものの、**生徒の関係が「教える側」と「教えられる側」で固定されている。**

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校･地域における取組
3.5. 深谷市立藤沢中学校（社会）
3.5.2. 授業改善（１回目）単元情報

■ １回目の授業改善で扱った単元は以下のとおりです。うち、３時間目の授業を実証対象としました。

単元	**第３章「日本の諸地域」第５節「関東地方」**
単元を通して目指す姿	• 関東地方に人口が集中する要因や、人口集中により生じる問題点を理解することができる。 • 関東地方の地域的特色について、関連する資料を用いながら他者に説明することができる。

時数	各授業のねらい	主な学習活動
1	関東地方の自然環境を考察する。	• 単元を貫く課題（関東地方に人口が集中する要因及び人口集中による問題点）を捉える。 • 関東地方の主な地形の名称、位置、雨温図の特徴について、地図等の参考資料を基に確認する。
2	関東地方の産業の特色を考察する。	• 関東地方の産業の特徴について、参考資料から捉える。 • 関東地方の産業の特徴を、東京等の大消費地と関連付けながら考察する。
3	**さいたま市の人口が増加している要因を考察する。**	• **さいたま市の人口増加の要因について、さいたま市近郊の「交通」「通勤、通学」「地価」に関する資料の読み取りや学級内での自由な意見交換を通じて考察する。** 対象
4	関東地方の人口増加による都市問題を考察する。	• 人口増加による都市問題とその対策を「交通」「地価」「再開発」などの資料をもとに考察した上で、生徒間で意見交換する。
5	関東地方に人口が集中する要因と人口集中による問題点を考察する。	• 今まで学習した知識・概念を活かして「単元を貫く課題」について考察し、まとめる。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.5. 深谷市立藤沢中学校（社会）
3.5.2. 授業改善（１回目）評価スキーム

1回目：計画 → 実践 → アンケート → 振返り → 2回目

■ １回目の授業改善では、授業改善のテーマに基づく以下の「評価スキーム」を設定し、デジタル教科書等の活用による効果を検証します。授業改善のテーマは「**授業内の課題への取組状況を共有し、生徒が相互に参照して学び合う**」です。

現状の課題

生徒間での活発な学び合いを目指しているものの、生徒の関係が「教える側」と「教えられる側」で固定されている。

授業改善のテーマ ①

授業内の課題への取組状況を共有し、生徒が相互に参照して学び合う

目指す姿

今まで「教えられる側」だった生徒も他の生徒に積極的に教えに行くことができる。

デジタル教科書等を活用した手立て

- **デジタル教科書の図表や地図に、気付きや考えを直接書き込ませる。**
- 課題への取組状況を学習支援ソフトで常時共有し、参照するよう促す。

期待する学習者の変容

- **デジタル教科書の拡大表示や、書き込みの機能**により、自分の考えを視覚的に説明しやすくなる。
- 生徒同士で、誰がどの課題で困っているか、把握可能になり、教え合いが活発になる。

授業者のねらい

授業内で課題に取り組む際には、デジタル教科書中で拡大表示した資料に、考えを書き込んでもらいました。それを生徒同士が見せ合うことで、学び合いの活性化を図りました。

また、生徒の課題への取組状況がスクリーンに投影されることで、誰がどの課題で困っているかを把握することができ、教え合いが活発になることを期待しました。

授業者（岩﨑　教諭）

有識者からの助言

生徒の課題への取組状況をスクリーンに投影することで、誰がどの問いに取り組んでいるのか相互に把握できるようになります。

生徒が自分なりに問いを解決できた場合は、取組状況の色を変えるなど目印を付けさせるのも一案です。その上で、困っている生徒に援助するよう教師から促すのも良いでしょう。

有識者（放送大学 小林 准教授）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.5. 深谷市立藤沢中学校（社会）
3.5.2. 授業改善（１回目）授業内容

■ 授業の流れ及び実際の授業の様子は以下のとおりです。

授業場面（青字は"デジタル教科書を使用した手立て"）

1 本時の課題「さいたま市の人口がなぜ増えている？」の確認

① 地域別の人口が示されたグラフをスクリーンに投影し、全体で関東地方やさいたま市の人口が多いことを確認する。
その後、本時の課題として「さいたま市の人口が増えているのはなぜだろう？」を設定する。

2 個人あるいはグループで課題解決に取り組む　授業改善のテーマ 1

① 生徒に紙のワークシート（右図）を配布し、個人又はグループで、ワークシートに記載の以下の資料から読み取れた関東地方の特徴をまとめるように指示。

> 【資料の内容】
> 資料１「関東地方の高速道路網」「関東地方の人口」
> 資料２「東京周辺の１㎡あたりの地価（住宅地）」
> 資料３「東京23区への通勤・通学者」「東京23区の昼夜人口」

② 課題解決のため**「デジタル教科書」**「紙の教科書」「地図帳」を参照して良いこと、気付いたことは**デジタル教科書に書き込むことを指示。**

③ 学習支援ソフトやスクリーンを使って、**各自のデジタル教科書中の取組状況を共有し**、参照できるようにする。

期待する学習者の変容	
	• デジタル教科書の拡大表示・書き込み機能を使って、他者に分かりやすく自分の考えを整理している。 • 共有された他者の取組を見て、誰がどの課題で困っているかを把握し、積極的に教えに行く。

授業の様子（赤字は"期待する学習者の変容"に関する内容、番号は「授業場面」の番号と対応）

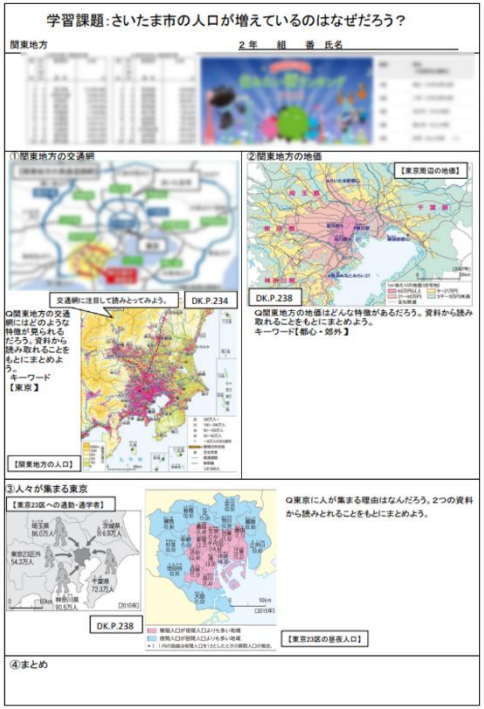
① 授業者が「人口の多い市区町村は何地方に集中しているか？」と問いかけた。生徒たちは、資料を読み取り、関東地方であると答え、関東地方に人口規模の大きい市区町村が多いことを捉えている様子であった。

▲スクリーンに投影された資料を学級全体で確認する様子

① 個人で作業する者や、声を掛け合ってグループを作る者など、各々が自由に学習を進めていた。

② 生徒は、**デジタル教科書を拡大したり、直接線や〇を書き込みながら考えを整理していた。ワークシートに示されている資料以外の資料を、デジタル教科書で参照する生徒**もみられた。

③ **デジタル教科書への書き込みやワークシートに書いた答えを見せ合いながら、教え合う様子が見られた。**



実際に使用したワークシート▶
デジタル教科書等のページを記載し、参照しやすくしている。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.5. 深谷市立藤沢中学校（社会）
3.5.2. 授業改善（１回目）授業内容

■ 授業の流れ及び実際の授業の様子は以下のとおりです。

授業場面（青字は"デジタル教科書を使用した手立て"）

2 個人あるいはグループで課題解決に取り組む
授業改善のテーマ 1

④ ３つの課題を整理した生徒から、授業者に考えを伝える。
その際、考えに不足があれば、授業者から"考える視点"を伝え、再度取り組ませる。

⑤ 課題を解決した生徒には"ミニ先生"となってもらい、授業者の代わりに、他の生徒をサポートするよう伝える。

期待する学習者の変容
- デジタル教科書の拡大表示・書き込み機能を使って、他者に分かりやすく自分の考えを整理している。
- 共有された他者の取組を見て、誰がどの課題で困っているかを把握し、積極的に教えに行く。

3 学級全体で本時の学習内容をまとめる

① ３つの課題に沿って、本時の重要なポイントを板書する。
また、本時では取り扱わなかった資料も紹介し、関東地方の人口の多さの背景には、今回検討した要因以外もあることを示す。

② 「さいたま市の人口が増えているのはなぜだろう？ 」という本時の課題への回答を、紙のワークシートの最後の「まとめ」に記述させる。

4 個人で振り返りを記入し、学級全体で振り返る

① 各自で本時を振り返り、ノートに記入する。

授業の様子（赤字は"期待する学習者の変容"に関する内容、番号は「授業場面」の番号と対応）

④ 授業者への報告に備え、書いた文章を音読し、他者へ伝わるか確認しあうグループがあった。
授業者への報告で"考える視点"を得た生徒は、再度デジタル教科書の図表を見直し、正しい解釈を行うことができていた。

⑤ "ミニ先生" となった生徒は、投影された取組状況を見たり、教室を歩いて生徒のワークシートをのぞき込んだりしながら困っている生徒を見つけ、解決の糸口となるヒントを与えた。

▲グループで３つの課題を確認しあう様子

▲スクリーン投影された生徒の取組状況

① 授業者が板書した３つの課題における重要なポイントについて、生徒は静かに紙のノートに書き写していた。
授業者が、都道府県別の大学数、企業数、また子育てに関する情報など、関東地方の人口の多さの背景にある情報を提示し、さらなる考えを促した。
授業者が「住む場所はどうやって決めるか？」と問いかけると、生徒は「好きなスポーツチームのある町に住みたい」などと、回答し、居住地の選択理由の幅広さが示された。

② 生徒はワークシートに、本時の課題への回答を文章にして記入した。

① 授業者が、生徒の振り返り内容の中から「さいたま市以外の地域の人口増減の予想」を取り上げ全体に共有。次時以降に向けた学習への動機づけを行っていた。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.5. 深谷市立藤沢中学校（社会）
3.5.2. 授業改善（１回目）生徒アンケート結果

- 単元終了後の生徒アンケートから、事前に設定した評価スキームに基づき、「期待する学習者の変容」を評価しました。
- 「使用した教材とその活用方法」を問う質問では、多くの生徒が「**デジタル教科書中の地図や写真に書き込みをしながら内容を読み解いていること**」や「**デジタル教科書中の資料を使って他の生徒に説明していること**」が分かりました。
- また、デジタル教科書を用いた「関東地方」の単元の授業で課題に取り組む際、生徒の80%がクラスの友達がデジタル教科書に書き込んだ内容を参考にして自分の意見を書くことを経験しています。Q１で、「友達に考えを説明する際の教材」としてデジタル教科書を選択したと回答した生徒が多かったことからも、デジタル教科書は一定程度、学び合いを引き出す要因となったと考えられます。

評価スキーム（再掲）

授業改善のテーマ ①

授業内の課題への取組状況を共有し、生徒が相互に参照して学び合う

デジタル教科書等を活用した手立て

期待する学習者の変容

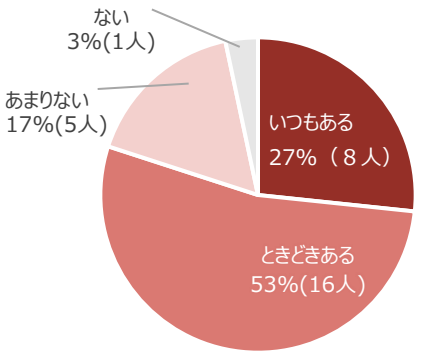
- **デジタル教科書の拡大表示や、書き込みの機能**により、自分の考えを視覚的に説明しやすくなる。
- 生徒同士で、誰がどの課題で困っているか、把握可能になり、教え合いが活発になる。

授業後アンケート結果（一部抜粋）

Q1．友達に考えを説明するとき、どの教材のどんな特徴を活かして、どんな工夫をしましたか。
（回答方法は自由記述※。デジタル教科書について言及した30名の回答から抜粋）

- デジタル教科書の図に自分の考えも書き込んでまとめた。
- デジタル教科書を使い、資料や地図に丸や矢印等を書き込んだりして、分かりやすくした。
- デジタル教科書の中で、特に重要だと思う部分が分かるように書き込んだ。
- デジタル教科書の資料は見やすく色々書き込める。それらの特徴を活かし、資料から読み取れたことを教えた。
- デジタル教科書を使ってグラフや表を見せながら相手に説明した。

Q２．「関東地方」の授業で課題に取り組むとき、友達がデジタル教科書に書き込んだ内容を参考にして自分の考えを書くことはありましたか。
[N=30]



※自由記述の回答は文意を損ねない形で修文したものがある。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.5. 深谷市立藤沢中学校（社会）
3.5.2. 授業改善（１回目）振返り協議結果

■ 授業後に行った授業者と有識者の振返りでは、以下の「成果」と「課題」、それらを踏まえた「改善策」が挙げられました。

授業改善のテーマ：授業内の課題への取組状況を共有し、生徒が相互に参照して学び合う

成果

豊富な資料を基に、自分の考えを整理（デジタル教科書の効果）

- 生徒たちは、**デジタル教科書中の豊富な資料から必要な情報を読み取り、関連づけながら整理すること**ができていました。
- また、**デジタル教科書に躊躇なく書き込む様子**も見られたため、生徒たちが**考えを整理する場面で役立った**と考えられます。

授業者（岩﨑　教諭）

デジタル教科書を使った気付きの共有（デジタル教科書の効果）

- 今までは、知識が定着している生徒や、理解が速い生徒が「教える側」として、役割が固定されている様子が見られました。
- 今回は、**「教えられる側」の生徒も資料を読み取って気付いたことを共有し、教え合う姿が見られました。**

授業者（岩﨑　教諭）

課題

目的を持った"協働的な学び"の実現

- **グループ学習では、「何故（何を）他者と学ぶか」という目的を明確にしない**と、意味のある学び合いを引き出せず、単に仲の良い者同士で話すだけの時間になってしまうことがあります。
- 協働学習の前に、**個別学習の時間を設け、各自の課題に対する問題意識を鮮明にすること**も一案です。

有識者（放送大学 小林 准教授）

学び合いを引き出す学習環境の用意

- 目的を持った"協働的な学び"の実現に向け、他者の考えへアクセスできるよう環境を整えることが必要不可欠です。
- 本時はスクリーンで各生徒の考えを共有しましたが、**生徒自身が端末上で他の生徒の考えにアクセスできる環境を用意すること**も効果的と考えます。

有識者（放送大学 小林 准教授）

改善策

個別に課題に取り組む時間の確保

- まずは周りに相談せず、個別に課題に取り組む時間を確保することで、その後に目的を持った意見交換を実現する。
- １人では課題に取り組むのが難しい生徒のため、授業者に質問できる学習環境や、ヒントの提示等の支援を用意する。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.5. 深谷市立藤沢中学校（社会）
3.5.3. 授業改善（2回目）単元情報

■ 2回目の授業改善で扱った単元は以下のとおりです。うち、2時間目の授業を実証対象としました。

単元	**第５章「開国と近代日本の歩み」第３節「明治維新」**
単元を通して目指す姿	• 明治維新によって、近代国家の基礎が整えられ、人々の生活が大きく変化したことを理解できる。 • 明治政府の諸改革の目的に着目し、近代社会への変化を多面的・多角的に考察して表現したり、その有効性を追究したりする。

時数	各授業のねらい	主な学習活動	
1	明治維新による人々の生活の変化を捉える。①	• 明治維新による「子供」「女性」「アイヌ・琉球の人々」の生活の変化を示す資料を探す。 • 根拠となる資料をデジタル教科書中から探し、学習支援ソフト上のワークシートにまとめ、発表する。 • 政府が行った政策の意図を考察する。	
2	**明治維新による人々の生活の変化を捉える。②**	• **明治維新による「武士」「農民」「都市の人々」の生活の変化を示す資料を探す。** • **根拠となる資料をデジタル教科書中から探し、学習支援ソフト上のワークシートにまとめ、発表する。** • **政府が行った政策の意図を考察する。**	対象
3	政府が明治維新で目指した社会を考察する。	• 単元の学習を踏まえて、明治維新で目指した社会を捉える。 • 根拠となる資料をデジタル教科書中から探し、学習支援ソフト上のワークシートにまとめ、発表する。	

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校･地域における取組
3.5. 深谷市立藤沢中学校（社会）
3.5.3. 授業改善（２回目）評価スキーム

■ ２回目の授業改善においても、授業改善のテーマに基づく「評価スキーム」を設定し、デジタル教科書等の活用による効果を検証します。テーマは「**デジタル教科書から引用した資料で根拠付けしながら、自分の考えをワークシートに整理する**」です。

現状の課題

生徒は考えや疑問点が明確でないまま、話し合いに参加している。

授業改善のテーマ ②

デジタル教科書から引用した資料で根拠付けしながら、自分の考えをワークシートに整理する

目指す姿

学級全体やグループに対して、根拠となる資料を提示しながら自分の考えを発表することができる。

デジタル教科書等を活用した手立て

- グループ内で分担を決め、各自が担当する課題に関して、同じ担当の生徒との意見交換の機会や、他の担当の生徒に発表する機会を設ける。（ジグソー法）
- 自分の考えをまとめる際、学習支援ソフト上のワークシートに、**デジタル教科書の資料や書き込んだ内容をキャプチャ**して整理する。

期待する学習者の変容

- 生徒が、デジタル教科書中の資料で根拠付けしながら、自分の考えを導き、ワークシートにまとめることができる。
- 生徒が、資料への書き込みなど、他者への説明を想定してワークシートを工夫し、それを見せながら、自信を持って説明できる。

指導計画策定における授業者のねらい

生徒には、それぞれ自分の担当の課題を持ってもらい、まずは１人でその課題に取り組んだ後に、同じ課題を選択した生徒同士で意見交換を行います。

１人で取り組む時間を設けることで、自分は何が分からないかが明確になり、目的を持って、意見交換に参加することができます。

授業者（岩﨑教諭）

指導計画策定における有識者からの助言

生徒が個別で課題に取り組む時間を設ける際には、１人で課題を進めるのが難しい生徒に対する支援も必要です。

例えば、ワークシートのまとめ方の見本やヒントを提示したり、教卓の周辺をいつでも授業者からのアドバイスがもらえる場所として設定したりするのも一案です。

有識者（放送大学 小林 准教授）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.5. 深谷市立藤沢中学校（社会）
3.5.3. 授業改善（２回目）授業内容

■ 授業の流れ及び実際の授業の様子は以下のとおりです。

授業場面（青字は"デジタル教科書を使用した手立て"）

1 本時の課題を、学級全体で確認

① 授業者が本時の課題「明治維新によって人々にはどんな変化があったのか？」を提示。「武士」「農民」「都市の人々」の３つの立場に着目することを示した。
また、各立場に起きた変化を、ホームグループ（生徒が所属する基礎グループ）内で分担して調べまとめるよう指示。

② **デジタル教科書の本文や資料**を参照してほしいこと、また参照すべき資料がわからない場合は、廊下に掲示したヒントを参考にしてほしいこと、困ったら先生に相談して良いことを伝えた。

2 自分の担当の課題に対する考えを、個人でまとめる（授業改善のテーマ 2）

① 自分が担当する課題に対する考えを、**デジタル教科書で見つけた資料を根拠として示しながら、**学習支援ソフト上のワークシートにまとめさせる。

② 手が止まっている生徒には、机間指導で声掛け。

期待する学習者の変容
- 生徒が、デジタル教科書中の資料で根拠付けしながら、自分の考えを導き、ワークシートにまとめることができる。
- 生徒が、資料への書き込みなど、他者への説明を想定してワークシートを工夫し、それを見せながら、自信を持って説明できる。

授業の様子（赤字は"期待する学習者の変容"に関する内容、番号は「授業場面」の番号と対応）

① 授業者が前時の復習をしながら、本日の進め方を確認した。

② 廊下に掲示したヒントを確認した生徒は、他の生徒と会話しながら、課題への取り組み方への見通しの認識を揃えた。ヒントには、着目すべき資料が抜粋して掲載されていたため、生徒はすぐにデジタル教科書中で当該資料を参照することができた。

▲廊下に掲示されたヒント
江戸から明治の変化を捉えるために有効な資料をデジタル教科書から抜粋して掲載

① 多くの生徒はワークシートにまとめる際、**変化の前後で色分けをしたり、吹き出しを付けたり、重要な箇所を〇で囲ったりと、発表を意識したまとめ方をしていた。**
ワークシートへの書き込み方法は、タッチペンによる手書き、テキストボックス、**教科書本文を引用して線を引く**など、様々であった。

② 授業者は「小さな変化でもいいから、書いてみて」と学級全体に声をかけた。
また、手が止まっている生徒や質問に来た生徒に対しては、「この資料から見てみるとよい」「ワークシートのキーワードを参考にして」等のヒントを与えていた。

▲１つの画面にデジタル教科書とワークシートの両方を表示し、効率的に作業

▲テキストボックスを用いながら、考えをまとめる様子

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.5. 深谷市立藤沢中学校（社会）
3.5.3. 授業改善（２回目）授業内容

■ （前頁の続き）

授業場面（青字は"デジタル教科書を使用した手立て"）

3 同じ課題を担当した生徒同士で意見交換　授業改善のテーマ 2

① 「武士」「農民」「都市の人々」の３つのグループ（以下、「エキスパートグループ」）に分かれ、同じ立場を担当した生徒同士で、明治維新によってどのような変化があったか、**作成したワークシートを基に**意見交換を行わせる。

期待する学習者の変容	・生徒が、資料への書き込みなど、他者への説明を想定してワークシートを工夫し、それを見せながら、自信を持って説明できる。

4 担当した課題への考察をグループ・全体で共有　授業改善のテーマ 2

① ホームグループに戻り、自分が担当した立場について、明治維新によってどのような変化があったか、**ワークシートを見せながら**考察を発表するように指示。

② 数名のワークシートをスクリーンに投影した上で、学級全体に発表してもらい、３つの立場の重要な点を板書。

期待する学習者の変容	・生徒が、資料への書き込みなど、他者への説明を想定してワークシートを工夫し、それを見せながら、自信を持って説明できる。

授業の様子（赤字は"期待する学習者の変容"に関する内容、番号は「授業場面」の番号と対応）

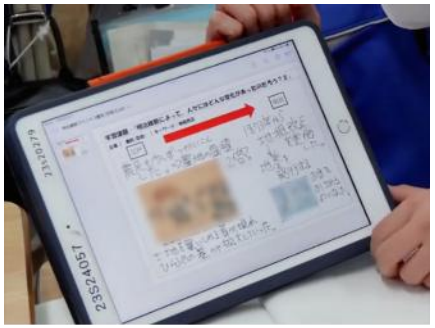
① 授業者から、全員が自分の考えを他の生徒に伝えるよう指示があり、生徒は順番に**ワークシートを見せながら、まとめた内容を発表**した。一部の生徒は自主的に議論をリードしていた。また、他の生徒の発表を踏まえ、自分のワークシートを加筆修正する様子も見られた。

▲ワークシートをのぞき込みながら、意見交換を行う様子

(例)「農民」を担当したある生徒は、
授業場面２では、「地券」のキャプチャ画像を貼った後、手が止まっていた。しかし、エキスパートグループでの議論を踏まえて、「（国に納めるものが）米→金に変化。」「地租改正」とコメントを加え、ホームグループでの発表に備えていた。

① ホームグループに戻り、生徒は自分の担当の立場について、**ワークシートを見せながら発表を行った。**端末の画面を拡大し、**根拠となる資料を強調しながら説明**する生徒もいた。
個人で課題に取り組む時間では、手が止まっていた生徒も、同じ立場の生徒同士の意見交換を踏まえて、発表できていた。

② 授業者は各発表内容を踏まえて、「徴兵令」や「地租改正」などのキーワードやポイントを板書しており、生徒は自分が担当していない立場に関しても、要点を掴むことができていた。
（板書内容は次頁を参照。）



▲ワークシートを見せながら、発表を行う様子
左側に江戸時代、右側に明治時代の人々の様子を表す資料を貼り、気づいたことを書きこんでいる

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.5. 深谷市立藤沢中学校（社会）
3.5.3. 授業改善（２回目）授業内容

■ （前頁の続き）

授業場面

5 グループ・全体で、発展課題について考察・まとめ

① ここまで考察した明治時代の人々の生活の変化を踏まえ、発展課題（なぜ明治政府はこのような政策を進めたか）を考える。
各ホームグループで共同編集できるワークシートに記入してもらい、生徒同士で他者参照ができるようにする。

② 授業者はワークシートを投影しながら、各グループに議論内容を発表させて適宜深掘りを実施。
まとめとして、明治政府が行った改革の意図を板書。

授業の様子（番号は「授業場面」の番号と対応）

① 意見が出ないホームグループは、他のホームグループのワークシートを参照しながら議論を進めていた。

② 授業者はグループの発表内容に対して、
「根拠となる資料は何か」
「明治政府がこのような政策を進めると、なぜ外国に対抗できるようになるのか」等と深堀りしていた。

▲他グループの議論を参照する様子
グループごとに付箋へ記入

▲授業者が行った板書
生徒は担当していない箇所についても、本時のポイントを押さえることができる

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.5. 深谷市立藤沢中学校（社会）
3.5.3. 授業改善（２回目）生徒アンケート結果

- 単元終了後の生徒アンケートから、事前に設定した評価スキームに基づき、「期待する学習者の変容」を評価しました。
- 「デジタル教科書が、課題に対する考えをまとめるときに有効か」を問う質問では、生徒の80%が、「紙と比較してデジタル教科書が有効だと思う」「どちらかと言えば有効だと思う」と回答しています。
- デジタル教科書を用いた社会の授業の良さについては、教科書に書き込みやすく、課題に取り組みやすい等の個人で取り組む際の視点と、「資料を見せやすいので発表しやすい」等の相手に伝える際の視点が挙げられました。

評価スキーム（再掲）

授業改善のテーマ ②

デジタル教科書から引用した資料で根拠付けしながら、自分の考えをワークシートに整理する

デジタル教科書等を活用した手立て

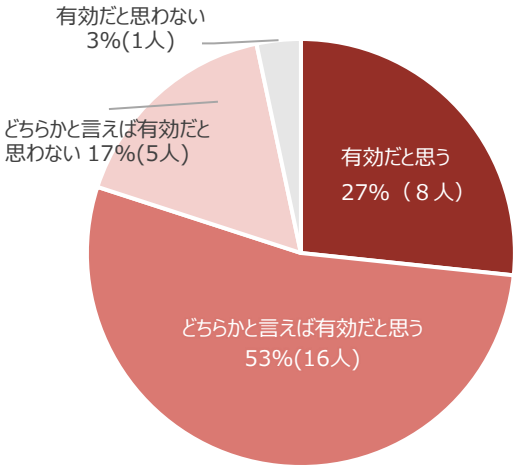
期待する学習者の変容

- 生徒が、デジタル教科書中の資料で根拠付けしながら、自分の考えを導き、ワークシートにまとめることができる。
- 生徒が、資料への書き込みなど、他者への説明を想定してワークシートを工夫し、それを見せながら、自信を持って説明できる。

※自由記述の回答は文意を損ねない形で修文したものがある。

授業後アンケート結果（一部抜粋）

Q１.デジタル教科書は、紙の教科書と比較して、課題に対する考えをまとめるときに有効だと感じますか。５段階で評価してください。[N=23]



Q２．デジタル教科書を使う社会の授業に、どのような良さを感じますか。
（回答方法は自由記述。回答から抜粋）

- 紙の教科書を使用していた頃より、一人一人がしっかりと課題に向き合っている。
- 調べやすくなったので知識が入りやすくなった。
- 紙の教科書よりも機能が豊富なため、仲間との意見共有や個人で課題に向き合う時に使いやすい。
- 学んだことを、デジタル教科書中に書き込めば、全てをノートに書き写さなくて良いので便利。
- デジタル教科書中の資料を使って、自分の意見を発表できること
- 発表する際に、デジタル教科書中の資料は、相手に簡単に見せることができる
- 話し合いの時にタブレットだけを見せて解説することができる。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.5. 深谷市立藤沢中学校（社会）
3.5.3. 授業改善（２回目）振返り協議結果

■ 授業後に行った授業者と有識者の振返りでは、以下の「成果」と「課題」、それらを踏まえた「改善策」が挙げられました。

授業改善のテーマ：デジタル教科書から引用した資料で根拠付けしながら、自分の考えをワークシートに整理する

成果

資料を根拠に考えを発表し学び合う（デジタル教科書の効果）

- **デジタル教科書の資料は、拡大やワークシートへの貼り付けが容易**なので、生徒は、資料を詳細に読み込み、気付いたことを書き込みながら自分の考えを整理し、発表することができていました。
- **他の生徒の発表を踏まえて、自分のワークシートに書き足したり、重要箇所に線を引いたり**する様子も見られました。

授業者（岩﨑　教諭）

１人で学習を進められない生徒へのサポート

- **生徒が個別で課題に取り組む際は、それをサポートする学習環境の用意**が重要です。
- 本時では、課題への取り組み方が分からない生徒への支援として、ワークシートや掲示物でのキーワードやヒントの提示、授業者に質問してよい場所の設置などの工夫がなされていました。

有識者（放送大学 小林 准教授）

課題

意見を発表できる環境の用意

- 「武士」「農民」「都市の人々」の３グループに分かれて意見交換をする時間では、人数が多く**自分の意見が言えない生徒**も見られました。
- 全ての生徒が意見を発表できるように、授業者が**意図を持ってグループを編成することや、**生徒が任意にグループを組む際は、**発言できていない生徒がいないか気にかける**ことが必要です。今回の授業であれば、より少人数のグループにして議論を活発化させるのも一案です。

埼玉県教育局

改善策

活発な意見交換の実現

- 生徒の学習到達度や人数を考慮したグループ編成にすることで、さらに意見交換を活発化させ、より充実した「協働的な学び」を実現する。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.5. 深谷市立藤沢中学校（社会）
3.5.4. 授業改善のプロセス

■ 2回の授業改善を通して、デジタル教科書を使って、生徒が課題に取り組み意見交換し学び合う授業を目指しました。

START

実証前

課題に取り組む形式の授業を行うが、理解度の差により、生徒が「教える側」「教えられる側」に固定化

毎授業、授業者が出した課題に、生徒が取り組む形式の授業が行われていた。課題に取り組む際は、生徒同士の自由な交流を推奨していたが、わかったことや考えたことを教える機会は、一部の理解度の高い生徒に偏っていた。

指導計画策定

デジタル教科書の導入による、資料を読み取る力の底上げ

- 生徒が課題に取り組む形式の授業に、デジタル教科書を取り入れ、拡大機能、書き込み機能を用いた資料読解が可能になった。

授業者（岩﨑　教諭）

これまでの授業も課題を与え生徒同士で解決する流れでしたが、社会科で重要な資料を読み取る力には差が見られました。デジタル教科書には、画面の拡大や書き込み機能があり、資料の読み取りが苦手な生徒も書き込みながら試行錯誤する様子が見られました。さらに、資料を読み取る力の向上により、意見交換も活発になり、多くの生徒の主体性の発揮に繋がりました。

授業実践（１回目）

「教えられる側」の生徒も、地図やグラフを読み取ることができ、教え合いを実現
生徒に、目的や考えを持って話し合いに参加してもらうことが次なる課題に

指導計画策定

デジタル教科書を使いながら１人で課題に取り組んで発表準備し、意図を持って話し合いに参加

- まずは生徒が１人で課題に取り組む時間を確保し、疑問点や意見を持った上で、意見交換をするよう促す。

授業者（岩﨑　教諭）

デジタル教科書を導入し、個別で課題に取り組む際に使用するワークシートの作り方も変わりました。
これまでは紙のワークシート上に教科書の資料も掲載していましたが、課題解決のために必要な資料を生徒自身がデジタル教科書から選択し、学習支援ソフト上のワークシートに整理させるようにしたことで、適切な資料を選ぶための思考力や主体性が伸びたと感じています。

授業実践（2回目）

多くの生徒が１人で資料を読み取り、考えを持って話し合いに参加
より多くの生徒が参加する活発な学び合いの実現が、次なる課題に

©2026 ABeam Consulting Ltd.

■ 2回の授業改善を通して得られた、授業改善のポイントは以下のとおりです。

深谷市立藤沢中学校における授業改善の取組の総括

授業改善のポイント

授業改善のテーマ1：授業内の課題への取組状況を共有し、生徒が相互に参照して学び合う

豊富な資料を基に、自分の考えを整理 ➡ 参考：p.81

- デジタル教科書と学習支援ソフト上のワークシートを組み合わせて使えば、生徒は、豊富な資料から必要な情報を読み取り、関連づけながら整理できる。
- デジタル教科書に躊躇なく書き込むことができるため、デジタル教科書は考えを整理する場面で役立つ。

デジタル教科書を使った気付きの共有 ➡ 参考：p.82

- 知識が定着している生徒や理解が速い生徒から「教えられる側」だった生徒も、デジタル教科書を使用すると資料を読み取って気付いたことを表現・共有しやすくなり、生徒間の学び合いが生まれた。

授業改善のテーマ2：デジタル教科書から引用した資料で根拠付けしながら、自分の考えをワークシートに整理する

資料を根拠に考えを発表し学び合う ➡ 参考：p.88

- デジタル教科書中の資料を拡大して読み取ったり、キャプチャしワークシートに貼り付け、気付いたことを書き込んだりすることで、情報や考えを整理しやすくなる。
- 自分の考えを発表する際、根拠となる資料が掲載されたワークシートを見せることで、深い意見交換につながる。他の生徒の発表を踏まえて、自分のワークシートに書き足したり、重要箇所に線を引いたりして、考えを整理し、発展させることができる。

１人で学習を進められない生徒へのサポート ➡ 参考：p.87

- 生徒を支援する学習環境（例：ヒントや見本の提示、授業者に質問できる場所の設置）を用意することで、生徒が１人で課題に取り組むことができる。

実践を振返って

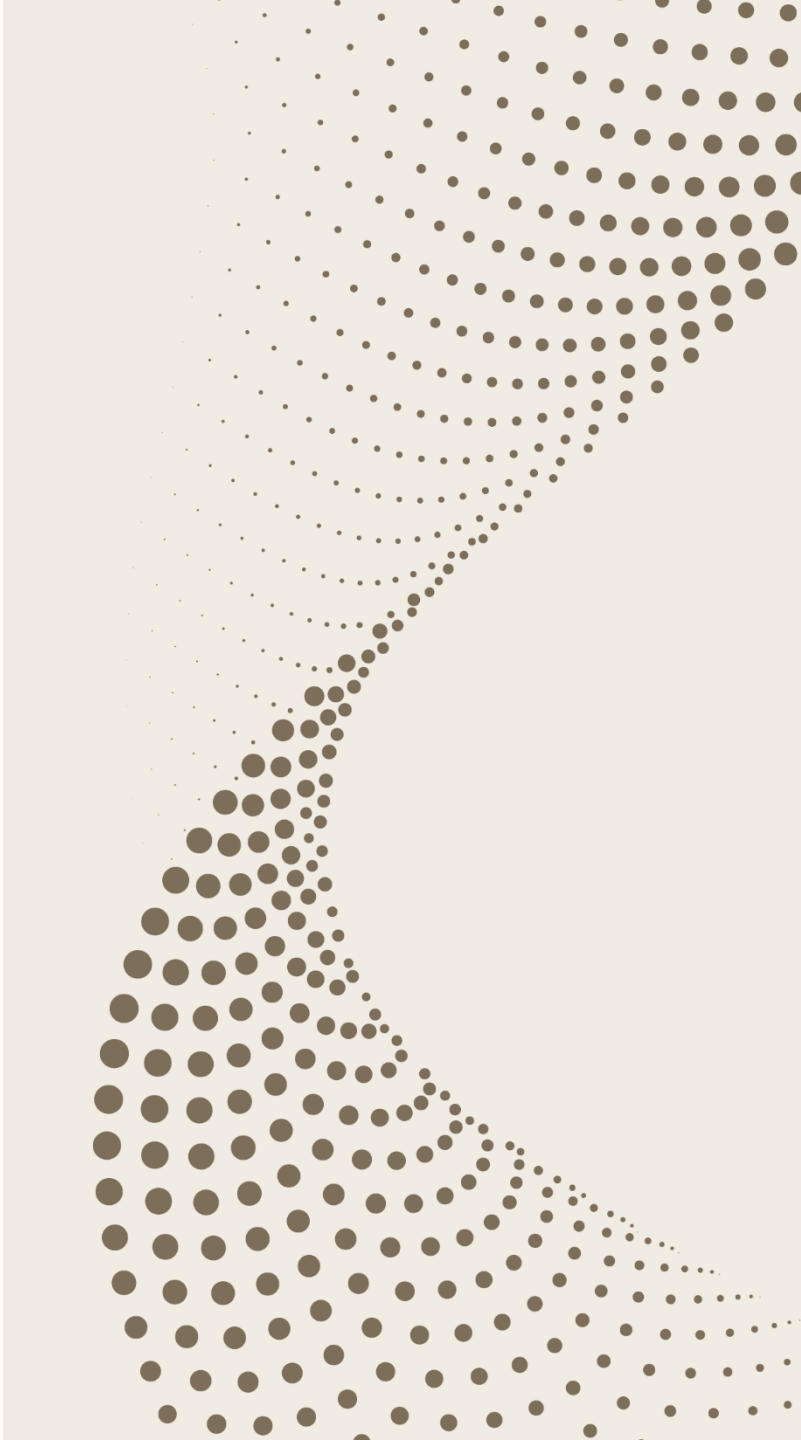
- デジタル教科書を使った社会科の授業を検討する中で、資料の読み取りを念頭に置いていました。それが「個別最適な学び」の視点やジグソー法による「協働的な学び」にもつながりました。
- デジタル教科書を使用することで資料を読み取りやすくなり、生徒が自分の力で解決できることが増え、「自分で分かった」という実感が増えるので、課題解決が苦手な生徒も意欲的に取り組みやすくなりました。また、グラフや地図などの資料を読み取る力が伸びたと感じています。

授業者（岩﨑　教諭）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組

3.1. 鹿屋市立鹿屋中学校（外国語）
3.2. 越前町立糸生小学校（算数）
3.3. 奈良市立ならやま小中学校（国語）
3.4. 山都町立矢部中学校（理科）
3.5. 深谷市立藤沢中学校（社会）
3.6. 地域内展開



3. 各実証校・地域における取組
3.6. 地域内展開

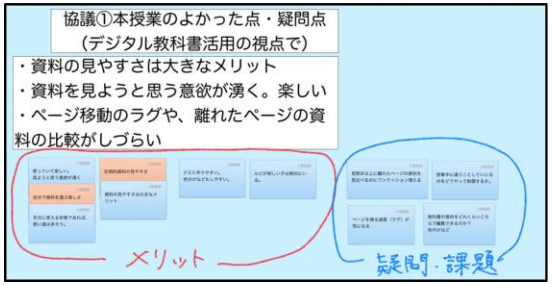
■ 鹿児島県鹿屋市、福井県越前町、埼玉県深谷市では、授業改善の取組を公開授業の形で同地域内に展開しました。
また、公開授業後の研究協議では、教員同士でデジタル教科書等の効果や課題について意見交換しました。

概要

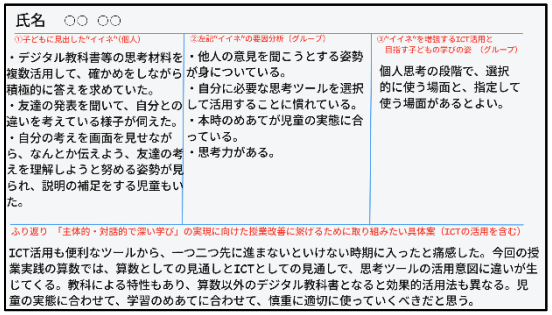
実証地域	展開方法
鹿児島県鹿屋市 福井県越前町 埼玉県深谷市	**公開授業＆研究協議**

詳細

取組の内容	取組のポイント
事前準備 • 研究協議時に意見交流しやすいよう、**デジタルのワークシート（右図）**を準備	参加者の授業観察結果を可視化し、効果的に意見交換できるよう、ワークシートを事前に作成する。
公開授業 • 参加者は、**デジタル教科書等の活用にフォーカス**し**活用による効果（子供の変容）や課題**を観察	事前に観察の視点を明示することで、参観者ごとの主観に寄った授業観察を防ぐことができる。
研究協議 • デジタルのワークシート（右図）を使って、**活用の効果・課題をグルーピングしながら整理** • 更なる改善策について参加者間で意見交換	効果と課題をグルーピングすることで、視覚的に分かりやすく整理できる。 また、更なる改善策を意見交換する際も議論の糸口にしやすい。
学びの蓄積 • **情報交換用プラットフォーム（次頁）に**、本取組も含めた**同地域内の教員の学びを蓄積**	研究協議の学びをオンライン上に蓄積しておくことで、後に振り返りやすくなる。 また、同地域内の教員の学びを参考に、自身の実践を改善することも可能。



▲埼玉県深谷市のワークシートの例



▲福井県越前町のワークシートの例
活用の効果（イイネ）に着目して議論。（関連事例はこちら）

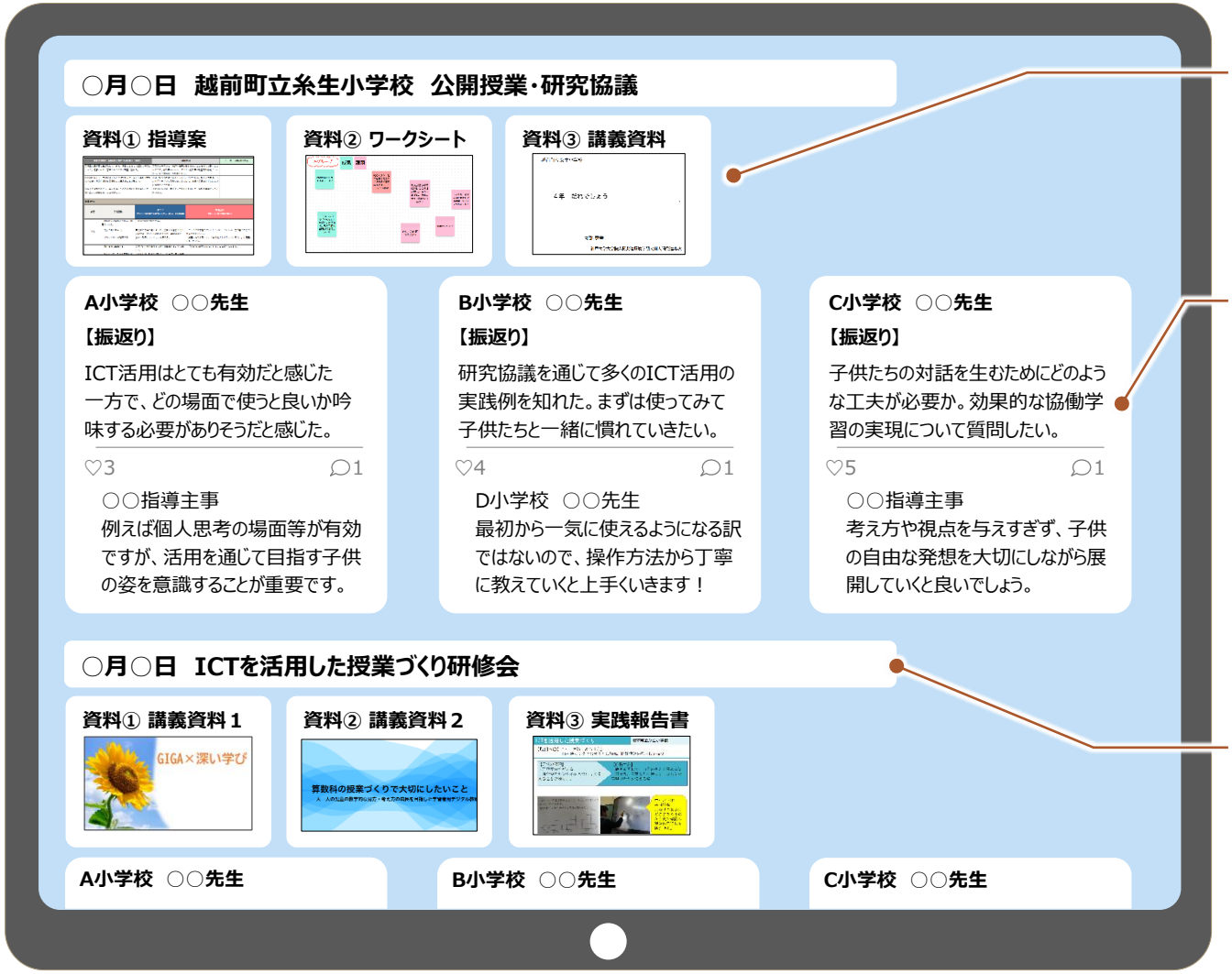
成果

- デジタル教科書を活用した授業を参観し、**子供たちの活用の様子や学び方の変化など実際の様子を見ること**ができ学びが多かった。デジタル教科書のことを分かっているつもりだったが、**実際に見ることで活用イメージを更に具体的なものにすることができた。**（参加者の声）
- 他校の先生と、実体験を交えながら効果・課題を考えながら活用を検討することで、授業での活用をイメージすることができた。また「デジタルのワークシートを使いながら他の教員と意見交換をする」というやり方そのものが、**子供の協働的な学びと相似形であり効果を実感できた。**（参加者の声）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証校・地域における取組
3.6. 地域内展開

- 情報交換用プラットフォームにより、年間の取組を蓄積するとともに、地域内の教員・指導主事の活発な交流を引き出しました。
- この取組は、各地域において導入されている学習支援ソフトやコラボレーションツールなどを使うことで再現することができます。



研修資料を掲載
- 研修で使用したワークシートや講義資料を掲載。**いつでもどこでも参照し、授業改善の参考とすること**が可能。

コメント機能で教員間の交流を促進
- 研修の振返りも同プラットフォームに記入。
- コメント機能を使いながらプラットフォーム上での教員間の交流を促進。**研修内外問わず地域内の教員で学び合う姿勢**を醸成。
- 指導主事もコメントでフィードバックすることで、教育委員会と学校間のより強固な関係構築を実現。

年間を通じた学びを蓄積
- １つの研修に閉じず、**年間を通じた地域内の教員の学び**を蓄積。
- 自身の学びの変化を振り返り、更なる授業改善に繋がる視点を獲得。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

4. 実証研究結果の総括

4. 実証研究結果の総括
4.1. デジタル教科書等を活用した学び方のポイント（1/5）

■ 本事業の総括として、各実証校の授業改善から得られた示唆をもとに、教科を横断したデジタル教科書等の活用のポイント及び教師の指導のポイントについて、以下のとおり整理しました。

	デジタル教科書等を活用した学び方のポイント	教師の指導のポイント
個別最適な学び	 **■動画・音声・シミュレーション機能を使って理解促進** ✓ 外国語では、音声読み上げ機能やアニメーションを使って、教科書本文の場面を把握 ✓ 算数・数学では図形を動かせるコンテンツ、理科ではシミュレーション機能などで、視覚的な理解を促し、見通しをもたせる際に有効	✓ デジタル教科書による学び方が多数ある中、**それぞれの学び方のメリットを伝えること**や、**それを子供たち自身で体験しながら理解**できるような授業設計が重要
	 ■書き込み機能を使って粘り強く試行錯誤 ✓ 算数・数学では、図表への書き消しなどが容易なため、子供が試行錯誤しながら自分の考えを表現する場面で有効 ✓ 国語では、本文に色分けして線を引くことで、叙述に基づいて考えを整理することが可能	✓ 教科書の本文や図表に書き込みながら考える際は、最終的に**他者に説明することを意識しながらまとめる**ように指導 例）単なる答えだけでなく自分の考えを補足させること　等
	 ■デジタル教科書から本文や資料を抜き出して自分なりに整理 ✓ 本文抜き出し機能（国語）やスクリーンショット機能（理科・社会）を使うことで、デジタル教科書本文や資料を簡単に抜粋でき、複数の情報を関連づけながら整理する際に有効 ✓ デジタル教科書の資料は、拡大して細部まで確認することができるため、写真や地図中の詳細な特徴を捉えることができ、情報整理の場面で役立つ	✓ 資料が多くある活動では**何から着目していけばいいか分からない子供**もいるため**教師のフォロー**も必要 ✓ 良いまとめ方をしている子供を取り上げなぜそのようにまとめたのか、**意図を深掘り**することも有効
	デジタル教科書で個別最適な学びを進め その成果を他者に共有・発表 協働的な学びの成果を 個別最適な学びに還元	
協働的な学び	 **■学習支援ソフトも組み合わせて、考えを共有・蓄積** ✓ 学習支援ソフトを組み合わせ、ワークシートに整理した自身の考えを共有することで、他の子供の考えを参照・比較することが可能 ✓ 自身の考えを説明する際には、デジタル教科書の音声・動画・シミュレーション機能を補助的に使用したり、デジタル教科書から抜き出した本文や資料を示したりすることで、より分かりやすい説明を実現	✓ 子供たちが**目的意識**をもって協働学習に取り組めるよう、個別学習の時間を設け、自身の考えをクリアにすることが重要 ✓ これまでの学びの中で重要な**ポイントを板書**等で押さえることも必要

©2026 ABeam Consulting Ltd.

4. 実証研究結果の総括
4.1. デジタル教科書等を活用した学び方のポイント（2/5）

■ 前頁に記載した「デジタル教科書等を活用した学び方のポイント」について、今年度の実証校における授業改善の取組から得られた成果のうち、デジタル教科書の活用によるものを教科別に詳述します。

個別最適な学びのポイント：動画・音声・シミュレーション機能を使って理解促進

1 外国語 **音声読み上げ機能により、聞き取りを繰り返し学習内容を定着**

デジタル教科書の音声読み上げ機能を活用し、対話文の概要把握や文構造の理解を繰り返すことで、正確な発音や表現を習得することができる。
また、聞き取りの練習を繰り返すことで、単元末活動に向けて学習内容の定着を図ることができる。

参考）鹿屋中学校第１回(p.16)・第２回(p.21)

2 算数 **視覚的な理解を促すコンテンツにより、課題解決の見通しをもつ**

デジタル教科書は、例えば「段数を増やせるシミュレーション機能」のように、視覚的な理解を促すコンテンツが多く収録されており、課題解決の見通しをもつ場面において有効である。

参考）糸生小学校第２回(p.38)

3 理科 **動画や図を活用した調べ学習の充実**

デジタル教科書を使うことで、実験動画を繰り返し確認したり、図解資料を拡大表示して細部まで確認することができる。調べ学習の際に、これらを活用することにより子供たちの理解の深化を図ることができる。

参考）矢部中学校第１回(p.65)

©2026 ABeam Consulting Ltd.

4. 実証研究結果の総括
4.1. デジタル教科書等を活用した学び方のポイント（3/5）

■ （前頁の続き）

個別最適な学びのポイント：書き込み機能を使って粘り強く試行錯誤

1 算数 **書き込み・消去を繰り返し、試行錯誤しながら考えを形成**

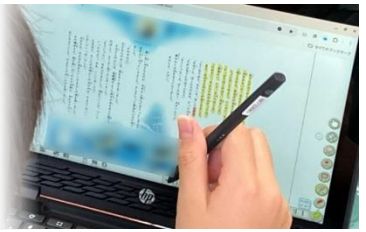
デジタル教科書や学習支援ソフトは、書き込みや消去が容易なため、子供が試行錯誤しながら自分の考えを整理する場面で有効である。

参考）糸生小学校第１回(p.31)・第2回(p.38)

2 国語 **マーカー機能を使って考えを整理**

デジタル教科書は、本文に色分けして線を引くことができ、本文を読み進める場面や叙述や表現に基づいて自分の考えを整理する場面で役立つ。

参考）ならやま小中学校第１回(p.48)・第２回(p.54)



©2026 ABeam Consulting Ltd.

■ （前頁の続き）

個別最適な学びのポイント：デジタル教科書から本文や資料を抜き出して自分なりに整理

1 国語 本文抜き出し機能により、文章間の関連を見出す

デジタル教科書の本文抜き出し機能を使ってカード形式にした文章を、表で整理したり、言葉や矢印で関係性を補足したりすることにより、文章間の関連を捉えやすくなり、本文を深く読むことに繋がる。

参考）ならやま小中学校第２回(p.54)

2 理科 情報を適切に整理し、根拠を明確化

デジタル教科書は、スクリーンショット機能で簡単に資料を抜き出すことができるため、必要な情報を取捨選択しながら整理する場面で有効である。また、考えの根拠を明確にしながら情報を整理することは、自分の考えに自信を持つことに繋がり、その後の発表活動が充実する。

参考）矢部中学校第２回(p.71)

3 社会 豊富な資料を基に、自分の考えを整理

デジタル教科書の拡大機能を使うことで、地図や写真、統計資料等の詳細まで読み取ることができる。
また、それらはスクリーンショット機能で簡単に抜き出すことができるので、学習支援ソフト上で自由に配置して考えを整理したり、抜き出した資料を比較したりして考察を深めることができる。

参考）藤沢中学校第２回(p.87)

©2026 ABeam Consulting Ltd.

■ （前頁の続き）

協働的な学びのポイント：学習支援ソフトも組み合わせて、考えを共有・蓄積

1 理科・社会 デジタル教科書もあわせて示しながら考えを説明

子供たちが、整理した自分の考えを説明する場面において、デジタル教科書のシミュレーション動画や図表等を補助的に示すことにより、視覚的な理解を促すことができる。

参考）矢部中学校第１回(p.66)、藤沢中学校第２回(p.88)

2 国語 デジタル教科書を使った学び方も共有

デジタル教科書の本文抜き出し機能を使うと、子供たちは自分に合った方法で自由に考えを整理でき、多様な「まとめ方」も引き出すことができる。考えを交流する際には、デジタル教科書の活用方法や工夫した点も共有することで、学び方の改善も促すことができる。

参考）ならやま小中学校第２回(p.55)

3 算数 他者と学び合うことを意識して考えを表現

考えを整理する際、他者が見ても分かるように、式だけでなく言葉やデジタル教科書の図表で補足させることで、他者参照を通じた学びの充実に繋がる。
また、発表時には、自分の考えを見せるだけでなく、説明箇所を指し示しながら伝えることにより、聞き手の理解を更に高めることができる。

参考）糸生小学校第第２回(p.39)

©2026 ABeam Consulting Ltd.

4. 実証研究結果の総括
4.2. 今後の方針（1/2）

- 次に、本事業での授業改善の取組から得られた成果や課題を踏まえ、デジタル教科書の活用促進に向け、国が今後取り組むべきことを以下のとおり整理しました。
- 本整理に当たっては、有識者会議の委員の皆様（p.6 参照）からもご意見を頂いており、その内容を併記しています。

1	R6事業の総括	英語・算数・数学以外の教科についても、国からの提供部数や自治体での購入部数が多い教科（国語・理科・社会など）については、実証事業で先行して事例創出に取り組む必要がある。
	R7事業の成果	今年度事業では、国語・理科・社会における事例創出に取り組み、新たな教科における活用方法を見出すことができた。また、外国語や算数・数学を含む５教科間で共通するデジタル教科書活用のポイントを抽出することができた。
	今後の方針①	事例がある程度蓄積された外国語や算数・数学については、現状は配布対象となっていない高等学校での事例創出にも取り組み、活用による効果・影響等を把握する必要がある。
2	R6事業の総括	“学習者主体の学び”への転換が進む中で、特に、スローラーナーに対してどのような見取りや指導が必要になるのか、明らかにする必要がある。
	R7事業の成果	“学習者主体の学び”をサポートする学習環境（学び方を選択できるリストの活用、掲示物でのヒントの提示、教師に質問可能な場所の設置等）を工夫した事例や、子供の疑問をICTで共有し学級全体で解決する活動を通して、子供同士で教え合う姿勢を引き出した事例が見られた。

【R7事業の成果に対する 委員からの意見】

- デジタル教科書は、スローラーナーだけでなく、多様な学習者に対しても有効であると考える。例えば、授業内の課題を簡単に達成できる学習者に対しても、デジタル教科書があるからこそできる手立てがあると考えられ、それらを発信していくことも重要である。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

4. 実証研究結果の総括
4.2. 今後の方針（2/2）

■ （前頁の続き）

3	R6事業の総括	県研修でも、“個別最適な学び”に比べ、“協働的な学び”における活用場面がイメージしづらいという声は多く、更なる事例の創出が必要。特に、中学校における発展的な事例が、実証成果としてはまだ少なく、ニーズが高い。
	R7事業の成果	特に中学校の理科や社会などの資料が多い教科において、デジタル教科書の複数の資料を切り貼りして考えを整理し、着目すべき箇所を拡大したりシミュレーション機能を活用したりしながら、分かりやすく自分の考えを説明する“協働的な学び”の事例が見られた。
	今後の方針②	単に子供たちに“協働的な学び”を委ねると、意図した通りの活動（他者参照が不十分など）が実現しないことがある。そのため、“協働的な学び”においてどのような見取りや指導が必要か明らかにする必要がある。その際、デジタル教科書の活用経験や習熟度も重要な要因となるため、年間を通じて学び方がどのように変化したかにも着目する必要がある。
4	R6事業の総括	デジタル教科書等の授業中での活用だけでなく、家庭学習における活用方法についても、様々な教科・学年に拡大し、更なる事例の創出が必要。
	R7事業の課題	今年度の実証校では、授業者の家庭学習での活用に対する関心は見られたが、子供たちの活動の様子を見取りやすい授業中での活用に主眼が置かれ、家庭学習での活用事例の創出には至らなかった。
	今後の方針③	家庭学習は、授業中よりも更に子供たちの主体性が求められるため、デジタル教科書等を活用した“学習者主体の学び”に習熟した実証校を選定し、家庭学習と授業を往還し子供たちが主体的に学びを進められるような事例の創出を目指す。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

アビーム、ABeam及びそのロゴは、アビームコンサルティング株式会社の日本その他の国における登録商標です。
本文に記載されている会社名及び製品名は各社の商号、商標又は登録商標です。　　©2026 ABeam Consulting Ltd.

ABeam Consulting®

Build Beyond As One.

令和７年度
学習者用デジタル教科書の効果・影響等に関する実証研究事業

成果報告書

（都道府県教育委員会における研修に関する調査研究）

2026年３月31日

ABeam Consulting®

Build Beyond As One.

目次

1. 事業概要 **p.2**

1.1. 本事業の背景・目的 3
1.2. 本事業の全体像 5
1.3. 有識者会議の開催 6

2. 実証研究の方法 **p.7**

2.1. 研修の改善プロセスの全体像 8
2.2. 研修の企画・立案 9
2.3. 研修の評価 11

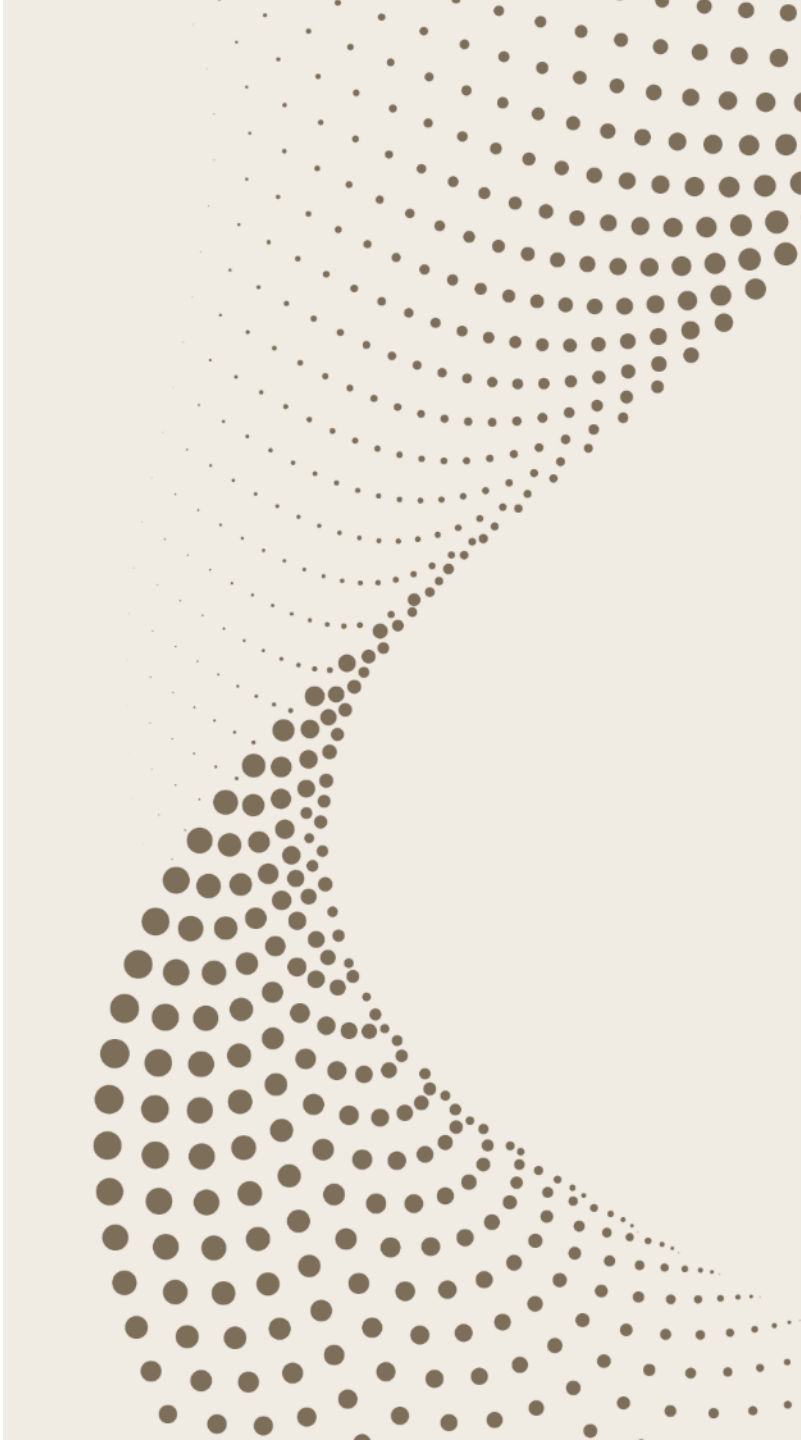
3. 各実証県における研修改善の取組 **p.14**

3.1. 埼玉県教育局 14
3.2. 福井県教育庁 35
3.3. 奈良県教育委員会 53
3.4. 熊本県教育庁 71
3.5. 鹿児島県教育庁 89

4. 実証研究結果の総括 **p.109**

©2026 ABeam Consulting Ltd.

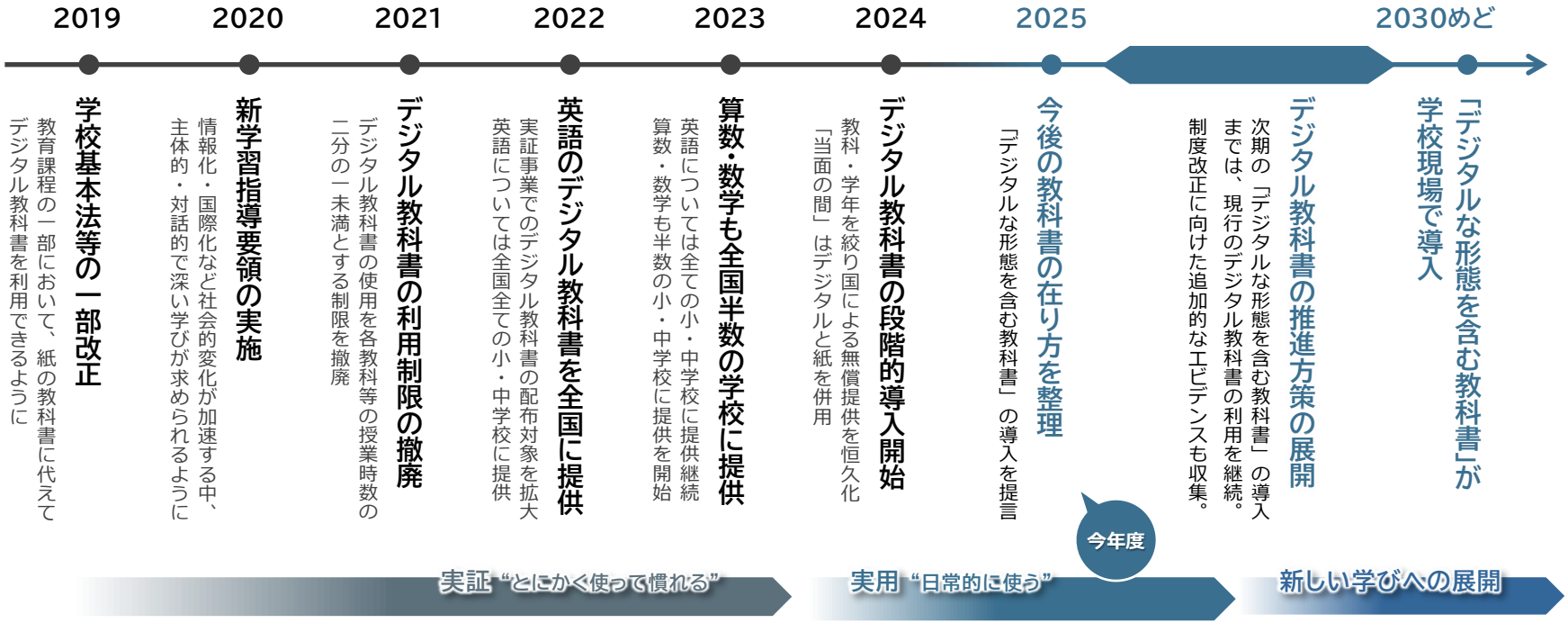
1. 事業概要



1. 事業概要
1.1. 本事業の背景・目的（1/2）

- 学習者用デジタル教科書（以下「デジタル教科書」という。）は、2019年の法改正により、紙の教科書に代えて使用できる教材として位置付けられ、英語を皮切りにデジタル教科書の段階的な導入が進められてきました。また、中央教育審議会の下に設置された「デジタル教科書推進WG」の審議まとめ（2025年）においては、今後は、**教科書の形態として紙だけでなくデジタルも認め、検定・採択・義務教育段階の無償給与などの対象とする**ことが適当とされました。
- これを受けて、所要の制度改正を前提に、**デジタルも取り入れて作成される新たな教科書**（デジタルな形態を含む教科書）**が導入され、現行のデジタル教科書の活用の成果を踏まえつつ、学校現場で広く活用されることになります。**本事業では、これら議論のエビデンスとなる情報を収集・整理することを目的に実施しました。

デジタル教科書の導入に係るこれまでの経緯と今後の動き

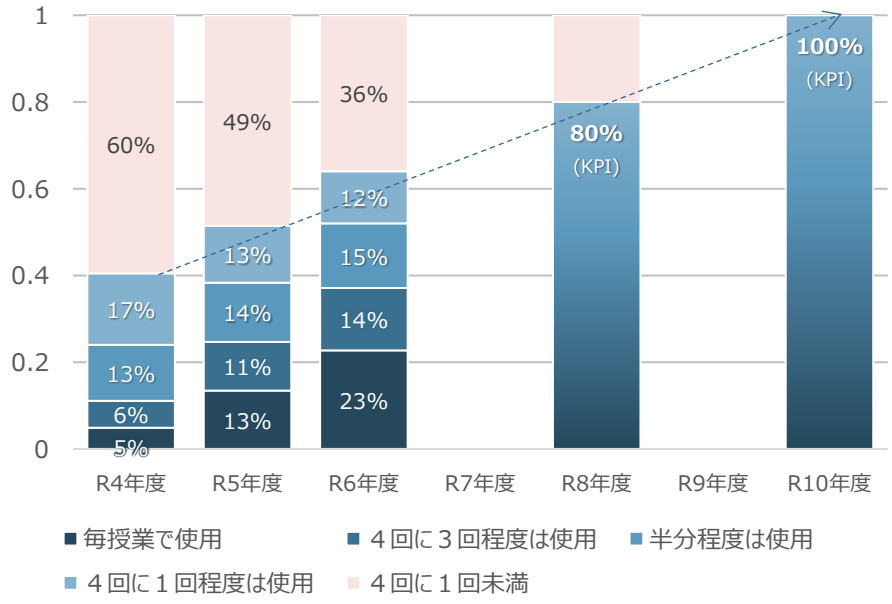


©2026 ABeam Consulting Ltd.

1. 事業概要
1.1. 本事業の背景・目的（2/2）

- **デジタル教科書をはじめとするICT等は、**その活用を通じ、**個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させ、主体的・対話的で深い学びの視点から授業改善の効果を高めることが期待されています。**実際に、「教師の授業でのデジタル教科書の使用頻度」は年々増加傾向にあり、教育現場においても、活用による効果が理解され、浸透しつつあるものと考えられます。（下図参照）
- 一方、過年度の実証事業からは、活用の程度は、自治体・学校・教員によっても相当の差異があり、また、活用事例も英語や算数・数学に偏っている現状が明らかとなっています。**教員研修等の取組を通じて、デジタル教科書が効果を発揮する場面やその活用方法を周知し、**より多くの教員がデジタル教科書を授業に取り入れるようにするとともに、**教科や発達段階別の好事例を更に創出し、デジタル教科書を活用する教員の裾野を広げる**ことが重要です。

教師の授業でのデジタル教科書の使用頻度の推移 ※1



デジタル教科書の活用に関する現状 ※1

デジタル教科書は、一人一人の良さを伸ばし困難の克服を助ける大きな可能性を秘めているが、**効果的な活用は緒に就いたばかり**

デジタル教科書等の導入・活用状況は、**自治体、学校によっても大きく差**があり、**教員の活用スキルも様々**

英語、算数・数学については比較的活用が進んでいるが、**その他の教科についてはまだ事例が少ない**

英語についても活用は４技能の一部に偏っていたり、個別最適な学習の用途が中心になるなど、**活用のバリエーションにはまだ課題がある**

発達段階別に見ると、小学校に比べ、**中学校での活用はまだ途上**

※1 令和6年度「学習者用デジタル教科書の効果・影響等の把握・分析等に関する実証研究事業」の成果物から弊社作成・分析

©2026 ABeam Consulting Ltd.

1. 事業概要
1.2. 本事業の全体像

- 前述の背景・目的から、本事業では次の3つの調査研究を実施しました。
- ①**「研修に関する調査研究」**では、全国5の都道府県教育委員会と連携し、有識者（次頁参照）の指導助言の下で、デジタル教科書の活用促進に関する研修の改善に取り組みました。②**「授業改善に関する調査研究」**では、全国から小学校を２校、中学校を３校選定し、同校と連携してデジタル教科書等を活用した授業改善に取り組みました。さらに、全国の小・中学校の教員及び児童生徒に対する③**「大規模アンケート調査等」**の実施を通じて、デジタル教科書が学習に及ぼす効果・影響を定量的・定性的に把握・分析しました。このうち、**本書は、①「研修に関する調査研究」の結果をまとめたもの**です。

本事業を構成する３つの調査研究

	都道府県教育委員会における **研修に関する調査研究**	市区町村教委及び実証研究校における **授業改善に関する調査研究**	デジタル教科書の効果・影響の把握に資する **大規模アンケート調査等**
対象	• **全国５の都道府県教育委員会** （埼玉県、福井県、奈良県、熊本県、鹿児島県）	• 左記の参加県教育委員会管下の小・中学校（合計５校）	• 全国の小・中学校に所属する教員及び児童生徒（標本抽出）
実施内容	• 都道府県教育委員会が計画するデジタル教科書の活用に係る**研修**（年内２回）を対象に、有識者の指導助言の下、その改善と実践に取り組んだ。 • 研修の成果を定性的・定量的に評価し、どのように研修を実施すれば、効果的なデジタル教科書の活用促進に繋がるのかを検証した。	• 各校において、主要５教科（外国語、算数、国語、理科、社会）の授業（年内２回）を対象に、有識者の指導助言の下、その改善と実践に取り組んだ。 • また、一部では各校の取組を校内・地域内に展開。市町村教育委員会等とも連携し、デジタル教科書の活用促進を図った。	• 全国の小・中学校のうち、外国語、算数・数学のほか複数教科のデジタル教科書を使用している学校を対象に、教員及び児童生徒を抽出し、アンケート調査を実施した。 • 過年度との比較から経年変化を分析するほか、新規の調査観点を追加し分析を行った。 • 特別な配慮を必要とする児童生徒への影響については追加ヒアリング調査も実施。
成果物	• 研修計画、研修に使用した資料等一式 • 研修効果の検証結果　など	• 実践事例集 • 実践事例動画　など	• アンケート調査結果 • 追加ヒアリング調査結果　など
	本書の対象		

©2026 ABeam Consulting Ltd.

1. 事業概要
1.3. 有識者会議の開催

■ 本事業では、各調査研究の実施に当たっての指導・助言を得るため、デジタル教科書等の活用や各教科の指導に精通する有識者にご協力いただきました。また、各有識者には、「研修に関する調査研究」及び「授業改善に関する調査研究」について討議するWG、「大規模アンケート調査等」について討議するWGに参画いただき、本事業の実施内容及び成果に助言を頂きました。

有識者（WG委員）一覧

氏名	所属・職名	研修	授業改善	アンケート	担当県・教科
主査 中川 一史	放送大学 教授	○	○	○	―
副査※1 中橋 雄	日本大学 教授	○	○	○	―
齋藤 嘉則	東京学芸大学 教授	○	○	―	―※3
太田 洋	東京家政大学 教授	○※2	○※2	―	鹿児島県 （外国語）
岡部 恭幸	神戸大学 教授	○※2	○※2	―	福井県 （算数）
佐藤 幸江	放送大学 客員教授	○※2	○※2	―	奈良県 （国語）
岩﨑 有朋	札幌国際大学 教授	○※2	○※2	―	熊本県 （理科）
副査※1 小林 祐紀	放送大学 准教授	○※2	○※2	―	埼玉県 （社会）
副査※1 稲垣 忠	東北学院大学 教授	―	―	○	―
齊藤 萌木	聖心女子大学 講師	―	―	○	―

※1 研修に関する調査研究の副査を小林委員、授業改善に関する調査研究の副査を中橋委員、アンケートWGの副査を稲垣委員にそれぞれ依頼した。
※2 各委員には本事業に参加した全国５の県教育委員会が行う研修の内容等に直接の指導・助言を依頼し、各県の実証研究校における授業改善に関する指導・助言も依頼した。
※3 埼玉県研修における外国語科の視点からの指導・助言を担当いただいた。

開催要領

第1回 研修・授業改善WG
日時： 2025年７月18日
議事： 今年度の実証方針に関する意見交換

第2回 研修・授業改善WG
日時： 2025年11月12日
議事： 実証研究状況の報告及び以降の取組に向けた意見交換

第3回 研修・授業改善WG
日時： 2026年３月５日
議事： 実証研究結果の報告
研修・授業改善における成果と課題及び今後の取組方針に関する意見交換

第1回 アンケート調査WG
日時： 2025年８月（書面開催）
議事： 調査方針及び設問設計に対する意見聴取
標本設計に対する意見聴取

第2回 アンケート調査WG
日時： 2026年２月27日
議事： アンケート集計・分析結果の報告
分析結果に対する意見聴取

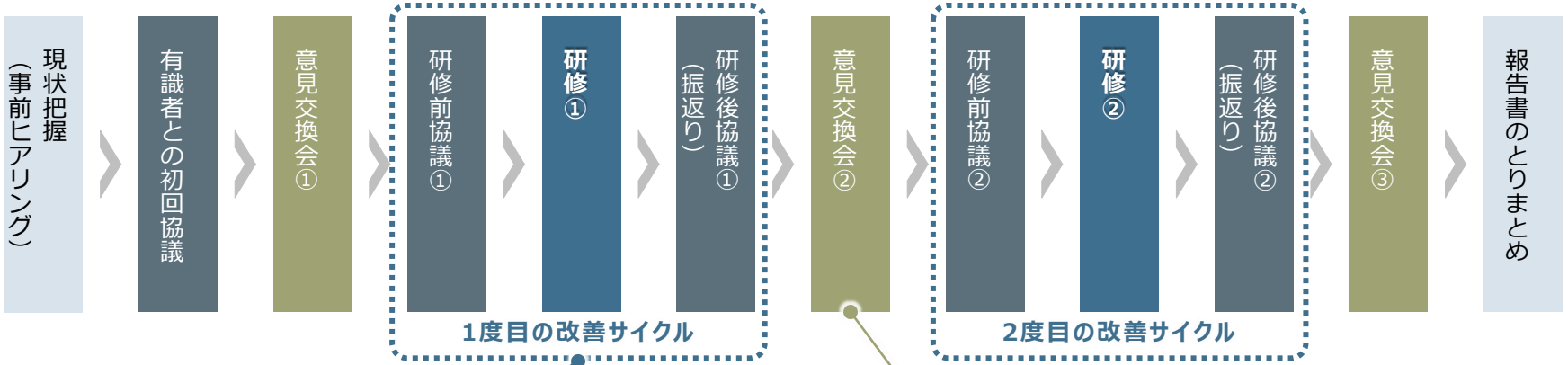
©2026 ABeam Consulting Ltd.

2. 実証研究の方法

2. 実証研究の方法
2.1. 研修の改善プロセスの全体像

- 本事業では、全国から5つの県教育委員会を選定し、当該実証県が実施する2回の研修をターゲットに調査研究を実施しました。
- 研修の実施に当たっては、各実証県が、有識者の指導助言のもと、2度の改善サイクルを繰り返し、研修の成果や課題を抽出するとともに以降の改善に向けた取組を検討しました。
- また、改善サイクルの前後には、実証県間の横の連携を目的とした意見交換会を実施し、各研修から得られた成果や課題を共有しながら、実証県全体で、効果的に活用促進を図るための研修モデルの創出に取り組みました。

実証研究の全体像



2度のサイクルを通じた研修改善

- 有識者の指導助言のもと、デジタル教科書の活用促進に向けた研修を検討。
- 2度の改善サイクルを繰り返し、1回目の研修から得られた成果や課題を2回目の研修計画の改善に繋げる。

実証県の横の連携を図る意見交換会

- 5つの実証県間で情報交換を行う場として年3回実施。
- 改善サイクルの前後で実施し、各研修から得られた成果や課題を共有の上、更なる研修改善に向けた方策について実証県全体で議論。

地域全体でのデジタル教科書の活用に向けた研修モデルの創出

©2026 ABeam Consulting Ltd.

2. 実証研究の方法
2.2. 研修の企画・立案（1/2）

- 各回の研修は、以下に示す流れのように、受講者の「現状の課題」と「目指す姿」を出発点とし、「研修の目的」を知識・スキル・意識の3類型※から設定の上、「研修の目標」（達成水準）を具体化し、それに紐づくように「研修の内容」を整理しました。
- このように体系立てて整理することで、各回の研修で目指す方向性や他の研修等の取組で補完すべき内容を明確にしました。

研修の企画・立案時の観点

1 現状の課題

多くの指導主事は、**デジタル教科書の活用の意義や授業イメージへの理解が不足**しており、具体的な指導助言ができていない。

研修実施

2 目指す姿

指導主事が、デジタル教科書を活用することの**意義を実感**した上で、効果的な活用事例を知り、**授業改善の手段としての有効性を理解**している。

実施する研修

3 研修の目的（何のために行われるか）

- ① 知識・理念等の理解
- ② スキル・技能等の習得
- ③ 意識・行動等の変容

4 研修の目標（何を達成するか）

- 例）デジタル教科書の活用の意義や効果的な活用方法を理解できる。
- 例）自身の授業でのデジタル教科書の活用計画を立てることができる。

5 研修の内容（何を行うか）

- レクチャー：**有識者の講義（デジタル教科書の意義の理解）**
- ワークショップ：**グループ協議（外国語の4技能ごとの活用の検討）**
- リフレクション：**活用プランの作成（今後の取組の明確化）**

「研修の目的」は、以下の３類型に分類し、**本研修が何のために行われるものかを明確化する。**

① **知識・理念等の理解**	… 個別・協働の学びの充実に向けたデジタル教科書の活用方法を理解し、**実際の授業における活用イメージ**をもつ	(講義等による事例紹介・解説など)
② **スキル・技能等の習得**	… 自身の授業における**デジタル教科書の効果的な活用方法を具体化し、実行できる能力**を習得する	(活用を含めた単元計画の作成など)
③ **意識・行動等の変容**	… デジタル教科書活用の**有効性・必要性を実感させ、積極的な活用を促進**する	(アクションプランに基づく実践の結果共有など)

※ 独立行政法人教職員支援機構「教職員研修の手引き2018」及びJames D＆Wendy Kayser Kirkpatrick「Kirkpatrick's Four Levels of Training Evaluation」を基に弊社にて整理

©2026 ABeam Consulting Ltd.

2. 実証研究の方法
2.2. 研修の企画・立案（2/2）

■ 研修計画は、共通のフォーマット※を用いて、以下に示すポイントに沿って作成しました。

研修計画サンプル

デジタル教科書等の活用に関する研修計画

基本情報

対象者・人数	対象者：小学校教諭、中学校外国語（英語）専科教諭　　参加人数：60人

現状の課題		目指す姿
現状	事前アンケートでは、約60%の教員が、デジタル教科書の使用頻度について「1/4未満」と回答。	現場の教員が、デジタル教科書の活用の意義や効果を理解する。また、外国語の授業の様々な場面において、デジタル教科書を活用することができる。
課題	多くの教員は、デジタル教科書の効果を実感していないため、具体的な活用に至っていない。	

研修の目的・目標

項番	研修の目的	研修の目標
①	知識・理念等の理解	デジタル教科書の効果的な活用方法を理解する。
②	スキル・技能等の習得	自身の授業におけるデジタル教科書の活用の計画を立てることができる。

研修の概要

研修の各活動	• 講義を通して、デジタル教科書の理念や活用方法に関する理解を深める。（①） • グループワークにより授業におけるデジタル教科書の活用方法を検討する。（①・②）
準備物	講義資料、演習用資料、プロジェクタ、端末、学習者用デジタル教科書（サンプル版）

研修の詳細

所用時間	研修スタイル	内容	対応する目的・目標
30分	レクチャー	**■有識者の講義（デジタル教科書の意義の理解）** ・デジタル教科書活用の意義・効果について	①
60分	ワークショップ	**■グループ協議（外国語の4技能ごとの活用の検討）** ・サンプル版デジタル教科書を用い、実際に触れながら、グループで検討	①・②
研修後	• 研修後の各受講者のプランに基づく実践事例を収集し、情報共有用のプラットフォームで受講者に共有。 • 同プラットフォームでデジタル教科書活用に関する質問を収集・回答。Q＆A形式で取りまとめ蓄積。		

作成のポイント

「現状の課題」と「目指す姿」の設定

- 現状（デジタル教科書の活用状況や研修の取組状況など）と課題（現状を生み出している真因など）に細分化し、本研修が受講者のどのような課題やニーズ（研修に何を求めているか）にアプローチするかを明確化。
- それらを踏まえ、研修を通じて目指す姿を設定。

研修の目的・目標の設定

- 「目指す姿」の達成に向け、研修の目的・目標を具体的に設定。
- 研修の目標は、受講者が「何をどの程度までできるようになるか」を可能な限り具体化し、研修を通しての達成水準を明らかにする。

目的・目標の達成に向け研修内容を整理

- 研修の目的・目標の達成に向け、研修の内容を整理。
- 各活動は、目的・目標と紐づけるとともに、以下の３つの研修スタイル※を組み合わせて設定する。

主な研修スタイル	代表的な活動
レクチャー（知識伝達型）	聴く・見る・考える
ワークショップ（問題解決型）	話し合う・体験する・創作する
リフレクション（省察型）	分かち合う・内省する・深め合う

研修前後の取組を記載

- 研修前後の取組を設定することで研修効果を更に高めることが可能となる。
- 本項目には、その内容を記載。

※ 独立行政法人教職員支援機構「教職員研修の手引き2018」を基に弊社にて整理

©2026 ABeam Consulting Ltd.

2. 実証研究の方法
2.3. 研修の評価（1/3） 評価の概要

- 研修の効果測定は「カークパトリックの４段階評価」を用いて実施し、p. 9の流れに沿って事前に整理した研修目的（知識・スキル・意識）の達成度合いと、研修以降の行動変容の度合いを評価しました。
- 具体的には、下図のLV1～3を測定対象とし、研修時の観察や受講後アンケートをもとに「LV1：受講者の反応（満足度）」と「LV2：受講者の学び（知識・スキル・意識）」を、一定期間経過後の追跡アンケートをもとに「LV3：受講者の行動（研修以降の行動変容）」を調査しました。

カークパトリックの4段階評価※（赤枠：本事業の測定対象）

LV	定義名称	評価の対象	評価の内容	評価結果の活用目的	主な評価方法（赤字：実施した方法）
1	受講者の反応	• 研修終了時点の満足度	• 研修に対して満足したか。 • 会場・資料は適当だったか。	• 研修内容の改善	• **研修時の受講者の観察** • **受講後アンケート（p.12）** • フォーカスグループへのインタビュー
2	受講者の学び	• 研修を通して形成された知識・スキル・意識	• 研修で扱った知識や理念等を理解したか。 • 具体的な活用に向けたスキル・技能を習得したか。 • 研修を通して意識の変化があったか。	• 研修による効果の測定（対受講者）	• **受講後アンケート（p.12）** • 研修時に作成した成果物の分析 • レポート提出（アクションプランの作成 等） • 筆記試験、模擬実践
3	受講者の行動	• 研修後以降の受講者の行動変容の度合い	• 研修で扱った内容を、受講者が職務において活用できたか。		• **一定期間経過後の受講者への追跡アンケート（p.13）** • **受講者が実施する授業の観察** • 上司等による直接観察・録画観察 • レポート提出（研修で作成したアクションプランの実施状況 等）
4	児童生徒への影響	• 学習者の学習成果	• 受講者は職場の業績に貢献したか。	• 研修による効果の測定（対児童生徒）	• 学習者へのテスト・アンケート

※ James D＆Wendy Kayser Kirkpatrick「Kirkpatrick’s Four Levels of Training Evaluation」を基に弊社にて整理

©2026 ABeam Consulting Ltd.

2. 実証研究の方法
2.3. 研修の評価（2/3） 研修直後のアンケート

- 各回の研修直後には、受講者にアンケートを実施し、研修の満足度や研修を通して形成した知識・スキル・意識を聴取しました。
- これらの結果を分析し、研修における改善点及び研修による効果を把握しました。

実際の調査で使用した主な設問項目

#	設問例	LV※	区分	回答法	設問意図
1	教職経験年数／指導主事職の経験年数	–	受講者の属性	選択式	基礎情報として、受講者の経験年数及びデジタル教科書の活用頻度を把握。
2	学習者用デジタル教科書の授業における活用頻度／学習者用デジタル教科書の活用に関する指導助言の機会の頻度			4件法	
3	本研修は全体としてどの程度満足できる内容であったか	LV1 受講者の反応	研修の満足度	4件法	研修の満足度を把握し、本研修がどの程度受講者に訴求したかを分析。
4	研修のどのような内容に満足したか（または満足しなかったか）			自由記述	研修に対する受けとめを自由記述にて聴取し、成果や改善点を定性的に把握。
5	研修内容をどの程度理解することができたか	LV2 受講者の学習	知識	4件法	内容の理解度を聴取し、本研修を通じて知識を形成することができたかを把握。
6	研修のどのような内容を理解したか／役に立つと感じたか			自由記述	理解した／有用に感じた内容を自由記述にて聴取し、どのような知識を習得したかを把握。
7	研修において理解できなかったことはあるか			自由記述	研修で理解できなかった内容を自由記述にて聴取し、以降の研修設計における改善点を把握。
8	今後の授業においてデジタル教科書をどのように活用するか／今後の学校訪問においてどのように指導助言を行うか		スキル	自由記述	研修以降の取組を自由記述にて聴取し、その内容からスキルの習得に繋がったかを把握。
9	研修の前後でデジタル教科書の活用に対する意欲は高まったか／デジタル教科書に関する指導助言について自信をもつことができたか		意識	4件法	研修を通してデジタル教科書活用に関する意識に変化があったかを把握。
10	研修に対する意見や改善点はあるか。また、学習者用デジタル教科書の活用に関し更に知りたいこと、実施してほしい取組はあるか。	–	–	自由記述	以降の研修設計の参考となる改善点等を把握。

※ ここでいう「LV」とは、p.11の「カークパトリックの4段階評価」における「LV」を指す。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

2. 実証研究の方法
2.3. 研修の評価（3/3） 一定期間経過後の追跡アンケート

- 研修から一定期間経過後（1か月後～）には、受講者に対して追跡アンケートを実施しました。
- このアンケートを通じて、研修以降にその内容をどのように活用しているかを聴取し、受講者の行動変容の様子を把握しました。

実際の調査で使用した主な設問項目

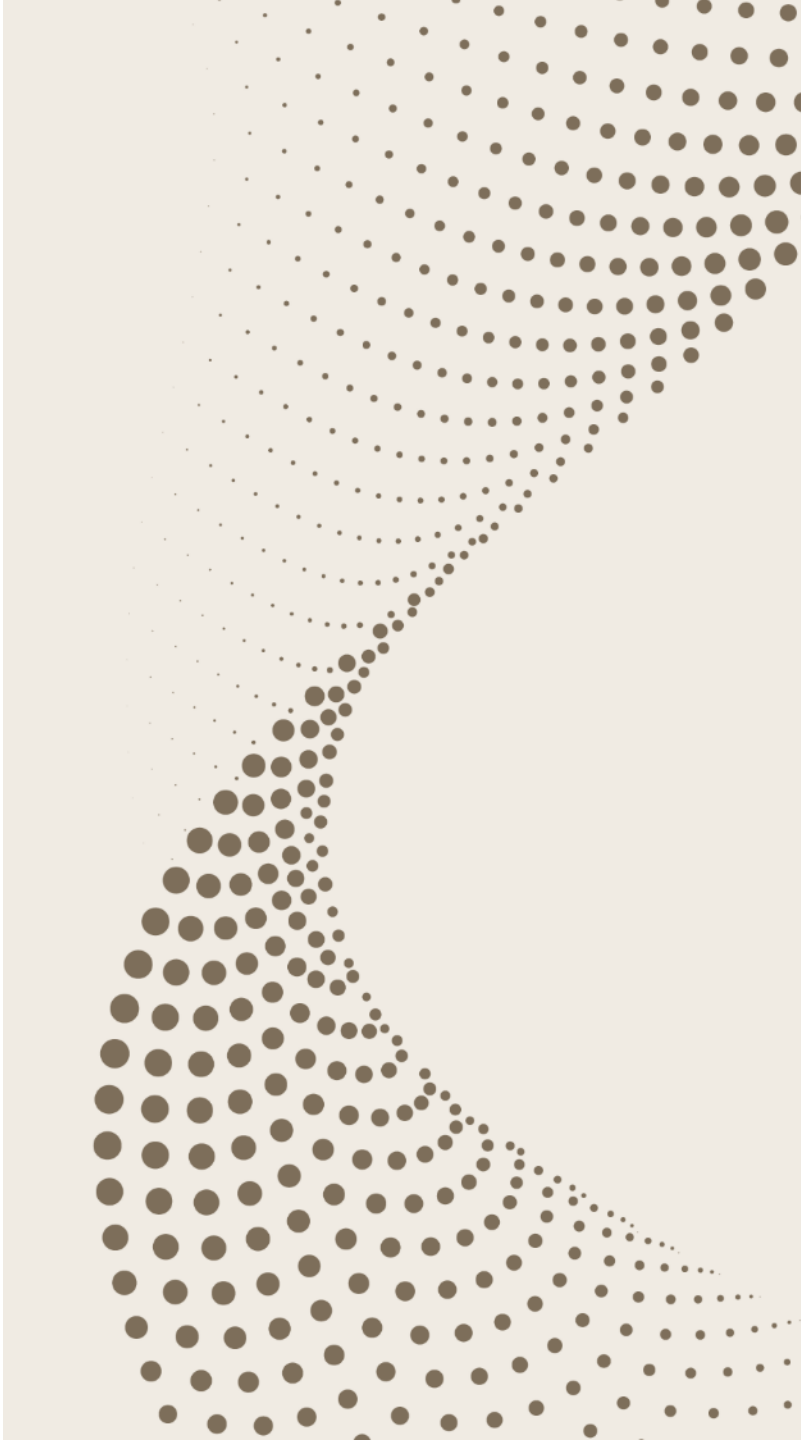
#	設問例	LV※	回答法	選択肢	設問意図
1	研修内容を実際の授業に活かすことができているか／研修内容を指導助言に活かすことができているか	LV3 受講者の行動	4件法	・活かしている(＃2~4へ) ・まあまあ活かしている(＃2~4へ) ・あまり活かせていない(＃5へ) ・ほとんど活かせてていない(＃5へ)	受講後の研修内容の活用状況を聴取し、研修がどの程度行動変容に繋がったかを把握。
2	学習者用デジタル教科書をどのように活用しているか／学習者用デジタル教科書に関してどのように指導助言しているか		自由記述	–	具体的な活用方法を聴取し、研修のどのような内容が行動変容に影響したかを把握。
3	学習者用デジタル教科書の活用に関して、どのような効果や課題を実感しているか		自由記述	–	実際の活用を通じて実感する効果や課題を自由記述にて聴取し、以降の研修等の改善点を把握。
4	学習者用デジタル教科書の活用に関して今後更に知りたい内容や深めたい内容があるか		自由記述	–	
5	デジタル教科書を活用していない理由は何か		自由記述	–	デジタル教科書の活用を妨げる阻害要因を聴取し、以降の研修等の改善点を把握。

※ ここでいう「LV」とは、p.11の「カークパトリックの4段階評価」における「LV」を指す。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組

3.1. 埼玉県教育局
3.2. 福井県教育庁
3.3. 奈良県教育委員会
3.4. 熊本県教育庁
3.5. 鹿児島県教育庁



3. 各実証県における研修改善の取組
3.1. 埼玉県教育局
3.1.1. 基本情報

■ 実証研究にご協力いただいた埼玉県教育局に関する基本情報、実証前の課題認識は以下のとおりです。

県担当部署	埼玉県教育局 市町村支援部 義務教育指導課／西部教育事務所		
県担当者	添野 圭介 指導主事　秋元 政康　指導主事 杉﨑 亮　指導主事　山井 葉里子 指導主事	担当有識者	放送大学　小林 祐紀 准教授 東京学芸大学　齋藤 嘉則 教授
県における過年度の取組	• 令和６年度「学習者用デジタル教科書の効果・影響等に関する実証研究事業」で、小中学校の外国語教諭と指導主事向けのデジタル教科書に関する研修を実施。 • 小学校英語専科指導教員研修会、小中学校等英語指導力養成講座等で、デジタル教科書の活用も取り上げた。 • 英語指導方法改善事業研究発表会の中で、デジタル教科書の活用に関する研究を実施。		

実証前の課題認識

学校・教員

➢ **一斉指導型の授業からの意識改革が進んでいない**

- 「デジタル教科書も活用しながら、個別最適な学び・協働的な学びを充実させていくと良い」と周知をしても、一斉指導型の授業が念頭にある教員には、取り入れ難い内容となっており、活用が進んでいないと考えられる。
- デジタル教科書の活用の前提となる「学習者主体の学びへの転換」といった教員の意識改革にも踏み込んでいく必要がある。

教育委員会・指導主事

➢ **デジタルの利点が実感されず効果的な指導助言ができない**

- デジタル教科書を「紙の教科書のPDF版」と認識している指導主事が多く、デジタルならではの利点を実感できていないため、現場に対して有効な指導助言ができていない。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.1. 埼玉県教育局
3.1.2. 年間計画

■ 埼玉県教育局における、令和７年度のデジタル教科書の活用に関する研修計画は以下のとおりです。このうち、本事業では三芳町と北本市の外国語教員向け研修を、研修改善に関する実証対象としました。

	対象	概要
令和６年度 三芳町外国語 教員向け研修	• 三芳町の 小学校・中学校教員14名 （外国語科担当）	• デジタル教科書活用の意義・必要性に関する共通理解と具体的な活用イメージの醸成を目的に、有識者の講話やワークショップを実施。 • ワークショップでは、デジタル教科書に実際に触れながら、外国語の4技能ごとに活用方法を個人・グループで検討。グループでの協議内容を踏まえ、各自で「デジタル教科書活用プラン」を作成。 ※詳細は令和６年度「学習者用デジタル教科書の効果・影響等に関する実証研究事業」報告書を参照。
横展開		
北本市外国語 教員向け研修会 （第１回研修） 実証対象：p.17	• 北本市の 小学校・中学校教員15名 （外国語科担当）	• デジタル教科書活用の意義・必要性に関する共通理解と具体的な活用イメージの醸成を目的に、有識者の講話や、教科書発行者による機能紹介、ワークショップを実施。 • ワークショップでは、デジタル教科書に実際に触れながら、外国語の4技能ごとに活用方法を個人・グループで検討。グループでの協議内容を踏まえ、各自で「デジタル教科書活用プラン」を作成。
発展		
三芳町外国語 教員向け研修会 （第２回研修） 実証対象：p.25	• 三芳町の 小学校・中学校教員16名 （外国語科担当）	• 各受講者が、令和６年度研修以降に実施したデジタル教科書を活用した授業実践結果を持ち寄り、グループで共有。 • 先進的な活用を行っている受講者の授業動画を視聴し、有識者による価値づけを実施。 • 研修以降の実践を想定して、受講者ごとに単元計画を作成した上で、グループで協議。協議内容を踏まえて有識者からの講評。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.1. 埼玉県教育局
3.1.3. 研修改善（第１回）

1回目
計画 実践 アンケート 振返り
2回目

■ １回目の実証対象とした研修の概要は以下のとおりです。

現状の課題

教員はデジタル教科書の必要性や具体的な活用方法・場面を理解しておらず、活用に至っていない。

研修実施

目指す姿

教員主体から児童生徒主体の学びへの「授業観の転換」のために、デジタル教科書が効果的であることを理解し、具体的な活用方法・場面をイメージできる。

研修の概要

研修のポイント

- ✓ 外国語科はデジタル教科書の導入が進んでおり、具体的な活用方法を検討し実践に移しやすいため、**小学校教諭・中学校外国語教諭を対象**とする。
- ✓ 受講者が、デジタル教科書の機能を把握し、活用方法を検討できるよう、**教科書発行者による機能紹介を行う**。
- ✓ 「授業観の転換」のためにデジタル教科書を活用できるよう、**グループワーク内容を踏まえた有識者による価値付けや講義**を行う。

対象者：埼玉県北本市内の小学校教諭・中学校外国語教諭　15名

実施方式：参集

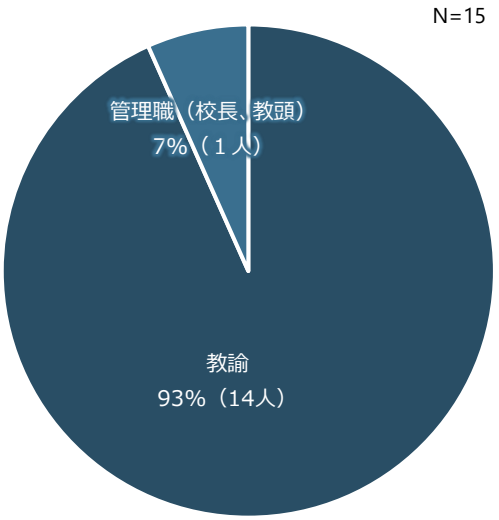
目的	目標	内容
① 知識・理念等の理解	• 「授業観の転換」の重要性を認識した上で、デジタル教科書の意義や効果を理解できる。	レクチャー：有識者の講義（子供主体の学びの必要性） レクチャー：教科書発行者による講義（機能紹介）
② スキル・技能等の習得	• 自身の授業におけるデジタル教科書の活用イメージをもつことができる。	ワークショップ：グループ協議（授業アイデアの共有と検討） レクチャー：有識者の講義（グループ協議の講評・全体総括）
③ 意識・行動等の変容	• 研修中・研修後に作成した「デジタル教科書活用プラン」を自身の授業実践に活かすことができる。	研修後の取組：受講者による授業実践（公開授業）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

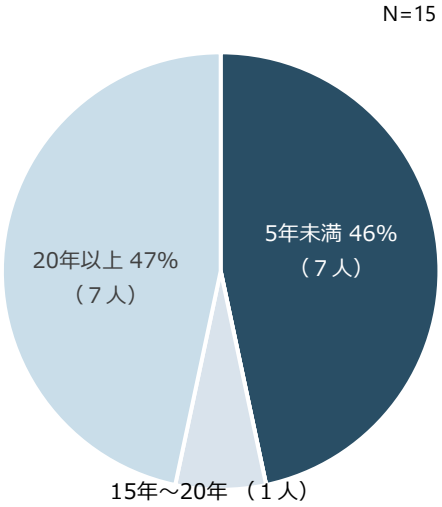
3. 各実証県における研修改善の取組
3.1. 埼玉県教育局
3.1.3. 研修改善（第１回）

- 本研修の受講者の傾向※は、以下のとおりです。
- 本研修受講者は、役職は「教諭」の者が約９割を占めています。また、教職経験年数は「５年未満」の若手教員と「20年以上」のベテラン教員がそれぞれ半数ずつ混在している状況です。
- デジタル教科書の活用頻度は、「ほとんど使用していない」と回答した者が約半分を占めている一方、「毎授業で使用している」「４回に３回は使用している」と回答した者も２割を占め、受講者間でデジタル教科書の活用に差がある状況がうかがえます。

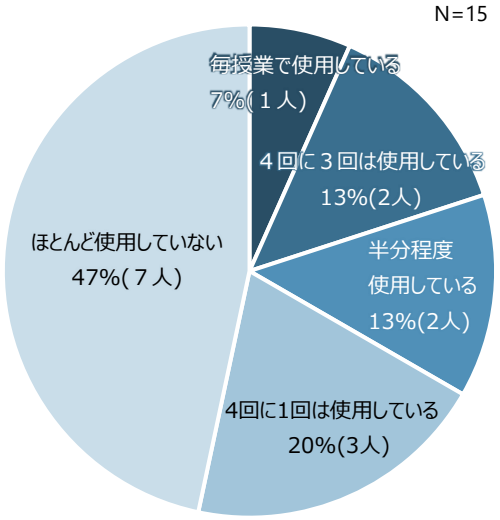
役職



教職経験年数



デジタル教科書の活用頻度



※ この傾向は受講後アンケート結果に基づくものであり、実際の受講者数と有効回答数が異なる。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.1. 埼玉県教育局
3.1.3. 研修改善（第１回）

■　研修の流れ及び実際の研修の様子は以下のとおりです。

研修の流れ

レクチャー　有識者の講義（子供主体の学びの必要性）　20分

有識者による講義動画を視聴した。

■主な講義内容

前半：授業観の転換の必要性

- 自分らしい学びの実現ができていると思っている子供や※1、自律学習への自信がある子供が少ない※2ことをデータに基づき説明。
- これからの学校教育では「個別最適な学び」の実現のために、「指導の個別化」と「学習の個性化」が求められることを説明。

後半：ICTを活用した授業づくりの紹介

- 「指導の個別化」「学習の個性化」の観点から、ICTを活用した授業の例や、デジタル教科書の機能を紹介。

レクチャー　教科書発行者による講義（機能紹介）　20分

小学校教諭・中学校外国語教諭で別の教室に分かれた後に、教科書発行者より、デジタル教科書の機能に関する講義が行われた。

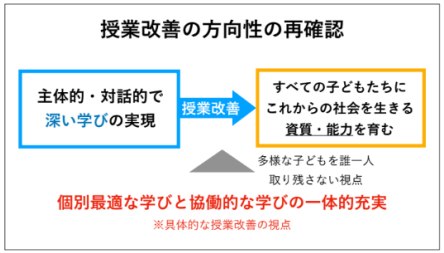
■主な講義内容

- 紙の教科書のQRコンテンツや指導者用デジタル教科書と比較し、学習者用デジタル教科書の特徴を説明。
- 会場の大型提示装置に学習者用デジタル教科書を投影しながら機能を説明。

次頁に続く

研修の様子（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

- 「個別最適な学び」などの学習指導要領の用語や、「新しい時代にふさわしい学び」「学びの自己調整」などの理論的な説明は、データを示しながら説得的に説明されたことで、受講者がメモする様子が多く見られた。
- 理論的な説明の後にデジタル教科書を活用した授業の具体例が示された箇所で、受講者は有識者の講義動画を注視しており、理論と具体例を紐づけて納得している様子だった。



▲これからの時代に求められている授業づくりの方向性を提示

▲学習を徐々に児童生徒に委ねていくことの重要性を説明
講義全体の中でも、特に教員の共感を得られていた

- 受講者を校種別に分け少人数で講義を行ったため、**受講者が気軽に教科書発行者に質問できる雰囲気**ができたり、校種ごとに異なる実態に即した内容を知ることができた。
- 講義の中で受講者は、説明されたデジタル教科書の機能やコンテンツを試していた。**活用経験のある受講者が近くの受講者に機能を教えている様子も見られた。**また、操作する中で「家庭学習でも使えそう」「子供同士で問題を出し合える」など**活用アイデアが出てきていた。**
- 授業内の端末利用時の課題など、**デジタル教科書の機能から離れた話題で話が盛り上がる**様子も見られた。

▲デジタル教科書に関する説明を受けながら、実際に操作し、受講者同士で話す様子

※1　https://www.digital.go.jp/assets/contents/node/information/field_ref_resources/511df327-5ba3-456e-a5cd-2ebeddd8c960/29c4e154/20250613_edu-dx-full.pdf
※2　https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/pdf/2022/01_point_2.pdf

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.1. 埼玉県教育局
3.1.3. 研修改善（第１回）

■ （前頁の続き）

研修の流れ

ワークショップ　グループ協議（授業アイデアの共有と検討）　40分

教科書発行者からの講義を踏まえて、グループでデジタル教科書を用いた授業アイデアを出し合った。

■グループ協議の実施方法

- 校種別に４～５人のグループを編成。
- グループで、外国語の４技能（聞く・読む・話す・書く）に沿って、デジタル教科書の効果的な活用アイデアを出し合った。
- 個人でアイデアを付箋に書き出した上でグループで模造紙にまとめ、発表を行った。

レクチャー　有識者の講義　15分

有識者より、英語の授業づくりにおいて必要な教科固有の観点の説明がなされた。

■主な講義内容

- 言語習得のためには、インプットが重要であることを説明。
- 授業には、教員が正しい表現を教え、児童生徒が練習する流れだけではなく、具体的な状況を想定し、その際必要となる英語の表現を考えるという流れがあることを紹介。後者の流れの場合、デジタル教科書をインプットに活用しやすく、学習効果も大きいことを具体的な授業場面も挙げながら説明。

研修の様子（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

- 研修の最初に行った有識者の講義資料を参照し、講義での**キーワード「子供に委ねる」を用いて、議論**がなされていた。講義により、受講者の**目指す授業の方向性が揃っていた**ため、議論が円滑になったと考えられる。
- デジタル教科書の具体的な授業での活用方法以上に、**知らない機能を見つけることに注目が集まりがち**だった。
- **少人数でアイデアを付箋に書き出していくグループワークであったため**、ある受講者が１つアイデアを出すと、別の受講者が関連した**アイデアを次々に出していた。**
- **ワーク中も教科書発行者に質問や意見交換をしやすい環境だったため、**受講者は浮かんだアイデアをデジタル教科書で実現できるかをすぐに確かめられ、**積極的なアウトプットに繋がっていた。**

▲デジタル教科書を操作しながら、活用方法を議論する様子

聞くこと	読むこと
本文のマスク機能を活用し、ディクテーションに取り組む。	単語を練習できるアプリの機能を家庭学習で活用する。
話すこと	**書くこと**
スピーチの動画を視聴し、子供がスピーチをする際の参考にする。	スピーチの原稿を書くときに使えそうな教科書の文にマーカーをつける。

◀実際に受講者が付箋に書き出したアイデアの例

- 具体的な授業場面も挙げて説明されたため、受講者の理解度を高めていた。
- 受講者の議論の中で多く挙がっていた「イヤホンが無いので活用できていない」という声を踏まえて、「言語習得のインプットにイヤホンは必須ではない」という話を投げかけ、受講者の関心を惹きつけていた。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.1. 埼玉県教育局
3.1.3. 研修改善（第１回）

■ 研修から約３か月後、受講者の一部が授業実践を行いました。
本実証研究では、そのうち中学校教諭による外国語の授業の様子を、研修の成果が現れているかという観点で観察しました。

授業の流れ

1 スモールトークと本時の目標の確認

① クリスマスの予定に関して生徒同士で英語で会話。

② 前時で内容理解を行った本文に関して、単元末の発表で話すことができるように、正しい発音で話すことを練習する方針を全体で確認。

2 デジタル教科書を活用し、各自で音読練習

① 一斉で音読を行いイントネーション等を確認した後に、生徒が各自でデジタル教科書のスピード調整やカラオケ機能を用いて音読練習する。また、語の連結や強勢など、発音で気を付けることをマーカーや付箋機能等で書き込ませる。

② ペアで交互に本文を読む。その後、文字起こし機能を用いて、生徒が各自で発音の正確性を確認する。

③ 本時の取組に関して、振返りを記入する。

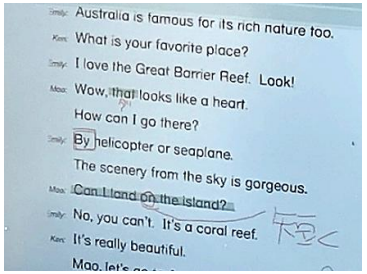
授業観察の結果（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

- 研修の成果・課題を踏まえて、事前に関係者間で協議し設定した以下の２つの観点から授業観察を行った。

1. デジタル教科書の機能がどのように活用されているか。
読み上げのスピードを遅くした上で、発音が難しい箇所を何度も練習する生徒や、新出単語の発音から確認する生徒、繋げて発音する箇所をマーカーで強調する生徒等、各自でデジタル教科書の機能を工夫して活用しながら音読を行っていた。

2.「指導の個別化」「学習の個性化」がされているか。
上記のように、生徒が自分に合った方法を選択しながら学習を進めており、授業者も手が止まっている生徒を中心に声かけを行っていた。

- 以上のように、**デジタル教科書の基本的な機能を多用しながら、生徒主体で学びを進める様子**が見られ、研修内の講義で教科書発行者や有識者が取り上げた内容が活かされていた。


Australia is famous for its rich nature too.
What is your favorite place?
I love the Great Barrier Reef. Look!
Wow, that looks like a heart.
How can I go there?
By helicopter or seaplane.
The scenery from the sky is gorgeous.
Can I land on the island?
No, you can't. It's a coral reef.
It's really beautiful.

▲教科書本文に発音のポイントを書き込んでいる様子

- 授業後の研究協議においても、有識者や参観者から「デジタル教科書をまず使ってみる」段階の授業例として受け止められていた。

- さらなる改善点として、生徒による振返りの際に、「自分で選んだ学び方はどうだったか」「次回更に良く学ぶためには」等、学び方についても生徒同士で交流させることで、生徒が目的をもって学び方を選択できるようになり、「学習の個性化」が向上するという意見が挙げられた。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.1. 埼玉県教育局
3.1.3. 研修改善（第１回）

- 受講後アンケートでは、満足度・理解度・活用に対する意欲について自己評価を求めたところ、いずれの項目についても**９割以上の受講者から肯定的な回答が得られました。**
- また、各項目について自由記述での意見を求めたところ、**「これからの授業づくりの見通しを持てた」「『個別最適な学び』の実現におけるデジタル教科書の有用性を理解した」**といった意見が多く挙げられました。
- 今後の研修に対する意見・要望としては、**「個別最適な学び」の一層の充実につながる活用について学びたいとの**声が寄せられています。

受講後アンケートの結果（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

研修の満足度 100%が満足

満足度に関する自由記述（抜粋）

＜他校の先生から学ぶことができた＞
- グループワークでは、他校の先生のデジタル教科書の具体的な活用方法を知ったり、意見交換できたりして満足した。

＜デジタル教科書の機能を知ることができた＞
- デジタル教科書の知らなかった機能や、使用していなかった機能の活用方法が分かった。

＜今後の授業の見通しをもつことができた＞
- 今回新たに知った授業づくりの工夫を、２学期の授業ですぐに生かせると思った。

研修の理解度 93%が理解

理解度に関する自由記述（抜粋）

＜状況に応じた教材選択の重要性を理解＞
- 毎時間ではなく、効果的なタイミングでデジタル教科書を活用することが必要だと分かった。
- 生徒が関心や能力、課題に応じて、デジタル教科書を使用できると良い。

＜授業観の転換の意義を理解＞
- これからの時代に求められる授業のために「授業観の転換」の視点で、自分の授業を振り返り、今日学んだことを実践したい。
- 「個別最適な学び」の実現のために、デジタル教科書が有効であることが分かった。

活用に対する意欲 100%が現状より向上

今後の活用に関する自由記述（抜粋）

＜効率向上で学びの時間を最大化したい＞
- 単語テストや自己評価シートなど、デジタル教科書にある機能を用いて手間を削減したい。
- URLやスタンプを貼る機能、しおり機能を用いて、子供の手間を省きたい。

＜個別学習にして子供たちに学びを委ねたい＞
- まずは授業内で、英文を読んだり、音読練習をしたりする個別学習の時間を設け、習熟度に応じた学習ができるようにしたい。
- 生徒が自らの学びにあったやり方や機能を見つけて、学びを深められるよう、ある程度の範囲や課題を決めた上で、子供たちにデジタル教科書の使用を委ねたい。

■今後の研修に対する意見・要望
- デジタル教科書の機能に加え、具体的な活用方法をもっと知りたい。
- 別の校種の先生とも意見交換をしたかった。
- 「読む」「聞く」の練習へのデジタル教科書の活用ばかりではなく、「個別最適な学び」の一層の充実につながるデジタル教科書の利点にもっと焦点を当てると良かった。

※ 調査対象：研修受講者（北本市小学校教諭・中学校外国語教諭）　有効回答数：15　調査期間：研修実施後１週間（令和７年８月28日～９月４日）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.1. 埼玉県教育局
3.1.3. 研修改善（第１回）

- 追跡アンケートでは、研修以降の実践に関し、**75%の回答者が研修内容を活かしている**と回答しています。
- 実践の内容としては、**特に「個別最適な学び」における活用**が挙げられ、**その効果としては「学習が苦手な生徒でも安心して自分のペースで取り組める」**ことが挙げられております。
- また、研修内容を実践に活かせていない者はいずれも、**「授業の検討や指導の時間が取れない」**と回答しており、**多忙な教員でも授業に取り入れやすい事例を分かりやすく伝える取組が必要**と考えられます。

追跡アンケートの結果（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

実践での研修内容の活用

デジタル教科書等の活用方法（抜粋）

＜個別最適な学びで活用＞

- 主に教科書本文の内容確認、音読練習、リスニングの個別学習に活用している。また、日本語が母語でない生徒に、読み上げ機能の利用を薦めている。
- 単語アプリを毎時間使用し、生徒が自分のペースで繰り返し単語をチェックすることができる。
- 班活動での発表や個人で英作文を記入するときに、生徒がタブレットを活用している。

デジタル教科書等活用による効果

＜苦手な生徒でも安心して取り組める＞

- 発音やイントネーションのチェックなどを生徒が個々のペースで行えるので、英語に苦手意識を持つ生徒も安心して学習に取り組めている。

デジタル教科書等活用に関する課題

＜翻訳機能等の使い分けが難しい＞

- 翻訳機能や生成AIなどの普及により、どこまで生徒自身の力で英作文しているのか、見取ることが難しい

研修内容を活かせていない理由（抜粋）

＜検討・指導の時間が取れないため＞

- 研修が夏休みという年度途中であり、１学期にすでに授業スタイルが出来上がっているところで大幅に変えるのが難しいため。
- デジタル教科書を使って、その日の振返りや復習を行いたいという気持ちはあるが、その時間がとれないため。
- デジタル教科書の機能を紹介する時間を、授業の中で確保することができない。

■今後の研修に対する意見・要望

- デジタル教科書のより詳細な機能（子供たちの取組状況の記録は可能か等）や活用事例について知りたい。
- デジタル教科書の最初の設定方法や活用例を各校に周知してほしい。

※ 調査対象：研修受講者（小学校・中学校教員）　有効回答数：14　調査期間：研修の４か月後（令和７年12月22日～令和８年１月９日）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.1. 埼玉県教育局
3.1.3. 研修改善（第１回）

■ 研修における受講者の様子や受講後アンケートの結果から、有識者を交えた振返りを行い、「研修の成果につながった点」と「課題」、それらを踏まえた「今後の研修に向けた取組」を整理しました。

	成果と課題	今後の研修に向けた取組
研修の成果に繋がった点	**教科書発行者から具体的な機能とそのねらいを学び、意見交換をしたこと** • 教科書発行者からは「デジタル教科書とは何か」という前提から講義がなされ、全体像を掴んだ上で、デジタル教科書の機能を学んだり、活用の議論をしたりできた。 • 教科書発行者１名に対し少人数の教員で実際にデジタル教科書を操作したため、デジタル教科書に関する疑問が解消しやすい環境であった。 • 講義を踏まえて教員や発行者を交えてデジタル教科書の活用アイデアを出し合うことで、個人では出てこないような応用的な活用方法を見つけることができた。	今後の研修においても、 教科書発行者が協議に参加するなど、 機能・操作面に関する疑問がすぐに解消される 環境を準備する。
	理論と具体的な活用方法の両軸を押さえる研修構成だったこと • 研修の最初と最後に講義が行われ、最初の講義では、これからの授業づくりの方向性が理論的に示され、それを踏まえてグループ協議がなされた。最後の講義では、総括としてグループ協議の価値付けと、英語科の教科の特性に関する理論的な解説がなされた。 • 目指す授業の方向性とその具体的な方法を交互に考えられる研修の構成であったため、はじめてデジタル教科書を操作する受講者も、研修後には活用の見通しをもつことができた。	今後の研修においても、 これからの授業づくりの方向性や、 研修で取り上げる教科の特性に関する理論的な インプットを取り入れる。
課題	**機能に注目が集まり、活用目的に関する議論が欠ける場面もあったこと** • 本研修の序盤は、デジタル教科書の機能のインプットが主なテーマとなっており、そこからの切替が難しく、機能を授業や単元の中で、どのような児童生徒の姿を目指してどのように活用するかまで議論が及ばないケースも見られた。	デジタル教科書を活用した授業の検討には、機能等を知るだけでなく、授業づくりや教科の学びに関する理解が必要であることを、メッセージとして訴求する。

研修担当者の声（本研修の振返り）

受講者にはデジタル教科書の活用をしていない者もおり、機能を知ることに時間を要してしまい、活用方法にまで話が進まない様子でした。そのため、急遽協議の時間を延長したことで、授業の中でどう使うかという建設的な議論に進むことができました。研修後のフォローとして、「個別最適な学び」と「協働的な学びの一体的な充実」の実現に向けたデジタル教科書の活用につながるよう伴走支援していきたいです。（埼玉県 秋元 指導主事）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.1. 埼玉県教育局
3.1.4. 研修改善（第２回）

■　２回目の実証対象とした研修の概要は以下のとおりです。

現状の課題

デジタル教科書で子供が主体的に学ぶ場面も増えているが、**未だ一斉指導の思考も根強い**。また、**単元全体を見据えた授業づくり・活用の視点が不足**している。

研修実施

目指す姿

単元全体を見据えて各授業のめあてを設定でき、**その達成に向けた手立ての一つとしてデジタル教科書の活用**を組み込むことができる。

研修の概要

研修のポイント

- ✓ 受講者が、段階的にデジタル教科書の活用への理解を深められるよう、**本研修を昨年度からの継続研修と位置付け、同じ対象に研修を実施**する。
- ✓ 各受講者の多様な活用を参考に単元検討がなされるよう、**事前課題として、各受講者はデジタル教科書を用いた実践結果を整理して持ち寄る。**
- ✓ 受講者間で共通する現状・課題を基に単元検討が進められるよう、**学校種別のグループに分ける。**

研修の対象者：三芳町内小中学校外国語教諭　16名

実施方式：参集

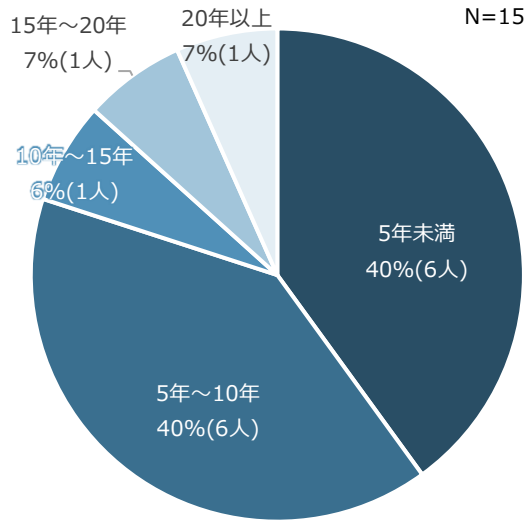
目的	目標	内容
① 知識・理念等の理解	• 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に繋げるためのデジタル教科書の活用方法を理解できる。	研修前の取組：各自の実践結果の整理 ワークショップ：グループ協議（実践結果の共有） レクチャー：代表教員の発表（活用ポイントの理解）
② スキル・技能等の習得	• 単元ゴールや各授業のめあてに向けて、子供自身がデジタル教科書を含めた学び方を選択できるような授業の計画を立てることができる。	ワークショップ：グループ協議（単元計画の作成） レクチャー：有識者の講義（研修全体の総括）
③ 意識・行動等の変容	• 作成した計画を基に、子供自身が学び方を選択できるような授業を実際に行うことができる。	研修後の取組：受講者による授業実践（公開授業）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

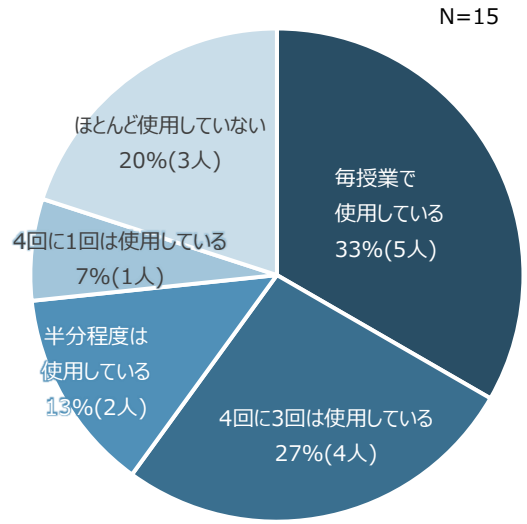
3. 各実証県における研修改善の取組
3.1. 埼玉県教育局
3.1.4. 研修改善（第２回）

- 本研修の受講者の傾向※は、以下のとおりです。
- 昨年度の同じ自治体・同じ受講者へのアンケート結果と比較すると、デジタル教科書を活用した授業の頻度は、「2回に1回以上」と回答した者が７割を超え、５割弱だった昨年度から増加しています。
- 受講者には未だ一斉指導の思考も根強いという課題意識のとおり、個別最適な学び（子供が自身にあった方法を選択して学習を進める授業）の実施状況は、「よく行っている」と回答した人数に変化が見られませんでした。

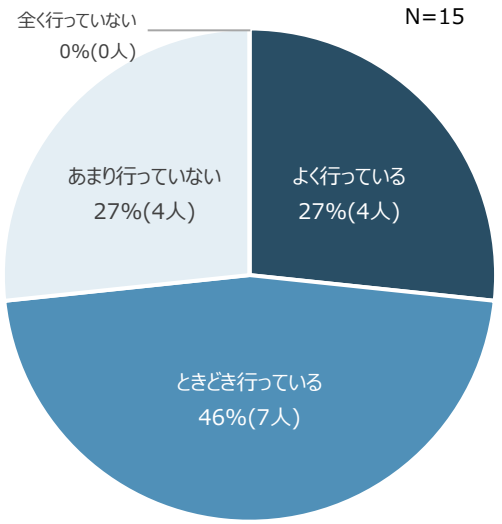
教職経験年数



デジタル教科書の活用頻度



個別最適な学びの実施状況



※ この傾向は受講後アンケート結果に基づくものであり、実際の受講者数と有効回答数が異なる。また、昨年度の受講後アンケートより回答者が増加していることに留意。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.1. 埼玉県教育局
3.1.4. 研修改善（第２回）

■　研修の流れ及び実際の研修の様子は以下のとおりです。

研修の流れ

研修前の取組　**各自の実践結果の整理**

振返り、昨年度からの継続研修として位置付けられ、昨年度研修以降の受講者の実践結果を整理した。

ワークショップ　**グループ協議（実践結果の共有）**　30分

グループごとに、各受講者の実践結果を基に意見交換を行った後、その内容を数グループが全体に発表した。

■グループの編成方法

学校種ごとに、3～5人でグループを編成。「研修前の取組」で把握したデジタル教科書を積極的に活用している受講者をグループに1名ずつ配置し、議論をリードする役割を担当させた。

レクチャー　**代表教員の発表（活用ポイントの理解）**　30分

先進的な活用を行う受講者１名に授業実践の様子を撮影してもらい、活用のポイントを字幕等で補足する動画を作成してもらった。研修では、同受講者の解説を交えながら実践動画を視聴した。
視聴後、有識者が実践動画のポイントについてコメントした。

■有識者の主なコメント内容

- 実践動画の授業が「個別最適な学び」を体現したものだと価値づけ。その上で「本文の内容理解に協働学習も取り入れる」など、外国語の観点で更なる改善点を提示。
- 受講者が授業実践例から自分自身の授業に繋げるための考え方を紹介（右図）。

次頁に続く

研修の様子（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

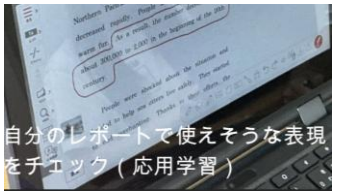
- 昨年度研修に使用したワークシートと同じフォーマット（次々頁参照）を使用し、各受講者が、研修以降の実践結果を、「外国語の4技能」ごとに整理して記載した。

- 「デジタル教科書への書き込みは、学習の履歴を残す意味で便利である。プリントだとすぐ無くしてしまう。」「文法の解説動画は振返りにも有効である。実際に、１回の説明で理解しきれなかった子供が、後から繰り返し動画を見ている。」等の発言があった。**実際の活用に基づいたリアルな意見交換となり、受講者間で互いに共感し合う姿が見られた。**

▲各自のこれまでの実践をデジタル教科書とあわせて紹介

- 協議の進め方は定めず、自由な意見交換の時間としていたため、議論が停滞しそうなグループには、研修運営者（指導主事）が適宜介入し、議論を活性化させた。

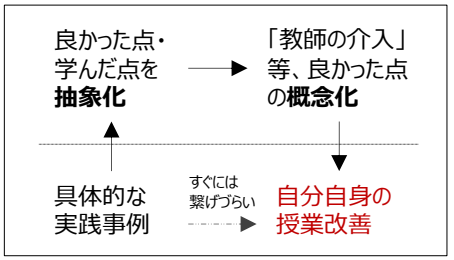
- 実践動画は授業の流れに沿って進み、子供たちがデジタル教科書を活用して学習する様子を拡大しながら字幕で示す動画になっており、受講者も注視していた。



▲授業動画の一部

- 有識者が、右下図を基に、「具体的な実践事例から、活用のポイントを抽象化・概念化しながら自分自身の授業改善に繋げると良い。」と説明。受講者のメモ・頷きが多く、**研修の前半で共有された事例を受講者自身の授業改善に繋げるために必要な考え方として強く訴求していた。**

有識者が提示した図のイメージ▶



©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.1. 埼玉県教育局
3.1.4. 研修改善（第２回）

■ （前頁の続き）

研修の流れ

ワークショップ　グループ協議（単元計画の作成）　60分

グループごとに、「デジタル教科書単元活用シート（右図）」を使い、デジタル教科書の活用を組み込んだ単元計画を検討した。

■単元計画の検討の流れ

① 単元及び目標は、研修運営者側であらかじめ指定。
② 指定された単元目標の達成に向け、各時間の内容を検討。
③ 各時間の中で、個別最適な学び／協働的な学びの視点から、どのようにデジタル教科書の活用ができるかを検討。
④ グループでの検討結果を、全体に向けて発表。

■指定した単元の目標

小学校：行きたい国とそこでしたいことを伝えよう
中学校：留学生に安心して日本でホームステイをしてもらうために大切なことを動画で伝えよう

レクチャー　有識者の講義（研修全体の総括）　25分

有識者が、本研修内容を振返りながら、今後の更なる活用促進に向けたポイントを説明した。

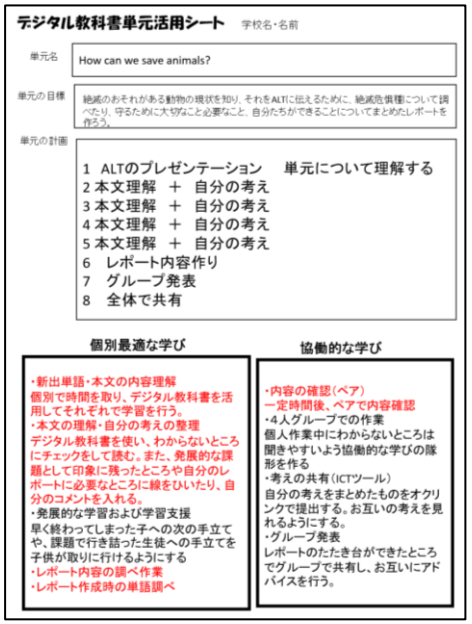
① 「語彙・文法の説明」→「練習」→「言語活動」という積み上げ式の学習と、単元や授業を貫くタスクを与え、学習者がそのタスクを通して実際に言語を使いながら習得していく学習の違いを紹介。後者の学習において、デジタル教科書は学習者自身が必要な言語を自分のペースで取り入れるためのツールとなることを解説。
② 子供たちが主体的に学習を進める上での教師の役割を、ステップに沿って説明（ステップの内容は第１回研修 p.19を参照）。

研修の様子（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

- **単元や単元目標をあらかじめ指定したこと**で、「単元目標の達成に向け、個別最適な学び／協働的な学びの視点から、どのようにデジタル教科書が活用できるか」という**本質的な議論に時間を割くことができた。**

- 「行きたい国が思いつかない児童のために、国がランダムで表示されるデジタルルーレットを使うのも一案」等、**実際の子供たちの反応を想像**しながら効果的な活用に関する検討がされていた。

- **研修の目標である「単元全体を見据えた授業づくり」の検討には及ばず、**授業の一部の活動で「児童生徒による外国語の練習」を行うためのツールとしてデジタル教科書を導入するという議論に留まっているように見られた。


デジタル教科書単元活用シート　学校名・名前

単元名：How can we save animals?

単元の目標：絶滅のおそれがある動物の現状を知り、それをALTに伝えるために、絶滅危惧種について調べたり、守るために大切なこと必要なこと、自分たちができることについてまとめたレポートを作ろう。

単元の計画：
1 ALTのプレゼンテーション　単元について理解する
2 本文理解 ＋ 自分の考え
3 本文理解 ＋ 自分の考え
4 本文理解 ＋ 自分の考え
5 本文理解 ＋ 自分の考え
6 レポート内容作り
7 グループ発表
8 全体で共有

個別最適な学び
・新出単語・本文の内容理解
個別で時間を取り、デジタル教科書を活用してそれぞれで学習を行う。
・本文の理解・自分の考えの整理
デジタル教科書を使い、わからないところにチェックをして読む。また、発展的な課題として印象に残ったところや自分のレポートに必要なところに線をひいたり、自分のコメントを入れる。
・発展的な学習および学習支援
早く終わってしまった子への次の手立てや、課題で行き詰った生徒への手立てを子供が取りに行けるようにする
・レポート内容の調べ作業
・レポート作成時の単語調べ

協働的な学び
・内容の確認（ペア）
一定時間後、ペアで内容確認
・4人グループでの作業
個人作業中にわからないところは聞きやすいよう協働的な学びの隊形を作る
・考えの共有（ICTツール）
自分の考えをまとめたものをオクリンクで提出する。お互いの考えを見れるようにする。
・グループ発表
レポートのたたき台ができたところでグループで共有し、お互いにアドバイスを行う。

▲実際に用いられた単元活用シート
赤字がデジタル教科書の活用場面

- 前段のワークショップで受講者の多くが「積み上げ式の学習」を前提に検討していたため、「タスクを通して言語を習得する学習」への転換を促す左記①の講義は、受講者の印象に残りやすく、メモが多く取られていた。

- 左記②のように、有識者がステップごとに求められる教師の役割が異なることについて説明した際に、受講者の頷き・メモが多かった。
「教師と子供が共に操作をなぞる」段階から「教師も介入しつつデジタル教科書の使用を子供に委ねる」段階へステップアップした事例も紹介しており、段階を踏んだアプローチの重要性について受講者に訴求したと考えられる。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.1. 埼玉県教育局
3.1.4. 研修改善（第２回）

■　事前課題として、実際に各受講者が整理した実践結果の例（中学校）を以下に示します。

実際に作成された実践結果の例（中学校）

聞くこと

【使う場面】

- 本文の内容理解および本文に関する問題に取り組む場面

【デジタル教科書を中心としたICT活用のポイント】

- 自分のペースで、聞きづらいもしくは難しい箇所を何度もリピート再生する。
- 教科書本文の導入動画を見て、単元のテーマと学習する文法等を理解する。

読むこと

【使う場面】

- キーセンテンスや言語材料をチェックし、内容を理解する場面

【デジタル教科書を中心としたICT活用のポイント】

- 本文に関する問題の答えの根拠となる箇所へのアンダーラインやチェックをする。

話すこと

【使う場面】

- 本文等の対話文を用いたロールプレイ練習をする場面

【デジタル教科書を中心としたICT活用のポイント】

- 会話文本文の音声を再生する時に、ロールプレイモードにして行うことで、生徒自身が役になりきりながら会話練習を行う。

書くこと

【使う場面】

- 自分の考え等を書く場面

【デジタル教科書を中心としたICT活用のポイント】

- 自分の考え等を書く際に参考になる表現に書き込み機能を用いて下線を引く。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.1. 埼玉県教育局
3.1.4. 研修改善（第２回）

■ 研修から約２か月後、受講者の一部が授業実践を行いました。
本実証研究では、そのうち中学校教諭による外国語の授業の様子を、研修の成果が現れているかという観点で観察しました。

授業の流れ

1 ペアでスモールトークを行い、話した内容を振返り

① 「あなたが影響を受けた人物」という話題に沿って、ペアで英語の会話を３回行う。途中で中間指導を入れて、使える表現の共有を図る。

② 生徒が自分の話した内容を英語でノートに記録し、使える表現や言いたかった表現、友達の話した内容等をまとめる。

2 ジグソー法を活用し、教科書本文の内容を理解

① 前時までの本文内容、単元及び本時の目標を全体で再確認する。

② 本文で読み取るべき４つの内容（ガンディーの活動内容や当時のインドの時代背景等）について、グループで各生徒が担当する内容を決定し、各自で教科書本文を読み取る。（ジグソー法）
生徒は読解の際にデジタル教科書を使用し、各自のペースで新出単語やキーセンテンス等を確認しながら読み進める。

③ 生徒は担当箇所の概要や重要だと思った箇所、本文に対して考えたことなどをグループで伝え合う。また、本文全体を貫く問いに対する自分の考えもグループ・全体で共有する。

④ 本時の取組に関して、振返りを記入する。

授業観察の結果（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

- 研修の成果・課題を踏まえて、事前に関係者間で協議し設定した以下の２つの観点から授業観察を行った。

1.「指導の個別化」「学習の個性化」がされているか。

✓ 左記1-②や2-②の場面を中心に、生徒が自分のペースで学習を進めていた。

✓ 特に2-②のデジタル教科書を活用した教科書本文の読解を行う場面では、本文にマーカーやスラッシュを書き込んで意味を取りながら読み進める生徒や、音読の際にも使用するカラオケ機能（読み上げられている本文の箇所が赤く表示される機能）を活用して読んでいる生徒が見られた。

✓ 授業者による指導も、生徒の活動を見取りながら、書き込み機能の活用や、日本語訳を使うタイミングなどの声掛けを行っていた。

2. デジタル教科書は、生徒の資質能力の育成にどのように寄与しているか。

✓ ジグソー法も組み合わせ、生徒が各自で上記のようなデジタル教科書の機能を活用しながら本文を自分のペースで読む時間が十分に確保されたことで、多くの生徒が自身の担当箇所に関して理解を深め、自信をもってグループで発表している様子だった。

✓ 生徒からは多様な意見が発表され、協働的な学びが活性化していた。個々の生徒が本文で気になる箇所を集中的に読む機会があったからだと考えられる。

- 以上のように、**個別最適な学びや協働的な学びにデジタル教科書が寄与している様子が多く見られ**、研修で意見交換されていた内容の反映が見られた。
- 単元構成自体は積み上げ式で進む内容であったものの、本時全体の構成は、本時で与えられたタスク（本文から読み取る必要がある内容）に対して、生徒が個々で学習手段を選択しながら主体的に学びを進める内容であり、**有識者の講義内容の反映**が見られた。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.1. 埼玉県教育局
3.1.4. 研修改善（第２回）

- 受講後アンケートでは、満足度・理解度・活用に関する意識について自己評価を求めたところ、いずれの項目についても**全受講者から肯定的な回答が得られました。**
- また、各項目について自由記述での意見を求めたところ、**「今後の授業での活用イメージが深まった」「子供に学びを委ねる授業づくりを進めていきたい」**といった意見が多く挙げられました。

事後アンケート結果

研修の満足度 100%が満足

満足度に関する自由記述（抜粋）

＜他の教員の実践から具体的に学んだ＞
- グループ協議や事例動画の視聴を通じて、他校の実践を具体的に知ることができて良かった。
- 参加者間でデジタル教科書の活用アイデアを共有しながら単元検討し、刺激を受けた。

＜今後の授業での活用イメージが深まった＞
- デジタル教科書の機能を知ることができた。また、その中に、授業の中に取り入れたいと思えるものが見つかった。
- デジタル教科書を実際に使いながら学ぶことができた。今回知ったことを、早速２学期の最初の授業から使えそうだと思った。
- グループワークで作成した単元計画は、夏休み明けの授業で使えそうである。

研修の理解度 100%が理解

理解度に関する自由記述（抜粋）

＜個別最適な学びや協働的な学びとの関連＞
- 有識者の講義から、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させることが重要であると理解し、デジタル教科書を使用することで子供たちへの個別最適化に繋がることを理解した。
- 有識者の講義を聞いて、「指導の個別化」と「学習の個性化」のためにICTを活用することが、子供たちの「自己調整学習」に繋がることを理解した。

＜英語科の教科特有の理論＞
- 有識者の講義で、新出単語は、単語単体ではなく、文章の中で文脈を通して学ぶことで、長期的に定着することが分かった。授業に早速取り入れたい。

活用に関する意識 100%が意欲向上

今後の活用に関する自由記述（抜粋）

＜子供に学びを委ねる授業づくり＞
- 「機能を知る」「操作をなぞる」「限定して委ねる」「ほとんど委ねる」のステップに沿って、デジタル教科書を活用していきたい。
- 自分の授業では、まだデジタル教科書を活用できていない。デジタル教科書を授業に導入する際には、授業規律を保つために、まずは子供がデジタル教科書を操作する時間としない時間のメリハリをつけたい。その上で、徐々に子供に自由に学び方を選んでもらうようにし、学びを委ねていきたい。

＜デジタル教科書の応用的な活用＞
- 英語のみでなく、他の教科でも活用したい。
- 今回研修では取り上げられなかった機能も確認し、より効果的な活用方法を考えたい。
- デジタル教科書を他のツールと組み合わせて活用したい。

※ 調査対象：研修受講者（小学校教諭・中学校外国語教諭）　有効回答数：15名　調査期間：研修実施後1週間（令和７年８月22日～29日）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.1. 埼玉県教育局
3.1.4. 研修改善（第２回）

- 追跡アンケートでは、研修以降の実践に関し、**全ての回答者が研修内容を活かしている**と回答しています。
- 実践の内容としては、音読練習など**個別最適な学びでの活用や、単元末の発表活動に向けた活用**が挙げられています。
  デジタル教科書等の効果としては、子供たちが自分のペースで学習を行い、考えを共有できることが感じられていました。
- 今後の研修に対する意見として、研修中では受講者による活用方法の検討がメインだったため、**実際の先進的な活用事例を用いた研修**を希望する声が挙がりました。

追跡アンケートの結果（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

実践での研修内容の活用　100%が活かしている

デジタル教科書やICTツールの活用方法（抜粋）

＜子供たちによる個別最適な学びで活用＞
- 本文を読む際に、デジタル教科書を使って新出単語の意味や発音について生徒が調べている。
- リスニングやスピーキングの練習、単語練習ツール等を生徒が使用している。

＜単元末の発表活動に向けて使用＞
- デジタル教科書のイラストを単元末の発表のスライドなどで活用している。
- 単元末の発表に向けた各時間の振返りの記入や、動画撮影にタブレットを使用している。

デジタル教科書やICTツールの活用による効果（抜粋）

＜子供たちが繰り返し学習を行うことができる＞
- 児童が自分のペースで、自分に必要なだけ音声を何度も視聴できる点が良い。
- 新しい単語・表現等を繰り返し練習することができる。

＜考えを共有することができる＞
- 友達や教師と自分の考えや困りごとを共有することができる。

デジタル教科書やICTツールの活用に関する課題（抜粋）

＜デジタル教科書の使用範囲が限定的＞
- 例えば６年生の児童でも５年生の教科書が利用できるようになれば、より自分に必要な学習を選択しやすくなると思う。
- 学校でタブレットの持ち帰りが禁止されているため、家庭学習で利用できない。

■今後の研修に対する意見・要望
- デジタル教科書やICTツールを使った具体的な活用事例を知りたい。
- 実際の活用事例（人気なものがあればなおさら）を用いた研修をお願いしたい。

※ 調査対象：研修受講者（小学校・中学校教員）　有効回答数：13　調査期間：研修の４か月後（令和７年12月22日～令和８年１月９日）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.1. 埼玉県教育局
3.1.4. 研修改善（第２回）

■ 研修における受講者の様子や受講後アンケートの結果から、有識者を交えた振返りを行い、「研修の成果につながった点」と「課題」、それらを踏まえた「今後の研修に向けた取組」を整理しました。

	成果と課題	今後の研修に向けた取組
研修の成果に繋がった点	**継続して同じ対象者に研修を行い、研修での学びの段階的実践を求めて定着を図ったこと** • 受講者は前回研修において、デジタル教科書の授業での活用プランをまとめており、本研修の事前課題も同じフォーマットで前回研修以降の取組を整理したことで、研修間の継続性が意識された。 • 実際に自身の授業で活用した状態で意見交換を行ったため、受講者の前提が揃い、「想定される授業内での子供たちの反応」など、具体的な議論が深まっていた。	三芳町の２年間の研修を先行事例として、今後、埼玉県内の他の市町村に対しても横展開を図る。
	受講者の事例からポイントを抽象化・概念化したことで、受講者自身の授業改善に繋げられたこと • 研修の前半では受講者同士の意見交換や代表教員による事例紹介を通して、豊富なデジタル教科書の活用事例が受講者に共有された。 • その上で、有識者の講義を通して事例のポイントが「抽象化」「概念化」されたことで、受講者が自身の授業に落とし込んで考えやすい研修の流れとなっていた。	今後の研修においても、事例紹介や有識者の講義などのインプットの時間と受講者自身が実践を行うアウトプットの時間を設ける。
課題	**単元全体を見据えた授業づくりの検討には及ばない側面もあったこと** • 本研修は単元計画から検討する点が特徴だったが、「一斉指導型からの転換」や「単元全体の流れを意識した授業検討」という研修のねらいには一歩及ばず、従来どおりの「積み上げ式」の学習の中でデジタル教科書をどのように活用するかの検討に留まっている受講者も見られた。	一斉指導型からの転換や、外国語教育に関する教員の意識改革を広げるため、今後の同様の研修では、有識者から上記の視点でのアドバイスを頂いた後に、もう一度単元計画を検討する時間を設ける。

研修担当者の声（本研修の振返り）

受講者は既にデジタル教科書の操作に慣れており、普段の授業でも活用していました。その上で、デジタル教科書の活用についてグループ協議を行ったため、学びのある協議を行うことができました。今後は、さらなる外国語教育の改革の視点を加えていきたいです。（埼玉県 山井 指導主事）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.1. 埼玉県教育局
3.1.5. 総括

■ 埼玉県教育局での実証を通じて得られた「研修改善のポイント」と、実証を踏まえた「今後の取組」は以下のとおりです。

埼玉県教育局における研修改善の取組の総括

研修改善のポイント

研修改善（1回目）

教科書発行者から具体的な機能とそのねらいを学び、意見交換をしたこと ➡ 参考：p.19

- 受講者は、教科書発行者からデジタル教科書の機能を紹介されながら操作したため、受講者の知らない機能についても知ることができた。グループ協議では、発行者を交えてデジタル教科書の活用アイデアを出し合うことで、機能に関する疑問がその場で解消され、応用的な活用方法を見つけることができた。

理論と具体的な活用方法の両軸を押さえる研修構成だったこと ➡ 参考：p.19、p.20

- 「これからの授業づくりの方向性に関する講義」→「グループ協議」→「英語科の教科の特性に関する講義」という流れで、目指す授業の方向性とその具体的な方法を交互に考えられたため、はじめてデジタル教科書を操作する受講者も、研修後には活用の見通しをもつことができた。

研修改善（2回目）

継続して同じ対象者に研修を行い、研修での学びの段階的実践を求めて定着を図ったこと ➡ 参考：p.27

- 受講者が前回の研修以降に、自身の授業でデジタル教科書を活用し、各自の活用経験を踏まえて意見交換を行ったため、受講者の前提が揃い、「想定される授業内での子供たちの反応」など、具体的な議論が深まっていた。

受講者の事例からポイントを抽象化・概念化したことで、受講者自身の授業改善に繋げられたこと ➡ 参考：p.27、p.28

- 研修の前半では受講者同士の意見交換や代表教員による事例紹介を通して、豊富なデジタル教科書の活用事例が受講者に共有された。その上で、有識者の講義を通して事例のポイントが「抽象化」「概念化」されたことで、受講者が自身の授業に落とし込んで考えやすい研修の流れとなっていた。

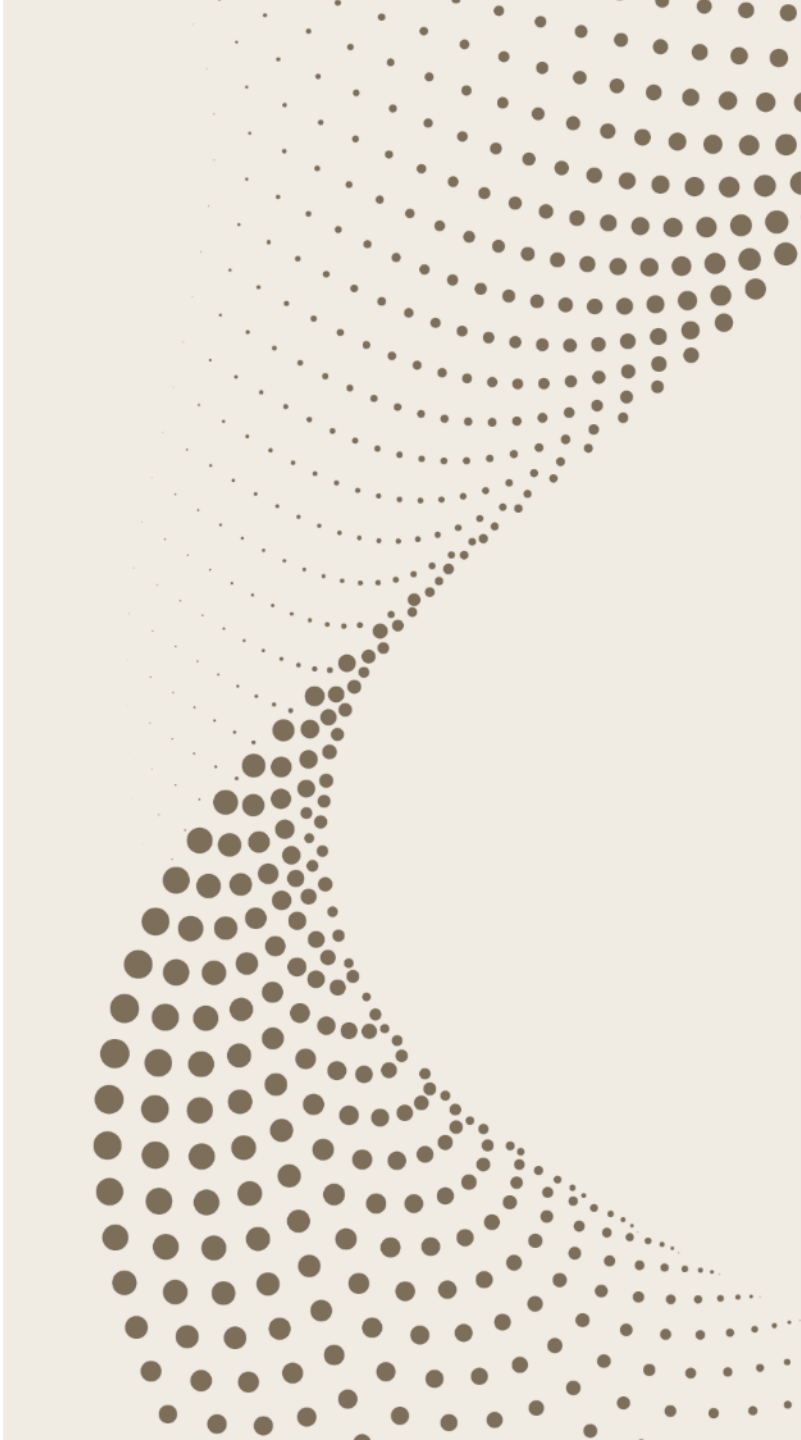
実証成果を踏まえた県における今後の取組

- 北本市（第１回研修）はデジタル教科書の機能を知る段階としての研修、三芳町（第２回研修）は一部の場面で学習者に学びを委ねる段階としての研修でした。それぞれの自治体の状況に合った研修ができたため、これらの研修が今後の授業実践につながると考えます。今年度の２回の研修事例を埼玉県全体に展開していきたいと考えています。（埼玉県 添野 指導主事）
- デジタル教科書の具体的な活用場面について意見交換をするなど、有効な研修の在り方について検討し実施することができたと考えています。本研修の成果について、県内に展開し、他の市町村でも実施可能であることを伝えていきたいです。（埼玉県 杉﨑 指導主事）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組

3.1. 埼玉県教育局
3.2. 福井県教育庁
3.3. 奈良県教育委員会
3.4. 熊本県教育庁
3.5. 鹿児島県教育庁



3. 各実証県における研修改善の取組
3.2. 福井県教育庁
3.2.1. 基本情報

■ 実証研究にご協力いただいた福井県教育庁に関する基本情報、実証前の課題認識は以下のとおりです。

県担当部署	福井県教育庁 教育政策課 教育DX推進室		
県担当者	村井　信吾 指導主事	担当有識者	神戸大学 岡部 恭幸 教授
県における過年度の取組	• 令和５、６年度に、県内のモデル校にデジタル教科書を配布し、デジタル教科書等の効果的な活用に関する研究を推進。 具体的には、各モデル校においてデジタル教科書を活用した授業を公開し、研究協議を実施。また、一部のモデル校によっては、県の指導主事が、授業づくりの段階から支援。 このほか、モデル校同士を参集した研修会や、モデル校とその近隣校による情報交換会も実施。		

実証前の課題認識

学校・教員	教育委員会・指導主事
➢ **デジタル教科書の必要性が浸透していない** • デジタル教科書の紙に対する有用性を実感できる機会が少なく、「紙の教科書のPDF版」という意識がある。 • 児童生徒の深い学びにつながるデジタル教科書の効果的な活用について具体的な姿でイメージすることが難しい ➢ **ICTの活用自体が目的化している** • 「何のために使うのか」が明確になっていないこともあり、“活動あって学びなし”となっていることがある。	➢ **経験が不足しており指導助言に課題を感じている** • デジタル教科書を使った授業を行ったことが無い指導主事も多いため、現場に対して、どのように効果や必要性を伝えていくと良いかという点に課題を持っている。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.2. 福井県教育庁
3.2.2. 年間計画

■ 福井県教育庁における、令和７年度のデジタル教科書の活用に関する研修計画は以下のとおりです。このうち、本事業では、「第１回研修」と「第２回研修」を研修改善に関する実証対象としました。

	対象	概要
事前研修	• 小中学校教員12人 （視聴覚主任）	• 「個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実」や「主体的・対話的で深い学びの実現」に向け、ICT活用の必要性や効果について、福井県・越前町教委の指導主事から説明。 • 各受講者が、ICT活用に係る実践事例を持ち寄り、ICT活用に関する現状や課題などについて情報交換。
第１回研修 実証対象：p.38	• 小中学校教員26名 （研究主任・視聴覚主任）	• デジタル教科書の意義や目指す姿・育てたい資質能力の育成に向けた活用方法の理解を目的に、模擬授業、有識者の講義、グループ協議を実施。 • 具体的には、模擬授業によりデジタル教科書等の活用イメージを醸成し、有識者の講義によりデジタル教科書の必要性や授業づくりの要点を理解。その後、グループごとに研修後の取組の方向性について検討。
第２回研修 実証対象：p.45	• 小中学校教員13名 （視聴覚主任）	• “目指す子供の学びの姿”の達成に向けたICT活用の理解を目的に、受講者間の実践共有、グループ協議、パネルディスカッションを実施。 • 研修課題として、各受講者が第１回研修後のICT活用に係る実践報告を作成。 研修では、グループごとにその実践共有を行いながら、“目指す子供の学びの姿”の達成に向けたICT活用について検討した後、パネルディスカッションにより、研修や実践を通じて感じた課題や疑問を解消した。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.2. 福井県教育庁
3.2.3. 研修改善（第１回）

■　１回目の実証対象とした研修の概要は以下のとおりです。

研修の概要

研修のポイント
- ✓ 研修対象地域内の全ての学校に、効果的な活用促進が図れるよう、**各校で中核を担う研究主任・視聴覚主任を主な対象**とする。
- ✓ 各受講者が、授業における活用イメージを持てるよう、**デジタル教科書等を活用した模擬授業を実施**する。
- ✓ 研修以降も、受講者間で情報交換ができるよう、**学習支援ソフトを活用し、情報交換のためのプラットフォームを準備**する。

対象者：越前町内の小中学校の研究主任・視聴覚主任　26名

実施方式：参集

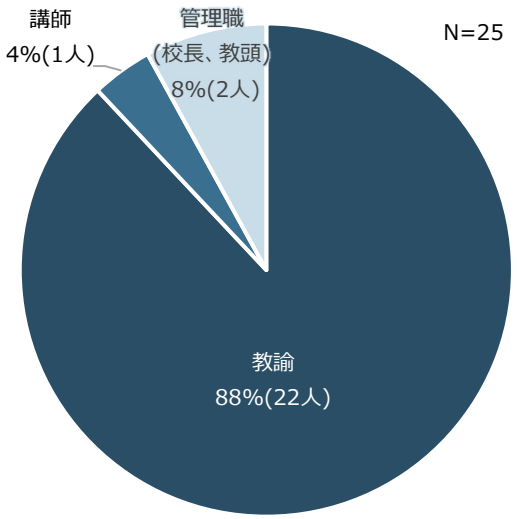
目的	目標	内容
① 知識・理念等の理解	• 目指すべき授業の在り方や、その実現に向けたデジタル教科書等の意義を理解できる。	ワークショップ：模擬授業（活用による効果の体感） レクチャー：有識者の講義（授業づくりの要点の理解）
② スキル・技能等の習得	• 模擬授業や講義を通じて、自身の実践に向けた活用イメージをもつことができる。	ワークショップ：グループ協議（今後の取組の明確化）
③ 意識・行動等の変容	• 研修での学びや研修後の受講者間での情報交換を通じて、実践への意欲を高める。	研修後の取組：実践に向けたオンライン上での情報交換

©2026 ABeam Consulting Ltd.

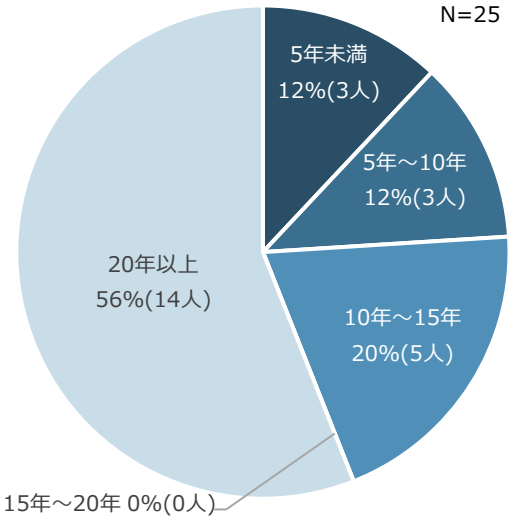
3. 各実証県における研修改善の取組
3.2. 福井県教育庁
3.2.3. 研修改善（第１回）

- 本研修の受講者の傾向※は、以下のとおりです。
- 本研修受講者の役職は、「教諭」が約9割を占めています。また、各校で研究推進の中核を担う研究主任・視聴覚主任を主な対象としたため、教職経験年数は「20年以上」が過半数となっています。
- デジタル教科書の活用頻度は、デジタル教科書が配布されている受講者の半数が「ほとんど使用していない」と回答しており、活用の意義や必要性が浸透していない状況であったと考えられます。

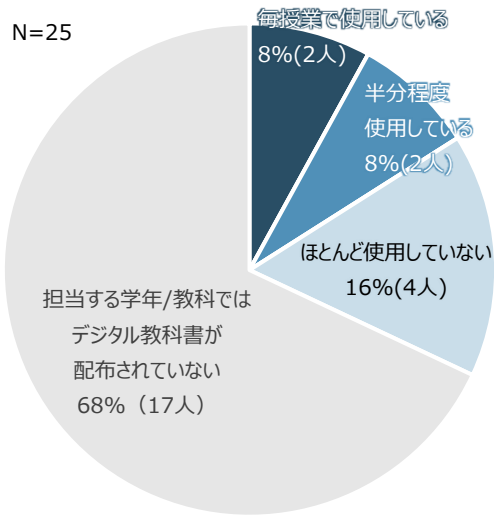
役職



教職経験年数



デジタル教科書の活用頻度



※ この傾向は受講後アンケート結果に基づくものであり、実際の受講者数と有効回答数が異なる。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.2. 福井県教育庁
3.2.3. 研修改善（第１回）

■　研修の流れ及び実際の研修の様子は以下のとおりです。

研修の流れ

ワークショップ　模擬授業（活用による効果の体感）　40分

指導主事が、デジタル教科書と学習支援ソフトを活用した模擬授業を実施した後、授業構想時の生成AIの活用法について紹介した。

■主な内容

前半：模擬授業（題材：小学校第４学年算数「台形と平行四辺形」）

① **学習者の立場：**デジタル教科書の図形をランダムに並べたデジタルワークシートを使い、各自が自由に仲間分けを検討。その後、各受講者の考えを基に全体で仲間分けの方法について議論。

② **教員の立場：**各受講者の仲間分けの考え方を予想した後、それらをどのように授業に繋げていくと良いかを議論。

後半：生成AIを活用した授業づくり

- 授業づくりに悩む教員に向けた１つの検討手法として、生成AIに参考となる授業案を作成させ、検討する手法を紹介。
- あわせて、生成AIはあくまで補助的なものであり、**子供の実態や目指す姿にあわせてカスタマイズが必要**であることを説明。

レクチャー　有識者の講義（授業づくりの要点の理解）　50分

デジタル教科書等の意義を説明した後、好事例を題材に、子供たちの学習の様子に着目しながら効果的な活用方法を解説した。

■主な講義内容

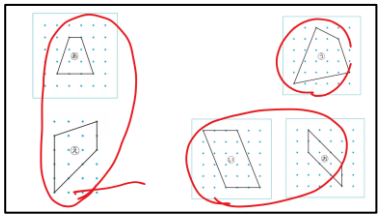
前半：「見方・考え方」を働かせるデジタル教科書等の活用

- 授業づくりに当たり、教科の「見方・考え方」や育成したい資質・能力を明確にした上で、その達成に向けたデジタル教科書等の活用を検討することが重要であると説明。

次頁に続く

研修の様子（青字は成果に繋がる内容）

- 受講者がワークシートにより試行錯誤する際に、「図形を自由に動かせるため、子供たちが試行錯誤しやすい。多様な発想が生まれそう。」「便利だが操作に慣れる必要がある。」等の発言があり、**学習者の立場になってデジタル教科書等の効果や使用感を実感**している様子であった。



▲受講者がワークシートで試行錯誤する様子

- 全体で仲間分けの考え方を議論する場面では、指導主事が、「あらかじめ、着目すべき点や考え方を提示すると、正解か否かの構図となり学び合いが生まれにくい。正解か否かではなく、**子供たちの自由な発想を重視しながら授業を進めることで、子供たち同士の対話を生み、学び合いを引き出せる。**」と説明。受講者の頷きが多かった。

- 指導主事が、生成AIから授業のアイディアを得たり、生成AIを指導主事に見立て改善策を得る方法を紹介。受講者の興味を喚起していた。

■生成AIを指導主事に見立てた例

«指示文»
あなたは小学校算数の指導主事です。
添付の授業案について指導助言してください。
指導助言の観点は小学校学習指導要領の算数です。
教科書はXX社を使用します。　PDF 授業案

▲生成AIの活用例を紹介

- 特に以下の説明時に受講者のメモや頷きが多く、理解を深めたと考えられる。
  - ➢「目的無くデジタルツールを取り入れても、従来どおりの一斉授業や個別最適”風”の放任授業が増長される恐れがある。**まずは、教科の見方・考え方を十分に働かせるような授業づくりをし、その上でデジタルツールを取り入れていくことが重要**である。」
  - ➢「特に学習が苦手な子供にとって、参考となる他者の考えがあると、それらを基に自分の考えを補強することができる。また、**その場面において、デジタルツールは、容易に子供たちの考えを全体に共有することができるため、効果的である。**」

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.2. 福井県教育庁
3.2.3. 研修改善（第１回）

1回目：計画 → 実践 → アンケート → 振返り → 2回目

■ （前頁の続き）

研修の流れ

レクチャー　有識者の講義（授業づくりの要点の理解）　50分

後半：好事例を基にデジタル教科書等の活用を解説

- 過年度事業の好事例を基に授業場面に沿って活用方法を解説。その際、デジタル教科書等の活用方法だけでなく、**各場面での子供の思考や言動に着目し**、どう理解が促されたかを説明。

«解説した事例»
- ① 名寄市立名寄小学校（R5年度、算数）
- ② 甲州市立塩山南小学校（R6年度、算数）
- ③ 所沢市立山口中学校（R6年度、数学）

ワークショップ　グループ協議（今後の取組の明確化）　35分

グループごとに、「2学期以降のICTを活用した授業づくり」について模擬授業や講義を踏まえて意見交換した後、研修全体を振り返った。

■グループ協議の実施方法

- 各校の状況に基づいた協議ができるよう、学校ごとに２～4人のグループを編成。
- グループで「2学期以降のICTを活用した授業づくり」について意見交換し、その内容を、学習支援ソフトにより作成した情報交換用プラットフォーム上に入力。
- 意見交換後、各自で本研修の振返りを同プラットフォームに入力。

研修後の取組　実践に向けたオンライン上での情報交換

研修後、情報交換用プラットフォーム上で、授業実践に関する情報提供や指導主事による実践のサポートを実施。

研修の様子（青字は成果に繋がる内容）

- 事例解説は、**学習が苦手な子供にフォーカス**。
有識者が「この子は、最初は分からなかったが、他者との交流を通じてヒントを得て、自分なりにデジタル教科書や学習支援ソフトを振り返りながら答えにたどり着いた。」と説明し、受講者のメモや頷きが多かった。**子供の思考・言動の変化に着目しながら活用を解説したこと**で、受講者の納得感を伴った理解を引き出していたと考えられる。

- 有識者が、先行事例における授業者の声を引用しながら「子供たちが、自分一人の力だけでなく、他者との学び合いを通じて理解を深めていく姿勢を評価すると良い。」と説明。メモや頷く受講者が多く、理解を深めていた。

- 「デジタル教科書をキャプチャして使うことは便利だが、子供の操作スキルが不足している。まずは慣れるところから始めていきたい。」「校内の教員間で、ICT活用に関する話し合いの場がもっとあると良い。」等、活用方法だけでなく校内での普及促進についての議論が及び**各校の状況を踏まえた意見交換となっていた**。

▲指導主事も参加し、議論を活性化

- 「まずは、課題設定を工夫し、子供たちの多様な考えを引き出したい。その上で、ICTにより共有・比較しながら理解を深めていけるような授業設計にしたい。」等の意見が多く出された。
特に**全体共有・他者参照の場面でのデジタル教科書等の有効性が理解された**と考えられる。

▲プラットフォームに検討結果を入力

- 情報交換用プラットフォーム上で、実践に当たっての疑問点や実際の実践の様子を共有し、受講者や指導主事が活発に意見交流を行っていた。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.2. 福井県教育庁
3.2.3. 研修改善（第１回）

- 受講後アンケートでは、満足度・理解度・活用に対する意欲について自己評価を求めたところ、いずれの項目についても**全受講者から肯定的な回答が得られました。**
- また、各項目について自由記述での意見を求めたところ、**「授業づくりの重要性を理解した」「協働的な学び（全体共有や他者参照）における有用性を理解した」**といった意見が多く挙げられました。
- 今後の研修に対する意見・要望としては、**実際の授業を基に、具体的な活用を考える機会**を求める声が寄せられています。

受講後アンケートの結果（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

研修の満足度 100%が満足

満足度に関する自由記述（抜粋）

＜授業づくりと活用をセットで学ぶことができた＞
- ICTの活用だけではなく授業づくりについても学ぶことができ満足した。
- 学習者主体の授業づくりを目指すことが、結果としてICT活用に繋がると分かり満足した。

＜活用の方向性をイメージすることができた＞
- 様々な事例や活用方法を紹介いただき、活用のイメージを持つことができた。

＜学び合いを生み出すポイントを実感できた＞
- 模擬授業を通じて「正解か否かでは学び合いが生まれにくい。」という点に気付くことができた。ICTを使って子供の自由な発想を引き出し、そこから学びに繋げるような授業を目指したい。

研修の理解度 100%が理解

理解度に関する自由記述（抜粋）

＜授業づくりの重要性を理解＞
- ICTは学びを深めるツールだと再認識した。また、それらを効果的に活用するためには、学習の目的や課題の設定が重要であると理解した。
- 今までは「ICTを活用しなければ」と無理矢理使っていたが、授業づくりを大切にし、上手に使えそうな場面を考えれば良いと分かった。

＜協働的な学びの重要性を理解＞
- 「他者との学び合いを通して理解を深めていくことを価値づけていく」という内容が一番重要だと感じた。
- 他者の考えを瞬時に参照し、自分の学びを更新できることが、ICTの強みであると考えた。

活用に対する意欲 100%が現状より向上

今後の活用に関する自由記述（抜粋）

＜学習の目的に沿ってICTを活用＞
- 活用が目的化すると、結局は授業改善にならない。まずは問いや課題を重視した上で、思考や振返りの場面でICTをうまく活用していきたい。

＜全体共有・他者参照の場面で活用＞
- 誰がどこで躓いているか、誰がどう考えているかが見られるよう他者参照を積極的に行いたい。
- 全員の考えをどう集めるか、友達の考えをどう比較するかなどを考え、ICTを使う場面を積極的に組み込んでいきたい。

＜まずは活用を進める＞
- 授業者も学習者とともに、デジタル教科書等を使い、色々試してみたい。

■今後の研修に対する意見・要望
- デジタル教科書・学習支援ソフト問わず**実践例をとことん深める場**があると良い。
- 特に学力差がある際の協働的な学びの実現について理解を深めたいと思った。
- 本研修での学びを生かした**各校の実践交流の機会**があると良い。
- 今回は算数が中心であったが、国語の活用方法についても知りたい。

※ 調査対象：研修受講者（小学校・中学校教員）　有効回答数：25　調査期間：研修実施後１週間（令和７年８月６日～８月13日）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.2. 福井県教育庁
3.2.3. 研修改善（第１回）

- 追跡アンケートでは、研修以降の実践に関し、**70%の回答者が研修内容を活かしている**と回答しています。
- 実践の内容としては、**特に「個別最適な学び」における活用**が挙げられ、**その効果としては「子供たちが自分のペースで考えを整理できるようになった」**というものが挙げられております。
- また、研修内容を実践に活かせていない者は、**「活用の必要性や具体的な活用方法に関する理解が不足している」**と回答しており、**今後、実際の授業における活用やその効果が、より具体的に想起できるような取組が求められている**と考えられます。

追跡アンケートの結果（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

実践での研修内容の活用

デジタル教科書の活用方法（抜粋）

＜個別最適な学びで活用＞

- 子供たちが、試行錯誤しながら自分なりの考えを形成する場面で活用している。
- 課題解決に向けて情報収集する場面で活用している。
- 子供たちの特性や理解度・進度に合わせて課題に取り組む場面で活用している。

デジタル教科書活用によるの効果（抜粋）

＜自分のペースで考えを整理できる＞

- 自分のペースで理解しながら学習を進められるようになった。
- 子供たちが自分なりの考えを各々のペースで整理し、他の人に伝えられるようになった。

デジタル教科書活用に関する課題（抜粋）

＜デジタル教科書そのものに共有機能が無い＞

- デジタル教科書上の考えをそのまま電子黒板に提示できないため、例えば、子供たちの考えを一覧化して比較する等の活動がやりにくい。

研修内容を活かせていない理由（抜粋）

＜活用の必要性を感じていない＞

- 指導者用で十分だと感じている。
- 少人数のため、ICTを使わなくても考えの共有などができる。

＜具体的な活用方法が分からなかった＞

- どのような操作でどのようなことができるのか、研修で詳細が分かれば、より活かせたと思う。

■今後の研修に対する意見・要望

- デジタル教科書を実際に触りながらどのような活用ができるか考えてみたい。
- デジタル教科書と学習支援ソフトを連携させた授業展開を知りたい。
- 学習用具が紙のアナログからタブレットのデジタルに移行できる可能性が増えたと思うので、効果的な使い方を深めていきたい。

※ 調査対象：研修受講者（小学校・中学校教員）　有効回答数：23　調査時期：研修実施から約３か月後（令和７年10月21日～11月14日）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.2. 福井県教育庁
3.2.3. 研修改善（第１回）

■ 研修における受講者の様子や受講後アンケートの結果から、有識者を交えた振返りを行い、「研修の成果につながった点」と「課題」、それらを踏まえた「今後の研修に向けた取組」を整理しました。

	成果と課題	今後の研修に向けた取組
研修の成果に繋がった点	**デジタル教科書等の活用の効果を、学習者の目線から伝えたこと** • 受講者の課題として「必要性の理解不足」が挙げられていたため、デジタル教科書等の活用が、学習者にどのような効果をもたらすのかを理解する必要があった。 • 模擬授業では、学習者の目線から、デジタル教科書等の効果や使用感を実感することができ、受講者はその有用性を肌で感じることができていた。 • 有識者の講義では、学習者の思考・言動の変化に着目しながら事例を解説したで、活用による効果に納得感が伴い、受講者に高く訴求していた。	特に、これから活用を進めていく教員に、「学習者目線での効果的な活用」が訴求できるよう研修内容を検討する。
	主任を研修対象とするとともに、学校ごとにグループを分けて議論したこと • 学校間にデジタル教科書等の活用状況に差があったため、同じ課題を基に意見交換ができるよう学校ごとのグループ構成とし、実態に即した議論を引き出していた。 • また、各校で中核を担う主任を主な対象とすることで、学校の状況を俯瞰する立場からの意見も加えられ、活用方法だけでなく、校内での普及の方策にも議論が及んでいた。	次回の研修も基本的に同対象（視聴覚主任）とし、各校の実践状況に基づいた検討ができるよう研修を設計する。
課題	**活用イメージの具体化に向け、実際の授業を基にした検討が必要なこと** • 本研修は、デジタル教科書等の効果や必要性の訴求を目的としており、その点は達成されたが、実際の授業場面を想定したより具体的な活用検討までは至らなかった。 • 受講者からは、実際の授業での具体的な活用の検討を深めたいという声や、各受講者の実践例を基に交流する機会を求める声が寄せられている。	次回の研修に向けた研修課題として、「ICT活用に関する実践報告」を設定し、受講者の実際の授業実践を促す。

研修担当者の声（本研修の振返り）

本研修を通じて、受講者に、デジタル教科書等の活用の前段として、「“見方・考え方”を働かせる授業づくり」が重要であると理解してもらったと思います。この意識を大切にしながら実際に実践してもらい、次回研修では、その結果を持ち寄って効果的な活用を深めていきます。（福井県 村井 指導主事）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.2. 福井県教育庁
3.2.4. 研修改善（第２回）

■　２回目の実証対象とした研修の概要は以下のとおりです。

現状の課題

これまでの研修により、デジタル教科書等の意義や効果は浸透したが、活用自体が目的化し、**「目指す子供の学びの姿の達成に向けた活用」が意識されていない。**

研修実施

目指す姿

目指す子供の学びの姿や育成したい資質・能力を明確にするとともに、**その達成に向けて、デジタル教科書をはじめとするICTを組み合わせながら授業改善を行う**ことができる。

研修の概要

研修のポイント

- ✓ 研修前に、デジタル教科書等を実際に活用し、その成果や課題を捉えた状態で研修に臨めるよう、**研修課題として実践報告を作成し持ち寄る。**
- ✓ デジタル教科書等の活用検討に際し、目的意識が明確になるよう、**研修を通貫する問いとして「目指す子供の学びの姿を問い直す」を設定する。**
- ✓ 研修や実践で感じた課題・疑問を解消し、今後に向けた意欲を高められるよう、**パネルディスカッションで有識者と受講者の交流の機会を設ける。**

対象者：越前町内の小中学校の視聴覚主任　13名

実施方式：参集

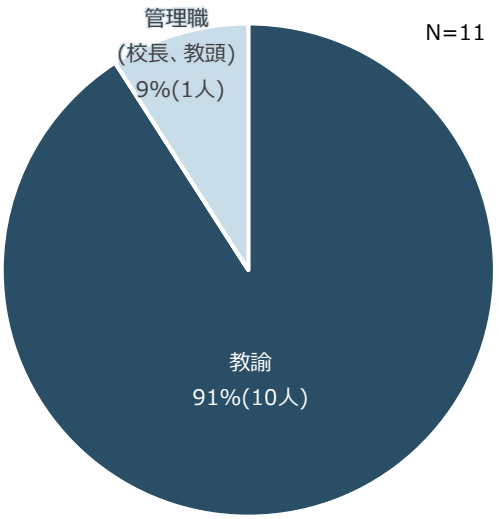
目的	目標	内容
① 知識・理念等の理解	• 実践共有を通じて、デジタル教科書等の活用に関する新たな視点を得ることができる。	研修前の取組：デジタル教科書等を活用した実践報告の作成
② スキル・技能等の習得	• 目指す子供の学びの姿の達成に向けたデジタル教科書等の活用を具体化できる。	ワークショップ：グループ協議（実践共有・目指す姿の検討）
③ 意識・行動等の変容	• 各自で目指す子供の学びの姿を再定義し実践への意欲を高めることができる。	ワークショップ：パネルディスカッション（今後に向けた討論）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

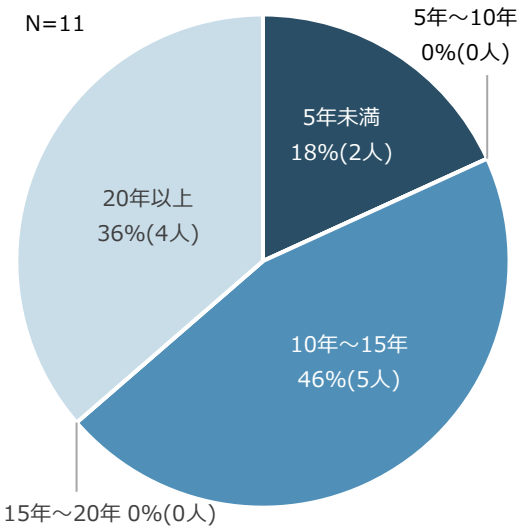
3. 各実証県における研修改善の取組
3.2. 福井県教育庁
3.2.4. 研修改善（第２回）

- 本研修の受講者の傾向※は、以下のとおりです。
- 受講者の役職は、約９割が「教諭」となっています。また、教職経験年数は「10～15年」の受講者が多数を占めており、各校の中堅層の教員が多く参加しました。
- 「担当する学年/教科ではデジタル教科書が配布されていない」と回答した受講者は、全体の約７割を占めており、これらの受講者は、将来的なデジタル教科書活用に向け、まずは、活用の意義や効果等の”知識”の理解を深めていく段階にあったと考えられます。なお、これらの受講者は、研修課題として、主に学習支援ソフト等のICT全般に係る実践報告を作成しています。

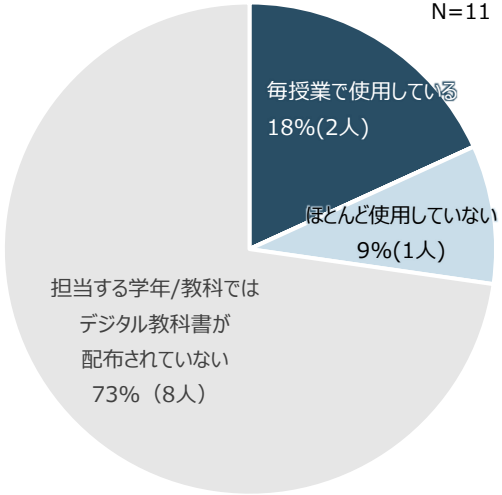
役職



教職経験年数



デジタル教科書の活用頻度



※ この傾向は受講後アンケート結果に基づくものであり、実際の受講者数と有効回答数が異なる。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.2. 福井県教育庁
3.2.4. 研修改善（第２回）

■　研修の流れ及び実際の研修の様子は以下のとおりです。

研修の流れ

研修前の取組　**デジタル教科書等を活用した実践報告の作成**

各受講者は、ICTを活用した授業実践の内容を報告書に整理し、情報交換用プラットフォーム上に提出した。

■実践報告の作成に当たっての観点

① 【現状の課題】と【目指す姿】

② 目指す姿の達成に向けた【取組の具体】と【取組のポイント】

③ 取組の結果、見出された【成果（子供の変容）】や【課題】

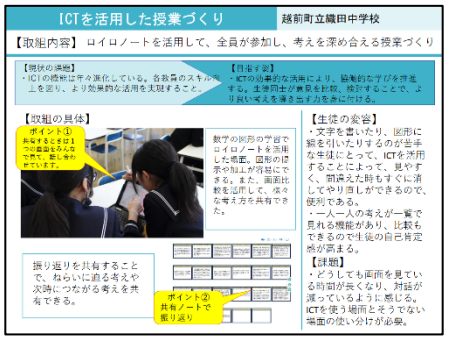
次頁に続く

研修の様子（青字は成果に繋がる内容）

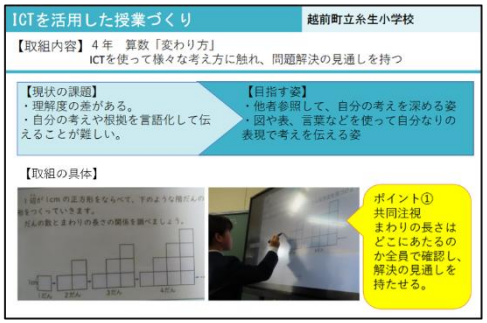
- 各受講者からは、様々な教科・学年・校種の実践報告が提出された。
  研修課題の取組を通じて、同地域内で、多様なICT活用の事例が創出された。

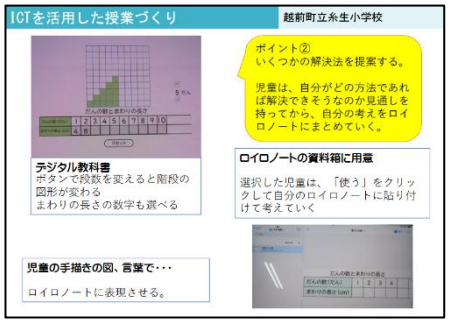
- ICTを活用した取組の内容だけでなく、**【目指す姿】や【取組のポイント】も併記した**ことで**活用のねらいが掴みやすく**なっていた。
  また、**【子供の変容】も記載した**ことで、**活用の効果も明らかとなっていた。**

- 報告書作成時点で、**ICTを活用した取組の【課題】も記載したことで**、各自が、**研修時に意見交換したい論点を明確にすることができた**と考えられる。



各校からの実践報告の例▼▶
越前町立糸生小学校の実践(▼)の詳細はこちらの動画もご参照ください。





©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.2. 福井県教育庁
3.2.4. 研修改善（第２回）

■ （前頁の続き）

研修の流れ

ワークショップ　グループ協議（実践共有・目指す姿の検討）　50分

グループごとに、持ち寄った実践を共有した後、協議の視点に沿って目指す学びの姿やそれに向けたICT活用について意見交換した。

■グループ協議の実施方法

- 第2回研修では、学校を超えた幅広い実践共有をねらいとしたため異なる学校の受講者で、4～５人でグループを編成。
- 各受講者が、情報交換用プラットフォーム上の「報告書」により実践内容を共有した後、以下の協議の視点に沿って意見交換。

■グループ協議の視点

テーマ：デジタル教科書をはじめとするICTの活用を通じて目指す子供の学びの姿を問い直す。

検討の視点①：ICT活用の成果や課題は何であったか。

検討の視点②：今後に向けた疑問や困っていることは何か。

検討の視点③：深い学びを確かなものにするための取組とは何か。

ワークショップ　パネルディスカッション（今後に向けた討論）　35分

福井県及び越前町の指導主事、有識者、文部科学省の職員をパネラーとし、受講者と交流しながらパネルディスカッションを行った。

■パネルディスカッションの実施方法

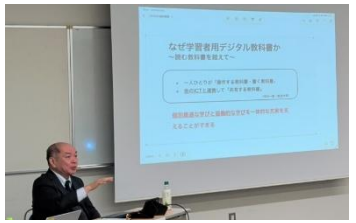
前半：受講者から、グループ協議を通じて見えてきた課題や疑問を募り、その内容に対してパネラーから回答。

後半：各パネラーが、研修全体を振返りながら総括。

研修の様子（青字は成果に繋がる内容）

- あるグループでは、算数・数学における活用という共通の観点を持ちつつも、発達段階によっての相違点や共通点を含めた議論がなされていた。
- あるグループでは、授業だけでなく、校内研修の事例も同様に報告されており、校内での普及策についても議論が及んでいた。
- ある受講者は、**デジタル教科書等の利点を、実践を通じて見られた子供たちの変容を交えながら説明**。「ICTの活用が、子供のどのような学びに繋がるか」が明確化され、テーマに迫る議論が促されていた。
- 各受講者が実践を通じて感じた、**具体的な課題を持ち寄ったこと**で、**共感を呼びつつ、課題の解消や今後の取組に向けた建設的な意見交換を引き出していた。**

▲グループ協議の様子
端末で実践を共有しながら議論



▲パネラーが質問に答える様子

- 主に以下のような質疑応答がなされ、多くの受講者の頷きやメモが見られた。

✓ 質問：子供が端末を操作しているとき、どのように学びを見取ると良いか。
回答：端末を使って”何をしているのか（＝動詞）”、学び方に着目すると良い。

✓ 質問：デジタルとアナログ（ノートへの学びの蓄積等）のバランスはどう考えると良いか。
回答：まずは、それぞれの学習媒体の”良さ”が何であるかを考えると良い。
その上で、やろうとしている学習活動のねらいを明確にし、その達成に適した学習媒体を選択できると良い。目的に応じて使い分ける意識が重要である。

- パネルディスカッションを通して、各受講者は、授業実践や本研修で感じた課題や疑問を解消することができ、更なる理解の深まりに繋がっていたと考えられる。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.2. 福井県教育庁
3.2.4. 研修改善（第２回）

- 受講後アンケートでは、満足度・理解度・活用に対する意欲について自己評価を求めたところ、満足度・理解度は全ての受講者から、活用に対する意欲は約9割の受講者から肯定的な回答が得られました。
- 自由記述の意見としては、**「実践共有を通じてICT活用による成果・課題を見いだせた」**という声や、**「子供が主体的に学ぶ姿を目指してICTを活用したい」**という声が多く寄せられ、”目的達成に向けたICT活用”について意識付けができたと考えられます。
- 今後に向けた意見として、**目的達成に向けたICT活用のバリエーションを更に増やしていきたい**という声が寄せられています。

受講後アンケートの結果（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

研修の満足度 100%が満足

満足度に関する自由記述（抜粋）

＜実践共有を通じて成果・課題を見いだせた＞
- 他校の先生と実践共有し、ICT活用の良さと今後の課題を新たに見つけることができた。
- グループ協議で、様々な学びの在り方を知った。新たなことに取り組むのは大変だが、このような場があると活用のメリットが具体的に見えてくる。

＜年間を通じてICT活用に継続して取り組めた＞
- 年間の研修を通じ、一貫して、ICT活用の視点から「目指す子供の学びの姿」を考え、深く学ぶことができたと感じている。
- １年間の「ICT活用研修」を通じてデジタル教科書等のICTを活用することで、教員も子供たちも大きく成長できたと感じている。

研修の理解度 100%が理解

理解度に関する自由記述（抜粋）

＜教員の役割の重要性を再認識＞
- 子供の学習の幅が広がり、様々な活用の仕方が見えてきたからこそ、授業をどうコーディネートしデザインしていくかが重要となると感じた。
- 「使ってみることが目的」となっていた段階から、「目的に応じた使い方を考える」という次の段階に進まなくてはならないと理解した。

＜デジタルのメリットを理解＞
- デジタルの強みは、思考の可視化と共有・他者参照、試行錯誤、学びのポートフォリオ、子供の見取りにあると思う。
- 作業や共有の時間を短縮し、考える時間を確保できるため、学習意欲の維持にも繋がる。

活用に対する意欲 91%が現状より向上

今後の活用に関する自由記述（抜粋）

＜子供が主体的に学ぶ姿を目指す＞
- 目指す児童像は、自分で学びを切り拓く子。一人一台端末によって、調べる力が高まってきているので、学習活動の中で、より深く考え、判断・表現できるよう単元を構成したい。
- 今後は、ICTの良さを生かし、子供たちが友達の考えと比較したり深掘りしたりしながら主体的に話し合う姿を目指していきたい。
- 自ら課題を見つけ、情報を収集・整理・分析しながら学ぶ子供の姿を目指したい。
- デジタルの良さを理解し、学びの見通しを自分で立てて学びを進めていく姿を目指したい。

■今後の研修に対する意見・要望
- ICTの活用によって、生徒の学習の可能性を広げることができると学んだ。そのため、これから、**生徒の主体性や意欲を引き出す仕掛けや活用法を更に模索**していきたい。
- 様々な学習支援アプリがあるが、自分はまだ使いこなせているとは言い難い。**今回のような各学校での実践をじっくり聞く時間を更に確保**できると良い。

※ 調査対象：研修受講者（小学校・中学校教員）　有効回答数：11　調査時期：研修実施後１週間（令和７年12月24日～１月９日）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.2. 福井県教育庁
3.2.4. 研修改善（第２回）

- 追跡アンケートでは、研修以降の実践に関し、**全ての受講者が研修内容を活かしている**と回答しています。
- 主な実践の内容としては、第１回研修と同様に「個別最適な学び」における活用が挙げられていますが、**特に「既習事項の振返り」の場面における活用が増えています。**
- 研修に対する意見・要望として、**「協働的な学びにおける活用」「デジタルと紙の違い」を更に知りたい**という声が寄せられています。

追跡アンケートの結果（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

実践での研修内容の活用　**100%が活かしている**

デジタル教科書の活用方法（抜粋）

＜個別最適な学びに向けて活用＞
- 既習事項を振り返る場面で活用している。
- 子供たちが、試行錯誤しながら自分なりの考えを形成する場面で活用している。
- 子供たちが、課題解決に向けて情報収集する場面で活用している。
- 子供たちの特性や理解度・進度に合わせ課題に取り組む場面で活用している。

デジタル教科書活用によるの効果（抜粋）

＜子供の主体性を引き出す＞
- 子供たちが、分からないことがあったときに、既習事項を振り返るなど自分ですぐ調べるようになった。

＜子供の理解を引き出す＞
- 画像や動画、音声などを活用することで、子供たちの理解を促すことができた。

デジタル教科書活用に関する課題（抜粋）

＜デジタル教科書に関する情報不足＞
- 効果的な活用方法についての情報が不足している。

＜教員間の格差＞
- 教員の間で活用に関する意識の差がある。

■今後の研修等に対する意見・要望
- 自分の考えを整理する場面では、ある程度児童が主体的に活用できている。**考えを共有し、深め、広げる場面での有効活用**について知りたい。
- **デジタル教科書と紙の教科書の違い**が知りたい。また、仮に同じことができるとしたら、**全てデジタルになる利点は何か**知りたい。
- 担当する学年や教科で、デジタル教科書が配布されていない受講者に、**「配布されたら活用したいか」を問うたところ、全ての受講者から肯定的な回答が得られた。**

※ 調査対象：研修受講者（小学校・中学校教員）　有効回答数：13　調査時期：研修実施から約３か月後（令和８年２月２日～２月13日）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.2. 福井県教育庁
3.2.4. 研修改善（第２回）

■ 研修における受講者の様子や受講後アンケートの結果から、有識者を交えた振返りを行い、「研修の成果につながった点」と「課題」、それらを踏まえた「今後の研修に向けた取組」を整理しました。

	成果と課題	今後の研修に向けた取組
研修の成果に繋がった点	**“目指す子供の学びの姿”を前提に、ICT活用を検討したこと** • ”目指す子供の学びの姿を問い直す”を通貫するテーマとして据え、その達成に向けたICT活用を検討したことで、各自が目指す授業観をアップデートするとともに、活用自体を目的化しない意識を醸成することができていた。	活用自体が目的化しないよう、今後の研修においても、“目指す子供の学びの姿”を軸にしながら活用検討を行う。
	実践報告作成に際し、活用のねらいや成果・課題を意識するようにしたこと • 受講者が実践報告を作成する際、活用方法とあわせて現状の課題/目指す姿や成果・課題を整理したことで、自身の実践のポイントを概念的に捉え直すことができ、また、それらを受講者間で共有したことで、活用方法に留まらない議論の深まりを生んでいた。	今後の研修等で、授業での活用を検討する際には、活用のねらいや成果・課題を意識できるようにし、様々な授業に応用できるようなポイントを見出せるようにする。
	継続した研修により、受講者に段階的な理解を促したこと • 研修で得たデジタル教科書等の概念的な理解をもとに実際に実践を行い、そこから得られた成果・課題を踏まえて再度研修にて理解を深めていくよう、継続した研修設計がなされており、受講者は、研修を重ねながら段階的に理解を深めることができていた。	活用のレベルを更に上げられるよう、以下課題も踏まえて同対象への研修の継続を検討する。
課題	**“目的達成に向けたICT活用”のバリエーションを増やす機会が必要なこと** • 受講者は、年間の研修を通じてICT活用の良さや可能性を実感し、”目指す姿に向けたICT活用“の意識をもつことができている。 • 今後に向けて、受講者からはICT活用のバリエーションを更に増やしていきたいという声が寄せられている。	今後の研修においても、実践報告の機会を設け、様々な活用パターンに触れられるようにする。 また、実践報告に留まらず、共有された実践を自分の実践に活かす方法についても議論する。

研修担当者の声（本研修の振り返り）

本研修では、活用方法だけでなく、そのねらいや子供の変化まで含めた意見交換がなされ、活用のフェーズが１段進んだと感じました。次は、目指す子供の学びの姿の達成に向けた「具体的な活用方法」にフォーカスを当てる等、抽象⇔具体を往還した取組を継続したいと思います。（福井県 村井 指導主事）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.2. 福井県教育庁
3.2.5. 総括

■ 福井県教育庁での実証を通じて得られた「研修改善のポイント」と、実証を踏まえた「今後の取組」は以下のとおりです。

福井県教育庁における研修改善の取組の総括

研修改善のポイント

研修改善（1回目）

デジタル教科書等の活用の効果を、学習者の目線から伝えたこと ➡ 参考：p.40、p.41

- デジタル教科書を積極的に活用していない教員は、その必要性や効果（子供の変容など）を実感しておらず、最初の一歩を踏み出せていないことが多い。それらの教員が、納得感をもって活用を進めていけるよう、模擬授業等で「学習者の目線」を体感させることが重要。

主任を研修対象とするとともに、学校ごとにグループを分けて議論したこと ➡ 参考：p.41

- 受講者間でデジタル教科書の活用に差がある場合、活用状況や課題ごとにグループを分け、議論の前提を揃えることで検討を活性化できる。また、主任など学校の中核を担う教員を対象とすることで、個人に留まらず学校全体の状況を踏まえた議論を引き出せる。

研修改善（2回目）

“目指す子供の学びの姿”をテーマに、ICT活用を検討したこと➡ 参考：p.48

- ICT活用検討に際しては、活用”方法”に目が行き、活用自体が目的化してしまうことが多い。活用の前提となる「目指す姿は何か」を軸に活用検討を行うことにより、授業観をアップデートしながら目的達成に向けた”活用”を意識することができる。

実践報告作成に際し、活用のねらいや成果・課題を意識するようにしたこと ➡ 参考：p.47

- 実践報告の作成に当たり、活用方法だけでなく、ねらいや成果・課題もあわせて整理するようにしたことで、各受講者は自身の実践のポイントを概念的に捉え直すことができた。また、それらを受講者間で共有することにより、活用方法に留まらない議論の深まりを引き出した。

継続した研修により、受講者に段階的な理解を促したこと ➡ 参考：p.47

- 研修で得たデジタル教科書等の概念的な理解をもとに実際に実践を行い、そこから得られた成果・課題を踏まえて再度研修にて理解を深めていくよう、継続した研修設計を行うことで、受講者は、研修を重ねながら段階的に理解を深めることが可能となる。

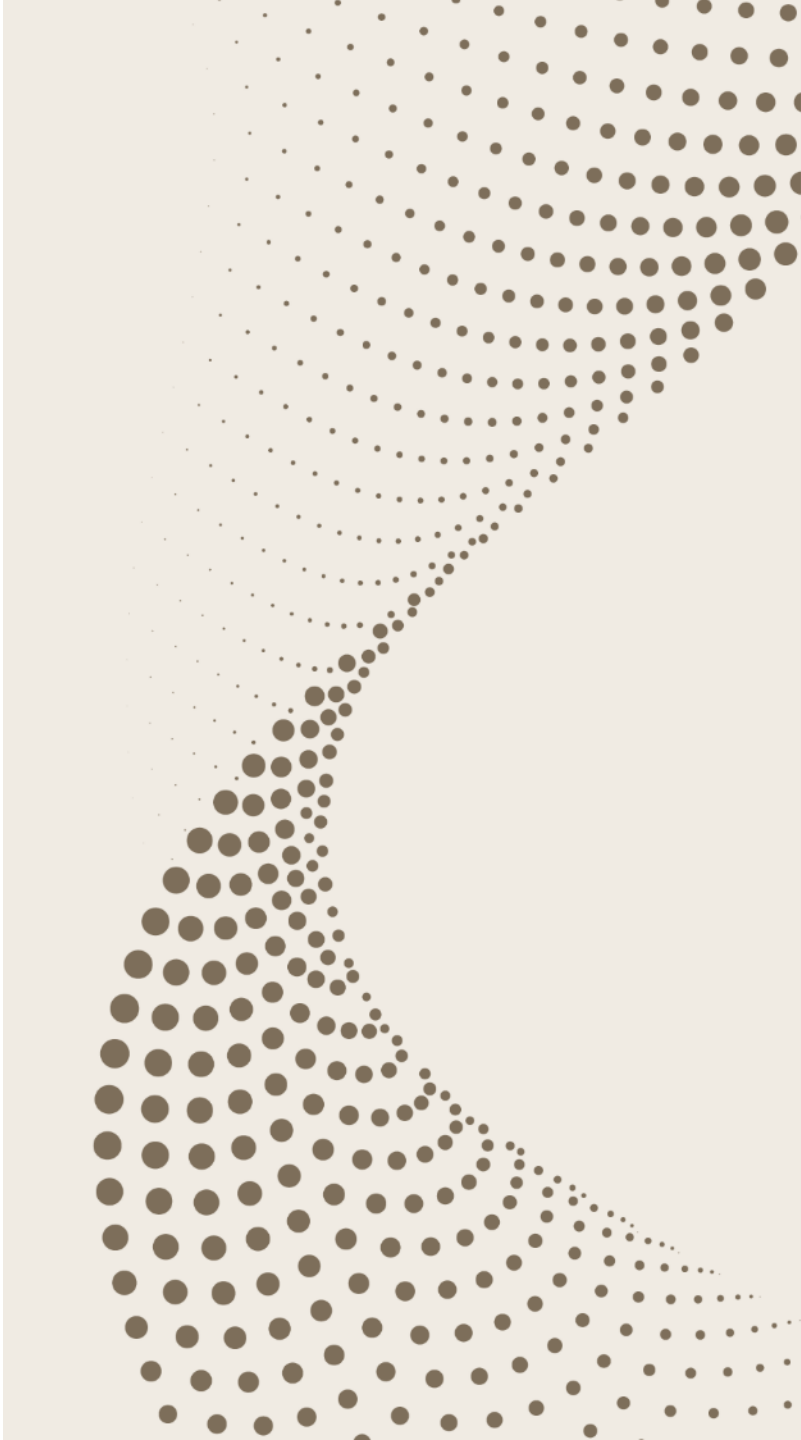
実証成果を踏まえた県における今後の取組

- デジタル教科書活用促進に向け、まずは、先生方に授業で使ってもらい、子供の姿を通じて効果を実感してもらうと良いと思います。その際には、学校や先生方に全てを委ねるのではなく、指導主事が伴走していくことも重要と考えます。今後も、先生方と共に離れた同僚として、デジタル教科書等の活用の在り方について、考えていきたいと思います。（福井県 村井 指導主事）
- 研修を通じてICTを活用する教員が増え、更には、”目指す子供・授業の姿”に向けた活用が意識されるようになってきました。今後も、先生方の”目指す姿”を大事にしながら、ICT活用が更に進むよう取組を進めていきたいと思います。（越前町 伊藤 指導主事）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組

3.1. 埼玉県教育局
3.2. 福井県教育庁
3.3. 奈良県教育委員会
3.4. 熊本県教育庁
3.5. 鹿児島県教育庁



3. 各実証県における研修改善の取組
3.3. 奈良県教育委員会
3.3.1. 基本情報

■ 実証研究に御協力いただいた奈良県教育委員会に関する基本情報、実証前の課題認識は以下のとおりです。

県担当部署	奈良県教育委員会　義務教育課　義務教育指導係		
県担当者	福呂　当起　指導主事	担当有識者	放送大学　佐藤　幸江　客員教授
県における過年度の取組	• 令和４年度に、オンデマンド形式で中学校外国語科の教員を対象に実施した教育課程研究集会において、県内の指導主事がデジタル教科書の活用方法を共有 。		

実証前の課題認識

学校・教員

- **デジタル教科書の意義や効果について、理解の深化を図る必要がある**
  - デジタル教科書を紙の教科書の代替として、大型掲示装置への投影や端末での閲覧といった形で活用している。今後、学習者主体の学びの実現に向け、デジタル教科書の意義や効果に対する理解を一層深める必要がある。
- **学校間・教員間で活用状況に差が見られる**
  - 学校や教員間でデジタル教科書の活用頻度には差が見られる。教員のICTへの慣れによって使用状況が異なる上、他の教員との交流の機会も限られていることから、活用格差が広がっている可能性が考えられる。

教育委員会・指導主事

- **デジタル教科書の活用に関する知見の整理がなお十分とは言えない**
  - デジタル教科書の活用に関する知識や実践的経験について、体系的な整理が十分に進んでいるとは言えず、指導助言の充実に向けて、更なる検討が必要な状況である。
- **学校現場における活用状況や課題の把握・共有が十分とは言えない**
  - 学校現場におけるデジタル教科書の活用状況や課題について、十分に把握・共有できているとは言えない側面があり、実態を踏まえた支援の在り方について、更なる検討が求められる状況にある。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.3. 奈良県教育委員会
3.3.2. 年間計画

■ 奈良県教育委員会における、令和７年度のデジタル教科書の活用に関する研修計画は以下のとおりです。本事業では、「第１回研修」と「第２回研修」を研修改善に関する実証対象としました。

	対象	概要
第１回研修 実証対象：p.56	• 各郡市代表の教員 （外国語科を担当） 計32名	• 学習者主体の学びの必要性、その実現に向けたデジタル教科書の意義や活用方法とその効果について、有識者から説明。 • その後、複数のグループに分かれて、実際にサンプル版のデジタル教科書を操作しながら、外国語科の４技能における具体的な活用方法を検討。 • 外国語科におけるデジタル学習基盤の活用の重要性や具体的な授業例について、県内指導主事から紹介。
第２回研修 実証対象：p.63	• 各郡市代表教員及び 指導主事 （算数・数学科を担当） 計51名	• 学習指導要領の要点とデジタル教科書の具体的な実践事例を交えて、県内指導主事から紹介。 • デジタル教科書を導入する意義やこれからの授業の在り方について、有識者から説明。 • その後、複数のグループに分かれて、実際にサンプル版のデジタル教科書を操作しながら、算数・数学科の４領域※における具体的な活用方法を検討。

※ 「数と計算」「図形」「データの活用」「関数」を指す。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.3. 奈良県教育委員会
3.3.3. 研修改善（第１回）

■ １回目の実証対象とした研修の概要は以下のとおりです。

現状の課題

デジタル教科書の意義や効果が十分に理解されていない。学校間・教員間で活用の差が広がっている。

研修実施

目指す姿

デジタル教科書の意義を十分に理解した上で、**授業場面に応じて、適切に活用**している。

研修の概要

研修のポイント

- ✓ 県内の全教員に対して、効率的にデジタル教科書活用を促進するため、**各校で普及啓発の中核を担う各郡市代表教員を対象**とする。
- ✓ **他の教員と交流する時間を設けたり、県内の事例を紹介したりして**、活用の幅を広げてもらう。

対象者：各郡市代表の教員（外国語科を担当）　計32名

実施方式：参集

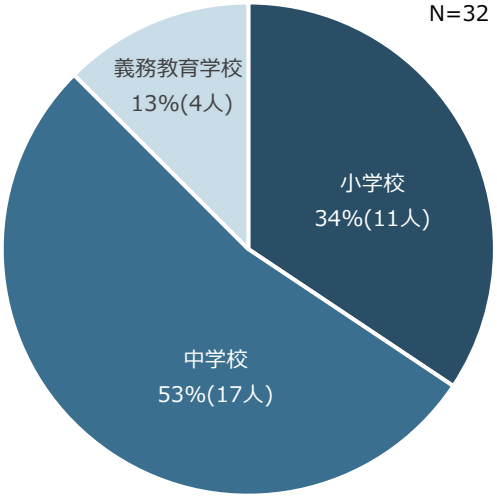
目的	目標	内容
① 知識・理念等の理解	• 学習者主体の学びの必要性を認識した上で、デジタル教科書の意義や効果を理解する。	レクチャー：有識者の講義（活用意義、効果の理解）
② スキル・技能等の習得	• 場面に応じて適切にデジタル教科書を活用するイメージが持てる。	ワークショップ：グループ協議（実践例を基にした活用検討）
③ 意識・行動等の変容	• 他の教員がデジタル教科書を活用する際の参考とできるよう、研修で学んだ内容を紹介できる。	リフレクション：指導主事の講義（県内事例の紹介）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

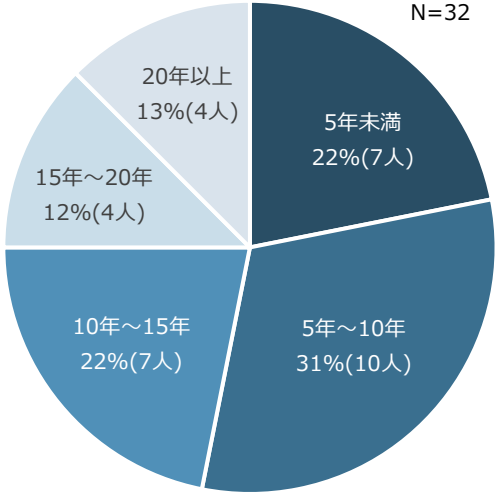
3. 各実証県における研修改善の取組
3.3. 奈良県教育委員会
3.3.3. 研修改善（第１回）

- 本研修の受講者の傾向は、以下のとおりです。
- 本研修受講者は、中学校教員が過半数を占めています。また、教職経験年数に特段の偏りはなく、幅広い層が参加しました。
- デジタル教科書の活用頻度には差があるものの、約６割の受講者が４回に１回以上の授業で使用していると回答がありました。
  各郡市の代表者を対象としたため、活用が進む教員も多く集まったと考えられます。

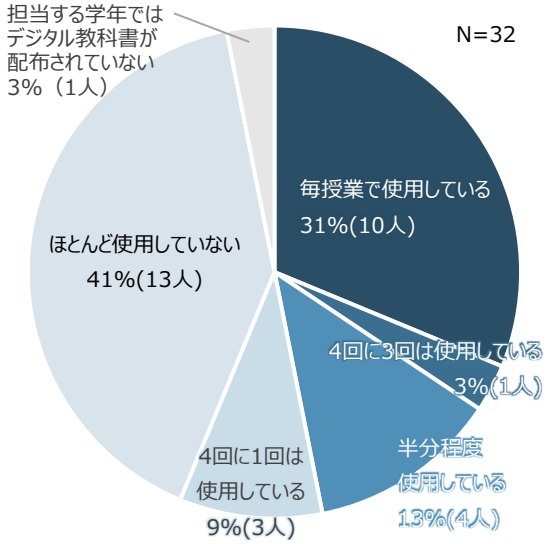
学校種



教職経験年数



デジタル教科書の活用頻度



©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.3. 奈良県教育委員会
3.3.3. 研修改善（第１回）

■ 研修の流れ及び実際の研修の様子は以下のとおりです。

研修の流れ

レクチャー　**有識者の講義（活用意義、効果の理解）**　60分

学習者主体の学びの必要性やその実現に向けたデジタル教科書の活用意義や活用方法について、効果と共に有識者から説明した。

■主な講義内容

デジタル教科書の現状と課題、学習者主体の学びの必要性の説明

- 文部科学省のデジタル教科書導入に当たっての教員の課題感に関する調査結果を紹介。
- 時代とともに子供たちを取り巻く環境が変化していることを紹介。従来の一斉一律型の学びだけではなく、学習者が自立的に学びを進めていく「学習者主体の学び」が求められていることを説明。

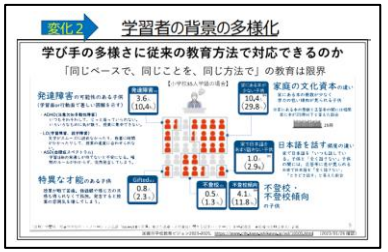
デジタル教科書の活用意義の理解、実践事例の紹介

- デジタル教科書の具体的な機能や活用例を紹介しながら、「学習者主体の学び」にデジタル教科書が寄与することを説明。
- 受講者が段階的にデジタル教科書の活用を進められるよう「授業づくり」の各フェーズを説明。
  特に「学習者主体の学び」となるフェーズ３・４への移行に向けた実践事例を紹介。
- 「学習者の声」に着目しながら過年度事業の好事例動画を視聴。

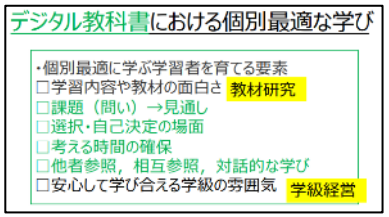
次頁に続く

研修の様子（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

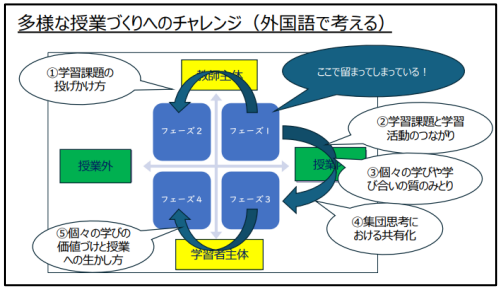
- 多くの受講者が紹介された課題感に共感していた。
- 子供たちを取り巻く環境の変化やそれに伴う学習者主体の学びの必要性についても多くの受講者が共感していた。
  前述の課題感とあわせ、**自身の学級を想起し、各自の課題意識を鮮明にしていた**と考えられる。
- 講義の途中で席が近くの受講者と自身の課題について話し合う場面では、**各自の課題意識に基づき、熱心に議論する様子が見られた。**
- デジタル教科書の機能や活用例を紹介する場面では、実際に操作して試しながら確認していた。
- 「授業づくり」のフェーズごとに実践事例を紹介する場面では、多くの受講者がメモを取っていた。
  自身の立ち位置を意識しながら、今後の取組の方向性を明確にすることができたと考えられる。



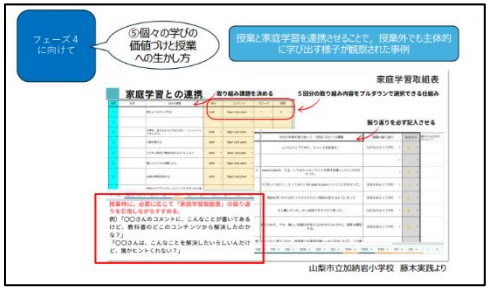
▲多様化する学級の状況を紹介
「同じペースで、同じことを、同じ方法で」学ぶことの限界について言及



▲学習場面ごとにデジタル教科書の活用方法を紹介



▲「授業づくり」のフェーズごとにポイントを解説



▲フェーズ３・４は取組例も併せて紹介
（上図は山梨市加納岩小学校の取組）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.3. 奈良県教育委員会
3.3.3. 研修改善（第１回）

■ （前頁の続き）

研修の流れ

ワークショップ　グループ協議（実践例を基にした活用検討）　30分

受講者一人一人がデジタル教科書とデジタル学習基盤の活用方法を考えた後、グループに分かれて、外国語科の４技能（聞く・読む・話す・書く）における具体的な活用方法を検討し、全体に向けて発表を行った。

個別ワーク：5分

- 自身の実践や講義で学んだ内容を基に、「デジタル教科書の活用方法」「デジタル学習基盤の活用方法」について個人で考え、学習支援ソフトに書き出して共有。

グループワーク：15分

- １グループ約５名でグループに配置。
- グループごとに外国語科における４技能の活用を検討。
- 実際にデジタル教科書を手元で操作しながら、グループで具体的な活用方法をホワイトボードに整理。

全体発表：10分

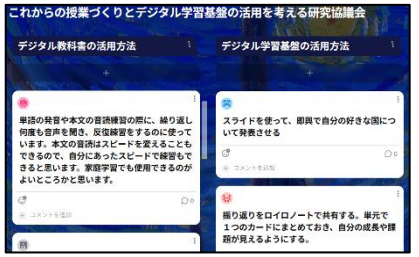
- ２グループが代表して活用方法を発表し、全体で共有。

レクチャー　指導主事の講義（県内事例の紹介）　20分

外国語科におけるデジタル学習基盤の活用の重要性や県内の実践事例について、奈良県教育委員会の指導主事から紹介した。

研修の様子（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

- 個人ワークでは、多くの受講者が「スピーキングやリスニングにおける反復練習」において有用性を感じていた。



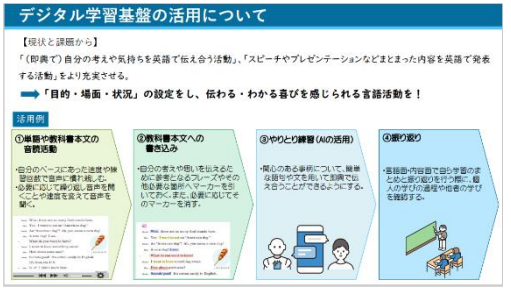
▲学習支援ソフト上に個人の考えを書き出す様子

- グループの中には、**既に活用が進んでいる教員もおり、そうした教員がグループの中心となって話合いを先導していた。**
具体的に、「線を引く機能は便利だけど、真っ直ぐ引けない生徒も多いんだよね」といった声に対し、「ここを○○すると対応できるよ」と助言する等、**互いにアイデアを出し合い、活用の幅を広げていた。**
一方で、**時間が足りず、表面的な機能の話に留まる様子も見られ、実際の授業を想定した活用までイメージできていないグループもあった。**

▲活用に関するアイデアを互いに出し合っている様子

- 全体発表では、個別最適な学びを実現するための活用方法が紹介された。

- 県内の実践事例は具体的な授業の流れに沿ってデジタル学習基盤の活用が紹介され、多くの受講者が共感していた。
授業の場面ごとにデジタル学習基盤の重要性を理解できたと考えられる。



▲授業場面ごとに県内の活用事例を紹介

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.3. 奈良県教育委員会
3.3.3. 研修改善（第１回）

- 受講後アンケート※では、満足度・理解度・活用に対する意欲について自己評価を求めたところ、**満足度と活用に対する意識は約９割、理解度は全受講者から肯定的な回答が得られました。**
- また、各項目について自由記述での意見を求めたところ、**「他の教員と活用に関する意見交換ができたことに満足した」「学習者主体の学びにおける活用意義を理解した」という声**が多く寄せられています。
- 今後の研修に対する意見・要望としては、**より具体的な活用方法を考えたい**といった声が寄せられています。

受講後アンケートの結果（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

研修の満足度 90%が満足

満足度に関する自由記述（抜粋）

＜他の教員と活用に関する意見交換ができた＞
- 他の教員が実践している具体的な活用方法について意見交換でき、有意義だった。
- 授業での活用方法だけでなく課題についても、意見交換できて良かった。

＜活用の方向性が見出せた＞
- デジタル教科書を今後どのように活用していくべきか、方向性を知ることができた。
- デジタル教科書を活用することで、個に応じた学習を実現できると分かった。

＜グループ協議の時間不足＞
- グループワークの時間が短く、十分に話し合えなかった。

研修の理解度 100%が理解

理解度に関する自由記述（抜粋）

＜学習者主体の学びにおける活用意義を理解＞
- デジタル教科書を場面に応じて適切に活用することで、学習者主体の学びに繋がると理解した。
- 特に、個別最適な学びの実現において、デジタル教科書は有効に機能する側面が多いと理解し、その実現に向けては、まずは実際に活用してみることが重要であると感じた。

＜具体的な機能を理解＞
- 意見交換を通じて、デジタル教科書の様々な機能を知り、授業で活かせそうと感じた。
- デジタル教科書への書き込みや音声の速度調整等を中心に活用を進めたい。

活用に対する意識 88%が現状より向上

今後の活用に関する自由記述（抜粋）

＜個別最適な学びにおける活用促進＞
- 一斉指導での活用に留まらず、個々の課題に応じた活用や、自主学習に繋がる活用も進めていきたい。
- 生徒の個別学習（音読やリスニング）や、本文に線を引く等で活用していきたい。
- 児童生徒が単語等の音声速度を調整して自分に合った速度で学習できる時間を確保したい。

＜研修内容を再展開＞
- 個別最適な学びを実現するため、研修会で学んだ取組を本校や市で共有したい。

■今後の研修に対する意見・要望

- **具体的にどのような場面でどのような活用が可能か**、更に考えていきたい。
- 実際の授業で使っている様子を、実践動画等を視聴し学んでいきたい。
- 実際に**デジタル教科書を使いながら、具体的な活用方法をもっと深めたい**。
- 実践動画だけでなく、実際にデジタル教科書を活用する授業風景を確認したい。

※ 調査対象：研修受講者（各郡市代表の教員（外国語科を担当）） 有効回答数：32 調査期間：研修実施後２週間（令和７年10月10日～10月17日）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.3. 奈良県教育委員会
3.3.3. 研修改善（第１回）

- 追跡アンケートでは、研修以降の実践に関し、**半数が研修内容を活かしている**と回答しています。
- 実践の内容としては、**「音声機能を活用した外国語学習」**が挙げられており、**映像や音声コンテンツを豊富に提示できたことで、児童生徒の理解促進に繋がった**との効果が示されています。
- また、研修内容を実践に活かせていない方からは、**「授業スタイル変更に割ける時間が不足している」**との声が寄せられています。

受講後アンケートの結果（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

実践での研修内容の活用

デジタル教科書の活用方法（抜粋）

＜音声機能を活用した外国語学習の充実＞

- 高学年の外国語科の授業では、毎時間でデジタル教科書を活用しており、児童一人一人が必要に応じて、単語の意味や発音を確認する等、個々の学習状況に応じた活用を行っている。
- デジタル教科書で正しい発音を確認しながら、音読練習を行ってもらう活動を取り入れている。

デジタル教科書活用による効果（抜粋）

＜自分のペースで考えを整理できる＞

- デジタル教科書や学習支援ソフトを活用することで、映像や音声コンテンツを豊富に提示できるようになり、児童の理解促進に繋がった。

デジタル教科書活用に関する課題（抜粋）

＜使用環境を整えることの難しさ＞

- 児童が端末を家庭に忘れたり、充電不足で使えなかったり、パスワードを忘れてログインできなくなったりする等、常に全員が利用できる状態を維持することは難しい。

研修内容を活かせていない理由（抜粋）

＜授業スタイル変更に割ける時間の不足＞

- テスト範囲を終わらせる必要があるため授業を急いで進めており、授業スタイルを変更するための時間を十分に確保できていない。

■今後の研修に対する意見・要望

- デジタル教科書が学校現場でどのように活用されているのか、具体的な実践例を知りたい。
- 学級内で端末利用に関するルールの整備をどのように進めていくか考えていきたい。

※ 調査対象：研修受講者（各郡市代表の教員（外国語科を担当）） 有効回答数：６ 調査期間：研修実施から約１か月後（令和７年11月17日～11月28日）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.3. 奈良県教育委員会
3.3.3. 研修改善（第１回）

■ 研修における受講者の様子や受講後アンケートの結果から、有識者を交えた振返りを行い、「研修の成果に繋がった点」と「課題」、それらを踏まえた「今後の研修に向けた取組」を整理しました。

	成果と課題	今後の研修に向けた取組
研修の成果に繋がった点	**他の教員とデジタル教科書の活用方法について意見交換できたこと** • 本研修では、積極的にデジタル教科書を活用し、知見をある程度有していた教員も多く受講していた。 • そのため、グループ協議において、そのような知見を有する教員を中心として意見交換することで、互いにアイデアを出し合い、活用の幅を広げることができていた。	今後の研修においても、他の教員と意見交換できる機会を積極的に設定する。 また、意見交換がより活発に行われるよう、受講者の実態に合わせてグループ編成や協議テーマを工夫する。
課題	**受講者の活用実態に応じたインプットとアウトプットの時間配分** • アンケートにおいて「グループワークの時間が足りなかった」という声が挙げられている。 • 本研修では、積極的にデジタル教科書を活用し、知見をある程度有していた教員も多く受講していたため、講義や説明（インプット）の時間を短縮し、グループ協議（アウトプット）の時間を十分に確保することで、より発展的な活用に向けた検討を促進できた可能性がある。	今後の研修では、比較的活用が進んでいない受講者にはインプットの時間を、活用が進んでいる受講者にはアウトプットの時間を長く設定する等、受講者の活用段階に応じて時間配分を柔軟に設定する。
	より実践的な活用を理解するためのグループワーク内容の設定 • 本研修を通じて、受講者はデジタル教科書の活用意義や活用の方向性を把握することができた。 • 今後に向けては、「より具体的な活用方法を深めたい」との要望が寄せられている。	今後の研修では、授業案検討等を通じて実際の単元や授業場面を想定し、具体的な活用方法を検討する活動を取り入れる。

研修担当者の声（本研修の振返り）

本研修の受講者が中心となり、各校においてデジタル教科書の活用が一層推進されることを期待しています。また、当初想定よりもデジタル教科書の活用が進んでいる受講者が多かったことを踏まえ、今後は活用が進んでいる方に向けた研修も検討していきたいです。（奈良県　福呂　指導主事）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.3. 奈良県教育委員会
3.3.4. 研修改善（第２回）

■　２回目の実証対象とした研修の概要は以下のとおりです。

研修の概要

研修のポイント
- ✓ デジタル教科書の活用イメージを具体化するために、教科の見方・考え方や授業観といった**概念的な内容について、具体的な実践例を交えて紹介**する。
- ✓ 校種や立場を越えた意見交流ができるよう、グループ協議において、**小学校・中学校教員及び指導主事を混在させて配置する。**

対象者：各郡市代表教員及び指導主事（算数・数学科を担当）　計51名

実施方式：参集

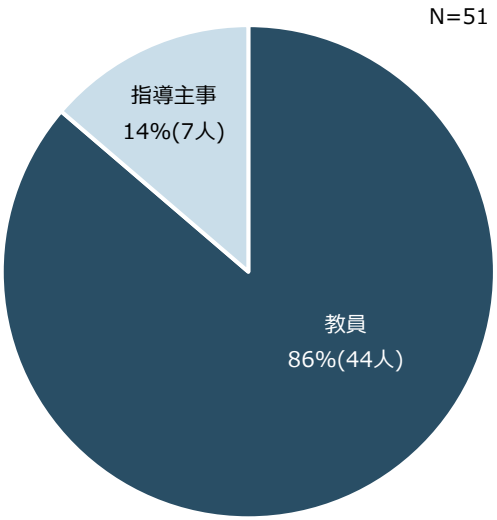
目的	目標	内容
① 知識・理念等の理解	• 教科の見方・考え方や目指すべき授業観と照らして、デジタル教科書の理解を深める。	レクチャー　指導主事の講義（県内事例の紹介）
② スキル・技能等の習得	• 場面に応じた適切なタイミングでデジタル教科書を活用できる。【教員】 • 学級の課題や場面に応じて、デジタル教科書活用に関する指導助言ができる。【指導主事】	レクチャー　有識者の講義（これからの授業の在り方） ワークショップ　グループ協議（領域ごとの活用検討）
③ 意識・行動等の変容	• デジタル教科書を活用した授業を実践したり、指導助言したりしようとする意欲を高める。	

©2026 ABeam Consulting Ltd.

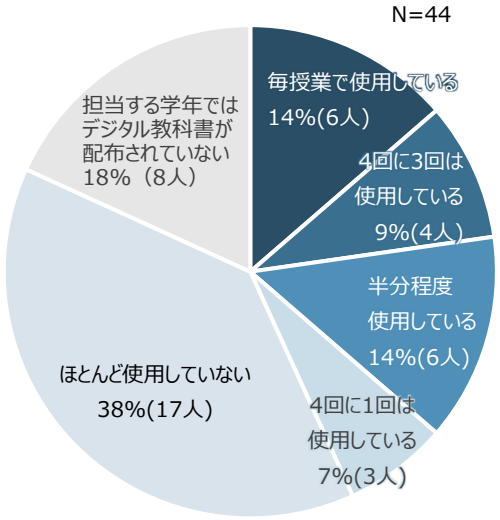
3. 各実証県における研修改善の取組
3.3. 奈良県教育委員会
3.3.4. 研修改善（第２回）

- 本研修の受講者の傾向は、以下のとおりです。
- 本研修の受講者は、教員が約９割を占めており、第１回研修同様に各郡市の代表者を対象としたため、活用が進む教員も多く参加しました。
- 一方で、受講者の約１割を占めている指導主事は、デジタル教科書に関する指導助言頻度が１人を除き「学校訪問時の1/4未満」と回答しており、指導主事を起点としたデジタル教科書の活用促進は、研修開始時点では十分に進んでいない状況が見られました。

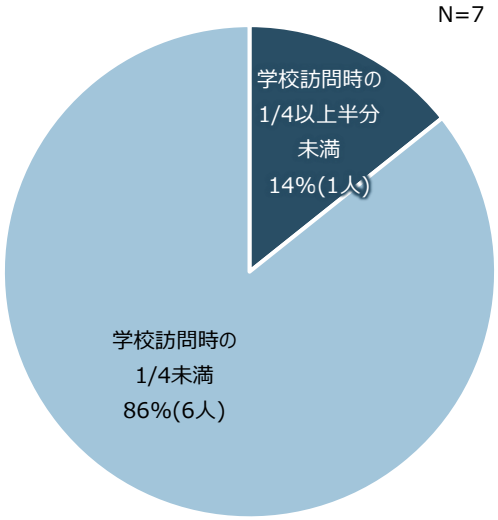
職又は職別



【教員】
デジタル教科書の活用頻度



【指導主事】
デジタル教科書に関する指導助言頻度



©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.3. 奈良県教育委員会
3.3.4. 研修改善（第２回）

■　研修の流れ及び実際の研修の様子は以下のとおりです。

研修の流れ

レクチャー　指導主事の講義（県内事例の紹介）　20分

奈良県教育委員会の指導主事から、学習指導要領の要点が確認されるとともに、デジタル教科書の具体的な実践事例が紹介した。

■事例紹介の流れ

1. 学習指導要領を基に実践事例に関わる指導上の要点を確認。
2. 授業の流れに沿ってデジタル教科書及び学習支援ソフトの具体的な活用方法の提示。

■紹介された事例

① 中学校１年生「空間図形」における活用
② 中学校２年生「連立方程式」における活用

レクチャー　有識者の講義（これからの授業の在り方）　60分

有識者から、デジタル教科書導入の活用ポイントや意義、これからの授業の在り方について説明した。

■主な講義内容

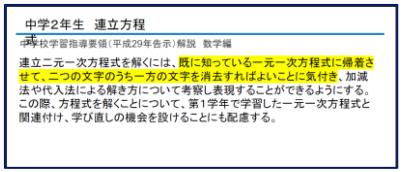
序盤：実践動画を通じた効果的な活用ポイントの確認

- 過年度事業の好事例動画を視聴し、効果的と考えられるポイントについて個人で整理した後、グループで意見交換。
- デジタル教科書、デジタル教材、学習支援ソフトの機能や活用の可能性について解説。

次頁に続く

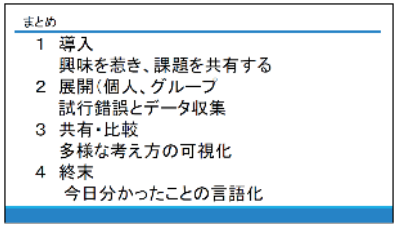
研修の様子（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

- **学習指導要領に記載されている概念的な内容を出発点とし、デジタル教科書や学習支援ソフトを用いた具体的な実践事例と結び付けて説明したことで、抽象的になりがちな内容を実際の授業場面としてイメージしやすくなり、受講者の理解を一層深める様子が見られた。**



▲指導要領の記載を冒頭に確認

- 講義のまとめでは、導入から振返りに至るまで、授業の各場面に応じた具体的な活用方法が示されていた。受講者は授業全体の流れの中で、どの場面でどのようにデジタル教科書を活用するか具体的にイメージすることができ、授業づくりの理解を深めることに繋がっていた。



▲授業場面ごとにデジタル教科書及び学習支援ソフトの活用方法を整理

- 動画視聴に際しては「自身の授業と比較して良いと感じたポイントを見つけてほしい」と事前に示したことで、動画を視聴する視点が明確となり、受講者が積極的に活用ポイントを捉え、メモを取る様子が見られた。

受講者からメモされた主な「活用ポイント」

- 個々のペースで学習を進めることができる。
- 試行錯誤を行いやすい。
- 拡大表示や書き込みが可能である。
- 内容を視覚的に捉えやすい。
- 学習活動の効率化により、児童生徒の思考時間を十分に確保することができる。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.3. 奈良県教育委員会
3.3.4. 研修改善（第２回）

■ 研修の流れ及び実際の研修の様子は以下のとおりです。

研修の流れ

レクチャー　有識者の講義（これからの授業の在り方）　60分

中盤：デジタル教科書導入の意義の説明

- 学習者の多様化が進んでいる現状を踏まえ、学習者一人一人の特性に応じた指導・支援の重要性について説明。
- 「VARKモデル」を用いて、学習スタイルごとの特徴を整理しながらデジタル教科書や学習支援ソフトをどのように活用できるか説明。

終盤：これからの授業の在り方の説明

- デジタル教科書が、個別最適な学びの実現に有効であることを示した上で、その学びを協働的な学びへと繋げていくことの重要性について、具体的な活用場面を交えて説明。
- 個別学習・協働学習・全体指導を往還しながら授業を構成していく考え方や、その実現に向けた授業設計上のポイントを解説。

ワークショップ　グループ協議（領域ごとの活用検討）　40分

グループに分かれて、算数・数学科の４領域における具体的な活用方法を検討し、全体に向けて発表を行った。

グループワーク：30分

- １グループ３～５名で教員と指導主事を同一グループに配置。
- グループごとに算数・数学科における4領域の活用を検討。
- 実際にデジタル教科書を手元で操作しながら活動し、グループで意見をホワイトボードに整理。

全体発表：10分

２グループが代表して検討内容を発表し、全体で共有。

研修の様子（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

- 「VARKモデル※１」を用いた説明は、学習スタイルごとの特徴に応じたデジタル教科書や学習支援ソフトの活用ポイントが整理され、「学習者の背景の多様化」と併せて説明されたことで、受講者にとって理解しやすい内容となっていた。

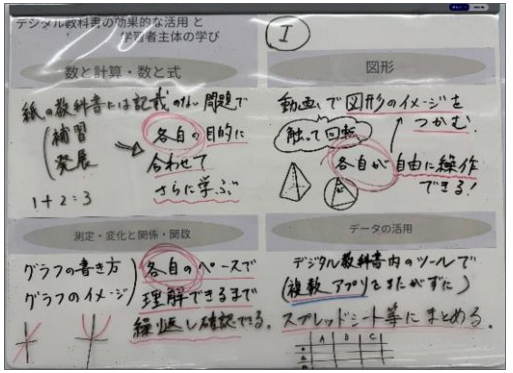
▲個に応じた学習スタイルを「VARKモデル」を用いて説明

- 個別学習・協働学習・全体指導を往還しながら進める授業スタイルの説明において、**小学校第5学年「平面図形の面積」を題材とした具体的な活用場面と結び付けて示されたことで、今後の授業や指導助言にデジタル教科書を活用していこうとする意識の高まりが感じられた。**

▲「平面図形の面積」を題材とした活用の様子

- グループ協議では、「中学校ではこのように活用している」「学校訪問時には○○の視点で指導助言している」等、**校種や立場を越えた多様な視点から意見交流が活発に行われていた。**
また、一部のグループでは、学習媒体の選択を学習者に委ねることが主体的な学びに繋がる等、学習者主体の学びに関する議論へと発展していた。

- **領域によっては、活用のイメージが持ちにくく、具体的なアイデアが十分に出ない様子も見られた。**



▲意見が整理されたホワイトボードの一例

※１　学習者の学習スタイルを①視覚型②聴覚型③読み書き型④体験型に分類したモデル。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.3. 奈良県教育委員会
3.3.4. 研修改善（第２回）

- 受講後アンケート※では、満足度・理解度・活用に対する意欲について自己評価を求めたところ、いずれの項目においても、**９割以上の受講者から肯定的な回答が得られました。**
- また、各項目について自由記述での意見を求めたところ、**「デジタル教科書が学びを広げると理解できた」「校種・立場を超えた意見交換ができた」という声**が多く寄せられています。
- 今後の研修に対する意見・要望としては、**領域や単元ごとの具体的な活用例を多く紹介してほしい**といった声が寄せられています。

受講後アンケートの結果（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

研修の満足度 92%が満足

満足度に関する自由記述（抜粋）

＜校種・立場を超えた意見交換ができた＞
- 校種・立場を超えて活用事例や課題を共有し、新たな視点を得られて良かった。（教員・指導主事）

＜学習スタイルごとの活用が整理できた＞
- 機能の紹介に留まらず、学習スタイルに応じたデジタル機能の具体的な使分けを知ることができ、満足した。（教員・指導主事）

＜県内の実践例を把握することができた＞
- 県内のデジタル教科書を用いた実践事例を知ることができて、良かった。（教員）

研修の理解度 98%が理解

理解度に関する自由記述（抜粋）

＜デジタル教科書が学びを広げると理解＞
- デジタル教科書を活用することで、学びの選択肢を増やせると理解した。（教員）
- 児童生徒が考える際のアシストツールとして活用できると分かった。（教員）
- 学習ツールの１つの選択肢になるよう、日々の活用を進めることが大切と感じた。（教員）

＜実際に操作して機能や活用方法を理解＞
- 実際にデジタル教科書に触れ、どのような機能があり、どのように使えるかが分かった。（教員）

＜主体的な学びに有効と理解＞
- デジタル教科書を有効に活用すると、児童生徒の主体性を引き出せると感じた。（教員）

活用に関する意識 90%が現状より向上

今後の活用に関する自由記述（抜粋）

＜授業改善の視点に加えていく＞
- 研修を通して多くの新たな発見があり、今後の授業づくりにおける引き出しの１つとして活用していきたい。（教員）

＜子供たちと一緒に活用を模索＞
- 活用できる場面を様々に知ったので、子供たちと一緒に触りながら活用を進めたい。（教員）
- 紙とデジタルそれぞれの利点を踏まえ、子供たちと共により良い活用方法を考えたい。（教員）

＜活用の目的を意識して指導助言＞
- 「何のために使うのか」を意識して助言したい。特に、子供が主体的に学習できているかという視点を大切にしたい。（指導主事）

■今後の研修に対する意見・要望
- 算数・数学は領域や単元によって学びの性質が大きく異なる教科なので、**領域や単元ごとの具体的な活用例が多く示されると、より検討しやすかった。**
- デジタル教科書の重要性を十分に理解できたため、**個別最適・協働的な学習場面において、どのように活用できるか、具体的に深めていくことに特化した研修に参加したい。**

※ 調査対象：研修受講者（奈良県内の小学校・中学校教員、市町村教委指導主事）　有効回答数：51　調査期間：研修実施後１週間（令和７年12月25日～12月31日）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.3. 奈良県教育委員会
3.3.4. 研修改善（第２回）

- 追跡アンケートでは、研修以降の実践に関し、**約６割が研修内容を活かしている**と回答しています。
- 実践の内容としては、**「立体的な動きの理解促進」**が挙げられ、児童生徒が一度操作に慣れると、**学習場面に応じて、紙の教科書とデジタル教科書を自ら使い分けられるようになった**との効果が示されました。
- また、研修内容を実践に活かせていない者からは、**「指導主事にデジタル教科書が配布されていないため、研究を進めることが難しい」**との声が寄せられています。

追跡アンケートの結果（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

実践での研修内容の活用

デジタル教科書の活用方法（抜粋）

＜立体的な動きの理解促進＞

- 「図形」領域では、立体的な動きを視覚的に捉えるために、デジタル教科書のコンテンツを活用している。

＜学習支援ソフトと組み合わせた活用＞

- デジタル教科書と学習支援ソフトを組み合わせて活用する取組を試している。

デジタル教科書活用による効果（抜粋）

＜デジタルとアナログの使い分け＞

- 児童生徒がデジタル教科書の操作に慣れるまでには一定の時間を要したが、一度操作に慣れると、学習場面に応じて、紙の教科書とデジタル教科書を自ら使い分けられるようになった。

デジタル教科書活用に関する課題（抜粋）

＜接続環境のトラブル＞

- 接続面でのトラブルが発生することがあり、場合によっては利用できない等の不便さがある

研修内容を活かせていない理由（抜粋）

＜指導主事にデジタル教科書が配布されていないため、研究を進めることが難しい＞

- 市の教育委員会にはデジタル教科書が配布されていないため、研修を踏まえて十分な研究を進めることができず、デジタル教科書に関する指導助言が難しい状況がある。

■今後の研修に対する意見・要望

- 指導者用デジタル教科書の活用には慣れているものの、学習者用デジタル教科書の活用はこれまで十分に行えていなかった。実践事例を知ることで、今後更に理解を深め、学習者用デジタル教科書の活用を進めていきたいと感じている。

※ 調査対象：研修受講者（各郡市代表の教員・指導主事（算数・数学科を担当）、教員はデジタル教科書が配布されている方、指導主事は指導助言の機会があった方）　有効回答数：８
調査期間：研修実施から約１か月後（令和７年11月17日～11月28日）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.3. 奈良県教育委員会
3.3.4. 研修改善（第２回）

■ 研修における受講者の様子や受講後アンケートの結果から、有識者を交えた振返りを行い、「研修の成果に繋がった点」と「課題」、それらを踏まえた「今後の研修に向けた取組」を整理しました。

	成果と課題	今後の研修に向けた取組
研修の成果に繋がった点	**概念的な内容を、具体的な実践例と結び付けて説明したこと** • 研修前は、算数・数学科におけるデジタル教科書活用の具体的な授業イメージを持つことが困難な段階であり、活用の必要性に対する理解を深める必要があった。 • そこで、教科の見方・考え方や個別学習・協働学習・全体指導を往還しながら進める授業スタイル等の概念的な内容を、具体的なデジタル教科書の活用方法や実践例と結び付けて説明した結果、受講者は「なぜデジタル教科書を活用するのか」という意義について、理解の深化に繋がった。	今後の研修においても、概念的な内容の説明と併せて具体的な活用方法や実践例を関連付けて取り上げることで、受講者がより深く理解できるよう工夫する。
	校種や立場を越えた多様な視点を共有できたこと • 研修前は、校種や立場を越えたデジタル教科書の実践や考え方を共有する機会は限られていたため、更に視野の拡張を図る観点から、小学校・中学校教員及び指導主事を同一グループに配置した。 • その結果、異なる校種や立場からの意見交流が活発に行われ、受講者が自身の実践を振り返るとともに、新たな視点や問いを獲得する契機となった。	今後の研修においても、研修の目的に応じて、校種や立場を越えた多様な視点を共有できる機会を積極的に設け、受講者間の意見交流を促す。
課題	**領域や単元ごとの具体的な活用例の提示** • グループ協議において、領域によってはデジタル教科書の活用のイメージが持ちにくく、具体的なアイデアが十分に出ない様子も見られた。 • 算数・数学科は、領域や単元ごとに特性が異なるため、領域別の具体的な実践事例を提示することが有効であると考えられる。	今後の研修では、算数・数学科における領域や単元ごとの特性を踏まえた、デジタル教科書の具体的な活用例を更に充実させて提示する。

研修担当者の声（本研修の振返り）

小学校・中学校教員及び指導主事を同一のグループに配置したことで、 ICT活用の観点に留まらず、教科の観点からデジタル教科書の活用について考えることができました。また、交流の機会を設けたことにより、互いの状況を理解する良い機会となりました。（奈良県　福呂　指導主事）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.3. 奈良県教育委員会
3.3.5. 総括

■ 奈良県教育委員会での実証を通じて得られた「研修改善のポイント」と、実証を踏まえた「今後の取組」は以下のとおりです。

奈良県教育委員会における研修改善の取組の総括

研修改善のポイント

研修改善（1回目）

他の教員とデジタル教科書の活用方法について意見交換できたこと ➡ 参考：p.59

- 研修でグループ協議を実施する際は、積極的にデジタル教科書を活用する教員を中心に意見交換することで、互いにアイデアを出し合い、活用の幅を広げることができる。

研修改善（2回目）

概念的な内容を、具体的な実践例と結び付けて説明したこと ➡ 参考：p.65

- 概念的な内容と具体的なデジタル教科書の活用方法や実践例と結び付けて説明することで、受講者は活用意義について理解を深めることができる。

校種や立場を越えた多様な視点を共有できたこと ➡ 参考：p.66

- 小学校・中学校教員及び指導主事を交えてグループ協議を行うことで、異なる校種や立場からの意見交流が活発に行われ、受講者が自身の実践を振り返るとともに、新たな視点や問いを獲得する契機となる。

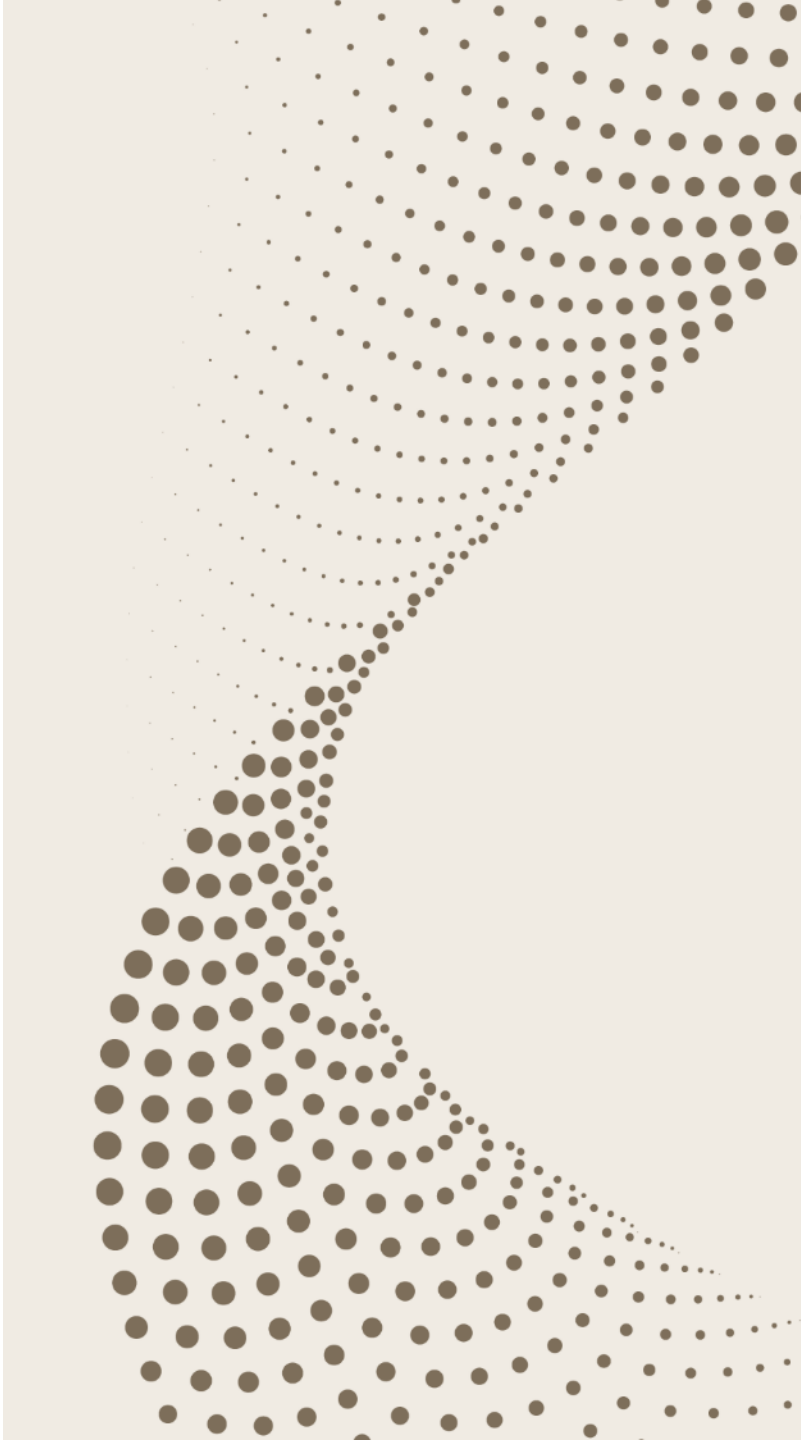
実証成果を踏まえた県における今後の取組

- これまで、小学校・中学校教員と指導主事が直接交流する機会は限られていたため、研修を通じて意見交換の場を設けられたことは非常に有意義でした。県の指導主事から県内の事例を発信したこともデジタル教科書の活用促進に繋がったと考えています。（奈良県 福呂 指導主事）
- 同形式の研修を外国語科と算数・数学科に分けて実施したことで、各教科に適したデジタル教科書活用を検討することができました。今後はより多くの教科でデジタル教科書活用方法を検討し、県全体での活用を更に進めていきたいと考えています。（奈良県 福呂 指導主事）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組

3.1. 埼玉県教育局
3.2. 福井県教育庁
3.3. 奈良県教育委員会
3.4. 熊本県教育庁
3.5. 鹿児島県教育庁



3. 各実証県における研修改善の取組
3.4. 熊本県教育庁
3.4.1. 基本情報

■ 実証研究に御協力いただいた熊本県教育庁に関する基本情報、実証前の課題認識は以下のとおりです。

県担当部署	熊本県教育庁　市町村教育局　義務教育課		
県担当者	松下　智恵　指導主事	担当有識者	札幌国際大学　岩﨑　有朋　教授
県における過年度の取組	• 県の事業としてICT活用に関する多様な研修の実施。 • 学校現場で活用できる事例集の作成にも継続的に取り組んでおり、その取組の中で、一部の学校と組み合わせてデジタル教科書を積極的に活用した具体的な実践事例を創出。 • 作成した事例集を県の公式HPにて発信。		

実証前の課題認識

学校・教員

➢ **デジタル教科書の意義や効果の理解が進んでいない。**

- 端末や指導者用デジタル教科書は活用しているが、学習者用デジタル教科書の活用は進んでおらず、意義や効果の理解も浸透していない状況。
- 教科の特性に応じた効果的な活用方法や、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に繋がる活用方法を更に知る必要がある。

教育委員会・指導主事

➢ **指導助言の具体的なイメージを十分に持てていない。**

- デジタル教科書の活用経験が乏しく、学校訪問等でも先進的な授業に触れる機会は少ない。
  そのため、どのように指導助言すべきか、具体的にイメージできていない。
- デジタル教科書の特性に対する理解が十分とは言えず、その特性を活かして学習を促す指導助言が行えていない。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.4. 熊本県教育庁
3.4.2. 年間計画

■ 熊本県教育庁における、令和７年度のデジタル教科書の活用に関する研修計画は以下のとおりです。このうち、本事業では、「『熊本の学び』わくわくサークル」と「第２回『熊本の学び』作業部会」を研修改善に関する実証対象としました。

	対象	概要
『熊本の学び』わくわくサークル（第１回研修） 実証対象：p.74	• 小中学校教員、指導主事 合計約100名	• デジタル教科書の意義の理解を目的に有識者による講義を実施。 また、活用による効果を体感するとともに、活用イメージをもつことができるよう模擬授業を実施。 • 幅広く受講を促せるよう、参集・オンラインのハイブリッド型研修とした。
第１回『熊本の学び』作業部会	• 県・教育事務所指導主事 17名	• 県内の指導主事間で、紙・デジタル問わず教科書そのものの理解を深めることを目的に研修を実施。 • 参集形式で約１時間程度、本事業の過年度成果物である事例動画を視聴しながらグループで協議。
第２回『熊本の学び』作業部会（第２回研修） 実証対象：p.81	• 県・教育事務所指導主事 31名	• デジタル教科書の機能や活用の可能性を理解し、訪問指導や校内研修においてデジタル教科書の活用に関する具体的な提案ができるよう、有識者による講義、グループでの授業検討、受講者間で模擬授業を実施。 • 具体的には、有識者の講義を踏まえて、グループでデジタル教科書を活用した授業検討を行い、その後、ワールドカフェ形式で全体交流しながらグループで検討した授業を互いに実施し合った。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.4. 熊本県教育庁
3.4.3. 研修改善（第１回）

■ １回目の実証対象とした研修（『熊本の学び』わくわくサークル）の概要は以下のとおりです。

現状の課題

教員・指導主事共に、**デジタル教科書活用の意義や効果の理解が進んでいない。**また、活用に当たって何から始めるべきか、どのように進めるべきか分からない。

研修実施

目指す姿

教員は、**デジタル教科書を段階的に活用**し、学習者主体の学びを実現する。指導主事は、**教員が目的に応じて段階的に活用できるよう、**指導助言で支援する。

研修の概要

研修のポイント

- ✓ 地理的制約に左右されず、誰でも気軽に受講できるよう、**参集・オンラインのハイブリッド型研修**とする。
- ✓ 研修を通じて、気付きや振返りを書きとめ、それらを基にオンライン上で交流ができるよう、**デジタルのワークシートを用意**する。
- ✓ 各受講者が、授業における活用イメージが持てるよう、**デジタル教科書を活用した模擬授業を実施**する。

対象者：熊本県内の小中学校教員、指導主事　約100名

実施方式：参集＋オンライン

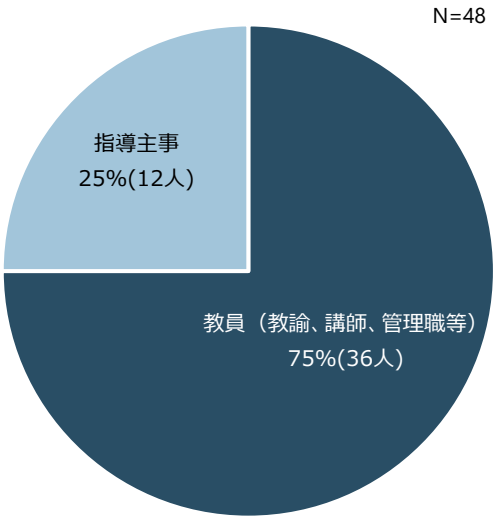
目的	目標	内容
① 知識・理解等の理解	• 「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させる授業づくりと関連して、デジタル教科書の意義や効果を理解する。	研修前の取組：事前アンケートの実施 レクチャー：有識者の講義（授業づくりの要点の理解） レクチャー：模擬授業（活用イメージの具体化） リフレクション：個人の振返り（気付き等の明確化）
② スキル・技能等の習得	• 模擬授業やデジタル教科書の操作を通じて、デジタル教科書の効果的な活用場面や活用方法のイメージを持つ。	
③ 意識・行動等の変容	• デジタル教科書を活用した授業を実践したり指導助言したりする意欲を高める。	

©2026 ABeam Consulting Ltd.

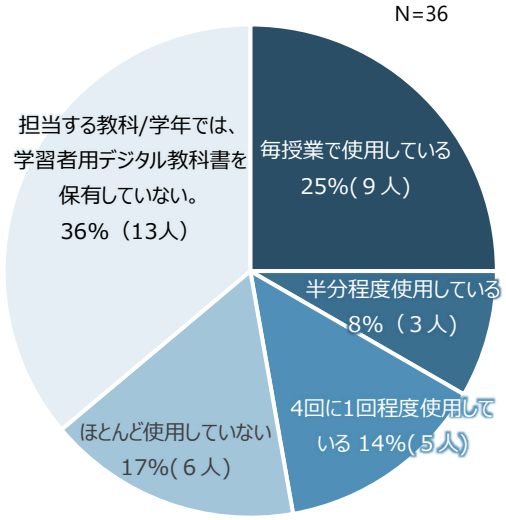
3. 各実証県における研修改善の取組
3.4. 熊本県教育庁
3.4.3. 研修改善（第１回）

- 本研修の受講者の傾向※は、以下のとおりです。
- 本研修の受講者は、教員（教諭・講師・管理職等）が約４分の３、指導主事が約４分の１を占めております。
- 教員はデジタル教科書の活用が進んでいる方も多い一方で、指導主事によるデジタル教科書の指導助言は「学校訪問時の１/４未満」と回答した者が８割以上を占めており、指導主事を起点としたデジタル教科書の活用促進は研修開始時点では、十分に進んでいない状況が見られました。

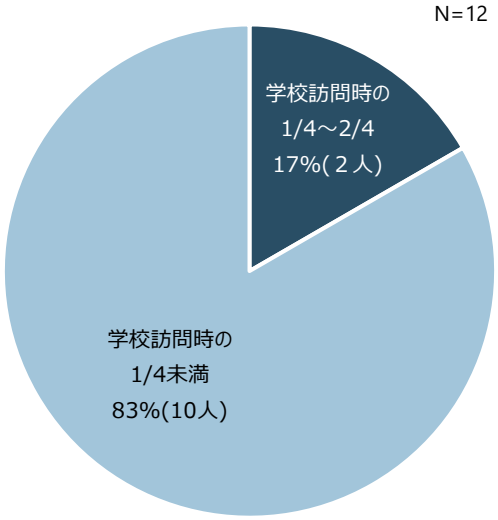
役職



【教員】
デジタル教科書の活用頻度



【指導主事】
デジタル教科書に関する指導助言頻度



※ この傾向は受講後アンケート結果に基づくものであり、実際の受講者数と有効回答数が異なる。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.4. 熊本県教育庁
3.4.3. 研修改善（第１回）

■ 研修の流れ及び実際の研修の様子は以下のとおりです。

研修の流れ

研修前の取組　事前アンケートの実施

受講者のデジタル教科書の活用に関する状況や課題をアンケートで把握した。

レクチャー　有識者の講義（授業づくりの要点の理解）　50分

有識者から、随所で受講者間の交流の時間を設けながら、効果的な活用に至るまでの段階や授業づくりに必要な視点を説明した。

■主な講義内容

前半：効果的な活用に向けた段階

- デジタル教科書の効果的な活用に至るまでには段階があることを説明。その後、各受講者に対して「自身がどの段階にいるか」を問いかけ、自身の立ち位置を意識させた。

後半：デジタル教科書を用いた授業づくり

- 事例動画中の授業者や学習者のインタビュー部分を視聴。それぞれの立場からデジタル教科書の効果を紹介。
- 過年度事業の事例集を基に、授業者主導、学習者主導の場面に着目しながら活用方法を解説。
  あわせて、事例集では、活用のポイントが一般化されており、教科を超えて応用が可能であることを説明。
- 単元構想時に重視すべき視点としてPBL（Project Based Learning）デザインを紹介。
  何を学ぶか（内容知）、どのように学ぶか（方法知）の２軸で授業づくりを考えることの重要性を説明。

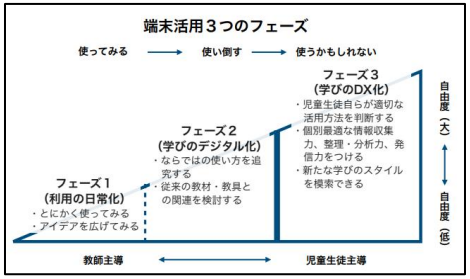
次頁に続く

研修の様子（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

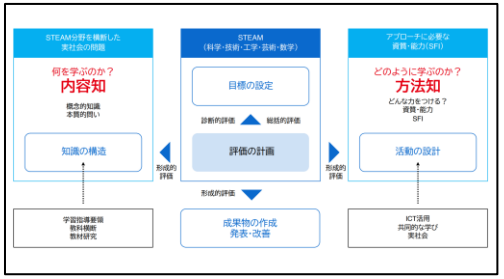
- 事前アンケートでは、「デジタル教科書でどのようなことができるか分からず、活用への一歩が踏み出せない」「活用は始めてみたものの、児童が主体となって学びを進める段階には至っていない」等の課題が挙げられている。これらのことから、デジタル教科書を効果的に活用するまでの取組の進め方について、一定のニーズがあることがうかがえた。

- 有識者が「端末活用の３つのフェーズ（下左図）」を基に、**デジタル教科書の効果的な活用に向けた道筋を説明**。受講者のメモや頷きが多く、訴求することができていた。
  また、**各受講者に「自身がどの段階にいるか」を投げかけ、自身の立ち位置を明確に認識させたこと**で、以降の研修において、それぞれの活用段階に応じた気付きや学びを得ることができていた。

- 有識者が、「PBLデザイン（下右図）」を基に、単元構想時の要点を解説した。
  「端末活用のフェーズ１では、どのように学ぶか（方法知）に着目し、子供たちと活用に慣れていくと良い。子供たちが活用に慣れ、学習手段として使いこなせるようになったら、何を学ぶか（内容知）に着目すると良い。」と説明した際に、受講者の頷きやメモが多かった。
  単元構想時に意識すべき点をフェーズごとに分けて解説したことで、各受講者の立ち位置に応じた取組が明確化され、高く訴求した。



▲効果的な活用に至るまでの段階について説明



▲PBL(プロジェクト型学習）デザインを紹介

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.4. 熊本県教育庁
3.4.3. 研修改善（第１回）

■ 研修の流れ及び実際の研修の様子は以下のとおりです。

研修の流れ

レクチャー　模擬授業（活用イメージの具体化）　20分

有識者が授業者、受講者が学習者の立場となり、模擬授業を行った。

■模擬授業の主な内容

（題材：東京書籍株式会社　中学校２年生　理科「ホットケーキの秘密」）

«本時の課題»　蒸しパンを作る時に、ベーキングパウダーの有無で出来上がりに違いが出る理由は何か説明する。

① **学習者の立場：**デジタル教科書内の写真や資料、文章を根拠としながら、グループごとに説明内容を整理。

② **授業者の立場：**ルーブリック（本時の評価基準）をいつ子供たちに共有すると良いかについてグループで議論。

③ **総括：**学習活動の意図や評価等、授業そのものを子供たちと共有しながら作り上げていくことで、子供たちの主体性を引き出し、学習者主体の学びへと繋がることを説明。

リフレクション　個人の振返り（気付き等の明確化）　10分

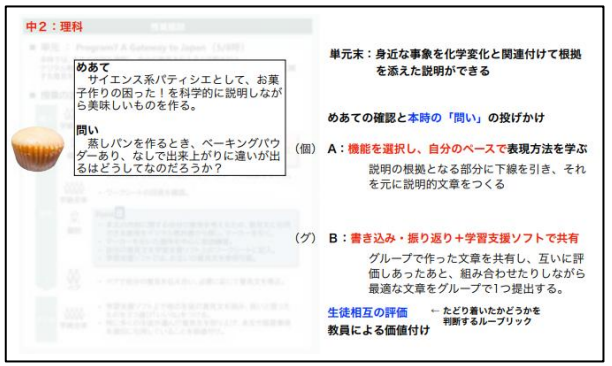
各受講者が、研修を振返り、気付きや発見、今後活かしたいこと等について、オンライン上のワークシートに記入。他者の記入内容も確認・参照できるようにした。

研修の様子（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

- 模擬授業におけるグループワークでは、「例えば、根拠となる箇所に線を引き、それらを見せ合って説明すると良い。」「実験動画は視覚的に捉えやすいし、困った時に何度でも見ることができる。」等の発言があった。**デジタル教科書の操作を通じて、実際の授業における活用イメージを具体化することができた。**

- ルーブリックを子供に共有するタイミングについて、熱心に議論する様子が見られた。デジタル教科書活用と同様に、評価の中身を子供に共有することも、学習者主体の学びを引き出す重要な要素であると確認された。

- 円滑にグループワークを行うために、事前にオンライン接続を確認することが望ましい。



▲先行事例を応用しながら模擬授業を実施
（赤字箇所：先行事例から応用したポイント）

- オンライン上で、他の受講者のワークシートを参照しながら振り返る様子も見られた。他者から新たな視点を取り入れることで、学びの幅を広げる効果があった。

講義中のメモ	模擬授業中のメモ	振返り
• ３つのフェーズ、常に自分の学級がどこにいるのかを認識することが重要。 • どのように学ぶか（方法知）のみとなっていないか。活用は手段であることを意識する。	• 教科書のキャプチャは根拠を整理する時に便利。まずは操作に慣れていきたい。 • 評価の視点を明確にするため、ルーブリックを子供に共有することが大切。	• 最初は時間をかけて活用方法に慣れていく時間が必要だと分かった。 • 授業そのものを子供たちと共有しながら作っていきたい。

▲受講者がオンライン上のワークシートに実際に記載した内容

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.4. 熊本県教育庁
3.4.3. 研修改善（第１回）

- 受講後アンケートでは、満足度・理解度・活用に対する意欲について自己評価を求めたところ、いずれの項目についても**９割以上の受講者から肯定的な回答が得られました。**
- また、各項目について自由記述での意見を求めたところ、**「模擬授業を通じて活用イメージを具体化することができた」「デジタル教科書の段階的な活用について理解することができた」**といった意見が多く挙げられました。
- 今後の研修に対する意見・要望としては、**「より実践的な活用法を学びたい」**といった声が寄せられています。

受講後アンケートの結果（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

研修の満足度 92%が満足

満足度に関する自由記述（抜粋）

＜模擬授業を通じた活用イメージの具体化＞
- 学習支援ソフトを活用した協働学習の場面が、他教科への応用のヒントになった。（教員）

＜子供と学ぶことへの意欲の高まり＞
- 子供たちと実践してみたいことが多く見つかり、満足感を得られた。（教員）
- 機能や目的を理解し、有用性を認識することで実際に指導助言に繋げられそうと感じた。（指導主事）

＜他者参照による学びの深化＞
- 他者の振返りを読むことで「たしかに！」と共感する場面が多く、講義内容の理解が一層深まった。（教員）

研修の理解度 96%が理解

理解度に関する自由記述（抜粋）

＜デジタル教科書の段階的な活用の理解＞
- デジタル教科書の活用段階の中で、自分がどの段階にいるかを確認でき、今後の方向性を見出せた。（教員）

＜学習者主体の学びの重要性を理解＞
- 児童生徒に学びを託し、見守る教員の在り方を今後の指導に活かしたい。（指導主事）

＜具体的な活用イメージの理解＞
- デジタル教科書の機能を把握し、授業の場面をイメージできるようになった。（教員）

活用に関する意識 96%が現状より向上

今後の活用・助言に関する自由記述（抜粋）

＜学習の目的に沿ったデジタル教科書の活用＞
- デジタル教科書の使用を目的とせず、あくまで学習の手段として位置づけることを助言していきたい。（指導主事）

＜児童生徒主体の学びにおける活用＞
- 教員が一方的に教えるのではなく、子供が自分のペースで学び、仲間と協力しながら学習を進められる授業展開を実践したい。（教員）

＜年間を見通した計画的活用＞
- 授業者に対して年間を通した活用計画を問いかけ、計画的にICTを取り入れられるよう指導していきたい。（指導主事）

■今後の研修に対する意見・要望

- 今回の模擬授業は大変参考になった。次回は**より長い時間模擬授業を確保し、課題の数を増やすことで、様々なケースを想定し、実践的な活用法を学びたい**。
- オンライン配信の際に、音声が途切れたり映像が乱れたりする場面があった。今後は安定した配信環境を整えてほしい。

※ 調査対象：研修受講者（熊本県内の小学校・中学校教員、指導主事）　有効回答数：48　調査期間：研修実施後２週間（令和７年８月21日～９月３日）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.4. 熊本県教育庁
3.4.3. 研修改善（第１回）

- 追跡アンケートでは、研修以降の実践に関し、**６割以上が研修内容を活かしている**と回答しています。
  なお、研修内容を実践に活かせていないと回答した者はいずれも指導主事で、「指導助言の機会がなかった」と回答しています。
- 実践の内容について、教員は、子供たちの理解促進に向け、本文読上げ機能や図形領域のコンテンツを活用していると回答があり、**研修後、デジタル教科書に触れながら活用を進めている様子**がうかがえます。
- 指導主事は、教員に対し、活用「自体」が目的化しないよう**活用の意義や目的を意識するよう助言**していることが分かります。

追跡アンケートの結果（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

実践での研修内容の活用

デジタル教科書の活用方法（抜粋）

＜デジタル教科書の機能により理解を促進＞

- デジタル教科書の音声読上げ機能を活用し、文章理解に繋げている。（教員）
- 図形領域にて、図形を動かしながら生徒の思考を促すことができる。（教員）

＜活用の目的を意識するよう指導＞

- デジタル教科書はあくまでツールの１つであり、子供の実態や学習内容に応じて活用することの大切さを伝えている。（指導主事）
- 学習者主体の学びの実現に、何故、デジタル教科書が必要かを伝えている。（指導主事）

デジタル教科書活用による効果（抜粋）

＜自己調整学習を引き出すことができる＞

- 自分で学習用具・方法を選択できる子供はどんどん学習を進めていくことができる。（教員）

デジタル教科書活用に関する課題（抜粋）

＜アナログツールとの併用の在り方＞

- デジタル教科書と紙のノート、教員の板書の効果的な活用を模索している。（教員）

研修内容を活かせていない理由（抜粋）

＜指導助言の機会がない＞

- 指導助言の機会がないため。（指導主事）
- 高等学校ではデジタル教科書を使用しておらず、指導助言の機会はない。（指導主事）

■今後の研修に対する意見・要望

- デジタル教科書の実践例を更に知ることで、教科特性の応じた指導の充実を図りたい。（教員）
- 学習者用デジタル教科書の取扱いに関する国の動向や、活用の好事例については引き続き情報が欲しい。（指導主事）

※ 調査対象：研修受講者（小学校・中学校教員、指導主事）　有効回答数：12　調査期間：研修実施から約２か月後（令和７年10月６日～10月24日）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.4. 熊本県教育庁
3.4.3. 研修改善（第１回）

■ 研修における受講者の様子や受講後アンケートの結果から、有識者を交えた振返りを行い、「研修の成果に繋がった点」と「課題」、それらを踏まえた「今後の研修に向けた取組」を整理しました。

	成果と課題	今後の研修に向けた取組
研修の成果に繋がった点	**デジタル教科書の具体的な活用段階を強調して示したこと** • 研修前の受講者は、効果的な活用に至るまでの道筋を想像できていなかった。 • そこで、講義冒頭に、活用段階を示し、現状、自身がどの段階に位置しているか示し、PBL等も用いながら、今後どのように活用を進められるか、意識付けを行った。 • その結果、受講者は自らの立ち位置を踏まえて研修に取り組み、効果的な活用に至るまでの道筋を理解するとともに、ネクストアクションを明確化することができた。	今後の研修においても、受講者が自身のデジタル教科書の活用段階を把握できるようにするとともに、段階に応じた活用の進め方を理解してもらう。
	模擬授業にて、実際の活用イメージを想起させたこと • 研修前の受講者は、実際の授業での活用イメージを十分に持てていなかったため、活用が進んでいなかった。 • そこで、有識者による模擬授業を実施し、学習者の立場を体験してもらうことで、具体的な活用イメージを想起しやすい環境を整えた。 • その結果、受講者は、デジタル教科書活用の意義や効果を実感をもって理解し、授業における具体的な活用イメージを形成することができた。	今後の研修においても、活用段階に応じて、具体的な活用イメージを想起しやすいように研修を設計する。
課題	**実践的な活用方法を学ぶ機会の更なる確保** • 本研修は 1.5 時間という限られた時間の中で、デジタル教科書活用の意義や効果、具体的な活用イメージを、初期段階のステップとして十分に理解してもらった。 • 今後の研修については、「具体的な授業への展開をより深め、実践に直結する内容を更に取り上げてほしい」といった意見が寄せられた。	今後の研修では、デジタル教科書の活用方法検討といったアウトプットの時間を設け、デジタル教科書の活用を受講者自身のものとして定着してもらう。

研修担当者の声（本研修の振返り）

本研修は、参集とオンラインを併用したハイブリッド形式で実施したことで、より多くの受講者を募ることができ、幅広く訴求できたと感じています。
今後は更に理解の深化を図るため、対象を明確にした研修を実施することも検討していきたいです。（熊本県　松下　指導主事）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.4. 熊本県教育庁
3.4.4. 研修改善（第２回）

■　２回目の実証対象とした研修（第２回『熊本の学び』作業部会）の概要は以下のとおりです。

現状の課題

指導主事は、デジタル教科書の活用経験が十分ではなく、**指導助言の選択肢として、自信を持ってデジタル教科書を提示できていない。**

研修実施

目指す姿

デジタル教科書の機能や活用の可能性を理解し、訪問指導や校内研修において、**デジタル教科書の活用に関する具体的な提案ができる。**

研修の概要

研修のポイント

- ✓ 各教科の特性に即したデジタル教科書の活用方法が検討されるよう、**受講者を専門教科ごとにグループ編成**する。
- ✓ 活用イメージを具体化するために、グループごとに**具体的な授業場面を想定した模擬授業を検討・実施**する。
- ✓ 模擬授業は、教科を超えてデジタル教科書の活用・指導助言のポイントが共有できるよう、**ワールドカフェ形式でグループを超えた交流を促す。**

対象者：熊本県内の指導主事　31名

実施方式：参集

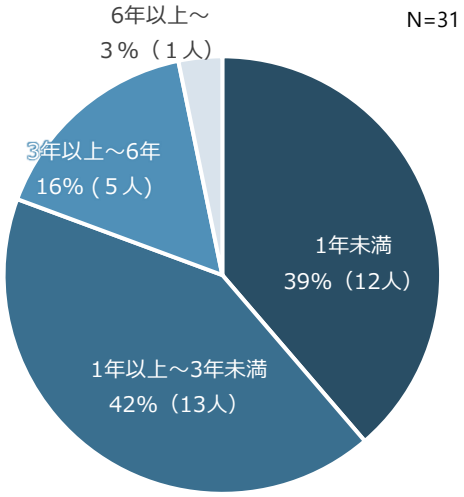
目的	目標	内容
① 知識・理念等の理解	• デジタル教科書の意義や授業での活用・指導助言のポイントを理解することができる。	レクチャー　有識者の講義（指導助言の視点の明確化）
② スキル・技能等の習得	• デジタル教科書を活用した授業づくりに関する指導助言ができる。	ワークショップ　グループ協議（教科ごとの授業検討）
③ 意識・行動等の変容	• デジタル教科書の活用に関する指導助言について自信をもつことができる。	ワークショップ　模擬授業（相互参観による授業体験）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

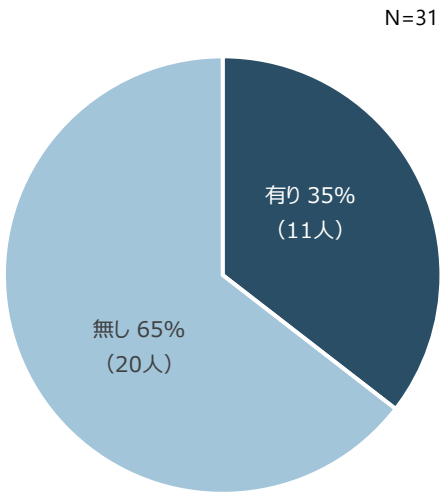
3. 各実証県における研修改善の取組
3.4. 熊本県教育庁
3.4.4. 研修改善（第２回）

- 本研修の受講者の傾向は、以下のとおりです。
- 受講者は全て指導主事であり、その経験年数は「３年未満」が約８割を占め、比較的経験年数の浅い指導主事が多い構成となっています。
- 約７割の指導主事が学校在籍時にデジタル教科書の活用経験がなく、また、デジタル教科書の活用に関する指導助言の機会についても「学校訪問時の１/４未満」と回答した者が全体の９割を占めていることから、研修開始時点においては、活用経験及び指導助言経験の双方が十分とは言えない状況にあることがうかがえます。

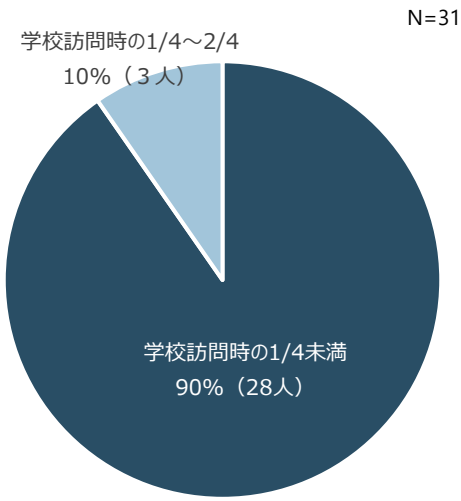
指導主事経験年数



デジタル教科書の活用経験



デジタル教科書に関する指導助言頻度



©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.4. 熊本県教育庁
3.4.4. 研修改善（第２回）

■ 研修の流れ及び実際の研修の様子は以下のとおりです。

研修の流れ

レクチャー　有識者の講義（指導助言の視点の明確化） 30分

有識者から、指導主事に求められる役割や視点を踏まえながら、デジタル教科書の活用に関する知見が体系的に共有した。

■主な講義内容

序盤：指導主事に必要なマインドセット

- 「現場への働きかけの難しさ」といった課題を起点に指導主事の役割を再確認するとともに、学校現場への提案の幅を広げるため、多様な考え方に触れ、自身の価値観や認識をアップデートすることの必要性を強調。

中盤：デジタル教科書の具体的な活用方法

- 「デジタル教科書にはどのような機能があるか」「過年度事業の好事例動画を視聴した感想」を受講者同士で意見交換。
- デジタル教科書の基本的な機能を説明した後、効果的な活用場面と指導助言時に求められる「問い」や「価値付け」との関連を解説。

終盤：グループ協議における授業検討のポイント

- 研修後半のグループ協議に向け、模擬授業を検討する際に意識すべき「授業検討のポイント」について説明。

授業検討のポイント

1. 授業では課題の解決に向けて自分で考え自分から取り組んでいる。
2. 自分の考えを発表する機会で、自分の考えが上手く伝わるよう、資料や文章、話の組立て等を工夫して発表している。

次頁に続く

研修の様子（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

- 課題を起点に指導主事の役割を冒頭で確認したことで、**受講者は指導助言の幅を広げる重要性、デジタル教科書の効果的な活用方法を学ぶ必要性を理解**し、研修への意欲が高まっている様子が見られた。
- 受講者同士の意見交換では、「解説動画（スマートレクチャー）を児童生徒が自分の好きなタイミングで繰り返し視聴できる点は有効」といった機能面を評価する意見や、「算数・数学科の図形領域では、紙教材よりもデジタル教科書のシミュレーション機能の方が児童の集中を保ちやすい」等、デジタル教科書の活用をイメージし、**具体的な授業場面を想定した活発な意見が交わされていた。**
- デジタル教科書の機能確認後に、効果的な活用場面と指導助言時の「問い」「価値付け」を関連付けて説明したことで、**理論と実践を結び付けながら理解を深めて、学校現場への指導助言におけるヒントを得ている**様子がうかがえた。

見出された効果的場面	指導助言の時の「問い」「価値づけ」
学習者用端末の操作への慣れ	・いつでも使える、使ってもよい環境なのか？ ・カメラ、共同編集、クラウド保存など多様な機能が使えるのか？ ・使う上でのリテラシーは育っているのか？
デジタル教科書の機能の理解	**・書き込み、拡大、保存などの機能を理解しているのか？** ・授業で多様な機能を体験する機会は十分確保されているのか？ ・自分なりの（得意な）使い方をつかんでいるのか？
学習支援ソフトウェアとの連携	・学習支援ソフトウェアの機能・特徴を知っているのか？ ・必要なときに使える環境なのか？ ・連携活用によってメリットを感じる場面が仕掛けてあるのか？
今の学習活動の目的を理解	・その学習に取り組んでみたくなるような課題設定なのか？ ・この活動でたどり着くゴールが分かっているのか？ ・そのために何をどうしたらいいのかが理解できているのか？
内容理解につなげる試行錯誤	・考えの根拠がデジタル教科書から見出だせる課題設定なのか？ ・納得・理解できるだけの十分な活動時間が確保されているのか？ ・個の理解と協働による理解の場が仕掛けられているのか？

▲効果的な活用場面と指導助言時の「問い」「価値付け」

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.4. 熊本県教育庁
3.4.4. 研修改善（第２回）

■　（前頁の続き）

研修の流れ

ワークショップ　グループ協議（教科ごとの授業検討）　50分

専門教科別にグループを編成し、教科特性を踏まえたデジタル教科書の活用を意識しながら、模擬授業の内容を整理した。

■グループ協議の実施方法

- 国語、算数・数学、理科、社会、外国語の主要５教科ごとに３～４人のグループを編成。
- サンプル版のデジタル教科書を活用し、授業の一場面を想定して、活用する機能や授業展開について検討。
- 検討内容は、オンライン上のワークシートに整理・記録。

ワークショップ　模擬授業（相互参観による授業体験）　55分

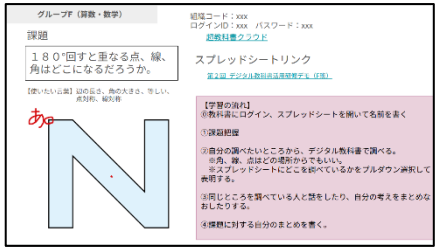
ワールドカフェ形式で、「授業者」と「学習者」の役割を分担しながら、デジタル教科書を活用した模擬授業を実施した。

■ワールドカフェの実施方法

- デジタル教科書を実際に操作しながら模擬授業を実施。
  模擬授業後、活用方法や指導助言のポイントについて説明。
- 各セット開始時に、各グループから1名を授業者として残し、他のメンバーは学習者として席を移動。受講者は他グループを順に回り、発表を聞く。
  これを３セット行い、セットごとに授業者を交代。
- 発表者と受講者の間で、模擬授業の進め方やデジタル教科書の活用の工夫点、改善点等について意見交換を実施。

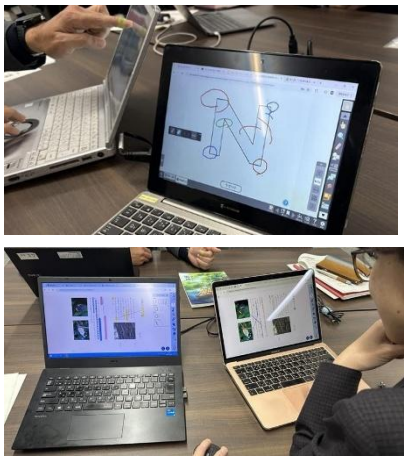
研修の様子（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

- 協議の中で**デジタル教科書の機能を発見し、相互に紹介し合うことで、多くの受講者が新たな気付きを得ていた。**また、専門教科ごとにグループ編成したことにより、専門性を踏まえた検討がなされていた。
- 後半の活動では、全員が模擬授業を実施する必要があったため、一人一人が議論に主体的に参加していた。また、実際に授業の１場面を想定したことで、活用のポイントを詳細に確認できていた。
- 算数・数学の授業を検討していたグループを除き、**学習支援ソフトと組合せた活用方法については検討されていない様子**だった。



▲「算数・数学」の授業を検討していたグループのワークシート

- 算数・数学を扱った模擬授業では、個別にデジタル教科書のシミュレーション機能を用いて試行錯誤した後、全体でその内容を振り返る展開が見られた。
  前段の講義の中で触れられていた「効果的な活用場面」を意識した授業検討がなされ、個別での活動場面と、学級全体での指導場面を意図的に区別した授業構成がなされていた。
- 他グループの模擬授業を体験することで、児童生徒の立場からデジタル教科書の効果を感じる機会となり、**学習者目線で考えること、経験することの重要性を再認識**する契機となっていた。



▲ デジタル教科書を活用して、模擬授業を受講している様子

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.4. 熊本県教育庁
3.4.4. 研修改善（第２回）

- 受講後アンケートでは、満足度・理解度・活用に対する自信について自己評価を求めたところ、いずれの項目についても**全受講者から肯定的な回答が得られました。**
- また、各項目について自由記述での意見を求めたところ、**「具体的な場面での活用を学ぶことができた」「指導助言の幅を広げる重要性を再認識した」**といった意見が多く挙げられました。
- 今後の研修に対する意見・要望としては、**学習支援ソフトと効果的に組み合わせる方法を知りたい**という声が寄せられています。

受講後アンケートの結果（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

研修の満足度 100%が満足

満足度に関する自由記述（抜粋）

＜具体的な場面から活用・指導助言の視点を学ぶことができた＞
- 模擬授業の検討を通じて、実際の授業場面にどのように活かすかを具体的に考えることができた。
- グループで試行錯誤しながら授業案を作成する過程において、授業場面に応じたデジタル教科書の効果的な使い方を理解するとともに、指導助言の視点を学ぶことができた。

＜他校や他教科の受講者から学ぶことができた＞
- 異なる教科の模擬授業を参観し、多様な視点やアイデアを得ることで、授業づくりに新しい発想を取り入れることができた。

研修の理解度 100%が満足

理解度に関する自由記述（抜粋）

＜指導助言の幅を広げる重要性を再認識＞
- 課題への対応策として、デジタル教科書を積極的に１つの手立てとして提案することで、より効果的な指導助言ができると再認識した。
- 自身が新たな学びに挑戦する姿勢が、効果的な指導助言に繋がると理解した。

＜デジタル教科書の指導助言におけるポイントを理解＞
- デジタル教科書の指導助言においては、「まずは使ってもらう」ことを重視し、教員自身が効果的な活用方法を模索しながら、授業に継続的に取り入れていく必要があると理解した。

活用に対する自信 100%が現状より向上

今後の活用に関する自由記述（抜粋）

＜課題に応じたデジタル教科書活用を促したい＞
- 訪問指導や校内研修において、課題に応じて、デジタル教科書を活用した具体的な手立てを、新たな選択肢として提示していきたい。

＜教科特性に応じた活用方法を提案したい＞
- デジタル教科書の機能を理解し、教科特性に応じた効果的な活用方法を提案したい。

＜学習者主体の学びを支える活用を広げたい＞
- 授業の主語、学びの主語を問いながら、学習者主体の学びを支えるような指導助言を行い、その際の選択肢として、デジタル教科書を提示したい。

■今後の研修に対する意見・要望
- **デジタル教科書と学習支援ソフトを効果的に組み合わせる方法**を知りたい。
- 教科書会社や教科によって使用できる機能やツールが異なるため、**全てのデジタル教科書のコンテンツをいつでも自由に使用**できると良い。

※ 調査対象：研修受講者（熊本県内の指導主事）　有効回答数：31　調査期間：研修実施後１週間（令和７年12月４日～12月11日）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.4. 熊本県教育庁
3.4.4. 研修改善（第２回）

- 追跡アンケートでは、研修以降の実践に関し、**６割以上が研修内容を活かしている**と回答しています。
  なお、研修内容を実践に活かせていないと回答した者はいずれも、「指導助言の機会がなかった」と回答しています。
- 実践の内容について、**めあてや目標達成の手段としてデジタル教科書を活用することを意識して指導助言を行っている**と回答がありました。また、**研修後、デジタル教科書が個別最適な学びを実現するための手段として活用されつつある様子**がうかがえます。
- 今後の研修では、**他者参照を円滑に行うため、学習支援ソフトとの組み合わせについて理解を深める**ことが求められます。

追跡アンケートの結果（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

実践での研修内容の活用

デジタル教科書の活用方法（抜粋）

＜めあてや目標の達成に向けた活用促進＞

- デジタル教科書を活用することが目的とならず、めあてや目標を達成するための手段として効果的に活用する方法を意識して、指導助言を行っている。

＜デジタル教科書研修の促進＞

- 各校のデジタル教科書の活用状況を踏まえ、効果的に活用できるようにすることを目的として、教員を対象とした研修を推進している。

デジタル教科書活用による効果（抜粋）

＜個別最適な学びの実現＞

- デジタル教科書の活用により、外国語において、従来の一斉に音読練習を行う授業から、児童生徒が個々に音読練習に取り組む学習への転換が進んでおり、個別最適な学びの実現に繋がっている。

デジタル教科書活用に関する課題（抜粋）

＜他者参照のツールの充実＞

- デジタル教科書単体での活用では他者参照が難しい側面がある。

研修内容を活かせていない理由（抜粋）

＜指導助言の機会がない＞

- そもそもの指導助言の機会がなく、デジタル教科書自体も配布されていないため、教材研究するのが難しい。
- 学校訪問や研究発表会等で、指導助言する機会がない。

■今後の研修に対する意見・要望

- 他者参照を円滑に行うため、デジタル教科書と学習支援ソフトを適切に組み合わせる方法について理解を深めたい。
- デジタル教科書への理解を深め、教材研究を行うために、指導主事にも教科書を配布してほしい。

※ 調査対象：研修受講者（県・教育事務所指導主事）　有効回答数：14　調査期間：研修実施から約2か月後（令和８年１月29日～２月１３日）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.4. 熊本県教育庁
3.4.4. 研修改善（第２回）

■ 研修における受講者の様子や受講後アンケートの結果から、有識者を交えた振返りを行い、「研修の成果に繋がった点」と「課題」、それらを踏まえた「今後の研修に向けた取組」を整理しました。

	成果と課題	今後の研修に向けた取組
研修の成果に繋がった点	**デジタル教科書を触りながら、授業展開を検討する機会を設けたこと** • 研修前の受講者は、デジタル教科書の機能や効果的な活用方法を十分に理解していなかった。 • そこで、専門教科ごとにグループ編成し、サンプル版のデジタル教科書を実際に操作しながら、互いに意見を出し合い、指導計画を具体化する機会を設けた。 • これにより、受講者はデジタル教科書の機能について、相互に理解を深めるとともに、授業場面を想定した活用の視点を獲得した。	今後の研修においても、受講者間で意見を出し合いながら、デジタル教科書を実際に操作し、具体的に授業展開を検討する機会を設ける。
	模擬授業を実施し、相互フィードバックする機会を設けたこと • 授業展開の検討後、ワールドカフェ形式により、全員が模擬授業を実践し、相互にフィードバックを行う機会を設けた。 • 受講者は、授業者・学習者の双方の立場を体験するとともに、異なる教科や校種におけるデジタル教科書の活用方法に触れることができた。 • これにより、デジタル教科書に関する指導助言への自信に繋がったとともに、本研修の演習スタイル自体が、今後教員向け研修を実施する際に活かせる知見となった。	今後の研修においても、模擬授業等のアウトプットの機会を設け、相互にフィードバックを行うことで、学びを深め合う研修を設計する。
課題	**デジタル教科書と学習支援ソフトを組み合せた活用の検討** • 多くの受講者は、デジタル教科書単体での活用場面を中心に検討していた。 • デジタル教科書と学習支援ソフトと組み合わせた活用を検討することで、より効果的な授業づくりに繋がると考えられる。	今後の研修では、デジタル教科書と学習支援ソフトを実際に組み合わせて活用している授業例を積極的に提示する。

研修担当者の声（本研修の振返り）

本研修は、対象を指導主事に絞り、効果的な指導助言に繋がる満足度の高い研修になりました。また、指導主事は自らが研修を実施する立場でもあるため、デジタル教科書を実際に操作する体験や模擬授業の実施といった活動が、今後の研修設計に活かせる学びになったと考えます。（熊本県　松下　指導主事）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.4. 熊本県教育庁
3.4.5. 総括

■ 熊本県教育庁での実証を通じて得られた「研修改善のポイント」と、実証を踏まえた「今後の取組」は以下のとおりです。

熊本県教育庁における研修改善の取組の総括

研修改善のポイント

研修改善（１回目）

デジタル教科書の具体的な活用段階を強調して示したこと ➡ 参考：p.76

- 教員・指導主事は、自身がデジタル教科書の活用プロセスのどの段階にあるのかを把握できていない場合がある。
  そのため、研修冒頭で活用段階を提示し、自らの段階を明確にした上で今後の活用を具体的にイメージさせることが重要。

模擬授業にて、実際の活用イメージを想起させたこと ➡ 参考：p.77

- デジタル教科書の活用経験が乏しい受講者は、授業での具体的な活用イメージを十分に持てず、活用に踏み出しにくいことが多い。
  そのため、模擬体験等を通じて学習者の立場を体験させ、具体的な活用場面を想起しやすくする機会を設けることが有効である。

研修改善（２回目）

デジタル教科書を触りながら、授業展開を検討する機会を設けたこと ➡ 参考：p.84

- グループワークでデジタル教科書を実際に操作しながら意見交換を行い、指導計画を自ら具体化する機会を設けることで、受講者は機能への理解を深めるとともに、授業場面を想定した活用の視点を身に付けることができる。

模擬授業を実施し、相互フィードバックする機会を設けたこと ➡ 参考：p.84

- ワールドカフェ形式で模擬授業と相互フィードバックを行うことで、指導者・学習者双方の視点を受講者自身が体験し、他教科の活用についても理解を深めることができるので、適切な指導助言に繋がる。また、このような演習形式は、指導主事にとって今後の研修設計に活かせる有益な知見となる。

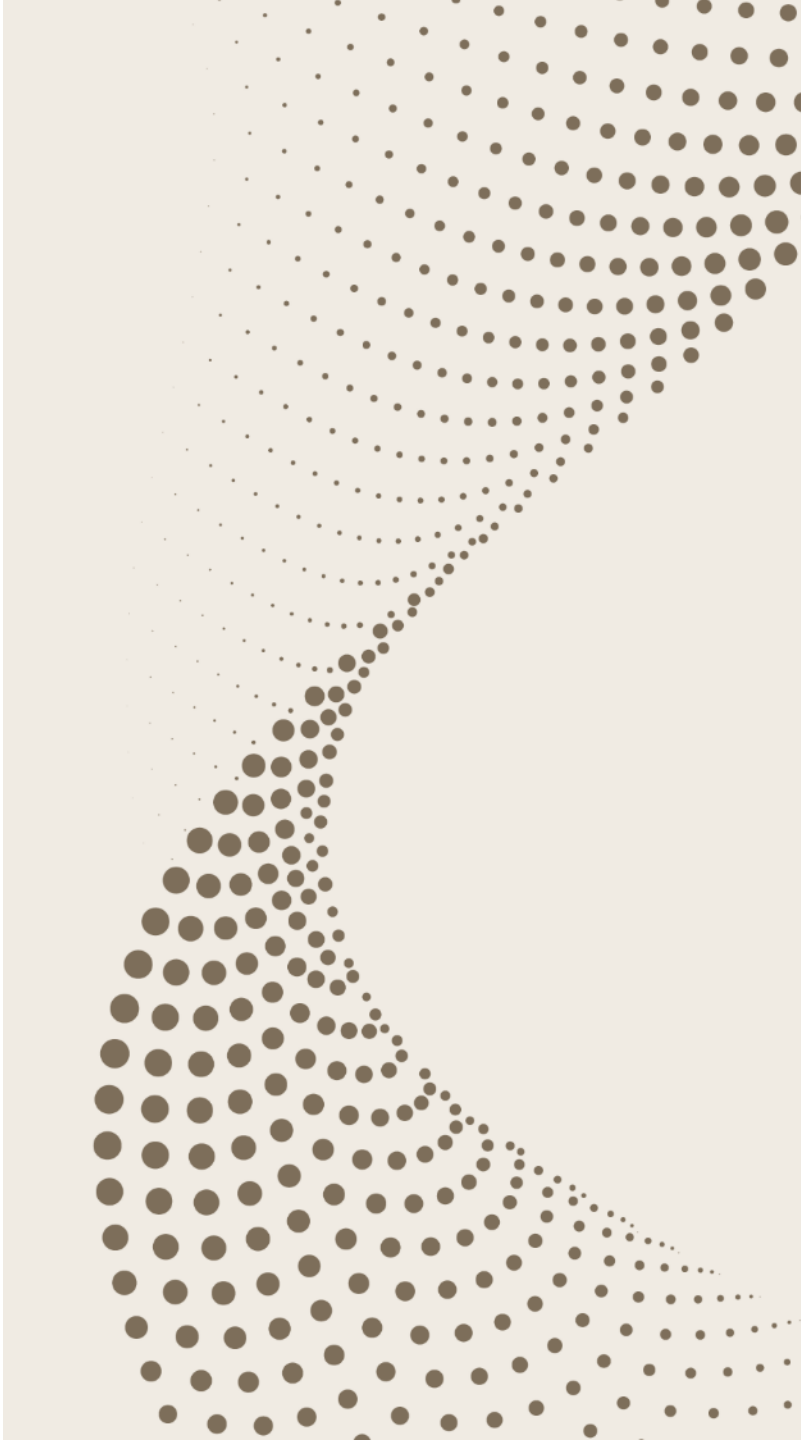
実証成果を踏まえた県における今後の取組

- 第１回研修では、教員及び指導主事を対象に有識者による模擬授業を実施し、第２回研修では、指導主事のみを対象に受講者自身が模擬授業を考え、実施し合う活動を取り入れました。学習者の立場を体験しながら理解を深めるような形式は効果が高く、今後も継続して実施していきたいと考えます。（熊本県　松下 指導主事）
- また、第２回研修は、デジタル教科書の活用経験が少ない指導主事に対象を絞り、その上で、適度な負荷を伴う研修を行うことで、より深い理解に繋がることも確認できました。今後は、教科ごとの特徴を踏まえた活用を更に支援するとともに、紙の教科書との併用についても検討を進めていきたいと考えています。（熊本県 松下 指導主事）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組

3.1. 埼玉県教育局
3.2. 福井県教育庁
3.3. 奈良県教育委員会
3.4. 熊本県教育庁
3.5. 鹿児島県教育庁



3. 各実証県における研修改善の取組
3.5. 鹿児島県教育庁
3.5.1. 基本情報

■ 実証研究にご協力いただいた鹿児島県教育庁に関する基本情報、実証前の課題認識は以下のとおりです。

県担当部署	鹿児島県教育庁 義務教育課 義務教育係		
県担当者	寺地 瞳 指導主事	担当有識者	東京家政大学 太田 洋 教授
県における過年度の取組	• デジタル教科書に特化した研修等の取組の実績はないが、1人1台端末の活用が日常的になるよう端末活用を推進。 • 具体的な端末活用の様子を「主体的・対話的で深い学び」と関連付け、個別最適な学びと協働的な学びの視点から授業改善を考えられるよう、令和５年度から「鹿児島県教育委員会『学びの羅針盤』」の改訂を行い、「学習者主体の授業」の推進に取り組んでいる。		

実証前の課題認識

学校・教員

- **デジタル教科書の活用状況には差が見られる**
  - デジタル教科書の活用に関しては、教員間でばらつきがある。また、校内研修もあまり行われていない。
- **有効な活用方法にアクセスできていない**
  - 教員は有効な活用方法を見い出せておらず、活用の効果も実感できていない。
  - 学校内での知見の蓄積や共有の仕組みが乏しく、参考となる情報にアクセスしづらい状況がある。

教育委員会・指導主事

- **経験がなく、デジタル教科書に馴染みがない**
  - デジタル教科書が導入されていた時点で、指導主事になっている者、または管理職になっている者が多く、指導主事がデジタル教科書を授業で使ったことがない。
- **学校現場の課題に即した支援を行う必要がある**
  - デジタル教科書の導入状況は各自治体で異なるため、県レベルで共通した実践や取組等を展開しにくい。
  - 学校現場が抱える課題は、デジタル教科書や端末の操作といった「技術面」と、教科指導的な観点に照らした活用といった「内容面」があると考えるが、実際にどのような課題があるのかを把握した上で、適切に支援する必要がある。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.5. 鹿児島県教育庁
3.5.2. 年間計画

■ 鹿児島県教育庁における、令和７年度のデジタル教科書の活用に関する研修計画は以下のとおりです。
本事業では、「指導主事向け研修」と「県フォーラム内での研修」を研修改善に関する実証対象としました。

	対象	概要
指導主事向け研修（第１回研修） 実証対象：p.92	• 教育事務所指導主事７名 • 市町村教育委員会 指導主事35名	• 有識者から、「学習者主体の授業」の実現に向けて、デジタル教科書の利点や具体的な活用事例、指導助言で必要なポイントを解説。 • デジタル教科書のサンプル版を操作しながら機能や活用できそうな授業場面・課題などを洗い出した上で、グループで活用できそうな機能や指導助言の方策について協議。
県フォーラム内での研修（第２回研修） 実証対象：p.100	• 県内教職員 • 教育事務所指導主事 • 市町村教委指導主事 • 教育関係者 • 一般県民　など	• 県内小学校外国語科で先進的な活用を行う教員から、授業づくりで大切にしていることも紐づけながら、デジタル教科書の活用事例を紹介。 • 有識者が実践発表を価値づけながら、デジタル教科書の活用の意義や「学習者主体の授業」と関連した活用の在り方について解説。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.5. 鹿児島県教育庁
3.5.3. 研修改善（第１回）

■ １回目の実証対象とした研修の概要は以下のとおりです。

現状の課題

デジタル教科書に関する研修の不足により、指導主事が**「学習者主体の授業」に関する指導助言の際にデジタル教科書の活用という視点に触れられない**ことがある。

研修実施

目指す姿

デジタル教科書の活用と「学習者主体の授業」を関連付けつつ、具体的な指導助言を行うことができるようになる。

研修の概要

研修のポイント

- ✓ 指導主事の納得感の伴った理解を引き出せるよう、**県が教育方針として掲げている「学習者主体の授業」に紐づけながら活用の意義を解説**する。
- ✓ 指導主事自身がデジタル教科書の活用イメージを持てるよう、**デジタル教科書を実際に操作する時間**を設ける。
- ✓ 具体的な指導助言に繋げられるよう、**教師のデジタル教科書の活用段階別に必要な指導助言の方法を検討**する。

対象者：教育事務所指導主事　７名、市町村教育委員会指導主事　35名

実施方式：参集＋オンライン

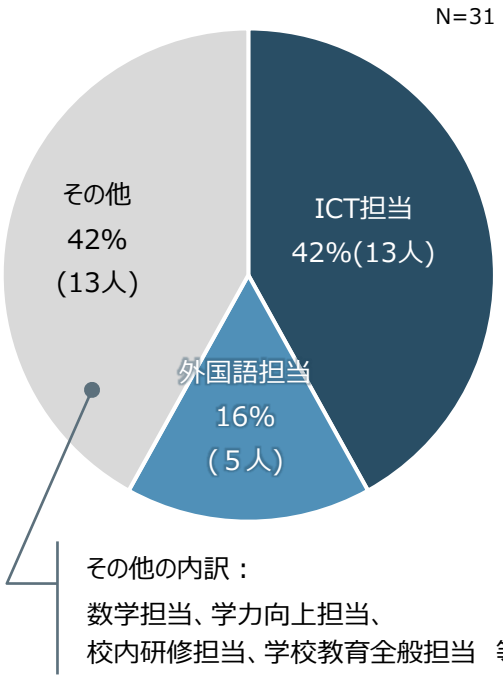
目的	目標	内容
① 知識・理念等の理解	• デジタル教科書の活用の意義や活用事例を理解することができる。	研修前の取組：事前アンケート
② スキル・技能等の習得	• デジタル教科書の活用と「学習者主体の授業」を関連付けた指導助言ができるようになる。	レクチャー：有識者の講義（活用の意義や事例の理解）
③ 意識・行動等の変容	• デジタル教科書を活用した授業に関する、各校への指導助言への意欲を高める。	ワークショップ：個人演習（デジタル教科書の操作） ワークショップ：グループ協議（指導助言の方策の検討）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

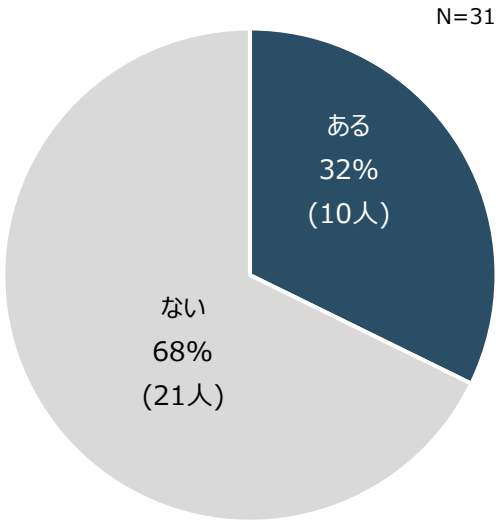
3. 各実証県における研修改善の取組
3.5. 鹿児島県教育庁
3.5.3. 研修改善（第１回）

- 本研修の受講者の傾向※は、以下のとおりです。
- 指導主事の担当領域は、ICT担当が最も多く、次いで教科担当が多くなっています。
- デジタル教科書を活用した授業経験については、約７割が未経験であり、デジタル教科書に関する指導助言の機会については、９割が「学校訪問時の1/4未満」と回答しています。受講者の活用経験が少なく、学校での指導助言に繋げられていない状況がうかがえます。

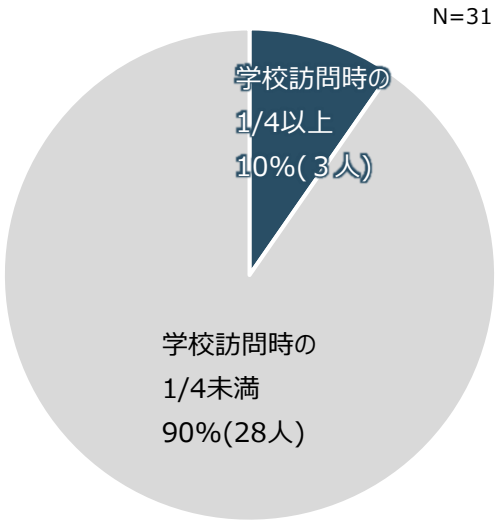
指導主事の担当領域



デジタル教科書の活用経験



デジタル教科書に関する指導助言頻度



※ この傾向は受講後アンケート結果に基づくものであり、実際の受講者数と有効回答数が異なる。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.5. 鹿児島県教育庁
3.5.3. 研修改善（第１回）

■ 研修の流れ及び実際の研修の様子は以下のとおりです。

研修の流れ

研修前の取組　事前アンケート

受講者が感じているデジタル教科書のメリットや課題を把握した。

レクチャー　有識者の講義（活用の意義や事例の理解）　35分

「学習者主体の授業」の推進に向けて、デジタル教科書の利点や具体的な活用事例、指導助言で必要なポイントを解説した。

■主な講義内容

- 鹿児島県が作成した教育方針である『学びの羅針盤』が掲げている「学習者主体の授業」にデジタル教科書が寄与することを、事例動画も交えながら解説。
- 事例動画では、これまでの外国語の一斉指導型の授業では実現できなかった、生徒が個別のペースで様々な学び方を展開している様子（＝「学習者主体の授業」の一例）を紹介。
- 教師への指導助言の具体例について、「デジタル教科書活用の３ステップ」（右図①）に紐づけながら解説。

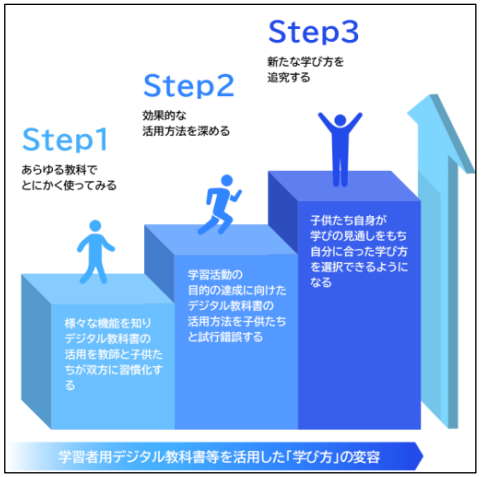
※図①のステップの図は以下の動画より引用。
学習者用デジタル教科書活用の意義～これからの時代に求められる授業に向けて～

次頁に続く

研修の様子（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

- デジタル教科書のメリットとして、自分のペースでの学習が可能なことを多くの受講者が感じていた。課題として、紙の教科書との違いが分からないことや、教員のICTスキルの差があることが多く挙げられた。

- **「学習者主体の授業」の事例動画**は、多くの受講者が注視している様子だった。
- 講義のうち、特に以下の内容で受講者のメモやうなずきが多かった。
  - ✓ **デジタル教科書活用の３ステップ**と、**各ステップに至るために実際に行われた教師への指導助言**の事例（下図①②）
  - ✓ 児童生徒にデジタル教科書を使わせて教師が何もしない「デジタル放任授業」に陥らないために、**教師が児童生徒の様子を見取り、学級全体に良い学び方の例や留意点を共有**することが重要であること
  - ✓ **教師も子供たちと一緒にデジタル教科書の活用を学んでいけばよい**ということ



▲図①：デジタル教科書活用の３ステップ

Step１　あらゆる教科でとにかく使ってみる
→デジタル教科書を使うメリットを伝える

Step２　効果的な活用方法を深める
→様々な授業場面で使えることを示す

Step３　新たな学び方を追究する
→子供たちが学び方を自己調整するために
デジタル教科書が役立つことを示す

▲図②：デジタル教科書活用の各ステップに至るために必要な指導助言の事例を紹介。

例えば、講義の冒頭で紹介した「事例動画」は、有識者の指導助言により教師が「音読での使用」から活用の幅を広げた例であり、これはStep２の「様々な場面で使えることを示す」に該当することを説明。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.5. 鹿児島県教育庁
3.5.3. 研修改善（第１回）

1回目：計画 → 実践 → アンケート → 振返り → 2回目

■ （前頁の続き）

研修の流れ

ワークショップ　個人演習（デジタル教科書の操作） 15分

実際にデジタル教科書のサンプル版を操作し、「効果的だと感じた機能」「活用できそうな授業場面」「活用する上で課題となりそうな点」をオンライン上のワークシートに受講者がまとめた。
（次頁にワークシートの内容を掲載。）

ワークショップ　グループ協議（指導助言の方策の検討） 50分

グループごとに、「学習者主体の授業」に向けて活用できそうな機能や、具体的な指導助言の方法について意見交換を行い、有識者から講評を行った。

■グループ協議の実施方法

- グループは参集とオンラインの参加者でそれぞれ校種別に編成。１グループ３～５名程度。
- オンライン上のワークシートに協議内容をまとめ、他グループの内容も参照できるようにする。（次頁にワークシートの内容を掲載。）
- 各グループの協議内容を全体で発表する。

■有識者からの講評の内容

- 前段の講義で掲げた「デジタル教科書活用の３ステップ」に則りながら、具体的な指導助言の例を提示。

研修の様子（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

- 講義で扱った外国語だけでなく、**様々な教科のデジタル教科書の機能を確認**していた。
- 操作して気付いたことや疑問を受講者同士で話し合う様子が見られた。
- ワークシートには、「児童生徒の様子を見取ることが重要」など、**有識者の講義内容を踏まえて記入**している受講者が見られた。

- 協議は円滑に進行していた。講義や個人演習で気付いたことを共有した上で、**「デジタル教科書だから実現できること」まで議論を深める**ことができていた。
- 協議の後半では、各指導主事が把握している学校での活用状況も踏まえながら、**活用段階別に指導助言の具体的な方法を検討している**グループも見られ、**実現可能性の高い内容**となっていた。
- **一部のグループでは、デジタル教科書の機能に関する疑問に議論が集中していた。**
- 有識者からの講評における具体的な指導助言の例の提示は、**グループ協議でも「更に知りたい」という声が多かった内容**であり、受講者のメモやうなずきが多かった。

▲グループ協議の様子

「デジタル教科書の機能を知る」ための指導

- どこにどんな機能があるのか教師も子供たちも全員で理解する時間を確保。
- Unitの最初のページの場面を表すアニメーションを全体で一度視聴。
- その後教師がデジタル教科書のいろいろな機能を示しながら、使い方の指導。

▲有識者からの講評では、具体的な授業への指導助言の例を紹介

©2026 ABeam Consulting Ltd.

■ 前頁の「ワークショップ」において、実際に作成されたワークシートの例を以下に示します。

実際に作成されたワークシートの例

ワークショップ 個人演習（デジタル教科書の操作）

効果的だと感じた機能

- 好きなタイミングで必要な箇所に絞って音声を確認
- 教科書の挿絵を切り貼りして、ワークシートの作成を省力化

活用できそうな授業場面

- 友達の考えを転記でき、グループの意見内容の集約が容易
- 全体で学習内容を確認後、個別で課題解決を行う時間に活用

活用する上で課題となりそうな点

- 教師が児童生徒の学習の状況を十分に見取り、支援すること

個人演習の内容を基に協議

ワークショップ グループ協議（指導助言の方策の検討）

どの機能をどのように活用できるか

- 従来の教科書では提示できなかった動画や音声・情報等を、子供たちの課題解決に活かし、個に応じた学びに繋げることができる。
- これまでの学習の履歴やデジタル化した成果物を残すことができ、既習事項等を学びに活かすことができる。児童生徒が成長を実感し、学習意欲を高めることに繋がる。

どのような指導助言を実施するか

- Step1→Step2→Step3と学校の状況に応じた指導助言を実施したい。まずは、各校の活用状況に関する調査を実施する。
- Step1の学校には、活用の習慣化に繋げるため、「まずは子供と一緒に使ってみましょう」と促す。
- 「デジタル放任授業」とならないように、教師が児童生徒の様子を十分に見取り、見取ったことをもとに指導。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.5. 鹿児島県教育庁
3.5.3. 研修改善（第１回）

- 受講後アンケートでは、満足度・理解度・指導助言への自信について自己評価を求めたところ、満足度と自信は９割以上の受講者、理解度は全受講者から肯定的な回答が得られました。
- また、各項目について自由記述での意見を求めたところ、**「教師のデジタル教科書の活用段階に沿った指導助言の例が分かりやすかった」「段階的に活用を促すような指導を行いたい」**等が多く挙げられました。
- 今後の研修に対する意見・要望としては、**デジタル教科書の操作や機能を理解できるような研修**を求める声が寄せられています。

事後アンケート結果（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

研修の満足度	研修の理解度	活用に関する意識
94%が満足	100%が理解	91%が現状より向上

満足度に関する自由記述（抜粋）

＜活用ステップに沿った具体例が分かりやすかった＞

- 「デジタル教科書活用の３ステップ」の段階に沿った指導助言の事例が分かりやすかった。

＜実際の操作体験を通じて学ぶことができた＞

- 実際にデジタル教科書を操作する演習を経てからグループ協議を行ったため、具体的な授業場面について協議することができ満足した。

＜地域の実態に引き付けた検討ができた＞

- 他地域の指導主事との協議を通じて、各受講者の地域の環境や実態に応じた指導の在り方や、指導助言を受ける教職員の立場に立った指導内容を検討することができ満足した。

理解度に関する自由記述（抜粋）

＜“教師も学びながら”活用を広げること＞

- 教師も児童生徒も、指導主事も一緒に学びながらデジタル教科書の活用を進めていけばよいと分かった。
- デジタル教科書を無理にでも使おうとするのではなく、子供たちと一緒に試してみながら、使い方を模索していけばいいということが分かった。

＜教師の立場に立った指導助言の在り方＞

- 指導助言においては単なる助言にとどまらず、「相手の思いや状況を丁寧にくみ取りながら、対話的に進めていく姿勢」が重要であることを改めて実感した。

今後の活用・助言に関する自由記述（抜粋）

＜段階的に活用を促す指導を行いたい＞

- 3つのステップとともに具体的な活用例を示し、教師が自ら活用したいと思えるようにしたい。
- 導入当初は操作面や接続環境に課題が生じやすいことも念頭に置き、「できるところから無理なく取り入れていくこと」「小さな成功体験を積み重ねていくこと」の大切さを伝えていきたい。
- まずは子供と一緒に使い、習慣化を図る。次に活用方法を示し、学習方法の選択を子供に委ねることの大切さを伝えていきたい。

＜「学習者主体の授業」の観点で指導したい＞

- 「学習者主体の授業」を実現する手段の一つとしてデジタル教科書を使えるよう指導したい。

■今後の研修に対する意見・要望

- デジタル教科書のサンプル版を操作し、オンラインのワークシートを活用した意見集約をできたため、一方的な研修ではなく双方向性があり、対面と遜色ない研修ができた。
- 実際にデジタル教科書に触れる機会が少ないので、**教科書発行者等を招き、操作や機能面をある程度理解できるような研修**があるといい。

※ 調査対象：研修受講者（教育事務所・市町村教育委員会指導主事）　有効回答数：31　調査期間：研修実施後1週間（令和７年８月８日～15日）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.5. 鹿児島県教育庁
3.5.3. 研修改善（第１回）

- 追跡アンケートでは、研修以降の指導助言に関し、**約40%の回答者が研修内容を活かしている**と回答しています。
- 指導助言の内容は、教師自身がまず使ってみることや具体的な事例を紹介した受講者が多かったです。
- 指導助言に活かせない理由として、**「デジタル教科書に関する指導助言の求めがない」**が多く挙げられました。今後は学校現場の求めがなくても指導助言ができるよう、**具体的な授業の参観や次期学習指導要領と結び付けた研修を行い**、普段の指導助言でもデジタル教科書を取り上げられるような自信に繋げることが有効と考えられます。

追跡アンケートの結果（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

指導助言における研修内容の活用

指導助言の内容（抜粋）

＜まずは教師自身が使ってみること＞

- 教師自身がデジタル教科書を使ってみて、そのメリットを体験すること。
- まずは学習の振返りや課題に取り組む際に活用することを進め、慣れてきたら、個人のレベルにあった取組を継続して行うことが重要であること。

＜具体的な活用事例＞

- 生徒が自分のペースでデジタル教科書を使って、繰り返し発音練習する時間を設定すること。
- 本文への書き込み機能で色分けが有効であること。
- 学習支援ソフト等との連携の方法。

デジタル教科書活用による効果（抜粋）

＜デジタル教科書活用のねらいをもつ重要性＞

- 教師が授業のねらいを達成するための手段として適切にデジタル教科書を活用することが大切である。

デジタル教科書活用に関する課題（抜粋）

＜デジタル教科書に日常的に触れられない＞

- 教育事務所では学習者用デジタル教科書が閲覧できず、どのようなコンテンツが掲載されているか分からないので、活用例を示すことが難しい。

＜コンテンツが足りない単元がある＞

- 算数は図形領域で活用できるが、計算領域では、デジタル教科書と紙の教科書の差が見られない。

研修内容を活かせていない理由（抜粋）

＜デジタル教科書に関する指導助言の求めがない＞

- デジタル教科書に関する質問を受けたり、関する助言を求められる場面がほとんどないため。
- 教育委員会が主催する研修会においてデジタル教科書の指導事例について扱う時間を設定できていない。
- 校内研修に求められる指導助言の内容に合わないことが多かったため。
- 重点を置くべき他の指導内容が多く、デジタル教科書について触れるだけの時間がない。

■今後の研修に対する意見・要望

- デジタル教科書を実際に操作しながら授業を行う様子を参観することで活用方法を具体的にイメージできるような研修があるとよい。
- 次期学習指導要領に向けて、他教科についても事前に実証研究ができるとよい。 紙・デジタルそれぞれの良さを生かした活用について深めていきたい。

※ 調査対象：研修受講者（教育事務所・市町村教育委員会指導主事）　有効回答数：29　調査期間：研修実施から約４か月後（令和７年11月28日～12月12日）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.5. 鹿児島県教育庁
3.5.3. 研修改善（第１回）

■ 研修における受講者の様子や受講後アンケートの結果から、有識者を交えた振返りを行い、「研修の成果につながった点」と「課題」、それらを踏まえた「今後の研修に向けた取組」を整理しました。

	成果と課題	今後の研修に向けた取組
研修の成果に繋がった点	**実際にデジタル教科書を操作しながら、「学習者主体の授業」に繋がる活用方法を考えたこと** • 県内の指導主事は「学習者主体の授業」の必要性を理解する一方で、デジタル教科書の活用経験が少なく、教師の活用を促す指導助言に繋げられずにいた。 • 研修では、デジタル教科書が「学習者主体の授業」を実現するツールであることを理解した上で実際に操作を行ったため、活用できる授業場面に関して、納得感かつ具体性を伴った検討ができ、「デジタル教科書だからできること」まで議論が深まっていた。	今後の研修においても、デジタル教科書の操作の機会を十分に確保し、受講者間でデジタル教科書の使用イメージを共有できるようにする。
	活用段階別に具体的な指導助言の例を示したこと • 指導主事は、教師の活用状況や考えに寄り添いながら指導助言を行う必要がある。 • 講義で「デジタル教科書活用の３ステップ」と、各ステップに至るために必要な指導助言の例が豊富に示されたことで、受講者が自身の担当する学校の活用状況を想起しながら、具体的かつ実現性の高い指導助言の検討に繋げられていた。	今回の研修で指導助言のポイントを学べたため、今後は指導主事が単元計画作成の段階から現場の教員と関わり、デジタル教科書の活用方法を教員と共に検討できるような機会を設ける。
課題	**デジタル教科書の操作に関する疑問へのフォローが必要なこと** • デジタル教科書を操作する中で生まれた疑問が、対面では近くの受講者と話すことで解消しやすいが、オンライン受講者は解決が難しい側面があった。 • 指導助言の方法など本質的な議論に時間を割くため、機能面の疑問の解決は質問フォームに委ねるなどの対応が求められる。	今後の研修では、デジタル教科書の操作や機能に関する質問を受ける時間を十分に確保する。

研修担当者の声（本研修の振返り）

今回の研修はオンライン参加者が多く、グループワークの様子が把握しきれない不安がありましたが、オンラインのワークシートを活用したことで、対面参加者と同じくらい意見を得ることができました。今後は、研修成果を受講者以外にも広げていきたいです。（鹿児島県 寺地 指導主事）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.5. 鹿児島県教育庁
3.5.4. 研修改善（第２回）

■　２回目の実証対象とした研修の概要は以下のとおりです。

現状の課題

デジタル教科書の活用について、
具体的なイメージが描けていない教員が見られる。

研修実施

目指す姿

教員がデジタル教科書を活用した**具体的な授業のイメージをもち、**自身の授業で取り入れられるようになる。

研修の概要

研修のポイント

- ✓ 参加者が授業での活用イメージを具体的に描くことができるよう、**教員が実際に使っているワークシートや、授業中の写真や映像を用いながら実践事例を紹介する。**
- ✓ 参加者の理解を引き出せるよう、**県が教育方針として掲げている「学習者主体の授業」に紐づけながら活用の意義を有識者が解説**する。

対象者：教員を含む一般参加者（県フォーラム内での開催）※下記目標は参加者のうち、教員にフォーカス。

実施方式：参集＋オンライン

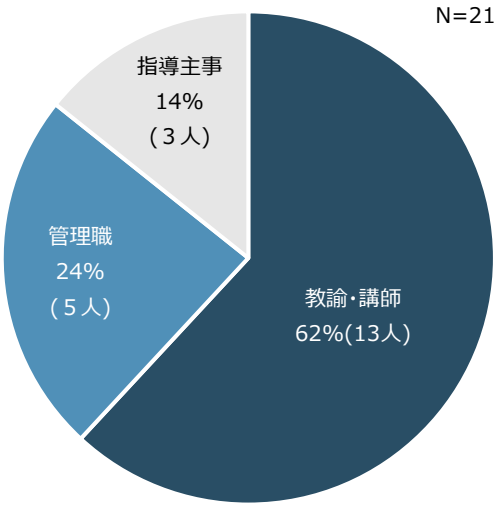
目的	目標	内容
① 知識・理念等の理解	• 教員が「学習者主体の授業」を踏まえたデジタル教科書活用のイメージをもつことができる。	レクチャー　実践発表（活用事例の紹介）
② スキル・技能等の習得	• 事例を参考にして、教員自身の授業におけるデジタル教科書の活用方法を具体化できる。	レクチャー　有識者の講義（事例の価値づけ）
③ 意識・行動等の変容	• デジタル教科書の有効性を理解し、授業における活用の意欲を高めることができる。	リフレクション　質疑応答

©2026 ABeam Consulting Ltd.

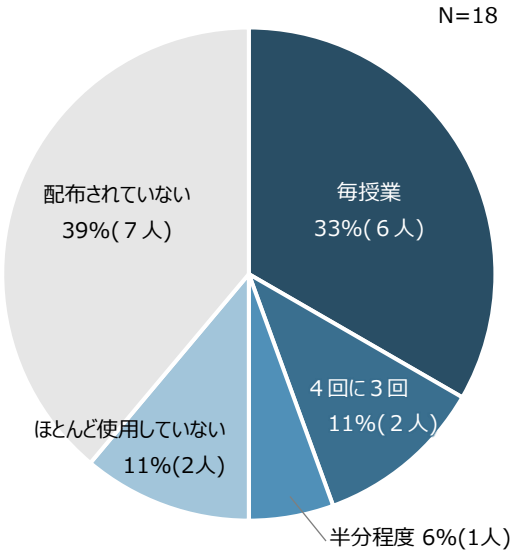
3. 各実証県における研修改善の取組
3.5. 鹿児島県教育庁
3.5.4. 研修改善（第２回）

- 本研修の受講者の傾向※は、以下のとおりです。
- 受講者のうち、教員（教諭・講師・管理職）の約５割がデジタル教科書を「自身の授業の半分以上」で活用していました。また、デジタル教科書が自身の学校・担当教科では配布されていない教員（高等学校の教員が中心）も一定数参加していました。
- 受講した教員の校種は、デジタル教科書の配布が進む小学校・中学校が約７割を占めますが、一部、高等学校や特別支援学校からの教員も参加していました。

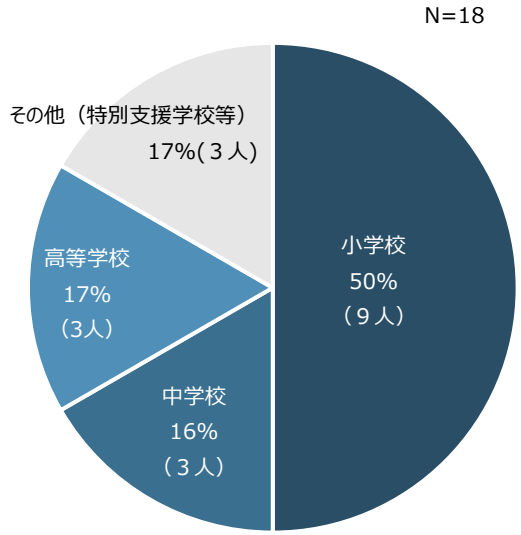
参加した教員・指導主事の内訳



教員のデジタル教科書の活用頻度



教員の在籍する校種



※ この傾向は、受講者のうち教員・指導主事のみを対象とした受講後アンケート結果に基づくものであり、実際の受講者数と有効回答数が異なる。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.5. 鹿児島県教育庁
3.5.4. 研修改善（第２回）

■ 研修の流れ及び実際の研修の様子は以下のとおりです。

研修の流れ

レクチャー　**実践発表（活用事例の紹介）**　15分

小学校外国語科におけるデジタル教科書の活用事例について、先進的な活用を行う県内の教員（薩摩川内市立平佐西小学校　安部菜穂子先生）から実践発表を行った。

■実践発表の内容

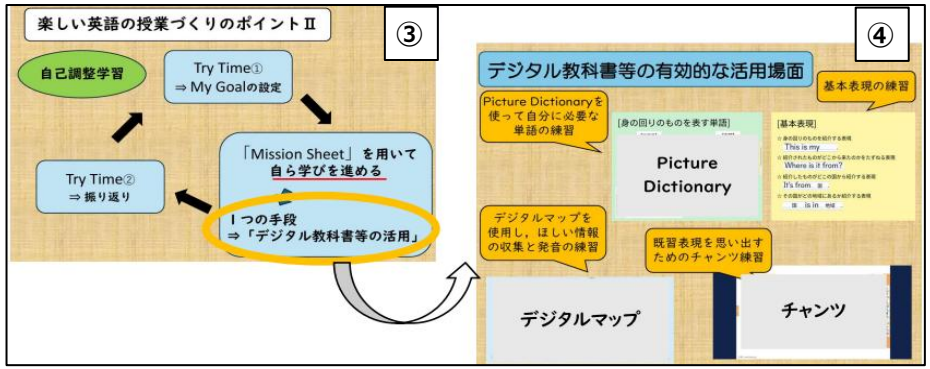
- 「外国語の授業づくりで大切にしていること」として以下を挙げた。
  - ✓ Final Goalから逆向きで単元計画を作成すること（右図①）
  - ✓ Final Goal（単元目標）を、児童が様々な想いや考えを伝えられるものになるよう工夫すること（右図②）
- 上記の授業においては、単元目標に向けて子供たちが自走できるための仕掛けづくりが重要である。そのための自己調整学習のポイント（右図③）を、デジタル教科書の活用事例（右図④）と併せて説明。
- 併せて、児童の自己調整学習の様子を見取るためのツールとして、児童が取り組むべきタスクが整理された２種類の「Mission Sheet」を紹介。（内容は次々頁）

次頁に続く

研修の様子（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

- 導入として、子供たちの授業中の様子が動画で提示されたときに、受講者の多くは引き込まれている様子であった。
- **デジタル教科書の活用例**（下図④）**だけでなく、その裏にある授業づくりのねらいや単元計画の工夫点**（下図①②）**、自己調整学習の進め方**（下図③）**も併せて説明された。**これにより、デジタル教科書の活用自体を目的化させることなく、子供たちが自ら学びを進めるための一つの手段として活用することの重要性を訴求していた。

▲単元ゴールから逆向きで単元計画を作成する重要性（図①）や、
子供たちの学び合いを引き出すための単元ゴール設定の工夫（図②）について説明



▲自己調整学習の進め方（子供たちが自分でゴールを設定し、学びを進め、振り返る）を説明（図③）
子供たちが自分で学びを進めるための１つの手段として、デジタル教科書の活用例を紹介（図④）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.5. 鹿児島県教育庁
3.5.4. 研修改善（第２回）

■ （前頁の続き）

研修の流れ

レクチャー　有識者の講義（事例の価値づけ）　25分

有識者が小、中学校における活用事例を取り上げながら、実践発表とも紐づけて、デジタル教科書の活用の意義や「学習者主体の授業」と関連した活用の在り方について解説した。

■主な講義内容

① 「デジタル教科書活用の３Step」を紹介し、各Stepに紐づけて活用事例を説明。
Step１の事例として音読練習・リスニングでの活用、Step２の事例として本文の内容理解に活用した事例を取り上げた。

② 県内の教員による実践をStep３（新たな学び方を追究する）に位置づけ、子供たちが目標達成に向け学び方を自分で選択すること（自己調整学習）が重要であることを説明。

③ 自己調整学習は「放任」ではなく、教師が子供たちの学びの様子を見取る必要がある。そのためのツールとして、「Mission Sheet」(次頁）が鍵となることを説明。

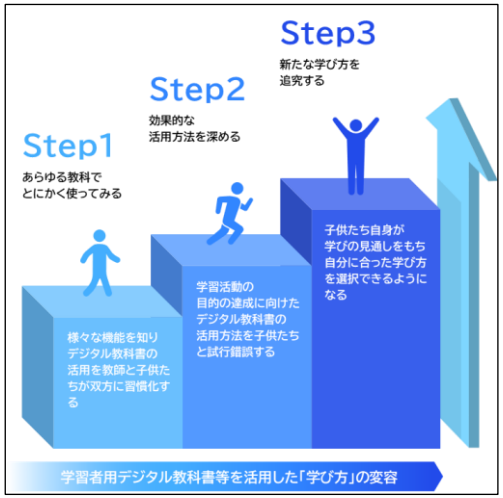
④ 子供たちが自己調整学習を「楽しい」と思う理由を解説。
「Mission Sheet」で取組状況が可視化されることで、子供たち自身が「ここまで自分で取り組むことができた」と自己肯定感を高めることに繋がる。

リフレクション　質疑応答　10分

教員による実践発表や有識者の講義に対する質疑応答の時間を設けた。

研修の様子（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

- 講義のうち、特に以下の内容で受講者のメモが多く、強く訴求している様子が見られた。
  - ✓ デジタル教科書活用の３Step。特に音読練習だけでなく、教科書本文の理解へ活用の幅を広げたStep２の事例（左記①）
  - ✓ 子供たちにデジタル教科書を使わせて教師が何もしない「デジタル放任授業」に陥らないために、教師が児童生徒の様子を見取り、学級全体に良い学び方の例や留意点を共有することが重要であること（左記③）
  - ✓ 子供たちがデジタル教科書等を活用した自己調整学習を「楽しい」と思う理由を解説したこと（左記④）



デジタル教科書活用の３Step（再掲）▶

- 受講者から質問は挙がらなかったが、有識者が、教員の実践発表の内容や、**そこに至るまでの教員の中での試行錯誤**に関して深掘りした。
- 具体的な内容として、
「児童の学ぶスピードが個々で異なるため、一斉指導では限界を感じた」
「子供たちが目標に向かって学びを段階的に進めていくためには、Mission Sheetで学び方を提示することが重要だった」などの**教員の実感を伴った発言**を引き出していた。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.5. 鹿児島県教育庁
3.5.4. 研修改善（第２回）

- 研修内の実践発表（小学校外国語科）で、子供たちが自己調整学習を進めるために重要な取組として紹介された「Mission Sheet」を
  以下に示します。
- Sheet Bはタスクに取り組む順番も子供たちが自分で決めることができ、進め方に悩む子供たちは、タスクに取り組む順番が示されたSheet Aを使用します。

Mission Sheetの一例

Level１から順に進めていくMission Sheet A

全員が終わらせなければならないタスク：）

Grade 6 Class　　No.　　Name

Level	Tasks	Let's check! 終わった日付を書こう!	
	Small Teachers になって友達を **help** しよう！＊答えを教えるのではなく，一緒に考えよう！ ＊A：９人以上，B：1~8人，C：０人	**Help した友達の名前**	**評価**
1	ランランカードを使って，「身の回りのもの」について内容をふくらませる。 ＊身の回りのもの，どの国からきたか，どの地域にあるか，国の紹介の　　は必ず		
2	身の回りのものを紹介することができる。 ＊やりとりをした友達(や先生)の名前を書く。	1	／
		2	／
		3	／
		先生	／
3	どこから来たのかたずねることができる。 ＊やりとりをした友達(や先生)の名前を書く。	1	／
		2	／
		3	／
		先生	／
4	どこから来たのか答えることができる。 ＊やりとりをした友達(や先生)の名前を書く。	1	／
		2	／
		3	／
		先生	／
5	ランランカードの **Let's write 1** の「身の回りのものがどこの国から来たのか書いてみよう。」を書いて，先生にチェック&A 評価をもらう。		
6	紹介した国がどの地域にあるか伝えることができる。 ＊やりとりをした友達(や先生)の名前を書く。	1	／
		2	／
		3	／
		先生	／
7	ランランカードの **Let's write 2** の「紹介した国がどの地域にあるか書いてみよう。」を書いて，先生にチェック&A 評価をもらう。		

どこから進めてもよいMission Sheet B

Grade 5 Class　　No.　　Name

I can _____.を使って、自分ができることを友達３人と先生に伝える。

名　前	できること	
1		／
2		／
3		／
先生		／

自分ができることをランランカードに書いて、先生にチェック&A 評価をもらう。　／

1『play＋スポーツ』の動作(６種類)を絵を見て言うことができる。

友達	／
先生	／

2『do シリーズ』の動作(３種類)を絵を見て言うことができる。

友達	／
先生	／

3『well シリーズ』の動作(４種類)を絵を見て言うことができる。

友達	／
先生	／

4『play＋楽器』の動作(３種類)を絵を見て言うことができる。

友達	／
先生	／

5『ride, fast シリーズ』の動作(４種類)を絵を見て言うことができる。

友達	／
先生	／

Mission
友達のことを知って、プロフィールカードに書かれている友達を探すための準備をしよう！

6『jump シリーズ、run, swim』の動作(４種類)を絵を見て言うことができる。

友達	／
先生	／

Can you _swim_?を使って、友達３人と先生にインタビューする。

名　前	can / can't	
1	can / can't	／
2	can / can't	／
3	can / can't	／
先生		／

I can't _____.を使って、自分ができないことを友達３人と先生に伝える。

名　前	できないこと	
1		／
2		／
3		／
先生		／

自分ができないことをランランカードに書いて、先生にチェック&A 評価をもらう。　／

Can you _____**?**を使って、友達３人と先生にインタビューする。

名　前	can / can't	
1	can / can't	／
2	can / can't	／
3	can / can't	／
先生		／

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.5. 鹿児島県教育庁
3.5.4. 研修改善（第２回）

- 受講後アンケートでは、満足度・理解度・活用に対する意欲について自己評価を求めたところ、満足度と理解度は全受講者から、活用に対する意欲は約９割の受講者から肯定的な回答が得られました。
- 研修の中で特に理解したことや自身の授業に取り入れたいものを回答いただいたところ、特に**「デジタル教科書が子供たちの学びの自己調整に寄与すること」は多くの受講者にとって理解され、自身の授業でも取り入れてみたいと感じられていた**ことが伺えます。
- 研修に対する意見・要望として、「自己調整学習におけるデジタル教科書の活用事例を更に学びたい」という意見がありました。

事後アンケート結果（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

研修の満足度 100%が満足

満足度に関する自由記述（抜粋）

＜自身の学校に置き換えて考えることができた＞

- 自身の学校で実践することができる具体的な学びがあった。
- ICTを効果的に使った実践や活用の意義を十分に知ることができた。学校に持ち帰って指導に活かしたいと思った。
- 小中学校での活用が進んでいることを知り、自身の所属する特別支援学校での活用について本腰を入れて考えないといけないと感じた。

研修の理解度 100%が理解

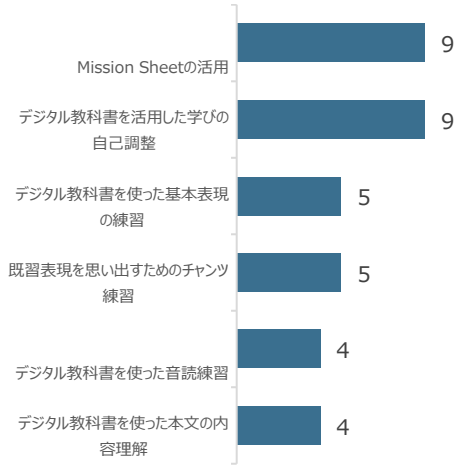
理解度に関する自由記述（抜粋）

＜活用は学びを達成する一つの手段であること＞

- ICT端末を使うことが目的ではなく、手立て（手段）としてどのように活用することができるか、具体的な取組を知る機会となった。
- 単元計画の考え方や、単元目標の設定と振返りの方法等を学び、デジタル教科書はひとつの学習ツールであることやその特性をうまく利用することを学んだ。
- ICTの活用には、アナログの代替的な役割によって時間を節約する側面と、学びの質的な変容を目指す側面があること。

活用に関する意識 89%が現状より向上

自身の授業に取り入れたいと感じた研修内容



■今後の研修に対する意見・要望

- **自己調整学習においてのデジタル教科書の活用方法・実践例を更に学びたい。**
- 高校におけるデジタル教科書等を活用した授業実践の例を紹介してほしい。

※ 調査対象：研修受講者のうち、教員と指導主事（鹿児島県外からの参加者も含む）　有効回答数：21　調査期間：研修実施後約２週間（令和７年11月４日～14日）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

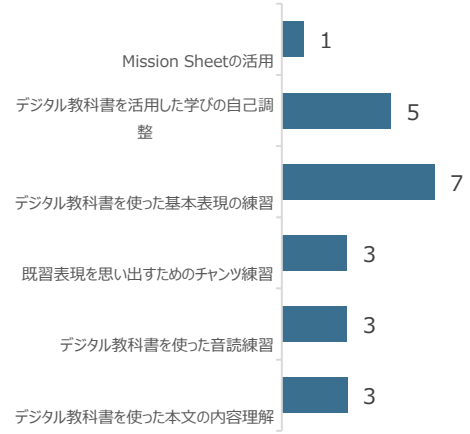
3. 各実証県における研修改善の取組
3.5. 鹿児島県教育庁
3.5.4. 研修改善（第２回）

- 追跡アンケートでは、研修以降の実践に関し、**55%の回答者が研修内容を活かしている**と回答しています。
- 研修内容で実際に自身の授業に取り入れたものを回答いただいたところ、**デジタル教科書を使った基本表現の練習を中心に取り入れられ、特に音声読み上げ機能の効果が実感**されていました。
- 研修内容を実践に活かせていない理由として、**「授業・子供たちの実態に合わない」「活用に関するサポートが受けにくい」**が挙げられています。**教師の担当する教科やクラスの実態に合わせた細やかなサポート**の必要性が示唆されています。

追跡アンケートの結果（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

実践における研修内容の活用

自身の授業で取り入れた内容（抜粋）



デジタル教科書活用による効果（抜粋）

＜音声読み上げ機能の効果＞

- 苦手な箇所だけを何度でも再生できる。
- 最初はゆっくり、慣れたら標準速度で聴くといった段階的な負荷調整が可能。
- 音声と同時にテキストを追いかけることで、音と文字が脳内で一致し、定着率が高まる。

デジタル教科書活用に関する課題（抜粋）

＜外国語以外の活用が進んでいない＞

- 算数・数学については５～６割程度の学校への配布となっているため、算数・数学での活用が進んでいない現状である。

研修内容を活かせていない理由（抜粋）

＜授業・子供たちの実態に合わない＞

- 協働的な学びや対話に重点を置いて授業を構成しているため、デジタル教科書を使う時間がない。
- 児童の実態から紙の教科書を優先させている。

＜研修後もサポートが欲しい＞

- 取り組みだすまでのためらいがある。上手くデジタル教科書を活用できないときのサポートが受けにくい。

■今後の研修に対する意見・要望

- デジタル教科書が全ての教科で配布され、実際に教師が授業で使用することによって、成果と課題が明確になり、今後の紙媒体・ハイブリッド・完全デジタルの選択がしやすくなるのではないだろうか。

※ 調査対象：研修受講者のうち、教員と指導主事（鹿児島県外からの参加者も含む）　有効回答数：24　調査期間：研修実施から約３か月後（令和８年１月26日～２月６日）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

3. 各実証県における研修改善の取組
3.5. 鹿児島県教育庁
3.5.4. 研修改善（第２回）

■ 研修における受講者の様子や受講後アンケートの結果から、有識者を交えた振返りを行い、「研修の成果につながった点」と「課題」、それらを踏まえた「今後の研修に向けた取組」を整理しました。

	成果と課題	今後の研修に向けた取組
研修の成果に繋がった点	**デジタル教科書の活用に紐づけながら、単元計画や子供たちの学びの見取りの工夫に関しても説明されたこと** • 授業におけるデジタル教科書の活用を検討する際は、単元においてどのような学びを目指し、教師がどのように子供たちの学びを見取るかも併せて検討する必要がある。 • 実践事例紹介では、単にデジタル教科書等ICTの活用方法だけでなく、「外国語の授業づくりで大切にしていること」として、単元計画の組み立て方の工夫等についても説明された。また、子供たちの学びを見取るためのツールも紹介され、受講者が授業検討時に意識すべき点が明確になり、活用イメージをより具体のものにすることができていた。	今後の研修においても、 活用方法だけでなく、活用の意図や授業設計における工夫点も併せて伝え、実践に繋がる意識を醸成する。
	デジタル教科書導入までの教員の試行錯誤も共有されたこと • 「児童は学ぶスピードが異なり、一斉指導では限界を感じたため、デジタル教科書の活用を始めた」など、教員が実践に至るまでの試行錯誤の過程も共有されたことで、一見レベルが高く見える事例に対しても、受講者が共感・納得しやすい内容になっていた。	今後の研修においても、 実践発表を行った教員の生の声を取り上げる。
課題	**活用事例を基に自身の授業への応用を考える場面が必要なこと** • 本研修で紹介されたのは一つの事例のみだったが、デジタル教科書の活用実践例を更に学びたいという意見や、高等学校での実践例を求める意見が見られた。 • 研修内で紹介できる事例には限りがあるため、事例を基に受講者が自身の授業に落とし込んで考えられるような研修設計が求められる。	今後の研修では、 教員が事例を自身の授業にどのように応用するかを検討するアウトプットの機会を設ける。

研修担当者の声（本研修の振返り）

現場の先生にデジタル教科書活用の意義や方法を理解してもらい、各市町村で横展開するためには、指導主事だけでなく、現場の教員の協力が必要です。
教員には、実践例を踏まえて自分の授業に落とし込む方法を考え、グループ内で発表し話し合う活動の機会を提供したいです。（鹿児島県 寺地 指導主事）

©2026 ABeam Consulting Ltd.

■ 鹿児島県教育庁での実証を通じて得られた「研修改善のポイント」と、実証を踏まえた「今後の取組」は以下のとおりです。

鹿児島県教育庁における研修改善の取組の総括

研修改善のポイント

研修改善（1回目）

実際にデジタル教科書を操作しながら、「学習者主体の授業」に繋がる活用方法を考えたこと
➡ 参考：p.95

- 指導主事は「学習者主体の授業」の必要性を理解する一方、デジタル教科書の活用経験が少なく、教師の活用を促す指導助言に繋げられずにいることが多い。
- 研修では、デジタル教科書が「学習者主体の授業」を実現するツールであることを理解した上で実際に操作を行うことで、活用できる授業場面に関して、納得感かつ具体性を伴った検討ができ、「デジタル教科書だからできること」まで議論が深まる。

活用段階別に具体的な指導助言の例を示したこと ➡ 参考：p.94、p.95

- 指導主事は、教師の活用状況や考えに寄り添いながら指導助言を行う必要がある。研修内で活用段階別に必要な指導助言の例を示すことで、受講者が自身の担当する学校の活用状況を想起しながら、具体的かつ実現性の高い指導助言の検討に繋げられる。

研修改善（2回目）

デジタル教科書の活用に紐づけながら、単元計画や子供たちの学びの見取りの工夫に関しても説明されたこと ➡ 参考：p.102

- 実践事例紹介では、単にデジタル教科書の活用方法だけでなく、単元計画の組み立て方や子供たちの学びを見取るための工夫も紹介することで、受講者が授業検討時に意識すべき点が明確になり、活用イメージをより具体のものにすることができる。

デジタル教科書導入までの教員の試行錯誤も共有されたこと ➡ 参考：p.103

- デジタル教科書を導入しようと思った経緯や苦労したことなど、教員が実践に至るまでの試行錯誤の過程も共有することで、一見レベルが高く見える事例に対しても、受講者が共感・納得しやすい内容になる。

実証成果を踏まえた県における今後の取組

- デジタル教科書にまだ触れたことがない教員や指導主事に向けて、インプット中心の研修を実施し、研修での学びを実際の授業に活かすために、デジタル教科書を使うこと自体を目的とせず、使う意図を明確にすることの重要性を伝えることができました。
- 今後は、採択した教科書発行者別での研修や、教科書発行者を招いた研修、デジタル教科書の活用段階別に応じた研修を実施し、教員や指導主事が実際の授業でどのように活用するかをアウトプットする機会を設けたいです。（鹿児島県 寺地 指導主事）

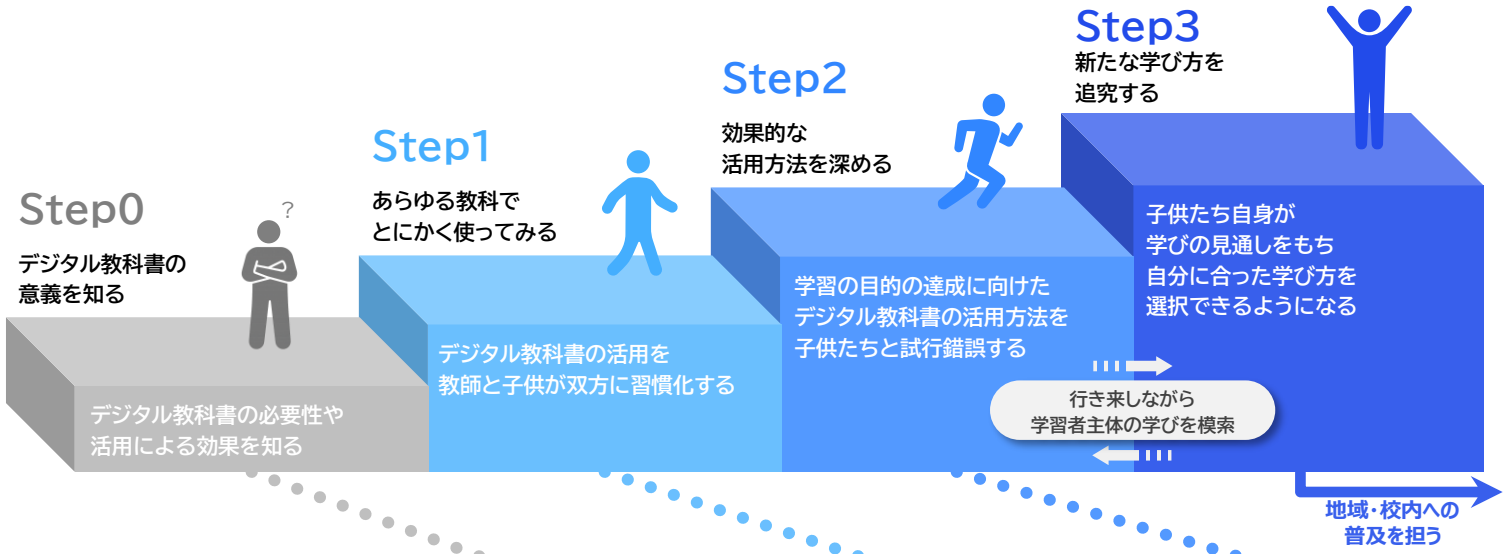
©2026 ABeam Consulting Ltd.

4. 実証研究結果の総括

4. 実証研究結果の総括
4.1. 効果的な研修に向けたポイント（1/5）

- 本事業の総括として、デジタル教科書の普及促進に向けた研修を、より効果的なものとするためのポイントに関し、各実証県の取組から共通に得られた示唆をもとに、以下のとおり整理しました。
- 教員は、以下のような段階を踏んでデジタル教科書を活用した授業改善を進めていくと考えられ、その段階に応じた研修設計が重要です。

教員の活用段階



活用段階ごとの研修のポイント

対象者のターゲット設定について

研修企画時は、以下の点に留意。
受講者にマッチした内容とし、
研修効果の最大化を目指す。

① **どの段階の教員にアプローチするか**を検討

② 対象者に事前アンケートを実施。**実際の活用状況や課題、研修のニーズを把握**

デジタル教科書とは何かを知る

■**伝える内容・テーマ**
- 活用の意義や目的、活用の効果
- デジタル教科書の機能や使い方
- 活用促進に向けた段階　等

■**具体的な研修内容の例**
- 有識者／指導主事の講義
- 教科書発行者による機能の紹介
- 模擬授業による活用体験　等

詳細は p.111

活用のバリエーションを増やす

■**伝える内容・テーマ**
- 様々な活用パターン
- 活用の効果、課題・留意点
- 他のICTツールとの組み合わせ　等

■**具体的な研修内容の例**
- 機能ごとの活用検討
- 受講者間での実践共有　等

詳細は p.112

活用により教科の本質に迫る

■**伝える内容・テーマ**
- 単元や授業単位の活用方法
- 教科のねらいに向けた活用方法

等

■**具体的な研修内容の例**
- 教科ごとの単元・授業検討
- 公開授業＆研究協議　等

詳細は p.112

©2026 ABeam Consulting Ltd.

4. 実証研究結果の総括
4.1. 効果的な研修に向けたポイント（2/5）

- 前頁に記載した「活用段階ごとの研修のポイント」について、Stepごとに詳述します。
- Step 0 の教員は、デジタル教科書への関心が低いと考えられ、まずはデジタル教科書とは何かを知ることが重要です。
  そのため、研修においては、デジタル教科書の意義や活用の効果、機能、その使い方の例等を、以下に掲載するポイントにより
  インプットしていくことが効果的であると考えられます。

主にStep0の教員向け研修のポイント

1 ■ **デジタル教科書を操作しながら活用検討**

教員・指導主事共に、デジタル教科書の操作経験が無い者が一定数いるため、それらの者が、**実機に触れて、機能や操作感を確かめながら活用を検討すること**で、の具体的な活用イメージを掴むことができる。

参考）埼玉県第２回、奈良県両回、熊本県第２回、鹿児島県第１回

2 ■ **公開授業や実践動画により活用イメージを醸成**

受講者に対し、**公開授業や実践動画により、デジタル教科書を活用する学習者・教員の実際の様子を示すこと**は、実際の授業での活用イメージを醸成するとともに、成功体験に繋がる実践に繋がる可能性が高い。

参考）埼玉県第１回、奈良県両回、熊本県第１回

3 ■ **模擬授業により学習者の目線から活用の効果を訴求**

受講者に、**模擬授業等で学習者の立場を体験させること**で、デジタル教科書の効果について、実感を伴った理解を促すことができる。
また、**動画や事例紹介時に、学習者の視点からデジタル教科書の必要性や効果を説明すること**も訴求効果が高い。

参考）福井県第１回、熊本県両回

4 ■ **デジタル教科書の活用促進に向けた段階を理解**

教員・指導主事共に、どのように活用を進めてよいか分からないという声は多い。そのため、研修において、**目指すべき先進事例やそこに至るまでの取組を細分化して示すこと**で、各受講者が以降の取組の見通しを明確にもつことができる。

参考）熊本県第１回、鹿児島県両回

5 ■ **教科書発行者から機能の詳細をレクチャー**

デジタル教科書に搭載されている機能・コンテンツやその意図、また、実際の活用場面など教科書発行者の視点から詳細にレクチャーしてもらうことで、活用の意義や具体的な活用方法を掴むことが可能となる。

参考）埼玉県第２回

デジタル教科書とは何かを知る

■**伝える内容・テーマ**
- 活用の意義や目的、活用の効果
- デジタル教科書の機能や使い方
- 活用促進に向けた段階　　等

■**具体的な研修内容の例**
- 有識者／指導主事の講義
- 教科書発行者による機能の紹介
- 模擬授業による活用体験　　等

©2026 ABeam Consulting Ltd.

4. 実証研究結果の総括
4.1. 効果的な研修に向けたポイント（3/5）

- Step 1 の教員は、授業での活用のパターンが少ないと考えられ、研修において活用のバリエーションを増やすことが重要です。
  その際、活用自体が目的化しないよう、活用の意図や活用による効果・課題を意識させることがポイントとなります。
- Step 2 の教員は、一連の単元・授業の中で如何に効果的に活用できるかがテーマとなるため、研修では、特定の単元・授業に絞って教科のねらいに向けた活用検討を行うことが有効であると考えられます。

主にStep 1 の教員向け研修のポイント

6

■「意図」を明らかにして活用を検討

デジタル教科書の活用を検討する際には「協議の視点」を設定することで、焦点化した議論を促すことができる。
その際、活用自体が目的化しないよう**「学習活動の意図（目指す姿や育てたい資質能力）」を意識させる**と良い。

参考）埼玉県両回、福井県第２回

7

■「成果・課題」や「活用に至るまでの試行錯誤」も共有

実践事例を共有する際、**活用方法だけでなく、その成果・課題や活用に至るまでの試行錯誤も紹介すること**で受講者に高く訴求できる。
また、**紹介した活用方法をもとに、そのポイントを一般化して伝える**ことで、受講者の再現性を更に高めることができる。

参考）埼玉県第１回、福井県第２回、鹿児島県第２回

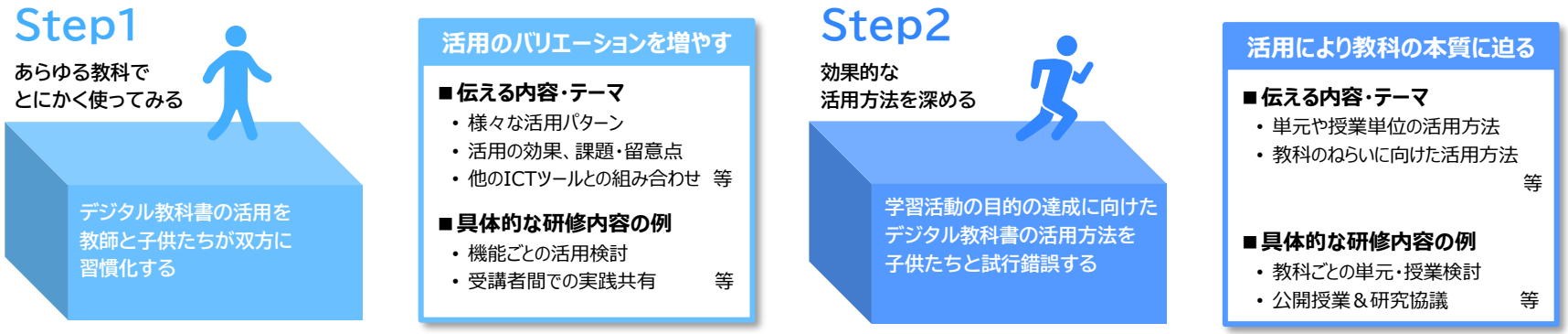
主にStep 2 の教員向け研修のポイント

8

■ 特定の単元・授業場面を想定して検討

デジタル教科書に関する理解を各自が自身の授業と結びつけ、教科のねらいや資質・能力の育成に繋がる活用に迫るためには、**特定の教科や単元・授業に焦点化し、実際の授業の流れの中で検討を行う**と良い。

参考）埼玉県第１回



©2026 ABeam Consulting Ltd.

4. 実証研究結果の総括
4.1. 効果的な研修に向けたポイント（4/5）

- 指導主事向けの研修におけるポイントについても、以下のとおり整理しています。
- 指導主事も教員と同様に、活用経験が少ないという課題があるため、「デジタル教科書を操作しながら活用検討」や「デジタル教科書の活用促進に向けた段階を理解」といった点が研修のポイントとなります。
- また、研修を通じて”教育ビジョン”に関連づけながらデジタル教科書の活用を理解したり、教員と一緒に活用検討を行う中でデジタル教科書に関する学校現場の課題感を把握したりして、実際の指導助言のイメージを掴んでもらうことが重要です。

指導主事員向け研修のポイント

1 ※再掲

■ デジタル教科書を操作しながら活用検討

教員・指導主事共に、デジタル教科書の操作経験が無い者が一定数いるため、それらの者が、**実機に触れて、機能や操作感を確かめながら活用を検討すること**で、実際の授業での具体的な活用イメージをもつことができる。

参考）熊本県第２回、鹿児島県第１回

4 ※再掲

■ デジタル教科書の活用促進に向けた段階を理解

教員・指導主事共に、どのように活用を進めてよいか分からないという声は多い。そのため、研修において、**目指すべき先進事例とそこに至るまでの取組（指導助言）を細分化して示すこと**で、各受講者が以降の取組の見通しを明確にもつことができる。

参考）熊本県第１回、鹿児島県第１回

9

■ “教育ビジョン”に関連付けながらデジタル教科書の活用を理解

教育委員会が掲げる教育ビジョン等と関連させながら「デジタル教科書の意義や活用」を説明することで、日頃意識している指導の観点と紐づけながら理解することができる。

参考）鹿児島県第１回

10

■ 教員と一緒に活用検討し、学校現場の課題感を把握

学校から離れて一定期間経過している指導主事からは、「現場の教員が、デジタル教科書に関しどのような課題を抱えているか分からない」という声が多く挙げられる。**研修等で、指導主事と教員が一緒に活用検討する場を設け、学校現場における実際の課題感を知ることで**、指導助言のイメージを具体化することができる。

参考）奈良県児第２回

©2026 ABeam Consulting Ltd.

4. 実証研究結果の総括
4.1. 効果的な研修に向けたポイント（5/5）

- 全ての研修に共通するポイントは以下の通りとなります。
- 特に、「事前アンケート等により受講者属性を把握」することについては、受講者の現状やニーズを把握し、それらに即した効果的な研修設計を行う上で必要不可欠となります。

全ての研修に共通するポイント

11 ■ **事前アンケート等により受講者属性を把握**

デジタル教科書の活用実態は教員ごと異なるため、**事前アンケート等で受講者の現状やニーズを詳細に捉え、それらに即して研修を企画することで**、研修内容の訴求力を向上させることができる。

参考）福井県第２回、奈良県第２回、熊本県第２回、R6事業

12 ■ **グループ分けによる議論の活性化**

デジタル教科書の活用状況は教員間で差があるため、グループの組成方法に関しては留意が必要となる。

受講者の属性（地域・教科 等）で分ける場合、「同僚性」が生まれ共感性の高い議論を引き出すことができ、
特定の属性で分けない場合、様々な立場からの意見交換が生まれ多様な議論を引き出すことができる。

参考）R7の各研修、R6事業

13 ■ **同対象への継続的な研修による段階的な理解促進**

研修後の受講者の実践やアンケートから抽出されたデジタル教科書の成果・課題を踏まえ、後続の研修で更なる授業改善に向けた活用を検討する等、研修間に関連性をもたせ、同対象に継続した研修を行うことで、段階を踏んだ理解促進を図ることが可能となる。

参考）埼玉県第１回、福井県第２回、R6事業

14 ■ **「個別・協働・全体」をバランスよく取り入れる**

デジタル教科書の活用に不慣れな教員は、他の教員から気付きを得ることが多い。そのため、**授業と同様に「個別・協働・全体」と形態を変えながら検討を進め、最後に各自が個別に以降の取組を整理すること**で、活用に関する深い理解を引き出すことができる。

参考）埼玉県両回、熊本県第２回、R6事業

15 ■ **概念的な内容（抽象）と活用事例（具体）の往還**

例えば、学習指導要領の内容とデジタル教科書の関連性（＝概念的理解）を説明した後、該当の場面を実際の活用事例から学ぶ（＝具体的理解）等、**抽象的な理論・概念を具体的な活用事例とセットで伝える**ことで、受講者の高い理解度を引き出すことができる。

参考）埼玉県両回、福井県両回、奈良県第２回

©2026 ABeam Consulting Ltd.

4. 実証研究結果の総括
4.2. 今後の方針（1/2）

- 次に、本事業での研修の取組から得られた成果を踏まえ、デジタル教科書の更なる普及促進に向け、国や都道府県等が、今後取り組むべきことを以下のとおり整理しました。
- 本内容についても、有識者の皆様からも意見を頂いており、その内容を併記しています。

1

R6事業の総括	研修後、受講者からは「協働的な学び」や「教科ごと」「発達段階ごと」の活用を更に知りたいという声が多く寄せられており、個々のニーズに応じて、研修を細分化していく必要がある。
R7事業の成果	教育委員会が、研修を細分化する際に参考となる考え方を明示すべく、ニーズがある程度類似するであろう「教員の活用段階」ごとに、研修企画に当たってのポイントを整理した。
今後の方針①	自治体において「早急に普及促進を図りたい」との考えのもと、幅広い対象に向けた大規模研修を実施するケースも多いが、受講者のニーズに沿い、より高い研修効果が得られるよう、「教員の活用段階」を意識した研修設計を促す必要がある。

【今後の方針①に対する 委員からの意見】

- Step 2 ～3のような活用が進む教員に対しては、ICT活用研修ではなく、各教科研修の中でデジタル教科書の活用を検討することが望ましいと考えられる。各自治体において、研修計画を作成する際には、こうした段階を意識しながら、体系的に構成することが重要である。

2

R6事業の総括	“授業観の転換”に有効な機能やその活用場面など、抽象的な理解は得られたものの、一連の授業の流れの中で実践するイメージが未だ十分に形成できておらず、行動変容に至っていない者もいる。その点をフォローする研修が必要である。
R7事業の成果	過去の研修等で得た知識をもとに単元・授業を通じた活用を検討する事例など、抽象的な理解に留まらず、実際の授業での活用を意識した実践的な理解を促す研修事例を一部創出することができた。
今後の方針②	「活用のバリエーションを見い出す」「活用により教科での本質に迫る」といったところにニーズがある、より活用が進む教員向けの研修事例（Step1～２を想定）については少ないため、引き続き事例創出を図っていく必要がある。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

4. 実証研究結果の総括
4.2. 今後の方針（2/2）

■ （前頁の続き）

3	R6事業の総括	学習者主体の学びによる効果への疑念やこれまでの指導法から変えることへの心理的負担など、意識の転換を阻む要因を探り、研修内外で対応策を講じていく必要がある。
	R7事業の成果	意識の転換が特に求められる、デジタル教科書に関心がない教員（Step０）向けの研修事例の蓄積が進んできており、実証の過程において、この段階の教員が抱えている課題感や、それらを踏まえ訴求すべき内容・方法が整理されてきている。
	今後の方針③	「教員の活用段階」ごとに、とりわけ、実際に活用を始めている教員（Step1～２）が持つ、デジタル教科書の活用に当たっての課題感を把握し、その対応策を検討する必要がある。
4	R6事業の総括	研修実施者からのアプローチのみに依存するのではなく、研修を受けた受講者が起点となって、学校・地域における活用促進を担っていくような仕組みづくりが必要である。
	R7事業の成果	活用レベルを高めた教員が、”普及”側に回る研修事例を創出することができた。また、地域での活用促進のキーマンとなる指導主事向け研修についても数例創出することができた。
	今後の方針④	特に、地域での普及促進の起点となる指導主事が、知見・経験不足を理由にボトルネックとなっている側面もある。 そのため、指導主事向けの研修モデルの更なる創出を図るとともに、教員との役割の違いを踏まえながら研修企画に当たってのポイントを整理する必要がある。

【今後の方針④に対する 委員からの意見】

- 指導主事は「デジタル教科書を操作した経験がなく、自信を持って指導助言できない。」と悩んでいることが多いが、授業改善に向けた視点や考え方など授業づくりの根幹は理解しているため、操作方法さえ分かれば指導助言に繋げていくことができる。このような背景も踏まえて指導主事向け研修のポイントを抽出していけると良い。

©2026 ABeam Consulting Ltd.

アビーム、ABeam及びそのロゴは、アビームコンサルティング株式会社の日本その他の国における登録商標です。
本文に記載されている会社名及び製品名は各社の商号、商標又は登録商標です。　©2026 ABeam Consulting Ltd.

ABeam Consulting®

Build Beyond As One.

学習者用デジタル教科書 授業改善事例集

～学習者主体の学びに向けたデジタル教科書の活用～

令和7年度　学習者用デジタル教科書の効果・影響等に関する実証研究事業

文部科学省

ABeam Consulting®

Build Beyond As One.

目次

本書の見方 p.2

授業改善事例 p.3

1. 外国語(鹿屋市立鹿屋中学校) 4
2. 越前町立糸生小学校(算数) 5
3. 奈良市立ならやま小中学校(国語) 6
4. 山都町立矢部中学校(理科) 7
5. 深谷市立藤沢中学校(社会) 8

デジタル教科書活用のポイント p.9

Appendix p.10

はじめに

～授業や教科書の在り方を再考する機会に～

全国どの地域も端末環境の更新の時期となり、NEXT GIGAへと移行しています。デジタル学習基盤としての活用や研修も進みつつあります。

そのような中、中央教育審議会の議論でも、自己調整の力を子供一人一人に培うことや、教科書のあり方も「教科書を教える」から「教科書で教える」という方向性が示されています。今まで以上に、教師の役割が問われることになっていくものと推測します。

そして、これまでの実証研究事業により、デジタル教科書の使用頻度が高いほどデジタル教科書の使用感を肯定的に捉えていることが明らかになっています。一方で、課題として、デジタル教科書をどのように授業で活用すれば良いか分からない、教員研修をどのように行えば良いか分からないという話もお聞きしています。

「教科書の発行に関する臨時措置法」第2条によると、教科書とは、「(略)教育課程の構成に応じて組織排列された教科の主たる教材として、教授の用に供せられる児童又は生徒用図書(略)」と示されています。一方で、デジタル教科書は、これまでの教師が教えるためだけの教科書から児童生徒が学ぶための教科書へと移行していると言えます。特に、児童生徒個々の実態に合わせて、教科書をカスタマイズできることは、子供差配の学びに大変有効に働いています。

そのような中、読むだけの教科書から、書く教科書、聞く教科書、共有する教科書へと、さらに、これまでの一斉授業が主だった使い方から、児童生徒自身で学習が最適となるよう自己調整するような使い方へと、教科書の位置付けを見直し、授業の在り方を変革していく必要があります。

そこで、「学習者用デジタル教科書の効果・影響等に関する実証研究事業」の「授業改善事例集」及び「研修事例集」を、ここに公開することにしました。デジタル教科書の活用の仕方にとどまらず、授業や教科書の在り方について、再考する機会にしていただければ幸いです。

令和7年度
学習者用デジタル教科書の効果・影響等に関する実証研究事業
主査
中川一史
(放送大学・教授)

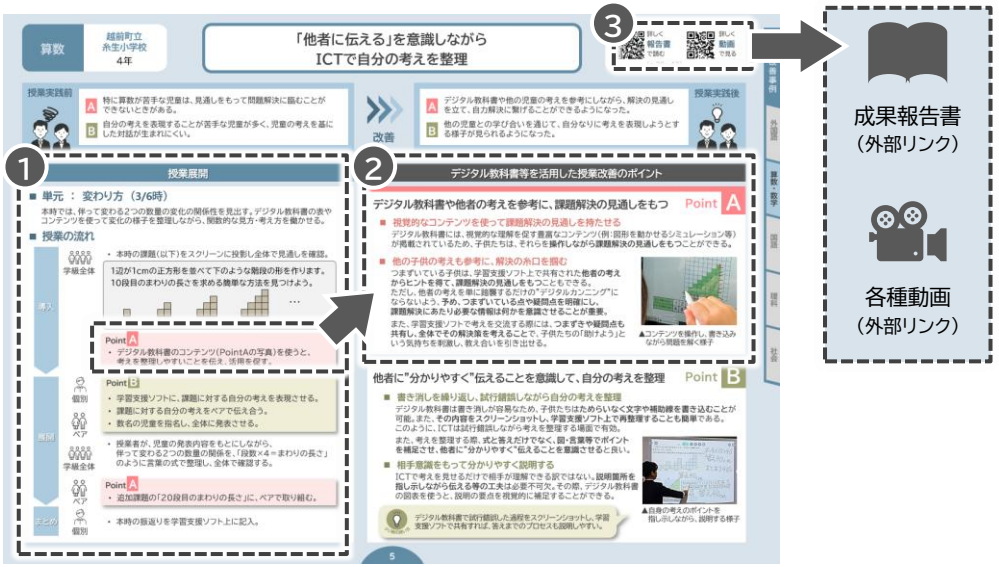
本書の見方

令和7年度「学習者用デジタル教科書の効果・影響等に関する実証研究事業」（以下「本事業」という。）では、小学校2校・中学校3校を「実証研究校」（以下「実証校」という。）として選定し、外国語、算数・数学、国語、理科、社会の5教科で、有識者（p.12参照）の指導助言の下、デジタル教科書をはじめとするICT機器等（以下「デジタル教科書等」という。）を用いた授業改善に取り組みました。本書では、各実証校で取り組んだ内容を「授業改善事例」として、下図のとおり、各教科1ページにとりまとめています。また、教科を横断したデジタル教科書等のポイントも紹介しています。

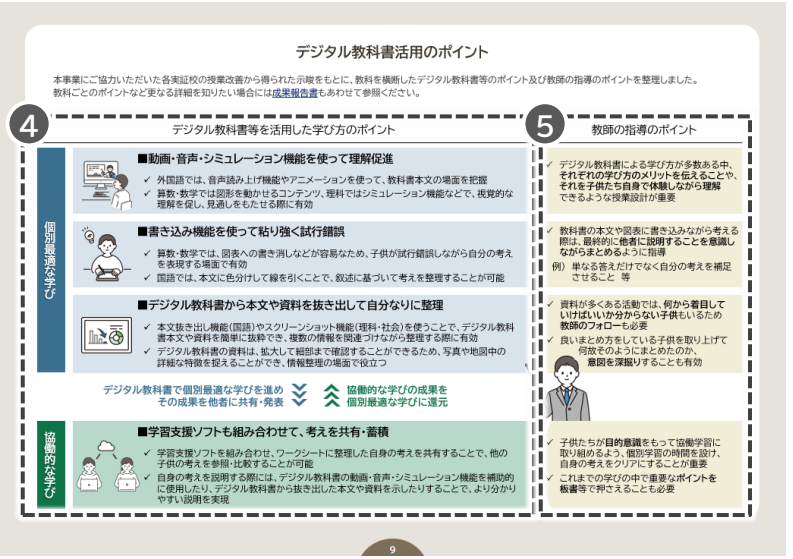
なお、本書はあくまで授業実践の概要を端的にまとめたものであり、更なる詳細については成果報告書もあわせて参照ください。

成果報告書（授業改善に関する調査研究）： https://www.mext.go.jp/content/20260518-mxt-kyokasyo-000049761_2.pdf

授業改善事例（p.4～8）



デジタル教科書活用のポイント（p.9）



1 各実証校で取り組んだ授業の概略（主な活動内容）

2 授業の活動のうち、デジタル教科書等を活用した授業改善のポイントを抽出し、具体的な活用方法やそのねらい、教師の指導上の工夫等を紹介

3 各事例は、QRコードから報告書及び動画形式でも確認可能 （概要はp.11で詳述）

4 5教科の間で共通するデジタル教科書の活用ポイントを紹介

5 各活用ポイントにおいて教師が指導する際に留意すべき点も併記

授業改善事例

外国語

鹿屋市立
鹿屋中学校
1年

デジタル教科書を“指示されて使う”から“自分で選ぶ”学びへ

詳しく報告書で読む（p.12～26）

授業実践前

A 多様な学習リソースがあるものの、「その学び方にどのような効果があるか」を生徒が理解しきれていない。

B 生徒は教師に指示されたことのみに取り組む傾向が強く、自分で学び方を考える機会が少ない。

改善

授業実践後

A 学習の目的に応じてデジタル教科書の各機能を活用し、それぞれの効果を理解した。

B 自分の課題や目的に応じて、デジタル教科書を中心とした学び方を主体的に選択するようになった。

授業展開

■ 単元 ： Program8 Happy New Year!（3/9時）

単元末ではALTのビデオレターを聞き取り、感想を伝える活動を行う。本時では、ビデオレターでも使われる「現在進行形」を用いた会話を続ける活動に取り組む。その際に、デジタル教科書を活用し、自分に必要な表現を選んで練習する。

■ 授業の流れ

導入

学級全体
- 単元ゴール（ALTのビデオレターを聞き取り、感想を伝えること）を再確認。
- 本時のねらい（現在進行形を用いた会話）を共有。

展開

ペア
- 生徒がペア相手を初詣に誘うために「今何をしているか」を問う電話場面を設定。現在進行形を用いたやり取りを行い、自分に必要な（言えなかった）表現を意識。

学級全体
- 現在進行形の表現が使われている教科書の対話文の場面を確認。その際に、大型提示装置にデジタル教科書内のイラストを提示。

個別

Point A
- 各自で対話文の音声をデジタル教科書で聞き、「言えなかった表現」の習得に向けて学習。
- 表現の習得に向けて、デジタル教科書の速度変更機能や単語練習機能が使えることを授業者から紹介。

ペア
- 生徒が個別で習得した表現を活かし、上記の電話場面に再挑戦。

学級全体
- 新出表現や既習事項を使用しているやり取りなど、良い取り組みをしているペアを指名し、全体共有。

まとめ

個別

Point B
- 各自でデジタル教科書を含めた本時の「学び方」を振り返り、学習支援ソフト上に、本時の学習内容・学習方法・成果・課題を記入。

デジタル教科書等を活用した授業改善のポイント

デジタル教科書の各機能を「学習の目的」と結びつけて活用 Point A

■ 本時の課題を明確化し、デジタル教科書を使った学習を動機づけ

授業冒頭では単元ゴールや本時のねらいなど、生徒が「目指す姿」を具体化。その上で、ペアでのやり取りなどの活動に取り組むことで、自分に**足りないところ（課題）への気づきを促す**。生徒がその後の**個別学習に目的をもって取り組める**ようにする。

▲本文の聞き取りを行う様子

■ デジタル教科書の各機能を目的に合わせて使い分け

「正確な聞き取りには速度変更機能」「新出表現の練習には単語練習機能」というように、授業者が「学習の目的」別に機能を紹介。

生徒は、**「学習の目的」に応じてデジタル教科書の各機能を使い分ける中で**、「どの機能がどの学習に有効か」を実感。デジタル教科書を課題解決のための学習手段として位置付ける。

デジタル教科書の使い方
生徒が各自のペースで必要な機能を組み合わせて使うことで、課題解決に繋げやすくなる。

生徒が学び方を振り返り、「目的」に沿った自発的な選択を促進 Point B

■ 良い取組と学び方を全体共有

授業者は中間指導として、良い取組をしている生徒やペアを指名し、学級全体で共有する。単に結果を評価するのではなく、当該生徒から**「デジタル教科書を使ってどのように取り組んだか」を引き出すことで、生徒が自分の学び方を見直す視点をもてる**ようにする。

■ 学び方の振返りを通して、今後の学びに接続

生徒は学習支援ソフト上に、学習内容・学習方法・成果・課題を記入。**振返りを通してデジタル教科書等の効果を意識し、今後の学習で目的に応じた学び方を自発的に選択する姿勢を促す。**

デジタル教科書の使い方
デジタル教科書と学習支援ソフトを2画面で表示することで、本時で学習した内容に立ち戻りながら、自分の学び方を具体的に捉えられる。

▲デジタル教科書も見ながら学習支援ソフトに振返りを記入

算数

越前町立
糸生小学校
4年

「他者に伝える」を意識しながら ICTで自分の考えを整理

詳しく 報告書 で読む (p.28~43)

詳しく 動画 で見る

授業実践前

A 特に算数が苦手な児童は、見通しをもって問題解決に臨むことができないときがある。

B 自分の考えを表現することが苦手な児童が多く、児童の考えを基にした対話が生まれにくい。

改善

A デジタル教科書や他の児童の考えを参考にしながら、解決の見通しを立て、自力解決に繋げることができるようになった。

B 他の児童との学び合いを通じて、自分なりに考えを表現しようとする様子が見られるようになった。

授業実践後

授業展開

■ 単元 ： 変わり方 （3/6時）

本時では、伴って変わる2つの数量の変化の関係性を見出す。デジタル教科書の表やコンテンツを使って変化の様子を整理しながら、関数的な見方・考え方を働かせる。

■ 授業の流れ

導入

学級全体

- 本時の課題（以下）をスクリーンに投影し全体で見通しを確認。

1辺が1cmの正方形を並べて下のような階段の形を作ります。
10段目のまわりの長さを求める簡単な方法を見つけよう。

Point A
- デジタル教科書のコンテンツ（PointAの写真）を使うと、考えを整理しやすいことを伝え、活用を促す。

展開

個別

Point B
- 学習支援ソフトに、課題に対する自分の考えを表現させる。
- 課題に対する自分の考えをペアで伝え合う。
- 数名の児童を指名し、全体に発表させる。

ペア

学級全体

- 授業者が、児童の発表内容をもとにしながら、伴って変わる2つの数量の関係を、「段数×4＝まわりの長さ」のように言葉の式で整理し、全体で確認する。

ペア

Point A
- 追加課題の「20段目のまわりの長さ」に、ペアで取り組む。

まとめ

個別

- 本時の振返りを学習支援ソフト上に記入。

デジタル教科書等を活用した授業改善のポイント

デジタル教科書や他者の考えを参考に、課題解決の見通しをもつ Point A

■ 視覚的なコンテンツを使って課題解決の見通しを持たせる

デジタル教科書には、視覚的な理解を促す豊富なコンテンツ（例：図形を動かせるシミュレーション等）が掲載されているため、子供たちは、それらを**操作しながら課題解決の見通しをもつ**ことができる。

■ 他の子供の考えも参考に、解決の糸口を掴む

つまずいている子供は、学習支援ソフト上で共有された**他者の考えからヒントを得て、課題解決の見通しをもつ**こともできる。
ただし、他者の考えを単に踏襲するだけの”デジタルカンニング”にならないよう、**予め、つまずいている点や疑問点を明確にし、課題解決にあたり必要な情報は何かを意識させることが重要。**

また、学習支援ソフトで考えを交流する際には、**つまずきや疑問点も共有し、全体でその解決策を考えること**で、子供たちの「助けよう」という気持ちを刺激し、教え合いを引き出せる。

▲コンテンツを操作し、書き込みながら問題を解く様子

他者に”分かりやすく”伝えることを意識して、自分の考えを整理 Point B

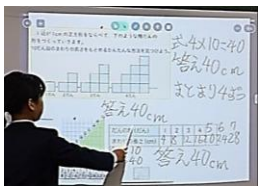
■ 書き消しを繰り返し、試行錯誤しながら自分の考えを整理

デジタル教科書は書き消しが容易なため、子供たちは**ためらいなく文字や補助線を書き込むこと**が可能。また、**その内容をスクリーンショットし、学習支援ソフト上で再整理することも簡単**である。
このように、ICTは試行錯誤しながら考えを整理する場面で有効。

また、考えを整理する際、**式と答えだけでなく、図・言葉等でポイントを補足させ、他者に”分かりやすく”伝えることを意識させる**と良い。

■ 相手意識をもって分かりやすく説明する

ICTで考えを見せるだけで相手が理解できる訳ではない。**説明箇所を指し示しながら伝える等の工夫**は必要不可欠。その際、デジタル教科書の図表を使うと、説明の要点を視覚的に補足することができる。



▲自身の考えのポイントを指し示しながら、説明する様子

デジタル教科書の使い方
デジタル教科書で試行錯誤した過程をスクリーンショットし、学習支援ソフトで共有すれば、答えまでのプロセスも説明しやすい。

国語

奈良市立
ならやま小中学校
6年

複数の情報を関連付け、他者の考えを取り入れながら、自分の考えを深める

詳しく 報告書 で読む (p.45～59)

詳しく 動画 で見る

授業実践前

A 自分の考えを整理する際に、1つの叙述や表現のみを考えの根拠とし、物語全体を俯瞰して捉えることが難しい児童が多い。

B 他者の意見に触れる場面はあったものの、それらを踏まえて、自分の考えを発展させる姿はあまり見られない。

改善

授業実践後

A デジタル教科書を活用して、複数の叙述や表現の関連を見出し、それらを基に自分の考えを整理できるようになった。

B 他者に分かりやすく説明しようとする過程で、自身もまた、他者の視点や整理方法を取り入れようとする姿が見られるようになった。

授業展開

■ 単元 ： 海の命 （4/10時）

本時では、各児童が設定した中心課題(例：なぜ太一はクエを殺さなかったか)に対する自分の考えを整理する。その際、関連する叙述や表現に線を引いたり、抜き出したりしながら、物語の表現や描写を読み取り、他者と交流して、考えを深めていく。

■ 授業の流れ

導入（学級全体）
- 学級全体で本時のめあてを確認し、学習の見通しを立てる。

展開

（個別）
Point A
- 前時に設定した中心課題について、各自が考えを深める。その際、関連する叙述や表現に着目して、本文に書き込んだり、抜き出したりしながら、デジタル教科書に整理した内容を取りまとめる。

（グループ）
Point B
- 各自が取りまとめた中心課題に対する自分の考えとその根拠をグループ内で意見交換する。

（学級全体）
Point B
- 学級全体で意見交換を行う。その際、児童は自分の考えを端末に表示した上で自席に置き、自由に教室内を歩きながら、他の児童の考えを参照する。
- 他者から得た視点や気付きを踏まえ、デジタル教科書を活用して、再度考えを整理する。

まとめ（個別）
- 本時で学んだ内容を振り返り、フォームに記入させる。

デジタル教科書等を活用した授業改善のポイント

複数の叙述や表現を関連付けながら、自分の考えを整理する　Point A

■ **本文に色分けして線を引いたり、抜き出した文章を自由に配置して、関連付ける**

デジタル教科書を活用し、色分けして線を引いたり、必要な文章を抜き出して自由に配置しながら、**情報を視覚的に整理**する。これらの機能を活用して、**複数の叙述や表現の関係に着目しながら、考えを深めること**を促す。

■ **個々に適した方法で考えをまとめる**

抜き出し機能を活用し、抜き出した文章を矢印を用いて関連付ける等、**個々に応じた方法で考えをまとめられる**。また、普段の授業から、デジタル教科書を操作する機会を十分に設け、**各自がそれぞれの機能の良さを見つけ、自分なりに使いこなせるよう**に促す。

デジ教の使い方 各児童がデジタル教科書の機能を必要に応じて組み合わせて活用することで、個々に適した形で情報を柔軟に整理できる。

▲矢印を用いて複数の文章を関連付けながら整理している様子

他者に分かりやすく考えを伝え、多様な学びを取り入れる　Point B

■ **自分の考えを他の児童に分かりやすく伝える**

中心課題に対する自身の考えを、デジタル教科書で整理した**内容を提示しながら説明することで、考えと根拠の関係を視覚的に示しやすくなる**。そのため、口頭での表現に不安のある児童にとっても、他者に自分の考えを分かりやすく伝えることに繋がる。

■ **他者の視点や整理方法を取り入れて、考えを再整理する**

デジタル教科書を活用することで、**抜き出した文章や加筆した考えを自由に配置でき、他者の視点を踏まえて、再整理する際に有効である**。整理方法に悩む児童がいる場合には、整理に工夫が見られる児童を全体の前で紹介すると、見通しをもたせることができる。

デジ教の使い方 紙のノートでは途中で構成等を変更しにくい一方、デジタル教科書の抜き出し機能等を活用することで、意見を容易に反映できる。

▲児童同士で意見交流をしている様子

理科

山都町立
矢部中学校
2年

デジタル教科書 × 学習支援ソフトで 充実したグループ発表を実現

詳しく 報告書 で読む (p.61～76)
詳しく 動画 で見る

授業実践前

A 情報同士を適切に関連付けて整理することが難しい生徒が多い。また、それらの生徒は自分の考えを基に発表することも苦手である。

B 考えを上手く他者と交流できず、グループ活動において役割が曖昧なまま学習が進む場面が多い。

改善

授業実践後

A 学習内容を現実の事象と関連付けて捉え、整理した内容を根拠として、自分の言葉で発表する姿が見られた。

B 他者の意見を踏まえて考えを深めながら、役割分担して、協働的に学習を進める様子が見られた。

授業展開

■ 単元 ： 大気の動きと日本の天気(7/9時)

本時では、同校の生徒が暮らす熊本県山都町における授業日翌日の天気を、班ごとに予測し、気象予報士になりきって発表させる。授業では、デジタル教科書と学習支援ソフトを活用し、情報を収集・整理して、全員で協力して発表するように促す。

■ 授業の流れ

導入 学級全体

- 本時の学習課題、めあて(ルーブリック)、学習の流れ等を、学級全体で確認し、学習の見通しをもつ。

展開 個別

Point A
- 前時に、生徒一人一人が学習支援ソフトに取りまとめた「天気の予測」を再確認する。
  なお、予測は、デジタル教科書の本文や図表と、リアルデータ(実際に使われている天気図、等圧線図等)から、生徒が必要な情報を選択・関連付け、風向や生活への影響(洗濯物等)も含めて整理。
- 各自が取りまとめた予測をグループ内で順に発表する。

展開 グループ

Point B
- デジタル教科書と学習支援ソフトを組み合わせて、各自の予測を比較・参照しながら、グループ内で意見を整理する。
- 役割分担の上、全体発表に向けて準備する。

展開 全体

Point A
- グループごとに整理した予測を気象予報士になりきって発表する。なお、発表時には、グループ全員が必ず発言する。

まとめ 個別

- 天気を予測するために活用した情報や、予測のポイントを全体で確認する。

デジタル教科書等を活用した授業改善のポイント

多様な情報を関連付けて整理し、根拠を基に自分の言葉で発表 Point A

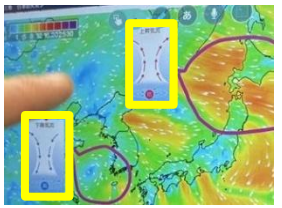
■ 学習内容を現実の現象と関連付ける

デジタル教科書のスクリーンショット機能を活用し、**教科書に示された図表を切り出して**、天気図や等圧線図等の**リアルデータと並べて提示し、関連付けるように促す。**これにより、生徒に学習内容を現実の現象と結び付けて捉えてもらう。

■ 整理した内容を根拠に発表する

デジタル教科書を活用して、整理した内容を根拠として、全ての生徒が発表する機会を設定する。整理した内容を手元で確認しながら話せるようにし、**原稿をただ読み上げるのではなく、自分の言葉で考えを伝える発表に繋げる。**

デジタル教科書の使い方
デジタル教科書とリアルデータを組み合わせ、線を書き込んだりしながら説明することで、視覚的な理解を促しやすい。



▲デジタル教科書の図表(黄色枠内の画像)とリアルデータを並べて、関連付けながら説明している様子

学習支援ソフトと組み合わせ、比較参照や役割分担を容易に Point B

■ 他者の考えを比較参照し、考察を深める

デジタル教科書で整理した内容を学習支援ソフト等を通じて共有し、他の生徒の考えを画面上で相互に確認できるようにする。これにより、**意見の違いや共通点に着目した考察により多くの時間を充てることができる。**

■ 効率よく役割分担しながら、協働的な学習を促す

グループ内で図表整理や発表構成の作成等を役割分担し、デジタル教科書と学習支援ソフトを組み合わせてその内容を共有することで、全員で協力して発表するように促す。

デジタル教科書の使い方
デジタル教科書と学習支援ソフトを組み合わせることで、紙媒体のように書直しや掲示の手間をかけることなく、複数の考えを並べて比較参照できる。

▲班内で意見を比較参照している様子

社会

深谷市立
藤沢中学校
2年

個別での資料の読み取りを起点とし、「協働的な学び」が深まる授業

詳しく 報告書 で読む (p.78～93)
詳しく 動画 で見る

授業実践前

A 理解に時間のかかる生徒は自分の考えや疑問点が明確でないまま、話し合いに参加するため、意見交換の参加度に差がある。

B 手を挙げて発言することに苦手意識を持つ生徒が多く、発表者に偏りがある。

改善

授業実践後

A 自分で資料を読み取り、考えをワークシートに整理する時間を確保したことで、生徒は考えを持って意見交換に参加できた。

B ジグソー法（協同的な学習の手法の一つ）を採用したことで、生徒一人一人が自分事として学習に臨み、発言機会が増加した。

授業展開

■ 単元 ： 明治維新 （2/3時）

本時では、明治維新で「武士」「農民」「都市の人々」の3つの立場が経験した変化を捉える。グループ内でその3つの立場に分かれ、担当の立場について、デジタル教科書で調べながらまとめ、考察する。その後、ワークシートを持ち寄り、意見交換を行う。

■ 授業の流れ

導入

学級全体
- 全体で前時の復習をし、本時の課題「明治維新で武士、農民、都市の人々にどんな変化があったのか」を提示。
- グループ内で「武士」「農民」「都市の人々」の担当に分かれる。

展開

個別

Point A
- 自分の担当の立場が経験した変化について、デジタル教科書中で参考となる資料を探しながら、個人で考察し、ワークシートにまとめる。

ペア

Point B
- 同じ立場を担当する生徒同士で集まり、ワークシートを見せ合いながら説明を行う。

- 他の生徒の考えやワークシートへの記述を踏まえて、自分のワークシートを修正する。

ペア

Point B
- 最初のグループに戻り、ワークシートを見せ合いながら、資料から読み取ったことや、考えたことを説明し、意見交換。

学級全体
- 最初のグループで、発展課題「なぜ明治政府はこのような政策を進めたか」に取り組み、学級全体で共同編集できるワークシートに、グループの考えを記入
- 必要に応じてグループ間の相互参照
- 学級全体で意見を共有し、明治維新の政策の方針を理解する。

まとめ

個別
- 授業者が本時の重要な点を板書し、生徒も本時を振り返る。

デジタル教科書等を活用した授業改善のポイント

各自で資料を読み取り、目的意識を持って意見交換に参加 Point A

■ **デジタル教科書中の資料を拡大表示し、詳細な内容まで確認**

デジタル教科書中の資料は自由に拡大して表示できるため、生徒は**資料の細部まで読み取ること**ができる。

■ **デジタル教科書中に書き込みしながら考えを整理**

デジタル教科書は、**簡単に書き込み、きれいに消すことができる。**
資料に書き込みながら考えを整理する際に有効である。

デジタル教科書では、資料だけでなく、教科書本文も拡大表示し、ペンやテキストボックスで書き込むことができるため、本文中の特定の箇所だけ集中して読む際に有効である。

▲金貨の写真を拡大表示し、細かい文字まで確認する様子

根拠に基づいた発表準備と、発表機会の確保 Point B

■ **根拠となる資料をデジタル教科書から引用し、ワークシートに整理**

デジタル教科書と学習支援ソフトのワークシートを使えば、**教科書の資料をキャプチャし貼り付けて考えを整理することが容易**である。
また、紙と異なり、資料や書き込んだ内容は、即座に移動や拡大縮小・並び替えできる。そのため、**ワークシートの書き直しや構成の変更が簡単であり、生徒が試行錯誤をしやすい。**

■ **グループで各自が考えを共有する時間を設け、生徒の授業参加を促進**

ジグソー法を取り入れ、他の生徒に向けて発表する時間を確保。
生徒は、事前に準備したワークシートを見せながら、自分の考えを発表することが可能に。

生徒が自分の考えを発表する際、デジタル教科書の資料を示すと、根拠を明確にした説明が可能となるだけでなく、言葉だけで伝えにくい内容も表現しやすくなる。

▲ワークシートを見せながら、説明する様子

デジタル教科書活用のポイント

本事業にご協力いただいた各実証校の授業改善から得られた示唆をもとに、教科を横断したデジタル教科書等のポイント及び教師の指導のポイントを整理しました。
教科ごとのポイントなど更なる詳細を知りたい場合には成果報告書もあわせて参照ください。

デジタル教科書等を活用した学び方のポイント

個別最適な学び

■動画・音声・シミュレーション機能を使って理解促進

- ✓ 外国語では、音声読み上げ機能やアニメーションを使って、教科書本文の場面を把握
- ✓ 算数・数学では図形を動かせるコンテンツ、理科ではシミュレーション機能などで、視覚的な理解を促し、見通しをもたせる際に有効

■書き込み機能を使って粘り強く試行錯誤

- ✓ 算数・数学では、図表への書き消しなどが容易なため、子供が試行錯誤しながら自分の考えを表現する場面で有効
- ✓ 国語では、本文に色分けして線を引くことで、叙述に基づいて考えを整理することが可能

■デジタル教科書から本文や資料を抜き出して自分なりに整理

- ✓ 本文抜き出し機能（国語）やスクリーンショット機能（理科・社会）を使うことで、デジタル教科書本文や資料を簡単に抜粋でき、複数の情報を関連づけながら整理する際に有効
- ✓ デジタル教科書の資料は、拡大して細部まで確認することができるため、写真や地図中の詳細な特徴を捉えることができ、情報整理の場面で役立つ

デジタル教科書で個別最適な学びを進め
その成果を他者に共有・発表

協働的な学びの成果を
個別最適な学びに還元

協働的な学び

■学習支援ソフトも組み合わせて、考えを共有・蓄積

- ✓ 学習支援ソフトを組み合わせ、ワークシートに整理した自身の考えを共有することで、他の子供の考えを参照・比較することが可能
- ✓ 自身の考えを説明する際には、デジタル教科書の動画・音声・シミュレーション機能を補助的に使用したり、デジタル教科書から抜き出した本文や資料を示したりすることで、より分かりやすい説明を実現

教師の指導のポイント

- ✓ デジタル教科書による学び方が多数ある中、**それぞれの学び方のメリットを伝えること**や、**それを子供たち自身で体験しながら理解**できるような授業設計が重要

- ✓ 教科書の本文や図表に書き込みながら考える際は、最終的に**他者に説明することを意識しながらまとめる**ように指導

例）単なる答えだけでなく自分の考えを補足させること　等

- ✓ 資料が多くある活動では、**何から着目していけばいいか分からない子供**もいるため**教師のフォロー**も必要
- ✓ 良いまとめ方をしている子供を取り上げて何故そのようにまとめたのか、**意図を深掘り**することも有効

- ✓ 子供たちが**目的意識**をもって協働学習に取り組めるよう、個別学習の時間を設け、自身の考えをクリアにすることが重要
- ✓ これまでの学びの中で重要な**ポイントを板書**等で押さえることも必要

Appendix

関連コンテンツ

本書のほかにも、令和7年度「学習者用デジタル教科書の効果・影響等に関する実証研究事業」の成果は、以下にとりまとめています。あわせてご参照ください。

成果報告書

【デジタル教科書を活用した授業改善】

本事業の実証研究校での授業改善の取組を詳述した報告書。外国語／算数・数学／国語／理科／社会の5教科について、それぞれ2回ずつ授業実践に取り組み、その結果を掲載。

https://www.mext.go.jp/content/20260518-mxt-kyokasyo-000049761_2.pdf

【デジタル教科書の活用に関する研修】

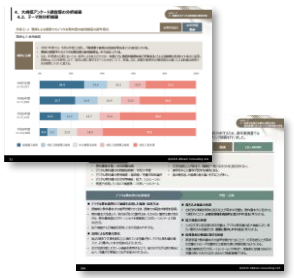
本事業に参加した各県の研修内容を詳述した報告書。各県が実施した2回の研修に関する研修計画の詳細や検討過程、研修効果の検証に関する諸情報（受講者へのアンケートの結果等）を掲載。

https://www.mext.go.jp/content/20260518-mxt-kyokasyo-000049761_3.pdf

【デジタル教科書に関する大規模アンケート調査】

全国の小中学校の教師・児童生徒を対象にしたデジタル教科書に関するアンケート・ヒアリング調査の結果をまとめた報告書。授業改善の効果や紙の教科書との比較、研修を受けた経験と活用状況との関係などの分析結果を掲載。

https://www.mext.go.jp/content/20260518-mxt-kyokasyo-000049761_1.pdf



動画

【デジタル教科書を活用した実践事例を知る】

デジタル教科書等を活用した授業改善の実践事例を紹介する8分程度の動画。
算数・数学／国語編と理科／社会編の2本。
具体的な授業の様子を有識者の解説も交えて紹介し、授業者・児童生徒のインタビューも収録。

https://youtu.be/hzE_cYZQNV4

（算数・数学／国語）

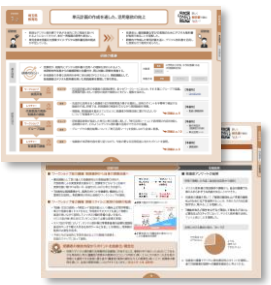
https://youtu.be/Kj1TR7Znmjk

（理科／社会）

研修改善事例集

本事業で実施した5県の研修の概要を紹介した事例集。各県が行った2回の研修を取り上げ、その内容や成果について、研修の全体像を紹介した上で、研修の中心となる活動の詳細と工夫したポイント等を、有識者や各教育委員会担当者の声を交えて紹介。また、受講者にとったアンケート結果から研修効果についても掲載。

https://www.mext.go.jp/content/20260518-mxt-kyokasyo-000049761_5.pdf



有識者会議委員一覧

（ 敬称略 ）

役割		氏名	所属・職名※
主査		中川 一史	放送大学　教授
副査		中橋 雄	日本大学　教授
授業改善に係る指導助言	外国語	太田 洋	東京家政大学　教授
	算数・数学	岡部 恭幸	神戸大学　教授
	国語	佐藤 幸江	放送大学　客員教授
	理科	岩﨑 有朋	札幌国際大学　教授
	社会	小林 祐紀	放送大学　准教授

実証地域・実証研究校一覧

実証地域	実証研究校	教科
鹿児島県鹿屋市	鹿屋市立鹿屋中学校	外国語
福井県越前町	越前町立糸生小学校	算数
奈良県奈良市	奈良市立ならやま小中学校	国語
熊本県山都町	山都町立矢部中学校	理科
埼玉県深谷市	深谷市立藤沢中学校	社会

※ 有識者会議委員の所属・職名は令和8年3月現在

事業委託者

文部科学省初等中等教育局
〒100-8959　東京都千代田区霞が関三丁目2番2号

事業受託者（制作）

アビームコンサルティング株式会社
〒104-0028　東京都中央区八重洲二丁目2番1号

学習者用デジタル教科書 研修事例集

～行動変容を引き出す研修のアイディア～

令和7年度　学習者用デジタル教科書の効果・影響等に関する実証研究事業

文部科学省

ABeam Consulting®

Build Beyond As One.

目次

本書の見方 p.2

研修事例 p.4

1. 埼玉県教育局 5
2. 福井県教育庁 11
3. 奈良県教育委員会 19
4. 熊本県教育庁 27
5. 鹿児島県教育庁 34

Appendix p.41

はじめに

～授業や教科書の在り方を再考する機会に～

全国どの地域も端末環境の更新の時期となり、NEXT GIGAへと移行しています。デジタル学習基盤としての活用や研修も進みつつあります。

そのような中、中央教育審議会の議論でも、自己調整の力を子供一人一人に培うことや、教科書のあり方も「教科書を教える」から「教科書で教える」という方向性が示されています。今まで以上に、教師の役割が問われることになっていくものと推測します。

そして、これまでの実証研究事業により、デジタル教科書の使用頻度が高いほどデジタル教科書の使用感を肯定的に捉えていることが明らかになっています。一方で、課題として、デジタル教科書をどのように授業で活用すれば良いか分からない、教員研修をどのように行えば良いか分からないという話もお聞きしています。

「教科書の発行に関する臨時措置法」第2条によると、教科書とは、「(略)教育課程の構成に応じて組織排列された教科の主たる教材として、教授の用に供せられる児童又は生徒用図書(略)」と示されています。一方で、デジタル教科書は、これまでの教師が教えるためだけの教科書から児童生徒が学ぶための教科書へと移行していると言えます。特に、児童生徒個々の実態に合わせて、教科書をカスタマイズできることは、子供差配の学びに大変有効に働いています。

そのような中、読むだけの教科書から、書く教科書、聞く教科書、共有する教科書へと、さらに、これまでの一斉授業が主だった使い方から、児童生徒自身で学習が最適となるよう自己調整するような使い方へと、教科書の位置付けを見直し、授業の在り方を変革していく必要があります。

そこで、「学習者用デジタル教科書の効果・影響等に関する実証研究事業」の「研修事例集」及び「授業改善事例集」を、ここに公開することにしました。デジタル教科書の活用の仕方にとどまらず、授業や教科書の在り方について、再考する機会にしていただければ幸いです。

令和7年度
学習者用デジタル教科書の効果・影響等に関する実証研究事業
主査
中川一史
(放送大学・教授)

本書の見方

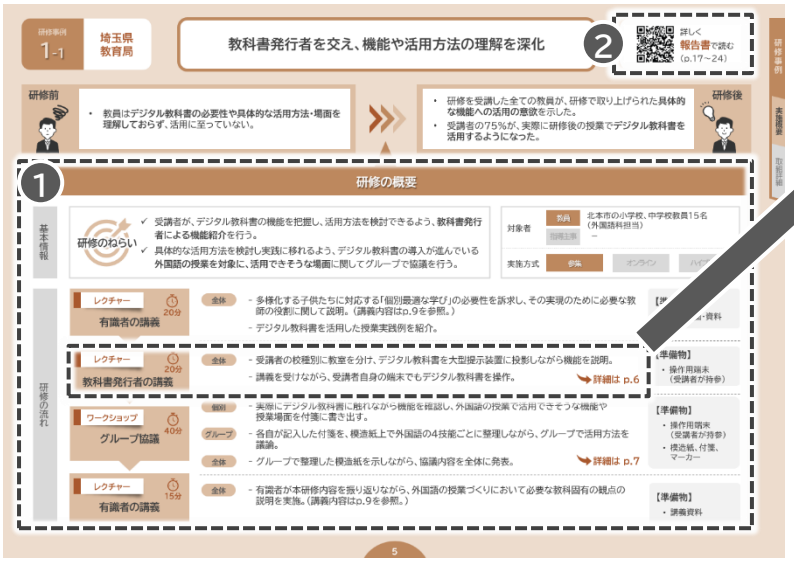
令和7年度「学習者用デジタル教科書の効果・影響等に関する実証研究事業」では、全国から5つの都道府県教育委員会を選定し、同教育委員会が実施するデジタル教科書等を活用した指導に関する研修の改善に取り組みました。この取組は、有識者（p.43参照）の指導助言の下で、1つの教育委員会につき2回の研修をターゲットに行いました。

本書では、各教育委員会が実施した各回の研修の内容と成果を「研修事例」として、下図のとおり、3～4ページにとりまとめています。各事例の1ページ目では研修の全体像を、2ページ目以降では研修の各活動の詳細やポイントを紹介しています。

なお、本書はあくまで研修の概要を端的にまとめたものであり、更なる詳細については成果報告書もあわせて参照ください。

成果報告書（研修に関する調査研究）：https://www.mext.go.jp/content/20260518-mxt-kyokasyo-000049761_3.pdf

研修の概要 （各事例1ページ目）



1 研修のねらいや各活動の流れ等、研修の全体像を紹介

2 各事例に関する成果報告書のQRコードから、詳細な内容の確認が可能

研修の各取組の詳細 （各事例2～4ページ目）

3 研修の各活動を詳述するページを設け、取組の実施方法やその成果について紹介

4 各活動を再現する際のポイントについて、有識者や教育委員会の担当者の声から可視化

研修事例一覧

本書に掲載する研修事例は以下のとおりです。なお、No.間に「🔗」マークがついているものは、研修間に関連性があることを表しています。

県	No.	掲載事例	対象	研修の概要	実施方式	掲載ページ
埼玉県	1-1	教科書発行者を交え、機能や活用方法の理解を深化	教員	① デジタル教科書活用の意義や事例について、**有識者の講義**を実施。 ② **教科書発行者**から、デジタル教科書の機能について説明。 ③ グループごとに、**デジタル教科書を操作しながら活用を検討**。	参集	p.5
	1-2	単元計画の作成を通した活用意欲の向上	教員	① 各受講者がデジタル教科書を活用した授業実践結果を持ち寄り、**グループで協議**。 ② 受講者ごとに**単元計画を作成**した上で、グループで協議。	参集	p.8
福井県	2-1 🔗	模擬授業を通じて、学習者の目線から活用の効果を実感	教員	① 指導主事が教員役、受講者が学習者役となり、デジタル教科書を活用した**模擬授業**を体験。 ② デジタル教科書活用に係る課題や授業づくりについて、**グループで協議**。	参集	p.11
	2-2	各自の実践を持ち寄り、目的達成に向けた活用を検討	教員	① 研修までに、各受講者が**デジタル教科書を活用した授業を実践**し、**報告書に整理**。 ② 各自の実践共有をしながら、目指す学び姿の実現に向けた活用を**グループで協議**。 ③ 受講者の感じた疑問点や課題をもとに、**パネルディスカッション**を実施	参集	p.15
奈良県	3-1	学習者主体の学びを起点にデジタル教科書の活用意義と活用の姿を捉える	教員	① デジタル教科書の意義や活用方法とその効果について、**有識者の講義**を実施。 ② デジタル教科書を操作しながら**外国語の4技能ごとの活用をグループで検討**。 ③ 外国語におけるデジタル学習基盤の活用の重要性や事例を**指導主事が紹介**。	参集	p.19
	3-2	校種や立場を超えた多様な視点から、デジタル教科書の活用を考える	教員 指導主事	① 学習指導要領の要点やそれに向けたデジタル教科書の活用を**指導主事が紹介**。 ② デジタル教科書の意義やこれからの授業の在り方について、**有識者の講義**を実施。 ③ デジタル教科書を操作しながら**算数・数学の4領域ごとの活用をグループで検討**。	参集	p.23
熊本県	4-1	学習者の立場を体験し、実感を伴って効果を理解	教員 指導主事	① デジタル教科書の意義や効果的な活用方法、活用促進に向けた段階について、**有識者の講義**を実施。 ② 受講者が学習者の立場から効果を体感できるよう有識者が**模擬授業**を実施。	ハイブリッド	p.27
	4-2	模擬授業を行い、指導助言のポイントを共有	指導主事	① 指導主事に必要な視点やデジタル教科書の事例について、**有識者の講義**を実施 ② 国語、算数・数学、理科、社会、外国語ごとに、**グループで授業案を検討**。 ③ ②で検討した授業案をもとに、受講者が**グループを超えて模擬授業を実施し合う**。	参集	p.30
鹿児島県	5-1	活用段階に沿った指導助言方法の検討	指導主事	① デジタル教科書活用の意義や事例、指導助言方法について、**有識者の講義**を実施。 ② デジタル教科書のサンプル版を実際に操作しながら、活用できそうな機能や授業場面、具体的な指導助言の方法について、**グループで協議**。	ハイブリッド	p.34
	5-2	先進的な授業づくりのねらいや工夫に迫る	教員 指導主事	① 県内の教員から、デジタル教科書を活用した授業づくりで意識していることや工夫点、実際の活用例について**実践発表**。 ② ①のポイントについて、「学習者主体の授業」をキーワードに**有識者の講義**を実施。	ハイブリッド	p.38

研修事例

研修事例 1-1

埼玉県教育局

教科書発行者を交え、機能や活用方法の理解を深化

詳しく報告書で読む（p.17～24）

研修前

- 教員は**デジタル教科書の必要性や具体的な活用方法・場面を理解しておらず**、活用に至っていない。

研修後

- 研修を受講した全ての教員が、研修で取り上げられた**具体的な機能への活用の意欲**を示した。
- 受講者の75%が、実際に研修後の授業で**デジタル教科書を活用するようになった。**

研修の概要

基本情報

研修のねらい

- ✓ 受講者が、デジタル教科書の機能を把握し、活用方法を検討できるよう、**教科書発行者による機能紹介**を行う。
- ✓ 具体的な活用方法を検討し実践に移れるよう、デジタル教科書の導入が進んでいる**外国語の授業を対象に、活用できそうな場面**に関してグループで協議を行う。

対象者	教員	北本市の小学校、中学校教員15名（外国語科担当）
	指導主事	ー
実施方式	参集	オンライン　ハイブリッド

研修の流れ

レクチャー　有識者の講義　20分

全体
- 多様化する子供たちに対応する「個別最適な学び」の必要性を訴求し、その実現のために必要な教師の役割に関して説明。（講義内容はp.9を参照。）
- デジタル教科書を活用した授業実践例を紹介。

【準備物】
- 講義動画・資料

レクチャー　教科書発行者の講義　20分

全体
- 受講者の校種別に教室を分け、デジタル教科書を大型提示装置に投影しながら機能を説明。
- 講義を受けながら、受講者自身の端末でもデジタル教科書を操作。

詳細は p.6

【準備物】
- 操作用端末（受講者が持参）

ワークショップ　グループ協議　40分

個別
- 実際にデジタル教科書に触れながら機能を確認し、外国語の授業で活用できそうな機能や授業場面を付箋に書き出す。

グループ
- 各自が記入した付箋を、模造紙上で外国語の4技能ごとに整理しながら、グループで活用方法を議論。

全体
- グループで整理した模造紙を示しながら、協議内容を全体に発表。

詳細は p.7

【準備物】
- 操作用端末（受講者が持参）
- 模造紙、付箋、マーカー

レクチャー　有識者の講義　15分

全体
- 有識者が本研修内容を振り返りながら、外国語の授業づくりにおいて必要な教科固有の観点の説明を実施。（講義内容はp.9を参照。）

【準備物】
- 講義資料

研修事例 1-1

埼玉県教育局

教科書発行者を交え、機能や活用方法の理解を深化

詳しく報告書で読む（p.19）

レクチャー　20分

教科書発行者の講義

取組のねらい

- デジタル教科書の機能を把握し、自身の授業におけるデジタル教科書の活用イメージをもつことができる。

取組内容

■ 教科書発行者による講義の流れ

- 小学校教諭・中学校外国語教諭で別の教室に分かれた後に、教科書発行者より、**デジタル教科書の機能に関する講義**を実施。
  - ➢ **紙の教科書のQRコンテンツや指導者用デジタル教科書と比較し**、学習者用デジタル教科書の特徴を説明。
  - ➢ 会場の大型提示装置に学習者用デジタル教科書を投影しながら機能を説明。
- 少人数で講義を行うことで、講義の最中でも、**受講者が気軽に教科書発行者に質問**できる雰囲気を醸成。

▲教科書発行者の説明を受けながら、デジタル教科書を操作し、受講者同士で話す様子

- 講義の随所に**受講者同士で交流する機会や**、受講者が**自身の端末でデジタル教科書の機能やコンテンツを試す時間**を設ける。
  この時間で、活用経験のある受講者が近くの受講者に機能を教えたり、「家庭学習でも使えそう」「子供同士で問題を出し合える」など活用アイデアが出てきたりするように促す。

ポイント解説 教科書発行者から直接学ぶ、各機能と活用の考え方

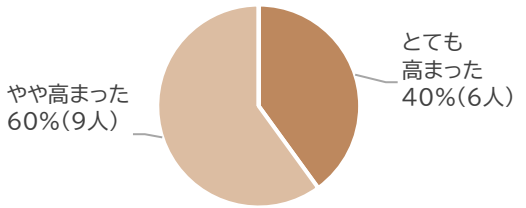
- 教科書発行者から**「デジタル教科書とは何か」という前提**に加え、**各機能がどのような活用を意図しているのかを体系的に解説**することにより、受講者は断片的な機能理解に留まらず、全体像と意図を踏まえた上で活用を検討することができます。
- 各機能を熟知している教科書発行者1名に対し、少人数の教員で実際にデジタル教科書を操作しながら質問ができるため、**デジタル教科書に関する疑問が解消しやすい環境**が実現します。

（埼玉県教育局 秋元 指導主事）

取組結果

■ 受講者アンケートの結果

活用に対する意欲の変化［N=15］



➢ 教科書発行者の講義でデジタル教科書の機能を理解し、**全ての回答者が活用への意欲を高めた**と考えられる。

研修後の取組の方向性（自由記述回答から抜粋）

- 単語テストや自己評価シートなど、**デジタル教科書にある機能を用いて手間を削減**したい。
- URLやスタンプを貼る機能、しおり機能を用いて、**子供の手間を省きたい**。
- まずは授業内で、英文を読んだり、音読練習をしたりする個別学習の時間を設け、**習熟度に応じた学習**ができるようにしたい。

➢ 多くの受講者が教科書発行者の紹介した具体的な機能について言及していた。

研修事例 1-1

埼玉県教育局

教科書発行者を交え、機能や活用方法の理解を深化

詳しく報告書で読む（p.20）

ワークショップ　40分

グループ協議

取組のねらい

- デジタル教科書の具体的な活用場面を理解し、実際に授業で活用するイメージをもつことができる。

取組内容

■ 活用方法の検討の主な流れ

- 教科書発行者からの講義を踏まえて、「外国語の4技能」を軸に、**授業で活用できそうなデジタル教科書の機能や授業場面**を付箋に書き出す（校種別に4～5人のグループを編成）。
- グループで、各自が記入した**付箋を模造紙上で4技能ごとに整理**しながら、活用方法を共有・議論。
- ワーク中も**教科書発行者に質問や意見交換**が可能。
- 各グループが整理した模造紙を示しながら、協議内容を全体に発表。

聞くこと	読むこと
本文のマスク機能を活用し、ディクテーションに取り組む。	単語を練習できるアプリの機能を家庭学習で活用する。
話すこと	**書くこと**
スピーチの動画を視聴し、子供がスピーチをする際の参考にする。	スピーチの原稿を書くときに使えそうな教科書の文にマーカーをつける。

▲4技能別に活用場面を整理（イメージ）

ポイント解説

教科書発行者も意見交換に加わり、グループ協議を活性化

- ワーク中も教科書発行者に質問や意見交換をしやすい環境にすることで、受講者は浮かんだアイデアを**デジタル教科書で実現できるかをすぐに確かめられ**、積極的なアウトプットに繋げることができます。
- 教科書発行者を交えてデジタル教科書の活用アイデアを出し合うことで、受講者**個人では出てこないような応用的な活用方法を見つけること**ができます。（埼玉県教育局 秋元 指導主事）

▲デジタル教科書を操作しながら、活用方法を議論する様子

取組結果

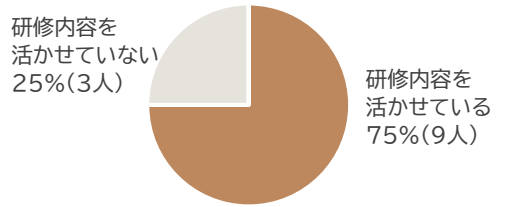
■ 受講者アンケートの結果

研修で満足した内容（自由記述回答から抜粋）

- グループワークで、**他校の先生のデジタル教科書の具体的な活用方法を意見交換できて満足**した。
- デジタル教科書の**知らなかった機能や、使用していなかった機能**の活用方法がわかった。
- 今回新たに知った授業づくりの工夫を、**2学期の授業ですぐに活かせる**と思った。

■ 追跡アンケートの結果 ※研修から約4か月後に実施

研修内容の活用［N=12］



➢ **75%の回答者が、研修後の授業に研修内容を活かすことができたと回答。**グループ協議で具体的な活用場面を検討したことで、自身の授業実践にデジタル教科書を取り入れることができたと考えられる。

研修事例 1-2

埼玉県教育局

単元計画の作成を通した、活用意欲の向上

詳しく報告書で読む（p.25～33）

研修前

- 教師はデジタル教科書で子供が主体的に学ぶ場面を設けられるようになってきたが、**未だ一斉指導の思考**も根強い。
- **単元全体を見据えた授業づくり・デジタル教科書活用の視点**が不足している。

研修後

- 受講者は、**個別最適な学びの実現のためにデジタル教科書が有用である**ことを理解した。
- **研修内で作成した単元計画**を基に、デジタル教科書を活用した授業を行う教員が見られた。

研修の概要

基本情報

研修のねらい

- ✓ 受講者が、段階的にデジタル教科書の活用への理解を深められるよう、**本研修を昨年度からの継続研修と位置付け、同じ対象に研修を実施**する。
- ✓ 各受講者の多様な活用例を参考に単元検討がなされるよう、**事前課題として、各受講者はデジタル教科書を用いた実践結果を整理して持ち寄る。**

対象者	教員	三芳町の小学校、中学校教員16名（外国語科担当）
	指導主事	ー
実施方式	参集	オンライン　ハイブリッド

研修の流れ

ワークショップ　実践共有　30分

グループ
- 昨年度研修以降の受講者の実践結果を、各々がワークシートにまとめ、それを基にグループで協議。各実践内容に対して感想の発表や質問などを行い、理解を深める。

【準備物】
- ワークシート

レクチャー　代表教員の発表・有識者の講義　30分

全体
- 先進的な活用を行う受講者1名が授業実践の様子を撮影し、活用のポイントを字幕等で補足する動画を作成。研修では、同受講者の解説を交えながら実践動画を視聴。
- 視聴後、実践動画を踏まえてどのように受講者が授業改善に繋げればよいかについて有識者からコメント。

詳細は p.9

【準備物】
- 動画・講義資料

ワークショップ　グループ協議　60分

グループ
- 研修運営者側が指定した単元と単元目標に即して、「単元活用シート」上で各時間の内容を検討。各時間の中で、どのようにデジタル教科書の活用ができるかを協議。

全体
- グループでの検討結果について、「単元活用シート」を投影しながら全体に発表。

詳細は p.10

【準備物】
- 操作用端末（受講者が持参）
- 単元活用シート

レクチャー　有識者の講義　25分

全体
- 有識者が本研修内容を振り返りながら、今後の更なる活用促進に向けたポイントを説明。

詳細は p.9

【準備物】
- 講義資料

研修事例 1-2

埼玉県教育局

単元計画の作成を通した、活用意欲の向上

詳しく報告書で読む（p.27～28）

レクチャー　55分

代表教員の発表・有識者の講義

取組のねらい

- 研修で意見交換した内容を踏まえて、自身の授業改善に繋げることができる。

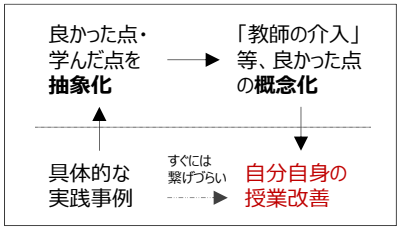
取組内容

■ ワークショップ前の講義：実践事例から自身の授業改善へ

- 事前課題として取り組んだ受講者同士の実践結果の共有や、代表教員による実践発表を踏まえて、受講者がどのように自身の授業改善に繋げれば良いか、右図を示しながら考え方を紹介。
- 「**具体的な実践事例から、活用のポイントを抽象化・概念化**」する重要性を説明し、実践事例の共有と後続のワークショップを接続。

■ ワークショップ後の講義：授業スタイルと教師の役割の転換

- 「語彙・文法の説明」→「練習」→「言語活動」という**積み上げ式の学習**と、単元や授業を貫くタスクを与え、学習者がそのタスクを通して実際に言語を使いながら習得していく**タスク型の学習**の違いを紹介。
（タスク型の例：単元末のプレゼンに向けて必要な表現を習得）
- タスク型の学習において、デジタル教科書は**学習者自身が必要な言語を自分のペースで取り入れるためのツールとなる**ことを解説し、授業観の転換の必要性を訴求。
- 子供たちが主体的に学習を進める上での教師の役割を、右図のステップに沿って説明。



▲講義で提示された図のイメージ

▲学習を徐々に児童生徒に委ねていくことの重要性を説明

受講者の検討内容からポイントを抽象化・概念化

ポイント解説

- 研修でデジタル教科書の活用事例を受講者に共有するとき、事例の中で良かった点はどこであるかを具体的に考え（**抽象化**「授業中の教師の〇〇という声掛け」等）、さらにその良かった点を他の授業にも適用できる言葉に置き直す（**概念化**「教師の適切な介入の重要性」等）ことで、受講者は事例を通じて、自身の授業改善につなげやすくなります。（放送大学 小林 准教授）

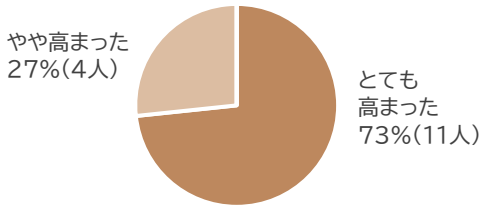
取組結果

■ 受講者アンケートの結果

研修で理解した内容（自由記述回答から抜粋）

- デジタル教科書の実践事例や講義から、**自分の授業でも取り入れられそうな内容**を知ることができた。
- 有識者の講義を聞いて、**「指導の個別化」と「学習の個性化」のためにICTを活用**することが、子供たちの「自己調整学習」に繋がることを理解した。
- **「機能を知る」「操作をなぞる」「限定して委ねる」「ほとんど委ねる」のステップ**に沿って、デジタル教科書を活用していくと良いことを理解した。

活用に対する意欲の変化［N=15］



➢ 有識者の講義でデジタル教科書活用のポイントを理解し、**全ての回答者が活用への意欲を高めた**と考えられる。

研修事例 1-2

埼玉県教育局

単元計画の作成を通した、活用意欲の向上

詳しく報告書で読む（p.28）

ワークショップ　60分

グループ協議

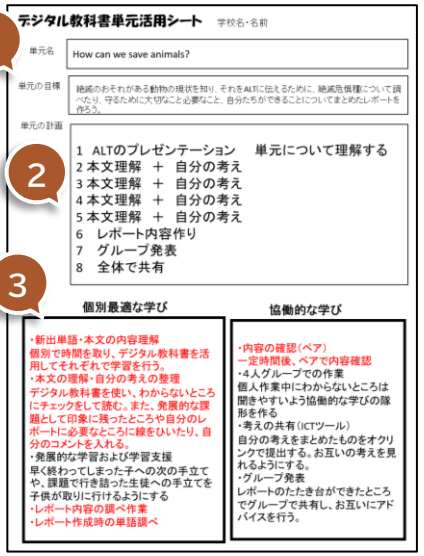
取組のねらい

- 単元ゴールや各授業のめあてに向けて、子供自身がデジタル教科書を含めた学び方を選択できるような授業の計画を立てることができる。

取組内容

■ ワークショップの流れ

- グループごとに、「デジタル教科書単元活用シート（右図）」を用いて、デジタル教科書の活用を組み込んだ単元計画を検討することを説明。
  - グループは、校種ごとに3～5人で編成し、**デジタル教科書を積極的に活用している受講者をグループに1名ずつ配置し、議論をリードする役割**を担当させた。
  - **単元及び目標（❶）は予め指定**することで、デジタル教科書の活用という本質的な議論に時間を割けるようにする。
- 指定された単元目標の達成に向け、グループで単元計画（❷）を作成。
- **個別最適な学び／協働的な学びの視点**から、どのようにデジタル教科書の活用ができるか（❸）を検討。単元内の各時間における子供たちの学びの姿を想定しながら協議。
- 「デジタル教科書単元活用シート」をスクリーンに投影しながら、グループでの検討結果を、全体に向けて発表。



▲実際に用いられたワークシート
赤字がデジタル教科書の活用場面

授業で活用した実体験に紐づけて単元計画を検討

ポイント解説

- 研修間の継続性を持たせることで、実際に自身の授業でデジタル教科書を活用した状態で意見交換を行うことができます。受講者が授業内での活用方法に関して実体験に紐づいたアイデアを持ち寄ることで、**「単元の学びの中で想定される授業内での子供たちの反応」など、具体的な議論を深める**ことができます。（西部教育事務所 山井 指導主事）

取組結果

■ 受講者アンケートの結果

研修で満足した内容（自由記述回答から抜粋）

- 参加者間でデジタル教科書の**活用アイデアを共有しながら単元検討し、刺激を受けた。**
- デジタル教科書を実際に使いながら単元計画を検討することができた。今回知ったことを、早速**2学期の最初の授業から使えそう**だと思った。
- グループワークで作成した単元計画は、**夏休み明けの授業で使えそう**である。

■ 追跡アンケートの結果 ※研修から約4か月後に実施

研修後の授業実践の内容（自由記述回答から抜粋）

- 本文を読む際に、**デジタル教科書を使って新出単語の意味や発音**について生徒が調べている。
- **リスニングやスピーキングの練習、単語練習ツール等**を生徒が使用している。
- デジタル教科書のイラストを**単元末の発表のスライド**などで活用している。
- **単元末の発表に向けた各時間の振り返りの記入**や、動画撮影に学習支援ソフトを使用している。

研修事例 2-1

福井県教育庁

模擬授業を通じて、学習者の目線から活用の効果を実感

詳しく報告書で読む（p.38～44）

研修前

- 現場は多忙なため、デジタル教科書等の活用の効果を学ぶ余裕がなく、**必要性を実感できないでいる。**

研修後

- 模擬授業を通じて、全ての受講者が、**デジタル教科書等の必要性や効果について実感を伴って理解すること**ができた。
- 全ての受講者が、ICT活用の前提となる学習者主体の**授業づくりの重要性を理解し、活用への意欲を高めた。**

研修の概要

基本情報

研修のねらい

- ✓ 各校において研修内容が再展開されるよう、**主な研修対象を、学校で研究促進の中核を担う研究主任・視聴覚主任とする。**
- ✓ 受講者が、活用の効果を実感するとともに、**実際の授業における活用イメージを持てるよう、デジタル教科書等を活用した模擬授業を実施**する。

対象者	教員	越前町の小中学校の研究主任・視聴覚主任26名
	指導主事	－
実施方式	参集	オンライン　ハイブリッド

研修の流れ

ワークショップ　模擬授業　40分

個別
- 小学校第4学年の算数「台形と平行四辺形」を題材に、指導主事が模擬授業を実施。各自が、学習者の立場で、実際にICTを活用しながら様々な図形の仲間分けについて検討。

全体
- 各自が検討した仲間分けを全体に共有し、その考え方を予想。その後、それらの考え方をの授業展開にどのように繋げていくと良いかを全体で議論。

【準備物】
- 操作用端末（受講者が持参）
- 模擬授業用のデジタルのワークシート

詳細は p.12

レクチャー　有識者の講義　50分

全体
- デジタル教科書等の意義や必要性について、算数・数学における見方・考え方や育成すべき資質・能力と関連づけながら説明。
- 前段の内容を踏まえ、過年度事業の先行事例をもとに、教科のねらいに迫るデジタル教科書等の活用方法を解説。

【準備物】
- 講義資料

詳細は p.13

ワークショップ　グループ協議　35分

グループ
- グループごとに、「研修以降のICTを活用した授業づくり」をテーマに意見交換し、その内容を、学習支援ソフトで作成した情報交換用プラットフォーム上に入力。
- 意見交換後、各自で本研修を振り返り、情報交換用プラットフォームに記入。

【準備物】
- 操作用端末（受講者が持参）
- 情報交換用プラットフォーム

詳細は p.14

研修事例 2-1

福井県教育庁

模擬授業を通じて、学習者の目線から活用の効果を実感

詳しく報告書で読む（p.40）

ワークショップ　40分

模擬授業

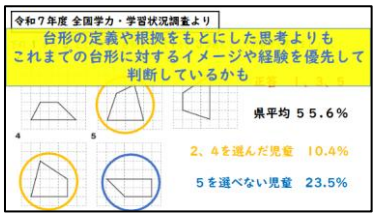
取組のねらい

- 自身の実践に向けた活用イメージを持つことができる。

取組内容

① 問題提起

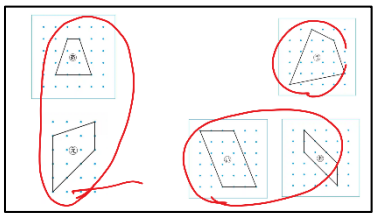
- 指導主事が、「全国学力・学習状況調査」の結果を紹介し、教科のねらいに迫るための授業設計の重要性について問題提起。
- ICTは、子供たちの多様な考えを可視化し、対話を引き出すことが可能なため、授業に取り入れることで、教科の本質に迫ることができると説明。



▲全国学力・学習状況調査の結果をもとに問題提起

② 模擬授業（題材：小学校4年算数「台形と平行四辺形」）

- 指導主事が授業者役、受講者が学習者役となり模擬授業を実施。
- 指導主事が用意した、デジタル教科書の図形をランダムに並べたデジタルのワークシートを使い、各受講者が自由に仲間分けを検討。



▲受講者がワークシートで試行錯誤

③ 全体で議論

- 指導主事が、いくつかの受講者の考えをピックアップし、全体に共有。それらが、どのような考え方で仲間分けされたかを予想するとともに、どのように授業に繋げていくと良いかを全体で議論。
- また、指導主事から、子供たちの学び合いを引き出すポイントとして、「課題提示の際に、着目すべき点や考え方も提示すると、正解か否かの構図となり対話が生まれにくい。正解か否かではなく、子供たちの自由な発想を重視することで、子供たちの学び合いを引き出せる。」と説明。

ポイント解説

デジタル教科書等のICTの活用による効果を実際に体感

- デジタル教科書等のICTの活用について、その必要性や効果を学び、実感する機会が少なく、最初の一歩を踏み出せていないことが多いです。そのため、**納得感をもって活用を進めていくことができるよう、模擬授業を通して「学習者の目線」を体感してもらうこと**をねらいとしました。
（福井県教育庁 村井 指導主事）

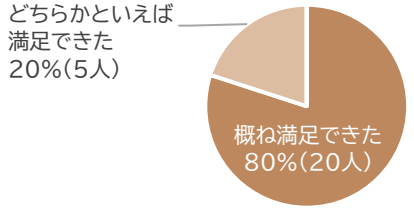
取組結果

■ 受講者アンケートの結果

研修で満足した内容（自由記述回答から抜粋）

- ICTを使って子供の自由な発想を引き出し、そこから学びに繋げるような授業を目指したい。
- 他者の考えを瞬時に参照し、自分の学びを更新できることが、ICTの強みであると分かった。
- 模擬授業を通じて「正解か否かでは学び合いが生まれにくい。」という点に気付くことができた。
- 「他者との学び合いを通して理解を深めていくことを価値づけていく」という内容が重要だと感じた。

研修の満足度［N=25］



➢ デジタル教科書等の効果を、模擬授業を通じて実際に体感できたことにより、全ての受講者から高い満足度を引き出したと考えられる。

研修事例 2-1

福井県教育庁

模擬授業を通じて、学習者の目線から活用の効果を実感

詳しく報告書で読む（p.40～41）

レクチャー　50分

有識者の講義

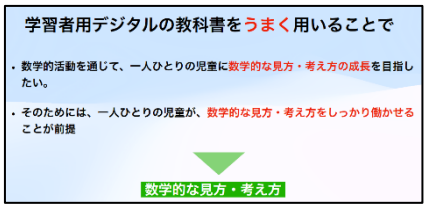
取組のねらい

- 目指すべき授業の在り方や、その実現に向けたデジタル教科書等の必要性や効果を理解できる。

取組内容

■ 前半：「見方・考え方」を働かせるデジタル教科書等の活用

- 授業づくりに当たり、教科の「見方・考え方」や育成したい資質・能力を明確にした上で、その達成に向けたデジタル教科書等の活用を検討することが重要であることを説明。
- ICTの利点について「子供の考えを全体に共有することが容易である。そのため、例えば、学習が苦手な子供が、他者の考えを参考にしながら進めていくことも可能となる。」と説明。



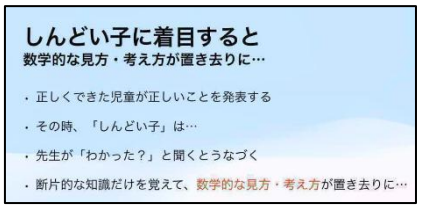
▲目的に沿ってデジタル教科書を活用することの重要性を説明

■ 後半：好事例を基にデジタル教科書等の活用を解説

- 過年度事業の先行事例を基に、授業場面に沿って活用方法を解説。その際、デジタル教科書等の活用方法だけでなく、各場面での子供の思考や言動に着目し、どう理解が促されたかを説明。

≪解説した事例≫

① 名寄市立名寄小学校（R5年度、算数）
② 甲州市立塩山南小学校（R6年度、算数）
③ 所沢市立山口中学校（R6年度、数学）



▲特に苦手な子供の思考や言動の変化にフォーカスしながら事例を解説

ポイント解説

学習者の思考・言動に着目して活用事例を紹介

- 現場の教員にデジタル教科書等の活用事例を紹介する際に、活用の「理論」だけを話しても、その意義はなかなか伝わりません。
- **活用場面における学習者の思考の変化や具体的な言動に焦点を当て、活用を通じて学びがどのように変容したかを示すこと**で、デジタル教科書等の効果をより実感を伴って理解してもらうことができます。（神戸大学 岡部 教授）

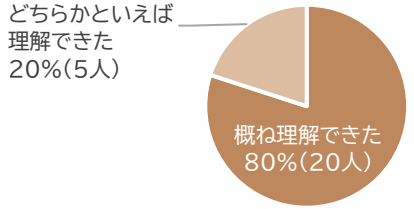
取組結果

■ 受講者アンケートの結果

研修で理解した内容（自由記述回答から抜粋）

- ICTをうまく活用するためには、どんな授業にするかという授業づくりが大切だと感じた。「子供の視点」を大切にしながら授業を考えていきたい。
- 算数の学習は、大人には簡単でも子供には実はすごく難しい部分が多いことに改めて気づいた。子供の助けになるよう吟味しながら、ICTを活用したい。
- 様々な事例を子供の目線から紹介してもらい、具体的な活用のイメージを持つことができた。

研修の理解度［N=25］



➢ 本研修の理解度を問う質問では、全ての受講者から肯定的な回答を得ており、デジタル教科書等の必要性や効果を理解し、具体的な活用イメージをもつことができたと考えられる。

研修事例 2-1

福井県教育庁

模擬授業を通じて、学習者の目線から活用の効果を実感

詳しく報告書で読む（p.41）

ワークショップ 35分

グループ協議

取組のねらい

- 研修での学びの受講者間での情報交換を通じて、実践への意欲を高める。

取組内容

■ グループの編成方法

- 各学校の活用状況に基づいた議論ができるよう、学校ごとに2～4人のグループを編成。

■ グループ協議の主な流れ

- 「2学期以降のICTを活用した授業づくり」をテーマに、グループごとに意見交換。
  その内容を、学習支援ソフトにより作成した情報交換用プラットフォームに入力。
- グループでの意見交換後、「本研修で何を学び、今後どのように活かしていくか」をテーマに、各自で本研修の振返りを同プラットフォームに入力。

▲指導主事も参加し、議論を活性化

▲プラットフォームに検討結果を入力

「主任」を研修対象とするとともに、学校ごとにグループを分けて議論

ポイント解説

- 学校間でデジタル教科書等の活用状況に差があったため、**同じ課題認識のもとで意見交換できるよう学校ごとにグループを構成**しました。このことにより、各校の活用実態に即した議論を引き出すことができました。
- また、研修の対象者を、**各校で研究促進の中核を担う「主任」とした**ことで、**活用方法だけでなく校内での普及の方策にも議論が及んでいました。**（越前町教育委員会 伊藤 指導主事）

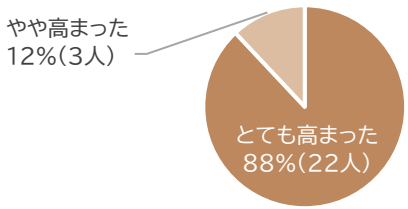
取組結果

■ 受講者アンケートの結果

今後の取組（自由記述回答から抜粋）

- 活用が目的化すると、結局は授業改善にならない。まずは問いや課題を重視した上で、思考や振返りの場面でICTをうまく活用していきたい。
- 学習者主体の授業づくりを目指すことが、結果としてICTの活用に繋がると考えている。
- 今までは「ICTを活用しなければ」と無理矢理使っていたが、授業づくりを大切にし、上手に使えそうな場面を考えれば良いと分かった。

ICT活用に対する意欲の変化［N=25］



➢ ICT活用に対する意欲の変化を問う質問では、全ての受講者が現状より高まったと回答。研修以降の取組の方向性を明確化し、実践への意欲を高めることができたと考えられる。

研修事例 2-2

福井県教育庁

各自の実践を持ち寄り、目的達成に向けた活用を検討

詳しく報告書で読む（p.45～51）

研修前

- 活用自体が目的化し、**「目指す子供の姿の達成に向けた活用」が意識されていない**ことがある。

研修後

- 全ての教員が、**目的達成に向けたICT活用の重要性について理解すること**ができた。
- **他校教員との実践共有や意見交換を通じて**、9割以上の教員が意欲を高めることができた。

研修の概要

基本情報

研修のねらい

- ✓ 研修前に、**デジタル教科書等を実際に活用**し、その**成果や課題を捉えた状態で研修に臨める**よう、**事前課題として「実践報告書」を作成して持ち寄る。**
- ✓ デジタル教科書等の活用検討に際し、目的意識が明確になるよう、**研修を通貫する視点として「目指す子供の学びの姿を問い直す」を設定**する。

対象者	教員	越前町の小中学校の研究主任13名	
	指導主事	－	
実施方式	参集	オンライン	ハイブリッド

研修の流れ

研修前の取組

個別

- 各受講者が、第1回研修の内容を踏まえ、デジタル教科書等を活用した授業実践を行い、その内容を「実践報告書」に取りまとめる。
- 研修当日までに「実践報告書」を、情報交換用プラットフォーム上に提出。

詳細は p.16

【準備物】
- 実践報告書

ワークショップ 50分

グループ協議

グループ

- 各受講者が事前に作成してきた実践報告書をもとに、各自の実践内容を共有。
- その後、「デジタル教科書をはじめとするICTの活用を通じて目指す子供の学びの姿」をテーマにグループ内で意見交換。

詳細は p.17

【準備物】
- 操作用端末（受講者が持参）

ワークショップ 35分

パネルディスカッション

全体

- 福井県及び越前町の指導主事、有識者、文部科学省の職員をパネラーとし、受講者と交流しながらパネルディスカッションを実施。
- パネルディスカッション後、各受講者で研修全体を振り返り、情報交換用プラットフォーム上に記入。

詳細は p.18

研修事例 2-2

福井県教育庁

各自の実践を持ち寄り、目的達成に向けた活用を検討

詳しく報告書で読む（p.47）

研修前の取組

取組のねらい

- デジタル教科書等を活用した授業を実践し、活用による成果や課題を捉える。

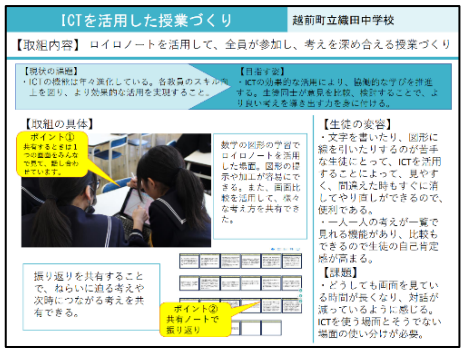
取組内容

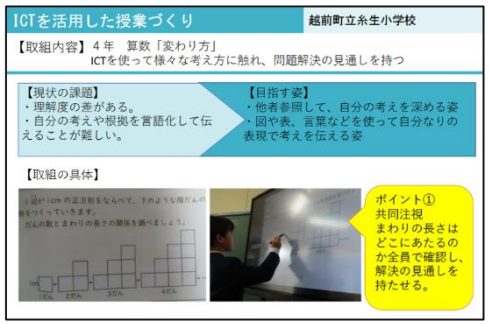
■ 実践報告書の作成

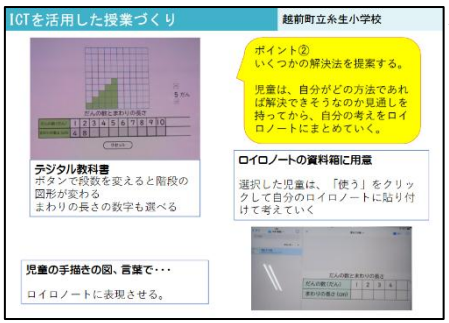
- 研修前までに、各受講者にICTを活用した授業実践を促す。
  実践に当たっては、以下の①～③を意識して実践する。
- 取りまとめた実践報告書は、情報交換用プラットフォームに提出。

■ 実践報告書の構成

① 【現状の課題】と【目指す姿】
② 目指す姿の達成に向けた【取組の具体】と【ポイント】
③ 取組の結果、見出された【子供の変容（成果）】や【課題】







◀▲各校からの実践報告の例
越前町立糸生小学校の実践(◀)の詳細はこちらの動画もご参照ください

活用のねらいや成果・課題を意識して実践報告書を作成

ポイント解説

- 実践報告書を作成する際、活用方法とあわせて現状の課題・目指す姿や成果・課題を省察することで、**自身の実践のポイントを概念的に捉え直すこと**ができます。（福井県教育庁 村井 指導主事）

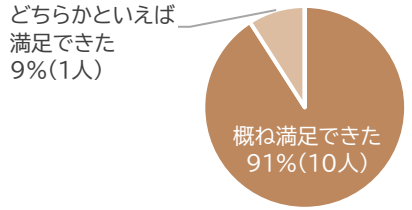
取組結果

■ 受講者アンケートの結果

研修で満足した内容（自由記述回答から抜粋）

- 他校の先生と実践共有し、ICT活用の良さと今後の課題を新たに見つけることができた。色々な先生の実践を参考にしながら試行錯誤していきたい。
- 他校の実践事例の共有を通じて、様々な学びのあり方を知ることができた。
- 様々な実践から子供の学習の可能性を広げることができると学んだ。これから、生徒の主体性や意欲を引き出す仕掛けや活用法を模索していきたい。

研修の満足度［N=11］



➢ 左記観点に基づいてポイントが分かりやすく整理された実践報告書を共有したことにより、各受講者の活用の視点が広がり高い満足度を引き出したと考えられる。

研修事例 2-2

福井県教育庁

各自の実践を持ち寄り、目的達成に向けた活用を検討

詳しく報告書で読む（p.48）

ワークショップ　50分

グループ協議

取組のねらい

- 実践共有を通じて、デジタル教科書等の活用に関する新たな視点を得ることができる。
- 「目指す子供の学びの姿の達成」に向けたデジタル教科書等の活用を具体化できる。

取組内容

■ グループの編成方法

- 学校を超えた幅広い実践共有をねらい、異なる学校の受講者で4～5人でグループを編成。

■ グループ協議の主な流れ

- 各受講者が作成した実践報告書により各自の実践内容を共有した後、以下の協議の視点に沿って意見交換。

■ グループ協議の視点

テーマ：デジタル教科書をはじめとするICTの活用を通じて目指す子供の学びの姿を問い直す。

協議の視点①：ICT活用の成果や課題は何であったか。
協議の視点②：今後に向けた疑問や困っていることは何か。
協議の視点③：深い学びを確かなものにするための取組とは何か。

▲グループ協議の様子
端末で実践を共有しながら議論

ポイント解説

“目指す子供の学びの姿”を前提に、ICT活用を検討

- 活用方法を紹介・検討する際、単に事例を提示するだけでは、活用”方法”に目が行き、活用自体が目的化してしまうことが多いです。
- 活用の前提となる**「目指す姿は何か」を問い返しながら、事例共有や活用検討を行うこと**により、目的達成に向けた活用の意識や、各教員が大切にしている授業観を育んでいくことが重要です。

（福井県教育庁 村井 指導主事）

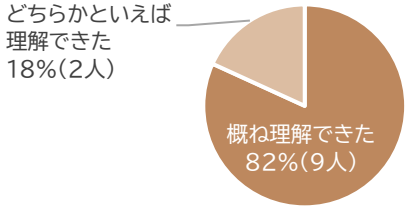
取組結果

■ 受講者アンケートの結果

研修で理解した内容（自由記述回答から抜粋）

- 「使ってみることが目的」となっていた段階から、「目的に応じた使い方を考える」という次の段階に進まなくてはならないと理解した。
- 子供の学習の幅が広がり、様々な活用の仕方が見えてきたからこそ、授業をどうコーディネートしデザインしていくかが重要となると感じた。
- ICT活用の視点から「目指す子供の学びの姿」を考え、深く学ぶことができたと感じている。

研修の理解度［N=11］



➢ 本研修の理解度を問う質問では、全ての受講者から肯定的な回答を得ている。目的達成に向けたデジタル教科書等の活用イメージを具体化することができたと考えられる。

研修事例 2-2

福井県教育庁

各自の実践を持ち寄り、目的達成に向けた活用を検討

詳しく報告書で読む（p.48）

ワークショップ 35分

パネルディスカッション

取組のねらい

- 目指す子供の学びの姿を再定義し、実践への意欲を高めることができる。

取組内容

■ パネルディスカッションの流れ

- 福井県及び越前町の指導主事、有識者、文部科学省職員をパネラーとし、以下の流れで進行。

前半：受講者から、グループ協議を通じて見えてきた課題や疑問を募り、その内容に対してパネラーから回答。

後半：各パネラーが、研修全体を振り返りながら総括。

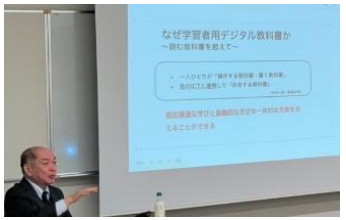
▲受講者からパネラーに積極的に質問

■ パネルディスカッション後の振返り

- 各受講者が、研修全体の振返りを情報交換用プラットフォーム上に記入。テーマは以下の2点。

テーマ①：本研修で何を学び、今後どのように活かしていくか。

テーマ②：本研修を通して考えた目指す子供の学びの姿は何か。



▲パネラーが質問に答える様子

ポイント解説 受講者の疑問や課題を、インタラクティブに解消

- 実際に行われている多くの研修は、**指導主事から受講者へ一方的に伝達する形式**となっており、受講者が、**研修を通じて感じた疑問や課題を抱えたまま**となってしまうことが多いです。
- パネルディスカッションのように、講師と受講者がインタラクティブにやり取りができる機会を設けることで、**受講者が、日頃の実践や研修を通じて感じた課題や疑問をその場で解消することができ**、更なる理解の深まりに繋がります。
- また、このように、現場の教員が、指導主事と直接やり取りをする機会を多く設けることにより、**教員と指導主事の距離が縮まり、気軽に相談できる近い存在として研修後の指導助言にも繋げやすく**なるでしょう。（神戸大学 岡部 教授）

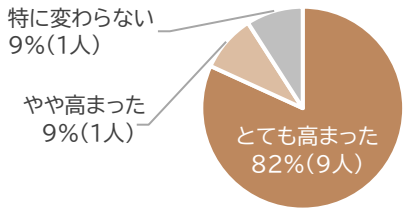
取組結果

■ 受講者アンケートの結果

今後の取組の方向性（自由記述回答から抜粋）

- 新しいことに取り組むのは大変だが、このような研修があることで、そのメリットが具体的に見えたと感じた。今後は、ICTの良さを生かし、子供たちが友達の考えと比較したり深掘りしたりしながら主体的に話し合う姿を目指していきたい。
- 目指す子供像は、「自分で学びを切り拓く子」。一人一台端末によって、調べる力が高まってきているので、学習活動の中で、より深く考え、判断・表現できるよう単元を構成したい。

ICT活用に対する意欲の変化［N=11］



➢ ICT活用に対する意欲の変化を問う質問では、9割以上の受講者が現状より高まったと回答。研修を通じて、各受講者が自身の目指す学びやその達成に向けたICT活用を明確にし、活用への意欲を高めたと考えられる。

研修事例 3-1

奈良県教育委員会

学習者主体の学びを起点にデジタル教科書の活用意義と活用の姿を捉える

詳しく報告書で読む（p.56～62）

研修前

- デジタル教科書の意義や効果に対する理解をさらに深める必要がある。
- 学校間・教員間で活用状況に差が見られる 。

研修後

- 全受講者が、自身の学級や現状の授業スタイルの課題を起点にしながら、**デジタル教科書の活用意義について理解**できた。
- 他校の教員の意見や県内の実践事例に触れることで、**活用の幅を広げる**ことができた。

研修の概要

基本情報

研修のねらい

- ✓ **デジタル教科書の意義を理解してもらうため、学習者主体の学びの必要性を踏まえ、その実現に向けた活用方法について理解**を深めてもらう。
- ✓ 他の教員と交流する時間を設けたり、県内の事例を紹介したりして、**活用の幅を広げてもらう。**

対象者	教員	各郡市代表の教員（外国語科担当）32名
	指導主事	－
実施方式	参集	オンライン　ハイブリッド

研修の流れ

レクチャー　60分

有識者の講義

全体
- 文部科学省の調査結果を踏まえ、デジタル教科書の現状と教員が抱える課題について紹介。その上で、それらの課題と関連付けながら、学習者主体の学びの必要性について説明。

学習者主体の学びを実現する手段の1つとして、デジタル教科書の活用意義を示し、実践事例を紹介。

詳細は p.20

【準備物】
- 講義資料

ワークショップ　30分

活用方法の検討

個別
- これまでの実践や講義で学んだ内容を基に、デジタル教科書等の活用方法について、学習支援ソフトに書き出して共有。

グループ
- デジタル教科書を操作しながら外国語科における4技能（聞く・読む・話す・書く）の活用を検討。

全体
- 代表2グループが検討した内容を発表。

詳細は p.21

【準備物】
- 操作用端末
- ホワイトボード、マーカー

レクチャー　20分

県指導主事の講義

全体
- 奈良県教育委員会の指導主事から、外国語科におけるデジタル学習基盤の活用の重要性を解説。

授業の流れに沿って活用場面を示し、県内の実践事例について紹介。

詳細は p.22

【準備物】
- 講義資料

研修事例 3-1

奈良県教育委員会

学習者主体の学びを起点に デジタル教科書の活用意義と活用の姿を捉える

詳しく報告書で読む (p.58)

レクチャー 60分

有識者の講義

取組のねらい

- 学習者主体の学びの必要性を踏まえ、その実現に向けたデジタル教科書の活用方法について理解を深める。

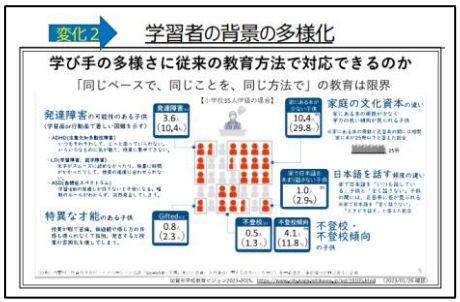
取組内容

■ 前半:デジタル教科書の現状と課題、学習者主体の学びの必要性の説明

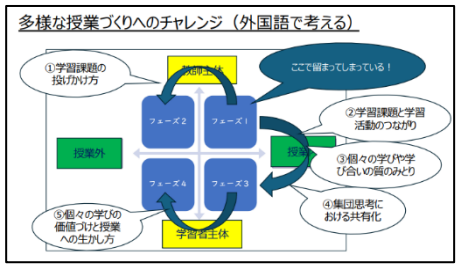
- 文部科学省によるデジタル教科書導入に当たっての教員の課題感に関する調査結果を紹介。
- 時代の変化に伴い、学習環境が多様化していることを説明し(右上図)、従来の一斉一律型の学びだけではなく、学習者が自立的に学びを進めていく「学習者主体の学び」が求められていることを解説。

■ 後半:デジタル教科書の活用意義、実践事例の紹介

- デジタル教科書の具体的な機能や活用例を紹介しながら、「学習者主体の学び」にデジタル教科書がどのように寄与するかを説明。
- 受講者が段階的に活用を進められるよう「授業づくり」における教師主体から学習者主体の学びへ移行するための4つのフェーズのポイント(右下図)を説明。
- 「学習者の声」に着目しながら過年度事業の好事例動画を視聴。



▲多様化する学級の状況を紹介



▲フェーズごとにポイントを解説

目指す学びの姿を起点とした活用意義の解説

ポイント解説

- 学習環境が多様化していることを示すことで、受講者が自身の学級や授業自らの学級・授業の状況とを無意識に比較し、求められる学びの姿と自身の実践との間にあるズレに気付き、自分事としての課題意識が生まれることが期待されます。
- デジタル教科書を「学習者主体の学びの実現のために活用する」という文脈で位置付けることで、活用意義を理解してもらいやすくなります。(放送大学　佐藤　客員教授)

取組結果

■ 受講者アンケートの結果

研修で満足した内容（自由記述回答から抜粋）

- 学級の課題を紹介された際、自分自身の授業を振り返り、**これまでの授業スタイルや課題を改めて見つめ直す**ことができた。
- 主体的・対話的で深い学びについて、**これまでの実践を踏まえながら再考する**機会となった。

研修で理解した内容（自由記述回答から抜粋）

- **デジタル教科書を活用することで、今後目指していく授業の方向性や学びの姿を具体的にイメージ**できた。
- **デジタル教科書の活用が、学習者の学びに向かう姿勢を高める可能性がある**と感じた。

➢ **自身の学級や現状の授業スタイルの課題を起点として、学習者主体の学びの重要性を説いたことで、デジタル教科書の活用意義について理解を深めることができた**と考えられる。

研修事例 3-1

奈良県教育委員会

学習者主体の学びを起点にデジタル教科書の活用意義と活用の姿を捉える

詳しく報告書で読む（p.59）

ワークショップ　30分

活用方法の検討

取組のねらい

- 他の教員との意見交換を通じて、自分一人では気付きにくい視点や工夫を取り入れ、授業における活用の幅を広げる。

取組内容

■ グループ協議の流れ

◆ 個人ワーク

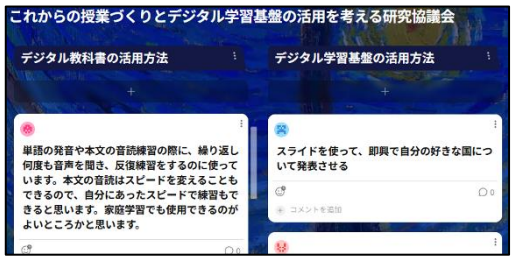
- 自身の実践や講義で学んだ内容を基に、デジタル教科書等の活用方法について個人で整理し、学習支援ソフトに書き出して共有（右上図）。

◆ グループワーク

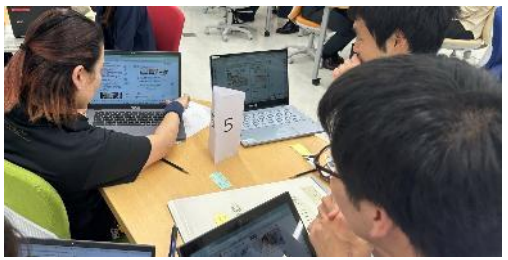
- 1グループ約5名でグループに配置。
- グループごとに外国語科における4技能（聞く・読む・話す・書く）についての活用を検討。
- 実際にデジタル教科書を操作しながら、グループで話し合い、ホワイトボードに整理。

◆ 全体発表

- 2グループが代表して検討内容を発表し、全体で活用方法を共有。



▲学習支援ソフト上に個人の考えを書き出す様子



▲活用に関するアイデアを互いに出し合っている様子

ポイント解説　既に活用が進んでいる教員を中心とした議論の進行

- 既にデジタル教科書の活用が進んでいる教員の実践知を起点に、他の教員の視点や経験が重なり合うことで、活用方法に対する理解が多面的に深まります。
- 議論を進める際には、具体的な困りごとに対して、他の教員が工夫や対応方法を共有する等、互いの実践を持ち寄るように促すことで、活用方法を広げていく対話が生まれます。

（放送大学　佐藤　客員教授）

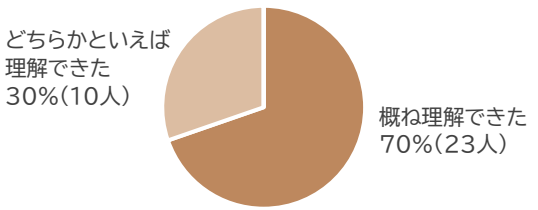
取組結果

■ 受講者アンケートの結果

研修で満足した内容（自由記述回答から抜粋）

- **他の教員が現場で実践している具体的な活用方法について意見交換**でき、有意義だった。
- 授業での活用方法だけでなく、**実践上の課題や難しさについても共有**でき、参考になった。
- 他者の実践や考え方に触れることで、**デジタル教科書を今後どのように活用していくべきか、方向性を捉える**ことができた。

研修の理解度［N=33］



➢ デジタル教科書を実際に操作しながら、他の教員と意見交換を行うことで、**活用方法に対する理解が深まり、授業における活用の幅を広げることに繋がった**と考えられる。

研修事例 3-1

奈良県教育委員会

学習者主体の学びを起点にデジタル教科書の活用意義と活用の姿を捉える

詳しく報告書で読む（p.59）

レクチャー　20分

県指導主事の講義

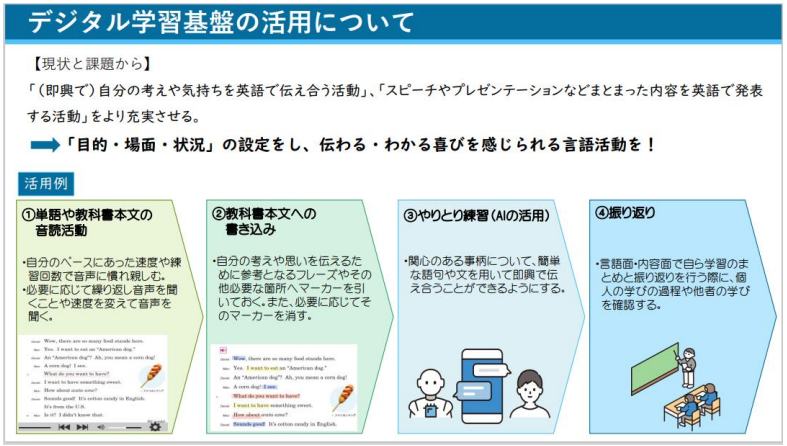
取組のねらい

- デジタル学習基盤を活用した県内の授業モデルを知り、活用を身近なものに感じてもらう。

取組内容

■ 県内事例に関する講義

- 奈良県教育委員会の指導主事から、外国語科におけるデジタル学習基盤の活用について説明。授業の「目的・場面・状況」を明確にして、学習者が学習のねらいを理解し、その達成を実感できる授業づくりの考え方を紹介。
- その後、授業全体の流れに沿って、どの場面で、どのようにデジタル学習基盤を活用しているかを具体的に示し、学習活動と活用方法の関係が分かるように、実践事例を紹介（右図）。



▲授業場面ごとに県内の活用事例を紹介

県内実践事例を知り、活用を身近なものに

ポイント解説

- 受講者と条件が近い学校・自治体の実践事例を紹介することで、デジタル学習基盤の活用が、特別な取組ではなく、日常の授業の中で実現可能な身近なものであることを示すことができます。
- 授業の流れに沿って活用場面を示すことで、受講者が自分の授業に置き換えて考えやすくなり、「自分の実践でも取り入れられそうだ」というイメージを持たせやすくなります。
- 県内の実践事例が共有される機会は限られているため、実際に授業を行っていた指導主事自身が紹介することは、受講者にとって刺激となり、今後の実践を考える上での大きな参考となります。（奈良県教育委員会　福呂　指導主事）

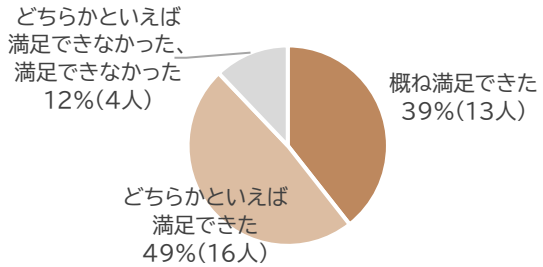
取組結果

■ 受講者アンケートの結果

研修で満足した内容（自由記述回答から抜粋）

- **授業展開に応じたデジタル学習基盤の具体的な活用方法を知る**ことができ、参考になった。
- **デジタル学習基盤を活用した授業の進行を、場面ごとにイメージ**することができた。
- 県内の実践事例を通して、**デジタル学習基盤を活用した授業の全体像**を捉えることができた。

研修の満足度［N=33］



➢ 県内の教員が実際に活用している事例を知ることで、**デジタル学習基盤の活用が受講者にとって身近なものとなり、自分事としてイメージできた**と考えられる。

研修事例 3-2

奈良県教育委員会

校種や立場を超えた多様な視点から、デジタル教科書の活用を考える

詳しく報告書で読む (p.63～69)

研修前

- 教員は、デジタル教科書の**活用自体が目的化しており、活用意義が十分に理解されていない**場面が一部見られる。
- 指導主事は、**学校現場における活用状況や課題の把握・共有が、なお十分とは言えない**側面がある。

研修後

- 9割以上の受講者が、**デジタル教科書の活用の意義を理解**することができた。
- 意見交換を通じて、**校種や立場を越えた多様な視点を獲得し、指導助言の方向性が見出せた。**

研修の概要

基本情報

研修のねらい

- ✓ デジタル教科書の活用イメージを具体化するために、**教科の見方・考え方や授業観といった概念的な内容について、具体的な実践例を交えて紹介**する。
- ✓ **校種や立場を越えた意見交流ができるよう**、グループ協議において、**小学校・中学校教員及び指導主事を混在させて配置**する。

対象者	教員	各郡市代表の教員(算数・数学科担当)44名
	指導主事	市町村教育委員会の指導主事7名
実施方式	参集	オンライン / ハイブリッド

研修の流れ

レクチャー 20分
県指導主事の講義

全体 - 奈良県教育委員会の指導主事から、算数・数学科における学習指導要領の要点を説明。
その後、デジタル教科書や学習支援ソフトを活用した具体的な実践事例を紹介。
詳細は p.24

【準備物】
- 講義資料

レクチャー 60分
有識者の講義

全体 - 過年度事業の事例動画を視聴し、効果的と考えられる活用ポイントを個人で整理した後、グループで意見交換。
学習スタイルを①視覚型②聴覚型③読み書き型④体験型の4つに分類したVARKモデルを用い、それぞれの特徴を説明しながら、活用方法を説明。
実践例を交えながら、個別学習・協働学習・全体指導を往還しながら進めていくこれからの授業の在り方を解説。
詳細は p.25

【準備物】
- 講義資料

ワークショップ 40分
活用方法の検討

グループ - デジタル教科書を操作しながら算数・数学科における4領域(数と計算、図形、データの活用、測定関数)の活用を検討。
全体 - 代表2グループが検討した内容を発表。
詳細は p.26

【準備物】
- 操作用端末
- ホワイトボード、マーカー

研修事例 3-2

奈良県教育委員会

校種や立場を超えた多様な視点から、デジタル教科書の活用を考える

詳しく報告書で読む（p.65）

レクチャー　20分

県指導主事の講義

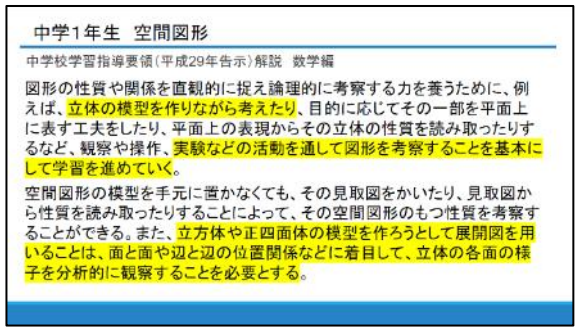
取組のねらい

- 学習指導要領の内容を達成するための手段として、デジタル教科書がどのように活用できるかを理解する。

取組内容

■ 県内事例に関する講義

1. 奈良県教育委員会の指導主事から、実践事例に関わる指導上の要点を、学習指導要領を用いて解説。
   紹介された事例：中学校1年生「空間図形」における活用／中学校2年生「連立方程式」における活用
2. 授業の流れに沿って、デジタル教科書及び学習支援ソフトの具体的な実践事例を紹介。

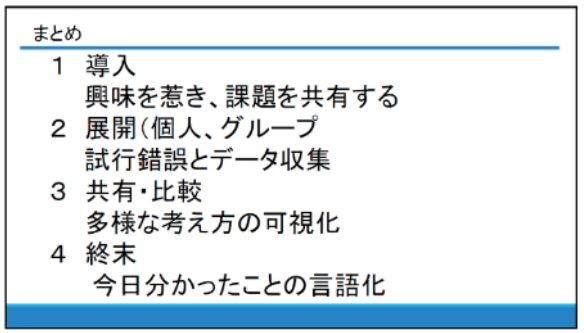

中学1年生　空間図形

中学校学習指導要領（平成29年告示）解説　数学編

図形の性質や関係を直観的に捉え論理的に考察する力を養うために、例えば、立体の模型を作りながら考えたり、目的に応じてその一部を平面上に表す工夫をしたり、平面上の表現からその立体の性質を読み取ったりするなど、観察や操作、実験などの活動を通して図形を考察することを基本にして学習を進めていく。

空間図形の模型を手元に置かなくても、その見取図をかいたり、見取図から性質を読み取ったりすることによって、その空間図形のもつ性質を考察することができる。また、立方体や正四面体の模型を作ろうとして展開図を用いることは、面と面や辺と辺の位置関係などに着目して、立体の各面の様子を分析的に観察することを必要とする。

▲実践事例に関わる指導上の要点に線が引かれている様子


まとめ

1　導入
　興味を惹き、課題を共有する
2　展開（個人、グループ
　試行錯誤とデータ収集
3　共有・比較
　多様な考え方の可視化
4　終末
　今日分かったことの言語化

▲授業場面ごとにデジタル教科書及び学習支援ソフトの活用方法を整理

ポイント解説

学習指導要領に示された目標の達成を支える手段としてのデジタル教科書

- 実践事例のみを紹介するのではなく、あわせて、デジタル教科書の活用が学習指導要領に示された目標の達成にどのように結び付いているかを説明することで、受講者は授業のどの場面で、どのような意図をもってデジタル教科書や学習支援ソフトが活用すると良いかを、具体的に理解することができます。
- 特に、指導主事も参加している研修であれば、学習指導要領に基づいて、学校現場における活用実態を捉えることができ、より実践的な指導助言に繋がるため、非常に有効です。
（奈良県教育委員会　福呂　指導主事）

取組結果

■ 受講者アンケートの結果

研修で満足した内容（自由記述回答から抜粋）

- 県内の身近な教員が活用を実践していると知ることで、**デジタル教科書を使うことへの心理的なハードルが下がった。**（教員）

研修で理解した内容（自由記述回答から抜粋）

- **何のためにデジタル教科書を活用するか、という視点を大切**であることが分かった。（指導主事）
- **「目的」「目標」「ゴール」を念頭に置きながら、指導助言**していきたい。（指導主事）
- **実際の現場で、どのような流れで、どのように活用されているのかを具体的に理解**できた。（教員）

➢ 学習指導要領と関連付けて、県内の具体的な実践事例を紹介したことで、**デジタル教科書の活用が学習指導要領に示された目標の達成にどのように繋がるのかを具体的に理解できた**と考えられる。

研修事例 3-2

奈良県教育委員会

校種や立場を超えた多様な視点から、デジタル教科書の活用を考える

詳しく報告書で読む（p.65～66）

レクチャー　60分

有識者の講義

取組のねらい

- 目指すべき授業の在り方から、デジタル教科書の活用の方向性を捉える。

取組内容

■ 序盤：実践動画を通じた活用ポイントの確認

- 過年度事業の好事例動画を視聴し、効果的と考えられる活用ポイントを個人で整理した後、グループで意見交換。

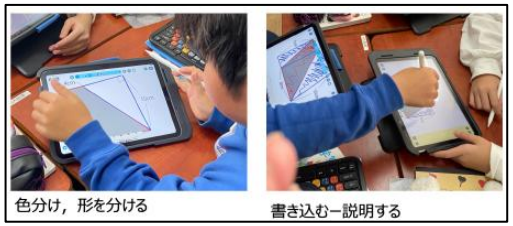
■ 中盤：デジタル教科書導入の意義の説明

- 学習者の多様化が進んでいる現状を踏まえ、学習者一人一人の特性に応じた指導・支援の重要性について説明。
- 学習スタイルを①視覚型②聴覚型③読み書き型④体験型の4つに分類したVARKモデルを用い、それぞれの特徴を整理しながら、デジタル教科書や学習支援ソフトをどのように活用できるか説明。

■ 終盤：これからの授業の在り方の説明

- デジタル教科書が、個別最適な学びの実現に有効であることを示した上で、その学びを協働的な学びへと繋げていくことの重要性について、具体的な活用場面を交えて説明。
- 個別学習・協働学習・全体指導を往還しながら授業を構成していく考え方を実践事例（小学校5年生「平面図形の面積」）と共に説明し、その実現に向けた授業設計上のポイントを解説。

▲個に応じた学習スタイルを説明



▲「平面図形の面積」を題材とした活用の様子

ポイント解説

具体的な活用場面から活用意義を捉える

- 授業の在り方といった概念的な考え方を説明する際には、具体的な教科・単元を題材とした活用場面と結び付けて示すことで、受講者は授業をイメージしながら理解を深め、活用の位置づけを明確に捉えられます。
（放送大学 佐藤 客員教授）

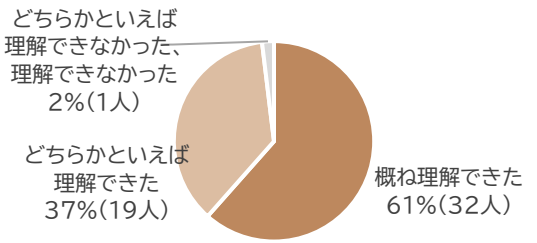
取組結果

■ 受講者アンケートの結果

研修で満足した内容（自由記述回答から抜粋）

- 機能の紹介にとどまらず、**学習スタイルに応じた具体的な使分けを知ることができ**、満足した。（教員・指導主事）
- **学習内容や学習者の特性に応じて、活用方法を考える視点が得られた。**（教員）
- **目指すべき授業の在り方が実践事例と共に説明されたことで、具体的にイメージ**できた。（教員）

研修の理解度［N=51］



➢ 概念的な内容を、具体的な実践事例と結び付けて説明したことで、**目指すべき授業に近づくために、どのようにデジタル教科書を活用していくか理解できた**と考えられる。

研修事例 3-2

奈良県教育委員会

校種や立場を超えた多様な視点から、デジタル教科書の活用を考える

詳しく報告書で読む（p.66）

ワークショップ 40分

活用方法の検討

取組のねらい

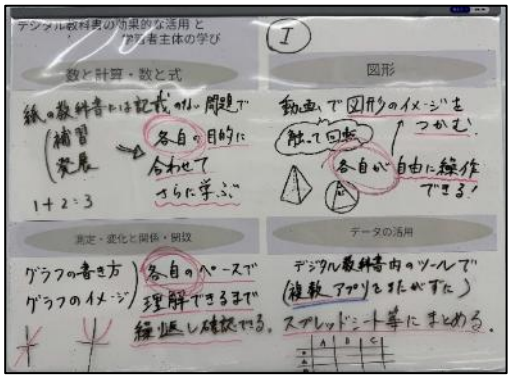
- 多様な視点からデジタル教科書の活用を捉え、自身の授業や指導助言に活かせる活用イメージを広げる。

取組内容

■ グループ協議の流れ

◆ グループワーク 30分
- 1グループ3～5名で、小学校・中学校教員と指導主事を同一グループに配置。
- グループごとに算数・数学科における4領域（数と計算、図形、データの活用、関数）の活用を検討。
- 実際にデジタル教科書を操作しながら、グループで話し合い、ホワイトボード（右図）に整理。

◆ 全体発表 10分
- 2グループが代表して検討内容を発表し、全体で活用方法を共有。



▲意見が整理されたホワイトボードの一例

ポイント解説

校種や立場を越えて多様な視点を共有する

- 校種や立場の異なる参加者を同一グループに配置することで、それぞれの役割に基づいた多様な視点が共有され、小学校・中学校の内容の共通点や相違点等、縦の繋がりとして捉え直し、活用をより広い視野で検討することに繋がります。
- 教員は、指導主事が議論に加わることで、「授業のねらいを達成するために、デジタル教科書をどう役立てるか」といった視点から、活用を捉えやすくなります。
- 指導主事は、学校現場におけるデジタル教科書の活用状況や課題について、十分に把握・共有できているとは言えない側面がありましたが、教員と共に検討することで、学校の実情に即した理解が深まり、今後の授業改善や指導の在り方を考えるための問いが生まれやすくなります。

（奈良県教育委員会　福呂　指導主事）

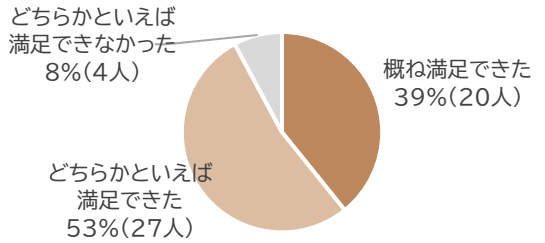
取組結果

■ 受講者アンケートの結果

研修で満足した内容（自由記述回答から抜粋）

- **校種や立場を越えて活用事例や課題を共有することで、新たな視点を得ることができた。**（教員・指導主事）
- **他校種の教員と同じグループで協議できたことで、現場の状況やどのような課題を抱えているかが分かり、有意義であった。**（指導主事）

研修の満足度［N=51］



➢ **校種や立場の異なる参加者による意見交流を通して、新たな視点や問いを獲得し、9割以上の受講者が満足**したと考えられる。

研修事例 4-1

熊本県教育庁

学習者の立場を体験し、実感を伴って効果を理解

詳しく報告書で読む（p.74～80）

研修前

- デジタル教科書の活用を進めるに当たり、**何から着手し、どのような手順で取り組むべきか**が分からない。
- 教員・指導主事共に、**デジタル教科書の効果の理解が進んでいない。**

研修後

- 9割以上の受講者が研修内容を理解し、**自身の活用段階を把握し、活用に向けた取組の方向性を明確**にできた。
- 模擬授業を通じて、学習者の立場を体験したことで、**デジタル教科書活用の効果を実感**している様子が見られた。

研修の概要

基本情報

研修のねらい

- ✓ デジタル教科書の活用段階を理解し、**今後の活用に向けた見通しをもたせる。**
- ✓ 模擬授業で学習者の立場を体験することを通じて、**デジタル教科書の効果を実感を持って理解**してもらう。

対象者	教員 指導主事	県内の教員、指導主事あわせて100名程度	
実施方式	参集	オンライン	ハイブリッド

研修の流れ

研修前の取組

個別 - 事前アンケートにより、受講者のデジタル教科書活用の現状と課題感を把握。

レクチャー 50分

有識者の講義

全体 - 研修冒頭に、デジタル教科書を効果的に活用するまでには段階があることを示し、自身が現在どの段階にいるのかを問いかけることで、受講者が自分の立ち位置を客観的に捉える機会を設定。

単元構想時に重視すべき視点としてPBL（Project-Based Learning）デザインを引用し、「どのように学ぶか（方法知）」「何を学ぶか（内容知）」を説明しながら、デジタル教科書を活用した授業づくりの考え方を解説。

【準備物】
- 講義資料

詳細は p.28

レクチャー 20分

模擬授業の体験

全体
- 有識者が授業者、受講者が学習者の立場となり、デジタル教科書を用いた模擬授業を体験。
- 模擬授業を通じて感じたデジタル教科書の効果や、ルーブリック（評価の観点）を子供たちに共有する適切なタイミングについて、グループで協議。
- 学習活動の意図やルーブリック（評価の観点）を子供たちと共有しながら授業を構成することにより、子供たちの主体性を引き出し、学習者主体の学びに繋がることを説明。

【準備物】
- 講義資料
- デジタル教科書（サンプル版）
- 操作用端末（受講者が持参）

詳細は p.29

研修事例 4-1

熊本県教育庁

学習者の立場を体験し、実感を伴って効果を理解

詳しく報告書で読む（p.76）

レクチャー　50分

有識者の講義

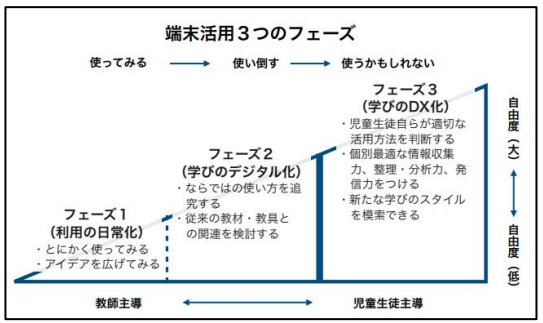
取組のねらい

- デジタル教科書の活用段階を理解し、今後の活用に向けた見通しをもつことができる。

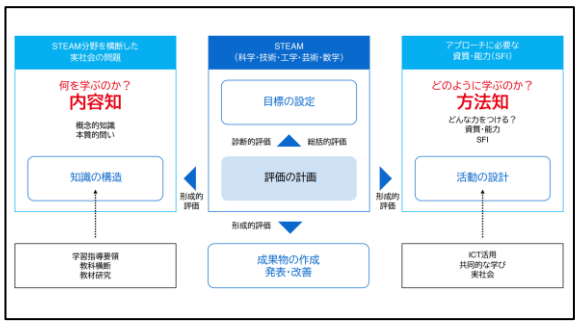
取組内容

■ デジタル教科書の活用段階や効果的な活用方法に関する講義

- 講義冒頭では、デジタル教科書を効果的に活用するまでには段階があることを説明する。その後、各受講者に対して「自身がどの段階にいるか」を問いかけることで、自身の立ち位置を意識させる。
- 「PBL（プロジェクト型学習）デザイン」（下左図）を基に、単元構想時における要点を解説。
  端末活用のフェーズ1では、「どのように学ぶか（方法知）」に着目し、子供たちとともにデジタル教科書の活用に慣れていくことが重要であることを説明。
  端末活用のフェーズ2以降、子供たちが活用に慣れ、学習手段として使いこなせるようになった段階では、「何を学ぶか（内容知）」に着目した活用へと発展させていくことが望ましいことを解説。



▲効果的な活用に至るまでの段階について説明



▲PBL（プロジェクト型学習）デザインを紹介

まずは自分の活用段階を明確にしてもらう

ポイント解説

- 講義冒頭で活用に向けた段階的な道筋を示し、自身の活用段階を把握してもらうことで、受講者が自分の状況を踏まえて、その後の講義内容を理解しやすくなります。
  （札幌国際大学　岩崎　教授）

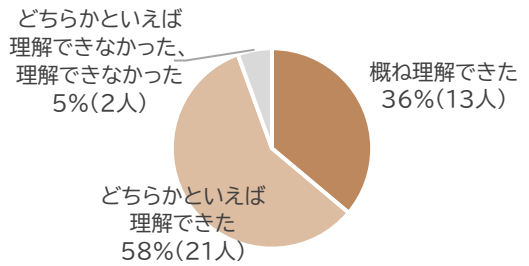
取組結果

■ 受講者アンケートの結果

研修で理解した内容（自由記述回答から抜粋）

- デジタル教科書の活用段階の中で、**自身が現在どの段階に位置しているのかを捉えることができ、今後どのように活用を進めていくべきかについて見通しをもつ**ことができた。（教員）
- **「何を学ぶのか」とあわせて、「どのような方法で学ぶのか」を児童に意図的に伝えていくことの重要性**を、改めて認識する機会となった。（教員）

研修の理解度［N=48］



➢ **受講者が自身の立ち位置を理解した上で、今後どのような授業デザインを意識していくべきか、理解を深めることができた**と考えられる。

研修事例 4-1

熊本県教育庁

学習者の立場を体験し、実感を伴って効果を理解

詳しく報告書で読む（p.77）

レクチャー　20分

模擬授業の体験

取組のねらい

- 模擬授業を通じて、学習者主体の学びに繋がる授業構成やデジタル教科書の活用方法を理解することができる。

取組内容

■ 模擬授業の体験

- 有識者が授業者、受講者が学習者の立場となり、理科におけるデジタル教科書を用いた模擬授業を体験し、学習活動において、デジタル教科書がどのように活用されているかを説明。
- 模擬授業後は、デジタル教科書が有効であると感じた点や、ルーブリック（本時の評価基準）を提示するタイミングについて、グループで意見交換。
- 学習活動の意図やルーブリック（本時の評価基準）等を授業の過程で子供たちと共有しながら、デジタル教科書を適切な場面で活用して授業を構成することにより、学習者主体の学びに繋がることを説明。

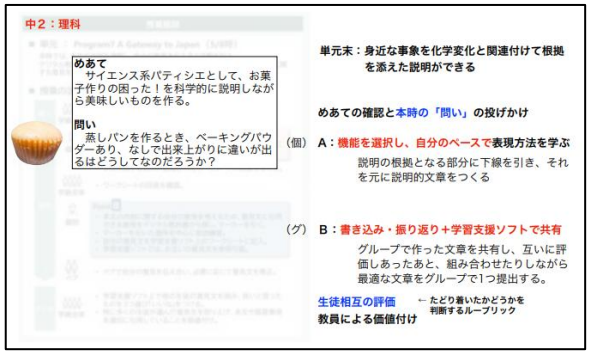
模擬授業のテーマ

【題材】
東京書籍株式会社　中学校2年生　理科
「ホットケーキの秘密」

【本時の課題】

- 蒸しパンを作る時に、ベーキングパウダーの有無で出来上がりに違いが出る理由は何かを説明する。

▲模擬授業の題材と本時の課題



▲学習活動における模擬授業の位置づけを説明

他教科においても、活用をイメージしやすくするために

ポイント解説

- 模擬授業で取り扱った教科に活用が限定されないために、模擬授業後に学習の進め方や活用の視点に着目して価値付ける等、教科の枠を超えて、活用のイメージの想像を促すことが重要です。（札幌国際大学　岩崎　教授）

取組結果

■ 受講者アンケートの結果

研修で満足した内容（自由記述回答から抜粋）

- デジタル教科書を実際に使用し、学習者の立場を体験することで、**子供の視点に立った授業の在り方を具体的にイメージすることができた。**（教員）
- **自分の意見の根拠を明確にし、それを共有し合う活動において、デジタル教科書は有効**であると実感した。（教員）

今後の取組の方向性（自由記述回答から抜粋）

- 教員が一方的に教える授業ではなく、**子供が自分のペースで学び、自ら学習を進めていけるような授業展開を実践していきたい**と感じた。（教員）
- デジタル教科書の活用については、短期的な効果を求めるのではなく、根気強く継続して取り組むことで、最終的には**紙の教科書かデジタルかを子供自身が主体的に選択できる力を育てていきたい**と感じた。（指導主事）

➢ **模擬授業を通してデジタル教科書の効果を実感するとともに、学習者主体の授業づくりに向けた次のアクションへと意識を繋げる効果があった**と考えられる。

研修事例 4-2

熊本県教育庁

模擬授業を行い、指導助言のポイントを共有

詳しく報告書で読む (p.81～87)

研修前

- 指導主事は、**デジタル教科書の活用経験が十分でなく、指導助言の選択肢として、自信をもってデジタル教科書を提示できていない。**

研修後

- 全受講者が、**デジタル教科書の機能や活用の可能性を知り、教科特性に応じた具体的な活用方法を整理**できた。
- 全受講者が、**デジタル教科書活用に関する指導助言の自信**を持つことができた。

研修の概要

基本情報

研修のねらい

- ✓ 各教科の特性に即したデジタル教科書の活用方法が検討されるよう、**受講者を専門教科ごとにグループ編成**する。
- ✓ 活用イメージを具体化するために、グループごとに**具体的な授業場面を想定した模擬授業を検討・実施**する。

対象者	教員	–
	指導主事	県内の指導主事31名
実施方式	参集	オンライン　ハイブリッド

研修の流れ

レクチャー　30分
有識者の講義

全体

- 指導主事が感じている課題を起点に、学校現場の状況に応じた指導助言を求められる指導主事の役割や、指導助言の幅を広げる重要性を再確認。

「効果的な活用場面」と、「指導助言時に求められる『問い』や『価値付け』」との関連を解説。

グループ協議模擬授業を検討する際に意識すべき授業のポイントを説明。

詳細は p.31

【準備物】
- 講義資料

ワークショップ　50分
授業案の検討

グループ

- 国語、算数・数学、理科、社会、外国語の主要5教科ごとに、3～4人のグループを編成し、デジタル教科書を操作しながら、授業案を検討。

詳細は p.32

ワークショップ　55分
模擬授業の実施

全体

- ワールドカフェ形式で、受講者が授業者と学習者の役割を分担しながら、デジタル教科書を活用し、グループを超えた模擬授業を実施。

模擬授業実施後は、授業者役と学習者役の間で授業の進め方やデジタル教科書の活用方法、指導助言の視点について、意見交換。

詳細は p.33

【準備物】
- デジタル教科書（サンプル版）
- 操作端末（受講者が持参）
- オンライン上のワークシート

研修事例 4-2

熊本県教育庁

模擬授業を行い、指導助言のポイントを共有

詳しく報告書で読む（p.83）

レクチャー　30分

有識者の講義

取組のねらい

- 指導主事としての役割を再確認した上で、デジタル教科書の効果的な活用を学ぶ必要性を理解することができる。

取組内容

■ 序盤：指導主事に必要なマインドセット

- 「学校現場への働きかけの難しさ」といった課題を起点に、学校現場の状況に応じた助言助言を求められる指導主事の役割を再確認。あわせて、指導助言時の幅を広げるために、多様な考え方に触れ、自身の価値観や認識を更新していく必要性を強調。

■ 中盤：デジタル教科書の具体的な活用方法

- 「デジタル教科書の機能」や「過年度事業の好事例動画を視聴した感想」について、受講者同士で意見交換を実施。
- その後、基本的な機能を説明した上で、「効果的な活用場面」と、「指導助言時に求められる『問い』や『価値付け』」との関連を解説。

■ 終盤：グループ協議におけるポイント

- 研修後半のグループ協議に向けて意識すべき「授業検討のポイント」について説明。

見出された効果的場面	指導助言の時の「問い」「価値づけ」
学習者用端末の操作への慣れ	・いつでも使える、使ってもよい環境なのか？ ・カメラ、共同編集、クラウド保存など多様な機能が使えるのか？ ・使う上でのリテラシーは育っているのか？
デジタル教科書の機能の理解	**・書き込み、拡大、保存などの機能を理解しているのか？** ・授業で多様な機能を体験する機会は十分確保されているのか？ ・自分なりの（得意な）使い方をつかんでいるのか？
学習支援ソフトウェアとの連携	・学習支援ソフトウェアの機能・特徴を知っているのか？ ・必要なときに使える環境なのか？ ・連携活用によってメリットを感じる場面が仕掛けてあるのか？
今の学習活動の目的を理解	・その学習に取り組んでみたくなるような課題設定なのか？ ・この活動でたどり着くゴールが分かっているのか？ ・そのために何をどうしたらいいのかが理解できているのか？
内容理解につなげる試行錯誤	・考えの根拠がデジタル教科書から見出だせる課題設定なのか？ ・納得・理解できるだけの十分な活動時間が確保されているのか？ ・個の理解と協働による理解の場が仕掛けられているのか？

▲効果的場面ごとの指導助言時の「問い」「価値付け」

授業検討のポイント

1. 授業では課題の解決に向けて自分で考え自分から取り組んでいる。
2. 自分の考えを発表する機会で、自分の考えが上手く伝わるよう、資料や文章、話の組立て等を工夫して発表している。

「デジタル教科書の活用をなぜ学ぶ必要があるか」を確認

ポイント解説

- 現場への働きかけの難しさや、状況に応じた指導助言が求められる指導主事の役割を起点に、指導助言の幅を広げる必要性を確認しました。その手段としてデジタル教科書を位置付けたことで、目的意識を明確にして研修に臨んでもらうことができました。（札幌国際大学　岩崎　教授）

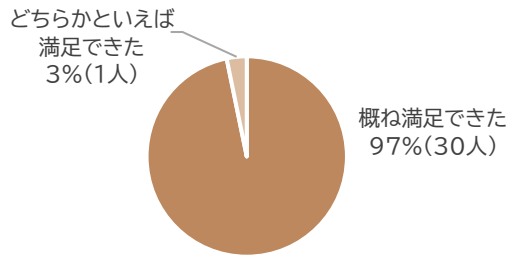
取組結果

■ 受講者アンケートの結果

研修で満足した内容（自由記述回答から抜粋）

- **教師の役割が「教える」から「学びを支える」へと変化する中で、その手段としてデジタル教科書が有効**であることが理解できた。
- **デジタル教科書は、子供たちの学びを引き出す重要な学習ツール**であると改めて感じた。
- **指導主事としての在り方とあわせて、デジタル教科書の活用意義を改めて考える契機**となった。

研修の満足度［N=31］



➢ 指導主事の役割とデジタル教科書の意義を関連付けて整理したことで、**受講者が自身の役割を踏まえながら、指導助言をするに当たって必要な視点を理解でき、研修全体への満足度の向上に繋がった**と考えられる。

研修事例 4-2

熊本県教育庁

模擬授業を行い、指導助言のポイントを共有

詳しく報告書で読む（p.84）

ワークショップ　50分

授業案の検討

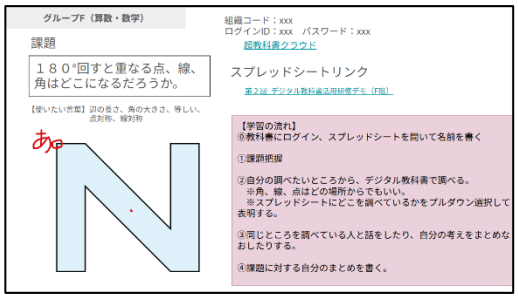
取組のねらい

- 教科特性を踏まえた上で、デジタル教科書の効果的な活用方法を理解することができる。

取組内容

■ 授業案の検討方法

- 国語、算数・数学、理科、社会、外国語の教科ごとに、3～4人のグループを編成。
- サンプル版のデジタル教科書で扱っている中から授業の一場面を想定し、実際に操作しながら、活用する機能や授業展開について検討。
- 検討内容は、オンライン上のワークシートを共同編集しながら整理・記録。



▲「算数・数学」の授業を検討したグループのワークシート

▲学習指導要領と照らしながら、授業案を検討している様子

教科特性を踏まえた授業案検討

ポイント解説

- 専門教科ごとにグループ編成したことで、各教科の特性や学習内容を踏まえた、より実践的な検討が行われていました。
  デジタル教科書はICT活用の文脈で扱われることが多い一方で、各教科において達成したい学習のめあてを起点とし、その達成に向けた1つの手段としてデジタル教科書を位置付けて活用する視点が重要です。（札幌国際大学　岩崎　教授）

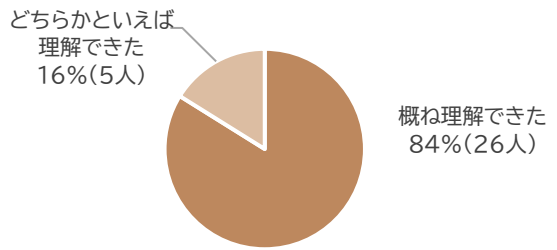
取組結果

■ 受講者アンケートの結果

研修で理解した内容（自由記述回答から抜粋）

- 授業案検討を通じて、実際に操作したことで、**デジタル教科書が、記録・保存、動画の活用、情報検索等に優れていることを実感**した。
- 授業案検討を通じて、担当教科のデジタル教科書の**今まで気付かなかった使用方法や使用意図に気付いた。**

研修の理解度［N=31］



➢ 授業案検討を通じて、**講義で学んだ内容を実際に操作しながら確かめることで、デジタル教科書の特長や有効性を実感をもって理解・整理することができた**と考えられる。

研修事例 4-2

熊本県教育庁

模擬授業を行い、指導助言のポイントを共有

詳しく報告書で読む（p.84）

ワークショップ 55分

模擬授業の実施

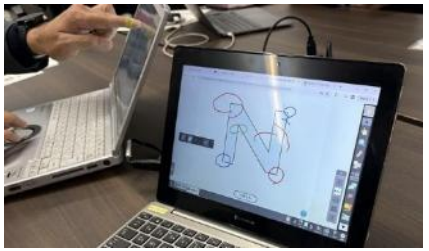
取組のねらい

- 指導助言に必要な視点を獲得し、自信を持てるようになる。

取組内容

■ 模擬授業の実施方針

- 形式：ワールドカフェ形式
- 回数：3セット
- 役割：グループ内で1名が「授業者」、他のメンバーは「学習者」
  ※ セットごとに授業者を交代し、基本的に全員が授業者の役割を担う。
- 1セットでの活動：
  ① 学習者が、セット開始時に、教科を問わず他グループに移動。
  ② デジタル教科書を実際に操作しながら模擬授業を実施。
  ③ 模擬授業終了後、授業の進め方やデジタル教科書の活用方法、指導助言の視点について意見交換。



▲模擬授業を実施、受講している様子

ポイント解説 体験型・相互交流型の研修設計

- 受講者全員が授業者の立場を経験するような研修設計とすることで、受講者一人一人が主体的に考え、学びを深める場となったと考えます。
  また、3セット実施したことで、異なる教科や校種におけるデジタル教科書の活用方法に触れる機会を確保でき、指導助言の幅を広げることができました。
- 指導主事は今後、研修を企画・実施する立場でもあるため、デジタル教科書を実際に操作し、模擬授業を行う研修スタイルそのものが、今後の研修設計に活かせる実践的な学びとなりました。
  （熊本県　松下　指導主事）

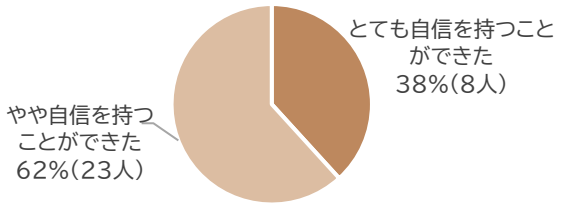
取組結果

■ 受講者アンケートの結果

今後の取組の方向性（自由記述回答から抜粋）

- 異なる教科の模擬授業を参観し、**多様な視点やアイデアを得ることで、授業づくりに新しい発想を取り入れることができた**ため、今後の指導助言に活かしたい。
- 受講者主体の研修は学びが多く、自分ごととして捉えることができた。**受講者が主体となるような研修を実施していきたい。**

指導助言への自信［N=31］



➢ グループを超えて、相互に模擬授業を実施し、フィードバックを行うことで、**デジタル教科書の効果を実感を持って理解し、指導助言への自信に繋がった**と考えられる。また、本研修の形式自体が研修設計に活かせる学びとなった。

研修事例 5-1

鹿児島県教育庁

活用段階に沿った指導助言方法の検討

詳しく報告書で読む（p.92～99）

研修前

- 指導主事は、デジタル教科書に関する研修機会が少ないため、教師への**指導助言の際に、デジタル教科書の活用という視点に触れられない**ことがある。

研修後

- 全ての受講者が、**デジタル教科書に関する指導助言に必要な要素を理解すること**ができた。
- デジタル教科書の操作体験やグループ協議を通じて、**約9割の受講者が指導助言への自信を高めた。**

研修の概要

基本情報

研修のねらい

- ✓ 指導主事自身がデジタル教科書の活用イメージを持てるよう、**デジタル教科書を実際に操作する時間**を設定する。
- ✓ 具体的な指導助言に繋げられるよう、**教師のデジタル教科書の活用段階別に必要な指導助言の方法を検討**する。

対象者	教員	－
	指導主事	教育事務所7名 市町村教育委員会指導主事35名
実施方式	参集	オンライン　ハイブリッド

研修の流れ

レクチャー　35分
有識者の講義

全体

- 鹿児島県が教育方針として掲げている「学習者主体の授業」の推進に向けて、デジタル教科書の利点や具体的な活用事例、教師への指導助言で必要なポイントを解説。

詳細は p.35

【準備物】
- 講義資料

ワークショップ　15分
個人演習

個別

- デジタル教科書のサンプル版を操作し、「効果的だと感じた機能」「活用できそうな授業場面」「活用する上で課題となりそうな点」をオンライン上のワークシートに受講者が整理。

詳細は p.36

【準備物】
- デジタル教科書（サンプル版）
- 操作用端末
- オンライン上のワークシート

ワークショップ　50分
グループ協議

グループ

- グループごとに、「学習者主体の授業」に向けて活用できそうな機能や、具体的な指導助言の方法について意見交換。
- グループ協議を踏まえて、教師のデジタル教科書の活用段階に沿った指導助言の具体例について有識者から紹介。

詳細は p.37

【準備物】
- オンライン上のワークシート

研修事例 5-1

鹿児島県教育庁

活用段階に沿った指導助言方法の検討

詳しく報告書で読む（p.94）

レクチャー　35分

有識者の講義

取組のねらい

- デジタル教科書の活用の意義を理解することができる。

取組内容

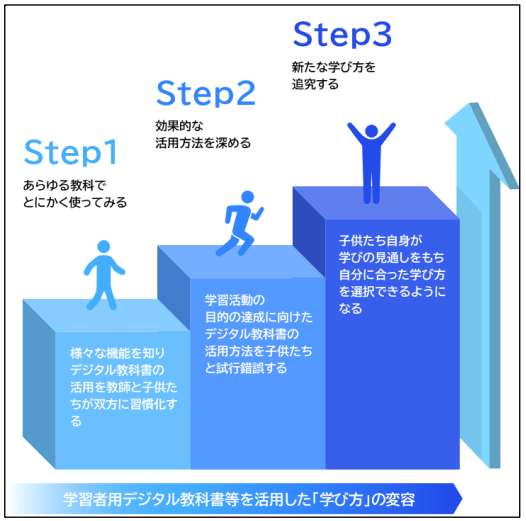
■ 主な講義内容

- 鹿児島県の教育方針である「学習者主体の授業」にデジタル教科書が寄与することを、事例動画も交えながら解説。
- 事例動画では、生徒が個別のペースで様々な学び方を展開している様子（＝「学習者主体の授業」の一例）を紹介。併せて、教師が児童生徒の学びの様子を見取り、学級全体に良い学び方の例や留意点を共有することが重要であることを強調。
- 教師への指導助言の具体例について、「デジタル教科書活用の3Step」（右図）に紐づけながら解説。

Step1　あらゆる教科でとにかく使ってみる
→デジタル教科書を使うメリットを伝える

Step2　効果的な活用方法を深める
→様々な授業場面で使えることを示す

Step3　新たな学び方を追究する
→子供たちが学び方を自己調整するためにデジタル教科書が役立つことを示す



▲デジタル教科書活用の3Step

◀上図の各Stepに向けて必要な指導助言を紹介

教師の活用段階に沿った指導助言の例を提示

ポイント解説

- 指導主事は、教師の活用状況や考えに寄り添いながら指導助言を行う必要があります。講義で「デジタル教科書活用の3Step」と、各Stepに至るために必要な指導助言の例を示すことで、受講者が自身の担当する学校の活用状況を想起しながら、具体的かつ実現性の高い指導助言の検討に繋げることができます。（東京家政大学 太田 教授）

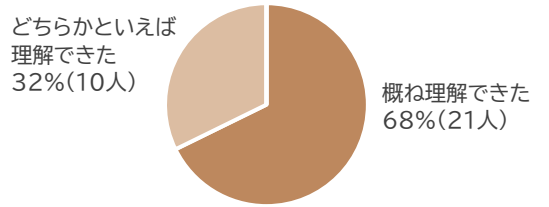
取組結果

■ 受講者アンケートの結果

研修で理解した内容（自由記述回答から抜粋）

- 教師も児童生徒も、指導主事も一緒に学びながらデジタル教科書の活用を進めていけばよいと分かった。
- デジタル教科書を無理にでも使おうとするのではなく、子供たちと一緒に試してみながら、使い方を模索していけばいいということが分かった。
- 指導助言においては単なる助言にとどまらず、「相手の思いや状況を丁寧にくみ取りながら、対話的に進めていく姿勢」が重要であることを改めて実感した。

研修の理解度［N=31］



➢ 本研修の理解度を問う質問では、全ての受講者から肯定的な回答を得ており、デジタル教科書に関する指導助言に必要な要素を理解することができたと考えられる。

研修事例 5-1

鹿児島県教育庁

活用段階に沿った指導助言方法の検討

詳しく報告書で読む（p.95～96）

ワークショップ　15分

個人演習

取組のねらい

- デジタル教科書の機能とその活用事例を理解することができる。

取組内容

■ 個人演習の進め方

- デジタル教科書のサンプル版を操作し、「効果的だと感じた機能」「活用できそうな授業場面」「活用する上で課題となりそうな点」をオンライン上のワークシートに受講者が整理。
- 操作するデジタル教科書の教科や校種は問わない。
- 操作して気づいたことや疑問を受講者同士で話し合うことも可能。

▲個人演習を進める様子

効果的だと感じた機能	活用できそうな授業場面	活用する上で課題となりそうな点
• 好きなタイミングで必要な箇所に絞って音声を確認 • 教科書の挿絵を切り貼りして、ワークシートの作成を省力化	• 友達の考えを転記でき、意見内容の集約が容易 • 個別で課題解決を行う時間に活用	• 教師が児童生徒の学習の状況を十分に見取り支援すること

▲個人演習で実際に作成されたワークシートの例

ポイント解説

デジタル教科書を実際に操作し、授業での活用イメージを具体化

- 指導主事は「学習者主体の授業」の必要性を理解する一方で、その実現を支えるデジタル教科書の活用経験が少なく、教師の活用を促す指導助言に繋げられていない場合が多いです。
- そのため、実際にデジタル教科書を操作することで、活用できる授業場面に関してイメージが深まり、具体的な指導助言に繋げることができます。（鹿児島県 寺地 指導主事）

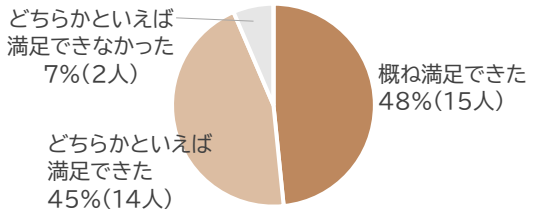
取組結果

■ 受講者アンケートの結果

研修で満足した内容（自由記述回答から抜粋）

- 実際にデジタル教科書を操作する演習を経たため、具体的な授業場面について検討することができ満足した。
- デジタル教科書を触ってみた感想等も意見交換することができた。
- オンラインで参加していたが、デジタル教科書のサンプル版を操作し、オンラインのワークシートを活用した意見集約をできたため、一方的な研修ではなく双方向性があり、対面と遜色ない研修ができた。

研修の満足度［N=31］



➢ 本研修の満足度を問う質問では、9割以上の受講者から肯定的な回答を得ており、デジタル教科書を操作して受講者同士で意見交換したことで、受講者の満足につながったと考えられる。

研修事例 5-1

鹿児島県教育庁

活用段階に沿った指導助言方法の検討

詳しく報告書で読む（p.95～96）

ワークショップ　50分

グループ協議

取組のねらい

- デジタル教科書の活用と「学習者主体の授業」を関連付けた指導助言ができるようになる。
- デジタル教科書を活用した授業に関する指導助言への意欲を高める。

取組内容

■ グループの編成方法

- 参集とオンラインの参加者でグループを分け、それぞれ校種別に3～5名程度で編成。

■ グループ協議の流れ

- グループごとに、個人演習でまとめた効果的な機能や授業場面を基に、具体的な指導助言の方法を意見交換。
- オンライン上のワークシートに協議内容をまとめ、他グループの内容も参照可能な形とする。
- 各グループの協議内容を全体で発表。講評として、有識者から具体的な指導助言の事例を紹介。

効果的だと感じた機能・活用できそうな授業場面

- 従来の教科書では提示できなかった動画や音声・情報等を、子供たちの課題解決に活かし、個に応じた学びに繋げることができる。
- 学習の履歴やデジタル化した成果物を残すことができ、既習事項等を学びに活かすことができる。児童生徒が成長を実感し、学習意欲を高めることに繋がる。

具体的な指導助言の方法

- Step1→Step2→Step3と学校の状況に応じた指導助言を行う。まずは各校の活用状況に関する調査を実施。
- Step1の学校には、活用の習慣化に繋げるため、「まずは子供と一緒に使ってみましょう」と促す。
- 「デジタル放任授業」とならないように、教師が児童生徒の様子を十分に見取り、見取ったことをもとに指導。

▲グループ協議で実際に作成されたワークシートの例

ポイント解説　具体的な機能や活用場面への理解をもとに指導助言への自信を醸成

- 学校側がデジタル教科書に関する指導助言を必要としていないケースは多く見られます。
- 「具体的な機能や活用場面を想定した指導助言」を検討することで、指導主事は「教師の授業の状態」を起点に指導することへの自信を持ちます。その結果、学校からの要請がなくても、自然に先回りして指導助言することが可能になります。（東京家政大学 太田 教授）

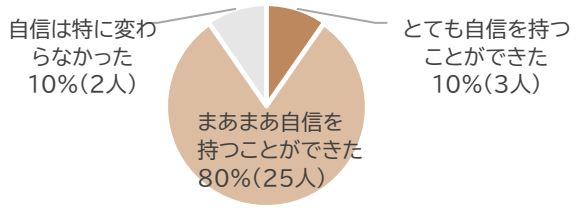
取組結果

■ 受講者アンケートの結果

今後指導助言したい内容（自由記述回答から抜粋）

- 3つのStepとともに具体的な活用例を示し、教師が自ら活用したいと思えるようにしたい。
- 導入当初は操作面や接続環境に課題が生じやすいことも念頭に置き、「できるところから無理なく取り入れていくこと」「小さな成功体験を積み重ねていくこと」の大切さを伝えていきたい。
- まずは子供と一緒に使い、習慣化を図る。次に活用方法を示し、学習方法の選択を子供に委ねることの大切さを伝えていきたい。

指導助言への自信［N=31］



➢ 指導助言への自信を問う質問では、約9割の受講者から肯定的な回答を得ており、具体的な指導助言方法の検討が自信向上につながったと考えられる。

研修事例 5-2

鹿児島県教育庁

先進的な授業づくりのねらいや工夫に迫る

詳しく 報告書で読む (p.100～107)

研修前

- デジタル教科書を活用した授業づくりについて、**具体的なイメージが描けていない教員**が見られる。

研修後

- 参加した全ての教員が、**デジタル教科書を活用した授業づくりのポイントを理解すること**ができた。
- 実践発表や有識者の講義を通して、**約9割の教員が活用への意欲を高めた。**

研修の概要

基本情報

研修のねらい

- ✓ 参加者が授業での活用イメージを具体的に描くことができるよう、教員が**実際に使っているワークシートや、授業中の写真や映像を用いながら実践事例を紹介**する。
- ✓ 有識者の講義の中では、参加者の理解を引き出せるよう、**県の教育方針として掲げている「学習者主体の授業」に紐づけながら活用の意義を解説**する。

対象者：教員／指導主事

※県の「教育の情報化」フォーラムの中で一般参加者も含む不特定多数を対象に実施したため、当日の参加人数は不明。

実施方式：参集／オンライン／**ハイブリッド**

研修の流れ

レクチャー 15分

実践発表

全体

- 小学校外国語科におけるデジタル教科書の活用事例について、先進的な活用を行う県内の教員から実践発表を実施。
- 授業の様子を撮影した動画やワークシートも用いながら、授業づくりのねらいや工夫点も紹介。

【準備物】
- 講義資料

詳細は p.39

レクチャー 25分

有識者の講義

全体

- 有識者が実践発表のポイントとして、デジタル教科書の活用の意義や「学習者主体の授業」と関連した活用の在り方について解説。実践した教員の試行錯誤の過程についても深掘り。
- 「デジタル教科書活用の3Step」を踏まえながら、他の活用事例も紹介。併せて、子供たちの学びを見取る必要性についても解説。

【準備物】
- 講義資料

詳細は p.40

リフレクション 10分

質疑応答

全体

- 教員による実践発表や有識者の講義に対する質疑応答。

【準備物】
- オンライン上のワークシート

研修事例 5-2

鹿児島県教育庁

先進的な授業づくりのねらいや工夫に迫る

詳しく報告書で読む (p.102)

レクチャー 15分

実践発表

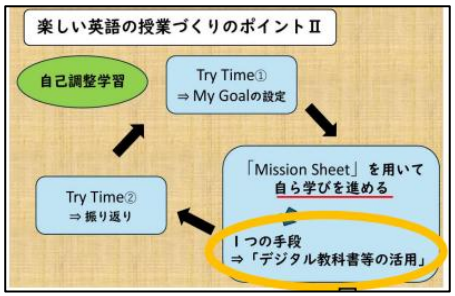
取組のねらい

- 教員が「学習者主体の授業」を踏まえたデジタル教科書活用のイメージをもつことができる。

取組内容

■ 教員による実践発表の流れ

- 実践発表を行った教員：薩摩川内市立平佐西小学校　安部菜穂子先生
- 導入として、子供たちが授業中にデジタル教科書を活用しながら学んでいる様子を動画で提示。
- 「外国語の授業づくりで大切にしていること」として、単元目標を子供たちが様々な想いや考えを伝えられるものになるよう工夫し、単元目標から逆算して各授業の内容を検討することを提示。
- 上記の授業においては、単元目標に向けて子供たちが自走できるための仕掛けづくりが重要である。そのための自己調整学習のポイント（下図①）を、デジタル教科書の活用事例（下図②）と併せて説明。



◀図①
自己調整学習の進め方を説明

◀図②
子供たちが自分で学びを進めるための1つの手段として、デジタル教科書の活用例を紹介

ポイント解説

単なる活用方法だけでなく、授業づくりのねらいについても紹介

- 授業におけるデジタル教科書の活用を検討する際は、単元においてどのような学びを目指し、教師がどのように子供たちの学びを見取るかも併せて検討する必要があります。
- 実践発表では、単にデジタル教科書等の活用方法だけでなく、単元計画の組み立て方の工夫や、子供たちが自身で学びを進めるための仕掛けも紹介することで、受講者が授業検討時に意識すべき点が明確になります。（東京家政大学 太田 教授）

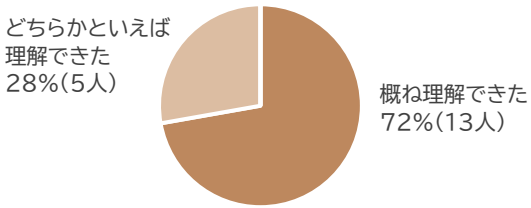
取組結果

■ 受講者アンケートの結果

研修で理解した内容（自由記述回答から抜粋）

- ICT端末を使うことが目的ではなく、手立て（手段）としてどのように活用することができるか、具体的な取組を知る機会となった。
- 単元計画の考え方や、単元目標の設定と振返りの方法等を学び、デジタル教科書はひとつの学習ツールであることやその特性をうまく利用することを学んだ。
- ICTの活用には、アナログの代替的な役割によって時間を節約する側面と、学びの質的な変容を目指す側面があることを理解した。

研修の理解度［N=18］※受講者のうち教員を対象



➢ 本研修の理解度を問う質問では、全ての受講者から肯定的な回答を得ており、デジタル教科書を活用した授業づくりのポイントを理解することができたと考えられる。

研修事例 5-2

鹿児島県教育庁

先進的な授業づくりのねらいや工夫に迫る

詳しく報告書で読む（p.103～104）

レクチャー　25分

有識者の講義

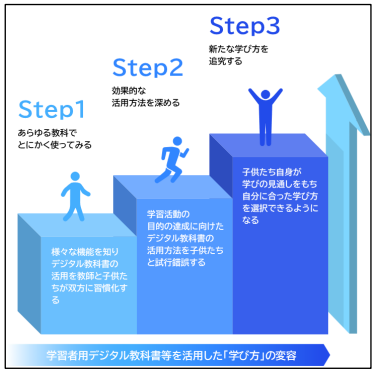
取組のねらい

- デジタル教科書の有効性を理解し、授業における活用の意欲を高めることができる。

取組内容

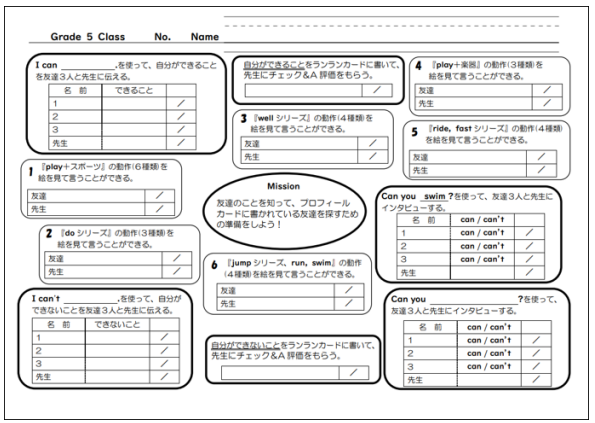
■ 主な講義内容

- 「デジタル教科書活用の3Step」を紹介し、各Stepに紐づけて活用事例を説明。Step1の事例として音読練習・リスニングでの活用、Step2の事例として本文の内容理解にデジタル教科書を活用した事例を紹介。
- 県内の教員による実践（p.5）をStep3（新たな学び方を追究する）に位置づけ、子供たちが目標達成に向け学び方を自分で選択すること（自己調整学習）が重要であることを説明。
- 自己調整学習では、教師が子供たちの学びの様子を見取り、学級全体で良い学び方や留意点を共有する必要がある。そのためのツールとして、教員が使用していた「Mission Sheet」（下図）が鍵となることを説明。学びの取組状況が可視化されることで、子供たち自身が「ここまで自分で取り組むことができた」と自己肯定感を高めることに繋がることを解説。



▲デジタル教科書活用の3Step（再掲）

▼教員が使用していたMission Sheet



ポイント解説

実際のワークシートを紹介し、受講者の意欲を喚起

- 教員が実際に使用しているワークシートを参加者に配布し、子供たちの学びを見取るためのツールとして紹介することで、授業での活用イメージをより具体化することができ、先進的な事例であっても、「自分の授業にも取り入れてみよう」と教員の意欲に繋げやすくなります。（鹿児島県 寺地 指導主事）

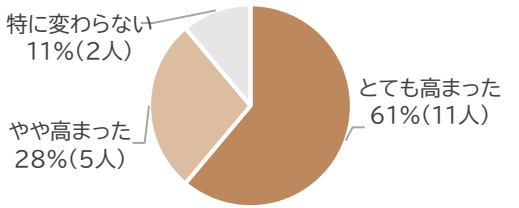
取組結果

■ 受講者アンケートの結果

研修後に取り組みたい内容（自由記述回答から抜粋）

- デジタル教科書を使用して音読練習をさせたい。
- 映像を使用し、視覚的な理解を促したい。
- 自己調整学習の選択肢の一つとしてデジタル教科書を活用していきたい。
- 生徒一人ひとりが学ぶ意欲を向上させるように、デジタル教科書を活用したい。
- 教頭として授業者に、学習者用デジタル教科書の使用目的やその価値について指導していきたい。

活用への意欲［N=18］※受講者のうち教員を対象



➢ 活用への意欲を問う質問では、約9割の教員から肯定的な回答を得ており、具体的な実践例や授業づくりのポイント解説が意欲向上につながったと考えられる。

Appendix

関連コンテンツ

本書のほかにも、令和7年度「学習者用デジタル教科書の効果・影響等に関する実証研究事業」の成果は、以下にとりまとめています。あわせてご参照ください。

成果報告書

【デジタル教科書の活用に関する研修】

本事業に参加した各県の研修内容を詳述した報告書。各県が実施した2回の研修に関する研修計画の詳細や検討過程、研修効果の検証に関する諸情報（受講者へのアンケートの結果等）を掲載。

https://www.mext.go.jp/content/20260518-mxt-kyokasyo-000049761_3.pdf

【デジタル教科書を活用した授業改善】

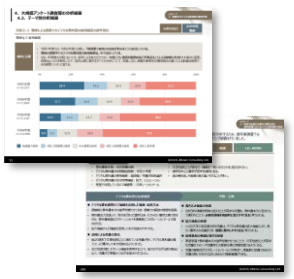
本事業の実証研究校での授業改善の取組を詳述した報告書。外国語／算数・数学／国語／理科／社会の5教科について、それぞれ2回ずつ授業実践に取り組み、その結果を掲載。

https://www.mext.go.jp/content/20260518-mxt-kyokasyo-000049761_2.pdf

【デジタル教科書に関する大規模アンケート調査】

全国の小中学校の教師・児童生徒を対象にしたデジタル教科書に関するアンケート・ヒアリング調査の結果をまとめた報告書。授業改善の効果や紙の教科書との比較、研修を受けた経験と活用状況との関係などの分析結果を掲載。

https://www.mext.go.jp/content/20260518-mxt-kyokasyo-000049761_1.pdf



動画

【デジタル教科書を活用した実践事例を知る】

デジタル教科書等を活用した授業改善の実践事例を紹介する8分程度の動画。
算数・数学／国語編と理科／社会編の2本。
具体的な授業の様子を有識者の解説も交えて紹介し、授業者・児童生徒のインタビューも収録。

https://youtu.be/hzE_cYZQNV4

（算数・数学／国語）

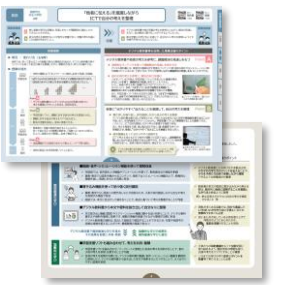
https://youtu.be/Kj1TR7Znmjk

（理科／社会）

授業改善事例集

本事業の実証研究校での授業改善の取組について、1教科1ページでコンパクトに紹介する事例集。
外国語／算数・数学／国語／理科／社会の1校ずつ、授業の流れとデジタル教科書等を活用したポイントを紹介。加えて、5教科の間で共通する「デジタル教科書活用のポイント」も整理。

https://www.mext.go.jp/content/20260518-mxt-kyokasyo-000049761_4.pdf



有識者会議委員・実証県一覧

（ 敬称略 ）

役割	氏名	所属・職名※	担当の実証県
主査	中川 一史	放送大学　教授	ー
副査	小林 祐紀	放送大学　准教授	埼玉県
実証研究方針に係る指導助言	齋藤 嘉則	東京学芸大学　教授	埼玉県 （外国語の観点からの指導助言）
	中橋 雄	日本大学　教授	ー
実証県での研修に係る指導助言	岩﨑 有朋	札幌国際大学　教授	熊本県
	太田 洋	東京家政大学　教授	鹿児島県
	岡部 恭幸	神戸大学　教授	福井県
	佐藤 幸江	放送大学　客員教授	奈良県

※ 有識者会議委員の所属・職名は令和8年3月現在

事業委託者

文部科学省初等中等教育局
〒100-8959　東京都千代田区霞が関三丁目2番2号

事業受託者（制作）

アビームコンサルティング株式会社
〒104-0028　東京都中央区八重洲二丁目2番1号